尼、臧侍中銘「雅論弘博、――波瀾」
【逸散】イツサン 國ひとすぢにいそぐ、一目散。＝驀然。
【逸史】イツシ ちりうせて正史に傳はらざる事實を記せし歴史。
【逸志】イツシ ○すぐれたるこころざし。袁宏、三國名臣傳贊「公瑾卓爾、――不羣」(公瑾は周瑜の字)○世俗に超越せし志。張華詩「君子有二――一、棲二遲于一丘一」
【逸事】イツジ 世の中にあらはれざる事實。柳宗元に段太尉逸事狀の文あり、唐宋八家文讀本に載す。＝軼事。
【逸詩】イツシ 古詩の今の詩經にぬけてゐる詩。茅鴟の類。史、伯夷傳「覩二――一可レ異焉」＝軼詩。
【逸駟】イツシ すぐれたる四頭立のうま。晉書、曹毗傳「執二朽轡一以御二――一」
【逸秀】イツシウ すぐれてひいでる。晉書、愍懷太子傳「幼稟英挺、高明――」＝秀逸。
【逸情】イツジャウ 世俗をはなれたる心情。後漢書、逸民傳贊「遠性風疎、――雲上」
【逸出】イツシュツ にげだす、はなれでる。
【逸駿】イツシュン すぐれたるうま。辨亡論「巨象――、擾二于外閑一」
【逸書】イツショ ○失せて今の書經になき文。史、儒林傳「――得二十餘篇一」○世間に失せたる書冊。歐陽修、日本刀歌「――百篇今猶存」
【逸聲】イツセイ 淫佚なる音樂。國語「口不レ食二嘉味一、耳不レ樂二――一」
【逸足】イツソク はやあし。蜀志、龐統傳「陸子可レ謂二駑馬有二――之力一」＝疾足・駿足。
【逸態】イツタイ すぐれたるさま。張協、七命「天驥之駿、――超越」
【逸宕】イツタウ さっぱりして小事に拘泥せず。梁簡文、玄虚公子賦「在二文林一而――」
【逸蕩】イツタウ 常度をこえ、ほしいままにして酒色にふける。列、楊朱「桀藉二累世之資一、居二南面之尊一、智足二以距一羣下一、威足二以震一海内一、恣二耳目之所一レ娯、窮二意慮之所一レ爲、熙熙然以至二於死一、此天民之――者也」
【逸彈】イツダン それだま、狙ひのはづれたる彈丸。
【逸致】イツチ すぐれたるおもむき。書斷「――飄然、有二凌雲之志一」
【逸德】イツトク あやまてるとく。書、胤征「天吏――、烈二于猛火一」＝失德。
【逸馬】イツバ にげたる馬。＝奔馬。
【逸美】イツビ すぐれてうつくし。
【逸品】イツピン すぐれたる品格、書畫などの殊にすぐれたるにいふ。法書要錄「鍾・張・羲・獻、超然――」
【逸文】イツブン ○すぐれたる名文。郭璞文「庶幾令下――不レ墜二於世一、奇言不上レ絕二於今一」○散逸せる文字文章。
【逸辯】イツベン すぐれたるくちまへ。魏志、鍾會傳「好論二儒道一、辯才――」＝雄辯・俊辯。
【逸味】イツミ すぐれてよきあぢ。傅休奕賦「入口流濺、――難レ原」
【逸民】イツミン 世をのがれたる隱者。論、微子「興二滅國一、繼二絕世一、擧二――一」＝隱君子。
【逸豫】イツヨ あそびたのしむ。書、五子之歌「太康尸レ位、以二――一滅二厥德一」＝逸樂。
【逸樂】イツラク あそびくらす。史、伯夷傳「終身――富厚、累世不レ絕」
【逸話】イツワ 世人に多く知られざるはなし。
【逸物】イチモツ 國人・馬・犬・鷹などの特にたくましく强き者。

【逵】キ 支
おほぢ、九達の道。左、隱十一「入及二大―一」

【逭】クヮン 翰 旱
のがる、にげる(逃避)書、太甲「自作孽不レ可レ―」
同訓異義 ノガル 逭・逃・遁等の別は逃(辵部六畫)の條を見よ。

【週】シウ 尤
○めぐり、まはり(廻)＝周。○一―は日・月・火・水・木・金・土の七曜日。
【週刊】シウカン 一週間每に刊行する。
【週期】シウキ ○ひとまはりの時期。＝周期。○物理學にて一回の振動の時間。
【週報】シウハウ ○一週間每に發行する新聞の類。○一週間每のしらせ。
【週番】シウバン 一週間に交代して勤める務。

【進】㊀シン ㊁ジン 震 震
㊀すすむ(前)すすましむ。退の對。○のぼる。のぼす(升・登)「―級」○ひきあげて用ふる。推薦する。呂覽、論人「貴則觀二其所一レ―」○いたす(效)○奉じて人に與へる、たてまつる「―上」「―呈」史記「奉二銅盤一而―二之楚王一」○ます(益)加へる、良くする。易、乾卦「―レ德修レ業」○つとむ(勉强)○ちかづける(近)禮、檀弓「蓋引而―レ之也」㊁はなむけ、おくりもの。＝贐。○收入、賦斂。史、高祖紀「蕭何爲二主吏一主レ―」
同訓異義 ススム 進・晉・前・薦・羞・漸・勸・奬○進は退の反、次第に向うへゆくこと、學德などの上達するにもいふ。表記「君子三揖而進」易經「進レ德修レ業」○晉は日のじりじりと

昇る義、進と同じく用ふ。○前は後の反なり、前方へ出るなり。史、賈誼傳「至二夜半一文帝前レ席」○薦は神に物を獻ずること、轉じて人に物を進上するにも、人才を推擧するにも用ふ。左傳「可レ薦二于鬼神一、可レ羞二于王公一」○羞は進獻也と註す、食物を馳走し進むる義、膳羞と連用す。○漸はいつと無く、漸次に進むなり。詩說約「諸侯被二周之澤一而漸二於善一」○勸は勉の字の義に近し、人に勸めて精を出さすなり。○奬はほめあげて勵ますこと推奬・奬勵と連用す。
【進行】シンカウ ○すすみあるく「――曲」○物事がはかどる、はかがゆく。
【進航】シンカウ 船を進め行く。
【進講】シンカウ 君主の御前にて講義す。元史、泰定帝紀「許師敬編二類帝訓一成、請二于經筵一――」
【進學】シンガク ○學に進みて益する。禮、學記「此皆――之道也」韓愈に――解あり。○入學。
【進御】シンギョ 天子の御そばに進みはべる。唐書、百官志「尙寢局二人、掌二宴見――之次敍一」
【進軍】シングン 軍隊を前に進める。
【進化】シンクワ 物事が漸次善き方へ化しゆく。退化の對。
【進化論】シンクワロン 生物はもと同類の祖先より次第に進化せしものなりとの論。英國人、ダーヴィンなどの首唱せし說。
【進擊】シンゲキ すすみうつ。＝突擊。
【進見】シンケン すすみてまみえる。後漢書、鄧皇后紀「后衣有下與二陰后一同色者上、卽時解易、若竝レ時――、則不二敢正坐離立一、行則僂レ身自卑」＝謁見。
【進言】シンゲン 意見を申し上げる。又、其の意見。
【進賢】シンケン ○賢者を上にすすめる。漢書、武帝紀「―レ―蒙二上賞一」○江西省の縣名。○古の文官又は儒者の冠の名。杜甫詩「良相頭上――冠、猛將腰間大羽箭」＝緇布冠。
【進獻】シンケン 物をすすめたてまつる。詩、小雅、信南山、箋「旣有二牲物一而――之一」＝進上・進呈。
【進口貨】シンコウクヮ 外國の貨物を本國の港へ運び來るもの、卽ち輸入品。それより取り立てる稅を進口稅といふ。口は港。
【進剿】シンサウ 進み擊ちてほろぼしつくす。
【進士】シンシ ○周代に大樂正が造士(諸侯の貢進せし秀才)の秀でたる者を選び王に告げて司馬に升すを――といふ(禮、王制)○後世鄕より選ばれて中央政府の官吏登用試驗に及第せし者の稱。韓愈、復上二宰相一書「前鄕貢――韓愈、謹再拜」○士を推擧する。漢書、何武傳「武爲レ人仁厚、好レ―レ―、奬二勵人之善一」
【進止】シンシ すすむと、とどまると。たちゐふるまひ。漢書、薛宣傳「宣爲レ人好二威儀一、――雍容、甚可レ觀也」＝擧止。
【取二進止一】シンシヲトル 朝廷の指揮を仰ぐ義。進むも退くも、只命令のままにする意、唐宋以後、上奏文の結尾に用ふる常套語とす。通鑑、唐則天武后紀「軍國大事、有二不レ決者一、兼取二天后進止一」
【進仕】シンシ 進みて仕官する。
【進贄】シンシ ○神社又は朝廷などに魚鳥などのにへを奉る。○他國の君主に初めて謁見する時、みやげものを獻ずる。
【進上】シンジャウ 物をすすめたてまつる〔後漢書、馬援傳〕＝進呈。
【進取】シンシュ すすみ出でて功名を取る。又進みて事を行ふ。保守の對。論、子路「狂者――」
【進趨】シンシュ こばしりに、すすみはしる。朱熹詩「――極虔恭」
【進水式】シンスヰシキ ふなおろし、新造の船艦を初めて水に浮べる儀式。
【進寸退尺】シンスンタイセキ 得る所少く、失ふ所多き喩。老子「不二敢進一レ寸而退レ尺」
【進善之旌】シンゼンノセイ 帝堯の時、旌を五達の道にたて善言を進めんとする者をして其の下に立ちて言はしめし故事。史、孝文紀「古之治二天下一、朝有二――、誹謗之木一」＝進善旌・告善旌。
【進奏吏】シンソウリ 進奏院の屬吏、進奏院は給事中に隸し、詔勅及、諸官省の符牒等を全國に頒布し、又、天下の章奏等を奏進することを掌る(宋史、職官志)
【進退】シンタイ ○すすむと、しりぞくと。易經「變化者、――之象也」○進みて仕へると、退きて隱れると。＝出處・去就。
【進退維谷】シンタイコレキハマル 進むことも退くことも出來ざるほど苦む、谷は窮。詩、大雅、桑柔「人亦有レ言、――――」
【進達】シンタツ 書類などを上へ取り次ぎ進める。
【進暢】シンチャウ すすみのびる、物が次第に發達する。＝發暢。
【進陟】シンチョク 官位などをすすめのぼす。北史、高準傳「何足三以膺二――之報一」
【進呈】シンテイ 他人に物を獻ずる。魏觀詩「方物紛紛效二――一」＝進上・進獻。
【進拔】シンバツ 人才をぬきすすめる。漢書、外戚恩澤侯表「興二文學一、――二幽隱一、公孫弘自二海濱一而登二宰相一」
【進發】シンパツ すすみ發する。隋書、楊玄感傳「不時――」
【進步】シンポ 足をすすめる、漸次前の方へ進む。傳燈錄「百尺竿頭須レ―レ―、十方世界是全身」
【進奉】シンポウ ささげたてまつる。唐書、百官志「司衣典衣掌衣各二人、掌二宮内御服首飾一、整比以レ時――」

【進物】○時令によりて物を進呈する。唐書、百官志「内給使掌ニ諸門ーー之暦ー」○國人に贈る物品。
【進用】入用のたから。進は費、財なり。史、呂不韋傳「子楚質ニ于諸侯ー、車乘ーー不レ饒、居處困不レ得レ意」注「進、財也」＝財用。
【進覽】上の人にすすめて一覽を乞ふ。唐書、韋澳傳「撰ニ次一書ー、ーー」
【進旅】すすみ行く軍隊。梁簡文帝文「制ニ六師之ーーー」
【進路】進み行く道すぢ。

【逮】㊀タイ ㊁テイ 隊 霽

㊀およぶ(及)論、里仁「恥ニ身之不ーー也」＝迨。○おふ(追)追ひかけ捕へる「ー捕」㊁棣に通ず、ーーは安和なる貌。

同訓異義 およぶ 逮・及・迨・曁・洎・覃の別は及(二九二頁二段)の條を見よ。

【逮繫】とらへてつなぐ。追捕拘囚。漢書、刑法志「有レ罪當レ刑、詔獄ーーニ長安ー」
【逮鞫】とらへて罪を問ひただす。宋史、盧士宗傳「有レ罪當ニ驗問ー、不レ宜ニーーー」
【逮捕】罪人を追ひかけとらふ。漢書、高帝紀「貫高等謀レ逆、事覺、竟ーニー高等ー」(一說に其の人在りて、直ちに追取するを逮といひ、其の人亡げて、之を討捕するを捕といふ)
【逮夜】○夜になりて。左傳「ーレー至ニ于齊ー、國人知レ之」○佛忌日の前夜、宿忌。＝迨夜。
【逮逮】安和なる貌。禮、孔子閒居「威儀ーー不レ可レ選也」＝棣棣。

【逴】タク チャク 覺 藥

○とほし、はるか(遼遠)＝卓。○こゆ、すぎる(超絕)○あしなへ(躄)

【逴行】遠方へ行く。史、霍去病傳「ーー殊遠、而糧不レ絕」
【逴逴】はるかにとほき貌。宋玉賦「春秋ーー而日高兮」
【逴躒】超絕の貌。班固、西都賦「ーーニ諸夏ー」＝逴犖。

【逿】逷(辵部七畫)の古字。

【迸】㊀ハウ・ヒャウ ㊁ヘイ 敬 青 又、遻に作る

㊀ほどばしる、涌く。○ちらす、とばす。○はしる。はしらす「奔ー」㊁しりぞく。古、屛に通ず。大學「ーニ諸四夷ー」

【迸散】ほどばしりちる。孔平仲詩「輝光ーー、夜氣埽若レ失」
【迸水】ほどばしるみづ。劉孝綽詩「晨征淩ニーーー、暮宿犯ニ頹風ー」
【迸泉】ほどばしるいづみ。姚合詩「ーー淸勝レ雨、深洞暖如レ春」
【迸涕】ほどばしるなみだ。潘岳文「ーーー交揮」
【迸沫】ほどばしるあわ。冷朝陽詩「急流雖レ起レ浪、ーー砥如レ煙」

【逯】リョク ロク 沃

○ーーは衆き貌。○ー然は爲す所なくして忽然として往く貌。淮南、精神「渾然而來、ー然而往」

九畫

【遏】アツ アチ 曷

○やむ、とどむ(止)停止する「防ー」書、武成「以ー亂略ー」○たつ(絕)禁ずる「禁ー」易、大有「君子以ー惡揚レ善」(一說にーは匿、人の惡を隱す義)○ひきとめる(按)阻止する。孟、梁惠王「以ー徂莒ー」

同訓異義 とどまる 遏・止・留・駐・停・逗・稽の別は止(一〇〇七頁一段)の條を見よ。

【遏雲】歌聲のすぐれたるをほめていふ。列、湯問「薛譚學ニ謳於秦青ー、未レ窮ニ靑之技ー、自謂盡レ之矣、遂辭歸、秦青弗レ止、餞ニ於郊衢ー、撫レ節悲歌、聲振ニ林木ー、響遏ニ行雲ー、薛譚乃謝、求レ反、終身不ニ敢言レ歸」
【遏水】みづをとどむ。唐書、馬燧傳「燧于ニ下流ー以ニ鐵鎖ー維ニ車數百ー絕レ河、載ニ土囊ー、ーレー而後度」
【遏絕】とどめたつ、とどめ滅ぼす。書、呂刑「ーニー苗民ー」
【遏奪】とどめうばふ。淮南子「至道之人、不レ可ニーーー」
【遏防】とどめふせぐ。晉書、劉殺傳「尋陽接レ蠻、宜レ示レ有ニーーー」＝防遏。
【遏密】鳴り物をとどめて靜にする、音曲停止。書、堯典「三載四海、ーニー八音ー」
【遏劉】王者が殺戮を絕ち止むる、劉は殺。詩、周頌「勝レ殷ーレー、耆ニ定爾功ー」

【違】キ 微

○たがふ、ちがふ、もとる(背)○たがひ、ちがひ(差・異)○そむく(背)○さる(去)はなれる(離)中庸「忠恕ー道不レ遠」○とほざかる(遠)○はなす、とほざく、さく(避)易、乾卦「憂則ーレ之」○はしる(奔放)○よこしま(邪惡)左、桓二「昭ニ德塞ニー」○あやまち(過失)「ー失」○うらむ、怨を畜ふ。○依ーはぐづぐづして決せざる義。＝

猶違。

同訓異義 さる 違・距・去・行の別は距(一八九三頁三段)の條を見よ。○たがふ 違・差・爽・舛の別は差(五六〇頁三段)の條を見よ。

【違怨】うらみの心に蓄ふるもの。書經「否則厥心ーー」
【違忌】陰氣をいみさける。國語「夫陳不ニーーー閒也」注「違、避也、忌謂レ晦也、晦陰氣盡、兵亦陰、故忌レ之」
【違科】法令にそむく。晉書、王蘊傳「補ニ吳興太守ー、屬郡荒、人飢、輒開レ倉贍卹、頗レ蘊坐者十七八焉、朝廷以レーーレ免ニ蘊官ー、士庶詣レ闕訟レ之」＝犯科。
【違警罪】重罪輕罪以外の極めて輕き罪にて拘留又は科料に處すべきもの。
【違言】○さからふことば、互に爭ふことば。左、隱十一「鄭・息有ニーーー」(鄭・息は二國の名)○道理にそむけることば。管子「邪行亡ニ於體ー、ーー不レ存レ口」
【違憲】○おきてにそむきたがふ。後漢書、第五倫傳「繩以レ法則傷レ恵、私以レ親則ーレー」＝違法。○國憲法にそむく。
【違忤】さからふ。後漢書、馬融傳「初融懲ニ于鄧氏ー、不ニ敢復ーニー勢家ー」
【違作】國ふさく、凶作。
【違算】○計畫の相違、目算ちがひ。○勘定ちがひ。
【違旨】他人の意にそむく。
【違貳】二心をいだく。又、其の人。晉書、荀勗傳「明公以ニ至公ー宰ニ天下ー、宜ニ正義以伐ニーーー」
【違式】一定の法式にたがふ。
【違失】あやまつ。あやまち。後漢書、百官志「有ニーーー擧ニ劾之ー」
【違捨】たがひすてる。宋書「愛ニ好文義ー未ニ嘗ーーー」
【違常】通常の行とちがふ。蜀志、來敏傳「敏前後數貶削、皆以ニ語言不レ節、擧動ーレー也」
【違舛】たがひあやまる。北史、宇文愷傳「明堂圖議曰、後魏不レ依ニ古制ー、室開ニ通巷ー、ーー處多」＝乖舛・謬舛。
【違道】道よりへだたり去る。中庸「忠恕ーレー不レ遠」
【違敕】みことのりにそむく。＝違勅。
【違背】たがひそむく。禮記正義序「ーニー本經ー、多引ニ外義ー」＝違反・違戾。
【違廢】そむきすてておこなはず。後漢書、中興諸將傳論「撓レ情、則ーニー禁典ー」
【違法】規則、又法律にそむく。＝犯法。
【違反】たがひそむく。後漢書、律歷志「ーニー經文ー、謬之甚者」
【違犯】おきてにたがひをかす。說苑、君道「刑法ーー」
【違叛】たがひそむく。張養浩文「由レ弗レ修ニ養道ー、乃ーー」＝違反。
【違謬】たがひあやまる。宋書、謝晦傳「晦隨レ問酬辨、曾無ニーーー」
【違覆】反覆の義、違は反。事柄のうたがはしき點をつまびらかにたづね明かにする。
【違變】これまでのしきたりをかへる。
【違命】命令にそむく。
【違約】約束にそむく。史、項羽紀贊「ーレー王レ漢、背レ關懷レ楚」
【違離】そむきはなれてゐる。周伯琦詩「九載ーー得ニ遠書ー」
【違戾】たがひもとる。後漢書、范升傳「太史公ーニー五經ー、謬ニ孔子言ー」＝違反・違背。
【違例】○これまでのしきたりとちがふ。○國貴人の病氣にいふ、御不例。
【違和】身體の調和を失ひて病む。魏書、彭城王傳「聖躬ーー」
【違惑】迷ひて道にそむく。董仲舒賦「聖賢不レ能レ開ニ愚夫之ーーー」
【違而道】命令には違へども道に合へる義。國語「子夕嗜レ芰、子木有ニ羊饋ー而無ニ芰薦ー、君子曰、———」(子木は、楚の大夫)

【遊】イウ ユ 尤 游に同じ

○あそぶ(遨)あそび「春ー」「雅ー」「佚ー」「出ー」○たのしむ(樂)心を慰めたのしむ。○たはむる(戲)「ー戲」○修學・見物又は仕官を求めるために他國の客となる、たび(客旅)「ー子」「漫ー」○己の說を說きまはる「ー說」○まじはり、よしみ。○まじはる友、ともだち「交ー」○ひまびと、常業なきもの。○一定の所屬なきもの「ー兵」「ー軍」「ー魂」

【遊意】あそびたしと思ふこころ。＝遊情。
【遊逸】あそびたのしむ。北史、魏南安王楨傳「飮酒ーー、不レ擇ニ交友ー」
【遊雲驚龍】あそぶ雲と、驚く龍と。草書の巧妙なる喩(晉書、王羲之傳)
【遊衍】あそびたのしむ。詩、大雅「及レ爾ーー」
【遊燕】遊びてさかもりする。陳子昂詩「遊レ楚復ーー」＝遊讌・遊宴。
【遊讌】前條に同じ。
【遊幸】天子の出遊。唐書、楊貴妃傳「妃每レ從ニーー、乘レ馬、則力士授ニ轡策ー」
【遊敖】あそぶ、敖も遊。漢書、食貨志「千里ーー、冠蓋相望」
【遊學】他國に出でて學問する。史、荀卿傳「ーニー於齊ー」

【遊閑公子】遊樂にふける富貴の子弟〔史、貨殖傳〕
【遊氣】○空中にたなびく雲氣。晉書、天文志「――蔽レ天、日月失レ色」○いきのこれる氣息、殘喘。元史「遺黎殘姓、――驚魂」
【遊嬉】おもしろくあそびたはむる。呂向、美人賦「左右相視、――未レ已」
【遊戲】あそびたはむれる。史、周紀「其――、好レ種ニ樹麻菽一」世說、排調「蘇長公在ニ惠州一、天下傳ニ其已死一、後七年北歸、見ニ南昌太守葉祖洽一、問曰、世傳端明已歸ニ道山一、今尙爾――ニ人間一邪」
【遊戲三昧】○佛專心衆生を救濟する。傳燈錄「頓然忘レ筌、――――」三昧は專心。○轉じて藝術などの妙を極めたる義。冷齋夜話「想ニ見其高韻一、氣摩ニ雲霄一、獨ニ立萬象之表一、筆端三昧、遊戲自在也」
【遊興】酒宴などを催してきょうじ樂む。
【遊君】國うかれめ。＝遊女。
【遊軍】遊兵に同じ。魏志、荀攸傳「張繡以ニ――一、仰ニ食於劉表一」
【遊廓】遊里に同じ。＝遊郭。
【遊宦】他國に行きて仕官する。漢書、匡衡傳「士之――所ニ以至ニ封侯一者徹甚」
【遊觀】○あそびみる。四子講德論「――ニ乎道德之域一」＝遊覽。○遊ぶために建てしもの御殿。齊書、文惠太子傳「造ニ――數百閒一」
【遊憩】やすらかにいこふ。水經、注「道路――者、惟得ニ殘飯一而已」＝遊息。
【遊藝】○心を藝術によせて樂む。論、述而「依ニ於仁一、游ニ於藝一」より出づ。○國歌舞音曲など。
【遊屐】遊びあるくにはく下駄。趙孟頫詩「山好雙――、溪淸一釣船」
【遊擊】遊軍を以て敵をうつ。漢書、蘇建傳「――將軍」
【遊闕】缺けたる所を補充する遊兵。闕は缺。左、宣十二「率ニ――四十乘一」
【遊俠】をとこだて。一身を忘れて弱者を保護し、勢力を張りて國法を畏れざる行爲。又其の人〔史、遊俠傳〕＝任俠。
【遊山】○やまあそび。遊船參看。○國山又は水にあそびたのしむ。＝行樂。
【遊子】たびびと。李白詩「浮雲――意、落日故人情」＝旅客。
【遊絲】かげろふ、いとゆふ。快晴の日に蜘蛛の網の如きものが空中に見える現象。梁武帝詩「晻曖曬ニ――一」＝陽炎・野馬・游絲。
【遊辭】まじめでなきことば。左傳「今信ニ其――一僞詐一」
【遊人】○あそび樂む人。○國一定の業務の無き者、遊民。又ばくちうち、博徒。
【遊刃有ニ餘地一】肉を割くに庖刀を自由につかふ。事を處するに從容として餘裕あるに喩ふ。莊、養生主「恢恢乎其于ニ遊刃一、必有ニ餘地一矣」
【遊將】遊軍の大將〔兵衡〕
【遊翔】かけりて飛び遊ぶ。宋書、符瑞志「白燕集ニ齊郡城一、――ニ庭宇一、經ニ九日一乃去、衆燕隨從無數」
【遊手】○手をあけて使用せず、手をあそばす。儀禮、聘禮「大夫二手受レ栗」注「受授不ニ――一、愼レ之也」○爲すことも無くぶらぶらと暮す。又、其の者。後漢書、章帝詔「務盡ニ地力一、勿レ令ニ――一」
【遊就】善良の士に就きて交る。荀、勸學「君子居必擇レ鄕、遊必就レ士」
【遊食】職業なく只食ひて遊ぶ。荀、成相「臣下職莫ニ――一」
【遊矚】目を遊ばしながめる。晉書、會稽王道子傳「府內有レ山、因得ニ――一、甚善也、然修飾太過、非下示ニ天下一以上レ儉」
【遊星】各自の軌道に循ひて太陽の周圍をめぐる星。恒星の對。＝行星・惑星。
【遊說】諸侯を歷訪して己の說を說きすすめる。史、齊太公世家「――ニ諸侯一無レ所レ遇」
【遊涉】あそびあるく。晉書、謝安傳「――至レ夜還、指ニ授將帥一、各當ニ其任一」
【遊船】ふねに乘りてあそぶ。又、其の船。ゆさんぶね。宋史、闍婆國傳「五月――、十月遊山」
【遊仙窟】一卷、唐の張文成が仙窟に遊びたる事を記したる小說、和版あり。
【遊仙枕】枕して寐ぬれば仙境に遊ぶ夢を見るといふ枕。開天遺事「龜茲國奉ニ進枕一枚一、其色如ニ瑪瑙一、溫潤如レ玉、製作甚工、枕レ之寢則十洲三島四海五湖、盡在ニ夢中一見、帝因號ニ――――一」
【遊息】心安くいこふ。揚雄、逐貧賦「貧遂不レ去、與レ我――」
【遊卒】諸侯・卿大夫士の庶子にして、父の事に副事する者。遊は未だ仕へざるもの、卒は倅に通ず〔禮、燕義〕
【遊惰】あそびおこたる。南史、孔靖傳「翦ニ罰――一、境內肅淸」
【遊道】まじはり、交際の範圍、つきあひ。史、陳丞相世家「――日廣」
【遊蕩】だらしなくあそぶ。魏志、武帝紀、注「少好ニ飛レ鷹走レ狗、――無レ度」＝游蕩。
【遊談】○遊說に同じ。戰國策「――之士、無ニ敢盡ニ忠於前一者一」○むだばなし。後漢書、仇覽傳「天子修ニ設大學一、豈但使ニ人――其中一」＝游談。

【遊女】うかれめ、娼妓。詩、周南、漢廣「漢有ニ――一、不レ可ニ求思一」＝游女。
【遊艇】小舟に乘りてあそぶ。又、其の舟。曾鞏詩「泝レ險飛ニ――一、探レ奇潒ニ釣緡一」
【遊兆】丙（ひのえ）の異稱。爾雅に柔兆に作る。史、曆書「――執徐三年」注「――、景也」（景は丙）＝游兆。
【遊畋】遊びめぐりてかりする。畋は獵。＝遊佃・遊獵。
【遊陪】めうへの人に隨ひて遊ぶ。高適詩「秪言殊ニ語默一、何意忝ニ――一」
【遊方僧】四方に雲遊する僧。＝行脚僧。
【遊放】あそびてほしいまま。南史、謝靈運傳「在レ郡――、不レ異ニ永嘉一、爲ニ有司一所レ糾」
【遊盤】あそびたのしむ。歐陽修詩「苟懷ニ四方志一、所在可ニ――一」
【遊兵】所屬を定めず、味方の危き處をすくふ爲めにはたらく軍隊。史、彭越傳「彭越常往爲ニ漢――一」＝遊軍。
【遊眄】あそびながめる。曹植、盤石篇「南極蒼梧野、――窮ニ九江一」＝遊覽。
【遊步】○ぶらぶらと遊びあるく、散步する。列仙傳「――ニ仙庭一」○心を物事に寄せる。魏志、管輅傳、注「――ニ道術一」
【遊牧】一定の住所なく水草を逐ひて牧畜を業とする者。淸の張穆に蒙古――記の著あり。
【遊民】一定の職なくしてぶらぶらと遊び居る民。漢書、食貨志「末技遊食之民」＝遊手。
【遊目】目を動かしてみる。儀禮「若父則――、毋レ上ニ於面一、毋レ下ニ於帶一」
【遊冶郎】酒色にふける男、たはれを。李白詩「岸上誰家――――、三三五五映ニ垂楊一」
【遊預】あそび樂しむ。白居易詩「仙亭日登眺、虎丘時――」
【遊豫】○帝王の遊幸。孟、梁惠王「一遊一豫、爲ニ諸侯度一」○あそびたのしむ。盧諶詩「逍遙步ニ城隅一、暇日聊――」＝遊預。
【遊弋】○遊獵をいふ。弋は鳥を捕へる矢〔史、李斯傳〕○軍艦の海上に往來して警備する義。
【遊樂】あそびたのしむ。爾雅「般者――也」
【遊覽】あそびながら觀る。孫綽、天台山賦「――旣周、體靜心閑」
【遊里】國いろざと。花街・遊廓。
【遊離】化學にて單體が他と化合せずに存在する。又化合物が單體に分れる。
【遊獵】遊行して射獵する〔史、呂后紀〕晉の張華、梁の劉孝威に――篇あり。＝遊畋。
【遊歷】各地をへめぐり遊ぶ。晉書、王獻之傳「――旣畢」＝歷遊。
【遊必有レ方】父母の存命中、子たる者の遊學するには、一定の場所を定むべきをいふ。論、里仁「父母在不ニ遠遊一、――――」

【運】ウン　〔問〕

○めぐる「旋―」めぐらす、回轉せしむ。○ゆく（行）○もちふる（用）「―用」南史、齊高帝紀「公神謀內―」○うごく。うごかす（動）○うつる（移徙）○はこぶ（轉輪）「―輪」はこび。○まはりあはせ、氣數。○天より人に賦したる命數「―命」「天―」「―祚」○とき、なり（機會）○地の南北。廣（東西）の對。越語「廣―百里」

同訓異義　めぐる　運・繞・遶・環・行・巡・周・旋・同等の別は繞（一五〇一頁一段）の條を見よ。

【運意】工夫をめぐらす、考へる。
【運河】ほりわり、人力にてきり開き舟を通ずるもの。吳王夫差に始まり、隋唐宋に繼續し、元に大成す。
【運行】めぐりゆく。易、繫辭「日月――、一寒一暑」
【運氣】運命に同じ。＝運勢。
【運斤成風】運レ斤成レ風（八一九頁二段）を見よ。
【運脚】國運賃。運送料。
【運會】世のめぐり合せ。皇極經世書「三十年爲ニ一世一、十二世爲ニ一運一、三十運爲ニ一會一、十二會爲ニ一元一」
【運座】國多人數集りて俳句を作り、互に優劣の點をつける座席。
【運漕】船にて物をはこぶ。通鑑、隋文帝紀「開ニ通濟渠一以通ニ――一」
【運策】謀をめぐらす。王褒文「――ニ帷幄一、參ニ謀幕府一」＝運籌。
【運算】數學にて算用する義、そろばんをおく。
【運針】はりのはこびかた。ぬひやう。
【運上】國德川時代、各種の租稅。又特に船の稅。
【運掌】たなごころをめぐらす。事の甚だ易きに喩ふ。孟、梁惠王「治ニ天下一、可レ運ニ之掌上一」
【運輸】車馬船などにて物をはこぶ。司馬相如文「又撥爲ニ轉粟――一」
【運數】運命に同じ。白居易詩「人命長短繫ニ――一」
【運勢】めぐりあはせ、運命のいきほひ。
【運船】ふねをこぎやる。又、物をはこぶ船。晉書、石勒載記「會江南――至、獲ニ布米數十艘一、將士爭レ之、不レ設レ備」
【運錢】運賃に同じ。
【運祚】世のめぐりあはせ。舊唐

書、順宗紀論「克昌ニ一ー一」=運命・天運・世運。
【運租】租税を運び送る。晉書、袁宏傳「少孤貧以ニ一ー一爲レ業」
【運送】はこびおくる。北齊書、盧叔武傳「穀食豐饒、一ー不レ絶、彼來求レ戰、我不レ應レ之、彼若退レ軍、即乘ニ其弊一、不レ過ニ三年一、彼自破矣」=運輸・輸送。
【運籌】はかりごとをめぐらす。漢書、高帝紀「一ニ一帷幄之中一、決ニ勝千里之外一、吾不レ如ニ子房一」
【運貫】運送に要する貫錢。
【運轉】○めぐる、はたらかす。莊子「意者其一ー、而不レ能ニ自止一邪」○車などをうごかしまはす。
【運轉手】圖汽車・電車などの機關をとりあつかふ人。
【運動】○めぐりうごく。はたらく。董仲舒、雨雹對「一ー抑揚」○衛生の爲めからだをうごかす「一ー會」○圖或る目的を達する爲めに奔走盡力する。
【運之極】運のつき〔後漢書、宦者傳〕
【運搬】運送に同じ。搬は移。
【運筆】ふでづかひ。筆を動かす。北史、陳元康傳「颯颯一レ一、筆不レ得レ凍、俄頃數紙」
【運開】仕合がよくなる。謝靈運詩「一ー申ニ悲涼一」
【運否天賦】圖人の運不運は天命に由る義。
【運甓】體力を強くせんが爲め勞動するをいふ。甓は磚。晉書、陶侃傳「在ニ荊州一、輒朝運ニ百甓於齋外一、暮運ニ於齋內一、人問ニ其故一、侃答曰、吾方致ニ力中原一、過爾優逸、恐不レ堪レ事」
【運謀】はかりごとをめぐらす。後漢書、李膺傳「陳蕃與ニ竇武一共秉ニ朝政一、一レ一誅ニ諸宦官一」
【運邁】めぐりゆく。陸雲文「日月一ー、一何流速」
【運命】まはりあはせ、人世に遭遇する吉凶禍福。魏の李康に一ー論あり、曰く「治亂運也、窮達命也、貴賤時也」=運數。
【運命論】世の治亂人事の吉凶・禍福はすべて自然の運によりて豫め定まれりといふ說。=宿命論。
【運用之妙存ニ乎一心一】戰略は活用を貴ぶをいふ。宋史、岳飛傳「岳飛曰、陣而後戰、兵法之常、一ー一」
【運路】物をおくりはこぶみち。宋史、地理志「眞州當ニ一ー之要一」=運道。

【遠】遠（辵部十畫）の俗字。

【遐】カ 麻
○とほし、はるか（遠）「荒ー」書、太甲「若レ陟ー必自レ邇」○なんぞ、いづくんぞ。古、何に通ず、又、瑕に作る。詩、小雅「ー不レ謂矣」
【遐域】遠く隔りたる地。襄陽耆舊傳「威振ニ一ー一」=絶域・遐壤。
【遐永】はるかにながし。沈約文「纂算一ー」
【遐裔】とほきはてのくに。北史、隋煬帝紀「解ニ倒懸于一ー一、問ニ疾苦于遺黎一」=遐阪・遠裔。
【遐遠】はるかにとほし。漢書、龔遂傳「海瀕一ー」張九齡詩「惜ニ此生一ー一、誰知造化心」=遼遠。
【遐瞰】遠方を見おろす。余闕詩「祇園開ニ塔廟一、一ー盡ニ三秦一」
【遐棄】とほざけすてる。詩、召南「既見ニ君子一、不ニ我一ー一」
【遐軌】遠き古のみち。阮瑀、紀征賦「仰ニ天民之高衢一兮、慕ニ在昔之一ー一」
【遐穹】はるかなるそら。孟郊詩「碧雲散ニ一ー一」
【遐擧】遠く行く。楚辭、九章「氾容與而一ー兮」
【遐荒】王城を距ること極めて遠き蠻夷の地。晉書、文帝紀「仁風興ニ於中夏一、流澤布ニ於一ー一」
【遐迥】はるかにとほし。楚辭「日皆晉兮西沒、道一ー兮阻歎」=遼迥。
【遐慶】遠大なるよろこび。徐陵文「國家隆盛、同享ニ一ー一」
【遐想】遐は遠、遠く隔りたる人を思ひやる。又、遠く高きおもひ。晉書、謝安傳「昔與ニ王羲之一登ニ冶城一、悠然一ー、有ニ高世之志一」（世說に遠想に作る）
【遐志】遠大なるこころざし。新論「人有ニ小察細計一者、知ニ其必無ニ一ー一」
【遐邇】とほきと、ちかきと。司馬相如、難ニ蜀父老一「一ー一體、中外禔福」=遠近。
【遐壤】遠き土地。柳宗元、獻ニ平淮夷雅一表「守ニ一ー一」
【遐蹤】遠き昔のあと。夏侯湛文「瞻ニ望往代一、爰想ニ一ー一」
【遐矚】とほくみわたす。趙冬曦詩「方レ踏ニ南樓一、凭レ軒肆ニ一ー一」
【遐阪】かたゐなか、遠き田舍。鄭玉詩「東西南北窮ニ一ー一」
【遐逝】とほくさる。楊萬里詩「蝸居忽飛動、一ー卽回轉」
【遐霄】遠きおほぞら。何中詩「探レ遂裂ニ凝陰一、憑レ顧洞ニ一ー一」
【遐迹】とほきあと。揚雄賦「軼ニ五帝之一ー一兮」
【遐宣】遠方までのべしく。何承天頌「禮樂四達、頌聲一ー」=遐暢。
【遐闡】大いに開けて明か。牛弘、明堂議「皇猷一ー、化覃ニ海外一」
【遐祚】ながくつゞくさいはひ。祚は福。晉書、樂志「后皇延ニ一ー一、安

樂撫ニ萬方一」
【遐覃】遠方にまでおよぶ。覃は及。駱賓王、姚州破レ賊露布「玄謀廣達、妙略一ー」=遠覃。
【遐祉】ながくつづくさいはひ。前秦錄「垂ニ祚無窮一、永延ニ一ー一」劉基、龍虎臺賦「天子萬年、以介ニ一ー一」
【遐胄】末孫。摯虞賦「有ニ軒轅之一ー一兮」
【遐琛】遠方の美寶。釋妙聲、送ニ僧歸ニ日東一詩「王化能柔遠、一ー亦會同」
【遐暢】とほくゆきわたる。薛道衡、隋高祖頌「皇威遠暢、帝德一ー」
【遐通】はるかにとほる。曹植文「天靜人和、皇敎一ー」
【遐眺】はるかにながめる。盧諶詩「一ー一存亡一、緬成ニ飛塵一」=遠眺。
【遐登】はるかにのぼる。束皙詩「精爽一ー、形骸幽居」
【遐統】はるかに遠き系統。曹植、碑文「循ニ軒轅之高蹤一、紹ニ虞氏之一ー一」
【遐年】ながいき、長命。=遐齡。
【遐方】遠き地方〔晉書、宣帝紀〕
【遐氓】とほくへだたりたる地にあるたみ。長楊賦「一ー爲レ之不レ安」
【遐邈】とほくはるか。法苑珠林「聖德一ー、冠ニ絶人天一」
【遐被】遠方にまでおよぶ。北史、禿髮傉檀載記「欣威德不レ能ニ一ー一、經略無ニ以及ニ遠、何以荷ニ安黃屋一、無レ媿ニ黔黎一」=廣被。
【遐福】大いなるさいはひ。詩經「降ニ爾一ー一」「惟日不レ足」=洪福。
【遐揚】とほくあがる。潘岳詩「大晉統レ天、仁風一ー」
【遐齡】ながいき。魏書、常景傳「以ニ知命一爲ニ一ー一、以ニ樂天一爲ニ大惠一」=遐年。

【遌】ガク ゴ 藥 遇
○心に見ることを欲せずして見る。=遻○あふ（遇）楚辭、九章「重華不レ可レ一兮」=迕。

【遇】グ 遇 遁音 グウ
○あふ、であふ、道路にて相逢ふ、偶然に會ふ、期せずして逢ふ。○世に用ひられる、時世に合ふ、時めく「知ー」「値ー」「ー合」（不ーは不仕合）○まつ（待）もてなす（接待）漢書、季布傳「ー人恭謹」もてなし「厚ー」「寵ー」「禮ー」「優ー」○あたる（當）對敵する。○をり、しほ。○たまたま、ちやうどであふ義。韓愈、柳子厚墓誌銘「ー有レ以ニ夢得事一白ニ上者一」=偶。

同訓異義 遇・逢・遭・値・合・會・晤 ○遇はふと行きあふなり、期せずして會するを遇といふ、偶字の意を兼ぬ。○逢・遭・値の三字は、略ゝ同じ、兩方より行き逢ふなり。○合はひったりと符を合せたる如く、よく合ふなり、吻合・符合と連用す。○會は總べ聚る義、會計は總算用なり、朝會・會同と熟す。○晤は人相見曰レ晤と註す、面晤と連用す。
【遇合】賢君に出あひて用ひらる。君臣の遭遇。史、佞幸傳「力田不レ若レ逢レ年、善仕不レ若ニ一ー一」
【遇譴】責められる、譴責にあふ。魏書、車路頭傳「太宗性明察、羣臣多以ニ職事一ーレ一」=被譴。
【遇繳】いぐるみに射らる。左思賦「精衞銜レ石、而ーレ一」
【遇祟】たたりにあふ。黃庭堅詩「年來一レー覆ニ三豪一」
【遇待】もてなす。後漢書、蔡邕傳「卓重ニ邕才學一、厚相一ー」（卓は董卓）=待遇。

【過】㊀クワ ㊁クワ 箇 歌
㊀すぐ。すごす、こゆ（越）度を越える、あまる。論、先進「ー猶レ不レ及」○まさる、すぐる（勝）○あやまつ、あやまる。あやまち「ー失」「大ー」「細ー」論、學而「ー而勿レ憚レ改」○つみ（罪愆）○とがむ、せむ（責）譴責する。呂覽、適威「ーニ不識一」㊁ふ、經る、すぐ、通る（經歷）「經ー」○すぎ去りし時「ー去」○わたる（度）○よぎる、たちよる。○おとづれる（訪問）「ー訪」○易の卦名。大ーは巽下兌上、小ーは艮下震上。
同訓異義 過・誤・謬・訛・錯・愆・失の別は誤（一八〇九頁一段）の條を見よ。
【過愛】度にすぎてあいする。新書「失レ愛不レ仁、一レ一不レ義」
【過惡】あやまち。荀子「君子正義直指ニ擧人之一ー一、非ニ毀疵一也」
【過優】己の分にこえすぐ。蘇軾詩「正作ニ尙書一已一ー」
【過雨】とほりあめ、むらさめ。盧綸詩「一ー開レ樓看ニ晩虹一、白雲相逐水相通」
【補レ過拾レ遺】天子の德の缺けたるをおぎなふ。漢書、汲黯傳「出ニ入禁闥一、一一一一」
【過客】通行する人、たびびと。李白、春夜宴ニ桃李園一序「光陰者百代之一ー」
【過咎】あやまち、とがめ。北史、韋世康傳「不下顯ニ人一ー一以求中名譽上」
【過愆】つみあやまち。馬融文「國

之ーー、事合二誅辟一」
【過擧】しそんじ。漢書、叔孫通傳「人主無二ーー一」
【過化存神】聖人徳業の盛んにして其の經歴する處は、其の民必ず從はざるは無く、其の神心の存する處は、神妙不測にして、天地の化と同じく運行す。孟、盡心「夫君子所レ過者化、所レ存者神、上下與二天地一同レ流、豈曰レ小二補之一哉」
【過患】あやまち、うれひ。顔氏家訓「有二盛名一而免二ーー一」
【過觀】たちよりて見る。
【過計】○あやまれるはかりごと。戰國策「燕國大亂、君臣ーレー」＝失計・失策。○はかりごとをあやまる。
【過激】あまりにはげし、はげしきにすぎる。
【過言】いひそこなひ。論、顔淵「駟不レ及レ舌」集解「ーー一出、駟馬追レ之、不レ及レ舌也」＝失言。
【過眷】てあつくかへりみる。宋書、鄭鮮之傳「猥承二人乏一、謬蒙二ーー一」＝殊眷。
【過午】ひるすぎ、午後。岑參詩「ーー方始飯」＝午下。
【過去】すぎさりし時。搜神記「管輅善解二諸術一、知二未來ーー之事一」
【過去帳】死者の俗名、法名、死去の年月日等を記したる帳簿。＝鬼籍。

【過誤】あやまち、あやまり。漢書、孝成許皇后傳「幸得下免レ離二茅屋之下一、備中後宮掃除上、蒙二ーー之寵一」
【過刻】さきほど、先刻。
【過差】おごり。書經、傳「沈二湎于酒一、ーー非レ度」
【過罪】あやまちと、つみと。戰國策「慮無二變擾一、忠無二ーー一」
【過緇】黒色の度の過ぎたるもの。魏收文「ーレー爲レ緋、踰レ藍作レ青」
【過失】あやまち。漢書、刑法志「三宥、一曰弗識、二曰ーー、三曰遺忘」
【過日】さきのひ、先日。＝前日・曩日。
【過秦論】漢の賈誼の作りし文。秦が法律に任じて仁義を修めず、故に二世にして滅びたるをとがむ、もと新書中に在りて、過秦篇といふ。
【過奬】過稱に同じ。
【過所】旅客が關所を通過する時の手形。釋名「ーー、至二關津一以示也、或曰、傳過也、移二所在一識以爲レ信」
【過稱】ほめすぎ。實にすぎたるほまれ。後漢書、明帝紀「有二ーー虛譽一」＝過譽・過褒。
【過剩】あまる。あまり。
【過食】たべすぎる。＝暴食。
【過絶】甚だしくすぎる。漢書、劉歆傳「博見强志、ー二于人一」
【過存】おとづれる、見舞ふ。漢書、馬援傳「開至二河内一、ー二伯春一」＝候問・過訪。
【過多】○おほすぎる。○過分に同じ。
【過大】大きすぎる。＝夸大。
【過怠】あやまち、てぬかり。
【過當】あたりまへよりすぎる。○相當の數より過ぎる、卽ち味方の死者よりも敵の死者の方が多し。司馬遷、報二任安一書「所レ殺ーー」
【過聽】ききちがひ、ききあやまり。史記「將軍ーレー以與二寡人一有レ隙」韓詩外傳「ーー殺レ人」
【過重】おもすぎる。
【過抵】よぎりいたる〔漢書、尹翁歸傳〕
【過程】物事のうつり進む順序。
【過度】○舟のわたしば、度は渡。方言「ーー謂二之涉濟一」○轉じて文脈のうつりかはる所。○度にすぐ「ーーの勉强」
【過渡】○わたし場。○舊時代より新時代にうつり代る「ーー期」＝過度。
【過倍】甚だしく數が超過する。
【過訪】をとづれる。＝訪問。
【過褒】ほめすぎ、褒は人の美を揚げる。＝過譽・過稱。
【過法】おもきおきて。史、老莊申韓傳「不レ如下以二ーー一誅上レ之」＝嚴法。

【過半】半分以上。孟、滕文公「螬食レ實者ーー矣」
【過半數】全數の半分以上のかず。
【過般】さきごろ。＝先般。
【過眉杖】杖の長くして眉に過ぐるもの。陸游詩「瘦竹ーーー、輕紗折角巾」
【過敏】過度にするどし「神經ーー」
【過不及】すぎると及ばざると。
【過不足】あまると、たらざると。
【過分】○身分に過ぐる。左、僖二八、注「無レ求二ーー一」○圖十分なる滿足。
【過目】目を通してみる。梁書、昭明太子傳「讀書數行竝下、ーレー皆憶」
【過譽】ほめすぎ。人物志「是故同體之人、常患二乎ーー一」＝過稱・過褒。
【過勞】心身をつからしすぎる。
【過量】分量にすぎる。諸葛亮文「平爲二大臣一、受二恩ーー一」
【過慮】おもひすごす。おもひすぎ。
【過料】罪過のつぐのひに出す金。＝罰金。
【補レ過拾レ遺】人臣が君德の闕けたるを補ひすくふ。漢書、汲黯傳「出二入禁闥一、ーーーー」
【文レ過】過失あるも、之を改むるを憚りて、外面を取りつくらふ。論、子張「子夏曰、小人之過也、必文」
【寡レ過】あやまちをすくなくす。論、憲問「夫子欲レ寡二其過一、而未レ能也」
【救レ過不レ贍】己の過を救ふに日の足らざる義。史、酷吏傳「九卿碌碌、奉二其官一、ーーーー、何暇二繩墨之外一乎」
【不レ貳レ過】あやまちをかさねてせず。論、雍也「有二顔回者一、好レ學、不レ遷レ怒、ーーー」
【觀レ過知レ仁】あやまちを見て其の厚きに失する者は其の人の仁なるを知る。論、里仁「人之過也、各於二其黨一、觀レ過斯知レ仁矣」
【宥レ過】あやまちをゆるす。管子「罰レ罪ーレー、以懲レ之」
【過而不レ改、是謂レ過矣】人は過失なしとせず、ただ能く改むれば過なき前にかへる、改めざるときは、其の過は遂に成りて眞の過となる。孔子の語〔論、衞靈公〕
【過則勿レ憚レ改】過あるときは畏れはばかることなく速に改むべし。孔子の語〔論、學而〕
【過猶レ不レ及】物事は中庸を貴ぶ、中をすぐれば、反りて及ばざるに同じ。論、先進「子曰、ーーーー」

【遑】クワウ　陽

○ひま、いとま（暇）詩、小雅「不レー二啓處一」書、無逸、注「ー在レ心、暇在レ事、事究曰レ不レ暇、心勸曰レ不レー」○いそぐ（急）あわてる。古、皇に通ず。○ーーはひまなくいそがしき貌。
【遑急】あわていそぐ。後漢書、馬援傳「諸郡ーー、各以レ狀聞」
【遑遑】心おちつかずうろうろする貌。いそがしき貌。孟、滕文公「孔子三月無レ君、ーー如也」後漢書、蘇竟傳「仲尼棲棲、墨子ーー、憂レ人之甚也」＝皇皇・栖栖。

【遒】シウ　尤

○せまる（迫）○かたし（堅固）○つく（盡）詩、豳風「四國是ー」○つくなる。屈原、九辯「歲忽忽而ー盡兮」をはる（終）○あつまる（聚）詩、商頌「百祿是ー」○つよし（勁）鮑照詩「獵獵晩風ー」たけし（健）
【遒逸】文筆の力つよく、すぐれたるおもむきあり。北史、祖珽傳「神情機警、詞藻ーー」
【遒緊】つよくきびし。韓愈詩「朝作二百賦一猶鬱怒、暮作二千詩一轉ーー」
【遒勁】書畫、又、文章の筆力つよし。圖繪寶鑑「李思訓書皆超絶、尤工二山水林泉一、筆格ーー」
【遒人】令を宣傳する官。書、胤征「每歲孟春、ーー以二木鐸一徇二于路一」
【遒整】つよくしてととのふ。輟耕錄「房大年書、京都萬歲山、意匠經營、格法ーー」
【遒麗】つよくうるはし。南史、柳惲傳「惲非二徒風韻清爽一、亦屬レ文ーー」

【遂】スヰ　寘

○とぐ、成しとげる、成就する「功成名ー」禮、月令「百事乃ー」○とほす。とほる（達）○すすむ（進）易、大壯「不レ能レ退不レ能レー」あけ進める（登進）登用する。書、仲虺之誥「顯レ忠ー良」○なす。なる（成）○そだつ（育）○かなふ（稱）○をふ。をはる（竟）つくす（盡）○つひに、其の結果として。左、隱元「莊公寤生驚二姜氏一、名曰二寤生一、ー惡之」○よる（因）兩事相因りて及ぶ。○したがふ（順）○事をもっぱら（專）にする。○こみぞ（小溝）周禮「夫間有ー、ー上有レ徑」○そなはる（備）○のびのびした（舒肆）る貌。詩、衞風「容兮ー兮」○遠き郊外の地。周代の行政區劃の名、王畿より百里以外の地「六鄕六ー」周禮、大司徒「五縣爲レー」

同訓異義 遂・竟・卒・訖・畢・終 ○遂は事をしとぐる意あり、つひにと訓むときは、因也、兩事相因而及也と註す、此の因ありて、たゆみなく彼の事をしとぐる義。韓非子「蟻壤一寸而仞有レ水、乃掘レ地遂得レ水」○竟は究竟、また畢竟と熟し、あげくと譯す、史記に「及レ破二驪戎一獲二驪姬一愛レ之、竟以亂レ晉」とある如し。○卒は終盡なり、はてはと譯す、事實を主としていふ、年のしまひを、卒歲といひ、事を終るを卒業といふが如し。○訖は盡也と註す、事の終りたるところを主とす。○畢はことごとくといふ義あり、十が十皆すみ盡くしたる意に用ふ。○終は窮極なり、始の反にて、しじうの意あり、事の全體にかかる、史記に「武安君終辭、不レ肯レ行、遂稱レ病」とあるにて知るべし。

【遂過】あやまちを成しとげる。呂覽「飾レ非ーレー」
【遂古】いにしへ、おほむかし（遂は肆と音通、肆は陳卽ち久遠）登靈光殿賦「上紀開闢、ーー之初」＝往古・上古。
【遂材】はたらきあるものをあげ用ひて、其の材をつくさしむ。管子「選レ賢ーレー、而禮二孝弟一、則姦僞

止」
【遂字】よくそだてる。漢書、嚴安傳「五穀蕃熟、六畜ーー」
【遂事】○事未だ成らざれども勢已むこと能はざるもの。論、八佾「成事不レ說、ーー不レ諫」○事を專にする。公羊、莊二九「大夫無レーーレ」
【遂初】官を退きて其の初志をなしとぐ。晉書、孫綽傳「孫綽居二於會稽一、游二放山水一十餘年、作二ーー賦一、以致二其意一」
【遂遂】相隨ひて行く貌。禮記「陶陶ーー、如レ將二復入一然」
【遂長】生を遂げ生長する。呂覽、去私「萬物得二ーー一焉」＝生遂。
【遂良】善良なる者を登用する。書、仲虺之誥「顯レ忠ーレー」

【遄】セン　先
○しばしば、往來すること數なり。○とし(疾)すみやか(速)詩、衞風「ー臻二于衞一」

【逿】㊀タフ　㊁タウ　漾　陽
㊀すぐ(過)○うごかす(盪)○たふる(倒)據を失ひて倒る。漢書、王式傳「陽醉ー」地」㊁つく(突)「迭ー」

【道】㊀タウ・ドウ　㊁タウ・ドウ　皓　號　通音ダウ
㊀みち、通行する所、徑路「海ー」「街ー」「棧ー」人の守るべき義理「人ー」「孝ー」「至ー」「教ー」禮樂・刑政「政ー」「王ー」「霸ー」學術・技藝など「斯ー」「武ー」○すぢみち(理)やりかた、方法。○したがふ(順)書、禹貢「九河既ー」○行政上の區劃。唐代、天下を十ーに分つ(今の省の類)明・清は省を數ーに分ち、其の官吏をー員といふ(我國にては本國を畿內・八ーに分ち、又朝鮮にも八ーあり)○老子の敎「ー敎」○ー學は宋の程朱などの學派。又道敎の學說。㊁いふ。(言)大學「如レ切如レ磋者ー學也」○よる(由)よりしたがふ。中庸「ー二問學一」○をさむ(治)論、學而「ー二千乘之國一」○みちびく(導)論、爲政「ーレ之以レ政」○てびき、あんない。○より、から(從)韓非、十過「玄鶴二八ー二南方一來」

同訓異義 フイ 道・言・謂・曰・云の別は言（一七八五頁二段）の條を見よ。○ヨリ 道・自・從・由・緣・因・仍の別は自（一五八七頁三段）の條を見よ。

【道引】氣を導き體に引きて、和柔ならしむる義。莊、刻意「ーー之士、養形之人、彭祖壽考者之所レ好也」＝導引。
【道院】道士の居所、道敎の寺。王禹偁詩「ーー風淸响二藥籠一」＝道觀。
【道家】黃帝・老子の敎を祖述する學派。史、禮書「孝文好二ーー之學一」漢書、藝文志「ーー者流」
【道歌】國道德の意を詠ぜしうた。
【道交】德義の心を以てまじはる。
【道學】○宋の程子・朱子等の唱へし學派。宋史にーー傳あり。＝宋學・性理學。○儒學。論衡、量知「雖レ無二ーー一、勉力材能、盡二於朝廷一、此亦報レ上之效驗也」○道敎の學問。隋書、經籍志「蓋公能言二黃老一、文帝宗レ之、自レ是相二傳ーー一衆矣」
【道學先生】○道學卽ち程朱學を修めし學者。○人情世態に暗く頑固なる學者を罵りていふ。
【道義】正しきすぢみち。抱朴子「正經爲二ーー之淵海一」
【道誼】人のふむべきみち。戴復古詩「ーー無二窮達一、文章有二是非一」＝道義。
【道舊】過ぎにし事を話す。舊唐書「相與ーレーー以爲二笑樂一」陶潛文「班レ荊ーレー」＝道故・敍舊・話舊。
【道揆法守】道理を以て事を量りて、其の宜しきを制すると、法を以て自ら守ると。孟、離婁「上無二道揆一也、下無二法守一也」
【道殣】ゆきだふれ、道上にて餓死せし人。殣は餓死。左、昭三「宮室滋修、ーー相望」＝行殣。
【道殣相望】行路にうゑじにする者多きをいふ。左、昭三「宮室滋修、ーーーー」
【道經】道敎の經典（隋書、經籍志）
【道具】○佛家應用の器具（釋氏要覽）○國すべての器具。
【道君】道敎の神の尊號。登眞隱訣「三淸九宮竝有二僚屬一、其高等稱曰二ーー一」
【道光】○道德のひかり。劉咸詩「ーー誰不レ仰二淸塵一」○佛敎の光。法苑珠林「法水東流、ーー西照」○淸の宣宗の年號。
【道觀】道士の居る寺の樓。遠望すべし故に觀といふ。劇談錄「佛宇ーー、遊覽者罕レ不二經歷一」
【道化】國おどけ、をかしき所作をして人を笑はせる。又其の人。
【道藝】道德と學藝と。周禮「會二其什伍一、而敎二之ーー一」
【道敎】黃帝・老子の敎。後漢の張道陵に創り、晉の時、天師道と稱し、後にーーと名づく。宣室志「雅尙二ーー一、屢加二尊異一」
【道訣】道家の祕法。盧思道詩「尋

思得二ーー一、輕舉厭二人羣一」
【道眼】能く道を見るまなこ。楞嚴經「開二我ーー一」
【道レ故】故舊の情を語る。史、滑稽傳「若二朋友交遊一、久不二相見一、卒然相覩、懽然ーレー」＝道舊。
【道根】道の本源。申鑒「恕者仁之術也、正者義之要也、至哉此謂二ーーー」一萬化存焉爾」
【道裝】道士のよそほひ。蘇軾詩「朱雀橋邊看二ーー一」
【道藏】道敎に關する一切の經典。
【道山】學者、東觀を謂ひて、道家の蓬萊山と爲す（後漢書）故に借りて人文薈萃の地に喩ふ。陳師道詩「ーー今日有二宗英一」＝文苑・儒林。
【歸二道山一】道家にて死をいふ。世說、排調「世傳、端明已ーーー、今尙儞游二戲人間一耶」
【道士】○道敎を修むる人。通鑑、胡注「道家雖レ宗二老子一、而西漢以前未レ嘗以二ーー一自名上、至二東漢一、始有二張道陵・于吉等一、是道與二佛敎一皆起二東漢時一」○仙術を修めたる人、方士。漢書、王莽傳「衞將軍王涉、素養二ーー西門君惠一」○有道の士。春秋繁露「古之ーー有レ言」＝君子。
【道次】みちすぢ。後漢書、郭伋傳「有二童兒數百一、各騎二竹馬一、ーー迎拜」＝途次。
【道人】○佛又は道家の說を修むる人。智度論「得レ道者、名爲二ーー一、餘出家者、未レ得レ道者、亦名二ーー一」○道術を得たる人。漢書、京房傳、注「ーー有二道術一之人也」
【道心】○義理より發する心。人心の對。書、大禹謨「人心惟危、ーー惟微」○佛菩提心、悟道の心、佛道を信ずる心。李端詩「夜靜猿聲證二ーー一」＝道念。
【道眞】道義の眞誠。漢書、劉歆傳「黨二同門一、妬二ーー一」
【道上】みちばた。＝路傍・路上。
【道術】○道敎又仙人の方術。後漢書、何皇后紀、注「道人謂二ーー人一」＝仙術。○道德學術。
【道書】道敎の書物。魏志「張陵客レ蜀、學二道鵠鳴山中一、造二作ーー一、以惑二百姓一」
【道俗】僧侶と俗人と。南史、梁武帝紀「ーー五萬餘人」＝緇素。
【道祖神】道路を守りて旅人の安全を得しむる神、さへのかみ。＝道陸神。
【道體】道德の本體。近思錄にーー篇あり。淮南、詮言「無爲者、道之體也」
【道臺】官名、我が國の縣知事の類。
【道泰身否】行ふ所ただしきも立身すること能はず。李商隱文「時亨命屯、ーーーー」
【道地】人の爲めにしたばなしをする。漢書、田延年傳「召二問延年一欲レ爲二ーー一」
【道帙】道敎の書物。＝道書。
【道場】○佛敎及道敎の道を修する所。又、寺をいふ。白居易詩「紗籠燈下ーー前」○國擊劍・柔道などを稽古する所。
【道中】○みちなか、たびぢ。漢書、王嘉傳「ーー過者皆飲食」＝途中。○國遊女の道ゆき。
【道程】道里に同じ。
【道聽塗說】善言を聞くと雖も、深く心に留めて己の有となさざるをいふ。塗は途。論、陽貨「道聽而塗說、德之棄也」
【道塗】みちすぢ。＝道途。
【道統】儒敎の道を承け傳へたる人人の系統。堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子の如き者（孟、盡心）元史、趙復傳に「ーー相傳圖」あり。
【道德】人倫五常のみち。曲禮「ーー仁義、非レ禮不レ成」
【道德經】書名、卽ち老子。隋書、經籍志「老子ーーー二卷、周柱下史李耳撰」
【道德之符】道を行ひし效驗。史、蔡澤傳「豈非二ーーーー一、而聖人之所レ謂吉祥善事者一與」
【道德臘】道家にて七月七日の祭。雲笈七籤「七月七日名二ーーー一」
【道念】○義理より發する心。吳筠詩「晴昔希二ーー一」＝道心。○佛道を悟りし心。＝菩提心。
【道破】いひやぶる、いひ盡す、論破する。
【道傍】みちのほとり、みちばた。白居易、靑石詩「不レ願レ作二官家ーー德政碑一、不レ鐫二實錄一鐫二虛辭一」＝道旁・路傍。
【道貌】道德ある相貌。續仙傳「李珏情景恬憺、ーー秀異」
【道旁苦李】路傍にあるにがき李の實。人に棄てらるるに喩ふ。世說、雅量「王戎七歲、嘗與二諸小兒一遊、看二道邊李樹多レ子折レ枝、諸兒競走取レ之、惟戎不レ動、人問レ之、答曰、樹在二道邊一而多レ子、此必苦李也、取レ之信然」
【道法】○正しきのり。韓非子「牖生二乎ーー一、而不レ出二乎愛惡一」○道敎の法。神仙傳「乃入二周狄山一、精二思ーー一」
【道畔】みちのほとり、みちばた。論衡「ーー巨樹、塹邊長溝」＝道傍・道邊。
【道費】旅費。名山藏、明太祖紀「人賜二衣一襲鈔五錠一、爲二ーー一」＝道里費。
【道服】○道士の服。遵生八牋「ー不二必立レ異、以レ布爲レ佳」○國中古、貴人が外出の時に著けたる塵よけ。
【道邊】みちばた。詩經「采采芣苢」疏「今車前草、大葉長穗、好生二ーー一」＝道傍。

【道謀是用】道路に沿ひて家を作り、道を行く人と謀れば、路人の心は區區なれば、終に一致せず、家を成す能はず。一定の見識なく、他人の言のみを用ふる者は、終に事を成す能はざるに喩ふ。詩、小雅「如下彼築二室于道一謀上、是用不レ潰二于成一」
【道味】道德の意味。晉書、戚公簡傳「不レ求二榮利一、潜二心――一」
【道明寺】國道明寺糒の略、飯をほしたるもの、河内國河内郡――にて創製せしが故。
【道脈】其の道の系統。戴良詩「儒言存二――一、野趣任二天眞一」＝道統。
【道門】○道德に入る門戸。道德指歸論「靜爲二虛戶一、虛爲二――一」○道德のうち。易林「被二服衣冠一、遊二戲――一」○道敎、又道家をいふ。圖繪寶鑑「多畫二――尊像一」
【道腴】道の眞源、腴は膏腴、其の味の美なるに喩ふ。班固、答賓戲「味二道之腴一」
【道樂】國○ものずき。○酒色にふける。＝遊蕩。
【道里】みちのり。漢書、司馬相如傳「――遼遠、山川阻深」＝道程。
【道里費】旅費。琉球國史略「賜二衣幣及錢一、爲二―――一」
【道理】すぢみち、人の守るべき正しき道。荀、修身「其行二――一也勇」＝道德。

【道理貫二心肝一】道理が深く心の底まで貫く。蘇軾、與二李公擇一書「――、忠義塡二骨髓一」
【道流】道士、道家者流。韋應物詩「玉書示二――一」
【道力】みちを修めて得たる力。姚合詩「聽レ琴知二――一、尋レ藥得二詩題一」
【道路】通行のみち。禮記「――男子由レ右、婦人由レ左、車由二中央一」
【道路側レ目】次條に同じ。
【道路以レ目】國政に不滿をいだく者、公然非難するを畏れ憚り、互に目を以て其の意を通ずる。周語「國人莫二敢言一、――」＝道路側レ目。
【道陸神】國道祖神の訛。
【道話】國心學者が道德上に關する卑近なる訓話。又其の書「心學――」
【憂レ道不レ憂レ貧】德の修まらざるをうれへて、身のまづしきをうれへず。孔子の語。論、衞靈公「君子―――」
【道不レ拾レ遺】○廉直の風おこなはるるをいふ。家語、相魯「男女行者別二其塗一、―――」○刑法の嚴しくして令を犯す者なきをいふ。史、商君傳「―――、山無二盜賊一」
【道不レ同不二相爲謀一】操り守る所の道同じからざれば、互に相謀ることなし〔論、衞靈公〕

【守レ道】人倫の道をまもる。許渾詩「簞瓢貧――、書劍病忘レ機」
【守レ道不レ如レ守レ官】能く官を守りてその職をつくすは、道を守るの要旨たる義。左、昭二十「仲尼曰、――、君子韙レ之」
【道大莫レ容】道大いにして、世に容れられず。史、孔子世家「夫子之道至大也、故天下莫二能容一」
【道雖レ邇不レ行不レ至】近き道も、行かざれば到著せず。荀、修身「――、事雖レ小、不レ爲不レ成」
【道遠知レ驥】遠道を行きて始めて千里の馬の能を知る。曹植、矯志詩「――、世僞知レ賢」
【道之大原出二於天一】道の根源は天より出づ。董仲舒、對策「――、天不變、道亦不レ變」
【道出二一原一】道理はもと一源に出で、二途なき義。淮南、俶眞「――、通二九門一、散二六衢一」
【道在レ邇求二諸遠一】學問の道は之を己の身に本づくべし、故に近し、然るに人反りて之を外に求む、故に遠し。孟、離婁「道在レ爾而求二諸遠一」俯・邇通ず。

【達】タツ ダチ 曷
○とほる、行きわたる。中庸「天下之―道五」道が通ずる「四通八―」とほす（通）○とどく、いたる（至）到著する「到―」とどける「送―」○およぶ（及）○あらはる（顯）世に知られる、窮の對「顯―」孟、盡心「―不レ離レ道」○すすむ（薦）人を引きあげ用ふる。禮、儒行「推賢進二―之一」○おふ（生）○さとる（曉）事理に通ずる「明―」「英―」論、公冶長「賜也―」○のぶ（暢）○とぐ（遂）○つらぬく（貫）○あまねし（徧）○よろし（宜）○みな（皆）○きめる（決）○まど（窗牖）○こひつじ（小羊）○すぐれたる人「―人」○ほしいまま（放恣）「挑―」「放―」國○ダ人員の複數を示す。とば「友―」「公―」○たっし、官府の申しわたし「布―」「―書」
解字 辵に从ひ幸の聲。俗に幸に从ひて達に作るは非。
【達意】己の意思を十分にのべ通ずる。史、滑稽傳「書以道レ事、詩以―レ―」
【達孝】よく父母に事へ、天下の人の認めて孝行とするもの。中庸「武王周公、夫――矣乎」一說に常行して變らざる孝行
【達官】顯達せる官。檀弓、疏「――謂二國之卿士大夫被二君命一者上也」

【達觀】意に滯る所なく、ひろく見とほして境遇の爲めに拘束せられず。蘇軾詩「白足高僧解二――一」北齊書「此是最大――」＝顯官。
【達敎】ゆきとどきたるをしへ。陸雲文「聞二先黎之――一」
【達見】理を十分にきはめ知る見識。晉書、賈充傳「雅量宏高、――明達」
【達言】道理に通達せし味あることば。曹植文「歎二此――一、以爲二美談一」
【達喪】達は通、上は天子より下は庶人に至る迄行ふべき喪の禮。禮、三年問「三年之喪、天下之――也」
【達士】ひろく事理に通じて事物に拘束せられざる士。呂覽「――者、達二生死之分一」後漢書、仲長統傳「至人能變、――拔レ俗」
【達旨】意味を十分に通ぜしむる。又、十分に通達せしむね。晉書、裴頠傳「君子宅レ情、無レ求二於顯一、及二其立レ言、在二乎――一而已」
【達識】事理に明達して能く機を知り得る見識。北史、邢邵傳「高情――、開二遣滯累一」＝達見・遠識。
【達人】○ひろく道理に通達する人。嵇康、絕交書「柳下惠・東方朔、――也」＝達者。○國藝術に熟達せし人。
【達人大觀】道理に通達する士は、公平に天地間の事物を觀察する。賈誼、鵩鳥賦「――兮、物亡レ不レ可」
【達者】○ひろく事理に通達せる人。左、昭七「吾聞將レ有二――一、曰二孔丘聖人之後也一」＝達人。○國丈夫である、身體壯健なり。又、自由自在。
【達曙】よあけがたにいたる。
【達政】まつりごとの理に通達する。南史、孔琳之傳「乃擧朝大議、精才――之士」
【達尊】天下を通じてたつとばるるもの、達は通。孟、公孫丑「天下有二――三一、爵一、齒一、德一」
【達道】天下古今の共に由る所の路、書經の五典、孟子の父子有レ親・君臣有レ義・夫婦有レ別・長幼有レ序・朋友有レ信の道。中庸「天下之――五」
【達德】天下古今常行して變ぜざる德。中庸「知仁勇三者、天下――也」
【達筆】國書畫文章などを自由自在に巧に書く。
【達辯】國巧みなる辯舌。
【達理】事理に通ずる。柳宗元文「是必――、而聞レ道者也」
【達僚】高等の官吏。舊唐書、鄭注傳「――權臣、爭湊二其門一」＝達官。
【達練】十分に熟練する。後漢書、胡廣傳「廣性溫柔謹素、遜言恭色、――事體一、明二解朝章一」＝練達・熟達・明練。
【達魯花赤】蒙古語にて官長の義〔十八史略、南宋紀〕
【達賴】西藏の黃敎の主、卽ち――喇嘛、俗に活佛と稱す、前藏の拉薩城の布達拉廟に居る。
【達磨】○梵語、一切の萬法。○天竺の僧、菩提――の略、梁武帝の時、迎へて金陵に至る。江を渡りて魏に往き、嵩山少林寺に止り、面壁九年に及ぶ、法脈を二祖の慧可に傳へ、袈裟と「吾本來二玆土一、傳レ法救二迷情一、一花開二五葉一、結果自然成」といふ偈とを付與し、大通二年十月五日入寂す。磨一に摩に作る。

【遉】テイ 庚
○うかがふ。偵に通ず。○國さすが（流石）

【遁】㊀トン ㊁シュン 願 阮 眞
㊀は又、遯に作る
㊀にぐ、のがる（逃）「―逃」「驚―」○うつる（遷）○かくる（隱）○隱れ去る「―思」○さける（迴避）後漢書、杜林傳「上下相―」㊁あとしさりする。賈誼、過秦論「―巡不レ敢進一」＝逡。○めぐる。漢書、平當傳「逡―有レ恥」＝巡。
同訓 異義 ノガル 遁・逃・避等の別は逃（辵部六畫）の條を見よ。
【遁甲】忍術の類、人目をくらまして身をかくし吉を取りて凶を避けるといふ妖術。後漢書、方術傳、注「――推二六甲之陰一而隱遁也」
【遁藏】にげかくれる。韓愈文「虎豹遠レ跡、蛟龍――」
【遁思】この世を遁れ去る思。詩、小雅「勉二爾――一」
【遁辭】にげことば、いひぬけ。孟、公孫丑「邪辭知二其所レ離、――知二其所レ窮」
【遁秦】秦の苛政をのがれ避ける。漢書、敍傳「四皓――、古之逸民」＝避秦。
【遁世】世をのがれる。世間を見棄てて隱れる。＝遯世。
【遁走】にげはしる。史、孝文帝紀「匈奴――」＝逃走。
【遁退】のがれしりぞく。魏志、陳留王紀「七月賊皆――」
【遁避】にげさける。唐彥謙詩「磨駝非二吾任一、――亦無レ術」
【遁北】にげはしる。淮南子「前無二蹈難之賞一、而後無二――之刑一」＝逃北。
【遁巡】疑ひ恐れてあとしざりする。賈誼、過秦論「九國之師、――而不二敢進一」＝逡巡・卻退。

【逼】ヒョク　通音フク　又ヒツ　偪に同じ　[籀]

○せまる（迫）「―迫」○ちかづく（近）○せばまる、つまる、土地などがせまくなる、險狹。山川考「岸狹勢―」○いそぐ（急）○ちぢむ（縮）○をかす（侵）○せまりおどかす（迫脅）左、襄二「以―子重子辛一」○内―は大便がしたくて耐へられず。

同訓異義 逼・迫・薄・蹙○逼は偪に同じ、間近くつめ寄する義、逼レ眞とは、畫などの眞物によく似て殆ど同じやうなるをいふ。○迫は逼と連用して、逼と大いに同じけれども小異あり、迫には急なる意あり、急迫・切迫の如し。○薄は迫に同じ、晩に迫るを薄暮といふ、物薄ければ透間なく、ひったりと付きせまるなり、但急なる意はなし。○蹙は一所におしよする義、蹙じてせまり困む義とし、又窮蹙・窘蹙と連用す。

【逼塞】○せまりふさがる。國○おちぶれてかくれ居る。○德川時代、武士に加へたる刑罰、門を閉ぢて白晝の出入を禁ずる（閉門より輕し）

【逼眞】甚だ眞物に似る。韓偓詩「雖レ有二才難一レ詠、寧無二畫一レ一」

【逼水】水邊にせまり近づく。晉書、苻堅載記「君懸軍深入、置レ陣―レ―、此持久之計、豈欲レ戰者乎」

【逼奪】○君を犯して其の位をうばふ。蘇軾、唐論「――之危」○おびやかし取る。大唐新語「父子毋子尙有二――一」

【逼迫】○さしせまる、せまりうながす。晉書、李密傳「郡縣――、催二臣上道一」○國手づまる「金融――」

【逼扶】ちかづきたすける。晉書、庾袞傳「徒行入レ都、將レ命者、逐―升レ車」

【遍】ヘン　[籀]　又、遍に作る、偏に同じ

○あまねし「普―」○たび、回數を示す語。一―は一次。

同訓異義 遍・周・徧・普・洽・浹の別は周（三一三頁四段）の條を見よ。

【遍該】あまねくかねる。晉書、范平傳「平、研二覽墳索一、―二―百氏一」（墳索は、三墳八索、古書をいふ）

【遍窺】あまねくうかがひみる。楊炯文「旁二求勝境一、―二―靈跡一」

【遍身】滿身又、全身の義。無名氏、蠶婦詩「―― 綺羅者、不二是養レ蠶人一」＝徧身。

【遍談】あまねくかたる。世說「悉書二其鄕邑名氏一、―二寓レ目使二之――、不レ誤二一人一」

【遍布】あまねくしく。許棠詩「風威――二江山一靜、教化高同二日月一明」

【遍歷】諸國をへめぐる。

【逾】ユ　[踰]

○こす、こゆ（越）踰に通ず。○すぐ（過）過ぎ去る。書、秦誓「日月―邁」○わたる（渡）書、禹貢「―二于洛一」○とほし（遠）○すすむ（進）○いよいよ（愈）ますます。呂覽、愼大「欲レ榮而―辱」

【逾月】つきをこえる。李建勳詩「相見未レ―レ―、堪レ悲遠別離」

【逾日】他日にまたがる。魏志、注「賞不レ―レ―者、欲三民速覩二爲レ善之利一也」＝踰日。

【逾邁】すぎ去る。書、秦誓「我心之憂、日月――」

【適】〔國字〕

あっぱれ、贊美する詞。

十畫

【遙】エウ　[籀]

○はるか、とほし（遠）「―遠」「迢―」、禮、王制「千里而―」○逍―はぶらぶらとあるく、さまよふ。＝徜徉・逍搖。

【遙曳】はるかに長く引き垂れる。黃滔詩「靑帘――杏花中」

【遙映】はるかにうつる。南史、王僧辯傳「有二兩龍一自二城西江中一騰躍升レ天、五色分明、―二―江水一、百姓皆仰而目レ之」＝遠映。

【遙遙】はるかなる貌。左、昭二五「遠哉――」＝遙然。

【遙嶧】はるかに見ゆる山脈。

【遙看】遠くから見る。韓愈詩「草色――近卻無」

【遙祭】はるかにまつる。周禮、疏「爲レ壇――之」

【遙指】はるかにゆびさす。李遠詩「窗中――三千界」

【遙岑】とほくみゆるみね。陸游詩「但怪素月生二――一」＝遙嶺。

【遙矚】遠くからながめる。柳宗元詩「探レ奇極二――一、窮レ妙閱二清響一」

【遙靑】とほく見える靑山。孟郊詩「――新畫出、三十六扇屛」

【遙昔】遠きむかし。張華詩「伏枕終――、寤言莫二予應一」

【遙泉】とほくへだたりたるいづみ。馬戴、宿二翠微寺一詩「積翠含二微月一、――韻二細風一」

【遙然】はるかなる貌。列仙傳「託二身風雨一、――矯步」

【遙村】はるかなるむら。張九齡詩「歸雲納二前嶺一、去鳥投二――一」＝遠村。

【遙覃】遠方まで布きおよぶ。江淹文「皇心――、祭レ政洞レ俗」

【遙汀】はるかなるみぎは。僧善住詩「征鴻和レ影度二――一」

【遙眺】遠くよりながめる。沈約詩「驅レ馬城西阿、――想二京闕一」

【遙天】はるかなるそら。張正見詩「雨師淸二遠路一、風伯靜二――一」

【遙拜】はるかに拜禮する。晉書、桓溫傳「溫威勢翕赫、侍中謝安、見而――」

【遙望】遠くからのぞむ。諸葛亮、梁甫吟「步出城東門、――蕩陰里」＝遠望。

【遙碧】はるかなるあをぞら。劉禹錫詩「前山正無レ雲、飛去入二――一」

【遙邁】とほくゆく。潘岳賦「辭二京輦一兮――、將レ遠二遊兮東夏一」

【遙夜】長き夜。方干詩「平明疎磬白雲寺、――孤砧紅葉村」＝長夜。

【遠】㊀エン・ヲン　㊁エン・ヲン　[古][籀]　遠は俗字

㊀とほし、はるか（遼）近の對。時間又距離が長し「長―」「久―」「永―」「迢―」「脩―」○あまねし、ひろし。○おくぶかし「深―」「高―」高尙にして知り難し。孟、盡心「言近而指―者」（指は旨）○まはりどほし「迂―」○うとし、親しからず「疏―」○とほきもの、とほき所。㊁とほざく。論、衞靈公「―二佞人一」うとんず。とほざかる。論、學而「―二恥辱一也」

【遠靄】とほきもや。張九齡詩「――千巖合、幽聲百瀨喧」

【遠意】○古人の意志。水經、注「後人假合、多差二――一」○遠方に在る人の心。李白詩「開レ緘識二――一、速二此南行舟一」○遠く思を馳せる。賈島詩「分首芳草時、――靑天外」

【遠由】古きいはれ。又遠き原因。

【遠遊】○修學などの爲めに、遠方に行く。論、里仁「子曰、父母在不二――一、遊必有レ方」＝遠游。○冠の名。漢以後諸王の服する所ろ。

【遠猷】さきざきまでの遠きはかりごと。猷は謀。陸機詩「夫子茂二――一、款誠寄二惠音一」＝遠謀。

【遠域】遠方の土地。晉書、張寔傳「孤州――」＝遠境・絕域。

【遠因】遠く久しき原因。梁武帝文「佛教爲レ法、本存二――一」＝遠由。

【遠裔】○遠き後世の子孫。晉書、赫連勃勃載記「淳維――、名王之餘」＝遠胄。○遠きはてのえびすのくに。張說、義陽王神道碑「泣血上請、迎二喪――一」

【遠役】遠地にやらるる役夫。張協詩「君子從二――一」

【遠憶】はるかにおもふ。李中詩「閑聽九秋雨、――四月僧」

【遠界】遠くへだたりたる地。後漢書、馬援傳「奏言、西于縣――、去レ庭千餘里、請分爲二封溪・望海二縣一、許レ之」庭は縣庭。

【遠行】遠方へ行く。呂覽「今臣將レ有二――一」

【遠郊】都よりすこしく遠ざかりたるゐなか。邑外百里の地。周禮「近郊十一、――二十而三」

【遠效】久遠の後に至りてあらはれるしるし。孔文仲文「人之常情、薄二――一而貴二速成一」

【遠航】船にて遠方へわたる。＝遠洋航海。

【遠交近攻】遠國と交際して近國をせめる。史、范雎傳「不レ如二遠交而近攻一」

【遠客】遠方より來れる客。又遠國の旅人。李白詩「――投二名賢一、眞堪レ寫二懷抱一」

【遠隔】とほくへだたる。＝懸隔。

【遠洽】とほくあまねし。南史、梁武帝紀「文德廣覃、義聲――」

【遠求】とほくさがしもとめる。後漢書、安帝紀「舉二賢良方正一、――博選、開二不諱之路一」

【遠救】遠方より來るたすけ。後漢書、竇融傳「恃二――一而輕二近敵一」

【遠近】○をちこち、遠きと近きと。管子「剛柔也、輕重也、大小也、實虛也、――也、多少也、謂二之計數一」○遠方の民と近所の民と。史、始皇紀「――畢至」＝遠邇・遐邇。

【遠近法】畫法の語、遠近の位置をあらはす法。

【遠境】遠くへだたりたる地。韓非子「不レ謹二蕭牆之患一、而固二金城于――一」＝遠域・遠界。

【遠空】とほきそら。李白詩「晴雲散二――一」＝遙空。

【遠觀】遠方をのぞみみる。梁武帝文「近取二之身一、無レ假二――一」

【遠坰】遠方の野。錢起、觀二舞馬一賦「垂二耳長阪一、翹二足――一」

【遠業】遠大の事業。後漢書、馮岑賈傳論「若二馮賈之不伐、岑公之義信一、足下以感二三軍一而懷中敵人上、故能赴二成――一、終全二其慶一也」

【遠公送】高僧の人を見送るにいふ、遠公は慧遠法師。梅堯臣詩「陶令歸時――、石苔秋雨步遲遲」虎溪三笑（一六九八頁四段）參看。

【遠國】遠方のくに。後漢書、和帝紀「――珍羞」

【遠歲】ながきとしつき。江淹、宋僧書墓銘「颯流二響於――一」

【遠塞】○遠方のとりで。○とりでに遠ざかる。史、匈奴傳「匈奴亦去―レ―」

【遠想】○遠くすぐれて高尙なるおもひ。世說「悠然――、有二高レ世之志一」○遠くおもひやる。何承天、臨二高臺一篇「任二窮達一、隨レ所レ遭、何―レ―」

爲一一令二人勞一」＝遐想。
【遠算】遠大のはかりごと。＝遠謀。
【遠竄】○とほくにげかくれる。王粲詩「鷙鳥化爲レ鳩、一一江漢邊」○遠方へ島ながしにする。＝遠謫。
【遠山黛】次條に同じ、黛は眉墨。飛燕外傳「飛燕妹合德爲二卷髮一、號二新興髻一、爲二薄眉一、號二一一一」
【遠山眉】とほき山の如く青く引けるまゆげ、美人の眉に喩ふ。西京雜記「卓文君姣好、眉色如レ望二遠山一」杜牧詩「笑別一一一」＝遠山黛。
【遠旨】ふかき意味。何遜、七召「談二章句之一一」」
【遠志】○遠大なる志。魏志、注「韮卓曰、鴻鵠固有二一一一、但燕雀自不レ知耳」○藥草の名、ひめはぎ、をんじ。本草「一一、一名小草、李時珍曰、此草服レ之能益レ智強レ志、故有二一一之稱一」
【遠邇】遠きと近きと。書經「四夷咸賓、無レ有二一一一」＝遐邇。
【遠視眼】老年の人の患ふる所、遠き物を視るは明かにして近き物は反りて模糊たり。＝老眼。
【遠識】さきざきまでみぬく見識。晉書、盧欽傳「清淡有二一一一」
【遠日點】天文學上、地球が日を繞りて運行する楕圓形の軌道上、日を距ること最も遠き點。
【遠人】○遠國の人。遠物を見よ。○國同上。又古代の人。
【遠臣】○君主のうとんずる臣。墨子「近臣則喑、一一則吟」○遠方の國より來り仕ふる臣〔孟、萬章〕
【遠親不レ如二近鄰一】遠き親類よりは近き鄰といふ意。明心寶鑑「遠水難レ救二近火一、一一一一」
【遠心力】物理學にて回轉する物體が、其の中心より遠ざからんとする力。求心力の對。
【遠翔】遠方へ飛びかける。說苑「鴻鵠高飛一一」
【遠戍】遠方の國ざかへをまもる。又邊境の守り。又其の兵。後漢書、龐參傳「重レ之以二大軍一、疲レ之以二一一」
【遠樹】遠方に見える木。何遜詩「水底見二行雲一、天邊看二一一一」
【遠所】とほきところ。司馬相如、檄二巴蜀一文「恐三一一谿谷山澤之民不二偏聞一」
【遠乘】國とほのり、乘馬にて遠出する。
【遠色】女色を遠ざける。中庸「去レ讒一レ一、賤貨而貴レ德」
【遠矚】とほくまでながめる。梁簡文帝詩「一一既濡レ翰、徒自勞二心目一」
【遠水近火】とほきものは急場の用に立たざるに喩ふ。韓非、說林「失レ火而取二水於海一、海水雖レ多、火必不レ滅矣、遠水不レ救二近火一也」
【遠征】○遠方へゆきて討つ。左傳「不レ和不レ可二以一一一」○遠方へ行く。＝遠行。
【遠逝】○とほくさる。後漢書、蘇竟傳「故變レ名一一」○死する。＝長逝。
【遠紹】遠く隔りたる前代のあとを承けつぐ。韓愈、進學解「尋二墜緒之茫茫一、獨旁搜而一一」
【遠戚】ちすぢのとほき親類。＝遠親。
【遠祖】とほつおや、遠きせんぞ。高祖・曾祖以上の祖。後漢書、章帝紀「朕得下識二昭穆之序一、寄中一一之思上」
【遠走】とほくはしる。後漢書、卓茂傳「凡人之生、羣居雜處、故有二經紀禮義一、以相交接、汝獨不レ欲レ修レ之、寧能高飛一一、不レ在二人閒一乎」
【遠送】とほくまで見送る。詩經「之子于歸、一一于野一」杜甫詩「一一從レ此別、青山空復情」
【遠贈】遠方へ物をおくる。梅堯臣詩「後園有二佳果一、一一當二鯉魚一」
【遠足】國運動の目的にて遠出する。
【遠大】志が遠くして大いなり。謝朓文「臣本布衣、不二謀一一一」
【遠到】造詣する所の未だ量り知るべからざる義。晉書、陶侃傳「此子終當二一一一、復何疑也」
【遠島】○遠く離れたる島。後漢書、張宗傳「深入二一一一」○國德川時代の刑の一、伊豆・薩摩の七島、肥後の天草・佐渡・壹岐・隱岐等にしまながしにせしもの。
【遠道】とほきみち。李白詩「著レ鞭跨レ馬涉二一一一」＝遠路。
【遠謫】とほき處へつみしながす。李白詩「我愁一一夜郎去、何日金雞放赦回」＝遠竄。
【遠覃】とほくおよぶ。覃は及。牛弘、凱樂歌辭「帝德一一、天維宏布」＝遙覃・遐覃。
【遠胄】遠き末孫。魏書「其旁枝一一、豈得レ同二四廟三親一哉」＝遠裔。
【遠籌】久しく遠きにわたるはかりごと。晉書、宣帝紀「昔箕子陳レ謀以レ食爲レ首、今天下不レ耕者蓋二十餘萬、非二經國一一一也」
【遠逐】遠方へおひはらふ。北史、崔浩傳「彼能遠走、我亦一一、非レ難レ制也」
【遠昵】緣のとほきものと近きものと。尸子「不レ避二一一一」＝親疎。
【遠著】遠方にまで名があらはれる。魏志、賈詡傳「明公昔破二袁氏一、今收二漢南一、威名一一」
【遠汀】遠くつづくみぎは。蘇舜欽詩「漁艇縱橫映二一一一」
【遠眺】とほくながめる。朱熹詩「高齋一一、西南見二秋山一」＝遙眺。

【遠天】遠方のそら。許敬宗詩「辭二燕歸二寒海一、來鴻出二一一一」
【遠圖】遠大のはかりごと。後漢書、賈復傳贊「奇鋒震レ敵、一一謀レ國」＝遠謀。
【遠洞】とほく深きほらあな。鄭谷詩「一一時聞レ磬、翠俗盡掩レ扉」
【遠播】とほくつたはりしく。孫綽文「音徽一一、僉仰二芳流一」
【遠方】とほき所。論、學而「有レ朋自二一一一來」左、宣三「昔夏之方有レ德也、一一圖レ物貢レ金、九牧鑄レ鼎象レ物、百物而爲二之備一、使三民知二神姦一」
【遠抱】遠大なるかんがへ。韓愈詩「大賢事業異、一一非二俗規一」
【遠氓】遠方にあるたみ。丘濬詩「當レ宁二念一一一、塗炭日以極」
【遠望】遠方をのぞむ。東方朔、七諫「登二巒山一兮一一」＝遠眺。
【遠汎】とほくうかぶ。方干詩「他年莫レ學二鴟夷子一、一一二扁舟一用二鑄金一」
【遠蕃】○帝都をとほくはなれたるえびす。北史「魏明元帝享二東廟一、一一助レ祭者數百國」○遠方に在る藩鎭。次條參看。
【遠藩】遠く隔りたる藩鎭。韋應物詩「一朝忝二國省一、三載居二一一一」
【遠蠻】とほくのえびす。宋史、柳元景傳「先レ是劉道產、在二雍州一、有二惠化一、一一悉歸懷」＝遠蕃。
【遠物】遠國に產する珍らしき物。書、旅獒「不レ寶二一一、則遠人格」
【不レ寶二遠物一】遠方に產する高價無益の物を貴ばず。前條參看。
【遠廟】血統のとほくうすき先代のたまや。禮、祭法「一一爲レ祧」
【遠碧】遠き山のみどりいろ。蘇軾詩「行人挹二孤光一、飛鳥投二一一一」＝遙碧。
【遠別】遠方にわかれ居る。白居易詩「兄弟唯二人、一一恆苦悲」
【遠步】とほくあゆむ。杜甫詩「恣レ意同一一」
【遠謀】さきざきまでのはかりごと。左、莊十「劌曰、肉食者鄙、未レ能二一一一」＝遠圖・遠略・遠猷・遠算。
【遠味】遠方に產する珍らしき食品。尸子「珍怪一一」
【遠洋航海】遠く陸を離れたる太洋を船にてわたる。
【遠踰】とほくこえる。張詠文「陞下禮レ士之風、一一二列聖一」
【遠來】遠方から來る。晉書、范汪傳「謝二其一一意一」
【遠雷】遠方にて鳴るかみなり。
【遠覽】○とほくを見る。晉書、杜預傳「曠然一一、情之所レ安也」○遠大なる見識。班彪、王命論「超然一一、淵然深識」
【遠巒】遠方に見ゆる峰。＝遙巒・遠峯。
【遠流】罪によりて遠方へながす。北魏書、源懷傳「藏寬者悉一一」
【遠略】○遠大のはかりごと。陸機、辨亡論「洪謨一一」○遠方の國を攻めるはかりごと。後漢書、蘇竟傳「武帝情存二一一一、志闢二四方一」唐書「覆敗之餘、無二復一一一」
【遠慮】○永遠のおもんぱかり。論、衞靈公「子曰、人無二一一、必有二近憂一」國○ひかへめにする。○德川時代の武士の刑、逼塞の輕きもの。
【遠黎】遠方の民。沈佺期詩「歌舞將二金帛一、汪洋被二一一一」＝遠氓。
【遠路】遠くへだたりたる道。論、泰伯「任重而道遠」注「能負二重任一致二一一一也」
【知レ遠而不レ知レ近】他人のことは能く見ゆるも、己の事は見えざる義。淮南、說山「萇弘知二周之所三以存、而不レ知三身所二以亡一、一一一一」

【遣】 ㊀ケン ㊁ケン

㊀やる、つかはす、行かせる「一使」「派一」○おくる（送）おふ（逐）○はなつ（縱）にがす「放一」「縱一」○もらす、はらす「一悶」「一情」○しむ（令・使）命令して事を行はしむる意をあらはす。㊁一車は葬式の際、君主より下賜せられし牲體を載せる車。國○つかふ。つかひ「小一」「假名一」○物を與へる。

同訓異義 遣・令・使・教・俾の別は令（一〇九頁三段）の條を見よ。

【遣歸】つかはしかへす。漢書「一二故郡一」
【遣外】人を外國につかはす。
【遣車】葬式の時、犧牲を載する爲めに君主より賜はる車〔檀弓〕
【遣情】氣ばらし。陸機、文賦「歌者應レ絃而一レ一」
【遣唐使】國王朝時代に朝廷より唐朝へつかはされし使者。
【遣中】さし使はさるる人數のうち。
【遣憤】いきどほりの心をはらしやる。孔平仲詩「一レ一詩千首」
【遣悶】うさばらし。李德裕文「宮中無レ事、以レ此一レ一耳」

【遘】 コウ

〔冓〕逅に同じ

あふ（遇）相値ふ。崔駰賦「嘉二昔人之一一辰兮」覯と通ず。

【遡】 ソ

〔遡〕泝・溯に同じ

○さかのぼる、水流に逆らひて上ぼる。詩、秦風「一洄從レ之」○轉じて過去の時代をさかき

にたどる。○水流に順ひて下る。詩、秦風「ー遊從レ之」○むかふ(向・鄕)○さかふ(逆)○うったふ(訴告)愬に通ず。

【遡遊】ソイウ 流に順ひて下る。詩、秦風「ーー從レ之、宛在二水中央一」

【遡洄】ソクワイ 水流にさからひて上る。詩、秦風「ーー從レ之、道阻且長」

【遡源】ソゲン ○水源にさかのぼる。○轉じて學術の本源を究める「天道ーー」

【遡風】ソフウ 風にむかふ。むかひかぜ。詩、大雅「如二彼ーー一、亦孔之僾」

【遜】ソン 願

○ゆづる(讓)己を措きて他をすすめる。書、堯典、序「將レ遜二于位一」○したがふ(順)書、舜典「五品不レ遜」○へりくだる(謙恭)「謙ー」「揖ー」「恭ー」書、說命「惟學ー志」孫に通ず。○にげる、のがる(逃遁)○おとる(劣)此が彼に及ばず「ー色」「ー二一籌一」

【遜位】ソンヰ 其の職位を人にゆづる。史記「唐堯ーー、虞舜不レ台」=讓位。

【遜愿】ソンゲン つつしみへりくだりてすなほ。唐書、崔損傳「損以二便柔ーー一、閹八年」=謙謹。

【遜志齋集】ソンシサイシフ 二十卷、明の方孝孺の詩文集。其の文縱横豪放、東坡・龍川の間に出入す。

【遜讓】ソンジヤウ へりくだりゆづる。後漢書、高鳳傳「仁義ーー、奈何棄レ之、于レ是爭者懷レ感、投レ兵謝レ罪」=退讓・謙讓。

【遜色】ソンシヨク 他にひけをとるやうす。

【遜弟】ソンテイ すなほにして兄長に順ふ。禮記「朝廷同レ爵則尙レ齒」疏「是ーー敬老之道、通二達於朝廷一矣」

【遖】 道(辵部九畫)の古字。

【遝】タフ 合

○あつまる、かさなる。衆くしてこみあふ「雜ー」「紛ー」○およぶ(及)=逮。

【遞】テイ 薺 霽 遆は俗字

○かはるがはる、たがひに(更迭)「更ー」○かはる(代)○しゆくば(傳驛)「驛ー」○物を驛より驛へつぎつぎに送る「ー送」「郵ー」○傳驛の發送に從ふ人夫。又車馬。○迢ーは遠き貌、はるか。

同訓異義 カハル 遞・變・化・易・替・代・更・渝・換の別は變(一八四〇頁三段)の條を見よ。

【遞衣】テイイ 同一の衣をかはるがはる傳へきる。後漢書、李充傳「家貧、兄弟六人、同レ食ーー」

【遞加】テイカ 次第にましくはへる。

【遞減】テイゲン 次第次第にへらす。遞加の對。

【遞興】テイコウ たがひにかはるがはるおこる。史、律書「ーー遞廢、勝者用レ事」元稹、竇詩「辛螯終非レ久、炎涼本ーー」

【遞次】テイジ じゆんばん、順次に。

【遞信省】テイシンシヤウ 國郵便・電信・電話・商船等の事を掌る中央官廳。

【遞相】テイシヤウ 國遞信大臣の異稱。

【遞戰】テイセン かはるがはるにたたかふ。新論「千人ーー、不レ如二十人俱至一」

【遞送】テイソウ 次へ次へとかはるがはる送る、しゆくつぎにして送る。明律「若隣境官司、囚到稽留、不二即ーー一者、罪亦如レ之」

【遞代】テイダイ 互にかはる、更迭する。楚辭「射ーー豈」

【遞夫】テイフ 驛傳の役卒。燕翼貽謀「以二軍卒一代二百姓一爲二ーー一」

【遞往】テイワウ かはるがはるゆく。後漢書、姜肱傳「肱與二二弟仲海・季江一友愛天至、常共臥起、及二各聚レ妻、兄弟相戀、不レ能二別寢一、以二係嗣當レ立、乃ーー就レ室」

十一畫

【遨】ガウ 豪

あそぶ(遊)後漢書、劉盆子傳「而猶從二牧兒一ー」通じて敖に作る。詩、邶風「以敖以遊」

【遨佁】ガウイ あそびたのしむ。孫楚、井賦「枕二玄石一以盤遨、喜二ーー一而緩帶」

【遨遊】ガウイウ あそぶ。後漢書、馬援傳「卿ーー二帝之閒一」=敖遊。

【遨嬉】ガウキ あそびたのしむ。後漢書、梁鴻傳「聊逍遙兮ーー」

【遭】サウ ソウ 豪

○あふ(遇・逢)曲禮「ー二先生於道一」めぐりあふ。○めぐる(巡)とりかこむ(匝)劉禹錫詩「山圍二故國一周ー在」○たび(度・次・回)幾ーは幾次。○らる、せらる、他より仕向けられる。漢書、惠帝紀「ー二太后崩一損至德」

同訓異義 アフ 遭・遇・逢・値・合・會・晤の別は遇(辵部九畫)の條を見よ。

【遭遇】サウグウ めぐりあふ。漢書、禮樂志「幸ー二ー其時一」

【遭難】サウナン 危きなんぎにであふ。

【遭逢】サウホウ めぐりあふ。又、賢臣が明君に遇合して信任せらる。荊雲詩「ー二ー聖明后一、來棲桐樹枝」蘇軾文「追二敍終始之ーー一、以詒二鄕鄰之父老一」=遭遇。

【遭罹】サウリ うれひにあふ。幽通賦「故遭二于罹一而贏縮」

【遮】シヤ セ 麻

○さへぎる(攔)○とどむ(遏)くひとめる、制しとどめる。○ささふ(支)○をかす(冒)○たつ(斷)○まちぶせ(要擊)○おほひかくす(掩蔽)「蔽ー」○この、これ、俗語の這に通用す「ー箇」○周ーは語多き貌。

【遮遏】シヤアツ さへぎりとどむ。易林「烈風雨雪、ー二ー我前一」=遮止。

【遮扞】シヤカン さへぎりふせぐ。扞一に捍に作る。漢書、王莽傳「扶服振救、ーー匡衞」=蔽扞。

【遮回】シヤクワイ このたび。元稹詩「自レ識レ君來三度別、ーー白盡老髭須」=今回・這回・此次。

【遮擊】シヤゲキ まちぶせしてうつ。後漢書、班超傳「伏レ兵ーー」=要擊。

【遮箇】シヤコ 圖この、これ。蘇軾詩「ーー在二油鐺一不レ寒亦不レ熱」=這箇。

【遮止】シヤシ さへぎりとどむ。隋書、蘇威傳「上避レ之而出、威又ー二ー之一」

【遮車】シヤシヤ くるまの行くをさへぎる。梁簡文帝文「衞卒ーレー、迫民擁レ榜」

【遮絕】シヤゼツ さへぎりたつ。史、白起傳「發二年十五以上一、悉詣二長平一、ーー二趙救及糧食一」=遮斷。

【遮說】シヤセツ まちぶせして說く。史、高祖紀「三老董公ーー二漢王一」

【遮截】シヤセツ さへぎりとどむ。後漢書「烏桓寇二雲中一、ーー二道上商賈車牛千餘兩一」=遏截。

【遮斷】シヤダン さへぎりたつ。韋莊詩「紅塵ーー長安陌」

【遮抑】シヤヨク さへぎりとどむ。唐書、陽城傳「爲レ吏ーー」

【遮留】シヤリウ さへぎりとどむ。北史、唐永傳「當レ路ーー、隨數日始得レ出レ境」=遮止。

【遮迾】シヤレツ さへぎり蔽ふ。後漢書、輿服志「張レ弓帶レ鞬、ー二ー出入一」(車駕の出行の時、道を淸め行人をとどめる義)

【遮レ路】ミチヲサヘギル みちをさへぎり止める。後漢書、銚期傳「百姓聚觀、喧呼滿レ道、ーレー不レ得レ行」

【遮莫】サモアラバ それはそうであらふとも、ままよ(唐以後の俗語)岑參詩「別レ君止有二相思夢一、ーー千山與二萬山一」=任他・遮渠。

【遮渠】サモアラバ 前條に同じ。白居易詩「ーー不レ道二君王恩一」

【適】㊀セキ ㊁テキ ㊂タク・チャク 陌 錫 陌 ㊀の通音テキ

㊀ゆく(往)おもむく(歸)いたる(至)○よめに行く、とつぐ(嫁)○たのしむ(樂)「快ー」「淸ー」「娛ー」「酣ー」○かなふ、ほどよくあてはまる「ー當」○したがふ(從)○たまたま(偶)○まさに、ちやうどそこへ。史、高祖紀「高祖ー從二旁舍一來」○ただ。孟、告子「則口腹豈ー爲二尺寸之膚一乎」○つねに。○よし(善)○自得する、安便なり「自ー」「暢ー」「舒ー」㊁よつぎ「ー子」嫡に通ず。○おもて(正位)○かみ(上位)○ーーはおどろく貌。○あるじ、主なり。詩、衞風「誰ー爲レ容」○專一、專ら其の事に熱中する。論、里仁「無レー也、無レ莫也」○かたき。史、田單傳「始如二處女一、ー人開レ戶」=敵。㊂せむ(責)孟、離婁「人不レ足二與ー一也」=讁。

同訓異義 タマタマ 適・偶・會の別は偶(一五五頁四段)の條を見よ。○マサニ 適・正・政・方・祇等の別は正(一〇〇八頁二段)の條を見よ。○ユク 適・往・之・如・逝・行・徂・征・于の別は往(六一八頁四段)の條を見よ。

【適意】テキイ 己の心にかなふ、心が愉快に自得する。晉書、張翰傳「人生貴二ーー一爾、何能羈二宦數千里一、以要二名爵一」

【適飮】テキイン ほどほどにのむ。韓非子「渴者ー二ー之一則生」

【適レ郊】テキカウニユク ゐなかにゆく。左傳「賓孟ーレー、見二雄雞自斷二其尾一」

【適合】テキガフ よくあてはまる。

【適歸】テキキ 其の人を主としてしたがひたよる。史、伯夷傳「我安ーー矣」

【適宜】テキギ よろしきにかなふ。=便宜。

【適レ口】クチニカナフ 味佳にして口にかなふ。嵆康文「嘉肴珍膳、雖レ所レ未レ嘗、嘗必美レ之、適二於口一也」張蘊古文「羅二八珍于前一、所レ食不レ過レーー」

【適子】テキシ 長男。檀弓「扶二ーー一南面而立」=嫡子。

【適人】テキジン ○かたき。字解參看。=敵人。○ヒトニユク 女子が出でて嫁する、よめいりする。儀禮「凡女行二於大夫以上一曰レ嫁、行二於庶人一曰レーー」

【適者生存】テキシヤセイソン 生物の形態・習性等が其の生存する周圍の境遇に適するものはよく生存繁榮し、然らざるものは絕滅する。

【適戍】テキジユ 遠地へゆきて守備する。賈誼、過秦論「ーー之衆、非レ抗二九國之師一也」=讁戍。

【適從】テキジユウ 主としてゆきてしたがふ。左、僖五「狐裘尨茸、一國三公、吾誰ーー」=適歸。

【適切】テキセツ よくあてはまる。=剴切。

【適然】テキゼン ○たまたま。鬼谷子「事有二

ーー」＝偶然。○つれ、あたりまへ。賈誼、治安策「以レ是爲二ーー一耳」＝當然。
【適卒】罪ありて邊境の守備に充てられし兵卒。史、酈食其傳「令三ーー分守二成皋一」＝謫卒。
【適長公主】漢代は天子の長女をいふ、適は嫡に通ず。史、劉敬傳「以二ーーー一妻レ之」（唐代は天子の姑をいふ）
【適適然】大いにおどろく貌。莊、秋水「ーー然驚、規規然自失也」
【適レ適】己の意に適することを適とする。莊、大宗師「是役二人之役一、適二人之適一、而不三自適二其適一者也」
【適任】はまりやく、よく其の任務に適當する。
【適莫】適は專ら一事を主とし熱中する。莫は適の反、背かざるなり。嫌ふ。論、里仁「君子之於二天下一也、無レ適也、無レ莫也、義之與比」
【適法】規定又は法律に適合する。＝合法。
【適評】よくあてはまる批評。
【適用】ほどよくあてはめてもちふる。晉書、職官志「或隨レ時ーー、或因レ務遷革」＝應用。
【適欲】よくをひかへめに程よくする。呂覽「聖人必先ーレー」
【適齡】圖或る規定の年齡にあてはまる「徴兵ーー」
【適往】其の德をしたひてゆき從ふ。呂覽「帝也者天下之適也、王也者天下之往也」

【遬】ソク 沃

○とし、はやし（疾）「剽ー」＝速。○ちぢまる、せまる。＝促。○僕ーは才の凡庸にして短小なる貌。漢書、息夫躬傳「僕ー不レ足レ數」

【遲】㊀チ ㊁チ 支 寘

㊀おそし。速の對。○ゆるやか（緩）「舒ー」徐行する。鈍二し「ー鈍」「ー重」○しづか（靜）○おくる（晩）おそくなる。禮記「來何ー也」○ひさし（久）○棲ーは安らかに息ふ。○委ーは廻りて遠き貌。○陵ーは丘陵の漸くにひくくなる貌。轉じて事の漸く衰ふる貌にいふ。㊁まつ（待）「ー明」○すなはち、そこで（乃）史、春申君傳「ー令韓魏歸二帝重于齊一」
同訓異義 マツ 遲・待・俟・竢・徯・須の別は待（六二二頁三段）の條を見よ。
【遲引】ながびく。＝淹延・遷延。
【遲淹】おくれてとどまる。蔡邕文「狐疑ーー、兩州空懸、萬里蕭條、無レ所二管繫一」
【遲疑】ぐづぐづして決せず。疑ひて猶豫する。後漢書「然猶折二意縉紳一、ーー陵替」＝狐疑。
【遲久】おそくながし。又、まつこと久し。陸龜蒙詩「眞君不レ可レ見、焚盥空ーー」
【遲回】ぶらぶらさまよふ。李白詩「金花折二風帽一、白馬小ーー」＝低徊・徘徊。
【遲緩】ゆったりとして迫らず。晉書、謝安傳「性ーー、久而方罷」
【遲刻】定めの時刻におくれる。
【遲日】春の日。日永くして暮るることおそき故。詩、豳風「春日遲遲」
【遲疾】おそきと、はやきと。後漢書、律曆志「月行當レ有二ーー一、不三必在二牽牛東井婁角之閒一」遂史、魏璘傳「上命馳レ馬、較二ーー一、以爲二勝負一」＝遲速。
【遲熟】時候におくれて成熟する。金史、食貨志「地寒稼穡ーー」＝晩熟。
【遲速】おそきと、はやきと。列、楊朱「何遲ー二於其閒一乎」
【遲數】遲速に同じ。王安石、周官新義序「ーー有レ時」
【遲滯】ぐづぐづしてとどこほる。通鑑「後唐莊宗必慮二刑獄ーー一者」
【遲旦】あさはやく、早朝。漢書、南越王傳「ーー城中皆降二伏波一」（伏波は伏波將軍路博德）＝遲明。
【遲遲】○ゆるやかにして迫らざる貌。禮、孔子閒居「威儀ーー」＝舒遲。○徐行する貌。詩、邶風「行レ道ーー」○日の長き貌。詩、豳風「春日ーー」
【遲遲澗畔松】遲き谿邊の松。范質、曉二從子杲一詩「ーーー、鬱鬱含二晩翠一」
【遲鈍】にぶく、おろか。吳志、孫奐傳「吾初憂二其ーー一、今治レ軍、諸將少二能及者一、吾無レ憂矣」＝遲頓。
【遲頓】おそくにぶし。漢書、翟方進傳「號二ーー一不レ及レ事」注「頓、讀曰レ鈍」＝遲鈍。
【遲任】殷の賢人。其の言に曰く「人惟求レ舊、器非レ求レ舊」
【遲莫】だんだんとしよる。莫は暮の古字。屈原、離騷「惟草木之零落兮、恐二美人之ーー一」＝暮年・晩歳。
【遲暮】前條に同じ。陸游詩「年光ーー壯心違」
【遲明】夜の將に明けんとする頃。遲は待。漢書、高帝紀「ーー圍二宛城一三匝」＝黎明・遲旦。
【遲留】とどまる。元好問詩「每レ逢二花下一即ーー」

【遰】㊀テイ ㊁セイ 霽 霽

㊀ゆく（往）○さる（去）○迢ーはるかなる貌。㊁さや（刀鞘）○ゆく。史、賈誼傳「鳳漂漂其高ー」＝逝。

【遯】㊀トン ㊁シュン 願 阮 眞 遁の本字

㊀のがる、にぐ、にげかくれる「嘉ー」「肥ー」○易の卦の名、艮下乾上。㊁あとしさり。＝逡。○めぐる。＝巡。
同訓異義 ノガル 遯・逃・遁等の別は逃（一九四七頁二段）の條を見よ。
【遯逸】世をのがれて安らかに居る。晉書、劉驎之傳「好遊二山澤一、志存二ーー一」
【遯隱】のがれかくれる。柳宗元、始得二西山一宴游記「尺二寸千里一、攢蹙累積、莫レ得二ーー一」
【遯竄】にげかくれる。晉書、皇甫謐傳「上有二勞謙之愛一、下有二不レ名之臣一、朝有二待賢之禮一、野有二ーー之人一」＝逃竄。
【遯心】そむきさる心、背叛の心。禮記「敎レ之以レ政、齊レ之以レ刑、則民有二ーー一」
【遯世】世をのがれ避ける。易、文言「君子以獨立不レ懼、ーレー无レ悶」＝避世。

十二畫

【遺】㊀イ ㊁ズイ ㊂キ 支 支 寘

㊀わする（忘）○すつ（棄・亡失）「ー棄」見棄てる。詩小雅「棄レ予如レー」すたる（廢）○うしなふ（失）漢書、賈誼傳「功不レー矣」○おとす（落）「ー失」おとしたる物。○ぬける（脫）「ー落」○のこす「ー業」「ー產」のこり（餘）あまる「ー愛」禮、樂記「有二ー音一者矣」○とどむ（留）○ておち。史、汲黯傳「拾レー補レ過」（人のおちどをひろひ補ふ）○ゆばり（便旋）漢書、東方朔傳「小二ー殿上一」○ーーはななめにゆく。＝委蛇。㊁おくる（贈・餽）物をつかはす、やる「贈ー」左、隱元「請以ーレ之」㊂したがふ。＝隨。
同訓異義 オクル 遺・送・贈・饋・貽等の別は送（一九四五頁二段）の條を見よ。
【遺愛】○いつくしみをのこす。又、のこしたるいつくしみ。漢書、敍傳「淑人君子、時同功異、沒レ世ーー、民有二餘思一」○古人の仁愛の遺風ある義。仁愛が後世に遺留する。左、昭二十「及二子產卒一、仲尼聞レ之、出レ涕曰、古之ーー也」
【遺愛寺鐘欹レ枕聽】白居易の香爐峯下新卜二山居一、草堂初成、偶題二東壁一詩の中の句。曰く「日高睡足猶慵レ起、小閣重衾不レ怕レ寒、ーーーーーー、香爐峯雪撥レ簾看、云云」
【遺意】前人ののこせる心。蘇軾文「追二述東朝之ーー一」
【遺佚】君に見すてられて用ひられず。孟、公孫丑「ーー而不レ怨、阨窮而不レ憫」＝放棄。
【遺胤】親の死後にのこりし子孫。＝遺兒。
【遺詠】古人のよみおきたるうた。謝朓、哀策文「思二寒泉之罔一レ極兮、託二彤管于ーー一」
【遺捐】すてる。すたる。袁桷詩「詩書往昔成二ーー一」
【不レ拾レ遺】○道路におちたる物を拾ひ取らず。道德が行はれて民に潔白の心あるをいふ。史、孔子世家「男女行者別二于塗一、塗ーーー」○法律が嚴しく民が刑を畏れて人の物をひろひ取らず。史、商君傳「道ーーー、山無二盜賊一」
【如レ拾レ遺】地上におちたる物を拾ひとるが如く至りてたやすし。漢書、梅福傳「高祖取レ楚ーーー」
【遺恩】のこれるめぐみ。後漢書、王昌等傳論「劉氏之ーー餘烈」
【遺戒】後人の爲めにのこされたるいましめ。宋史、李繼和傳「手二錄唐李勣ーー一、授二繼和一」＝遺誡。
【遺誡】後にのこすいましめのことば。後漢書、祭遵傳「臨レ死ーー」＝遺戒・遺訓。
【遺骸】なきがら、死骸。＝遺骨。
【遺行】あやまれるおこなひ。宋玉、答二楚王問一「先生其有二ーー一耶」＝失行。
【遺誥】後にのこしたるいましめ。高允、鹿苑賦「覩二天規于今日一、尋二先哲之ーー一」＝遺誡。
【遺藁】前人ののこせる詩文のしたがき。宋史、歐陽修傳「修得二唐韓愈ーー于廢書簏中一、讀而心慕焉」＝遺稾・遺稿。
【遺憾】のこりをし、殘念。
【遺翰】死後にのこれる書き物。文心雕龍「辭人ーー、莫レ見二五言一」
【遺規】のこれるのり。のこしたるいましめ。張華詩「周任有二ーー一」
【遺棄】わすれすてる。蘇轍文「ー二ー憂患一、超然自得」＝委棄。
【遺卻】わすれる。崔國輔詩「ー二ー珊瑚鞭一、白馬驕不レ行」
【遺矩】前人ののこせるのり。＝遺規。
【遺訓】殘しおける敎訓。阮籍、大人先生傳「誦二周孔ーー一、歎二唐虞之道德一」＝遺誡。
【遺訓可レ秉】前人ののこしおける敎訓は取り用ふべし。沈約文「雖二混成以無一レ迹、寔遺訓之可レ秉」
【遺形】己のからだをわすれる。莊子「故養レ志者ーレー」
【遺計】ておちのはかりごと。後漢

書、桓榮傳「慮無――」＝失計・遺算。
【遺藝】前人ののこしたる文藝。蜀志、郤正傳「綜墳典之流芳、尋孔氏之――」
【遺敎】前人ののこしおけるをしへ。漢書、地理志「河東土地平易、有鹽鐵之饒、本唐堯所居、其民有先王――、君子深思、小人儉陋」＝遺訓。
【遺業】前人ののこしおけるわざ。漢書、鄒陽傳「今天子新據先帝之――、左規山東、右制關中」＝遺緖。
【遺言】○臨終のことば。○前人の殘しおけることば。禮記「古之――與絶筵、猶不能知也」
【遺憲】のこされたるのり。陸機、辨亡論「景皇聿興、虔修――、政無大闕」
【遺骨】なき人のほね。通鑑、陳文帝紀「齊人收永安上黨二王――葬之」＝遺骸。
【遺恨】のこれるうらみ。陸機、文賦「恒――以終篇」朱熹詩「歸來――滿塵襟」＝遺憾。
【遺財】遺產に同じ。
【遺策】○ておちのはかりごと。呂覽、不苟「所言無――」失策・失計。○前人の遺しおきたるはかりごと。賈誼、過秦論「蒙故業、因――」

【遺產】死者の殘し置きたる財產。＝遺財。
【遺算】ておち。吳志、三嗣主傳、注「謀無――、擧不失策、故遂割據山川、跨制荊吳、而與天下爭衡矣」＝失計・遺計・遺策。
【遺山集】書名、四十卷、金の元好問の詩文集。好問才雄にして學贍、最も詩文に長ず、遺山は其の號。
【遺士】世に用ひられずして、民間に隱れ居る學者。元史、董士選傳「諸老儒及西蜀――」
【遺矢】大便をする、矢は屎。史、廉頗傳「一飯三――」
【遺志】前人ののこしおける志。高允、郡國建學表「申祖宗之――、興周禮之絶業」
【遺址】家又は城などののこれるあと。袁皓詩「梵林――在松巖」＝遺趾。
【遺兒】○わすれがたみ。父母に死なれたるこども。＝遺子。○すてご。＝棄兒。
【遺嗣】のこされしあとつぎ。張九齡、東封赦書「――沈淪」
【遺賜】物を賜りたまふ。又、其の物。漢書、外戚傳「妾伏自念、入椒房以來、――外家、未嘗蹈故事」
【遺臭】惡名を後世にのこす。晉書、桓溫傳「既不能流芳後世、不足復――萬載耶」

【遺式】のこれるのり。宋書、孝武帝紀「禮九疑于盛唐、祀蓬萊于渤海、皆前載流訓、列聖――」舊唐書、音樂志「公莫舞、漢世謂之巾舞、舞用巾、以象項伯衣袖之――也」
【遺失】とりおとす。わすする。後漢書、魯丕傳「無使幽遠獨有――」
【遺臣】○先代より仕へたるふるきけらい。＝舊臣。○前朝のけらい、亡國の臣。
【遺燼】もえのこり。溫庭筠詩「丙舍無人――香」＝餘燼。
【遺珠】○拾ひのこされしよき玉（莊、天地）張籍、罔象得玄珠詩「赤水今何處、――已渺然」○未だ人に知られざる賢人又はすぐれたる詩文などに喩ふ。
【遺書】○かきおき。棠陰比事「遂呼族人爲――、悉以財屬女」○亡逸せる書物。漢書、藝文志「使謁者陳農求――於天下」○著して後世にのこしたる書物。大學章句「大學孔氏之――」＝遺著。
【遺緖】先人ののこしおける事業。書、君牙「惟予小子、嗣守文武成康――」＝遺業。
【遺蹤】あとかた。靈一詩「靜林溪路遠、蕭帝有――」
【遺囑】生前にたのみおく。＝遺屬。
【遺世】世の俗事をわすれ棄てる。孫興公、天台山賦「非夫――翫道絶粒、茹芝之者、烏能輕擧而宅之」前赤壁賦「如――獨立、羽化而登仙」
【遺制】○古人ののこせる制作。南史、張譏傳「幼喪母、有錯綵經帕、即母之――、及其所識家人、具以告之、每識時、輒對帕哽噎不能勝」○古よりのこれる制度。白居易、樂府「備威儀、助郊祭、高祖太宗之――」
【遺精】意識せずして精液をもらす病。
【遺詔】崩御の際のみことのり。
【遺迹】のこれる昔のあと。周易正義序「康成之說、――可尋」＝遺跡。
【遺跡】○前條に同じ。王粲詩「先民――、來世之矩」○あとをのこす。
【遺錢】おとしたるぜに。邴原別傳「原嘗行得――」
【遺俗】今日までのこれるならはし。孟、公孫丑「其故家――、流風善政、猶有存者」
【遺俗之累】世人に見すてらるる累。蘇軾、賈誼論「必有――」
【遺族】主人に死なれたる家族。元好問詩「販婦庸兒識名姓、故鄉――見衣冠」
【遺鏃】○失ひしやじり。賈誼、過秦論「秦無亡矢――之費」○のこれるやじり。

【遺存】のこりながらふ。歐、逝賦「顧舊要於――、得什一於千百」
【遺體】父母ののこし置きしからだ、即ち己の身。禮、祭義「曾子曰、身也者、父母之――也」
【遺澤】後にのこれるめぐみ。顏氏家訓「死則遺其澤」＝餘澤。
【遺躅】むかしのあと、躅はあと。蘇軾詩「西嶺訪――」＝遺跡。
【遺脫】ぬけ、おち。＝遺漏・脫漏。
【遺籌】ておち。說苑「萬擧而無――失策」＝遺策・失計。
【遺塵】前人ののこしおける事業。左思、魏都賦「先王之桑梓、列聖之――」
【遺著】著して後世にのこしたる書物。＝遺編。
【遺直】古の直者の遺風ある人。左、昭十四「仲尼曰、叔向古之――也」
【遺傳】祖先又、父母の體質性格の子孫につたはるもの。
【遺毒】のこれる害毒。漢書、董仲舒傳「其――餘烈、至今未滅」
【遺德】前人ののこしおけるとく。諸葛亮、出師表「以光先帝――」
【遺尿】小便をもらす。＝遺溺。
【遺溺】小便をもらす。史、太倉公傳「病見寒氣則――、灸其足蹶陰之脈左右各一所、即不――」＝遺尿。

【遺念】死後に財物を留め置く、俗にいふかたみ。水滸傳「自父親將危之日、存付錠蒜子二十兩、與哥哥爲――」
【遺忘】わすれる。周禮、秋官、司刺「三宥曰――」（宥は罪過をゆるす）＝忘卻。
【遺芳】後世にのこれるほまれ。晉書、后妃傳「后承前訓、奉述――」
【遺髮】かたみとして留めたるかみのけ。
【遺法】のこれるのり。詩經、疏「衞有康叔之化、其――」
【遺謬】前人ののこしたるあやまり。宋書、周朗傳「今魏晉――、猶布于民」
【遺風】○古よりの風化、昔のおもかげ。宋書、謝靈運傳論「――餘烈」＝餘風。○疾き風。王褒、聖主得賢臣頌「追奔雷、逐――」○千里の馬。呂覽、本味「馬之美者、青龍之匹、――之乘」
【遺腹子】父の死後に生れたる子。史、李將軍傳「李當戶有――名陵」注「當戶、李廣長子名」單に遺腹ともいふ。史、趙世家「趙朔妻有遺腹」
【遺物】死者ののこしたる品、かたみ。
【遺憤】前人ののこせるいかり。傅亮文「祖宗――、雪于一旦」

【遺秉】○道におとしたる稻たば。詩、小雅「彼有――、此有滯穗」○轉じて前人の著述等に漏らしたる事柄「荀子――」
【遺弊】むかしよりのこれる弊害。拾遺記「漢興維六國之――」
【遺表】大臣などが死に臨みて君主にかきつけを奉る。又其のかきつけ。宋史、趙普傳「劉嗣卒、――藏普於朝」＝遺疏・遺摺。
【遺編】前人ののこしおける書物。舊唐書、章懷太子傳「往聖――咸窮壺奧」＝遺著。
【遺民】○いきのこれる人民。＝遺黎。○亡國の人民。○前朝の臣民にして義を守り新朝に仕へざる者。
【遺命】死にのぞみ遺言していひつける。
【遺老】○先帝に仕へたる老臣。漢書、劉向傳「蒙漢厚恩、身爲宗室――」○前朝より生きのこれる老人、亡國の舊臣。晉書、徐廣傳「廣收淚而言曰、君爲宋朝佐命、吾乃晉室――」
【遺落】○うちすてる、なげやりにする。十八史略、東漢紀「――世事」○ぬける（脫）武帝內傳「無一字――」＝脫落。
【遺利】取りのこされたる利益。漢書、食貨志「地有――、民有餘力」
【遺留】のこりとどまる。春秋序「舊史遺文」疏「史記已沒、策書――、故曰遺文」
【遺留分】死せし戶主の遺產中、法定の家督相續人、其の他法令に規定せられたる人へ遺留すべきものと定められたる部分。
【遺類】生きのこれるやから。史、高祖紀「襄城無――、皆阬之」
【遺黎】遺民に同じ。
【遺烈】前人ののこしたるいさを。梁肅、梁高士碣「乃刊貞石、以識――」
【遺漏】おとしもらす。＝遺脫。

【遹】㊀イツ ㊁シュツ 質 質
㊀したがふ（循・遵）○のぶ（述）○ここに。發語の助辭。詩、大雅「――駿有聲」○――皇は往來の貌。㊁よこしま（邪僻）正しからず「回――」
【遹追】後を追ひしたふ。

【遻】㊀ゴ ㊁ガク 遇 藥
㊀あふ（遇）偶然に出遇ふ。莊、達生「醉者――物而不慴」㊁おどろく。＝愕。○さかふ（逆）＝啎。○ふる（觸）

【遵】ジュン 眞
○したがふ、したがひよる

【遐】カ　麻　㊀遠くへだたる。「道里遐遠」㊁遠くへだたった所。「遐邇」㊂遠い。「遐齢」㊃何。「遐不」

【遐遠】カエン　遠くへだたる。

【遐齢】カレイ　長寿。

【遐邇】カジ　遠いところと近いところ。遠近。

【遐棄】カキ　遠ざけ捨てる。

【遐想】カソウ　遠くを思いやる。

【遐壽】カジュ　長寿。

【遐舉】カキョ　遠くへ行く。遠くへ去る。

【遐方】カホウ　遠い地方。

【遐年】カネン　長寿。

【遐齢】カレイ　長寿。

【遐路】カロ　遠い道。

【遐福】カフク　大きな幸福。

【遐裔】カエイ　遠い子孫。

【遐陬】カスウ　遠い片田舎。

【遐齢】カレイ　長寿。

【遐】ケン　先　㊀遠い。「遐遠」㊁遠くへだたる。「遐棄」㊂遠くへだたった所。「遐邇」㊃何。「遐不」

【遐遠】ケンエン　遠くへだたる。

【遐齢】ケンレイ　長寿。

【遐邇】ケンジ　遠いところと近いところ。遠近。

【遐棄】ケンキ　遠ざけ捨てる。

【遐想】ケンソウ　遠くを思いやる。

【遐壽】ケンジュ　長寿。

【遐舉】ケンキョ　遠くへ行く。遠くへ去る。

【遐方】ケンホウ　遠い地方。

【遐年】ケンネン　長寿。

【遐齢】ケンレイ　長寿。

【遐路】ケンロ　遠い道。

【遐福】ケンフク　大きな幸福。

【遐裔】ケンエイ　遠い子孫。

【遐陬】ケンスウ　遠い片田舎。

【遐齢】ケンレイ　長寿。

【遐】ゲ　麻　㊀遠い。「遐遠」㊁遠くへだたる。「遐棄」㊂遠くへだたった所。「遐邇」㊃何。「遐不」

【遐遠】ゲエン　遠くへだたる。

【遐齢】ゲレイ　長寿。

【遐邇】ゲジ　遠いところと近いところ。遠近。

【遐棄】ゲキ　遠ざけ捨てる。

【遐想】ゲソウ　遠くを思いやる。

【遐壽】ゲジュ　長寿。

【遐舉】ゲキョ　遠くへ行く。遠くへ去る。

【遐方】ゲホウ　遠い地方。

【遐年】ゲネン　長寿。

【遐齢】ゲレイ　長寿。

【遐路】ゲロ　遠い道。

【遐福】ゲフク　大きな幸福。

【遐裔】ゲエイ　遠い子孫。

【遐陬】ゲスウ　遠い片田舎。

【遐齢】ゲレイ　長寿。

【遐】ヤ　麻　㊀遠い。「遐遠」㊁遠くへだたる。「遐棄」㊂遠くへだたった所。「遐邇」㊃何。「遐不」

【遐遠】ヤエン　遠くへだたる。

【遐齢】ヤレイ　長寿。

【遐邇】ヤジ　遠いところと近いところ。遠近。

【遐棄】ヤキ　遠ざけ捨てる。

【遐想】ヤソウ　遠くを思いやる。

【遐壽】ヤジュ　長寿。

【遐舉】ヤキョ　遠くへ行く。遠くへ去る。

【遐方】ヤホウ　遠い地方。

【遐年】ヤネン　長寿。

【遐齢】ヤレイ　長寿。

【遐路】ヤロ　遠い道。

【遐福】ヤフク　大きな幸福。

【遐裔】ヤエイ　遠い子孫。

【遐陬】ヤスウ　遠い片田舎。

【遐齢】ヤレイ　長寿。

【遐】カ　麻　㊀遠い。「遐遠」㊁遠くへだたる。「遐棄」㊂遠くへだたった所。「遐邇」㊃何。「遐不」

【遐遠】カエン　遠くへだたる。

【遐齢】カレイ　長寿。

【遐邇】カジ　遠いところと近いところ。遠近。

【遐棄】カキ　遠ざけ捨てる。

【遐想】カソウ　遠くを思いやる。

【遐壽】カジュ　長寿。

【遐舉】カキョ　遠くへ行く。遠くへ去る。

【遐方】カホウ　遠い地方。

【遐年】カネン　長寿。

【遐齢】カレイ　長寿。

【遐路】カロ　遠い道。

【遐福】カフク　大きな幸福。

【遐裔】カエイ　遠い子孫。

【遐陬】カスウ　遠い片田舎。

【遐齢】カレイ　長寿。

【遐】ケン　先　㊀遠い。「遐遠」㊁遠くへだたる。「遐棄」㊂遠くへだたった所。「遐邇」㊃何。「遐不」

【遐遠】ケンエン　遠くへだたる。

【遐齢】ケンレイ　長寿。

【遐邇】ケンジ　遠いところと近いところ。遠近。

【遐棄】ケンキ　遠ざけ捨てる。

【遐想】ケンソウ　遠くを思いやる。

【遐壽】ケンジュ　長寿。

【遐舉】ケンキョ　遠くへ行く。遠くへ去る。

【遐方】ケンホウ　遠い地方。

【遐年】ケンネン　長寿。

【遐齢】ケンレイ　長寿。

【遐路】ケンロ　遠い道。

【遐福】ケンフク　大きな幸福。

【遐裔】ケンエイ　遠い子孫。

【遐陬】ケンスウ　遠い片田舎。

【遐齢】ケンレイ　長寿。

【遐】ゲ　麻　㊀遠い。「遐遠」㊁遠くへだたる。「遐棄」㊂遠くへだたった所。「遐邇」㊃何。「遐不」

【遐遠】ゲエン　遠くへだたる。

【遐齢】ゲレイ　長寿。

【遐邇】ゲジ　遠いところと近いところ。遠近。

【遐棄】ゲキ　遠ざけ捨てる。

【遐想】ゲソウ　遠くを思いやる。

【遐壽】ゲジュ　長寿。

【遐舉】ゲキョ　遠くへ行く。遠くへ去る。

【遐方】ゲホウ　遠い地方。

【遐年】ゲネン　長寿。

【遐齢】ゲレイ　長寿。

【遐路】ゲロ　遠い道。

【遐福】ゲフク　大きな幸福。

【遐裔】ゲエイ　遠い子孫。

【遐陬】ゲスウ　遠い片田舎。

【遐齢】ゲレイ　長寿。

【遐】ヤ　麻　㊀遠い。「遐遠」㊁遠くへだたる。「遐棄」㊂遠くへだたった所。「遐邇」㊃何。「遐不」

【遐遠】ヤエン　遠くへだたる。

【遐齢】ヤレイ　長寿。

【遐邇】ヤジ　遠いところと近いところ。遠近。

【遐棄】ヤキ　遠ざけ捨てる。

【遐想】ヤソウ　遠くを思いやる。

【遐壽】ヤジュ　長寿。

【遐舉】ヤキョ　遠くへ行く。遠くへ去る。

【遐方】ヤホウ　遠い地方。

【遐年】ヤネン　長寿。

【遐齢】ヤレイ　長寿。

【遐路】ヤロ　遠い道。

【遐福】ヤフク　大きな幸福。

【遐裔】ヤエイ　遠い子孫。

【遐陬】ヤスウ　遠い片田舎。

【遐齢】ヤレイ　長寿。

に至り、西天山に及び、内外蒙古を包み直隷山西の北境に及ぶ。九帝二百十年にして金に滅ぼさる。

【遼遙】とほくはるか。阮籍賦「釋二—之闊度一兮」＝遼遠。

【遼遠】はるかにとほし。左傳「楚師—、糧食將レ盡」＝遼遙・迢遠。

【遼隔】はるかにへだたる。潘岳賦「眷二故郷之—一」

【遼曠】はるかにひろし。張均詩「水國何—」＝遼廓。

【遼廓】遠くひろびろとする。淮南子「通二性於—一」＝曠遠・遼落。

【遼闊】はるかにへだたる。李商隱詩「天池—誰相待、日日虚乘九萬風」

【遼迥】はるかにとほし。西征賦「人度量之乖戻、何相越之—」王禹偁詩「吹簫事—仙迹難二尋求一」＝迥遼・遐迥。

【遼史】百十六卷、元の托克托等撰す。考證すべき史料乏しかりし爲めに、疎略多しと爲す。

【遼豕】遼東豕を見よ。

【遼東】郡名、秦代に置く、今の奉天の東南境、遼河の東に在り、故に名づく。渤海・黄海の間に斗出す。今—半島と稱す。

【遼東豕】人自ら其の功に誇るも、他人より之を見れば、異とするに足らざる喩。後漢書、朱浮傳「朱浮賁二彭寵一書曰、伯通自伐以爲功高二天下一、往時遼東有レ豕、生レ子白頭、異而獻レ之、行至二河東一、見二羣豕皆白一、懷レ慙還、若以二子之功一、論二於朝廷一、則爲二——一也」（伯通は寵の字）

【遼東鶴】遼東の人丁令威、仙術を修し鶴に化して天に升りしといふ故事。丁令威化レ鶴（二二頁四段）參看。

【遼東帽】漢末、魏の管寧が清節を守りて遼東に隱居し、常に皁帽を著けたりし故事（魏志、管寧傳）文天祥、正氣歌「或爲二——一、清操厲二冰雪一」

【遼哉】はるかなるを嘆ずることば。蘇軾詩「—千載後、發二我一笑粲一」

【遼邈】はるかに遠し。陸游詩「山川—敝衣裘」

【遼來遼來】小兒の啼を止むるにいふ、れろれろ。魏志、張遼傳「遼武力過レ人、數有二戰功一、累二轉前將軍一、舊注曰、江東小兒啼、怖レ之曰二遼來遼來、無二不レ止者一」

【遼落】遼廓に同じ。世說「江山—、居然有二萬里之勢一」

【遼遼】はるかに遠き貌。劉向、九歎「山修遠其—兮」

十三畫

【邀】エウ 蕭

○むかふ。○まちまうける、遮ぎへる「—擊」徼・要に通ず。○まねく（招）「招—」李白詩「擧レ杯—二明月一」○もとむ（求）明に求め受ける「—恩」「—賞」

同訓異義 邀・向・迎・迓・逆 の別は向（三〇六頁四段）の條を見よ。○邀・求・干・需・要等の別は求（一〇四五頁四段）の條を見よ。

【邀迓】招きむかへる。韓愈詩「官租日輪納、村酒時—」

【邀勳】功をたてんとむかへ求める。王維詩「單車曾出レ塞、報國敢—レ—」

【邀擊】むかへうつ。＝要擊。

【邀斫】まちうけしてきる。唐書、李石傳「將レ朝、騎至二親仁里一、狙盜發射、石傷馬逸、盜—二—之坊門一」絕二馬尾一、乃得レ脫」

【邀招】むかへまねく。＝招邀。

【邀討】敵兵をむかへうつ。魏志、劉放傳「欲レ—二—之一」＝邀擊。

【邂】カイ 卦 蟹

—逅は思ひがけなくめぐり合ふ、期せずして出遇ふ。

【邂逅】期せずしてめぐりあふ。詩、鄭風「有二美一人一、清揚婉兮、—相遇、適二我願一兮」

【遽】キョ 御

○にはかに（卒）あわてる、うろたへる。左、僖二四「公—見レ之」○すみやか（急・疾）いそがし。○おそれをののく（戰慄）左、襄三一「豈不二—止一」○くるしむ（窘）○しゅくつぎ（驛遞）しゅくばの人夫。又、其の車馬。左、僖三三「且使二—告二于鄭一」

同訓異義 遽・忙・閙・怱・急の別は忙（六三九頁一段）の條を見よ。○遽・俄・驟・暴・頓・卒・猝○遽は速かなる意、あわていそぐこと、疾言遽色と用ふ。唐鑑「遽使レ殺レ之」○俄は須臾也と註し、俄頃と連用す、まもなくなり、唐高宗紀に「上在二萬年宮一、夜大水、上遽出乘レ高、俄而水入二寢殿一」とあるにて、遽・俄二字の別明かなり。○驟は物の急に來るなり、驟雨と熟す。○玉篇「無レ所二涵養一、驟膺二拔擢一」○暴は猝也、急也、驟也と註す、物の思ひがけなく、突然急に來るなり、人の頓死を、暴死といふ。史記「風雨暴至」○頓は漸の反にて、次第なくすみやかなるなり、暴に近し。歐文「舊茶稅盡、新茶不レ登、則頓斷二國用一」○卒・猝の二字、同じ、卒爾なり、急遽の意、暴・頓二字に近し、倉

卒と熟す。卒起二不意一また其弊未レ可二猝除一の如し。

【遽人】○しゅくばの人夫。國語「——來告」＝驛卒。○命を傳ふる使者。列子「使二——謁一レ之」

【遽色】あわてたるかほいろ。後漢書、劉寬傳「雖レ在二倉卒一、未二嘗疾言——一」

【遽步】いそぎてあゆむ。唐書、婁師德傳「師德、素豐碩不レ能二——一」

【還】㊀クヮン・ゲン ㊁セン 刪 先

㊀かへる（歸）もどる、往きて復もとへ回る「生—」「往—」「凱—」かへす（復）○しりぞく（退）○かへりみる（顧）ふりかへる。左、昭二十「無所二—忌一」○つぐなふ（償）持主にかへしやる「償—」「賠—」「返—」○かへりて（卻）それに反して。○めぐる（遶）めぐらす。漢書、食貨志「—廬樹レ桑」＝環。㊁すみやか（速）擧動が便捷なる貌。詩、齊風「子之—兮」○すなはち（即）○めぐる、めぐらす。＝旋。○また（又）多く詩に用ふ。後漢書、公孫淵傳「盡忠竭節、—被二患禍一」○ふたたび。○め魏徵詩「中原—逐レ鹿」

同訓異義 還・歸・反・返・復・回・旋の別は歸（一〇一六頁二段）の條を見よ。○還・又・復・亦・有・也の別は又（二九〇頁三段）の條を見よ。

【還雲】俗人の答書をいふ。唐の韋陟の故事に本づく。五雲（八〇頁二段）參看。

【還幸】天子が行幸先よりおかへりになる。＝還御。

【還翰】へんじの手紙。梁書、何胤傳「矯二首——一、慰二其引レ領一」＝答書。

【還忌】かへりみていみはばかる。左、昭二十「肆行非レ度、無レ所二——一」注「還猶レ顧也」＝顧忌。

【還鄉】ふるさとにかへる。南史、劉之遴傳「令三卿衣レ錦—レ—、盡二榮養之理一」＝歸鄉。

【還御】還幸に同じ。

【還啓】皇太后・皇后・皇太子などの行啓先よりおかへりになる。

【還元】○もとへもどす。もとへもどる。○酸素をふくむ化合物より酸素の總量又は其の幾分を去る。

【還魂】死者がよみがへる。泊宅編「開封解榜出、廖復被レ黜、訴二有司不一レ公、重考取二已落者七十餘人一、時號二——秀才一」

【還魂紙】すきがへしの紙。天工開物「隨レ手拾取再造、名曰二——一」

【還軫】車をかへす、軫は車後の横木。國語「—二諸侯一可レ謂二窮困一」＝回車。

【還車】もどり車。酉陽雜俎「因二——一致二副書一」

【還直】あたひをつぐなひはらふ。後漢書「買二入田一、不レ肯レ—レ—」

【還附】品物を其の持主にかへす。

【還曆】國六十一歲。干支が再びもとにかへる義。＝華甲。

【還路】かへりみち。謝靈運文「長二園咸陽一、——已絕」＝歸路。

【還俗】僧尼が元の俗人にかへる。宋書、徐湛之傳「世祖命使レ—レ—」

【還踵】かかとをめぐらす、旋踵に同じ。極めて速かなるに喩ふ。漢書「雖レ有二張國勁兵一、不レ得レ—レ—」而身爲レ食」

【還風】旋風に同じ。易稽覽圖「——者、善令レ還也」注「還、暴也」

【邅】㊀テン ㊁テン 先 霰

㊀邅—如はたちもとほる、行きなやみて進まざる貌。㊁おふ（逐）○めぐる（轉）邅はれてさまよふ。劉向、九歎「—彼南道兮」

【邅回】行き難む貌。楚辭「下二江湘一以——」＝邅廻。

【邅如】行き難みて進まざる貌。易、屯卦「屯如——」

【避】ヒ 寘

古、辟に通用す

○さく、よける「—暑」「—亂」「—雷針」「—三舍」孫子「水之形、—高而趨レ下、兵之形、—實而擊レ虛」○にげかくれる（隱遁）そらしてかくれる「遁—」「逃—」史、藺相如傳「望二見廉頗一、引レ車—匿」○ひきかへしよける「廻—」○しりぞく（退）

【避礙】さきはりを、とりのける。揚雄文「水—レ—則通二于海一」

【避寒】さむさをさける。又其の爲めに暖地に移住する。

【避穀】穀食を避けて仙術を修める。鄭侯家傳「既能辟レ穀、每導引、骨節珊然、人謂二鎖子骨一」（辟は避）

【避災】わざはひをさける。國語「廣川之鳥獸、恒習而避二其災一也」

【避秦】秦の苛政を避ける。桃源（九四三頁四段）を見よ。

【避暑】あつさをさける。班固、扇詩「來風堪レ—レ—、靜夜致二清涼一」

【避暑之飲】あつさを避ける爲めのさかもり。初學記「劉松與二袁紹子弟一日共宴飲、常以二三伏際一、晝夜酣飲極醉、以避二一時之暑一、故河朔有二——一」＝河朔飲。

【避暑之會】暑を避けん爲めの

會。開元遺事「長安富豪之子、毎レ至二暑伏中一、各於二林亭一、植二畫柱一、以二錦綺一結爲二涼棚一、設二坐具一、爲二━━一」
【避水】水害をさける。陸游詩「人家━レ━牛危樓」
【避世】世と交ることを欲せずして避け隱れる。易、遯卦、疏「相レ時度レ宜、━レ━而遯」＝辟世（論、微子）
【避匿】さけかくれる。史、藺相如傳「望二見廉頗一、引レ車━━」
【避難】災難を避けて他所に立ち退く。
【避熱】あつさをさける。杜甫詩「━レ━時來歸、問二見所レ爲迹一」
【避謗】そしりをさける。唐書、陸贄傳「贄既放二荒遠一、常閉レ戶、人不レ識二其面一、又━レ━不レ著レ書」
【避病院】傳染病患者を容れる病院。
【避風臺】漢の成帝の築きしうてな。飛燕外傳「飛燕身輕不レ勝レ風、帝爲築二七寶━━━一」飛燕は成帝の皇后趙氏の號、體輕くして歌舞に妙なり。
【避雷】落雷のわざはひをさける。孟奧、西征記「有二白石室一、名二━━臺一」
【避雷針】落雷の災を避ける爲めに屋上に立つる金屬の棒。

【邁】マイ 〔卦〕

○ゆく（往）遠く行く。詩、小雅「我日斯━」○すぐ（過）さる（去）月日がたつ。書、秦誓「日月逾━」○おゆ（老）「老━」○つとめはげむ（勇往力行）書、大禹謨「皐陶━種德」○天子が時を以て巡行する。詩、周頌「時━其邦」○━━は顧みざる貌。詩、小雅「視レ我━━」
【邁進】はげみすすむ。＝勇進・邁往。
【邁逵】すぐれる。晉書、王導傳「惟公━━沖虛」
【邁德】つとめてとくを修める。傅休奕、樂府「二帝━━、宣二茲重光一」
【邁往】はげみ進む。＝邁進。

十四畫

【邇】ジ ニ 〔紙〕 通じて爾に作る

○ちかし。ちかづく（近）「密━」○近き所「遐━」「遠━」中庸「行レ遠必自レ━」＝爾。○卑近にして俗に通じ易し「━言」
同訓異義 邇・近 の別は近（一九三九頁一段）の條を見よ。
【邇言】○俗に通じ易き卑近のことば、淺近の言。中庸「舜好レ問而好レ察二━━一」○書名、十二卷、宋の劉炎撰す、其の言篤實にして事理に切近し、迂僻不情の論なし。
【在レ邇求レ遠】學問の道は之を己の身に本づくべし、故に甚だ近し。而るに人反りて之を外に求む、これ遠きなり。孟、離婁「道在レ邇而求二諸遠一」

【邃】スヰ 〔寘〕

○深く遠し、おくぶかし「幽━」「深━」○學問道理などが精しくして深し。唐書、韋夏卿傳「少━二於學一」
同訓異義 邃・深・浚・濬 の別は深（一一〇二頁二段）の條を見よ。
【邃宇】おくぶかき家屋。宋玉、招魂「高堂━━、檻層軒些」
【邃淵】おくぶかきふち。李洞文「委蛇下沈二━━一」
【邃曉】ふかくさとる。唐書、貴妃楊氏傳「善二歌舞一、━━二音律一」
【邃嚴】おくぶかく、おごそか。宋史、樂志「廟極━━、夜景藻清」
【邃戶】おくぶかき門戶。謝朓文「因二闇寺一以傳請、排二━━一以重深」
【邃古】おほむかし。蔡邕文「仰二━━一、輝二昆後一」＝遂古・太古・遠古。
【邃深】おくぶかし。劉克莊詩「江亭俯二虛曠一、穴窒窮二━━一」＝深邃。
【邃淸】おくぶかくきよし。宋史、樂志「賓坐既興、鳳輿戒行、奏解嚴蹕、歸燕━━」
【邃密】おくぶかくしてくはし、精深細密。朱熹詩「舊學商量加二━━一」
【邃茂】ふかくしてさかんにすぐれる。陸機文「徽量━━、才鑒淸遠」

【邈】バク ミャク 〔覺〕 本、邈に作る

○とほし（遠）はるか（渺）「曠━」「遼━」○かろんず、あなどる。輕視する貌。陸機、謝二平原內史一表「顧━二同列一」註「━、凌也」藐と通ず。○しのぐ（凌）○━━は悶えうれふる貌（爾雅）又、遠き貌。楚辭「神高馳之━━」
【邈矣】遠くへだたる。矣は助字。西征賦「古往今來、━━悠哉」
【邈猗】はるか。蔡邕文「超哉━━、莫レ參二其二一」
【邈乎】○はるかなる貌。司馬相如、封禪文「軒轅之前、遐哉━━、其詳不レ可二得聞一已」○人を疎んずる貌。韓愈、與二陳給事一書「━━其容、若レ不レ察二其愚一也」
【邈志】遠大なるこころざし。唐武后樂章「━━逾殷」

十五畫

【邊】ヘン 〔先〕 邉は誤字 辺は俗字

○ほとり（畔）「岸━」「池━」「道━」「河━」「海━」○かたはら（側）○あたり、そば（近傍）「近━」○くにざかひ（國境）「━境」○ゐなか、かたほとり「━邑」○きし（畔岸）○はて、かぎり、一方面。○衣の緣への飾。○つづく（接）となりあってゐる。漢書、高帝紀「齊━レ楚」○數學にて多角形をとりまく線「等━三角形」
【邊夷】國のはてにゐるえびす。
【邊郵】かたゐなかのしゅくば。耿湋詩「落日━━靜、秋風鼓角喧」
【邊域】くにざかひの地。陸雲文「或生二夷狄一、或在二━━一」
【邊邑】國の片ほとりにあるむら。禮、玉藻「在二其━━一」
【邊裔】くにざかひのはて。隋書、煬帝紀「盜者百餘人、投二之━━一」
【邊役】國のほとりをまもるえだち。後漢書、和帝紀「詔曰、幽・幷・涼州、戶口率少、━━衆劇」
【邊遠】遠き國境の地。陳琳文「恐━━州郡、過聽而給與」
【安レ邊】國境の地を安んじ定める。漢書、趙充國傳「選下擇良吏知二其俗一者上、拊循和輯、此全レ師保レ勝━レ━之策」
【邊戒】國境にて外敵に備へるいましめ。＝邊警。
【邊界】くにざかひ。晉書、殷仲堪傳「必使下━━無レ貪二小利一、強弱不上レ得二相陵一」
【邊海】國のはてに在る海。
【邊涯】かぎり、はて。元好問詩「是時春夏交、紅綠無二━━一」
【邊豪】邊土に居る豪傑。唐書、薛舉傳「好結二納━━一、爲二長雄一」
【邊扞】邊守に同じ。宋書、氐胡傳「不レ顧二孝道一、陳二力━━一、竭レ忠盡レ誠、未レ爲二朝廷所一レ識」
【邊寄】國境を守る委任。宋史、眞宗紀「任二━━一者二人」
【邊騎】○邊境を守備する騎兵。漢書「發二惡少年及━━一」○邊境を犯す敵の騎兵。宋史「靖康元年、詔神臂弓馬黃弩、乃中國長技、宜下多行二教習一、以扞中━━上」
【邊垠】くにざかひ、垠はかぎり。蘇軾詩「蹭蹬阻二風水一、橫斜挂二━━一」＝邊界。
【邊境】くにざかひ。史、文帝紀「漢與二匈奴一結爲二兄弟一、毋レ使レ害二━━一」＝邊竟・邊陲。
【邊疆】くにざかひ。杜甫詩「念我荷レ戈士、窮年守二━━一」＝邊陲。
【邊圉】くにのはて、圉は垂り。魏了翁詩「募レ耕實二━━一」＝邊疆。
【邊和】國境と接する外國との和親。
【邊患】外敵が國境を侵すうれひ。北史、裴矩傳「由レ是數爲二━━一」
【邊關】國境に在る關所。史、汲鄭傳「闌二出財物于━━一」＝塞關。
【邊計】國邊をまもるはかりごと。高適詩「立談有二━━一」＝邊籌。
【邊警】邊境に於ける敵國侵入の警報。陳書、武帝紀「方隅多難、公以二國盜━━一、知レ無レ不レ爲」
【邊徼】邊塞に同じ、徼はとりで。駱賓王詩「海霧籠二━━一、江風遶二戍樓一」
【邊月】邊土を照す月。李白、塞下曲「━━隨二弓影一、胡霜拂二劍花一」
【邊功】國境の地に於けるいさを、えびすを平げたるいさを。唐書、姚崇・宋璟傳贊「崇勸二天子不レ求二━━一、璟不レ肯レ賞二邊臣一」
【邊寇】えびすが國境を侵す。漢書、匈奴傳「爲二━━一」
【邊國】かたほとりのくに。論語義疏「━━之人」
【邊沙】水べりのすな地。何遜詩「天暮遠山靑、潮去━━出」
【邊塞】くにざかひにあるえびすをふせぐとりで。又、夷狄に近きくにざかひの地（史、三王世家）＝邊壘・邊徼。
【邊際】かぎり、はて。孟浩然詩「水國無二━━一、舟行共使レ風」＝際涯。
【邊朔】かたよりたる北方の地。謝靈運詩「季秋━━苦、旅鴈違二霜雪一」＝朔北。
【邊使】邊土より來るつかひ。張籍詩「無レ因レ見二━━一、空待寄二寒衣一」
【邊阪】かたゐなか。柳貫詩「得レ結二數十輩一、參錯置二━━一」＝邊陲。
【邊愁】邊鄙のはてにさすらひ居るうれへ。杜審言詩「遲日園林悲二昔遊一、今春花鳥作二━━一」
【邊臣】國境の夷狄を攻めるけらい。邊功參看。
【邊城】國境に在るしろ。戰國策「衡櫓不レ施、而━━降」＝邊塞。
【邊將】國境をまもる將軍。えびすを征する將軍。後漢書、陳龜傳「家世━━、便二習弓馬一、雄二于北州一」＝邊帥。
【邊障】くにざかひのとりで。唐書、劉昌傳「墾レ田三年、軍有二羨食一、━━安寧」＝邊塞。
【邊守】邊境のまもり。後漢書、龐參傳「昔孝文皇帝、悟二馮唐之言一、而赦二魏尙之罪一、使レ爲二━━一、匈奴不二敢南向一」＝邊戍。
【邊戍】國境のまもり。又、其の人。劉商詩「山川萬里復━━」
【邊垂】くにのはて。左、成十三「芟二夷我農功一、虔二劉我━━一」＝邊陲・邊境。
【邊帥】邊將に同じ。
【邊陲】邊垂に同じ。薛道衡詩「威略振二━━一」＝邊疆・邊阪。
【邊燧】國境にて非常をしらせるのろし。魏書、肅宗紀「虔貫離レ違、

――靜息」＝邊警。
【邊地】かたゐなか。王融詩「寸心無遠近、――有風霜」＝邊土・邊境・邊陲。
【邊謀】邊境に關するはかりごと。劉克莊詩「郎君今復贊――」＝邊計。
【邊鎭】くにざかひのまもり。張說詩「――戍歌連夜動」
【邊土】かたゐなか。高適詩「山川蕭條極――」＝邊地・邊陬。
【無邊】はてなし、限りなく廣し。起世經「一切諸天、行時來去、――無礙、無有遲疾」
【邊防】國境のまもり。唐書、兵志「兵之戍邊者、大曰軍、小曰守捉、曰城曰鎭、而總之者曰道、此自武德至天寶以前、――之制」＝邊守。
【邊備】くにざかひのそなへ。＝邊守・邊防。
【邊鄙】かたゐなか。左、襄四「――不聳」＝邊邑。
【邊幅】布帛のへり。轉じて、外貌の義。後漢書、馬援傳「反修飾――、如偶人形」
【邊民】邊境に居るたみ。後漢書、鄧訓傳「撫接――、爲幽部所歸」
【邊壘】くにざかひにあるとりで。舊唐書、宣宗紀「左衽輸款、――連降」＝邊塞。

十五畫

【邌】レイ　齊
○おそし（徐）○徐行する貌。
○國ねる、徐行する「―物」

【邋】レフ　ロフ　葉
○くじく（擠）○ゆく（邁）○――は旌旗の動く貌。

十六畫

【邍】邍（辵部十四畫）の本字。

十九畫

【邏】ラ　箇　歌
○めぐる、みまはる（巡）巡察する「巡―」○みまはり（游偵・巡査）「警―」「游―」「偵―」「候―」○とりまく（環繞）山などが取りかこむ。
【邏騎】みはりをする騎兵。史、匈奴傳「候騎至雍甘泉」注「候騎、――」
【邏子】みまはりする兵。唐書、康承訓傳「遣――、贏服覘賊」＝邏卒・巡兵。
【邏卒】○みまはりの兵卒。唐書、溫庭筠傳「醉爲――、擊折其齒」○國巡査の舊稱。

【邐】リ　紙
つづく、めぐる、つらなる（連延）「迤―」
【邐迤】つらなる貌。許有壬詩「遠山來――、贏馬去逶迤」＝邐迤。
【邐倚】道路の高下曲直相開る貌。班固、西京賦「邐道――以正東」

邑部（阝）

【邑】㊀イフ・オフ　緝　㊁アフ　合
㊀むら、おほむら、多人數の聚り會ふ里「城―」「村―」○ちぎやうしよ（大夫の采地）「家―」「封―」「食―」「采―」○みやこ（都會）都は大、―は小。史、五帝紀「舜一年而所居成聚、二年成―、三年成都」○くに（國）古、王畿、卽ち天子直轄の畿內の地の稱「商―」又、侯國の稱。今は縣の稱。○――はうれふ。＝悒悒。又、微弱なる貌。○於―は氣逆ひ結ぼれて下らざる貌。楚辭、九章「氣於―而不可止」又、短氣の貌。㊁阿―はおもねる。＝阿諂。○國字の旁となりて阝の形をなす時の稱。阜の阝に對する稱。
【邑邑】○微弱なる貌。劉向、九歎「張絳維以褘褘、風――而蔽之」○うれふる貌。史、淮南王傳「人生一世間、安能――如此」＝悒悒。○多くのむらむら。班固、西都賦「都都相望、――相屬」
【邑閈】○さとのもん。＝閭門・里閈。○轉じてむらざと。唐書、徐申傳「徙治故州、未幾――如初」＝鄉閈。
【邑君】女子の封號。後漢書、董卓傳「其子孫、雖在髫齔、男皆封侯、女爲――」漢書百官公卿表を按ずるに皇太后・皇后・公主食む所を邑といふ、――の稱、蓋し此に本づく。
【邑犬】むらざとにすむいぬ。屈原、懷沙賦「――羣吠兮、吠所怪也」
【邑宰】一邑の事を主るもの。又、知縣の稱。潘岳詩「誰謂――輕、令名終不劭」
【邑子】同じむらの人。史、張耳・陳餘傳「臣之――素知之」＝邑人。
【邑人】○さとのひと。易經「――三百戶」○同じ邑の人。史、司馬相如傳「臣――司馬相如、自言爲此賦」＝邑子。
【邑名勝母、曾子不入】母に勝つは不孝なり、故に勝母といふ名の邑には至孝の聞ある曾子

は入らず。說苑、說叢「――、水名盜泉、孔子不飮、醜其聲也」
【邑長】むらのをさ。＝里正・村甲。
【邑入】知行所卽ち封邑（領地）より入る租稅。封邑の租稅。史、孟嘗君傳「爲孟嘗君收――」
【邑落】むらざと。北史、勿吉國傳「勿吉國、在高句麗北、一曰靺鞨、――各自有長」＝聚落・村落。
【邑里】むらざと。謝朓詩「――向疎蕪、寒流自清泚」
【邑憐】うれへをしむ、邑は悒、憐は悋。荀子「不慕往、不閔來、無――之心」
【邑圍】さとのもん。又、むらざと。周禮「巡邦野之稼、辨穜稑之種、以爲灋、去而懸於――」

三畫

【邛】キョウ　冬
○やむ（病）○つかる（勞）○臨―は縣の名、四川省に在り。史、司馬相如傳「素與臨―令王吉相善」

【邙】バウ　陽
山の名。洛陽（河南省河南府）の北に在りて貴人の墓多し。一に芒に作る。＝北邙山。

【邕】ヨウ　冬
○ふさぐ（塞）漢書、王莽傳「―河水不流」＝壅。○やはらぐ（和）＝雍・雝。○めぐらす。○たまりいけ。○人名。蔡―は後漢の學者。
【邕穆】やはらぐ。晉書、桑虞傳「閨門――」＝雍穆。
【邕邕】やはらぐ貌。嵇康詩「臨鶴奏九韶、雅歌何――」

四畫

【邟】鄍（邑部十畫）に同じ。

【邢】ケイ　青
邢は本字
周公の子孫を封ぜし國の名、今の直隸省―臺縣の地。左、隱五「鄭人―人伐翼」

【邪】㊀ジャ　麻　㊁ヤ　麻　㊂ヨ　魚
㊀よこしま、正しくない（不正）正の對。○いつはり、心がねぢけてゐる（佞）「佞―」易、乾卦「閑―存其誠」○わるもの「姦―」「讒―」○ななめ（斜）ゆがむ「欹―」○四時の氣の人の病を發せしむるもの「風―」「―氣」○妖怪などの害をなすもの「妖―」㊁や・か（疑問辭）史、伯夷傳「怨―非―」耶に通ず。○莫―は古の名劍の名。○汙―は下地田。史、滑稽傳「汙―滿車」○呼韓―は匈奴の王の名。㊂あまり。史、曆書「歸邪於終」＝餘。
同訓異義　か　邪・耶・乎・歟・與の別は乎（六三頁四段）の條を見よ。
【邪惡】よこしまにして惡し。易、乾卦、疏「防閑――、當自存其誠實也」
【邪意】よこしまなる心。漢書、律歷志「作樂者、諧八音蕩滌人之――、全其正性、移風易俗也」後漢書、楊賜傳「從小人之――、順無知之私欲」
【邪淫】○心ねぢけて淫亂なり。新語「以塞――之路」○國十惡の一、人の妻妾に通ずる。＝邪婬。
【邪音】ただしからざる音樂。新論「耳目不傾不邪、則――不入」
【破邪】よこしまなる說をうち破る。唐書、藝文志「法琳――論二卷」高適詩「談空忘外物、持戒破諸邪」
【邪巧】よこしまにたくむ。後漢書、寇恂傳「恂曾孫榮、上書拒讒慝之謗、絕――之言」
【邪氣】正しからざる惡氣。管子「――入內、正色乃衰」
【邪議】よこしまなるはかりごと。正義の反對。漢書、劉向傳「衆小在位、而從――、歙歙相是而背君子」
【邪虐】よこしまにして物をそこなふ。書經「撫民以寬、除其――」
【邪曲】よこしまにしてねぢける。荀子「鄉乎――而不迷、觀乎雜物而不惑」
【邪猾】よこしまにしてわるがしこし。漢書、李尋傳「陽者頗有變改、小貶――、日月精光、時雨氣應、此皇天右漢無已也」＝姦猾。
【邪計】よこしまなるはかりごと。後漢書、虞詡傳「外以勸厲、答其功勤、內以拘致、防其――」
【邪徑】すぐならざるこみち。正しからざる心又行爲に喩ふ。漢書、五行志「成帝時、歌謠曰、――敗良田、讒口亂善人」
【邪語】よこしまにしていつはる。吳筠詩「漢氏方版蕩、羣閹恣――」
【邪見】○よこしまなるかんがへ。阿毗曇論「貪著――」○國人をむごく取り扱ふ。＝邪慳。
【邪辭】邪僻のことば。孟、公孫丑「――知其所離」
【邪哆】よこしま。楊子「遙正道而稽――者有矣」
【邪道】よこしまなるみち。＝邪

路。

【邪智】わるぢゑ。＝奸智・黠智。

【邪諂】よこしまにしてへつらふ。易經、疏「能自正レ心、不レ爲二邪諂一」＝邪佞。

【邪佞】心ねぢけてへつらふ。又、其の者。唐書、李甚傳「疾レ惡如レ讐、不レ容二於衆一、邪佞切齒」

【邪萌】よこしまなる心のきざし。後漢書、孔融傳「非レ所三以杜二塞邪萌一」

【邪薄】よこしまにして徳うすし。柳宗元文「貪冒苟進、邪薄之夫、庶得三少沮二其志一」

【邪法】○邪惡なる法。隋唐嘉話「此邪法也」○正しからざる宗教。＝邪宗。

【邪媚】心ねぢけてへつらふ。＝邪諂。

【邪病】あしきやまひ。述異記「可レ治二邪病一」

【邪辯】よこしまなる辯舌。淨住子「佛言、邪辯難レ捨」

【邪魔】○佛佛道にもとれる妄見を抱き正道の障をなす者を魔物に喩ふ。藥師經「信二世間邪魔外道妖孽之師一」○人のさまたげをする、妨害する。

【邪路】正しからざるみちすぢ。王建詩「貪泉誓不レ飲、邪路誓不レ奔」＝邪道。

【邪枉】よこしまにしてまがる。漢書、東方朔傳「行二邪枉之道一、經二淫辟之路一」＝邪曲。

【邪呼】衆人の聲。南史、曹景宗傳「爲レ人晴レ酒好レ樂、臘月於二宅中一、使三人作二邪呼一逐除一、徧往二人家一乞二酒食一」

【邪許】衆人力を合せて重き物を動かす時のかけ聲、きやりのこゑ。淮南、道應「今夫擧二大木一者、前呼二邪許一、後亦應レ之、此擧レ重勸レ力之歌也」

【邪馬臺】支那人が日本國をいふ稱、やまとの音譯。後漢書、倭國傳「國皆稱レ王、世世傳レ統、其大倭王、居二邪馬臺國一」

【邪揄】からかふ。手を擧げて嘲弄する。後漢書、王霸傳「市人皆大笑、擧レ手邪二揄之一」＝揶揄。

【郇】
村(九一五頁二段)に同じ。

【那】
㊀ダ・ナ 歌 ㊁ダ・ナ 箇 ㊂ダ・ナ

㊀なんぞ、なにごとぞ(何)いかん(奈何)左、宣二「棄レ甲則那」○安き貌。詩、小雅「有レ那其居」○おほし(多)詩、小雅「受レ福不レ那」○刹那は時の極めて短きをいふ。㊁なに、いづれ(何)「那事」○かの、あの、俗語又、詩に用ふ。㊂語勢を助くる爲めに添へる助字。後漢書、韓康傳「公是韓伯休那」

同訓異義 那・何・曷・胡・盍・庸等の別は何(一一八頁四段)の條を見よ。

【那何】いかん。齊己詩「交親那レ喜何」＝奈何。

【那箇】俗かの、あの。

【那事】なにごとぞ。＝何事・底事。

【那時】いづれのとき。＝何時。

【那邊】いづこ。李白詩「君家阿那邊」(阿は助字)＝何邊。

【那羅延】佛梵語のナーラーヤナの音譯、勝力、又堅牢と譯す、印度の神の名、帝釋天の眷屬、惡を排し善を生ずるを以て務となし、力量甚だ大なり「那羅延金剛力」

【那落】佛那落迦の略、苦具、又不可樂と譯す、地獄をいふ。

【那爛陀】佛天竺の寺の名、施無厭の義、釋尊の宿世この地に王となり、衆生を憐み、樂を與へて厭ふことなかりしによりて名つくと〔西域記〕＝那蘭陀。

【那蘭陀】前條を見よ。

【邦】
ハウ ホウ 江

○くに(國)一說、大を邦、小を國といふ。論、衞靈公「顏淵問レ爲レ邦」○天子より賜ひし封土、諸侯の封土。○くにす、封ずる。領地をあたへる。書、蔡仲之命「乃命二諸王一邦二之蔡一」

解字 國なり、邑に从ふ丰の聲、俗に邦に作るは非。

【邦域】くにざかひ。論、季氏「且在二邦域之中一矣、是社稷之臣也」

【邦媛】國中の淑女。詩經「邦之媛也」傳「美女爲レ媛」

【邦家】くに。詩經「有二苾其香一、邦家之光」＝國家。

【邦交】國と國との交際。周禮「凡諸侯之邦交、歲相問也」＝國交。

【邦紀】國家ををさめるのり。宋史、樂志「赫赫英皇、總二提邦紀一」＝國紀。

【邦畿】都にちかき方千里ある地、畿內の地。畿は疆の義。詩、商頌「邦畿千里、惟民所レ止」

【邦禁】くにの禁令。書、周官「司寇掌二邦禁一、詰二姦慝一、刑二暴亂一」＝國禁。

【邦敎】國民の敎育。書經「司徒掌二邦敎一」

【邦彥】一國中にひいでたる士。彥は男子の美稱。詩、鄭風「彼其之子、邦之彥兮」陸機詩「邦彥應レ運興、粲若二春林葩一」

【邦憲】くにのおきて。書經「文武吉甫、萬邦爲レ憲」＝國憲。

【毗二邦憲一】國の憲法律令をたすけ治める〔韓愈、爲二裴相公一讓レ官表〕

【邦國】くに。書、周官「司馬掌二邦政一、統二六師一、平二邦國一」邦は大國、國は小國。

【邦制】國のきまり、國家の制度。

【邦政】くにのまつりごと。書、周官「司馬掌二邦政一、統二六師一、平二邦國一」＝邦治。

【邦俗】國のならはし。＝國俗・國風。

【邦賊】くにを亂すわるもの。周禮、注「邦賊爲二逆亂一者」

【邦盜】國家の寶藏をぬすみ取るぬすびと。周禮「六曰、爲二邦盜一」

【邦治】くにのまつりごと。書、周官「冢宰掌二邦治一、統二百官一、均二四海一」

【邦甸】天子直轄の地。書經「邦甸侯衞、駿奔走執二豆籩一」

【邦典】邦憲に同じ。

【邦土】くに。書、舜典「司空掌二邦土一、居二四民一、時二地利一」

【邦伯】方伯に同じ、州牧をいふ。書經「命二庶殷侯甸男邦伯一」

【邦朋】朋黨を結びて國政のさまたげをする者。周禮「七曰、爲二邦朋一」

【邦本】國家の根本。書經「民惟邦本、本固邦寧」舊唐書、高季輔傳「畿內數州、實惟邦本、地狹人稠、儲蓄未レ多、特宜二優矜一令レ得二休息一、强レ本弱レ枝、自レ古常事」

【邦良】一國中の善良なる士。潘岳文「設レ官建レ輔、妙二選邦良一」

【邦禮】くにの典禮。書經「宗伯掌二邦禮一、治二神人一、和二上下一」

【邠】
ヒン 眞

○周の大王の居りし國の名。孟、梁惠王「大王居レ邠」＝豳。○あや(文)ある貌「邠如」＝彬(六一五頁二段)

五畫

【邯】
㊀カン 寒 ㊁カン 覃

㊀章邯は人名、秦の將。㊁邯鄲は、戰國時代、趙の都、今、直隸大名道に屬す。

【邯鄲之步】燕の國の少年が趙の都の邯鄲に行きてあるきぶりを學びしに、十分に學び得ず、又、己のもとのあるきぶりをも忘れたりといふ故事。妄りに己の本分をすてて、他の行爲に倣ふは、兩ながら失ふに至るに喩ふ。莊、秋水「且子獨不レ聞三夫壽陵餘子之學二行於邯鄲一與、未レ得二國能一、又失二其故行一矣、直匍匐而歸耳」(壽陵は、燕の邑、餘子は、弱齡の人、猶ほ孺子といふがごとし)

【邯鄲之夢】盧生が道士呂翁の枕を借りて假寐せし間に、富貴榮華の夢を見たりし故事。李泌、枕中記「開元十九年道者呂翁于二邯鄲邸舍中一、値二少年盧生一、自歎二其困一、翁操二囊中枕一授レ之曰、枕レ此當レ令二子榮適如一レ意、生于二寐中一娶二清河崔氏女一、擧二進士一登二甲科一(中略)掌二大政一十年、封二趙國公一、三十餘年出二入中外一、崇盛無レ比、欠伸而寤、初主人蒸二黃粱一爲レ饌、時尙未レ熟也、呂翁笑謂曰、人世之事、亦猶レ是矣」＝黃粱夢。

【邱】
キウ 尤

○地名。○をか。丘に通ず。

【邱甲】周代の制にて甸(五百七十六戶)より出すべき軍用の租稅、及人夫を改めて、邱(百四十四戶)より徵取することとしたる稅法。甲は法令〔蘇洵、修二禮書一狀〕

【邱壻】死亡せし女のむこ、邱は丘と同じく空の義〔史、滑稽傳、注〕

【邵】
セウ 嘯

○晉の邑名。○姓。召に通ず、召公を一に邵公に作る。史、白起傳「周邵呂望之功」

【邵長蘅】淸の武進の人、字は子湘、靑門と號す、古文に工にして魏禧・侯方域と名を齊うす、著す所ろ靑門集あり。

【邵雍】宇は堯夫、宋の河南の人、學を爲す堅苦刻厲、寒けれども爐せず、暑けれども扇せず、夜、席に就かざる者數年、北海の李之才、初めて雍を百源に見、授くるに物理性命の學を以てす、是に於て妙悟自得する所ろあり。德氣粹然人に遇ひて貴賤賢愚となく、一に接するに誠を以てす、人の善を言ふを樂みて、未だ嘗て其の惡に及ばず、神宗の熙寧十年卒す、年六十七、元祐中康節と諡す、著す所ろ、皇極經世書・觀物篇・伊川擊壤集等あり雍の學を世に百源學派と稱す。

【邰】
タイ 灰 又、斄に作る

周の先祖后稷の始めて封ぜられし國名。今の陝西省武功縣五丈原の地。詩、大雅「卽有二邰家室一」

【邸】
㊀テイ・タイ 薺 ㊁チ・ヂ 支

㊀やしき(第宅)特に來朝せし諸侯の宿舍。又王侯などの宅「甲邸」「官邸」「列邸」○轉じて諸侯王の稱。元稹文「擇レ材以佐二諸邸一」○いたる(至)抵と通ず。○やどや(逆旅)「旅邸」又、諸侯の來朝せし時の宿舍。○ふる(觸)㊁物のそこ(底)

【邸觀】やしきと、ものみと。漢

詩「王公古ニ上腴、ーー角ニ奇致ニ」

【邸舍】○やしき。宋書、蔡興宗傳「王公妃主多立ニーー」○みせ、市中の商店。禮、王制、注「廛、市レ物ーー」○來朝せし諸侯の客館、やどや〔宋史、黃庠傳〕

【邸鈔】邸報に同じ。

【邸第】○諸侯王の來朝せし時に居るやしき。漢書、燕王劉澤傳「臣觀ニ諸侯王ーー百餘、皆高祖一切功臣」○貴人のやしき。＝邸宅。

【邸宅】やしき。＝邸第・邸舍。

【邸報】京師に在る諸侯王のひかへやしきより、詔令章奏等を傳抄して諸藩に報知するもの。全唐詩話「韓翃家居、一日有レ人叩レ門賀曰、ーー制誥闕レ人、中書進ニ君名、已除ニ駕部郎中知制誥一矣」＝邸鈔。

【邶】ハイ　隊

地名、周が殷を滅ぼして其の畿內を一・鄘・衛の三に分つ、一は今の河南衞輝府地方。詩、邶風、小序「武王克レ商、分ニ朝歌而北ニ謂ニ之ーー」

【邳】ヒ　支

下ーは張良が黃石公に會せし地の名、今の江蘇省ー縣。

【邲】ヒツ　質

春秋戰國時代、鄭の地名、今の河南省開封府鄭州管城縣、晉・楚交戰の地。左、宣十二「戰ニ于ーー」

【邴】ヘイ　梗　敬

○春秋の鄭の地名。今の山東省費縣。○姓、丙に通ず、漢の丙吉を一に一吉に作る。○ーーはよろこぶ貌、和適の貌。

【邴邴】よろこぶ貌。莊、大宗師「ーー乎其似レ喜乎」

六　畫

【郁】イク　屋

○ーーは文物の盛んなる貌。○ーー・烈・ー馥は香氣の盛んなる貌。○あたたか。燠に通ず「溫ー」

【郁靄】雲の盛んなる貌。王起賦「祥雲爲レ之ーー、佳氣爲レ之蔥蘢」

【郁伊】氣が結ぼれて舒びざる貌。孫楚、笑賦「呻吟ーー」＝鬱伊。

【郁郁】○文物の盛んなる貌。論、八佾「ーー乎文哉」○香氣の盛んなる貌。司馬相如、上林賦「ーー菲菲、衆香發越」

【郁毓】盛多なる貌。左思、蜀都賦「鬱蘭ーー被ニ其阜一」

【郁馥】香氣。王僧孺文「名香ーー、出ニ重擔ニ而經ニ轉」＝馥郁。

【郁文】文物の盛んなる義。郁郁を見よ。

【郁氣】かぐはしき氣。宋史、太廟樂章「元氣陶冶、非レ煙ーー」

【郁李】にはうめ、庭にうらる落葉灌木の一。本草「子小若ニ櫻桃、赤色而味甘酸」＝枎李・唐棣・棠棣。

【郁離子】二卷、明の劉基撰す、儒家類に屬す、基初め元に仕へて志を得ず、官を棄てて青田山中に入り、此の書を著す、離は火なり、文明の象、之を用ふれば其の文郁郁然として盛世文明の治を爲すべしとの意。

【郁烈】香氣はげし。曹植、洛神賦「踐ニ椒塗之ーー」

【郊】カウ　肴

○くるわぞと（郭外）周の制、國都を距る五十里以內を近ー、百里以內を遠ーといふ（周禮、地官、註）○町つづきのゐなか（邑外）「東ー」「春ー」「農ー」○天地の祭の名。古、天子が冬至の日に天を南ーに祀り、夏至に地を北ーに祀りしをいふ。

【郊闉】城郭の門。楊嗣復詩「旌旆出ニーー」

【郊歌】天地の祭をする時のうた。隋書「各揚ニ闕樂、自造ニーー」

【郊寒島瘦】唐の孟郊の詩は枯瘦なり。賈島の詩は寒乞の相あり、元輕白俗（一七八頁一段）を見よ。

【郊圻】邑の境界。書經「申ニ畫ーー、愼ニ固封守」王安石詩「約レ君聯騎訪ニーー」

【郊犧】天地の祭に供へる純色のいけにへ。裴振文「彼雞何知、方論ニ其肥、乃自斷ニ於ーー」

【郊丘】郊壇に同じ。通典「黃帝封ニ禪天地、則ーー之始矣」

【郊墟】野や、をか。墟は大丘、ゐなかの義。韓愈詩「時秋積雨霽、新涼入ニーー」

【郊外】町はづれのゐなか。詩經、傳「邑外曰レ郊、ーー曰レ野」＝郊野。

【郊坰】まちはづれの地、坰は林の外、郊外。杜牧詩「松筠侵ニ巷陌、禾黍接ニーー」

【郊迎】まちはづれまで出てむかへる。戰國策「淸レ宮除レ道、張レ樂設レ飲、ーー三十里」

【郊原】のはら、郊野平原。祖詠詩「愜レ意在ニーー」

【郊柴】郊にてしばを燒きて天を祭る。秦觀詩「風馬雲車下ニ九天、ーー初告帝心虔」

【郊祭】天地の祭。詩經、箋「成王以ニ周公功大、命レ魯ーニー天、亦配レ之以ニ君祖后稷」＝郊祀。

【郊祀】○天子が郊外にて行ふ天地の祭。○郊外にてまつる。孝經「昔者周公、ーニ后稷ニ以配レ天」

【郊祀歌】漢の武帝、郊祀の禮を定め、乃ち樂府を立て、李延年を以て協律郞と爲し、十九章の歌を作る〔漢書、禮樂志〕

【郊畛】まちはづれのむら、畛は田のあぜ。孫逖詩「萬井布ニーー」

【郊社】天地のまつり。中庸「ーー之禮、所ニ以事ニ上帝ー也」

【郊赦】天子が南郊にて天を祭る時に、罪人をゆるすをいふ〔宋史、趙普傳〕

【郊野】ゐなかに在るしもやしき。唐書、崔玄暐傳「貧寓ニーー」

【郊遂】まちはづれの地（國外ハミヤコノソト）を郊といひ、郊外を遂といふ）西京賦「便旋ニ閭閻、周觀ニーー」

【郊餞】まちはづれまでみおくる。顏延之詩「ーー有レ壇、君擧有レ理」

【郊送】まちはづれまでみおくる。呂覽「淳于髡過レ薛、孟嘗君令ニ人禮貌、而親ーニー之」＝郊餞。

【郊壇】天子が町はづれの地にて天を祭るには。程敏政詩「一聲淸蹕下ニーー」＝郊丘。

【郊禘】郊は天子がくるわの外なる野べにて天地を祭る、禘は祖先の大まつり。禮、禮運「魯之ーー非レ禮也、周公其衰矣」

【郊兆】郊にて天を祭る所。漢書、翼奉傳「漢家ーー寢廟祭祀之禮、多不レ應レ古」

【郊甸】都に近きゐなか。潘岳詩「登レ城望ニーー」

【郊畋】郊外にてかりする。張說詩「ーー閱ニ邦政一」

【郊陌】ゐなかのみち。孟郊詩「ー絕ニ行人、原隰多ニ飛蓬一」

【郊保】郊外の小城。左、襄八「焚ニ我ーー、馮ニ陵我城郭一」

【郊牧】城下を離れたる地。爾雅「邑外謂ニ之郊、郊外謂ニ之牧」

【郊野】まちはづれののべ。宋書、樂志「麒麟步ニーー、黃龍游ニ津梁一」

【郊勞】まちはづれまで出てて客をねぎらふ。禮、聘義「君使ニ士迎ニ于竟、大夫ーー」

【郊燎】野原にたき火して天をまつる禮。晉書、慕容垂載記「具ニ典儀、修ニーー之禮一」

【郃】カフ　合

ー陽は縣名。陝西省同州府に屬す。

【邽】ケイ　齊

漢の縣名。上ーは今の甘肅省天水縣の地。下ーは今の陝西省渭南縣の地。

【邢】

邢（邑部四畫）の本字。

【郄】ケイ　キャク　陌

郤（邑部七畫）に同じ。又隙（二一一九頁四段）に同じ。史、張釋之傳「雖レ錮ニ南山、猶有レ一」漢書にはーを隙に作る。

【郈】コウ　有

春秋戰國時代、魯の邑名。今の山東省東平縣の地。

【郅】シツ　チツ　質

○のぼる（登）○いたる（至）○盛んなり「ー隆」○姓、ー都は漢の景帝の時、濟南の太守たり、後、中尉に遷る、其の治、嚴酷を尙び、貴戚を避けず、列侯宗室、目を側てて視る、號して蒼鷹と曰ふ〔史、酷吏傳〕

【郅治】至りてをさまる。盛世をーーーー之世といふ。＝至治。

【郇】シュン　眞

戰國の時、晉の地名、今の山西省猗氏縣。

【郇公廚】次條を見よ。

【郇廚】佳肴美味多きにいふ。世說補「唐韋陟、封ニ郇公、性奸ニ奢靡、廚中飲食、香味錯雜、人入ニ其中、多飽飫而歸、時人語曰、人欲ニ不レ飯筋骨舒、夤緣須レ入ニ郇公廚ー」（此故事によりて人の宴飲を謝するを飽ニ飫ーーーといふ）

【邾】チュ　虞

戰國時代の國名、後、鄒と改む、今の山東省鄒縣の東。

七　畫

【郢】エイ　敬

春秋時代、楚の都、淫風の盛んなりし地、今の湖北省江陵縣の西北。

【郢曲】○俗曲、つまらぬはやりうた。宋玉、對ニ楚王問「客有ニ歌ニ於郢中ー者ー、其始曰ニ下里巴人、國中屬而和者數千人」＝郢聲。○圖今樣歌の類。

【郢人】俗曲を巧にうたふ者。前條を見よ。夢溪筆談「世稱ニ善歌者、皆爲ニーー」＝郢客。

【郢書燕說】道理に合はざることを道理らしくいふ、牽强附會の說。郢人が燕の相國に書を贈らんとて、夜、書を裁せし時、燭光明かならざる故、侍者に燭を擧げよといひ、遂に誤りて文中に擧燭の二

字を記入し其のまゝ贈りぬ、燕の相、書を受けて擧燭は明を尙ぶ義なりとて、王に白して賢人を擧げて之に任じ、國以て治りしといふ〔韓非、外儲說〕

【郢正】次條に同じ。

【郢政】次條を見よ、政は正。

【郢斲】人に詩文の添削を乞ふにいふ。莊、徐無鬼「郢人堊ニ漫其鼻端ノ若ニ蠅翼ノ使ニ匠石斲レ之、匠石運レ斤成レ風、聽而斲レ之、盡レ堊而鼻不レ傷、郢人立不レ失レ容」＝郢斤・郢斧・郢政。

【郢斧】前條を見よ。

【郜】カウ・コウ 國號 沃

春秋時代の國名。周の文王の子の封地。又、宋の邑名、共に山東省城武縣の境に在り。

【郝】㊀カク ㊁セキ 國藥 陌

㊀漢の鄕名。今の陝西省の鄠・盩厔二縣の間。○姓。｜隆は晉の畸人。｜經は元の學者。｜敬は明の學者。㊁｜｜はたがやす(耕)〔爾雅〕

【郟】カフ ケフ 洽

｜鄏は周の地名。成王の鼎を定めたる地、今の河南省洛陽縣の西。左、宣三「成王定ニ鼎于｜鄏ニ」

【郡】グン 問

○こほり、周以後宋以前の行政上の區劃。初、｜は縣より小なりしが、秦天下を幷せて三十六｜を置き、以て縣を統べ監するに至りて、郡は縣よりも大となる。○國府縣の下、町村の上に在る行政區劃の稱。

【郡縣制度】諸侯を廢して中央政府にて天下の萬機を統一する制度。秦始皇天下を定め海內を分ちて三十六郡と爲す、是れ――の始と爲す。封建制度の對。

【郡國】漢代の制、郡は天子の直隸の領地。國は諸侯の領地。

【郡國利病書】書名、一百二十卷、淸の顧炎武撰す、本名は天下郡國利病書といふ、各省の利害に就きて之を錄す、天下の形勢沿革、瞭として指掌の如し。

【郡齋】○一郡を治むる官舍「｜｜讀書志」○德川時代の代官役所。

【郡將】一郡の守將、卽ち郡守。漢書、酷吏傳、註「謂ニ郡守一爲ニ｜｜」者、以ニ其兼領ニ武事一也」北史、魚俱羅傳「御史劾下俱羅以ニ｜｜一交中通內臣上」

【郡主】親王の女。明史稾、禮志「皇姊妹曰ニ長公主ノ皇女曰ニ公主ノ親王女曰ニ｜｜ニ」

【郡守】一郡の太守。漢書、百官公卿表「｜｜秦官、掌レ治ニ其郡ノ秩二千石」

【郡丞】郡の太守に副へる官。秩六百石〔漢書、百官志〕

【郡長】郡のかしら、一郡のをさ。

【郡廳】一郡を支配する役所。趙抃詩「落澗通レ池遶ニ｜｜ニ」

【郡王】爵の名、隋に始まる、位、王に次ぐ、唐より淸に至るまで之に因る。

【郤】ゲキ 陌 郤とは別

○あふぐ(仰)○ひま、なかがひ(怨隙)史、項羽紀「令ニ將軍與レ臣有ニ｜」＝隙。○あひだ、すきま(閒隙)「｜地」○骨と肉との閒。莊、養生主「批ニ大｜ニ」○地名、又郄に作る。○姓。｜缺は晉の大夫、冀に耨る、其の妻之に饁す、相敬すること賓の如し。

【郕】セイ 庚

○春秋時代の國名。今の山東省寧陽縣の地〔左、隱五〕○鄭の地名、今の河南省武陟縣の西南〔左、隱十一〕

【郗】チ 支

○周の邑名。今の河南省河內縣の地。○姓。｜慮は漢の御史大夫。

【郛】フ 虞

くるわ(城郭)城外の大いなる郭。左、隱五「邾人鄭人伐ニ宋入ニ其｜ニ」

【郛郭】○城外の大いなるくるわ。隋書「｜｜不レ修」○保障に喩ふ。法言「虐政虐レ世、然後知ニ聖人之爲ニ｜｜ニ也」

【郎】ラウ 陽

○をっと、つま、婦が夫を呼ぶ稱。晉書、列女傳「天壤之閒、乃有ニ王｜ニ」○だんな、婢僕が主人を呼ぶ稱。唐書、宋璟傳「璟曰、君非ニ其家奴ノ何｜之云」○をのこ、をとこ、年少き男子の稱。唐書、房玄齡傳「高孝基曰、僕閱レ人多矣、無ニ如ニ此｜一者上」○女子もまた｜といふ。古詩「不レ知木蘭是女｜」○男子のよび名に添へることば「太｜」「三｜」「十二｜」○やくにん(官曹)「尙書｜」「侍｜」「｜中」○春秋時代魯の地名。今の山東省魚臺縣の地。○郞に通ず「｜臺」

【郎窰】淸の江西巡撫使郞廷佐の製せし瓷器、古に倣ひて酷だ肖たり、頗る得易からず。

【郎君】○わかだんな。通鑑、注「今世俗多呼ニ其主ノ爲ニ郞主ノ又呼ニ其主之子ニ爲ニ｜｜ニ」＝令息。○婦が夫を呼ぶ稱、ぬし。○唐代、新に進士に及第せし者の稱。摭言「辟逢策ニ羸馬ニ赴レ朝、値ニ新進士ノ前導曰、迴ニ避新｜｜ニ」

【郎君子】すがひ(酢貝)からくもがひのふた、皿に酢を盛りて、數箇を其の緣に置けば暫くして沫を吐き、皿の底に集るといふ。＝相思螺。

【郎官】郞中に同じ。後漢書、明帝紀「｜｜上應ニ列宿ノ出宰ニ百里ニ」

【郎子】他人のむすこの敬稱。北史、暴顯傳「幼時、見ニ一沙門ノ指レ之曰、此｜｜好相表、大必爲ニ良將一貴極ニ人臣ノ語終失レ之」＝郞君。

【郎從】國武家のけらい。＝郞等・郞黨。

【郎當】○疲勞の俗語。萎れてぐたぐたとなれる形容。潦倒の轉音。楊億、傀儡詩「鮑老當レ筵笑ニ郭郞ノ笑他舞袖太｜｜、若敎ニ鮑老當レ筵舞ノ轉更｜｜舞袖長」＝頹唐。○一解に衣服の寬大にして身に稱はざる貌。

【郎黨】國武家のけらい。＝郞從。

【郎中】官名、尙書をたすけて政務に參する官、もと尙書郞といふ。唐の武德三年｜｜と改む。

【郎中令】秦代の官名、九卿の一、宮殿の門戶を掌り、諸郞官を統べるもの、漢の武帝、名を光祿勳と改む。

【郎等】國郞從に同じ。

八畫

【郵】イウ 尤

○しゅくば、つぎば(驛)馬傳を置といひ、步傳を｜といふ。孟、公孫丑「速ニ于置｜而傳ニ命」○うまつぎ。ひとつぎ。○政府が營む文書物品運送制度「｜便」「｜送」「｜券」○とがめ。尤と通ず。荀、議兵「罪人不レ｜ニ其上ニ」○すぐれる(最)殿｜は殿最の義。○はたけの中のいへ(田間舍)

【郵驛】しゅくば、うまつぎ。官文書を傳遞する所〔唐六典〕＝郵傳。

【郵還】郵便にてかへす。飛脚にて返す。

【郵館】しゅくばに在るやどや。宋史、王賓傳「公署｜｜」＝寄舍。

【郵券】國郵便切手。＝郵票・印花。

【郵書】郵便にて送る手紙。

【郵政】通信に關する政務。＝郵務。

【郵送】郵便にて物を送る。＝郵致。

【郵置】しゅくば。置は馬傳、郵は步傳。陳傳良詩「絕勝倚レ市看ニ｜｜ニ」＝傳置・驛置・置郵。

【郵亭】しゅくば、はたごや。張祜詩「｜｜下レ馬見ニ殘花ニ」

【郵遞】郵傳に同じ。劉克莊詩「傷レ心｜｜裏、隔レ日捷書來」＝郵驛。

【郵傳】しゅくば、うまつぎば。周權詩「野路無ニ｜｜ノ迢迢第幾程」＝郵遞・驛傳。

【郵筒】郵便の書信を入れる封筒。貫休詩「尺書裁罷寄ニ｜｜ニ」

【郵便】國公私の書信又は物品を傳遞する官營の事務。又其の書信。

【郵吏】しゅくばの小役人。蘇軾詩「奔走煩ニ｜｜ノ安閒愧ニ老僧ニ」

【郭】クヮク 藥

○くるわ(外城)「城｜」「負｜」城外を圍繞せる壁。孟、公孫丑「三里之城、七里之｜」○すべて物のそとがこひ(外圍)「周｜」「輪｜」○國名。＝虢。○姓。｜隗は戰國の時の燕の昭王の功臣。｜子儀は唐玄宗の時の功臣。

【郭熙】宋の河南の人、山水は李成を學び一時に獨步す、年老いて落筆益壯、後ち山水畫論を著し、遠近淺深風雨晦明、四時朝暮を言ひ、橋觀人物山水に至る、分布せざる莫し、畫式と爲すべし〔畫史彙傳〕

【郭巨】二十四孝の一。孝子傳「後漢｜｜、家貧養ニ老母ノ妻生ニ一子ノ三歲、母常減レ食與レ之、巨謂レ妻曰、貧乏不レ能ニ供給ノ共レ汝埋レ子、子可ニ再有ノ母不レ可ニ再得ノ妻不ニ敢違ノ巨遂掘レ坑二尺餘、忽見ニ黃金一釜ニ云云」釜は量名。かまにあらず。

【郭公】○鳩の類。ふふどり。其の聲｜｜と呼ぶが故。王士禎詩「春山處處｜｜啼」注「｜｜鳥名、卽布穀也」○でく。樂府廣題「北齊後主高緯雅好ニ傀儡ノ謂ニ之｜｜ノ時人戲爲ニ｜｜歌ニ」＝傀儡。○國ほととぎす、杜鵑。

【郭索】蟹ががさがさと行く貌。太玄經「蟹之｜｜、用レ心躁也」

【郭塹】城のくるわと、ほりと。水經、注「更增ニ修｜｜ニ」

【郭橐駝】植木屋。橐駝は駱駝、其の人背肉隆起して駱駝に似、種樹を善くするが故。柳宗元に種樹――傳あり。＝橐駝師。

【郭汾陽】唐の中書令郭子儀、安祿山の亂を平げ、功を以て汾陽王に封ぜらる。＝郭令公。

【郰】シウ シュ 尤 又、陬・鄒に作る 通音スウ

魯國の邑名。孔子の出生地、今の山東省曲阜縣內。

【郯】タン 覃

春秋時代の國名。今の山東省ー城縣の地。左、昭十六「ー子來朝」

【郴】チン 侵

州名。湖南省に在り、楚の項羽、義帝を此に擊殺せしむ。〔史、黥布傳〕

【部】㊀ブ ㊁ホウ 一音ベ 麌 有

㊀すぶ(總・統)漢書、地理志「ー二十三州一」○つかさ、とりしまり、行政上の機關、清朝の制、吏・戶・禮・兵・刑・工の六ーに分つ。○やくしょ(署)○わかつ。○わかる(分)「ー署」○かさのろくろ(斗蓋)○こわけ(區分)ぶわけ「ー類」○軍隊のくみ「ー曲」「ー伍」○ぶわけを數ふる數詞「書籍三ー」○星の名。○大いなる杖。＝棓。○百ーは藥草の名、蔓生にして根多く百十相連る、一名野天門冬。㊁ー婁ホウロウは小阜チサキヲカ＝培塿。

【部下】ブカ てした、配下、一部將の下に屬する兵。

【部曲】ブキョク 軍隊の部わけ、曲は部の下の小わけ。漢書、李廣傳「廣行無二ーー行陳一」＝行伍。

【部伍】ブゴ 軍隊の部わけのくみ。部曲行伍。杜甫詩「平沙列二萬幕一、ーー各見レ招」

【部索】ブサク 手分けしてさがす。漢書、許后傳「ーー罪人」

【部將】ブシヤウ 一部隊の長。後漢書、寇恂傳「ーー殺二人於潁川一、恂捕得繫レ獄」

【部首】ブシユ 漢字の字書索引のかしら字。山・木・石・金など。

【部署】ブシヨ てくばり、部分して署置する。史、淮陰侯傳「欲レ襲二呂后太子一、ーー已定」

【部隊】ブタイ 一部分の軍隊。隋書、流求國傳「諸洞各爲二ーー一、不二相救助一」

【部分】ブブン ○ぶわけ。蕭穎士文「指麾ーー、爲二天子扞城一」○全體中の一部。

【部門】ブモン いくつかに分ちし一つの類。

【部落】ブラク むらざと、人家の聚れる所。又、種族のあつまり。又、蠻人のあつまり。史、衞將軍傳、注「匈奴、ーー名」

【部類】ブルヰ ぶわけの種類。

【部勒】ブロク 兵を部わけしてをさめる、勒は治。史、項羽紀「以二兵法一ーー二賓客及子弟一」

【部婁】ホウロウ ブロウ ちひさきをか。左、襄二十四「ーー無二松柏一」＝培塿・附婁。

九畫

【郾】エン 願

漢代の地名。今の河南省ー城縣。

【鄆】ウン 問

春秋の時、魯の邑名。東ーは今の山東省沂水縣の地。西ーは同省ー城縣の地。春秋、成四「冬城ーー」韻會「古兗州之域、魯附庸國、漢爲二東平國一隋置ー州一」

【鄂】ガク 藥

○殷の時の國名。又、春秋時代の楚の邑名。今の湖北省武昌縣の地。○轉じて湖北省を稱してー省といふ。○かぎり(垠・邊際)○おどろく。愕に通ず。漢書、霍光傳「羣臣皆驚ー失色」○外に見はれる貌。詩、小雅「ー不韡韡」○ーーは正直にいひ争ふ。＝諤諤。

【鄂鄂】ガクガク 直言の貌。史、趙世家「諸大夫朝、唯聞二唯唯一、不レ聞二周舍之ーー一」

【鄂州】ガクシウ 漢は江夏郡といひ、隋はーーと曰ふ、唐之に因り、亦江夏郡といふ、江夏等の縣五を領す、今の湖北武昌府。

【鄂廣】ガクロ 國德川時代に、露西亞人をそしる語。

【鄂王墓】ガクワウボ 宋の忠臣岳飛の墓、鄂國王に封ぜられ故。西湖の畔に在り。趙孟頫詩「ーーー上草離離」

【鄄】ケン 先

春秋の時、衞の邑名。今の山東省濮縣の地。

【都】ト ツ 虞

○みやこ、天子の宮城の在る首府「故ー」「舊ー」「帝ー」「京ー」「皇ー」○ちぎゃうしょ。周代の制、諸侯・卿大夫の封邑。○周代行政上の區劃の名、邑よりは大いなるもの。君主の宗廟のあるをーといひ、無きを邑といふ。○みやびやか(雅)うつくし(美)「ー雅」「嫻ー」詩、鄭風「洵美且ー」○さかんなり(盛)○ああ、歎美の聲。書、皐陶謨「皐陶曰ー」○あつまる(聚)○をる(居)其の地位に居る。東方朔、答客難「身ー二卿相之位一」○すぶ(總)曹丕、與二呉質一書「頃撰二遺文一、ー爲二一集一」すべて(大ーとも連用す)

同訓異義 すべ 都・渾・凡・總の別は渾(一一二三頁一段)の條を見よ。

【都肄】トイ 軍隊をねりならはす。都は總檢閲、肄は演習。漢書、霍光傳「出ー二ー郎一」

【都邑】トイフ みやこ。五里を邑とし、十邑を都とす。字解參看。禮記「仲秋之月、可下以築二城郭一建中ーー上」

【都下】トカ みやこのうち。＝都門。

【都雅】トガ みやびやか。北史、韋沖傳「容貌ーー、寛厚得二衆心一」＝嫻美。

【都講】トカウ ○學舍の長、塾頭。後漢書、楊震傳「ーー取レ魚而進」○講師。魏書、祖瑩傳「選爲二ーーー」

【都合】トガフ ○すべて、總計〔隋書、律歷志〕國○ツガフ くりあはせる「ーーをつける」○便宜、勝手。

【都會】トクワイ みやこ。史、貨殖傳「邯鄲亦漳河之閒一ーー也」＝都城。

【都護】トゴ 軍隊を以て一地方を鎭め護るもの。漢代、西域ーーを置きしに始まる。

【都竈】トサウ 食物を炊ぐ大いなるかまど。漢書、五行志「家出レ圂壞二ーー一、銜二其鬴一」

【都察院】トサツヰン 明代の官署の名、官吏の非行を彈劾し、各省を監察する職。漢以來の御史臺に當る〔文獻通考〕

【都市】トシ 衆人の聚り會ふ地、都會。韋莊詩「槐柏蟬聲ーー風」＝都門。

【都試】トシ すべての官吏の成績をしらべる。漢書、蔡義傳「以二九月ーー日一」

【都人士】トジンシ みやこびと。都人の士の行ある者。詩、小雅「彼ーーー、狐裘黃黃」

【都匠】トシヤウ 水を治める官名。管子「左右各一人、使レ爲二ーー水工一」

【都省】トシヤウ 尙書の官。今の總理大臣〔韓愈、復讐狀〕

【都城】トジヤウ ○みやこのしろ。左、隱元「ーー過二百雉一、國之害也」○みやこ。

【都亭】トテイ 郡縣の治所。史、司馬相如傳「往舍二ーー一」

【都點檢】トテンケン 天子を護衛する官の名。略して點檢ともいふ。

【都統】トトウ すべをきめる。又、其の官名。唐以後は主に諸道の兵馬を總ぶる官名とす。

【都督】トトク ○すべただす。晉書、職官志「ーー二中外諸軍事一」○軍の總大將。＝總督。

【都伯】トハク 罪人の首を斬る役〔通鑑、齊紀〕＝倫子。

【都鄙】トヒ みやこと、ゐなかと。左、襄三十「ーー有レ章、上下有レ服」

【都府樓】トフロウ 節度府の樓。我が古の太宰府に相當す。

【都兵】トヘイ 音樂などを掌る兵。隋書、百官志「ーー掌二鼓吹太樂雜戸等事一」

【都門】トモン ○都の入口の門。札樸「ーー者、都中里門也」○みやこ。京師の稱。＝都下。

【都冶】トヤ みやびにして美くし。又其の女。蔡邕、青衣賦「ーー嫵媚、卓櫟多レ姿」

【都養】トヤウ 衆くの學生のまかなひかた。漢書、兒寬傳「貧無二資用一、嘗爲二弟子ーー一」

【都兪吁咈】トユクフツ ○四字皆ああと訓し、都兪は贊成、吁咈は不贊成の意を表す、堯が羣臣と政を議せし時に用ひし語〔書、堯典〕○轉じて君臣相討論する義とす。

【都料匠】トレウシヤウ 大工のかしら、棟梁〔柳宗元、梓人傳〕

【都輦】トレン みやこ。唐書「自二朱泚亂一、ーー數驚」

【都盧】トロ 西域の國名。其の人身輕くして善く高きに緣る。漢書、西域傳「武帝享二四夷之客一、作二巴渝ーー之戲一」

【郿】ビ 支

○地名。今の陝西省ー縣。其の北に董卓の築きしー塢あり。○魯の邑名。今の山東省東平縣の西北。

十畫

【鄖】ウン 文 又、郧に作る

○春秋時代の漢南の國名。今の湖北省安陸縣の地。○同時代の衞の地名。今の江蘇省如皋縣の地。

【鄔】ウ チ 虞

○春秋時代の鄭の地名。今の河南省偃師縣に在り。○同時代の晉の地名。今の山西省介休縣の地。

【鄗】カウ 皓

○春秋時代、晉の地名、後漢の光武帝、此地に即位して高邑と改む、今の直隸省柏鄉縣の地。○周の武王の都邑。鎬に通ず。

【鄉】㊀キャウ・ガウ ㊁キャウ ㊂キャウ・カウ 陽 養 漾

㊀さと。周代の制、行政區劃の

稱、一萬二千五百戸ある地。○ふるさと「同ー」「故ー」「家ー」「衣錦歸ー」客土に對する稱。○むら、むらざと（邑里）○同里の稱。論、鄕黨「ー人儺」○むき（方向）○ところ（場所）㈡ひびき。＝響。○饗（食部十三畫）に通ず。㈢さきに（曩）論、顏淵「ー也吾見夫子」＝曏。○まど（牖）○方位。むかふ。曲禮「請席何ー」＝向・嚮。○兩階の間。

【鄕友】同鄕の友。蘇軾詩「實ニ卻老驅一、爲ニ酒直一、大呼ニーー一作ニ新年一」

【鄕邑】むらざと〔漢書、天文志〕＝鄕里。

【鄕飮酒】周代、鄕學にて三年の業成り、其の德行道藝を考察し、優等者を君に推薦せんとする時、鄕の大夫が主人と爲り送別の宴を開くをいふ〔儀禮、鄕飮酒禮〕

【鄕音】ふるさとのことばづかひ、國なまり。賀知章詩「ーー無レ改鬢毛摧」

【鄕歌】ゐなかのうた。李咸用詩「ーー寂寂荒丘月」

【鄕校】ゐなかの學校。左、襄十一「鄭人游ニ于ーー一、以論ニ執政一」＝鄕黌。

【鄕學】○心を學事にむかふ。漢書、兒寬傳「由レ是ーレーー」＝向學。○鄕里の學校。＝鄕校。

【鄕曲】ざいしょ、ゐなか。史、平準書「豪強之徒、以武ニ斷于ーー一」

【鄕貫】くにもとの戸籍。唐書、選擧志「自レ今一委ニ有司一、以ニーー三代名諱一、送ニ中書門下一」＝原籍。

【鄕關】ふるさと。くにもと。張說詩「相逢皆得意、何處是ーー」

【鄕原】鄕中にて謹愿の人と譽めらるるもの、實は鄕里の俗人の氣に合ふやうにする僞善者。原は愿。論、陽貨「ーー、德之賊也」＝鄕愿。

【鄕賢祠】淸時代、一鄕の名望ある者を死後其の鄕に祭祀する社。

【鄕戶】其の土地の恆產ある民。宋史、蘇軾傳「役レ人必用ニーー一」

【鄕貢進士】唐代、地方長官に推薦せられて進士の科目に及第せし者の稱。唐書、選擧志「唐制取レ士之科、多因ニ隋舊一、然其大要有レ二、由ニ學館一者曰ニ生徒一、由ニ州縣一者曰ニ鄕貢一、皆升ニ于有司一而進ニ退之一」

【鄕國】ふるさと。王勃詩「盛年眇眇辭ニーー一」

【鄕士】○六鄕の獄を掌る官〔周禮、秋官〕○國ゐなかに住みて平生は農を營む武士、はらざむらひ。

【鄕試】科擧の制、三年目に各省に於て行ふ試驗、合格者を擧人と曰ふ、今は廢す。

【鄕愁】ふるさとを思ふかなしみ。岑參詩「孤燈然ニ客夢一、寒杵搗ニーー一」

【鄕信】ふるさとの音信。岑參詩「也知ーー日應レ疎」

【鄕射】周の制、士の能否を試み選ぶに射術を以てす。又其の射儀〔儀禮、鄕射禮〕

【鄕塾】ゐなかの學舍。任昉文「ー無ニ橫議之士一」

【鄕書】ふるさとより來るてがみ。李端詩「月中逢ニ海客一、浪裏得ニーーー」＝鄕信・家書。

【鄕遂】郡の外まはりの畿內の地。周の制、王城を去ること五十里より百里までを鄕（六鄕に分つ）百里以外を遂（六遂に分つ）といふ。三禮義宗「遂人所レ造溝澮者、是ーー之制」

【鄕選】鄕中のえりぬき。魏志、李孝伯傳「功曹之職、雖レ曰ニーー高第一、猶是郡吏耳、北面事レ人、亦何容易」

【鄕薦】鄕里よりの推薦

【鄕先生】致仕して鄕に在る中大夫を太師とし、致仕の士を少師とし、鄕學の敎育に從はしむる者の稱。儀禮、士冠禮「冠者見ニ于鄕大夫ーーー一」

【鄕俗】鄕里の風俗。孟浩然詩「異俗非ニーー一、新年改ニ舊年一」＝鄕風。

【鄕導】みちしるべ。又案內者。孫子「不レ用ニーー一者、不レ能レ得ニ地利一」＝嚮導。

【鄕黨】むらざと。一萬二千五百家を鄕といひ、五百家を黨といふ。孟、公孫丑「朝廷莫レ如レ爵、ーー莫レ如レ齒」齒は年齡。

【鄕土】ふるさと、生地「ーー地理」

【鄕三物】周代、鄕學の敎程。周禮、大司徒「以ニーーー一敎ニ萬民一、一曰、六德、知仁聖義忠和、二曰、六行、孝友睦婣任恤、三曰、六藝、禮樂射御書數」

【鄕先達】同鄕の先輩の貴き人、明代すでに此稱あり〔客座新聞〕

【鄕背】○向ふと、そむくと。劉長卿詩「夕陽山ーー、春草水東西」＝向背。○したがふと、そむくと。＝去就。

【鄕望】鄕里に於ける人望。南史、韋叡傳「ーー宜ニ磬敬一之」

【鄕味】故鄕の食物。元稹詩「ーー尤珍レ蛤」

【鄕民】其のさとの民。後漢書、循吏傳「孟嘗遷ニ合浦太守一、被レ徵當レ還、吏民攀レ車請レ之、嘗既不レ得レ進、乃載ニーー一船一夜遁去」

【鄕夢】ふるさとのことをゆめみるゆめ。劉滄詩「孤燈春盡生ニーー一」

【鄕老】○周の官名。六鄕に三人のーーを置く、周禮の地官の屬。○

鄕中にて年たけたる者。禮記「國君不レ名ニーー世婦一」

【鄕里】○むらざと。後漢書、馬援傳「使ニーー稱ニ善人一足矣」○同鄕の人。世說「許允爲ニ吏部郎一、多用ニーー一」＝鄕人。○夫が妻を稱していふ。南史、張彪傳「我不レ忍レ令ニーー落ニ他處一」＝家里。

【鄕鄰】きんじょとなり。孟、離婁「ーー有ニ鬭者一」＝同里。

【鄕閭】むらざと、閭は里の門。唐書「王恭好篤學、敎ニ授ーー子弟數百人一」＝鄕里。

【鄕往】鄕は嚮、心がむかひゆく、仰慕する義。史、仲尼世家贊「雖レ不レ能レ至、然心ーニーー之一」

【鄕社】國府縣社に次ぐ社格の神社。

【鄒】シウ　シュ　尤　通音 スウ

○春秋の邾國、戰國の時ーと改む。又、騶に作る、今の山東省兗州府。○姓。ー陽は漢の景帝の時の學者。

【鄒嶧】山名。嶧山、又、鄒山ともいふ、山東省鄒縣の東南に在り。＝嶧陽〔書、禹貢〕

【鄒魯】孟子は鄒の人、孔子は魯の人、故に孔孟の異稱。莊、天下「ーーー之士、縉紳先生」

【鄒魯學派】孔孟の說を奉ずる儒學派。前條參看。

【鄒魯遺風】孔孟の遺風。梁書、羊侃傳「見ニ勇者有レ仁、可レ謂ニーーーー一」

【鄒魯大儒】孔孟の學を修むる大學者。漢書、韋賢傳「兼通ニ禮・尙書一、以レ詩敎授、號稱ニーーーー一」

【鄏】ジョク　沃

郟ーは周の邑名。郟（邑部七畫）を見よ。

【鄍】ベイ　ミャウ　靑　通音 メイ

春秋の時、虞の邑名。今の山西省平陸縣の地。

十一畫

【鄢】エン　先　阮

○ー陵は春秋の鄭の地名。晉楚會戰の所。今の河南省開封府ー陵縣の地。○春秋時代の楚の地。今の湖北省宜城縣內。

【鄞】ギン　眞

漢代の縣名。今の浙江省寧波府治。

【鄠】コ　麌

漢代の縣名。今の陝西省西安府に在り。

【鄛】サウ　肴

漢代の鄕名。今の河南省新野縣の地。

【鄣】㈠シャウ　㈡シャウ　陽　漾

㈠春秋時代の莒國の邑名。今の江蘇省贛榆縣の地。㈡ふさぐ、ささへる。＝障。○國境のとりで（邊塞）古、塞上の要險の處に、城を築きて以て障蔽とせしもの。漢書、張湯傳「居ー閒」

【鄚】バク　藥

漢代の縣名。唐、ー州を置く（後、莫州に改む）宋、廢す、故城は今の直隸省任丘縣に在り。

【鄙】ヒ　紙

○ひな、ゐなか、かたほとり（邊邑）「邊ー」左、隱元「大叔命ニ西ー北ー貳ニ於己一」都の對。○いやし（固陋）いやしむ。ゐなかじみて下品。又、いやしきもの。潛夫論「賞ー以招レ賢」○かざりなし（朴野）○公卿大夫の采邑。又、王の子弟の食邑の畿內に在るもの。○周代の行政上の一區劃、五百家ある地の稱。○せまし（狹）○ちひさし（小）○しわし（吝）財に吝嗇なり「ー吝」「食ー」○己の事を謙するにいふ「ー人」「ー見」「ー意」「ー願」

同訓異義 鄙・賤・卑・陋・俚・野・固の別は賤（一八七六頁二段）の條を見よ。

【鄙遠】とほきかたほとりの地。左傳「越國以ニーー一、君知ニ其難一也」

【鄙近】いやしくあさはか。鍾嶸、詩品「使ニ人忘ニ其ーー一、自致ニ遠大一」＝淺近・膚淺。

【鄙愚】いやしくしておろか。＝昧鄙。

【鄙軀】いやしきからだ。列女傳「妾願以ニーー一易ニ父之死一」

【鄙懷】いやしきおもひ。蘇舜欽詩「作レ詩寄ニ諸君一、ーー實所レ望」

【鄙願】いやしきねがひ。己の志願をいふ謙辭。晉書、趙至傳「恢ニ維宇宙一、斯吾之ーー也」

【鄙言】いやしきことば、粗俗の言。世說「太眞終日無ニーー一」

【鄙諺】いやしきことわざ。史、蘇秦傳「ーー曰、寧爲ニ雞口一、無レ爲ニ牛

後一レ＝俗語。

【鄙語】いやしきことば。白居易詩「――不レ可レ棄」＝俚語。

【鄙詐】いやしくして、あざむく。禮記「心中斯須不レ和不レ樂、而――之心入レ之矣」＝貪鄙詐僞。

【鄙事】いやしく、こまかきことがら。瑣細の事。論、子罕「孔子曰、吾少也賤、故多二能――一」

【鄙人】○ゐなかもの。淮南、修務「――有下得二玉璞一者上」＝野人。○いやしき者 自ら謙していふ。戰國魏策「璜――也」

【鄙心】いやしくけちな心。世說「時月不レ見二叔度一、則鄙吝之心、已復生矣」

【鄙儒】いやしき學者。漢書、叔孫通傳「若眞――、不レ知二時變一」＝陋儒・腐儒・俗儒。

【鄙笑】いやしみわらふ。鄙薄して冷笑す。唐書、楊再思傳「披二紫袍一作二高麗舞一、舉動合レ節、滿座――」

【鄙淺】いやしくあさはか。隋書、經籍志「遷卒、以後好事者、亦頗著述、然多――、不レ足二相繼一」＝卑淺・陋淺。

【鄙鈍】いやしくしてにぶし。韓愈文「愈少――、於二時事一都不二通曉一」

【鄙倍】いやしくして理にそむく、倍は背。論、泰伯「出二辭氣一、斯遠二――一矣」

【鄙薄】○いやしくしてあさはか。馬融文「淺陋――、不レ足二觀省一」＝鄙陋。○いやしみかろんず。鍾嶸、詩品「一二―俗製一」＝輕視。

【鄙夫】心いやしきをとこ。論、陽貨「――不レ可二與事一レ君也」＝小人。

【鄙野】○ゐなか。戰國策「士生二乎――一、推選則祿焉」○いやし。宋書、王微傳「自怪、――不レ參二風流一」＝野鄙。

【鄙老】老人自ら謙する稱。晉書、王接傳「明府求レ賢與レ能、小無二遺錯一、是以――、思レ默レ所レ知」

【鄙俚】風俗言語などがいやし。又、其のもの。五代史、劉岳傳「鄭餘慶爲二書儀兩卷一、事出二――一、皆當時家人女子、傳習所レ見、轉失二其本一」＝蕪俚・鄙野。

【鄙吝】いやしくけちである。吝は悋。漢書、黃憲傳「時月之閒、不レ見二黃生一、則――之萌、復存二乎心一」

【鄙累】つまらぬわづらい。嵆康詩「遺レ物棄二――一」＝俗累。

【鄙劣】いやしくおとる。白居易文「勉樹二勳名一、勿下以二――一爲上レ念」

【鄙陋】いやし。見識學問などのいやしく劣れる義。漢書、楊惲傳「言二――之愚心一」＝鄙野・陋鄙。

【鄙猥】いやしくみだら、猥褻。

【鄙穢】いやしくけがれる。隋書、王劭傳「劭久在二史官一、既修二齊書一、兼修二隋典一（中略）文辭――、體統繁雜」

【鄜】フ

秦代の地名。秦の文公、一時（畤は止、まつりのには、神靈の依り止まるところ）を作りて白帝を祭りし地。今の陝西省西安府の北。

【鄘】ヨウ

周の國名。武王殷に克ち、朝歌以南を分ちて―と爲し（以北を邶と爲す）管叔をして之を治めしむ。今の河南省汲縣の地。

十二畫

【鄩】ジン

○春秋時代の國の名。○周の邑名。今の河南省鞏縣の地。○斟―は夏の時の國名。今の山東省濰縣の西南。

【鄯】ゼン

―善は西域地方の國名。もと樓蘭と名づく。今の新疆省婼羌縣地方。

【鄲】タン

鄲鄲は地名。邯（邑部五畫）を見よ。

【鄭】テイ　ヂャウ

○春秋時代の國名。今の河南省新鄭縣の地。○隋末、王世充の僭して建てたる國。今の河南省洛陽縣の地。○ていねい、ねんごろ（慇懃）「―重」○姓。―玄は後漢の大儒、字は康成。

【鄭衛桑閒】鄭・衞二國の音樂は淫猥、桑閒は淫靡なる亡國の樂曲。李斯、逐客上書「――、韶虞武象者、異國之樂也」韶虞は、舜の樂、武象は、周の武王の樂。

【鄭音】鄭國の音樂にて淫猥なるもの。禮、樂記「魏文侯曰、敢問溺音何從出也、子夏對曰、――好レ濫淫レ志、衞音趨レ數煩レ志、皆淫二於色一而害二於德一、是以祭祀弗レ用也」疏「鄭衞之音、卽靡靡之樂」＝鄭聲。

【鄭康成】鄭玄を見よ。

【鄭虔三絕】唐の鄭虔、詩書畫の三絕あり（唐書、文藝傳）三絕（一頁三段）參看。

【鄭聲】鄭國の音樂。みだらなる俗曲。論、衞靈公「放二――一、遠二佞人一、――淫、佞人殆」

【鄭成功】明末の人、初の名は

森、父芝龍我が平戸に來り、田川氏を娶りて森を生む、明の亡後、臺灣に據り、水戶に任へし朱舜水と謀り、明室恢復を企てて成らず、朱姓を賜ふ、因りて自ら國姓爺と號す。康熙元年病みて歿す、年三十九。

【鄭燮】清の興化の人、板橋と號す、乾隆の進士、書・畫・詩共に妙、三絕の目あり。

【鄭重】○てあつし。○ねんごろ。白居易詩「千里故人心――」○しばしばする、頻煩。漢書、王莽傳「非下皇天所三以――降二符命一之意上」

【鄭玄】字は康成、後漢の高密の人、關に入り馬融に從ひ學ぶ、後ち鄕に歸り徒に授く、從學する者數百千人、北海の相孔融深く之を敬す、嘗て道にして黃巾の賊、數萬人に遇ふ、玄を見て皆拜し、敢て縣境に入らず、著す所ろ周禮・禮記の註あり。

【鄧】トウ

○春秋時代の國名。今の湖北省襄陽縣の地。○姓。―禹は後漢の光武帝の功臣。○古、魯の地名。今の山東省滋陽縣の地。

【鄧尉】山名、梅の名所。江蘇省吳縣の西南七十支那里に在り、漢の――此に隱る、故に名づく。前は太湖に瞰み風景極めて佳、山に梅樹多く、花時一望雪の如し（事類統編、地輿）＝萬峯山。

【鄧禹】後漢の新野の人、幼にして光武と相親む、後ち光武を輔けて功甚だ大なり、大司徒に拜し、高密侯に封ぜられ、大事に參議す、永平元年歿す、雲臺に畫かれたる功臣二十八人の首位たり。

【鄧艾吃】鄧艾の故事。吃者のわらふべからざるにいふ。世說、言語「鄧艾口吃、語稱二艾艾一、晉文王戲レ之曰、卿云二艾艾一、定是幾艾、對曰、鳳兮鳳兮、故是一鳳」

【鄱】ハ

古、番に作る

○―陽は湖名。江西省の北境に在り、禹貢の彭蠡。―陽は隋以後の稱。＝番陽。○―陽湖に沿ふ縣名。今の江西省饒州府。

【鄰】リン

又、隣に作る

○となり、ならび。○となる、ちかし。ちかづく（近）界を接する。又、其の國。つづく（接連）「比―」○つれ、親み來る同類。論、里仁「德不レ孤、必有レ―」○たすけ（輔）左右の輔弼をいふ。書、益稷「臣哉―哉」○周代行政區劃の稱。五家をいふ。周禮、地官「五家爲レ―」○――は衆車のとどろく聲。＝轔轔。

【鄰援】比鄰互に相援助する。陸贄、較二吐蕃將相一書「國家與二大蕃一、親則舅甥、義則――」

【擇レ鄰】居所を定める前に近鄰の風習の善き處をえらぶ。何晏、景福殿賦「偉二孟母之――一」＝卜レ鄰。三遷（三一頁二段）參看。

【買レ鄰】前條に同じ。南史、呂僧珍傳「宋季雅市レ宅居二僧珍側一、僧珍問二買レ宅價一、曰、一千一百萬、怪二其貴一、季雅曰、一百萬買レ宅、千萬買レ―」

【卜レ鄰】住所をえらぶに先づ其の近鄰の善惡をうらなふ。晏子「諺曰、非二宅是卜一、維鄰是卜」＝擇鄰。

【善レ鄰】となりに［に］したしむ。左、隱六「親レ仁善レ―、國之寶也」

【鄰家】となりのいへ。漢書、匡衡傳「引二――火光一」

【鄰交】となりきんじょの交際。＝鄰好。

【鄰好】となり近所とのよしみ。北史、陸還傳「來聘、初修二――一」

【鄰近】きんじょ。ちかし。杜甫詩「武侯祠堂常――」＝近鄰。

【鄰境】となり。又、となりのくに。南史、孫瑒傳「還二右將軍一、出鎭二公安一、爲二――所一レ憚」

【鄰伍】周の制、五家を鄰と爲す、故に――といふ。陳造詩「蝸舍無二――一」

【鄰國】となりのくに。孟、梁惠王「察二――之政一、無下如二寡人之用レ心者上」

【鄰國爲レ壑】壑は水を受くる處、白圭、隄を築きて水を鄰國に注ぐは人を損して己を利するなり。孟、告子「白圭曰、丹之治レ水也、愈二於禹一、孟子曰、子過矣、禹之治レ水、水之道也、是故禹以二四海一爲レ壑、今吾子以二鄰國一爲レ壑」柳宗元、興州江運記「白圭壑レ鄰、孟子不レ與」

【鄰舍】となりのいへ。戴復古詩「乞レ火聽レ敲――門」＝鄰家。

【鄰笛】晉の向秀が嵆康・呂安の死後、其の舊廬を經て其の鄰人の笛を吹くを聞きて昔日游宴の好を追思せし故事。向秀、思舊賦序「余與二嵆康・呂安一居止接近（中略）余經二其舊廬一、鄰人有二吹レ笛者一、追二思曩昔游宴之好一、感レ音而歎」孔紹安詩「何言陵谷徙、翻驚――悲」

【鄰敵】我と鄰せる敵國。荀子「兵大齊則制二天下一、小齊則治二――一」

【鄰比】となる。となり。魏志、管輅傳、注「與二――兒一共戲二土壤中一、輒畫レ地作二天文一」＝比鄰。

【鄰保】となりきんじょの家、又其の人人。保は互に保證する。

【鄰睦】ちかづきむつましくする。陳書、虞寄傳「周齊――」＝親睦。

【鄰里鄕黨】鄰里と近在と。周代の制、五家を鄰とし、五鄰卽ち二十五家を里とし、萬二千五百家を

鄰とし、五百家を黨とす。論、雍也「毋、以與二爾鄰里鄕黨一乎」
【鄰鄰】リンリン　衆車のきしる聲。詩、秦風「有レ車鄰鄰、有レ馬白顚」＝轔轔。

十三畫

【鄶】クワイ　㤅
古の國名。今の河南省密縣の地。又、檜に作る。詩經に檜風あり。

【鄴】ゲフ　㶀　洽
漢の縣名、三國の時、魏の都。今の河南省臨漳縣の地。
【鄴架】ゲフカ　書物の多きをいふ、架は書棚。唐の李泌、鄴縣侯に封ぜらる、家に藏書多し故にいふ。韓愈詩「鄴侯家多レ書、插レ架三萬軸」
【鄴侯書】ゲフコウノシヨ　前條を見よ。

十四畫

【鄵】　郰（邑部八畫）に同じ。

十五畫

【鄭】　鄭（本頁二段）の略字。

【鄽】テン　先
廛（五九五頁一段）に同じ。

十六畫

【鄺】キ　㣲　又、蘄に作る
沛郡の縣名。一說に楚の地。

十七畫

【酃】レイ　靑
○漢の縣名、晉代に廢す。今の湖南省衡陽縣の東。○湖の名。衡陽縣の東に在り、其の水酒を醸すべし、酃涤酒と名づく。一に醽醁に作る。

十八畫

【酆】ホウ　東
周の文王の都せし地名、又、豐に作る。今の陝西省鄠縣の地。

十九畫

【酇】㊀サン　㊁サン　旱　翰　寒
㊀あつまる、むらがる（聚）○周代、行政區劃の名。百家のむら。㊁漢の蕭何の封ぜられし地名。今の湖北省光化縣の北。

【酈】㊀リ　㊁レキ　支　錫
㊀春秋時代魯の地名。今の山東省兗州府の附近。㊁姓。酈食其は漢の沛公に仕へし策士。
【酈道元】レキダウゲン　北魏の涿郡の人、仕へて御史中尉となる、法を執る淸刻、魏書、酷吏傳に詳かなり、學を好み、奇書を歷覽し、水經の注四十卷を作る、頗る藝林に重んぜらる。

酉　部

【酉】イウ　有
○とり、十二支の第十位。爾雅「太歲在レ酉、曰二作噩一」方角にて西方。淮南、時則「招搖指レ酉」、天下皆秋」時刻にて、午後五時より七時まで。季節にては仲秋、卽ち陰曆の八月。○なる（就）みのる（成熟）○あく（飽）○二酉—は湖南省の大酉・小酉二山の稱。古、石穴中に書千卷を藏せしによりて、藏書の多き義とす。○國ヒヨミノトリ・サケノトリ字畫上、左旁に在る時の稱。

二畫

【酋】シウ　尤
○ふるざけ（繹酒）○さけを司る長官。禮、月令「命二大酋一」○酒が熟する。○あつまる（聚）○をはる（終）○すぐれる（雄）人にまさる。○をさ、かしら（魁師）野蠻人のかしら「酋長」「蠻酋」左思、吳都賦「儋耳黑齒之酋」○なつ（夏）○酋矛は長さ二丈ある矛の名。
【酋渠】シウキヨ　次條に同じ、渠は長。
【酋長】シウチヤウ　○野蠻人の部落のかしら。貞觀政要「酋長悉授二大官一、祿厚位尊」＝酋渠・酋帥・酋豪。○盜賊などの長。漢書、張敞傳「求二問長安父老偸盜酋長數人一」＝魁帥。
【酋領】シウリヤウ　前條に同じ。宋史、趙思忠傳「啖以二厚利一、因隨以レ兵前後殺二其老弱數千一、得二腹心酋領十餘人一」

【酊】テイ　迥
酩酊は甚だしく酒によふ。酩（酉部六畫）參看。

三畫

【酏】イ　支　紙
○米にて造りしすみざけ。○黍にて造りし淸みたる粥。薄き粥。○すみざけ又、すみがゆの米。○こめのもち（稻餠）

【酒】シュ　有
○さけ。漢書、東方朔傳「銷レ憂者、莫レ若レ酒」○さかもり（酒宴）「酒酣起舞」
○のむ（飲）○あまし（甘）
【酒友】シユイウ　さけのみともだち。白居易、醉吟先生傳「安定皇甫朗之爲二酒友一」
【酒暈】シユウン　さけのみてほんのりと赤くなる。蘇軾詩「酒暈無レ端上二玉肌一」
【酒暈粧】シユウンサウ　美人の頰にべにをつけて粧ふをいふ。粧臺記「美人粧面既敷レ粉、復以二燕支一暈二掌中一、施二之兩頰一、濃者爲二酒暈粧一、淺者爲二桃花粧一」
【酒宴】シユエン　さかもり。漢書、疏廣傳「及レ置二酒宴一、奉レ觴上レ壽」＝飲宴・酒讌・讌飮。
【酒甕】シユヲウ　○さかとうじ。唐書、段秀實傳「入レ市取レ酒、刺二酒翁一壞二釀器一」○酒ずきのおきな。白居易詩「寄與江城愛酒翁」
【酒甕】シユヲウ　酒を入れるかめ。晉書、左思傳「此閒有二傖父一、欲レ作二三都賦一、須二其成一、當三以覆二酒甕一耳」
【酒戒】シユカイ　さけをのむを禁ずるいましめ。李純甫詩「酒戒何曾破、詩魔先已降」
【酒香】シユカウ　さけのかをり。劉長卿詩「酒香閒レ甕老、湖色對レ門寒」
【酒肴】シユカウ　さけと、さかなと。後漢書、仲長統傳「陳二酒肴一」＝酒殽。
【酒缸】シユカウ　さけを容れるかめ。杜牧詩「窗外正風雪、擁レ爐開二酒缸一」
【酒酵】シユカウ　さけのもと。癸辛雜識「遂以二酒酵一作レ湯、飮レ之而愈」
【酒客】シユカク　さけのみ、酒を嗜む人〔漢書、陳遵傳〕北史「齊神武東出、李元忠載二素箏濁酒一奉迎、神武聞二其酒客一、未二郎見一レ之」＝酒徒。
【酒榷】シユカク　政府の營む酒の專賣。榷は獨占。漢書、循吏傳「罷二酒酤一、而議二鹽鐵一矣」
【酒渴】シユカツ　さけに醉ひてのどがかわく。杜甫詩「酒渴愛二江淸一、餘甘漱二晚汀一」
【酒榼】シユカフ　さかだる。白居易詩「牀頭殘酒榼、欲レ盡味彌淳」＝酒罇。
【酒氣】シユキ　○酒のにほひ。沈佺期詩「林香酒氣元相入」○酒を飮みて勢よくなる氣。柳宗元、裴府君墓碣「終身不下以二酒氣一加上レ人」
【酒旗】シユキ　○さかやのかんばんのはた。杜牧詩「山村水郭酒旗風」＝酒帘。○饗宴飮食を主るといふ星の名〔晉書、天文志〕＝酒星。
【酒器】シユキ　さかづき。說苑「智伯漆二其首一以爲二酒器一」
【酒禁】シユキン　飮酒を禁ずるいましめ。唐書、食貨志「唐初無二酒禁一」＝酒戒。
【酒狂】シユキヤウ　酒困に同じ。漢書、蓋寬饒傳「無二多酌レ我、我酒狂一」
【酒興】シユキヨウ　酒を飮みたるおもしろみ。元稹詩「顚狂酒興病來孤」
【酒軍】シユグン　多くの酒のみなかま。白居易詩「酒軍詩敵如相遇、臨レ老猶能一據レ鞍」
【酒訓】シユクン　さけのいましめ。北史、高允傳「高允被レ敕、論二集往世酒之敗一レ德、以爲二酒訓一」「孝文覽而悅レ之、常置二左右一」＝酒箴。
【酒禍】シユクワ　さけのわざはひ。禮、樂記「此先王之所三以備二酒禍一也」
【酒光】シユクワウ　酒の色。岑參詩「酒光紅琥珀、江色碧琉璃」
【酒荒】シユクワウ　さけにすさむ。書、胤征「羲和廢二厥職一、酒荒二於厥邑一」
【酒限】シユゲン　飮酒の定量をいふ。晉書、陶侃傳「侃每レ飮レ酒、有二定限一、常懽有レ餘、而限已竭、佐吏勸二更少進一、侃悽懷良久曰、年少曾有二酒失一、亡親見レ約、故不二敢踰一」
【酒戶】シユコ　○さけをのむ量。元稹詩「病嗟二酒戶一年年減」＝酒量。○さかや。陸游詩「酒戶知レ貧猶二蓄券一」＝酒家。
【酒壺】シユコ　さかつぼ。杜甫詩「呼レ婢取二酒壺一」
【酒後】シユゴ　酒を飮みたるあと。漢書、楊惲傳「酒後耳熱、仰レ天拊レ缶而呼二嗚嗚一」
【酒國】シユコク　酒に醉ひて別天地に在る心地するを。唐庚詩「硯田無二惡歲一、酒國有二長春一」＝醉鄕。
【酒困】シユコン　さけに醉うて心みだれる。論、子罕「不レ爲二酒困一、何有二於我一哉」＝酒狂。
【酒疾】シユシツ　さけのしみ。白居易詩「襟上杭州舊酒疾」
【酒材】シユザイ　酒を造る原料。秫稻麴蘖の類。周禮、酒正「以二式灋一授二酒材一」
【酒債】シユサイ　酒代のかり。杜甫詩「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」
【酒槽】シユサウ　酒船に同じ。輟耕錄「持二酒槽之金口一以進」
【酒盞】シユサン　さかづき。東坡題跋「吾少年望二見酒盞一而醉」＝酒杯。
【酒市】シユシ　さけを賣る市場。成都古今記「正月燈市、二月花市、三月蠶市、四月錦市、五月扇市、六月香市、七月七寶市、八月桂市、九月藥市、十月酒市、十一月梅市、十二月桃符市」
【酒巵】シユシ　さかづき。北史、魏常山王遵傳「以二銀酒巵一容二二升許一、懸二於百步外一」＝酒杯。
【酒食】シユシ　○さけと飯と。論、爲政「有二酒食一先生饌」○シユシヨク酒と食物と。
【酒資】シユシ　さかて、酒を買ふ代金。
【酒貲】シユシ　前條に同じ。白居易詩「不レ作二歸糧一作二酒貲一」
【酒肆】シユシ　さかや、酒を賣る店。李白詩「笑入胡姬酒肆中」＝酒店・酒舖。
【酒臭】シユシウ　酒に醉ひたるくさき氣。韓非、十過「入二其幄中一、聞二酒臭一而

還」
【酒失】飲酒の上の過失。史、灌夫傳「數以二——一得二過丞相一」＝酒過。
【酒人】酒を善く飲む人。史、荊軻傳「游二於——一」
【酒箴】酒の戒。漢書、游俠傳「黃門郎揚雄、作二——一以諷二諫成帝一」
【酒社】酒のみのなかま。蘇軾詩「——我爲政、詩壇子有功」
【酒漿】さけと、のみものと。詩、小雅「維北有斗、不可以挹二——一」
【酒杓】酒をつぐしやく。唐書、地理志「邛州臨邛郡、土貢二葛絲布——一」
【酒所】ほろゑひ、すこしく醉ふ。漢書、蓋寬饒傳「上有二——一、從容覵寬饒曰、吾欲法二堯禪一舜、何如」＝微醺・微醉。
【酒色】○さけと女色と。漢書、朱博傳「不好二——一」○酒を飲みて顏色にあらはれる。吳志、諸葛恪傳「昭先有二——一」
【酒數】酒杯の分量のかず。李白詩「如詩不成、罰依二金谷——一」＝酒量。
【酒醉飯飽】略滿腹。
【酒正】周代、酒を掌る長官。周禮、注「——酒官之長」
【酒星】酒を主る星の名。孔融、與二曹操一論二酒禁一書「天垂二——之耀一、地列二酒泉之郡一」

【酒稅】酒を造る稅。大學衍義補「唐德宗建中元年、罷二——一」＝酒租。
【酒聖】○酒の淸める者。三國志、徐邈傳「謂二酒淸者一爲二聖人一、濁者爲二賢人一」○善く酒を飲む者。黃庭堅詩「少年氣與二節物一競、詩豪——雖爭鋒」
【酒精】アルコール、酒の主成分を成す無色の液體。
【酒醒】さけのゑひがさめる。白居易詩「眼重朝眠足、頭輕宿——」
【酒席】さかもりのばしよ。南史、韋粲傳「於二——一厲色」＝酒筵。
【酒石酸】藥品の一、無色の結晶體にて酸味多く水にとけ易し。
【酒仙】大酒を飲みて世事に關せざる人。杜甫、飲中八仙歌「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙」
【酒泉】○周代の邑名。今の陝西省澄城縣の西、其の地の泉にて酒を造れば、味尤も美なりといふ。○漢の郡名。今の甘肅省——縣の東北、金泉あり、味酒の如しといふ。○多量のさけ。裴秀文「有肉如丘、有酒如泉」
【酒船】さかぶね、もろみざけをしぼるをけ。晉書、畢卓傳「右手持二酒杯一、左手持二蟹螯一、拍二浮——中一、便足了二一生事一矣」
【酒錢】酒を買ふぜに、さかだい。

高適詩「今日相逢無二——一」
【酒戰】酒の飲みくらべ。茅亭客話「筆耕尙可儲三載一、——猶能敵二百夫一」
【酒饌】酒と食物と。魏書、薛懷吉傳「——相尋、芻粟繼至」
【酒窖】さかだる。＝酒榼・酒罇。
【酒罇】さかだる。後漢書、禮儀志「瓦——二、容二五斗一」＝酒尊・酒樽。
【酒籌】さかづきのかずとり。白居易詩「醉折二花枝一當二——一」
【酒池肉林】豪遊を極むる形容。史、殷紀「以酒爲池、懸肉爲林、使二男女裸相逐二其閒一、爲二長夜之飲一」
【酒腸】酒を飲むはらの中。劉乂詩「——寬似海、詩膽大二於天一」
【酒中趣】飲酒のおもしろみ。世說、言語「公但未知二——一耳」
【酒敵】酒のみ相手。敵は同じく匹敵する義。歸田錄「與二石曼卿一爲二——一」
【酒顚】さけ飲みて心くるふ。白居易詩「別來只是成二詩癖一、老去何曾更二——一」＝酒癲。
【酒徒】さけのみなかま。史、酈生傳「吾高陽——也、非二儒人一也」
【酒毒】酒のどく。王績詩「葛花消二——一」
【酒德】○酒の功德。晉書、劉伶傳「著二——頌一篇一」○酒の惡しき德。書、無逸「迷亂酗二于——一」
【酒囊飯袋】酒や飯を入れるふくろ。無能にして遊食する者をのしる語。荊湘近事「文武之道、未二嘗留意一、時謂二之——一」
【酒肉】さけと、にくと。孟、離婁「其良人出、則必饜二——一而後反」
【酒杯】さかづき。錢起詩「欲識二封人願一、南山舉二——一」
【酒旆】さかやのはた。杜牧詩「吳苑春風起、河橋——懸」＝酒帘・酒旗。
【酒坊】さかや。姚合詩「遠近持齋來諦聽、——魚市盡無人」＝酒店・酒肆。
【酒榜】酒屋の看板。僧皎然、張伯英草書歌「長安——醉後書」
【酒伴】酒のみ相手。白居易詩「——歡娛久不同」
【酒悲】泣上戸。通鑑、後唐、莊宗紀、注「人有二醉後涕泣者一、俗謂二之——一」
【酒兵】酒を兵に喩ふ。南史、陳暄傳「江諮議有言、酒猶兵也、兵可二千日而不一用、不可二一日而不一備、酒可二千日而不一飲、不可二一飲而不一醉」唐彥謙詩「——無計敵二愁腸一」
【酒瓶】さけを容れるかめ。白居易詩「當二石渠中一浸二——一」＝酒餅。
【酒瓢】さけを容れるふくべ。王禹偁詩「睡起殘花落二——一」

【酒癖】さけをのむくせ。皮日休詩「妻仍嫌二——一、醫只禁二詩情一」
【酒母】○酒屋のばあさん。列仙傳「子先——在此」子先は人名。○酒のもと。王安石詩「剩留二官屋一貯二——一」
【酒保】○酒家の傭夫。保は保證人を立ててやとはれる義。史、欒布傳「窮困賃二傭於齊一、爲二酒人保一」○さかとうじ、酒を造る者。鶡冠子、天則、注「——貨酒者」○國兵營內にて酒食品物を賣る所。
【酒逋】酒のかり。陸游詩「秋穫先令入二——一」＝酒債。
【酒酺】大宴會を設けて相慶賀するをいふ。史、趙世家「主父滅二中山一還、歸行賞大赦、置二——五日一」
【酒鋪】さかみせ。＝酒家・酒肆。
【酒盆】さけを容れる鉢。杜牧詩「喚婦呼兒索二——一」
【酒醪】清酒と濁酒と。史、扁鵲傳「疾之在二腸胃一、——之所及也」
【酒亂】酒困に同じ。
【酒量】さけをのむ分量。范成大詩「年少王孫——寬」
【酒糧】さけと、かてと。後漢書、昝恭傳「每歲時遣子、問以二——一」
【酒力】酒のききめ。白居易詩「驅愁知二——一、破睡見二茶功一」
【酒令】飲酒上の規則、戲に設くるもの。背きし者には罰杯を飲ましむ。南史、王規傳「屬規爲二——一」
【酒醴】さけと、あまざけと。書經「若作二——一、爾惟麴糵」陸游、與二村隣一聚飲詩「俗似二山川古一、人如二——醇一」
【酒帘】さかやの目じるしのはた。李中詩「閃閃——招二醉客一、深深綠樹隱二啼鶯一」＝酒旗・酒旆・酒望。
【酒樓】料理屋、お茶屋。蜀檮杌「飲二於——一」＝旗亭。
【酒盌】酒を盛る椀。南史、王琨傳「琨儉二於財用一、設酒不過二兩盌一」
【擧酒】宴席にて酒を飲み始める。儀禮、鄕飲酒禮「——于賓」
【行酒】宴席にて酌をする。玉堂逢辰錄「——者皆中使也」
【被酒】酒の爲めに加へらる、被は加、大醉する。史、高祖紀「——夜徑二澤中一」
【屬酒】杯を人にさす。袁皓詩「芳景漸濃偏——」
【佐酒】飲酒の相手をさす。漢書、高帝紀「召二故人父老子弟一——」
【樂酒】飲酒をよろこぶ。詩經「——今夕、君子維宴」孟、梁惠王「——無厭、謂二之亡一」
【使酒】酒の勢に乘じて我がまゝにふるまふ。史、魏其田蚡傳「爲人剛直——」史、季布傳「有言二其勇使一酒」
【亡酒】酒席よりのがれ去る。漢書、高五王傳「諸呂有二一人一醉亡酒」
【縱酒】酒をきままに飲む。史、田儋傳「——」注「縱、放也、放意而飲酒」
【視酒如讐】酒を輕んずるをいふ。漢書、劉德傳「——、視肉如蓄」蓄は豆の葉。
【呼酒】酒を持ち來ることを命ずる。宋伯仁詩「小樓——揖二青山一」＝喚酒・呼杯。
【酒盈罇】酒がたるに滿つ。隋書、盧思道傳「濁酒盈罇、高歌滿席」歸去來辭「攜幼入室、有酒盈罇」
【酒闌】次條に同じ。漢書、高帝紀、注「闌言希也、謂飲酒者、半罷半在、謂二之闌一」
【酒酣】酒宴のなかばを過ぐる頃。史、高祖紀「——高祖擊筑」
【酒酣耳熱】大醉の狀をいふ。漢書、楊惲傳「酒後耳熱、仰天拊缶」魏文帝文「——仰而賦詩」
【中酒】二日醉。韋莊詩「近來中酒起常遲、臥見二南山一改二舊詩一」
【酒有聖賢】清酒を聖人といひ、濁酒を賢人といひし故事。魏略「太祖禁酒、而人竊飲、故難言酒、以二白酒一爲二賢者一、淸酒爲二聖人一」酒聖參看。
【酒有別腸】酒量の大小は、體軀の大小に關せざるをいふ。五代史「閩主曦謂二周維岳一曰、岳身甚小、何能飲之多、左右曰、——、不二必長大一、曦命二維岳下一殿、欲二剖視其酒腸一」
【酒天之美祿】酒をほめていふ。漢書、食貨志「——、頤二養天下一」
【酒百藥之長】さけは多くのくすりの中の第一。漢書、食貨志「鹽食殽之將、——」
【酒無量】酒をのむには分量を定めず。論、鄕黨「惟——、不及亂」
【酒呑人】多量に飲酒する者は卻りて酒に飲まれる。法華經抄「初則人呑酒、次則酒呑酒、後則——」

【酌】シャク　藥

○くむ（斟）酒をくむ、酒をつぐ「小—」「對—」「獨—」說文「盛酒行觴也」○さかもりする。○ます（益）○くみとり、くみわける、彼此を照し合せて善惡を取捨する「參—」「斟—」○淸—は酒の異名（曲禮）
同訓異義 くむ 酌・汲・斟・挹の別は汲（二〇五二頁一段）の條を見よ。
【酌飲】一杓の水、酌・杓通ず。飲はのみもの。左、成十一「衞定公卒、夫人姜氏旣哭而息、不內二——一」
【酌斟】くむ。程嘉燧詩「脫衣貰酒君——」＝斟酌。

【酌酒】さけをくむ。後漢書「諸侯ーレー相賀」王維詩「ーレー與レ君君自寬、人情翻覆似二波瀾一」＝斟酒・挹レ酒。
【酌水】みづをくむ。杜陽雜編「以二金銀杓一ーレー」
【酌損】ますと、へらすと。易經「已事遄往无レ咎、ーニー之一」
【酌量】事情の輕重をくみとりて適宜の處置をする。陸龜蒙詩「自與ーー煎藥水、別教二安置一曬書牀」

【酎】チウ 〔篆〕

○こきさけ（醇酒）三度重ねてかもしたる酒「芳ー」「醇ー」禮、月令「孟夏之月、天子飮レー」○燒ーは酒精分を多量に含む酒。＝火酒。
【酎金】漢代の制、天子の初めて熟したる醇酒を宗廟に薦むる時、諸侯王皆獻金して祭を助く之をーーといふ。ーーの量少く、若くは質の惡しき時は其の領土を削らる。史、平準書「列侯坐ニーー一失レ侯者百餘人」

【配】ハイ 〔篆〕

○あふ（合）たぐふ、ならぶ。○たぐひ、つゐ（匹・對）○つれあひ（夫婦）めあはす、夫婦になる「ー偶」易、蒙卦、注「婦者ー已而成二德者一也」○對になる。易、繫辭「廣大ー二天地一變通ー二四時一」○すすむ（侑）○ながす。しまながし（流刑）「ー流」五代會要「刺面ー華州一」○やっこ、つみびと（囚隸）○つく（屬）○つける、從へる。○くばる、わりあてる（頒賦）「ー當」「分ー」○酒の色。○〔國〕殘缺を完補する義。
【配下】〔國〕てした、部下、隸屬。
【配格】流刑の輕重によりて、配所の遠近を定める規格。宋史「政和編ニーー一、有二情重・稍重・情輕・稍輕四等一」
【配合】○つりあふ。つりあひ。張衡賦「日與レ月此ーー也」○〔國〕めあはせる、夫婦にする。
【配享】他の神と合せ祭りて供物をすすめる。支那にて功臣を宗廟に祭ると。孔子の廟に他の儒者を祭るとの類〔周禮、夏官、司勳、注〕＝從祀・配饗・配祀。
【配御】妃嬪などが天子の夜のおとぎする。漢書、元后傳「已嘗適レ人、於レ禮不レ宜ニーー至尊一」
【配偶】つれあひ。後漢書、鄧訓傳、注「其無レ妻者、爲ニ適ーー一」＝配耦・配匹。
【配耦】前條に同じ。耦は兩人相竝ぶ。
【配軍】流刑になりて國境を守る兵。瑞桂堂暇錄「東坡入二京師一、有二相者一云、一雙學士眼、半個ーー頭」
【配玄】水仙花の異名〔三餘帖〕
【配劑】○藥をほどよく調合する。○程よくくみ合せる「天のーー」
【配祀】配享に同じ。
【配貳】そへ、副貳の義。晉書、禮志「皇太子ーニー至尊一、與レ國爲レ體」
【配神】合祀せられたる神。
【配社】土の神のやしろに合せまつる。左傳「句龍旣爲二后土一、又布ーレー」
【配所】しまながしにしたる地。
【配食】配享に同じ。晉書、陸雲傳「補二浚儀令一、稱爲二神明一、去レ官、百姓思レ之、圖二畫形像一、ーニー縣社一」＝耐祭。
【配膳】〔國〕膳部を人人にくばりならべる。
【配島】しまながし。宋史、馬默傳「默以爲二殘忍一、爲奏請レ更二定ーー法一」＝流・流刑・流竄。
【配當】○くばりあて。周禮、地官、疏「預爲ニーーー」○〔國〕わりまへ、わりあて「ーー金」
【配謫】島流しにする。＝配流。
【配達】〔國〕物品をくばりとどける「郵便ーー」
【配置】それぞれくばりおく。
【配天】○德が廣大にして天と竝ぶ。易、繫辭「廣大配二天地一」○王者が天を祭る時、其の祖先を之に配して祭る〔詩、大雅、思文〕有虞氏、黃帝を以て天に配せしより、夏后氏は之に因り、殷は帝嚳を以てし、周は后稷を以てす。其の後、歷代の帝王、皆其の制に沿ふる。
【配布】くばりしく、くばる。
【配賦】ねんぐなどをわりつける。又其のわりつけられし税金。
【配分】くばりわかつ。＝分配。
【配兵】兵士をそれぞれの要所にくばりあてる。又其の兵士。
【配流】配謫に同じ。
【配率之科】民の貧富の等差によりて租税を課する。
【配慮】心をくばる、心配する。
【配隸】それぞれに分ち屬する。後漢書、馮異傳「部二分諸將一、各有ニーー一、軍士皆言、願屬二大樹將軍一」＝分屬。
【配儷】つれあひ。雜事祕辛「不レ有ニーー一、曷奉二天地宗廟一」＝配偶。

四 畫

【酓】エン 〔篆〕

やまぐは。史、夏紀「其篚ー絲」註「ー桑蠶絲、中レ爲二琴瑟絃一」＝檿。

【酗】ク コ 〔篆〕

○酒にゑひてくるふ（酒狂）酒亂「兇ー」「ー酒」書、微子「沈二酗于酒一」○醉ひて怒る。
【酗醟】酒の失なり、酒に醉ひてくるふ。晉書、曹志傳贊「ーー斯作」
【酗訟】酒にゑひ狂ひてあらそひうつたへる。魏書、刑罰志「年穀屢登、士民多因レ酒致ニーー一」

【醉】醉（酉部八畫）の俗字。

【酖】㊀タン ㊁チン 〔篆〕

㊀酒を嗜む。○ふける、酒に溺れる。古、沈に作る。漢書、五行志「荒二沈于酒一」㊁一種の毒鳥、鴆（鳥部四畫）に通ず。○轉じて毒殺する。左、莊三二「使二鍼季ーレ之一」
【酖酖】酒飮みて樂しむ貌。又、安樂の貌。說文「樂レ酒也」徐注「ーー然安且樂也」
【酖毒】酖は鴆といふ毒鳥、其の羽を以て、酒を畫かきまぜして飮ましむるときは、人を殺す。轉じて害毒の義とす。左、閔元「宴安ーー、不レ可レ懷也」＝鴆毒。

【酕】バウ 〔篆〕

ー醄は極めてゑひたる貌〔廣韻〕姚合詩「遇レ酒ー醄飮」

五 畫

【酣】カン 〔篆〕

○たけなは、十分に酒を飮む、酒宴のまさかり「宴ー」「ー醉」「沈ー」戰國策「平原君乃置酒、酒ー起前以二千金一爲二魯連壽一」○轉じて廣く物事の最中「戰方ー」「ー睡」○花のまさかりに開く貌。王安石詩「荷花落日紅ー」○ーーは酒を飮みて上機嫌なる貌。又、春景ののびのびとしたる貌。

〔同訓異義〕たけなは 酣・闌の別は闌（門部九畫）の條を見よ。

【酣宴】盛んなるさかもり。後漢書「置酒ーー、賞賜數百千萬」
【酣歌】酒を飮みてたけなはにうたふ。書、伊訓「恆二舞于宮一、ーニー于室一」
【酣酣】○春景ののびのびとたけなはなる貌。孔平仲詩「春天ーー睡正美」○酒を飮みて心ののびのびせる貌。白居易詩「不レ如來飮レ酒、仰レ面醉ーー」＝酣暢。○花のまさかりに開く貌。崔融詩「桃李正ーー」
【酣嬉】酒を十分に飮みてたのしむ「ーー淋漓」＝醉嬉。
【酣謔】酒にゑひてたはむる。晉書、石勒載記「勒與ーー、引二陽嘴一笑」
【酣興】酒を飮みておもしろくたのしむ。周書、長孫澄傳「好觀二人ーー一」
【酣臥】十分にねむる。唐書、李太亮傳「公在、我得ニーー一矣」＝酣睡・熟睡。
【酣豢】酒にふけりて贅澤にくらす。豢は養。歐陽修、釋惟儼文集序「尙安能ーニー于富貴一」
【酣呼】酒にゑひ、大聲にてよぶ。南史「顏延之曰、彼有レ人焉、由レ是不二復ーー一」＝醉呼。
【酣娛】酒にゑひてたのしむ。古樂府「式宴盡ニーー一」＝宴娛。
【酣賞】意を恣にして遊び賞する。北齊書、邢邵傳「終日ーー、盡二山泉之致一」
【酣春】はるのまさかり。李賀詩「勞勞鶯燕怨ニーー一」
【酣縱】酒を飮みてしだらなくほしいまま。晉書、阮孚傳「終日ーー」
【酣睡】十分にねむる。朱德潤詩「陳郎ーー未レ知レ曉」＝熟睡。
【酣醉】大いに酒にゑふ。戴良和詩「惟於ニーー中一、歸路乃不レ迷」
【酣戰】戰のまっさかり。さかんに戰ふ。韓非子「楚晉ーー之時、子反渴而求レ飮」
【酣態】酒にゑひたるやうす。盧僎詩「高情薄二雲漢一、ーー坐二芳洲一」
【酣暢】酒に醉ひて氣分がのびのびする。晉書、阮修傳「修常以二百錢一挂二杖頭一、至二酒店一、便獨ーー」
【酣適】酒にゑひたのしむ。吳景奎詩「驕言命二壺觴一、萬事付ニーー一」
【酣中客】富貴に沈溺する者をいふ。陶潛詩「寄レ言ーー、日暮當二炳燭一」
【酣鬪】さかんにたたかふ。唐書、史孝章傳「常爲二先鋒一、閱二三十戰一、中二流矢一ーー不レ解」＝酣戰。
【酣放】○酣縱に同じ。○行文の縱恣なる貌。皇甫湜、韓昌黎墓誌銘「及二其ーー一、豪曲快字、淩レ紙怪發」
【酣飫】酒食に飽く。唐書、元德秀傳「性嗜レ酒、陶然彈レ琴以自娛、人以二酒肴一從レ之、不レ問二賢鄙一爲ニーーー一」＝醉飽。
【酣樂】十分にたのしむ。書經、傳「ーニー其身一、不レ憂二政事一」

【酤】コ 〔篆〕

○ひとよざけ（一宿酒）「淸ー」○うる（賣）酒を賣る「居ー」○かふ（買）酒を買ふ。沽に通ず。＝沽。

〔同訓異義〕かふ 酤・沽・買・市等の別は買（一八六七頁四段）の條を見よ。

【酤醬】うりかひ。晉書、五行志「司馬道子府園內列ㇾ肆、使三姬人一一」身自貿易」＝市鬻。
【酤榷】政府が酒を專賣して利益を獨占する。蘇軾詩「對ㇾ酒不ㇾ嘗儕二一一」＝榷酤。
【酤酒】○酒をうる。史、司馬相如傳「買二一酒舍一一ㇾ一、令二文君當一ㇾ壚」○酒をかふ。史、滑稽傳「懷ㇾ錢一ㇾ一」＝沽酒〔論語〕○一夜づくりのさけ。詩經、傳「酤、一宿酒也」

【酢】㊀ソ・ス　㊁サク　遇　藥
㊀すし(酸)○す(醋)味の酸い液。隋書、酷吏傳「長安語曰、寧飮二三升一、不ㇾ見二崔弘度一」㊁むくゆ(報)客が主人に酒杯をさす。酬(主人が客に返杯する)の對「酬一」「一爵」
同訓異義　酢・報・酬の別は報(三九二頁一段)の條を見よ。
【酢漿】かたばみ、草の一種、葉は三出複葉、花は淡黃色五瓣。＝三葉酸。
【酢敗】酒が酸くなりてくさる。雲笈七籤「酒客、梁市上酒家人也、作ㇾ酒常美、售日得二萬錢一、有ㇾ過而逐ㇾ之、主人酒常一一」

【酥】ソ　ス　虞
○牛・羊の乳にて製せし食品、牛酪・ミルクの類「一酪」○酴一ソトは酒の名。＝屠蘇。○俗油を以て麵に和せし者。又食品の鬆ニにして糜え易き者。
【酥燈】佛前の燈火。法苑珠林「誦咒時然二八支一一」(然はもやす)＝佛燈。
【酥酪】乳製の酪。宋史、職官志「牛羊司乳酪院、供二造一一一」

【酡】タ　歌
ゑふ、醉ひて顏を赤くする「微一」宋玉、招魂「美人既醉、朱顏一些」(些は助字)

【酏】酡(前條)に同じ。

六　畫

【酭】イウ　宥
むくゆ(報)すすむ、酒をすすめる、返杯をする(醻酒)＝侑。

【酬】シウ　尤　又、詶に作る　酧は俗字
○酒を勸める、主人が客に杯を返す。酢(客が主人に返杯する)の對「獻一」○かへす、むくゆ(報)むくい「一恩」「一勞」「報一」「應一」＝醻。○手紙にて返事する「貴一」「答一」
同訓異義　酬・報・酢の別は報(三九二頁一段)の條を見よ。
【酬讌】へんれいのさかもり。輟耕錄「具二酒肴一延款、次日客一一」
【酬應】○こたへる。南史、梁宗室蕭勵傳「尤好讀二東觀漢記一、略皆誦憶、劉顯執ㇾ卷策ㇾ勵、一一如ㇾ流、乃至二卷次行數一、亦不二差失一」＝應答。○さかづきをかへす。吳師道詩「從來不ㇾ解ㇾ飮、杯勺强一一」
【酬恩】めぐみにむくゆ。舊唐書、徐有功傳「願以ㇾ執ㇾ法一ㇾ一」＝報恩。
【酬酢】○主客互に杯のやりとりする。蒼頡篇「主答ㇾ客曰ㇾ酬、客報二主人一曰ㇾ酢」○轉じて應對の義。易、繫辭「是故可二與一一一」
【酬唱】詩を以て互にとなへ和する。宋史、宋湜傳「有二淸節一、居二長安一不ㇾ仕、與二种放・魏野一遊、多篇什一一」
【酬對】酬答に同じ。宋史、熊克傳「有二問者一一一如ㇾ響」
【酬答】むくいこたへる。嵇康文「人閒多事、堆ㇾ案盈ㇾ几、不二相一一」＝酬和。
【酬直】代價をつぐなひ拂ふ。直は値。三國志、衞臻傳、注「子許買ㇾ物、隨ㇾ價一一」
【酬報】酬答に同じ。晉書、禮志「名位不ㇾ同、本無二一一之禮一」
【酬勞】骨をりに報いる。周書、武帝紀「尊ㇾ年尙ㇾ齒、列代弘規、序ㇾ舊一ㇾ一、哲王明範」
【酬和】詩文などを作りてむくい答へる。晉書、劉琨傳「以二常詞一一一」＝應酬・和酬。

【酧】酬(前條)の俗字。

【醆】タイ　スキ　隊　サイ　賄　隊
こめしる(米汁)こんず(漿)

【酩】メイ　迥
○あまざけ、糯米と麴とを煮て造りし醴。漢書、鼂錯傳「食肉而飮一ㇾ一」○ゑふ(醉)
【酩酊】甚だしくゑふ。晉書、山濤傳「日夕倒載歸、一一無ㇾ所ㇾ知」白居易詩「歸鞍一一騎」＝泥醉・爛醉。

【酪】ラク　藥
○ちちしる(乳漿)牛・羊・馬などの乳を煮て造りし飮料、ミルクの類「牛一」「乳一」「羊一」○こんず(酢漿)○果實をしぼりたる汁にて作りし飮料「杏一」漢書、食貨志「敎民煮ㇾ水爲ㇾ一」
【酪漿】牛羊の乳。李陵、答二蘇武一書「羶肉一一、以充二飢渴一」
【酪酥】牛羊の乳にて精製せし飮料〔唐書、穆贊傳〕＝酥酪。
【酪奴】茶の異名。魏錄「王肅嘗云、羊比二齊魯之大邦一、魚比二邾莒之小國一、唯茗飮不ㇾ中、與二酪漿一作ㇾ奴」
【酪母】○さけのかす(酒滓)爾雅、疏「酒滓謂二之一一」○乾酪〔揚雄、長楊賦、注〕

七　畫

【酳】イン　震
○すすぐ(漱)酒にて口をすすぐ。禮、樂記「執ㇾ爵而一」○尸に酒を獻ずる。

【酵】カウ　效
○さけのもと(酒母・釀母)○さけがす(酒滓)○わく、酒の熟する時、酒氣が發作する「發一」
【酵母】酒のもと、酒を發酵せしむるに用ふる原料。

【酷】㊀コク　㊁カク　沃　藥　一音ゴク
㊀はげし、酒の氣が厚くしてはげし。○しへたぐ(虐)むごし(慘)からし(苛)「苛一」「殘一」「慘一」○はなはだし(甚)むごきはむ(極)○いたみうらむ。うらみ(痛恨)顏氏家訓「銜ㇾ一茹ㇾ恨、徹二于心髓一」㊁しへたぐ(虐)
同訓異義　酷・甚・太・泰・絕・孔・已の別は甚(一二六〇頁二段)の條を見よ。
【酷愛】甚だしくあいす。張養浩詩「年來一一香山老、都把二悠悠一付二醉吟一」
【酷寒】甚だしくさむし。＝嚴寒。
【酷虐】くるしめしへたぐ。袁凱詩「牝雞肆二一一一、骨肉至二吞噬一」
【酷慘】甚だしくしへたげそこなふ。後漢書、戴就傳「主者窮二竭一一、無二復餘方一」
【酷似】甚だしくよくによる。晉書、何無忌傳「一二一其舅一」＝酷肖。
【酷臭】甚だしくくさし。抱朴子「形狀既醜、加ㇾ之一一」
【酷暑】甚だしくあつし。李洞詩「人居一一寒」＝盛暑。
【酷肖】よくにる。＝酷似・逼似。
【酷痛】甚だしくいたむ。宋書、王微傳「一一煩冤、心如二裁裂一」
【酷熱】甚だしくあつし。＝酷暑・極熱・隆熱・毒熱。
【酷暴】むごくしてあらあらし。北史、吐谷渾傳「前後奉ㇾ使、皆以二一一爲ㇾ名」
【酷薄】甚だしくむごくする。＝苛酷。
【酷法】きびしきおきて。五代史、後蜀世家「置二獄于家一、務以二一一、厚二斂蜀人一、蜀人大怨」＝苛法。
【酷評】てひどき批評。＝苛評。
【酷濫】甚だしくみだり。後漢書、鄧隲傳「獄不二訊鞫一、遂令二隲等罹二此一一一」
【酷吏】○てきびしき官吏。史記・漢書に一一傳あり。○大暑に喩ふ。杜牧詩「大暑去二一一一、淸風來二故人一」
【酷類】甚だしくによる。晁補之詩「秀才一二一東野貧一」＝酷似。
【酷烈】○甚だしくはげし。書經、疏「一一甚二于猛火一」○香氣甚だ盛んなり。史、司馬相如傳「一一淑郁」

【酸】サン　寒
○す(酢)○すし(醋味)すっぱい。禮、月令「孟春之月、其味一」○かなしむ(悲)いたむ(痛)「悲一」○くるし、つらし「辛一」○まづし「寒一」范成大詩「洗盡書生氣味一」○一素は非金屬元素の一、水・空氣などを構成する無味無色の氣體。＝養氣。
【酸梗】かなしみて胸ふさがる。陳書、陸瑜傳「絕ㇾ絃投ㇾ筆、恆以一一」
【酸甘】すきと、あまきと。山海經「文鰩魚以ㇾ夜飛、其味一一」＝酸噎。
【酸寒】まづしくしてくるし。蘇軾詩「故人留飮慰二一一一」＝寒酸。
【酸化】酸素と他物と化合する。
【酸懷】心をいためる。南史、劉湛傳「吾得二湛啓事一、爲ㇾ之一一」＝傷心。
【酸愴】いたみかなしむ。後漢書、列女傳「辭甚一一」
【酸辛】つらし、くるし。杜甫詩「萬事益一一」＝艱辛・苦楚・辛酸。
【酸呻】かなしみうめく。孟郊詩「病骨可ㇾ劁ㇾ物、一一亦成ㇾ文」
【酸漿】ほほづき。多年生草、根莖花實皆藥に入る。齊民要術「可三以浣二治葛苧一、若二一一一」＝寒漿〔爾雅〕
【酸性泉】泉水の多量の酸類を含有するもの。
【酸切】痛切にかなしむ。陳書、鄱陽王伯山傳「敍二他鄕離別之意一、辭甚一一」
【酸然】心をいたむる貌。陸游詩「平生知幾別、此別益二一一一」
【酸痛】かなしみいたむ。
【酸楚】くるしみいたむ。李白詩「客心自一一」＝悲痛。
【酸毒】甚だしくくるしめる。後漢書、朱博傳「吏人一一、道路歎嗟」
【酸敗液】胃中に停滯せる酸味の液、すでに腐敗して食物を消化する能はざるもの。
【酸鼻】甚だしくいたみかなしむ。漢書、鮑宣傳「父子夫婦、不ㇾ能二相保一、誠可ㇾ爲二一一一」
【酸類】酸性のものの總稱、硫酸・

硝酸・鹽酸など。

【醍】テイ 齊 わるゑひ、ふつかゑひ、酒を病む「解ㇾ—」詩、小雅「憂心如ㇾ—」

【酴】ト ド 虞 ○にごりざけ、もろみざけ、どぶろく(白馬)○さけのもと(酒母)○—醾は重ねてかもしたる酒。

【酴清】 酴醾に同じ〔揚雄賦〕

【酴酥】 屠蘇(五三三頁四段)に同じ。

【酴醾】 ○重ねて釀したる酒。一說、にごりざけ(醽—に醾に作る)韓下歲時記「長安每歲清明、賜ニ宰臣以下——酒ニ」○蔓生の落葉灌木、幹高さ四五尺、枝葉柄皆刺多し、葉は羽狀複葉、夏初白花を開く、色——酒に似たり、故に名づく。=荼蘼〔格物總論〕

【酺】ホ 虞 ○酒を飲みてたのしむ。○國に慶事あり、又は天子の德が天下に普く布きたるをよろこびて、天子より臣民に聚りて酒を飲み樂しむことを許さる。史、始皇紀「天下大—」○天子より酒食を下賜せらる「賜——」又其の酒食。

【酺宴】 天子が臣民に聚りて酒を飲むことを許さる。又、天子より賜るさかもり。唐明皇に——詩あり。=酺燕。

【酺燕】 前條に同じ。唐書、張守珪傳「入見ニ天子ニ、會ニ籍田畢ニ、酺——」

【酹】ライ ラツ ルヰ 泰 隊 曷 質 酒を地にそそぐ、酒を地に沃ぎて神を祭る。通俗編「—酒之制、應ニ昉ニ自古裸禮ニ」

八畫

【醃】エン アン 鹽 勘 ○鹽につける。又、其のつけもの(菹)○しほづけのうを(鹽漬魚)

【醃藏】 魚肉・野菜などをしほづけにしてたくはへる。

【醋】㊀サク・ザク ㊁ソ 藥 遇 ㊀客より主人に酒を酌む。又、酢に作る ㊁むくゆ(報)㊂す。=酢(酉部五畫)○醋—意は嫉妬心。

【醋酸】 無色酸性の液にて刺戟臭を有し、酢の主成分をなす、醫藥・染色・其の他工業上に用ふ。

【醆】サン・セン 潸 銑 ○さかづき(爵)=盞・琖。○微しく清める濁酒「醴—」

【醇】ジュン 眞 ○味の厚き酒「芳—」「—酒」「清—」○もっぱら(專)○まじりなし。純に通ず。○あつし(厚)淳に通ず。○くはし(精)易、繫辭「天地絪縕、萬物化—」○つつしみぶかし、てあつし(謹重)「—謹」

同訓異義 アツシ 醇・厚・篤・敦・淳・渥・腆の別は厚(三八四頁一段)の條を見よ。

【醇壹】 もっぱらにしてまことなり。漢書、史丹傳「詔曰、左將軍丹、往時導ㇾ朕以ニ中正ニ、秉ㇾ義——、舊德茂焉」

【醇謹】 てあつくしてつつしみぶかし。漢書、衞綰傳「——無ㇾ他」

【醇化】 ○てあつきをしへの感化。東京賦「淸風協ニ於玄德ニ、——通ニ於自然ニ」○哲學にて雜駁なる知識を分類して純粹に且つ組織的ならしむる作用。

【醇厚】 人情てあつくして輕薄ならず。漢書、景帝紀「黎民——」=醇篤。

【醇酒】 こくしてよきさけ。史、信陵君傳「飮ニ——ニ近ニ婦女ニ」

【醇儒】 純正にして雜駁ならざる學者。漢書、賈山傳「涉ニ獵書記ニ、不ㇾ能ㇾ爲ニ——ニ」=純儒。

【醇醇】 てあつき貌。老子「其政悶悶、其民——」

【醇粹】 精しくしてまじりけなし。書經、傳「王之政事——」

【醇酎】 よき酒の名。西京雜記「漢制以ニ正月旦ニ造ㇾ酒、八月成、名曰ニ九醞ニ、一名ニ——ニ」

【醇醲】 ○味の濃き酒、厚酒。=醇醪。○轉じて民の風俗の馴謹なるに喩ふ。張衡賦「奢ニ馴風之——ニ」

【醇篤】 てあつくねんごろ。朱熹文「孝謹——、雖ニ古人ニ猶難ㇾ之」=醇厚。

【醇美】 純粹にしてうるはし。晉書、阮种傳「播ニ——之化ニ、杜ニ邪枉之路ニ」=純美。

【醇備】 粹美にして闕失なし。漢書、王莽傳「德行——、靡ㇾ有ニ愆失ニ」

【醇朴】 人情がてあつくしてかざりなし。朱熹詩「風俗頗——」=淳朴・淳樸・質朴。

【醇味】 よき酒のあぢはひ。梅堯臣詩「上樽——易ニ酡顏ニ」

【醇醪】 うまき酒、醪はにごり酒。漢書、袁盎傳「買ニ二石——ニ」

【若ㇾ飮ニ醇醪ニ】 よき酒を飲む

が如く自然に其の人の德に化せらるるをいふ。吳志、周瑜傳「告ㇾ人曰、與ニ周公瑾ニ交、——、不ㇾ覺ニ自醉ニ」公瑾は瑜の字。

【醇醨】 ○こきさけと、うすきさけと。○轉じて、風俗の厚きと薄きと。爾雅正義、序「——既異、步驟不ㇾ同」

【醇醴】 ○厚き淸酒と、あまざけと。列仙傳、酒客贊「——殊ㇾ味」○濃厚なるあまざけ。杜預、酒論「重醞——」

【醉】スヰ 寘 醉は俗字 ○ゑふ、酒にゑふ「酣—」「大—」「泥—」「昏—」「歡—」「爛—」詩、大雅「既—以ㇾ酒」○心が物に耽り迷ふ「心—」文中子、事君「心—ニ六經ニ」○ゑはす。○ゑひ「宿—」「買—」

【醉暈】 酒にゑひて目がくらむ。劉因詩「蒼涼蘇ニ病骨ニ、——浮ニ晶幽ニ」

【醉翁】 ○酒にゑひたるおきな。○歐陽修の別號。鄭谷文「歐陽修自號ニ——ニ、作ニ——亭記ニ」

【醉翁亭】 安徽省滁縣の西南に在り、宋の僧智僊建つ、歐陽修滁州の知たりし時、此に飲宴して記あり。

【醉歌】 酒にゑひてうたふ。王維詩「——田舍酒、笑讀古人書」

【醉渴】 酒にゑひて、のどがかわく。徐夤詩「錦里只聞澮ニ——ニ」=酒渇。

【醉眼】 酒にゑひたる時のまなこ。蘇軾詩「——朦朧覓ニ歸路ニ」=醉眸。

【醉漢】 さけにゑひたる男。開天遺事「李林甫議ㇾ事、如ニ——囈語ニ也」=醉人。

【醉顏】 酒にゑひたるかほいろ。白居易詩「春寒散ニ——ニ」

【醉吟】 ゑひて詩をうたふ。鄭谷詩「紅葉黃花秋景寬、——朝夕在ニ樊川ニ」

【醉吟先生】 ○唐の白樂天の號。唐書、白居易傳「居ㇾ官輒病去、遂無ニ立ニ功名ニ意ニ、與ニ弟行簡從祖弟敏中ニ友愛、東都所ㇾ居履道里、疏ㇾ沼種ㇾ樹構ニ石樓ニ、香山鑿ニ八節灘ニ、自號ニ——ニ、爲ニ之傳ニ、暮節稱ニ香山居士ニ」白氏長慶集に、醉吟先生傳を載す。○唐の皮日休の號。唐才子傳「皮日休隱ニ鹿門山ニ、性嗜ㇾ酒癖ㇾ詩、號ニ——、又自稱ニ醉士ニ」

【醉狂】 ○酒にゑひてくるふ。白居易詩「無ニ日花開不ニ——ニ」○國ものずき(好事)

【醉鄉】 醉中の快樂を一種の別天地に比していふ。隋の王績に——記の文あり。曰く「醉之鄉去ニ中國ニ、不ㇾ知ニ其幾千里ニ也、其土曠然無ㇾ涯、無ニ丘陵阪險ニ、其氣和平一揆、無ニ晦朔寒暑ニ、其俗大同、無ニ邑居聚落ニ、其人甚淸云云」=酒國。

【醉脚】 酒にゑひてよろめく足。陸龜蒙詩「——從ニ欹傾ニ」

【醉臥】 酒にゑひてねむる。史、高祖紀「常從ニ王媼武負ニ貰ㇾ酒——、武負王媼、見ニ其上常有ㇾ龍、怪ㇾ之」=酣臥。

【醉月】 月を觀つつ酒にゑふ。李白文「飛ニ羽觴ニ而—ㇾ—」

【醉戶】 酒のみ。白居易の自稱。皮日休詩、注「白樂天自稱ニ——ニ」

【醉語】 酒にゑひて語ることば。韓偓詩「——近ニ天眞ニ」

【醉侯】 劉伶の自稱。皮日休詩、注「劉伶自稱ニ——ニ」

【醉殺】 酒によはせる、殺は助字。賈至詩「——長安輕薄兒」

【醉人】 酒にゑひたる人。酉陽雜俎「如ニ——ニ」=醉士・醉客・醉漢。

【醉者神全】 酒に醉ひたる人は私意なし、故に其の精神全し。列、黃帝「夫醉者之墜ニ於車ニ也、雖ㇾ疾不ㇾ死、骨節與ㇾ人同、而犯害與ㇾ人異、其神全也、乘亦弗ㇾ知也、墜亦弗ㇾ知也、死生驚懼、不ㇾ入ニ乎其胸ニ、是故遻ㇾ物而不ㇾ慴、彼得ニ全於酒ニ、而猶若ㇾ是、而況得ニ全於天ニ乎」

【醉趣】 ゑひたる間のおもしろみ。司馬光詩「果使ニ屈原知ニ——ニ、當年不ㇾ作ニ獨醒人ニ」

【醉聖】 善く酒を飲みて心の亂れざるを譽めていふ。酒譜「李白每ニ醉爲ㇾ文、未ニ嘗差ニ、人目爲ニ——ニ」

【醉生夢死】 何の爲す所もなく醉夢中に在りて一生を終る。程子語錄「雖ニ高才明智ニ、膠ニ于見聞ニ、——、不ニ自覺ニ也」

【醉石】 陶淵明の醉後に眠りし石。廬山記「陶淵明所ㇾ居之栗里、有ニ大石ニ、淵明常醉眠ニ其上ニ、名曰ニ——ニ」

【醉態】 酒にゑひたる態度。白居易詩「野情遺ニ世累ニ、——任ニ天眞ニ」

【醉倒】 酒にゑひつぶれる。岑參詩「斗酒相逢須ニ——ニ」

【醉罵】 酒にゑひたる勢にてののしる。後漢書、班固傳「吏推呼ㇾ之、奴——」

【醉飽】 酒にゑひ食にあく。後漢書、左雄傳「百官莫ㇾ不ニ——ニ」

【醉貌】 酒にゑひたる容貌。白居易詩「——如ニ霜葉ニ、雖ㇾ紅不ニ是春ニ」

【醉筆】 酒にゑひてかきし筆蹟。蘇軾詩「——龍蛇走」=醉墨。

【醉朋】 酒のみなかま。法苑珠林「棄ニ——ニ、近ニ法友ニ」=酒徒。

【醉眸】 醉眼に同じ。眸はひとみ。

【醉墨】 醉ひて書きし筆蹟。歐陽修詩「新詩——時一揮」=醉瀋・醉筆。

【醉眠】 酒にゑひてねむる。杜甫詩「軟沙攲坐穩、冷石——醒」=醉臥。

【醉夢】 ゑひてゆめみるゆめ。蔡松年詩「枕上秋風吹ニ——ニ、門前沙鳥立ニ淸深ニ」

【醉面】 酒にゑひたるかほ。葛長庚

【酵】カウ　酒の表面に浮ぶ泡。

【酺】ホ　○酒の名。

【酴】ト　○酒の名。

【酥】ソ　○牛羊の乳汁を煎熬して製した食品。

【酬】シウ　○酒をすすめる。○報いる。

【酵】カウ　○酒母。

【酸】サン　○すっぱい。○悲しい。

【醋】ソ　○酢に同じ。

【醍】テイ　○醍醐。

【醐】ゴ　○醍醐。

【醒】セイ　○さめる。酒の酔が解ける。○目ざめる。

【醢】カイ　○肉醤。

【醪】ラウ　○もろみ酒。

【醯】ケイ　○酢。

【醴】レイ　○甘酒。

【醵】キョ　○金を出しあう。

【醸】ジョウ　○醸造する。

【醜】シウ　○みにくい。

【醫】イ　○いやす。

【醬】シャウ　○ひしお。

【醮】セウ　○祭る。

【醺】クン　○酔う。

【醴】レイ　○甘酒。

【醵】キョ　○金を出しあう。

【醸】ジョウ　○醸造する。

【醜】シウ　○みにくい。

【醫】イ　○いやす。

【醬】シャウ　○ひしお。

【醮】セウ　○祭る。

【醺】クン　○酔う。

【酵】カウ　酒母。

【酺】ホ　○酒の名。

【酴】ト　○酒の名。

【酥】ソ　○牛羊の乳汁を煎熬して製した食品。

【酬】シウ　○酒をすすめる。○報いる。

【酵】カウ　○酒母。

【酸】サン　○すっぱい。○悲しい。

【醋】ソ　○酢に同じ。

【醍】テイ　○醍醐。

【醐】ゴ　○醍醐。

【醒】セイ　○さめる。酒の酔が解ける。○目ざめる。

【醢】カイ　○肉醤。

【醪】ラウ　○もろみ酒。

【醯】ケイ　○酢。

【醴】レイ　○甘酒。

【醵】キョ　○金を出しあう。

【醸】ジョウ　○醸造する。

【醜】シウ　○みにくい。

【醫】イ　○いやす。

【醬】シャウ　○ひしお。

【醮】セウ　○祭る。

【醺】クン　○酔う。

隋書、宇文化及傳「所二共遊處一、皆不逞之徒(中略)蒸淫ーー無レ所レ不レ爲」

十一畫

【醫】㊀イ ㊁イ 支 紙 又、毉に作る

㊀いしゃ、くすし(治レ病工)「名ー」「良ー」「牛ー」「村ー」「庸ー」「瘍ー」「巫ー」○いやす、やまひを療治する。晉語「上醫ー國、其次救レ人」○轉じて廣く救ふ、なほして善くする義「ー渴」「ー國」㊁のみもの(飲料)○うめず(梅漿)○あまざけ。○ー和は春秋の時、秦の良醫。

同訓異義 イユル 醫・痊・已・愈・瘳・瘥・差・療の別は痊(一二八四頁四段)の條を見よ。

【醫院】病人を治療する家。

【醫學】病を治することを研究する科學。

【醫科】大學の七科の一、醫學・藥學の二門に分つ。

【醫レ國】國の亂れたるををさめる。晉語「上醫ーレー、其次救レ人」

【醫劑】くすり。唐書、李逢吉傳「自料二ーー一、遂通二方書一」

【醫草】もぐさ。本草「艾、一名冰臺、一名ーー、一名黃草、一名艾蒿」

【醫師】○周代の官名、いしゃのかしら。師は長(醫長)周禮、天官、注「ーー衆醫之長」○いしゃ(醫者)=俗大夫(牙大夫は齒科醫)

【醫者】くすし、いし、病氣を治する人。=醫師。

【醫匠】醫生に同じ。いしゃ。

【醫術】病を治療する術。晉書、裴頠傳「通博多聞、兼明二ーー一」

【醫書】醫學の書物。

【醫生】○官學にて醫學を修める學生。唐六典「ーー四十人」○俗醫師。=醫匠。

【醫者意也】醫術の奥義は、意を以て自得すべく口舌にて傳へ難し。因話錄「許胤宗名醫、人問何不レ著レ書、曰、ーー、脈之深趣、不レ可二言傳一」

【醫方】病をいやす術。宋書、王微傳「兼解二音律ーー陰陽術數一」=醫術。

【醫伯】いしゃの美稱。=國手。

【醫不二三世一不レ服二其藥一】君父の病には三代もつづきて醫者をしてゐる程の經驗ある醫者の藥にあらざれば飮ましめず〔曲禮〕

【醫門多レ疾】醫者の門前には、病者が多く集まる。莊、人閒世「回(顏回)嘗聞二之夫子一、曰、治國去レ之、亂國就レ之、ーー、願以レ所レ聞思二其則一、庶二幾其國有一レ瘳乎」=良醫之門多二疾人一〔說苑、雜言〕

【醫癖】あしきくせを治療する。佀圓至詩「顧余丘壑癖、大藥不レーー」

【醫藥】醫術と藥品と。○又醫者の藥。史、三皇紀「神農氏嘗二百草一始有二ーー一」

【醫療】醫術にて治療す「ーー器械」

【醬】シヤウ 漾

○ししびしほ(醢)○しほづけ。○ひしほ、麥・麴・豆・米等をねかして鹽をまぜたる食料、菜肉などを漬ける料とするもの、みその類。論、鄕黨「不レ得二其ー一不レ食」○轉じて食物の搗き爛して泥の如き者を皆ーといふ。齊民要術に鰕ー・魚ーを作る法あり。○ー油はしたぢ、むらさき。

【醬油】圖煮たる大豆に熬りたる大麥と鹽とをまぜてかもしたる液、調味料として用ふ、したぢ。

【醭】ヘウ 篠

すみざけ(淸酒)「淸ー」

【醪】ラウ ロウ 豪

にごりざけ(濁酒)どぶろく「濁ー」「村ー」「醇ー」

【醪糒】にごりざけと、糒食との稱は糗ホシヒ。宋史、孫永傳「遼屯レ兵進レ營至二四十里一、永好論レ之、敵意解、但求二ーー一、犒レ師而旋」

【醨】リ 支 通じて漓に作る

○うすきさけ(薄酒)醇の對。楚辭、漁父「衆人皆醉、何不レ餔二其糟一而歠二其ー一」○轉じて人情の薄きにいふ。厚きを醇といふの對。醇ーは淳漓。

十二畫

【醯】ケイ・カイ キ 齊 支

○すし(酸)す(醋)論、公冶長「或乞二ー焉一」○しほから、汁の多き醢。

【醯雞】酒つぼなどにわく小蟲、かつをむし。列、天瑞「ーー生二乎酒一」=蠛蠓。

【醯雞甕裏天】かつをむしが酒のかめを以て天とする。見るところの小なるに喩ふ。黃庭堅詩「老蚌胎中珠是賊、ーー幾大」

【醯醬】汁の多きししびしほ。史、貨殖傳「ーー千瓨」

【醯醲】こきさけ。轉じて醇厚の義。仲長統文「ーー之化旣淡」

【醮】㊀セウ ㊁セウ 嘯 蕭

㊀つくす(盡)○酒を供へて神を祭る。○酒を酌みて酬ゆることなし、古、冠婚の禮、皆之を用ふ。家語、本命解「禮無二再ー之端一」(再ーは再婚)○僧又は道士が壇を設けて祈禱する。㊁やつれる、かじく。=憔。

【醰】㊀タン ㊁タン 勘 覃 感

㊀酒の味にがし。㊁あまし(甜美)厚き味。王褒賦「良ーー而有レ味」○こくしてよきさけ(醇)轉じて、てあつし。

【醰粹】あつくしてまざりけなし。左思、魏都賦「宅レ心ーー」=純美・醇粹。

【醱】ハツ 曷

酒を重ねてかもす(重釀)李白詩「恰似二蒲萄初ー醅一」

【醱酵】酒母の作用によりて酒氣がわきたつ。發酵の轉訛。

【醭】ボク 屋

かび、酒又は他の物の腐りて生ずる白きかび。○廣韻「醋生二白ー一」楊萬里詩「梅天筆墨多生レー」

十三畫

【醳】㊀エキ・ヤク ㊁セキ・シャク 陌 陌

㊀よきさけ(醇酒)○にがきさけ(苦酒)○ねぎらふ、酒食を以て兵をねぎらふ「ー兵」○ふるざけ(昔酒)○としこしざけ、冬かもして春熟する酒。㊁ゆるす、とく。釋の古字。史、張儀傳「共執二張儀一掠笞數百、不レ服、ー之」

【醳兵】酒食を以て兵士をねぎらひ養ふ。史、淮陰侯傳「百里之內、牛酒日至、以饗二士大夫一ーレー」

【醵】キャク キョ 藥 御

○金錢を出し合ひて飮食する。又、其の金錢。又、其の飮食物。○轉じて或目的の爲めに金錢を出し合ふ。

【醵金】金錢を出し合ふ。輟耕錄「今之遷レ居者、鄰里ーレー治レ具、過二主人一飮、謂二之煖屋一」

【醲】ヂョウ ノウ 冬

○こきさけ(厚酒)「醇ー」「村ー」○こし、こまやか。=濃。○味が濃厚なり、又其の味。○てあつし(厚)多し。後漢書、馬援傳「明主ー二于用レ賞、約二于用レ刑」

【沈二浸醲郁一】濃厚なる味にいりびたりになる。書中の妙所を十分に玩味するに喩ふ。韓愈、進學解「ーー、含二英咀一レ華」

【醴】レイ ライ 薺

○うまきさけ(甜酒)○ひとよざけ(一宿酒)あまざけ(甘酒)「甘ー」「芳ー」莊、山木「君子之交、淡若レ水、小人之交、甘若レー」○美く甘き水の出る泉。

【醴漿】あまざけ。列子「公孫朝好レ酒、朝之室、聚レ酒千鍾、積レ麴成レ封、望レ門百歩、ーー之氣、逆二于人鼻一」

【醴酒】あまざけ。漢書、楚元王傳「ーー不レ設、王之意怠、不レ去、楚人將レ鉗二我於市一」(ーー不レ設とは、師を待つ禮の衰ふるをいふ、初め楚の元王、申公等を敬禮す、穆生酒を嗜まず、元王置酒する每に、常に爲めに醴を設く、王戊位に卽くに及び、常に設く、後設くることを忘る、故に穆生此言あり)

【醴泉】あまきあぢのいづみ。禮、禮運「天降二膏露一、地出二ーー一」=甘泉。

【醴泉銘】卽ち九成宮ーー、唐の貞觀六年、太宗暑を九成宮に避け、泉を得て甘し、因りて醴泉と名づけ、魏徵に敕して銘を撰ばしめ、歐陽詢之を書して石に刻す、宮は今の陝西省麟遊縣に在り、醴圮已に久しく、石尙ほ在り、其の書法は唐楷第一と爲す。

【醴酪】あまざけと乳酪と。禮、禮運「以爲二ーー一」

十四畫

【醺】クン 文

○ゑふ(醉)「微ー」「餘ー」杜甫詩「愁多任二酒ー一」ゑはす。○酒を飮みて酒氣がぷんとする。○ーーは酒にゑひて和悅する貌。岑參詩「靑門酒樓上、欲レ別醉ーー」

【醻】シウ 尤

むくゆ(報)主人が客に返杯する「ー酢」詩、小雅「鐘鼓旣設、一朝ーレ之」=酬(ー酢は酬酢)

十六畫

【醼】宴(四九二頁四段)に同じ。

十七畫

【釀】ヂヤウ 篆
○かもす（醞）酒を造る「—造」○轉じてさけ（酒）をいふ「家—」「村—」「春—」「新—」○つくり成す、構へ成す「—禍」「—怨」蘇軾詩「醞—老夫成搢紳」

【釀甕】さけをつくるかめ。唐書、后妃傳「反接置—中、曰、令姫骨醉數日死」

【釀具】酒を造る道具。世說「蜀禁酒、吏得—具、欲罪之」

【釀造】酒・醬油などをかもしつくる。＝造釀。

【釀酒】さけをかもす。史、孟嘗君傳「乃多—、買肥牛」魏文帝文「葡萄釀以爲酒、甘於麴糵」杜荀鶴詩「石泉春—、松火夜煎茶」

【釀費】さけをかもす費用。唐書、食貨志「凡天下榷酒爲錢百五十六萬餘緡、而——居三之一」

【釀母】酒をかもすもと。＝酒母・酵母・釀母菌。

【釀王】唐の汝陽王璡の自稱。醉仙記「汝陽王璡家有酒法、號甘露經、自稱——兼麴部尚書」

【醾】ビ 支 又、醿・醿に作る
○酴醾はにごりざけ、麥酒の滓を去らざるもの（濁醪）○重ねてかもしたるさけ（重釀酒）○蔓生の灌木、初夏花開く白くして微に青みあり。歲時記「本酒名、以花色似故名」＝荼蘼。

【醿】醾（前條）に同じ。

【醽】レイ 青 又、醽に作る
○こしざけ（漉酒）○よきさけ（美酒）

【醽醁】よきさけ。抱朴子、嘉遁「寒泉旨於——」＝醽淥。

十八畫

【釁】キン 震 或は衅に作る
○ちぬる。ちまつり（血祭）牲の血を器に塗りて神を祭る。孟、梁惠王「將以釁鐘」○きず（瑕）「瑕—」「疵—」○ひま、すきま（隙）左、桓八「讐有—、不可失也」○なかたがひ、不和、怨隙。○香料をからだに塗る、香にてふすべる。齊語「三—三浴之」○つみ（罪）「罪—」「過—」○きざし（兆）「妖—」○うごく（動）左、襄二六「夫小人之性、—於勇」

【觀釁而動】敵のすきまをうかがひて兵を動かす。次條參看。

【觀釁】乘ずべき敵のすきまをうかがふ。左、宣十二「用師觀—而動」＝闚釁・闞釁。

【釁隙】すきま。轉じてなかたがひ。世說補「張丞相與吾——甚深」＝釁郤。

【釁鼓】古、戰爭の時に、牲を殺して祭り、其の血を以て鼓に塗る。左傳「君以軍行、祓社——」史、高祖紀「祭蚩尤於沛庭、而——」

【釁鐘】かねに牲の血をぬる。孟、梁惠王「牛何之、對曰、將以——」

【釁端】あらそひのいとぐち。春秋胡傳「楚子不假道于宋、以啓——、而潤之」＝衅端。

【釁浴】香を身にぬりふすべ、湯にて身を滌める。釁は熏。齊語「比至三釁三浴之」＝三浴三熏。

【釂】セウ 嘯
杯の酒を飲み盡す。曲禮「長者擧未—、少者不敢飮」註「盡爵曰—」

十九畫

【釃】シ ショ 紙 寘 魚
○こす、したむ、筐にて酒をこす。○わかつ（分）漢書、溝洫志「乃—二渠以引其河」

【釃酒】○酒を筐にてこす。詩經「——有衍」○酒を分ちつぐ。宋史、曹琮傳「懷以恩信、擊牛——犒之」

【釄】醾（本頁一段）に同じ。

二十畫

【釅】ゲン 豔
○す（酢漿）○こきさけ（醲）

【釅茶】濃きちや。指月錄「仰山禪師曰、——三兩碗、意在钁頭邊」

釆部

【釆】ヘン ベン 諫 辨の本字
○わかつ（辨別）わかる。○國ノゴメノ米の義、漢字の字畫上の稱。悉・審・釋等の字、皆此に从ふ。

一畫

【采】㊀サイ ㊁サイ 賄 隊
㊀とる（採）「樵—」手に取る、爪にてもぎとる（捋取）詩、周南「—卷耳」○えらぶ（擇）○こと（事）しごと。○やくめ、官職。書、堯典「疇咨若予—」○かたち、やうす「風—」○あや、もやう（文章）○かざり（飾）○いろどり。彩に通ず「—色」○はかば（墓地）○ぬさ（幣）彩色せる帛。綵に通ず。○ちぎやうしよ（知行所）「—地」「—邑」臣下の領地、食邑。禮、禮運「大夫有—、以處子孫」○くぬぎ（櫟木）○すごろくの骰子「—」○——は多くある貌。又、華やかに飾れる貌。又、盛んなる貌。㊁ちぎやうしよ。○つかさ。○古、菜に通ず。周禮、春官「春入學、舍—合舞」舍—は釋菜。○國—配は昔の戰具、細長き紙のたばに勝軍木の柄をつけたるもの、兵を指揮するに用ふ。

解字 采は捋取なり、爪に从ひ木に从ふ。釆（前條）とは別。

同訓異義 トル 采・採・取・執・秉・把等の別は取（二九三頁二段）の條を見よ。

【采衣】いろどりたる著物。儀禮、注「——、未冠者所服」＝綵衣。

【采邑】采地に同じ。＝食邑・封邑。

【采旌】いろどれるはた。東觀漢紀「段熲爲幷州刺史、曲蓋——」

【采芹】學校に入る義。詩、魯頌「思樂泮水、薄采其芹」とあるに本づく。泮水は泮宮（諸侯の學舍）の東西門以南に通ずる水。＝入泮。

【采菌】きのこをとる。賈島詩「——依餘枿、拾薪逢刈田」

【采畫】いろどれるゑ。諸葛亮文「鬒髮鬢眉冠裳、宛然如——者」

【采纈】いろどれるしぼり。秦觀詩「鮮粧耀——、綠酒生風瀾」

【采采】○とりとる、重ねて多く取る。詩、周南「——芣苢」○盛んなる貌。詩、秦風「蒹葭——」＝萋萋。○衆き貌。詩、曹風「——衣服」一說、華やかに飾れる貌。

【采詩】民間に行はるる歌詩をとりあつめて風俗を察し、施政の參考とする。漢書、藝文志「古有——之官、王者所以觀風俗、知得失、自考正也」

【采集】とりあつめる。采、俗に採に作る。劉歆文「子雲獨——先代絕言、異國殊語、以爲十五卷」

【采緝】○とりあつめる。宋史、楊徽之傳「詔李昉等——前代文字、類爲文苑英華、以徽之精於風雅、分命編詩、爲百八十卷」○麻を績ぎて縷と爲す。李白詩「閨人費素手、——作絺綌」

【采薪之憂】病を稱する謙辭、病みて薪を採ること能はざる義。一說、薪を采る爲めに疲れて病む義。孟、公孫丑「有————、不能造朝」

【采色】○五色をとりまぜたる美しき色どり。孟、梁惠王「抑爲——不足視於目與」○かほいろ、風采顏色。

【采色不定】喜怒常なきをいふ、采色は顏色。莊子「————、常人之所不違」

【采飾】いろどりかざる。西京賦「故其館室次舍、——纖縟」

【采摭】ひろひ取る。文心雕龍「——英華」＝摭拾・採拾。

【采石磯】牛渚山の下の江中に突出せる磯の名、宋の虞允文が大に金の軍を取りし處。

【采牋】五色にていろどれるふだ、牋は詩などを書くいろどれる紙。＝華牋・五色牋（唐書、韋陟傳）

【采地】卿大夫のちぎやうしよ（知行所）采は官、官によりて地を食む義。漢書、刑法志「此卿大夫——之大者也」＝食邑・采邑。

【采女】○漢代の女官。采擇せし女の義。後漢書、皇后紀論「匿美人宮人——三等」○國ウネメ 古、後宮にて御膳のことに預かりし女官の稱。

【采椽】采卽ち櫟の鉋を施さざるたるき。一說、山より伐採し來りしままのたるき。質素なる建築の義。韓非、五蠹「堯之有天下也、茅茨不翦、——不斲」＝棌椽。

【采配】國大將が士卒を指揮する時にうちふる具、さしづばた、ざい。

【采芳】香はしき草をとる。陳陶詩「吳洲——客、桂棹木蘭船」

【采旄】いろどれるはた。楚辭「建雄虹之——兮、五色雜而炫耀」

【采薇歌】周の武王殷に代りて立つに及び、伯夷・叔齊、周の粟を食ふことを恥ぢ、首陽山に隱れ薇を采りて食ひ、死に臨みて作りし歌。史、伯夷傳「武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之、及餓且死作歌、其辭曰、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸乎、于嗟徂兮、命之衰矣、遂餓死於首陽山」

【采蘋】詩經の篇名。大夫の妻が、文王の化を被りて能く祭祀に奉ずることを言ふ。蘋は水草の清くして神に薦むべきもの。

【采萍】うきくさをとる。李華詩「自言浜水曲、采萍兼采綠」

【采葑】葑（二六六二頁一段）の條を見よ。

【采毛】いろどりあるけ。射雉賦「聿——之英麗兮、有五色之名翬」

【采名】ほまれをとる。漢書、終軍傳「將幸誅不加、欲以——也」＝干名。

【釆用】えらびとりもちふる。後漢書、馬防傳「數言ニ政事ㇾ多見ニ—用ㇾ」＝採用。

五　畫

【釉】イウ　宥

○つや、ひかり（光澤）○陶器にかけて光澤を生ぜしむる藥、うはぐすり「—藥」＝油。

十三畫

【釋】㊀セキ・シャク　㊁エキ　陌　陌

㊀とく（解）意味を解きあかす。ときあかし「注—」「解—」「—義」○すてる（捨）管子、霸形「—實而攻ㇾ虛、—堅而攻ㇾ脆」やめる（廢）○きゆ、とける（消）「氷—」「消—」○疑はれる。○ゆるむ（緩）○ちる（散）散らす。漢書、谷永傳「慰ニ—皇太后之憂慍ニ」○ゆるす（舍）○はなつ（放）「—放」○はづす、ぬぐ。ぬがす。○さる（去）○いる（發射）○のこす（遺）○うるほふ（潤）○米をとぐ（淅米）詩、大雅「—ㇾ之叟叟」傳「—、淅米也」○したがふ（從）○さとる（悟）○おく（置・舍）「—菜」「—奠」○—迦は佛の稱號、釋迦牟尼。略して—といひ、轉じて廣く佛法又は僧家の稱とす「—教」「—氏」㊁よろこぶ（悅）「懌—」＝懌。

同訓異義　スユル　釋・赦・宥・聽・允・許・放・縱・原・免等の別は赦（一八八四頁三段）の條を見よ。

【釋菜】牛羊等の牲を供へず、菜蔬の類を供へて孔子を祭るをいふ。祭の輕きもの。禮、文王世子「始立ㇾ學者、既興ㇾ器用ㇾ幣、然後—ㇾ—」（與は釁ルス）＝舍菜。

【釋奠】二字共に置く義、供物を神前にささげ置きて孔子を祭る禮。禮、文王世子「凡學春官、—ニ—于其先師一、秋冬亦如ㇾ之」我國にては文武天皇の時に始り、陰暦二月・八月の上の丁日に大學寮にて行ひ、十哲を配祀す。

【釋褐】褐は賤者の著るもの。之を釋ぎて官服を著くる、始めて仕宦する義。揚雄、解嘲「或—ㇾ—而傳」正字通「士初入仕、謂ニ之——」

【釋甲】よろひをぬぐ。左傳「公徒—ㇾ—」

【釋ㇾ憾】心に怨恨する所あり、事に因りて之を消釋するをいふ。左傳「請君—ニ—于宋一」

【釋義】義理をときあかす。北史、魏孝文帝紀「善談ニ莊老一、尤精ニ——」＝解義。

【釋教】釋迦のをしへ。高僧傳「周孔所ㇾ言、略示ニ近迹一、至ニ于——一、則備極ニ幽微一」＝佛教・佛法。

【釋言】いひわけする。國語「使ニ行人奚斯—ニ—於齊一」

【釋像】釋加の肖像。喬宇、遊ニ攝山一記「殿後有ニ石浮圖一、數丈、極精巧、鑿ニ——於上一寸許者、眉髮皆具」

【釋藏】大藏經をいふ、宋・元・明皆雕本あり。八千五百三十四卷。

【釋子】出家をいふ。＝僧徒・僧侶・沙門。

【釋氏】○佛、釋迦如來。晉書、何充傳「何充與ニ弟準一、崇ニ信——一」○佛家、佛徒。王惲詩「慈恩——覃」

【釋旨】佛教のむね。張蠙詩「高談窮ニ——一、淸思掩ニ詩流一」

【釋然】○心がさっぱりと爽かになる貌。○心がうちとける貌。莊、庚桑楚「南面而不ニ——一」

【釋尊】釋迦牟尼世尊の略。

【釋智】智識をすてる。賈誼、鵩賦「—ㇾ—遺ㇾ形兮、超然自喪」＝捨ㇾ智。

【釋難】かたき所をすてる。管子、霸形「釋ㇾ堅而攻ㇾ難、—ㇾ—而攻ㇾ易」

【釋放】罪人をゆるしはなつ、放免する。吳志、呂蒙傳「誅ニ其首惡一、餘皆——、復爲ニ平民一」

【釋法】おきてをすてる。韓非子「人主—ㇾ—用ㇾ私、則上下不ㇾ別矣」

【釋梵】ほとけ。劉潛文「——事ニ其身光一」

【釋名】書名、八卷、後漢の劉熙著す、爾雅に倣ひて訓詁を說明す。

【釋門】佛の道を奉ずる者。＝桑門・佛門。

【釋耒】すきをすてて田を耕すをやめる。史、酈食其傳「兩雄不ニ俱立一、楚漢相持不ㇾ決、百姓騷動、海內搖蕩、農夫—ㇾ—、工女下ㇾ機」＝輟耒。

【釋老】釋迦と老子と。又、其の道。周書、武帝紀「討ニ論——義一」＝佛老。

【釋迦】○印度の一種族の名。○佛教の開祖——牟尼の略。幼名は悉達、周の靈王の時に生る、父は淨飯王、北印度の迦毘羅城の主たり、母は摩耶夫人。＝釋加文佛・釋尊。

里　部

【里】リ　紙

○さと、むらざと「村—」「田—」「邑—」○周代の行政區劃、二十五家の稱「鄰—」周禮、地官「五家爲ㇾ鄰、五鄰爲ㇾ里」○ゐどころ「鄕—」○みちのり「—程」「道—」三十六町を一—とす。支那の一—は我が凡六町。○うれふ（憂）悝に通ず。詩、大雅「瞻ニ卬昊天一、云如何—」○蒿—は葬を送るにうたふ歌。○古、夫が妻を稱して鄕—といふ。南史、張彪傳「我不ㇾ忍ㇾ令ニ鄕—落ニ它處一」國○嫁・壻などが己の實家を稱する語。○子の養育を託する家「—子」「—にやる」

【里尹】里正に同じ、尹はつかさ。禮記、鄭注「——、閭胥里宰之屬」

【里巷】むらざと。韓愈、柳子厚墓誌銘「平居——相慕悅」

【里閈】里門に同じ。閈は閭、鄕里の義とす。後漢書、成武侯順傳「順與ニ光武一同ニ——一」＝里閭。

【里居】○官を罷めて田里に居住する、致仕者をいふ。書經「百姓——」○人家の相連りて居る義。文中子「人不ニ——一、田不ニ井授一」

【里君】里長に同じ。逸周書「邑乃命ニ百姓一、遂享ニ於家一、閭率・——、以爲ニ之資一」＝村長・里宰。

【里諺】ゐなかのことわざ。漢書、賈誼傳「——曰、欲ㇾ投ㇾ鼠而忌ㇾ器、是善諭也」

【里堠】いちりづか。王晉文「自ㇾ此入ㇾ山、詰曲登陟、無ニ復——一」

【里耳】俗人のみみ。莊、天地「大聲不ㇾ入ニ于——一」里一に、俚に作る。

【里人】むらざとの人。莊、庚桑楚「——有ㇾ病」

【里社】里中にて土地の神を祭るやしろ。史、封禪書「民——各自財以祠」漢書、陳平傳「里中社、平爲ㇾ宰、分ㇾ肉甚均」

【里塾】村の學校。任昉文「鄕校——、恥ㇾ談ニ五霸一」＝村塾・鄕塾・村學。

【里胥】村やくにん、胥は小役人。漢書「——平旦坐ニ於右塾一」＝村吏・村胥。

【里數】みちのりのかず。元史、地理志「有ニ難ニ以ニ——一限上者甲矣」

【里正】むらのをさ。杜甫詩「去時——爲裹頭」＝里長・村長・村甲・里尹。

【里俗】むらざとのならはし、むらざとの風俗。

【里長】さとのかしら。古、二十五家を一里として——を置く。＝里宰・里魁。

【里程】みちのり「——標」＝道程・路程。

【里布】周代の制度、宅地に植林せざる者より出さしむる稅（周禮、地官）

【里門】○さとのもん。史、萬石君傳「入ニ——一、趨至ㇾ家」＝里閭。○轉じて鄕里の義。

【里落】むらざと。後漢書、孫期傳「——化ニ其仁讓一」＝村落・邑落・閭里。

【里閭】○さとのもん。左思、魏都賦「班ㇾ之以ニ——一」＝里門。○むらざと。陸龜蒙詩「若到ニ淸潭畔一、儒風變ニ——一」＝閭里・里巷。

二　畫

【重】㊀チョウ　宋　腫　㊁チョウ　冬　通音 ヂュウ

㊀おもし。輕の對。禮、王制「輕任幷、—任分」○あつし（厚）おもおもしくおちついてゐる。輕率ならず「—厚」「愼—」「嚴—」「威—」「沈—」論、學而「君子不ㇾ—則不ㇾ威」○はばかる（難）漢書、淮南王傳「文帝—ニ自切ニ責之一」○すなほ、まめやか。○たふとぶ（尙・貴）おもんず。○ます（益）○しばしば（數）○ふかし（深）○はなはだ（甚）禮、檀弓「壹似ニ—有ㇾ憂者一」○おほいなり（大）○ただし（貞）○おもさ。又、おもきもの。○にもつ。○のろし、ゆるし（緩）○よし（善）㊁おほし（多）○かさぬ（複・累）かさなる「—疊」「—三」「—陽」○はらむ（孕）「身—」○おくて、穀物の後れて熟するもの。○國かさなるものの其の一つ「三—」「七—」

【重衣】○ころもをかさねる。○ころものかさね。陳陶詩「朔風無ニ——一、僕馬飢且寒」＝襲衣。

【重位】貴く重きくらゐ。魏書、常景傳「有ニ高才一而無ニ——一」＝高位。

【重圍】いくへにもとりかこむ。劉長卿詩「手中無ニ尺鐵一、徒欲ㇾ突ニ——一」

【重闈】○幾重にもかさなれる門。○奧深き宮殿。吳志、賀邵傳「潛ニ處——之內一」＝深宮。○祖父母の稱。父母を庭闈といふの對。

【重裀】○かさねぶとん。裀はしきもの。宋史、趙普傳「設ニ——一地坐、堂中熾ㇾ炭」○座蒲團を重ねる。

【重穎】禾穗の末の重く熟したる義。陸機詩「嘉禾垂ニ——一」

【重要】大切・大事。

【重淵】極めて深きふち。九淵（六六頁二段）參看。

【重檐】かさなりたるのき。虞世南詩「萬瓦宵光曙、——夕霧收」＝層檐。

【重緣】圖ニ重のえんぐみをする。親類同士にて重ねて緣を結ぶ。＝重親。

【重恩】おもきめぐみ、高大なる恩。魏書、李崇傳「受ニ國——一」＝

【重恩】おもきめぐみ。‖大恩・重徳。
【重病】おもきやまひ。‖大患・重病。
【重出】かさねて出る。論語、義流「此語亦述一一拳拳文」臣鑑門参多文頌、頼皆一一」
【重衾】ふすま。〇重ねて婚姻を結ぶ。‖再婚。〇配偶者ある者が更に他の者と結婚する。〇重婚に同じ。
【重訳】おもきわけ。〇重ねて訳す。‖再訳。
【重科】おもきとが。‖重罪。
【重民】民を愛して農業をすすめる。管子「軽重民者」軽民は商人)
【重明】〇日月ならび照りて光明なる。‖重光。
【重門】かさねもん。〇門を設けて非常を警戒する。易「重門撃柝」
【重陽】陰暦九月九日の節句。九は陽数。漢六臣注文選、張衡「南都賦」「一一重九。
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重用】おもくもちふ。重く用ふる。高官に任用する。
【重雍】雍睦。
【重病】おもきやまひ。‖大患・重病。
【重服】おももおもしく、てあつい。
【重裘】おもきかわごろも。〇周の初一少ノ文「重裘而天下太蔵」注、羊、目ニ一毛ニ〇十羊の羊ノ文王武王宣ニ一
【重創】ずきずきの上にずきずきかさねる。〇数箇所ニ一毛ニ〇古ノ不ノ一ノ史、守文ノ時ニ一毛ニ〇古ノ不ノ一ノ
【重三】‖重陽。
【重三】陰暦三月三日の節句。詩「暮春三月日一ノ」‖上巳。
【重任】かるい。現固文「数出ニ一前後相ノ勢ニ一其上ニ‖重責。
【重視】重要の任務を帯びたる使。
【重趼】ノ胼胝而厚く相摩する。左傳「衛侯飲ニ孔ニ酒厚ク相摩ノ一ノ之
【重囚】おもき罪を犯したる人。宋史、李衡傳「衡知ニ慶陽縣ニ事以ニ誠意ニ化民、庭任四年、獄月未ニ曾繋ニ一一」
【重十】十月十日。‖陵雲台賦「高会ニ呂ニ五日生ニ以ニ命恩ニ終ニ之十月十日ニ」注「蔵室本五月十日放有ニ一之句」
【重身】身おも、はらむ。素問「婦人ニ一」
【重親】〇重縁に同じ。〇祖父母と父母とを併せていふ。漢書、金ノ磾ノ一一、致ノ位ニ
【重喪】おもきもの。‖重服。
【重喪】陰暦五月五日の節句。‖端午・重午。
【重午】‖重五。
【重厄】さかうのおもきもの。
【重恩】おもきめぐみ。‖大恩・重徳。
【重病】おもきやまひ。‖大患・重病。
【重出】かさねて出る。論語、義流「此語亦述一一拳拳文」臣鑑門参多文頌、頼皆一一」
【重衾】〇重ねて婚姻を結ぶ。‖再婚。〇配偶者ある者が更に他の者と結婚する。〇重婚に同じ。
【重訳】おもきわけ。〇重ねて訳す。‖再訳。
【重科】おもきとが。‖重罪。
【重民】民を愛して農業をすすめる。管子「軽重民者」軽民は商人)
【重明】〇日月ならび照りて光明なる。‖重光。
【重門】かさねもん。〇門を設けて非常を警戒する。易「重門撃柝」
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重用】おもくもちふ。重く用ふる。高官に任用する。
【重雍】雍睦。
【重病】おもきやまひ。‖大患・重病。
【重出】かさねて出る。論語、義流「此語亦述一一拳拳文」臣鑑門参多文頌、頼皆一一」
【重衾】〇重ねて婚姻を結ぶ。‖再婚。〇配偶者ある者が更に他の者と結婚する。〇重婚に同じ。
【重訳】おもきわけ。〇重ねて訳す。‖再訳。
【重科】おもきとが。‖重罪。
【重民】民を愛して農業をすすめる。管子「軽重民者」軽民は商人)
【重明】〇日月ならび照りて光明なる。‖重光。
【重門】かさねもん。〇門を設けて非常を警戒する。易「重門撃柝」
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重用】おもくもちふ。重く用ふる。高官に任用する。
【重雍】雍睦。
【重病】おもきやまひ。‖大患・重病。
【重出】かさねて出る。論語、義流「此語亦述一一拳拳文」臣鑑門参多文頌、頼皆一一」
【重衾】〇重ねて婚姻を結ぶ。‖再婚。〇配偶者ある者が更に他の者と結婚する。〇重婚に同じ。
【重訳】おもきわけ。〇重ねて訳す。‖再訳。
【重科】おもきとが。‖重罪。
【重民】民を愛して農業をすすめる。管子「軽重民者」軽民は商人)
【重明】〇日月ならび照りて光明なる。‖重光。
【重門】かさねもん。〇門を設けて非常を警戒する。易「重門撃柝」
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重用】おもくもちふ。重く用ふる。高官に任用する。
【重雍】雍睦。
【重病】おもきやまひ。‖大患・重病。
【重出】かさねて出る。論語、義流「此語亦述一一拳拳文」臣鑑門参多文頌、頼皆一一」
【重衾】〇重ねて婚姻を結ぶ。‖再婚。〇配偶者ある者が更に他の者と結婚する。〇重婚に同じ。
【重訳】おもきわけ。〇重ねて訳す。‖再訳。
【重科】おもきとが。‖重罪。
【重民】民を愛して農業をすすめる。管子「軽重民者」軽民は商人)
【重明】〇日月ならび照りて光明なる。‖重光。
【重門】かさねもん。〇門を設けて非常を警戒する。易「重門撃柝」
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重用】おもくもちふ。重く用ふる。高官に任用する。
【重雍】雍睦。
【重病】おもきやまひ。‖大患・重病。
【重出】かさねて出る。論語、義流「此語亦述一一拳拳文」臣鑑門参多文頌、頼皆一一」
【重衾】〇重ねて婚姻を結ぶ。‖再婚。〇配偶者ある者が更に他の者と結婚する。〇重婚に同じ。
【重訳】おもきわけ。〇重ねて訳す。‖再訳。
【重科】おもきとが。‖重罪。
【重民】民を愛して農業をすすめる。管子「軽重民者」軽民は商人)
【重明】〇日月ならび照りて光明なる。‖重光。
【重門】かさねもん。〇門を設けて非常を警戒する。易「重門撃柝」
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。
【重陽】陰暦九月九日の節句。‖重九。

【重代】圖先祖代代。＝累世。
【重體】圖病が重くなる、危篤。＝重態。
【重譴】おもきつみ。蘇舜欽詩「識暮被二重譴一、狼狽來二中哭一」
【重炭酸曹達】白色粉狀の醫藥、重炭酸ナトリウム、重曹。
【重鎭】○おもきおさへ。兵權を執りて要地に據る者。唐書、韓弘傳「二父居二重鎭一」杜甫詩「重鎭還須二濟世才一」○轉じて一方のおさへとなる者。＝柱石。
【重點】物理學にて槓杆を以て動かさんとする物體のかかる點。
【重任】おもきやくめ。東京賦「荷二天下之重任一、匪二怠皇以寧靜一」＝重寄。
【重砲】口徑九糎以上の大砲。
【重望】おもき人望。老學庵筆記「張魏公有二重望一」
【重犯】おもきつみ、重き犯罪。＝重罪。
【重藩】權勢つよき藩鎭。又、其の大名の地位。舊唐書、牛僧孺傳「嫌レ處二重藩一、求レ歸二散地一」
【重病】おもきやまひ。法苑珠林「得二重病一」＝大病・大患・重患・重疾。
【重役】○重きやくめ。又其の人。○圖銀行會社などの重要なる役員。
【重油】石油より揮發油・輕油を取り去りし黑褐色濃厚の殘油。＝重石油。
【重利】○利息計算法の一、利息に利息をつけ加へる。＝複利。○多く取る利。○利をおもんずる。白居易、琵琶行「商人重レ利輕二別離一」
【重量】おもみ、めかた。
【重力】物體のおもさ。
【負レ重渉レ遠】重荷をおうて遠地に行く。家語、致思「子路見二孔子一曰、負レ重渉レ遠、不レ擇レ地而休、家貧親老、不レ擇レ祿而仕」
【重以周】自ら聖賢の道を以ておもく任じ、一藝一善をもみなあまねくよくせんとする〔韓愈、原毀〕

四畫

【野】ヤ　馬　埜は古字

○の、のはら「原野」「荒野」「桑野」「廣野」○まちはづれ（郊外）ゐなか「四野」「郊野」詩、魯頌「在二坰之野一」傳「邑外曰レ郊、郊外曰レ野」○かざりなし、ゐなかびてゐる（朴質）論、公冶長「質勝レ文則野」○いやし（鄙）○人文の開けざるにいふ。文の對「野蠻」「文野」○民間。朝の對「朝野」「在野」○王城を距る二百里以外三百里に至る間をいふ。○そむきたがふ、非望を企てる。○星のやどりを土地にわりあてたる稱「分野」

同訓異義 野・賤・卑・陋・鄙・固の別は賤（一八七六頁三段）の條を見よ。

【野靄】のはらのもや。岑參詩「野靄晴拂レ枕、客帆遙入レ軒」
【野意】のべの閑かなる心。僧皎然詩「寂歷秋花野意多」＝野情。
【野遊】のあそび。說苑「野遊則馳二騁弋二獵乎平原廣囿一、格二猛獸一」
【野嫗】ゐなかのばば。陳孚詩「野嫗碧裙襦」＝村嫗・野婆。
【野雲】野にたなびくくも。韋莊詩「靜極卻嫌流水鬧、閑多翻笑野雲忙」
【野營】軍隊がのはらにやどりてとまる。曹唐詩「野營軒地鼓如レ雷」＝露營。
【野煙】のべにたつけむり。張旭詩「隱隱飛橋隔二野煙一」
【野翁】ゐなかおやぢ。白居易詩「昔是朝官今野翁」＝田翁・野叟・野老・村翁。
【野歌】ゐなかの人のうたふ歌。陸游詩「野歌相應路高低」＝山歌。
【野蛾】蝶の異名。古今注「蛺蝶、一名野蛾、一名風蝶」
【野航】ゐなかのわたしぶね。杜甫詩「秋水纔深四五尺、野航恰受兩三人」
【野客】山野の人。杜甫詩「野客茅茨小、田家樹木低」
【野鶴】のに栖むつる。仕官せざる閑人に喩ふ。韋應物詩「心同二野鶴一與レ塵遠、詩似二冰壺一見レ底淸」
【若二野鶴之在二雞羣一】衆中にて獨りぬきいでたるに喩ふ。晉書、嵆紹傳「或謂二王戎一曰、昨於二稠人中一見二嵆紹一、昂昂然若二野鶴之在二雞羣一」
【野合】○正式の婚禮によらずして夫婦になる。史、孔子世家「野合而生二孔子一」（一說に、男女老年にして生氣絕えたる後の結婚）○晉樂を野外にて合奏する。左傳「嘉樂不二野合一」
【野干】狐の類。祖庭事苑「野干形小尾大、能上レ樹、疑二枯木一不レ登、狐卽形大、疑レ水不レ渡、不レ能レ上レ樹」
【野卉】のべに生ずるくさ。陸游詩「野卉棲二孤蝶一、平川起二亂鴉一」
【野牛】兕の異名。論、季氏「虎兕出二於柙一」朱注「兕、野牛也」
【野球】西洋遊戲の一、ベースボール。
【野菊】のぎく。野生の菊。李嘉祐詩「惆悵重陽日、空山野菊新」
【野吟】田野にて詩を吟ずる。杜荀鶴、春日山居詩「野吟何處最相宜、春景暄和好入レ詩」
【野芹】のぜり。釋道潛詩「曉耕雲塢潤、午飯野芹香」

【野禽】のにすむ鳥獸。漢書、蒯通傳「野禽殫、走狗烹」＝野鳥・野獸。
【野虞】野を守る役人。禮、月令「季春之月、命二野虞一、毋レ伐二桑柘一」
【野火】のべにてもやすひ。白居易詩「野火燒不レ盡、春風吹又生」＝野燒。
【野花】野に咲くはな。鄭谷詩「一徑入二寒竹一、小橋穿二野花一」
【野外演習】戰術に熟せしめんが爲めに平時野外にて行ふ軍隊の練習。
【野篁】野にある竹林。歐陽修詩「野篁抽二夏筍一」
【野坰】城外の野。陸機、鼓吹賦「巡二郊澤一、戲二野坰一」
【野畦】野のあぜみち。杜甫詩「野畦連二蛺蝶一、江檻浴二鳧鷖一」
【野逕】のはらのこみち。杜甫詩「野逕雲俱黑、江船火獨明」＝野徑。
【野螢】のべに飛ぶほたる。吳均詩「簷端水禽息、窗上野螢飛」
【野雞】雉の異名。漢代に呂后の名雉を諱みていふ。史、封禪書、注「野雞、雉也」
【野言】ゐなかのことば。鮑溶、秋晚銅山道中、宿二隱者一詩「野言得二眞風一、山貌宜二古服一」＝野語。
【野諺】ゐなかのことわざ。諺は俗言。史、始皇紀「野諺曰、前事之不レ忘、後事之師也」＝里諺・俚諺。
【野繭】野生のまゆ。風俗通「旅穀彌望、野繭被レ山」
【野語】ゐなかのことば。陸龜蒙詩「漁童驚二狂歌一、艇子喜二野語一」
【野狐禪】禪學を修めて眞に其の道を得ざる者を嘲りていふ。蘇軾詩「六花薝蔔林間佛、九節菖蒲石上仙、何似東坡鐵拄杖、一時驚散野狐禪」
【野菜】あをもの。遼史、太祖紀「時大軍久出、輜重不二相屬一、士卒煮二馬駒一、採二野菜一以爲レ食」＝野蔬・蔬菜。
【野草】のべに生ずるくさ。漢書、揚雄傳「斬二叢棘一、夷二野草一」
【野象】野生の象。南史、梁世祖紀「吳郡淮南、有二野象一數百、壞二人屋廬一」
【野杉】椵の異名。本草「椵生二深山中一、人呼爲二野杉一」
【野蠶】やままゆ。後漢書、光武紀「野蠶成レ繭、被二于山阜一、人收二其利一焉」
【野山藥】じねんじょ。
【野史】民間にて私に撰びし歷史。陸龜蒙詩「自愛垂レ名野史中」＝野乘。
【野史亭】金の元遺山が私に金史を撰ばん爲めに建てたる亭の名。金史、元好問傳「晚年尤以二著作一自任（中略）構二亭於家一、著二述其上一、因名曰二野史一」
【野次】のじゆくする。晉書、顧榮傳「公宜二露營野次一」
【野寺】野中のてら。韋應物詩「野寺望二山雪一、空齋對二竹林一」
【野豕】ゐのしし。北史、皮景和傳「高祖嘗令三景和射二野豕一、一箭而獲」
【野獸】のに棲むけもの。史、司馬相如傳「馳二逐野獸一」
【野芙蕖】おもだか（澤瀉）
【野人】○ゐなかもの、禮を知らざるいやしき人。孟、萬章「齊東野人之語也」○かざりけなくまごころある人。論、先進「先進於二禮樂一野人也」○民間、在野の人。孟、滕文公「無二君子一莫レ治二野人一」○未開の人民。
【野人獻芹】人に物を贈る謙辭。呂覽「野人美レ芹、願レ獻二之至尊一」
【野人無二曆日一】ゐなかに住みて世事に關係せざる者は曆日の必用もなし。陸游詩、「野人無二曆日一、鳥啼知二四時一」＝山中無二曆日一〔太上隱者詩〕
【野心】○馴れ服せざる心。豺狼の子は心山野に在りて、馴れ服すべからず、之を養へば、必ず人を害するをいふ。左、宣四「是子也、熊虎之狀、而豺狼之聲、弗レ殺必滅二若敖氏一矣、諺曰、狼子野心、是乃狼也、其可レ畜乎」○田園生活を樂む心。宋書、王僧達傳「閑性寡レ任、野心素積」＝野性。○國身分不相應の望み。又たくらみ。
【野叉】おに。飜譯名義集「野叉此云二勇健一、亦云二暴惡一、舊云二閱叉一」＝夜叉。
【野舍】王の旅行先のやどや。周禮「司隸守二王宮與二野舍一之禁厲上」
【野情】ゐなかびとのこころ。白居易詩「野情遺二世累一、醉態任二天眞一」同詩「慵慢疎二人事一、幽棲遂二野情一」＝野意。
【野趣】ゐなかのおもむき。李嵩詩「自然成二野趣一、都使二俗情忘一」＝野情・野興。
【野宿】のべにやどる、のじゆく。老學庵筆記「夜疲則野宿」＝露臥。
【野處】家を建てずしてのはらにすむ。易、繫辭「上古穴居而野處」
【野乘】民間にて私に撰びし歷史。乘とは、孟、離婁「晉之乘、楚之檮杌、魯之春秋一也」とあるに本づく「稗史野乘」＝野史。
【野色】のはらのけしき。白居易詩「野色何莽蒼、秋聲亦蕭疎」
【野蜀葵】みつばぜり（三葉芹）
【野水】野の中を流れるみづ。劉長卿詩「種レ荷依二野水一、移レ柳待二山鶯一」
【野翠】のべのみどりいろ。李白詩「白雲入二窗牖一、野翠生二松竹一」＝野綠。
【野生】○動植物の自然に野に生

ずるもの。○自己の謙稱。＝僕・小生。

【野性】ヤセイ ○疎野にしてなれ親まざる性質。韋應物詩「――本難レ畜、玩習亦逾レ年」○靜かなるゐなかを愛する心。姚合詩「――多二疎情一、幽棲更稱レ情」

【野燎】ヤセウ 野火をいふ。嚴維詩「――明二山郭一」

【野製】ヤセイ ひなびたるつくり。江總文「山情率易、――疎朴」

【野泉】ヤセン 野に在るいづみ。盧綸詩「折レ花朝露滴、漱レ石――淸」

【野戰】ヤセン 野原にてのたたかひ。史、藺相如傳「我爲二趙將一、有二攻城――之大功一」

【野戰病院】ヤセンビヤウヰン 戰時に後方に假設して傷病者を治療するところ。

【野蔬】ヤソ やさい、青物。杜甫詩「應レ訝耽二湖橋一、常餐占二――一」

【野僧】ヤソウ ゐなかの僧侶。張籍詩「身屈祇聞詞客說、家貧多見――招」

【野蔌】ヤソク やさい、薇・筍など。歐陽修、醉翁亭記「山肴――雜然而前陳者、太守宴也」

【野態】ヤタイ ひなびたるかたち。歐陽修詩「頑姿――煩二造化一」＝野姿。

【野池】ヤチ のにあるいけ。杜甫詩「沙上草閣柳新闇、城邊――蓮欲レ紅」

【野孃】ヤヂヤウ ゐなかのむすめ。＝村孃・村娘。

【野釀】ヤヂヤウ ゐなかざけ。文同詩「山肴與二――一、待レ我如二佳賓一」

【野豬】ヤチヨ ゐのしし。淮南子「――羣二聚深山中一」

【野豬而介者】ヤチヨニシテカイスルモノ 國ゐのししによろひをきせたる如き向う見ずの勇者、猪武者〔日本外史〕

【野亭】ヤテイ ゐなかの休息所。後漢書、郭伋傳「遂止二于――一、須レ期乃入」

【野艇】ヤテイ 野舫に同じ。劉長卿詩「歸人乘二――一、帶レ月過二江村一」＝野舟。

【野彘】ヤテイ ゐのしし。史、鄧都傳「――卒入レ廁、上目レ都、都不レ行」＝野豬。

【野鳥】ヤテウ 野に居る鳥。傳元詩「蟬鳴二高樹間一、――號二東廂一」

【野蝶】ヤテフ のべに飛ぶてふ。司空曙詩「戀レ花同二――一、愛レ水劇二江鷗一」

【野店】ヤテン ゐなかのみせ。岑參詩「――臨二官路一、重城壓二御堤一」劉長卿詩「荒涼――絕、迢遞人煙遠」

【野渡】ヤト ゐなかのわたしば。韋應物詩「春潮帶レ雨晚來急、――無レ人舟自橫」李嘉祐詩「――花爭發、春塘水亂流」

【野豆】ヤトウ 野生のまめ。高啓詩「躊陰――開」

【野童】ヤドウ ゐなかのこども。杜甫詩「儒衣山鳥怪、漢節――看」

【野屯】ヤトン のはらにたむろす。張耒賦「列次之士、――之師」

【野衲】ヤナフ ○ゐなかの僧。黃溍詩「――分レ耕祭二墓田一」＝野僧。○僧の自己の謙稱。

【野哉】ヤナルカナ いやしきかな、之を鄙しむ語。論、子路「――由也、君子於二其所一レ不レ知、蓋闕如也」

【野無二遺賢一】ヤニイケンナシ 賢者盡く任用せられて民間に隱れたる人物なき義。書、大禹謨「嘉言罔レ攸レ伏、――」

【野無二青草一】ヤニセイサウナシ 饑饉の甚だしきをいふ。左、僖二六「室如二縣罄一、――」

【野馬】ヤバ ○かげろふ（遊氣）莊、逍遙遊「――也、塵埃也、生物之以レ息相吹也」○馬の一種。爾雅、注「――如レ馬而小、出二於塞外一」

【野梅】ヤバイ 野に生ずるうめ。杜甫詩「市橋官柳細、江路――香」

【野芳】ヤハウ のべにさきにほふ花。歐陽修、醉翁亭記「――發而幽香」＝野花。

【野堡】ヤハウ 野戰のとき用ふるとりで。

【野舫】ヤハウ 野川にうかべる小舟。陸龜蒙詩「釣家隨二――一」

【野蠻】ヤバン 文化がひらけぬ。又其國民。

【野卑】ヤヒ いやし。＝野鄙。

【野鄙】ヤヒ ○ゐなか。周禮「――之委積以待二羈旅一」○いやし。＝野陋・野卑。

【野麋】ヤビ 野生のなれしか。王禹偁詩「山中伴二――一」

【野夫】ヤフ 田野に居る男。黃滔、嚴陵釣臺詩「終向二煙霞一作二――一、一竿竹不レ換二簪裾一」

【野服】ヤフク 在野即ち無官の者の著るきもの。晉書、隱逸傳「年朽髮落、不レ堪二衣冠一、請以二――一入」

【野物不レ爲二犧牲一】ヤブツギセイトナラズ 野獸は以ていけにへとして宗廟に供し難し。俗學者は廟堂に用ふべからざる喩。尉繚子「――、雜學不レ爲二通儒一」

【野貓】ヤベウ 狸タヌの異名〔本草〕

【野暮】ヤボ 國世情に通ぜず、ぶこつ、不粹（野夫の音轉か）

【野木】ヤボク 野に自生する木。漢書、五行志「――生レ朝、野鳥入レ廟」

【野蔓】ヤマン のべにあるつるくさ。詩、鄭風「野有二蔓草一、零露漙兮」

【野民】ヤミン 農業を主とするたみ〔周禮〕

【野羊】ヤヤウ 山羊ヤギ、家畜の一。

【野老】ヤラウ ○ゐなかのとしより。王維詩「山童𨀁二珍菓一、――開二芳罇一」＝野叟。○老人が自己の謙稱。○草薢トコロの異名。

【野郞】ヤラウ 國男子をののしりていふ語「馬鹿――」

【野綠】ヤリヨク 野のみどり色。柳宗元、永州新堂記「邇延二――一、遠混二天碧一」＝野翠。

【野路】ヤロ ゐなかみち。論衡「縣道不レ通二於野一、――不レ達二于邑一」＝野逕。

【野廬】ヤロ ○周代の官名。周禮「――氏掌下達二國道路一至中于四畿上」廬は道中にて賓客を宿せしむるいへ。○ゐなかのいへ。韋應物詩「――不二鉏理一、翳翳起二荒煙一」

【野陋】ヤロウ いやし。梁簡文帝文「僕雖二――一、頗悅帶レ經」＝野鄙。

【野鹿】ヤロク 野に栖むしか。靑瑣高議「――游二宮中一、非二佳兆一也」

【野錄】ヤロク 野史に同じ。宋賈同「山東――十七篇」を著す〔本傳〕

五畫

【量】㊀リヤウ ㊁リヤウ 陽 漾

㊀ます（斗斛）「度―衡」○かぎり（限）○はかり、ますめ。○めかた（輕重）ながさ（長短）かず（多少）かさ（容積）「分―」「酒―」論、鄕黨「酒無レ―、不レ及レ亂」○はらまへ、どりやう、きりやう「度―」「器―」「識―」○ほど（節制）㊁はかる。大小・長短・輕重などすべて分量をはかる。禮、王制「以二三十年之通一制二國用一、―レ入以爲レ出」○心にはかり考へる「考―」左、隱十一「―レ力而行レ之」

同訓異義 ハカル 量・計・圖・謀・度・稱・權・測・料・忖・揣等の別は計（二七八頁一段）の條を見よ。

【量移】リヤウイ 唐代、流罪によりて遠地に放置せられし官吏が、赦にあひて近地に改めうつされる。舊唐書、明皇紀「大二赦天下一、左降官――近處一」

【量槩】リヤウガイ とかき、ますかき。徐鉉文「杚槩二廩之一也、斗斛――也」

【量器】リヤウキ 物をはかるうつは。

【量決】リヤウケツ はかりさだめる、酌量して判決する。魏書、世祖紀「詔諸有二疑獄一、皆付二中書一、以二經義一――」

【量檢】リヤウケン はかりしらべる。宋史、律曆志「――彌レ年、則加減均同、異識相課、則遠近應レ率」

【量試】リヤウシ はかりためす。後漢書、獻帝紀「出二太倉米豆一、爲二饑人一作二糜粥一、經レ日而死者無數、帝疑二賑卹有一レ虛、乃親于二御坐前一――作レ糜、乃知レ非レ實」

【量度】リヤウタク はかる。詩經、疏「經理而――」

【量知】リヤウチ おしはかりてしる。賈島詩「――愛レ月人、身願化爲レ蟾」

十一畫

【釐】㊀リ ㊁キ 支 支

㊀をさむ（治・理）正しあらためる。書、堯典「允―二百工一」○みち、すぢみち（義理）○さいはひ（福）○極めて小なる數位の稱、りん、略して厘と書く、尺度の單位、分ブの十分の一。又、目方の單位、分シフの十分の一。又、錢の單位、錢の十分の一。○轉じて極めて少き義とす「毫―」○たまふ（賜）あたふ（予）○たぐひ、ふたつ（耦）○やもめ。＝嫠。㊁ひもろぎ（祭餘肉）祭の時に神に供へたる肉。○さいはひ（幸福）古、禧に通ず。○古、僖（一六六頁四段）に通ず。

【釐捐】リエン 釐金税に同じ。

【釐降】リカウ 皇女の降嫁、釐は治。書、堯典「――二女于嬀汭一」

【釐革】リカク 改めかへる。北史、魏韓麒麟傳「舊名一皆――、小者幷合、大者分置」

【釐金税】リキンゼイ 清朝にて國內通行の貨物に對して普通の關稅以外に課する稅。其の貨物の原價の若干釐を徵收する義（其の稅を徵收する所を釐卡といふ）＝釐捐。

【釐正】リセイ 改め正す。唐書、顏師古傳「詔二於祕書省一考定、多レ所二――一」

【釐定】リテイ をきめて改定する。唐書、禮樂志「詔二有司一――」

金部

【金】キン コン 侵

○かね、かなもの、金・銀・銅・鐵などの鑛物の總稱。漢書、食貨志「―有二三等一、黃金爲レ上、白金（銀）爲レ中、赤金（銅）爲レ下」○こがね、わうごん（黃金）○通用貨幣。○やり・かたななどの兵器。中庸「衽二―革一」○きいろ（黃色）「―波」○堅き物の形容「―城湯池」○貴重なる物の形容「―言」「―科玉條」○美しき物の形容「―殿玉樓」○金にて造りし樂器、八音の一。○つぐむ、古、噤に通ず。荀、正論「―舌蔽口猶將無レ益也」○五行の一、方位にては西。季節にては秋とす「―風」○漢代、黃金一斤を一―といふ。又、近世、銀一兩を一―といふ「百―」「千―」○朝代の名、女眞ヂュルヂュの種族、姓は完顏、遼及北宋を滅し、東三省蒙古及支那の北部に據る、十世一百二十年にして元に滅ぼさる。

【金鴉】キンア 太陽の異名。韓愈詩「――旣騰翥、六合俄淸新」＝金烏。

【金襖子】キンアウシ かじか（河鹿）蛙の一種、體やせて黑く、いぼがあり、溪

間に生じて、其の聲最も清く愛すべし。＝錦襖子。

【金鴨】香爐をいふ。鴨の形につくる故。徐鉉詩「香煙結レ霧籠二一一」

【金鞍】黄金にてかざりし美くしき馬のくら。後漢書、輿服志「象鑣一一」

【金瘢】かたなきず。孟郊詩「一一非二戰瘢一」＝金瘡。

【金衣公子】黄鳥の異名。天寶遺事「明皇於二禁苑中一見二黄鶯一、常呼レ之爲二一一一一一」

【金印】○黄金にて作りし將軍の印。史、孝武紀「居月餘得二四一一一」○宰相の印。後漢書、百官公卿表「相國丞相皆秦官、一一紫綬」

【金印紫綬】金紫を見よ。

【金員】かね、おあし、金子、金錢。

【金烏】太陽の異名。太陽の中に三足の烏が居るといふ傳說に本づく。韓琮詩「一一長飛玉兔走」玉兔は月の異名。

【金烏玉兎】日と月と。禪林類聚「金烏東上人皆貴、玉兔西沈佛祖迷」前條參看。

【金搖】黄金にてつくりし步搖(步すればゆれうごくかんざしの類)をいふ。曹植、七啓「戴二一一之熠燿一」

【懷レ金垂レ紫】金印をいだき、紫綬を垂れる、貴顯の位に昇る義。後漢書、馮衍傳「經二顯位一、——」金紫を見よ。

【金甌覆名】金甌にて覆ひたる中にある宰相の姓名、新に宰相を任命するにいふ。唐書、崔琳傳「明皇每レ命レ相、皆先書二其名一、一日書二琳等名一、覆以二金甌一、會太子入、帝謂曰、此宰相名、若自意レ之誰乎、太子曰、非二崔琳・盧從愿一乎、帝曰、然」

【金甌無缺】國家の外侮を受けたることなきにいふ。南史、朱异傳「武帝曰、我國家猶若二金甌一、無二一傷缺一」

【炊レ金饌レ玉】食物の美なる形容。駱賓王、帝京篇「平臺戚里帶二崇墉一、——待二鳴鐘一」

【金屋之寵】宮人の寵を專らにするにいふ。漢武故事「帝爲二膠東王一、數歲長公主抱置二膝上一、問曰、兒欲レ得レ婦否、曰欲レ得、指二其女阿嬌一好否、笑對曰、若得二阿嬌一作レ婦、當下作二金屋一貯上レ之」

【攫レ金者不レ見レ人】慾の爲めには何事をも顧みざる義。列子「昔齊人有二欲レ金者一、詰旦衣冠而之レ市、適二鬻レ金者之所一、因攫二其金一而去、吏捕得レ之、問曰、人皆在焉、子攫二人之金一何、對曰取レ金之時不レ見レ人、徒見レ金」

【流レ金鑠レ石】暑熱甚だしき形容。楚辭「十日代出、——」莊、逍遙遊「大旱金石流、土山焦」

【藏二金於山一藏二珠於淵一】無用の寶を貴重せざるにいふ。莊、天地「——、不レ利二貨財一、不レ近二貴富一、不レ樂レ壽、不レ哀レ夭、不レ榮レ通、不レ醜レ窮」

【金坑】かなやま、黄金の出るあな〔舊唐書、德宗紀〕

【金革】○金は戈・刀の屬。革は甲冑の類。共に兵器。中庸「衽二一一一、死而不レ厭、北方之强也」○戰爭の義とす。次條參看。＝干戈・兵革。

【金革之世】戰亂の世。庾信文「當今玉燭調和、既非二一一一一一」＝兵革之世。

【金閣】こがねにてかざれるたかどの。鮑照、舞鶴賦「舞二飛容于一一一」

【金額】〔國〕かねだか。

【金甲】○こがねづくりのよろひ。唐會要「戈鋋一一、耀二照天地一」○兵器甲冑。＝金革。

【金榼】こがねにて造りし酒だる。舊唐書、懿宗紀「賜二分帛五千匹、一一一枚、盞碗一具、金腰帶一條一」

【金柑】蜜柑の一種。夏時小白花開き、冬黄金色の小さき實を結ぶ。蜚纖「植物則檜芝珠蓮一一」

【金氣】○あきの氣。梁簡文帝詩「玉關驅二夜雪一、一一落二嚴霜一」○〔國〕かなけ。鐵の臭氣。

【金櫃】かねばこ、櫃はひつ。＝金匱。

【金匱之計】金匱中に藏すべき程のすぐれたるはかりごと。漢書、外戚傳「不レ能下深援二安危一、定中——上也」

【金匱之書】こがねのはこに入れる祕藏のしょもつ。史記、自序「遷爲二太史令一、紬二史記石室一一一一」

【金龜子】たまむし。體六七分、金綠色、背に甲あり六足。＝〔國〕金蟲。

【金橘】きんかん(金柑)陸游詩「不レ酸一一種初成、無レ核枇杷接赤生」

【金禽】雞の異名。隋書、禮儀志「雞是一一」

【金銀】○こがねと、しろがねと。列子「化人之宮、構以二一一一、絡以二珠玉一」○通用の貨幣。

【金鏡】○こがねにて飾りしかがみ。晉書、赫連勃勃載記「絡以二隋珠一、綷以二一一一」○月の異名。杜牧詩「仙桂茂時一一曉、洛波飛處玉容高」○明かなる道に喩ふ。劉峻、廣絕交論「聖人握二一一一」

【金魚】○こがねにて魚形に造り、有位者に佩ばしむる袋。韓愈詩「玉帶懸二一一一」＝金魚袋。○魚の名。蘇舜欽詩「沿レ橋待二一一一」＝錦魚・金鯽。

【金玉】こがねと たまと。珍重すべきものに喩ふ。詩、小雅「毋下一一爾音一、而有中遐心上」

【不レ寶二金玉一】君子は金玉を寶として貴ばず。禮、儒行「儒——、而忠信以爲レ寶」

【金玉君子】節操の堅固なる有德の人。宋史、傅堯俞傳「傅侍郎清直一節、終始不レ變、一一一一也」

【金玉之世】太平にをさまりたる時世。論衡「永平中、黄金出二於皖國湖涯一、夏之方盛、貢二金九牧一、皆起二盛德一爲二聖王瑞一、一一一一、故有二金玉之應一」

【金玉滿堂】○金玉の寶が家にみつ。老子「——、莫二之能守一」○賢者の朝廷に滿つるに喩ふ。

【金屈卮】黄金にて作りたる屈曲せる把手あるさかづき。東京夢華錄「御宴酒杯、皆一一一一」

【金貨】黄金にて造りし通用貨幣＝金幣。

【金貨本位】金貨を本位貨幣とし、他の貨幣を補助貨幣とする制度。我國にては明治三十年三月以後實施す。

【金塊】黄金のかたまり。

【金科玉條】貴ぶべき法律。揚雄、劇秦美新「懿律嘉量、——」

【金丸】○月の異名。蘇轍詩「浮雲捲盡流二一一一、衣上白露三更寒」＝金鏡。○黄金の彈丸。西京雜記「韓嫣好レ彈、嘗以レ金爲レ丸、所レ失者日有二十餘一、長安爲レ之語曰、苦二饑寒一、逐二一一一」張九齡詩「嬌嬌珍木巔、得レ無二一一懼一」

【金冠】こがね造りのかんむり。宋史、天竺國傳「戴二一一一」

【金環】こがねにて造りたるゆびわ。晉書、羊祜傳「羊祜年五歲、令三乳母取二所レ弄一一一」

【金環食】日蝕の一種、太陽の中央の蔽はれて周圍の金環の如く見ゆるもの。＝金環蝕。

【金閨】○うつくしきねま。趙嘏詩「向レ燈垂二玉枕一、對レ月灑二一一一」○金馬門の異稱。江淹賦「一一之諸彥、蘭臺之羣英」

【金雞】○天上に棲むといふ雞。祖庭事苑「人間本無二一一之名一、以レ應二天上一一星一故也、天上一一鳴、則人間亦鳴」○桃都山の大桃樹の上に一一あり、日出でて鳴けば天下の雞皆鳴く〔淮南子〕

【金穴】大がねもち。後漢書、郭皇后紀「后弟況遷二大鴻臚一(中略)豐盛無レ比、京師號二況家一爲二一一一」

【金闕】○道敎にて天帝の居る所。史、封禪書「黄金銀爲二宮闕一」＝黄金闕。○天子の宮闕。岑參詩「一一曉鐘開二萬戶一」○黄金にて飾れる門。

【金言】○戒となるたふときことば。洛陽伽藍記「石室之寫二一一一」○かたく誓ひしことば。白居易詩「一一自鏤鑠」

【金券】○さつ、金札。○天子より賜はるかきつけ。黄金の札にかきつけたもの。隋書、堯君素傳「大唐又賜二一一一、待以レ不レ死」

【金券玉册】天子より賜はる詔書。

【金吾】○漢代天子の護衛を掌る武官の名、執金吾の略。吾は禦、金革を執りて禦ぎ守る義。王建詩「一一除夜進二儺名一」○我が近衛府に當る「一一中將秀秋」

【金庫】○かねぐら。○政府の金を藏する所「中央一一」○貨幣や貴重品を入れて火災盜難を防ぐ箱。＝金匱。

【金壺】○みづどけい。李白詩「銀箭一一漏水多」＝漏刻。○金製の酒壺。韓翃詩「玉佩迎二初夏一、一一醉二老春一」

【金鼓】かねと、つゞみと。史、吳王濞傳「弓高侯執二一一一見レ之」

【金海鼠】〔國〕なまこに似た海產蟲。＝光參。

【金口】○言語の貴重なるに喩ふ。夏侯湛、抵疑「一一玉音漠然沈默」○口をつぐむ、金は噤と音通。＝噤口・金舌。○〔佛〕佛のことば。又其の說きし敎。

【金口木舌】敎命を發する時に、振りて以て衆聽を警動する木鐸をいふ。轉じて學者が位を得て敎を施すに喩ふ。法言「天之道不レ在二仲尼一乎、仲尼駕レ說者也、不レ在二茲儒一乎、如將三復駕二其所一レ說、則莫レ若レ使二諸儒金口而木舌一」

【金谷酒數】金谷は晉の石崇の別莊の在りし地名(今の河南省洛陽縣の西に在り)崇字は季倫、一日賓客を會して詩を賦し、詩成らざれば罰するに酒三斗を飲ましむ。李白文「如詩不レ成罰依二一一一一一」

【金虎符】こがねにて虎の形に造りたるわりふ。元史、兵志「長二萬夫一者、佩二——一」

【金婚式】〔國〕西洋の風にならひて結婚後五十年目に行ふ夫婦の祝賀式。

【金砂】黄金のこな、きんぷん。參同契「——入二五内一、霧散若二風雨一」

【金座】〔國〕德川時代に幕府の命を受けて金貨を鑄造せし所。

【金鎖】○こがねにて造りたるくさり。北史、赤土國傳「豪富之室、恣レ意華靡、唯——非二王賜一、不レ得二服用一」○こがねの錠前。王涯、宮詞「各將二一一一鎖二宮門一」

【金釵】こがねにて造りたるかんざし。白居易詩「鈿合——寄將去」＝金鈿。

【金創】かたなきず。宋書、武帝紀「寧州嘗獻二虎魄枕一、光色甚麗、時將二北征一、以二虎魄治二一一一、上大悅、命擣碎、分二付諸將一」＝金瘡・金瘢。

【金瘡】前條に同じ。盧仝詩「不レ堪秋氣入二一一一」

【金鎗魚】まぐろ。

【金裝刀】こがねづくりのかたな。＝金飾刀。

【金策】○こがねづくりの札。仙人などの文字を書くに用ふるもの。張衡、西京賦「乃爲金策、錫用此土」○こがねづくりの錫杖。孫綽、天台山賦「振金策之鈴鈴」○國金錢の調達をくめんする。
【金札】○こがねのふだ。雲笈七籤「金札七枚」○さつ、紙幣。
【金刹】黄金にてかざりし寺。杜甫詩「金刹青楓外、朱樓白水邊」
【金山】山名、江蘇省丹徒縣の西北に在り、舊江中に在り、今は四周沙漲りて陸に接す、本名は浮玉山、裴頭陀、山を開きて金を得たるを以て金山と名づく。
【金琖】黄金のさかづき。琖は盞に同じ。杜甫詩「誰能載酒開金琖、喚取佳人舞繡筵」
【金盞銀臺】水仙花の異名。雲麓漫鈔「水仙花、有單葉者、有千葉者、楊承齋云、世以水仙爲金盞銀臺、蓋單葉者、其中眞有一酒琖、深黄而金色」
【金史】一百二十五巻、元の脱脱等勅を奉じて撰す、金の世一百十八年間の事を紀す。
【金珥】こがねのみみだま。珥は耳璫。晉書、禮志「金珥珠玉銅鐵之物、一不得送」
【金絲】○黄金のいと。杜陽雜編「金絲爲流蘇」○金紙を細くよりしもの。
【金絲魚】いとよりだひ。
【金絲雀】かなりや。雀よりも小さく、羽毛黄色にして其の聲愛すべし。
【金絲酒】たまござけ、酒と雞卵とをかきまぜて煮たるもの〔事物異名錄〕
【金紫】黄金の印と紫の印の綬と。高位の人の佩ぶるもの。轉じて貴顯の義。漢書、百官表「相國丞相皆秦官、金印紫綬」
【金鵄】國神武天皇、長髓彦征伐の時、御弓の末にとまりし黄金色のあやしきとび。
【金鵄勳章】國前條の故事に本づきて制定せし金鵄の模樣ある勳章、軍功拔羣の者にたまはる。
【金颸】あきのかぜ。甘子布、光賦「銀河披曉、金颸送清」＝金風。
【金繡】金絲を用ひたる美くしきぬひとり。尹廷高詩「金繡鴛鴦綵錦袍」
【金枝玉葉】○皇族をいふ。六帖「金枝玉葉、帝王之子孫也」○うつくしき雲の形容。古今注「黄帝與蚩尤戰於涿鹿之野、常有五色雲氣、金枝玉葉、止於帝之上」
【金字塔】埃及のピラミッド。其の構造、金の字に似たる故。
【金字牌】金泥にて記せしふだ。急要なる詔書に用ふ。宋史、岳飛傳「乞令班師、一日奉十二金字牌、飛憤惋泣下」
【金人】金屬にて造りたる人の像。賈誼、過秦論「銷鋒鑄鐻、爲金人十二」
【金簪】きんのかんざし。梁簡文詩「金簪鬟下垂」＝金釵。
【金聲玉句】すぐれたる詩文を稱す。楊萬里詩「金聲玉句鳴天球」
【金城湯池】堅固なる城池。漢書、蒯通傳「必將嬰城固守、皆爲金城湯池、不可攻也」
【金城鐵壁】極めて堅固なる城。徐積詩「金城不可破、鐵壁不可奪」＝金城湯池。
【金雀枝】えにしだ。灌木の一、わらばいに似て互生し、春末黄花開く。＝金雀花・黄馨。
【金主】○かねの所有主。漢書、直不疑傳「金主覺」○國資本金又費用を出す人、資本主、投資者。
【金松】國かうやまき。槇の一種、高野槇、葉は槇よりも細く實は松に似たり。
【金鐘兒】すずむし。花鏡「金鐘兒似促織、身黑而長」
【金色】○黄金の色。溫庭筠詩「日影明滅金色鯉」○佛身の色。楞嚴經「世尊在大衆中、舒金色臂」
【金飾】こがねのかざり。溫庭筠詩「白馬雜金飾」＝金裝。
【金子】かね、おあし、金錢、子は助辭。摭靑雜說「曾失金子一包」
【金蕊】菊の異名。本草「菊一名金蕊」＝金蘂。
【金樞】月の沒する處の穴。轉じて月の異名。木華、海賦「大明摭轡於金樞之穴」
【金星】太陽系中の第二游星、二百二十四日七にて太陽を一周す、地球に近くしてよく光る、よひの明星。詩、小雅「東有啓明」朱注「啓明・長庚皆金星也」＝太白。
【金精】○月の異名。河圖帝覽「月者、金之精也」○太白星。史、天官書、注「太白者西方、金之精」
【金虀玉膾】虀はあへもの、膾はなます、金玉は美味の形容。雲仙雜記「吳都獻松江鱸魚、煬帝曰、所謂金虀玉膾、東南佳味也」
【金聲玉振】金は鐘、玉は磬、聲は宣なり、振は收なり、八音を合奏するに方り、先づ鐘を撃ちて、其の聲を宣べ、終に特磬を撃ちて、其の韻を收めて、樂を一終す。よりて智德の大成せるに喩ふ。孟、萬章「集大成也者、金聲而玉振之也」
【金石索】書名、十二巻、清の馮雲鵬撰す、殷より元に至る金石の圖を揭げて考證す。
【金石絲竹匏土革木】八音（一九四頁三段）を見よ。
【刻于金石】功德などを鐘鼎碑碣に刻みて後世に傳へる。史、始皇紀「羣臣相與誦皇帝功德、刻于金石」

【金石之樂】鐘磬を用ふる音樂。左傳「行之以金石之樂」
【金石之言】戒めになる善き言。荀、非相「贈人以言、重於金石珠玉」＝金言。
【金石聲】詩文の格調のすぐれて立派なるにいふ。晉書、孫綽傳「嘗作天台賦、辭致甚工、初成以示范榮期云、卿試擲地、當作金石聲也」
【金石交】極めてかたくしてかはらざるまじはり。史、淮陰侯傳「自以爲與漢王爲金石交」
【金石文】鐘鼎(金)碑碣(石)などに銘記する文字。
【金舌蔽口】金を以て舌と爲して口をおほふ。不言の義。荀子「金舌蔽口、猶將無益也」一說に金は噤と音通。
【金仙】ほとけ。岑參詩「早知淸淨理、常願奉金仙」
【金釧】こがねにて造りたるうでわ。朱德潤詩「金釧紅裳肌體素」
【金錢】○黄金のぜに。史、平準書「農工商交易之路通、而龜貝金錢刀布之幣興焉」○ぜに。漢書、西域傳「雖有珠玉、不如金錢」
【金蟾】月の異名、蟾は月中に居るといふ蟾蜍。高啓詩「夢斷金蟾隔煙小」＝銀蟾。
【金線蛙】かじかの一種。花鏡「背有黄路者、謂之金線蛙、性好坐、而以腹鳴」
【金盞花】菊の一種。高さ四五寸、盞の形せる紅黄又淡黄の花開く。＝常春花。
【金線草】みづひき。山野に自生する多年生草。夏細長線狀の花莖を生じ、赤又は白色の小花を開く。
【金奏】○樂を奏するに先づ鐘を鳴らすをいふ。周禮、鐘師「掌金奏」○音樂の義。顏延之詩「遠音何用深、識微在金奏」
【金奏之樂】鐘を奏する音樂。周禮「凡祭祀數其金奏之樂」
【金繒】金帛に同じ。唐書、王晙傳「告以禍福、啗以金繒」
【金粟】○佛維摩詰の異名。李白詩「金粟如來是後身」○金錢と米と。後漢書、光武紀「雜用金粟布帛」
【金屬】かねの類の總稱。〔格物叢話〕
【金屬元素】金・銀・銅・鐵などの金屬性の元素。
【金罇】黄金のさかだる。罇は樽・罇に同じ。李白詩「人生得意須盡歡、莫使金罇空對月」
【金樽】こがねにてかざりたるたる。陳子昂詩「銀燭吐青煙、金樽對綺筵」＝金罇・金尊。
【金蛇】○蛇の一種〔本草〕○電光の形容。陸游詩「百尺金蛇電掣空」
【金刀】○漢代の貨幣の名、形の刀に似たる故。漢書、食貨志「金刀龜貝」○こがねづくりのこがたな。又はさみの類。皮日休詩「輕裁鴨綠任金刀」
【金卮】金屬製のさかづき。李德裕詩「無聊然蜜炬、誰復勸金卮」
【金湯】堅固なる城池。金城湯池の略。後漢書、光武紀「金湯失險、車書共道」
【金璫】○こがねのみみかざり。神仙傳「玉佩金璫」○後漢の代、宦官の冠の飾。轉じて宦官の義とす。
【金柝】軍中に用ふるどら(刁斗)と、ひやうしぎと。唐書、段秀實傳「戒候卒、金柝備之」
【金諾】かたき承諾。史、季布傳「得黄金百斤、不如得季布一諾」顧雲文「果踐玉音、不移金諾」＝季諾。
【金鐸】古、武事に關する教令を宣告する時に振りならしし大鈴。周禮、鼓人「以金鐸通鼓」（文事には木鐸を用ふ）
【金丹】道士が金石を煉りて作れる藥、長生不死の效驗ありといふ。抱朴子「黄金入火、百鍊不銷、埋之畢天不朽、是爲金丹」
【金池】すずりの異名。
【金竹】○竹莖の黄色の者、廣東省に産す。謝靈運文「北獻於毗裘、南貢金竹」○金音と竹音と。鍾嶸、詩品「詩頌皆被之金竹」
【金打】國古、武士が誓を固むるしるしとして、刀の刃又鍔などを打合はすること。女子は鏡を打合す。
【金張】金日磾と張安世と。二人は前漢宣帝に仕へて權勢を振ひし者。轉じて權力ある貴族の義とす。左思詩「金張藉舊業、七葉珥漢貂」七葉は七世の榮を恣にせしをいふ。
【金柱】黄金のはしら。晉書、石季龍載記「起太武殿、漆瓦金璫、銀楹金柱、珠簾玉壁、窮極伎巧」
【金泥】金粉を膠にときたるもの。書畫をかくに用ふ。「紺紙金泥」白居易詩「鈿軸金泥誥一通」＝金漿。
【金貂】○漢以後、近侍の武官の冠、黄金の璫を附け貂の尾を飾りとす〔晉書、輿服志〕○轉じて貴近臣の義とす。王維詩「金貂列上公」
【金的】國徑一寸四分の金色の板の中央に徑三分許の丸を描きし射術のまと。
【金鐵】○こがねと、くろがねと。漢書、五行志「工冶鑄金鐵」○鐵製の刑具。手かせの類。司馬遷、報任安書「嬰金鐵受辱」
【金篦】○黄金の毛ぬき。杜牧詩「金篦洗霜鬢」○かんざしの類。續漢書、輿服志「下有珠玉、垂黄金篦左右各一」
【金天】あきのそら。杜甫詩「爽氣

——谿、清談玉露繁」＝秋天。
【金鈿】こがねにて造りたるかんざし。劉孝儀文「元妻長髮、無籍于——」＝金釵・金簪。
【金殿】こがねにてかざりたる宮殿。江總詩「羽觴響鐘石、流泉灌——」＝金屋。
【金殿玉樓】金玉にてかざりし立派なるごてん。李白詩「玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦」
【金斗】○ひのし。白居易詩「——熨波刀剪紋」○酒を酌むこがねのひしゃく。戰國策「令工人作爲——」
【金縢】書經の篇名、金を以て緘封する義。書、金縢「公歸、乃納冊于——之匱中」
【金德】秋の稱。禮、月令「孟秋之月、盛德在金」
【金櫝】こがねにてかざりたるはこ。晉語「使求得之——如之」
【金團】國一種の料理。栗・豆・慈姑等を餡の衣にくるみしもの。
【金納】金子にて租稅を納める。
【金五京】金代の五つのみやこ。一、上京、會寧府(吉林省內)二、北京、臨潢府(內蒙古巴林)三、南京、遼陽府(奉天所在)四、中京、大定府(直隸省平泉縣內)五、西京、大同府(山西省內)
【金波】○月の光。漢書、郊祀志「月穆穆以——、日華耀以宣明」○月光に映じてこがね色に見ゆるなみ。
【金葩】○こがね色の花。韓愈詩「庭炬折——」＝金英。○主に菊花をいふ。
【金杯】こがねのさかづき、黃金の杯。庾信詩「紅袖捧——」＝金盞。
【金牌】○黃金製のふだ。○國黃金メタル。
【金匏】鐘・笙の類。梁簡文帝文「——既動、望蜿蟬之遊龍」
【金榜】官吏登用試驗に及第せし者の名を揭示する黃金製のふだ、榜一に牓に作る。西京雜記「列榜書人姓名、將相——、其次銀榜、州縣小官並是鐵榜」
【金馬玉堂】漢代の未央宮中の金馬門と玉堂署と、皆文學の士の出仕する所。轉じて翰林院の異稱とす。歐陽修詩「——三學士」
【金帛】黃金と絹帛と。史、淮南王傳「行珠玉——、賂諸侯宗室大臣」＝金繒。
【金箔】黃金をうちのばして紙の如く薄くせしもの。宋史、仁宗紀「禁以——飾佛像」
【金魄】月の異名。李白詩「圓光虧中天、——遂淪沒」
【金髮】茶褐色にして光ある毛髮。西洋婦人の髮をいふ。
【金盤玉盃】こがねのひらたき皿と玉のぼんと。みごとなる器具。
【金馬門】漢代未央宮に在り、俊秀の士の待詔の處。三輔黃圖「——宦者署、在未央宮、武帝得大宛馬、以銅鑄象、立於署門、因以爲名、東方朔・主父偃・嚴安・徐樂、皆待詔——」
【金琵琶】まつむし。
【金屛風】地紙に金箔を貼りし屛風。文獻通考「宋制有——」＝金屛。
【金白檀】漆の塗方の一、金箔を一面におきてうすく漆をぬりたるもの。
【金風】あきのかぜ、秋は五行の金に配す。歲華紀麗「玉帝規時、——屆序」＝秋風・商風。
【金不換】萬金にもかへがたき貴重品。墨經「凡墨日日用之、一歲纔減半分、如是者萬金不換」
【金覆輪】國こがね又金まきゑにて鍔鞍などの緣を細く覆ひ飾れるもの「——の鞍」
【金文】○きんもじ。金泥にてかきし文字。○金石文。
【金粉】○黃金のこな。李白詩「輕如松花落——」○鉛粉をいふ、婦女の化粧品「南朝——、北地胭脂」○國博奕に用ふる一種の賽。
【金幣】金貨に同じ。後漢書、南匈奴傳「賂遺——、以通舊好」
【金飆】あきかぜ。王僧孺文「素鐘肇節、——戒序」＝金風・商飆・秋飆。
【金鑣】こがねにてかざりしくつわ。隋書、禮志「緩馬勒及兩——之上」
【金瓢馬表】國黃金づくりの千成瓢簞のうまじるし。豐臣秀吉の所用。
【金碧】金色と青色と、美くしき色どり。後漢書、烏桓傳「飾以——」
【金僕姑】矢の名。左、莊十一「以——射南宮長萬」
【金盆】月の異名。杜甫詩「夜闌接軟語、落月如——」
【金毛】こがね色の毛。陸龜蒙詩「光寒好照——鹿」
【金明竹】まだけの一種。＝金竹。
【金面】こがね色のかほ。溫庭筠詩「鐵驄——青連錢」
【金門】金馬門の略語。漢書、揚雄傳「歷——上玉堂」
【金融】金錢の融通、かねまはり。
【金蕾】こがね色のつぼみ。陸游詩「宿露滋——、微霜點綠林」
【金罍】黃金のさかだる。罍は雲雷の模樣ある酒樽。詩、周南「我姑酌彼——、維以不永懷」
【金蘭】したしく固きまじはりに喩ふ。易、繫辭「二人同心其利斷金、同心之言、其臭如蘭」
【金蘭簿】友人の宿所氏名等をしるす帳面。宣武盛事「戴洪正每得

密友、則書於編簡、焚香告祖、號——」前條參看。
【金襴】錦の類、緯に平金絲を加へて模樣を織出せるもの。
【金利】元金に對する利子、利息。
【金鱗】○いしもち。泉州府志「石首魚、俗曰——」○うつくしき魚。
【金陵】戰國の時は越に屬し、後ち楚に屬す、晉に建康といふ、晉・宋・齊・梁・陳、皆此に都す。所謂六朝の舊都。＝秣陵・南京。
【金力】かねのちから、金錢の威力。
【金鈴】こがねのすず。隋書、禮儀志「綴以——」
【金蓮兒】荇菜の異名、はなじゅんさい。
【金蓮燭】天子の御殿にともす燈。唐書、令狐綯傳「綯爲翰林承旨、夜對禁中、燭盡、帝以乘輿金蓮華炬、送還院」
【金蓮步】美人のうるはしきあゆみ。南史、齊東昏侯紀「鑿金爲蓮華、以帖地、令潘妃行其上、曰、此步步生蓮華也」
【金祿公債】國明治維新の際、華族及士族に從來受けゐた俸祿を公債證書として下附せられしもの。
【金盌】こがねの椀。五代史、孫晟傳「——玉杯而盛狗屎可乎」
【金剛】○金剛石の略語。○佛堅固にして破れざる佛果。又、無明を照破する智慧を金剛石に比していふ。○國草履の異名「藁——」「板——」又芝居役者の許に奉公づとめする者。
【金剛界】佛眞言宗の教理にて智慧の一面より見たる世界觀。胎藏界の對。
【金剛橛】佛護摩壇の四方の柱。
【金剛草履】國普通のものよりも大きく藁にて造りし草履。略して金剛ともいふ。
【金剛纂】やつで、てんぐのうちは、五加科の灌木の一。葉は掌狀にして甚だ大いに、冬球形の黑實を簇生す。
【金剛鑽】金剛石の屑粉。
【金剛心】極めて堅き心。
【金剛神】二王（七八頁四段）に同じ。
【金剛砂】みがきずな。石榴石を細末にしたる赤黑色のすな。河內の金剛山より出づ。
【金剛杵】佛具の一。獨鈷・三鈷・五鈷の總稱。
【金剛石】寶石の一。質極めて堅く光澤强く、暗中にても光を發す。ダイヤモンド（英語）＝鑽石。
【金剛不壞】佛體性・力用・功德等の堅固にしてやぶれざる義、佛身をいふ。
【金剛夜叉】佛五大明王の一、三面六臂あり、北方を守り、一切可畏夜叉を伏す。
【金剛流】國金剛善覺の始めし能樂の一派。
【金翅鳥】佛怪しき大鳥の名。兩翅の相去ること三百三十六里、快得自在にして、日日に四海に遊び、龍を以て食とすといふ。
【金身】佛像をいふ。司空曙詩「百丈——開翠壁」
【金神】○陰陽家の祭る神の名、其のゐる方に對して物事をなすを忌む。○五行の金の神〔玉海〕
【金胎兩部】佛眞言宗の教理に本づく世界觀。金剛界と胎藏界との稱。
【金毘羅】佛天竺の靈鷲山の神。梵語の音譯。＝宮毘羅・威如王。
【金米糖】菓子の一種、冰蜜に饂飩粉を加へて粒狀に製せしもの。
【金輪際】○佛金輪のある所、即ち、大地の厚さ一百六十萬由旬の底〔大寶積經〕○國どこまでも。

二畫

【針】㊀シン ㊁シン 長沁 鍼の俗字
㊀はり、ぬひばり。又醫療用のはり。易、乾卦「各從其類」疏「若磁石引——、琥珀拾芥」○はりの形せるもの「磁——」「秧——」「棘——」○懸——は書法の名。㊁さす（刺）○ぬふ（縫）
【針葉樹】松・杉などの如く其の葉の針狀を成せる樹木。
【針灸】針術と灸をすゑると。南史、庾沙彌傳「——、輒以身先試」＝鍼灸。
【針觜魚】さより（鱵）くちばしが細長く尖る。＝針魚。
【針術】はりを用ひて病を治療するわざ。南史、晉爽傳「以善——、深被太武賞愛」＝鍼術。
【針小棒大】國はり程の小さきことを棒ほどに大げさにいふ。
【針線】ぬひばりと、ぬひいとと。鍼縫の義とす。白居易詩「獨對多病妻、不能理——」＝鍼線。
【坐針氈】針のさしてある毛氈の上にすわる。危險の地に居るに喩ふ。蘇軾詩「劍米有危炊、針氈無穩坐」
【針黹】衣を縫ふ。爾雅「黹、紩也」紩音チツ縫なり。
【針女】衣類をぬふ女。白居易詩「因命染人與——」
【針砭】○醫療のはり。針はかねのはり、砭は石ばり。○轉じて人を戒めて過を匡正する義。世說、言語「往聽黃鸝聲、此俗耳——、詩腸鼓吹」＝鍼砭・箴砭。
【針路】磁石の針の示す方向。舟の進みゆくみち。＝鍼路。

【釗】㊀セウ ㊁ケウ
㊀つとむ(勉)○けづる(刓)○まみゆ(見)㊁周の康王の名。

【釘】㊀テイ・チャウ ㊁テイ
㊀くぎ、物を貫き材と材とを堅く結合するかなもの「金—」「銅—」「竹—」晉書、陶侃傳「以二所レ貯竹頭一作二—裝船一」○矛の名「鉾—」㊁くぎうつ、くぎを物にうちつける。
【釘書】(俗)書籍を裝釘する。
【釘頭】くぎのあたま。杜牧、阿房宮賦「——磷磷、多二於在レ庾之粟粒一」

【釜】フ ホ 俗字
○かま、まろがなへ、烹飪の器。古史考「黄帝始作レ—」○量の名、六斗四升、我が五六升位。論、公冶長「與二之—一」
(附)釜は鬴なり、父・金に从ふ、省して釜に作る。
【釜竈】かまと、かまどと。新序「驊騮騄驥、天下之駿馬也、使下之與二狸鼬一試中于——之間上、其疾未レ必能二過狸鼬一也」
【釜山】地名、朝鮮慶尚道の東南角に在りて、絶影島其の口を扼す、商業殷盛なり。
【釜煮】釜にて煮る。付法藏經「——不レ爛」
【釜臍墨】鍋の底の煤炱(すす)なべずみ、古、藥品とす[本草]＝釜煤。
【釜甑】かまと、こしきと。孟、滕文公「許子以二——一爨、以レ鐵耕乎」
【釜中生レ魚】後漢の范冉(字は史雲、萊蕪の長)が、貧にして屢〻飯粒を絶ちし故事。後漢書、獨行傳「甑中生レ塵范史雲、——范萊蕪」
【釜中魚】生存すること久しからざるに喩ふ。通鑑、漢順帝紀「廣陵賊張嬰曰、相聚偸レ生、若三魚遊二釜中一、知二其不一レ可レ久」
【釜煤】なべずみ。本草「——、又名二釜底煤一」
【釜鳴】釜が自ら鳴る神異をいふ。稽神錄「太廟齋郎盧藩所レ居——」
【釜庾】少しの粟。釜は六斗四升、庾は十六斗。魏志、管寧傳「乃分二——之儲一、以救二邑里之命一」
【釜鬲】かまと足の中の空なるかなへと。史、蔡澤傳「入二韓魏一、遇レ奪二——于塗一」
【破レ釜沈レ船】必死の覺悟にて戰ふをいふ。史、項羽紀「項羽乃悉引レ兵渡レ河、皆沈レ船破二釜甑一、燒二廬舍一、持二三日糧一、以示三士卒必死無二一還心一」

三畫

【釭】㊀カウ・コウ ㊁コウ・ク
㊀ひともし、あぶらざら(鐙)○ともしび(燈火)「殘—」「寒—」謝朓詩「蘭—當二夜明一」缸は俗字。○かりも、かも、車の轂中に在る中空の鐵具。○壁の帶の如く露出せる横木にうつかなぐ、車釭に似たるが故。漢書、趙皇后傳「壁帶往往爲二黄金—一」㊁やじり(箭鏃)

【釬】カン
○こて(臂鎧)兩腕を被ふ鎧。○弓の兩端にある弦を鉤する具。

【釦】コウ
○ちりばむ(鏤)○金銀にて器の縁を飾る。○さわぐ(譁呼)「譁—」＝叩。○(国)ボタンもと葡萄牙語、シャツ・洋服などにぬひつけて上前と下前とを連ね合すもの。

【釵】サイ 通音 サ
○かんざし、二本足のかんざし、婦人の兩股笄「玉—」「金—」「寶—」曹植詩「頭上金爵—」○松—は松葉。形の似たる故。
【釵股】かんざしの岐。白居易詩「脂細同二——一」
【釵梳】かんざしと、くしと。王建詩「私縋二黄帔一捨二——一」
【釵釧】かんざしと、うでわと。唐書、五行志「世俗尙以二琉璃一爲二——一」
【釵朶】かんざしのえだ。庾信賦「——多而訝二重髻一」＝釵股。

【釤】サン
おほがま(大鎌)

【釧】セン
○うでわ(臂環)「金—」「玉—」「腕—」古は男女共に用ふ、後世は唯女子のみ用ふ。庾信賦「玉關寄書、章臺留—」○(国)くしろひぢまき、古、臂に絡ひたる飾物。

【釱】テイ・ダイ タイ
○あしかせ(鐵鉗)鎖を以て足に加ふ、古の刑法の一。史、平準書「敢私鑄二鐵器一煮レ鹽者釱二左趾一」○くさび(車轄)漢書、揚雄傳「肆二玉—一而下馳」＝軑。

【釣】テウ
○つる、鉤(つりばり)にて魚をつる「漁—」又、其の漁法、つり。○轉じて人をおびきだす、誘ひて之を取るにいふ。○求める「—名」「—譽」(国)○つり「—錢」○つる垂れる。
【垂レ釣】つりばりをおろしてつる。梁昭明太子、陶淵明集序「莊周—二—於濠一」＝垂綸。
【釣舸】つりぶね。杜牧詩「千秋—歌二明月一、萬里沙鷗弄二夕陽一」
【釣鼇】○海中の大龜をつる。列子「渤海之東、有二五山一焉、帝使二巨鼇十五、擧レ首而戴一レ之、龍伯之國、有二大人一、一釣而連二六鼇一、岱輿・員嶠沈二于海一」○借りて以て豪擧に喩ふ。李白・張祜・王嚴光、俱に——客と稱す、蓋し六合を彌綸し、八荒を呑吐するの意あるをいふ。
【釣竿】魚をつるに用ふる細き竹、つりざを。戴石屛詩「萬事無心一——」
【釣磯】魚をつるいそ。孟浩然詩「——平可レ坐、苔磴滑難レ歩」
【釣戶】魚つるを生業とする人。又、其の家。王建詩「——竿頭乞二活魚一」
【釣鉤】つりばり。陳師道詩「布レ網收二魚鰺一、連レ鉤下二——一」
【釣舟】つりふね。杜甫詩「磨滅餘二篇翰一、平生——」＝釣船・釣艇。
【釣詩鉤】酒の異名。酔ひて詩思をひき出すが故。蘇軾詩「應レ呼二——一、亦號二掃愁帚一」
【釣繳】魚をつるいと。詩經、箋「綸、——也」
【釣船】○つりぶね。岑參詩「桑葉隱二村戶一、蘆花映二——一」＝釣舟。○閩浙地方にて貨物船をいふ、船の形魚に似たり。＝刀船。
【釣叟】魚をつるおきな。庾信詩「星精逢二漢帝一、——値二周王一」＝釣父・釣翁。
【釣臺】○つりをする小高き所。名勝記「——山在二東阿縣鎭城東南一(中略)蘆有二釣磯一、相傳嚴光釣處」○(国)つりだい物品を載せてかつぎゆく道具。
【釣艇】つりふね。白居易詩「竹篙撐二——一、金甲擁二樓船一」＝釣舟。
【釣徒】魚をつるなかま。唐書、隱逸傳「張志和居二江湖一、自稱二烟波——一」
【釣童】魚をつるこども。沈佺期詩「遊魚瞥瞥——」
【釣緡】つりいと。杜甫詩「遲暮堪二雌雄一、飄零且——」＝釣綸。
【釣篷】つりぶねのとま。胡宿詩「碧葉田田擁二——一」
【釣レ名】たくみ僞りてほまれを得んことを求める。次條參看。
【釣レ利】利益を得んことをはかる。管子、法法「釣名之人無二賢士一焉、——之君無二王主一焉」
【釣綸】つりいと。杜甫詩「錦里殘二丹竈一、花溪得二——一」＝釣緡。

四畫

【鈆】鉛(金部五畫)に同じ。

【釿】㊀キン ㊁ギン
㊀木をきる道具(斫木具)○てをの。＝斤。○一說に、かんな(鉋)の類。斧の跡を平かにする具。㊁—鍔は器物上の凸凹のある線。凹下の處を—といひ、凸起の處を鍔といふ。
【釿鋸】てをのと、のこぎりと。莊、在宥「——制焉、繩墨殺焉、椎鑿決焉」

【鈞】キン
○重量三十斤の稱。漢書「以二一縷之任一係二千—之重一」○圓形の陶器を作る囘轉器械につける輪。其の囘轉によりて自由に種種の陶器が製作せられる「陶—」轉じて、天。又、造物者を大—洪—といひ、又、物事の樞機の義とす「國—」○尊稱の辭。我が國の御の字の用法に近し「—安」「—座」「—鑒」○ひとし(同等)ひとしくす。とのふ。＝均。○音調。大—は宮・商、細—は角・徵・羽。
【秉レ鈞】天下の政權を執る。次條參看。＝秉二國鈞一。
【鈞衡】○物を量りて均平を得しむる、宰相をいふ。晉書「中書地在二禁近一、秉レ鈞持レ衡、多承二寵任一」＝阿衡。○人才をはかりえらぶ。宋書「推レ鈞懸レ衡、委二之選部一」釋無可詩「一遂二——薦一、今爲二長史一歸」＝銓衡。
【鈞駟】天子、駟馬に駕するに、其の馬の毛色が皆齊しく同じきをいふ。史、平準書「自二天子一不レ能レ具二——一」(國家貧しく天子均色の四馬を具する能はず)＝醇駟(漢書)
【鈞樞】鈞軸に同じく權要の地位に在る者。樞は戶のくるる。韓愈詩「凡此座中人、十九持二——一」
【鈞石】おもり。鈞は三十斤、石は四鈞卽ち百二十斤。禮記「平二權衡一、正二——一」
【鈞旋轂轉】陶鈞・車轂の轉ずるが如く、事物の變遷するをいふ。淮南子「——、周而復帀」
【鈞陶】人物を養成する、鈞を轉じ

陶器を造る義。雅琥詩「三千碩士在二一一」

【釣軸】鈞は物を銜かり、軸は車を轉ず。以て要路の大臣に喩ふ。呂溫文「大邦一一、至則委レ汝」

【釣敵】力がひとしくして、まさりおとりなし。易林「兩矛相刺、勇力一一」

【鈞天】天の中央。上帝の都する所。鈞は平、四方の主たる義。史、趙世家「趙簡子、五日不レ知レ人、大夫皆懼、居二日半、簡子寤曰、我之二帝所一甚樂、與二百神一遊二于一一、廣樂九奏萬舞、不レ類二三代之樂一」

【鈞天廣樂】天上の音樂。前條參看。＝鈞天樂。

【鈜】クヮウ 庚

○金の聲。○鏗ー は鐘鼓の聲の形容。＝鈜鏗。

【鈐】㊀ケン ㊁キン 鹽 眞 鈴とは別字

㊀くさび（車轄）○ぢやう、かぎ（鑰）○印を押す「ー印」「ー壓」○韜ー は兵法の書。又兵法。張說詩「韜ー用二老臣一」○茶ー は茶を炙る具、金鐵を屈して作る。㊂矛の柄。古、矜に作る。

【鈐鍵】ちやうまへ、かぎ。爾雅序「六藝之一一」＝關鍵。

【鈐制】くさびを軸にさして車を制する如く自由に制御する。

【鈐韜】○矛の柄と弓の袋と。○轉じて兵法又兵書の義とす「一一家」＝韜鈐。

【鈎】鉤（金部五畫）の俗字。

【鈒】サフ・ソフ シフ 合 緝

○ほこ（戟鋋）「ー戟」陸雲文「舉ー成レ雲、下ー成レ雨」＝鍛。○ちりばむ（鏤）

【鈒花工】けぼり、けぼり師。

【鈒鏤】けぼり、象眼。六書故「細鏤金銀爲レ文、曰二一一一」＝鏤刻。

【鈔】㊀セウ ㊁セウ 肴 效

㊀とる（取）かすむ（略）略取する。後漢書、公孫瓚傳「攻二ー郡縣一」○うつす（謄寫）ぬきがきする（拔錄）うつし、ぬきがき、通じて抄に作る。㊁さつ、しへい（紙幣）儼山外集「ー之名、始見二金史一、時有二交ー之制一」○きって、政府より發行する受取證・證書（官符・憑）「ー票」

【鈔引】○宋代、政府より發行せし紙幣。宋史「紹興元年（中略）願レ得二茶鹽香貨一一一者聽」今、紙幣を鈔票といふは此に本づく。○ぬきがきする。

【鈔校】書物をうつし正す。宋本、滋溪書堂記「作二屋三楹一、置二書數十卷一、再傳而吾王父威如先生、又手自一一、得二數百一、貯レ之因名曰二滋溪書堂一」

【鈔關】稅關。明、宣德より嘉靖中に至るまでに、關內前後、一一十二處を設けて貨物の運漕船に課稅せしに始まる。

【鈔劫】かすめる。唐創業起居注「招二集無賴一、一二一郡縣之間一」＝劫鈔。

【鈔寫】書物をうつしとる。晉書、紀瞻傳「瞻性靜默、少二交遊一、好讀レ書、或手自一一、凡所二著述一詩賦牋表數十篇」＝鈔胥。

【鈔胥】うつしものをする小役人。＝書手。

【鈔盜】かすめぬすむ。後漢書、班勇傳「不レ爲二一一一則可矣」＝剽盜。

【鈔奪】かすめうばふ。五代史、盧文進傳「唐兵屯二涿郡一、歲時饋運、自二瓦橋關一至二幽州一、嚴レ兵斥候、常苦二一一一」＝劫奪・略奪・掠奪。

【鈔暴】武力を以てかすめあらす。後漢書「經レ歲無レ功、而匈奴一一日增」唐書、摩揭陀傳「無二城郭一、好二一一商旅患レ之」＝抄暴。

【鈔票】さつ、紙幣、票は手形。鈔引參看。

【鈔略】かすめとる。後漢書、袁術傳「術在二南陽一、不レ修二法度一、一一爲レ資、百姓患レ之」＝劫略・剽略。

【鈕】ヂウ 有

○つまみ、とって（把鼻・印鼻）手にてつまみ持つやうに器具につけたるもの「印ー」「虎ー」「龜ー」○國ボタン＝釦。

【鈍】ドン 願 頓に通ず

○にぶし、なまくら。銳の對「利ー」○にぶる。にぶらす。陳琳、檄吳文「兵不ー鋒レ勢が弱くなる。○おろか「魯ー」「愚ー」「頑ー」

【鈍角】九十度以上、百八十度以下の角度。銳角の對。

【鈍漢】ばかもの、愚人を罵りていふ。五代史、司空挺傳「張彥之話二王正言一曰、一一辱レ我」

【鈍器】銳利ならざるはもの。王褒、聖主得二賢臣一頌「工人之用二一一一也、勞レ筋苦レ骨、終日矻矻」

【鈍金】銳利ならざるかね。荀、性惡「一一必將待二礱厲一、然後利」

【鈍根】佛人の六根のにぶくおろかなる義。上根の對。指月錄「此是接二引一一人一語」

【鈍惛】おろか。淮南子「狡猾一一、是非無レ端」

【鈍賊】人の語句をぬすむ詩人を罵りていふ。詩苑類格「詩有二三偷一、偷レ語最一一」

【鈍刀】なまくらがたな、銳利ならざる刀。

【鈍馬】足のおそきうま。蘇軾文「用二駑馬碾一、如レ騎二一一一」

【鈍物】國ばかもの。＝愚物。

【鈍兵】○兵士の氣がにぶり弱る。孫子「其用レ戰也、勝久則ーレー挫レ鋒」○にぶく弱き兵卒。○銳利ならざる武器。戰國策「敝甲一一」

【鈍敝】にぶりやぶれる。唐書、突厥傳「天下無レ事時、大臣偷處榮逸、戰士離落、兵甲一一、車馬刓弱」＝鈍弊。

【鈍弊】にぶくしてやぶれる。國語「申胥曰、使二吾甲兵一一一、民人離落、而日以憔悴」

【鈍僕】おろかなるしもべ。袁宏道文「家有二四一一一」

【鈍冥】性質にぶく心くらし。梅堯臣文「乞二天巧之付與一、惡二心手之一一」＝頑鈍・闇鈍。

【鈀】ハ 麻

○戰に用ふる、ものみぐるま（候車）○まぐは、鉏の屬、五齒ありて土を平かにし穢を除く具。耙は俗字。○かぶらや（鏑）

【鈲】ハク 陌

さく（裂）やぶる（破）漢書、藝文志「則苟鉤ー析亂而已」

【鈑】ハン 潸

○いたがね、おほばんきん（鉼金）○版に同じ。莊、徐無鬼「金ー六弢」

【鈇】フ 虞

○をの、まさかり（斧）ーは大、斧は小。○列、說符「人有レ亡レー者」○鍘を斬る刀。

【鈇鉞】をのと、まさかりと。禮、王制「諸侯賜二弓矢一而後征、賜二一一一然後殺」（賜二一一一は一軍の大將として生殺の權を與へらるる義）

【鈇質】次條に同じ。史記「請就二一一之誅一」＝斧質。

【鈇鑕】斧にて腰を斬る刑罰。又、其の刑具、鈇は斧、鑕は鍖ダイ。公羊、襄二七「執二一一一」

【鉞】五畫 エツ 月

まさかり、おほをの（大斧）古、征討の時、威信を示す爲めに天子より主將に授けられしもの「斧ー」「鈇ー」「節ー」書、牧誓「王左杖二黃ー一、右秉二白旄一」

【鉞下】節鉞の下、麾下といふに同じ。江淹文「竊惟明使君一一」

【鉛】エン 先 又、鈆に作る

○なまり（黑錫）灰白色にして質軟く、火にとけ易し。○おしろい、鉛の酸化せしもの。曹植、七啓「玄眉弛兮ー落」○したがふ（循）古、沿に通ず。

【鉛華】おしろい。曹植賦「芳澤無レ加、一一弗レ御」＝鉛白・鉛粉。

【鉛黃】鉛は字を書くに用ひ、黃は雌黃、誤字を塗滅するに用ふ。よりて文字を校勘する義とす。陶翰詩「終年事二一一一」

【鉛汞】なまりと水銀と。道家にてこの二物を以て鼎に入れて丹藥を煉る、之を服すれば長生すといふ。白居易、贈二別郭鍊師一詩「專心在二一一一」

【鉛槧】古、鉛にて槧に字を書く。よりて文筆の義とす。西京雜記「揚雄、懷レ鉛提レ槧、從二諸計吏一、訪二殊方絕俗之語一、作二方言一」杜牧詩「可レ憐一一竟何功」

【鉛錘】なまりのおもり。王廙文「弱舌紙薄、一一內藏」

【鉛垂線】なまりのおもりを絲に懸けて垂下せし線。＝天垂線・直立線。

【鉛槧】鉛筆と、きぬと。翰苑新書「人拾二青紫一、家懷二一一一」＝紙筆。

【鉛黛】おしろいと、まゆずみと。文心雕龍「夫一一所二以飾レ容」＝粉黛。

【鉛刀】なまくらがたな。史、賈誼傳「莫邪爲レ頓兮、一一爲レ銛」＝鈍刀。

【鉛刀一割】○己の微力を謙していふ。後漢書、班超傳「況臣奉二大漢之威一、而無二一一之用一乎」○力の限りを盡くして、再び用ふべからざるに喩ふ。貞觀政要「君子小過、蓋白玉之微瑕、小人小善、乃鉛刀之一割」

【鉛糖】醋酸鉛。

【鉛丹】顏料、又工業用に用ふる赤色の粉末、一名光明丹。

【鉛駑】なまりと、駑馬と。自ら才力の卑下なるに喩ふ。南齊書、王融傳「千祀一逢、休明難レ再、思レ策二一一、樂レ陳二涓埃一」

【鉛毒】おしろいの毒。

【鉛鈍】なまりの如くにぶし。柳宗元文「自顧一一、無二以克堪一」

【鉛白】おしろい。＝白粉・鉛華。

【鉛板】組みあげる活版を紙型に取り、なまりを鑄込みて作る印刷版。＝ステロ。

【鉛不レ可二以爲一レ刀】なまり

は刀劍に作ることを得ず、物は各用所の異るをいふ。淮南、齊俗「——、木未レ可ニ以爲一レ釜」

【鉛筆】エンピツ ○鉛粉を用ひて書く筆。東觀漢記「寢則懷ニ——一、行則誦ニ讀書一」○木軸に黒鉛の細きしんを插入して作りし筆。＝木筆。

【鉛粉】エンフン ○ごふん、書畫をかくに用ふる白色の顔料。＝胡粉。○おしろい。急就篇「粉謂ニ——・米粉一、皆以傅レ面、取ニ光潔一也」＝鉛華。

【鉤】コウ ク　尤

○おびどめ「帶—」○かぎ、物を引きかけるに用ふるもの。○隱れたるものを引きかけてつり出す「—レ玄」○いたす(致)致し難きものを致す。○取る。易、繫辭「—レ深致レ遠」○めぐる(繞)○かがむ(屈)まがる(曲)○とどめる(留)○くじ。＝鬮。○ぶんまはし(規)「—矩」○ひく(牽引)互に引つぱり合ふ。後漢書、靈帝紀「皆爲ニ—黨一下レ獄」○車の心木。○劍に似て曲れる武器、敵を引きかけて殺すもの。○つりばり。○劍の頭につけたる環。○刈—は禾を刈る鎌。

【竊レ鉤者誅】コウヲヌスムモノハチユウセラル 帶鉤オビドメをぬすむ者は殺される、小盜はかへりて嚴刑に處せらるる義。莊、胠篋「——、竊レ國者爲ニ諸侯一、諸侯之門而仁義存焉」

【鉤校】コウカウ さがしてしらべる。後漢書、陳寵傳「寵性仁矜、及レ爲ニ理官一、——律令條法一、溢ニ於甫刑一者、除レ之」＝檢校。

【鉤距】コウキヨ けづめのあるつり針は、呑めば順ひ、吐けば逆ふ如く、人を術中に陷れて出づること能はざらしめ、以て隱情を鉤索するに喩ふ。漢書、趙廣漢傳「尤善爲ニ——一、以得ニ事情一」

【鉤曲】コウキヨク つりばりの如くまがる。杜甫詩「邊士如ニ弦直一、小人似ニ——一」

【鉤掛】コウクワイ かぎにてひっかける。論衡「隨而雲起、枳棘——」

【鉤玄】コウゲン おくぶかき義理を引きかけて取る。韓愈、進學解「纂レ言者、必鉤ニ其玄一」

【鉤爪】コウサウ 爪の甲の内に曲りて鉤バツリの如き者。新論「獸之方喙——者、毛羣畏レ之」＝句爪。

【鉤索】コウサク ○おくぶかき道理をさがしもとめる。○金屬のかぎ。＝鐵鉤索。

【鉤止】コウシ おさへとどめる、鉤は留。漢書、鮑宣傳「使ニ吏——丞相掾史一」＝抑留。

【鉤枝】コウシ まがれるえだ。劉勰文「夫樟木盤根、——癭節」

【鉤餌】コウジ つりばりにつけたるゑ。莊子「——網罟」

【鉤心】コウシン 車の軸。又、屋の中心の聚る所。杜牧、阿房宮賦「——鬭角、盤盤焉囷囷焉」(鬭角は屋根と屋根とが近く相對して出る)

【鉤章棘句】コウシヤウキヨクク とげのある章句。奇嶇にして讀みにくき文章。韓愈、孟郊墓誌「——、掐ニ擢胃腎一」

【鉤取】コウシユ かぎに引きかけてとる。宋史、邊肅傳「帝以ニ三司——無レ法、至道初置ニ行帳司一、以會ニ財用之數一、命レ肅主レ之」

【鉤繩】コウジヨウ 曲尺と墨なはと。莊子「匠人曰、我善治レ木、曲者中レ鉤、直者中レ繩」淮南子「譬猶ニ冰炭——一、何時而合」

【鉤摭】コウセキ ひっかけてひろひ取る。權德輿文「——纖微、誠有レ可レ觀、恐未レ盡レ言」

【鉤黨】コウタウ 互に相牽引して同じ黨ナカマを爲す。後漢書、靈帝紀「皆爲ニ——一下レ獄」

【鉤輈】コウチウ 鷓鴣の鳴く聲。唐本草「鷓鴣生ニ江南一、形似ニ母雞一、鳴云ニ——格磔一」林逋詩「草泥行ニ郭索一、山木叫ニ——一」(郭索は蟹の行く貌)

【鉤梯】コウテイ 甚だ高きかけはし、即ち雲梯。管子「凌ニ山阬一、不レ待ニ——一」

【鉤箔】コウハク すだれをまきてかぎにかける。釋道潛詩「—レ—見ニ疎雲一」

【鉤用】コウヨウ 取り上げて用ふる。莊子「論ニ先王之道一、而明ニ周召之迹一、一君無レ所ニ——一」

【鉤欄】コウラン 曲れるてすり。李頎詩「苔色上ニ——一」＝句欄。

【鉤連】コウレン ひきつらなる。李白詩「然後天梯石棧相——」＝牽連。

【鉤聯】コウレン まがりつらなる。司馬法「——蟠曲、各有ニ條理一」

【鉤鐮】コウレン かま。論衡「山野草茂、——刈斬」

【鉤勒】コウロク 雙鉤法カゴを以て畫を作る。圖繪寶鑑「張遜善ニ畫竹一、作ニ——法一、妙ニ絕當世一」

【鉀】カフ　洽

よろひ(鎧)晉書、載記「貫レ—上レ馬」＝甲。

【鉅】キヨ　語

○大いなり。＝巨。○つりばり(鉤)○かたきくろがね(剛鐵)○かたし、こはし。○尊者の通稱「—公」○なんぞ(何)いづくんぞ＝詎。○にはか。遽に通ず。荀、正論「是豈—知レ見レ侮之不レ爲レ辱哉」

【鉅魚】キヨギヨ おほいなるうを。莊子「尋常之溝、——無レ所レ還ニ其體一」

【鉅鑊】キヨクワク 大いなるかなへ、鑊は足なき大鼎。徐積詩「——大鼎烹ニ牛羊一」

【鉅卿】キヨケイ 身分貴き人。＝鉅公。

【鉅橋】キヨケウ 殷の紂王の米倉の名、其の遺址、直隷省曲周縣の東北に在り、周の武王、紂を亡し其の積粟を散じて民に施す「書、武成」

【鉅闕】キヨケツ 古の名劍の名。荀、性惡「干將莫邪——辟閭、此皆古之良劍也」

【鉅公】キヨコウ ○天子の稱。漢書、郊祀志、注「父曰レ公、天子爲ニ天下父一、故曰ニ——一」○尊き人。又、其の道にすぐれたる貴き人。李賀詩「云是東京才子文章——」＝鉅卿。

【鉅儒】キヨジユ 大學者。隋書、經籍志「四方鴻生——、負レ袠自レ遠而至者、不レ可ニ勝算一」＝碩儒。

【鉅黍】キヨシヨ 良弓の名。荀、性惡「繁弱——、古之良弓」

【鉅纖】キヨセン 大いなると細きと。汪克寬文「夫物理之不レ齊、寔——之異レ宜」＝細鉅。

【鉅鐵】キヨテツ 大いに剛カタきはがね。史、禮書「宛之——施、鑽如ニ蠭蠆一」＝巨鐵。

【鉅藩】キヨハン 大いなる諸侯の國。王十朋詩「駐蹕東南爲ニ——一」＝大藩・雄藩。

【鉅費】キヨヒ おほくの入費。宋史、食貨志「凡貨財不レ領ニ于有司一者、則有ニ內藏庫、蓋天子之別藏也、縣官有ニ——一、左藏之積、不レ足レ給、則發ニ內藏一佐レ之」＝巨費・大費。

【鉅野】キヨヤ 澤の名、禹貢の大野、山東省——縣の北に在り、澤最も廣大、元の末に黃河の決する所となりて遂に涸る。

【鉅鹿】キヨロク 地名、戰國の趙の邑。今の直隷省平鄉縣、項羽が大に秦の軍を破りし所。

【鈺】ギヨク ゴク　沃

○たから(寶)○堅き金。

【鈯】

掘(七五七頁四段)に同じ。荀、正論「—ニ人之墓一」

【鉗】ケン　鹽

○くびがせ、くびがね、罪人の首にはめるかなわ。古の刑法の一。漢書、高帝紀「自髡—、爲ニ王家奴一」○物をはさみ取るもの。○かなばさみ(鉗)轉じて勢力を以て人を忌み害する「—忌」○とづ「—レ口」莊子「口—不ニ敢言一」古、箝に通ず。○——は妄行して誠實なき貌。

【鉗忌】ケンキ 鉗バカサミの能く物をはさみ取る如く勢力をたのみて他を忌み害する。後漢書、梁冀傳「妻孫壽、性——、能制ニ御冀一」＝忌剋。

【鉗噤】ケンキン 口をとづ。唐書、吳湊傳「顧ニ左右一——自安耳」＝鉗口。

【鉗口】ケンコウ 口をとぢて言はず。後漢書、班超傳「上下——」＝箝口。

【鉗梏】ケンコク くびがせと、てがせと。又其の刑具をはめる。柳宗元、童區寄傳「束ニ縛——之一」

【鉗髡】ケンコン 首がせをかけ、頭をそる。皆罪人のすがた。范成大詩「朝市有ニ機穽一、冠裳或——」＝髡鉗。

【鉗子】ケンシ ○くびがせの刑を被りし者。＝鉗徒。○俗 釘拔、くぎぬき。

【鉗赭】ケンシヤ 罪人をいふ、赭は刑せられて赤衣を著る。宋書、竟陵王傳「田叔——、志在ニ爽戮一」

【鉗制】ケンセイ 勢力を以て他を抑へつけて自由をさせぬ。易林「執囚束縶、—ニ—子吏一」

【鉗徒】ケント くびがせをはめられて居る罪人ども。漢書、衞靑傳「有ニ一——一相ニ靑曰、貴人也」＝鉗子。

【鉆】ケン　鹽

○てふつがひ。○はさむ(鉗持)○一種の刑具。鉗(前條)に通ず。

【鉉】ゲン　銑

○つる、鼎の兩方の耳に貫きて提ぐるやうにせし金具「金—」「鼎—」易、鼎卦「六五鼎黃耳金—、利レ貞」○弓づる。古、弦に通ず。○三—サンゲンは三公をいふ、鼎を天位に比し、其の三足、又は—を三公に比す。

【鉉席】ゲンセキ 三公の地位。王筠文「忝參ニ——、觀ニ貌槐廷一」＝鉉台。

【鉉台】ゲンダイ 三公をいふ。潘岳、西征賦「納ニ旌弓於——一」＝台鼎・台鉉。

【鈷】コ　麌

○—鉧コボはひのし。柳宗元に—潭記の文あり、唐宋八家文に出づ、潭は湖南省零陵縣の西三支那里に在り。＝鈷鉧・熨斗。○俗もと印度の護身用の兵器、煩惱を打破する義にて佛具の一とす、把手の兩端に爪あり、其の爪の數によりて獨—・三—・五—の名あり。

【鉔】サフ ソフ　合

まはりかうろ(香毬)巧機タクを施して轉旋するも傾倒せざる香爐。司馬相如賦「金—薰香」

【鉃】シ　紙

やのさき(箭頭)＝鏃。

【鉈】シヤ シ　麻 支

〇ほこ、みじかき矛。〇國なた、薪などを斬るに用ふる厚刃の刀、彎刀。

【鉦】セイ　シャウ　庚
〇軍中の樂器の一、かね・どら、鐃の類。〇鐘の體の正中の處。〇伏せおきてたたき鳴らす佛具、ふせがね「敲ー」
【鉦鼓】シャウコ　どらと、つづみと。行軍の時、鉦は以て之を靜め、鼓は以て之を動かす。轉じて兵事の義に用ふ。漢書、東方朔傳「學二孫吳兵法・戰陣之具・ーー之敎一」
【鉦鐸】シャウタク　どらと、すずと。周禮、注「謂二ーー之屬一」

【鉥】ジュツ　質
〇いざなふ(誘)みちびく(導)怵又訹の假字。晉語「子盍レ入乎、吾請爲レ子ー」〇長き針。

【鉏】㊀ショ・ソ　魚　㊁ソ　麌　㊂ショ・ソ　語
㊀すき(鋤)くは(鍬)〇すく、たがやす、田を耕し治む。漢書「非二其種一者、ー而去レ之」〇誅除する、ころす。韓詩外傳「衆之所レ誅ー也」〇ー麑は春秋の時の晉の賢人。㊁祭に用ふるしきもの。㊂ー鋙はくひちがふ。
【鉏耘】ショウン　〇すきてくさぎる。韓愈詩「至寶非二雕琢一、神功謝二ーー一」＝鋤耘・耕耘。〇轉じて惡人を誅除する義。漢書、王莽傳「拊二循貧弱一、ー二ー豪強一」＝誅除。
【鉏鍤】ショサフ　すき。張耒詩「飢寒不三自勤二ーー一」
【鉏鋙】ソゴ　くひちがふ。距みて相入れざる貌。楚辭、九辨「圓鑿而方枘兮、吾固知二其ーー難一レ入」＝齟齬。

【鉄】チツ　紩(糸部五畫)の古字
俗に、鐵の略字とするは非。

【鉒】チュ　シュ　遇
〇おく(置)〇あらがね(鑛物)「ー銀」「ー銅」
【鉒金】チュキン　黃金のあらがね。管子、地數「上有二丹砂一者、其下有二ーー一、上有二慈石一者、其下有二鉒銅一」

【鈿】テン　デン　先　霰
〇かんざし、造り花のかんざし。庾肩吾詩「誰忍去二金ー一」〇こがねのかざり(金華)〇あをがひざいく、あをがひ「螺ー」唐書、王鉷傳「以二寶ー一爲二井幹一」
【鈿瓔】デンエイ　あをがひのくびかざり。白居易詩「ーー纍纍佩珊珊」
【鈿合】デンガフ　あをがひ細工の香合。陳鴻、長恨歌傳「定レ情之夕、授二金釵ーー一以固レ之」
【鈿箏】デンサウ　あをがひ細工のこと。溫庭筠詩「ーー絃斷雁行稀」
【鈿針】テンシン　こがねのかんざし。唐書、百官志「歲七月獻二ーー一、臘月獻二口脂一」
【鈿車】デンシャ　金華にて飾りし車。元稹詩「ーー迎二妓樂一」
【鈿鎞】デンヘイ　かんざし。皮日休詩「ーー雕鏤費二深功一」
【鈿螺】デンラ　あをがひざいく。尹廷高詩「ーー椅子象牙牀」＝螺鈿。

【鉋】ハウ　效
〇かんな、木の面を平かに削る大工道具。〇馬を搔く具。

【鉑】ハク　藥
〇はく、金屬をのべて薄くしたるもの「金ー」＝烏金紙。〇白金。

【鉢】ハツ　ハチ　曷
〇僧侶の食器「衣ー」「杖ー」國〇はち。皿の深く大いなるもの。又「植木ー」〇兜の頭にかぶさる部分。〇あたまのはち。＝顱。
【鉢盂】ハツウ　僧家の飯器、梵語の鉢多羅。

【鈸】ハツ　バチ　曷
銅ーは樂器の一、兩片を合せうちならす。もと印度の樂器。＝鐃鈸。

【鈹】ヒ　支
〇おほはり(大針)〇つるぎ(劍)史、刺客傳「皆持二長ー一」

【鉍】ヒ　ヒツ　寘　質
矛の柄。＝柲。

【鉧】ボ　麌　又、[illegible]に作る
鈷ーは火のし、鈷(前頁四段)を見よ。

【鉚】リウ　有
美なる黃金。

【鈴】レイ　靑　唐音リン
〇すず、振り動かして音を發せしむる金器。〇りん、鉢形、又は鐘形の金器、振り又はうちたたきて音を出すもの。〇物のなる聲。通じて令に作る。〇

【引レ鈴】すずを引きて知らせる。韓偓、玉堂閒坐詩、自注「禁署嚴密、非二本院人一、雖レ有二公事一、不二敢遽入一、至二於內夫人宣一レ事、亦先ーレー」
【鈴下】レイカ　書簡文に將帥を稱する敬語(晉靑日札)次條參看。
【鈴閣】レイカフ　將帥の居る所の地。晉書、羊祜傳「ーー之下、侍衞者不レ過二數十人一」
【鈴語】レイゴ　簷鈴の聲。薩都剌詩「落日樓臺自ーー」＝鈴聲。
【鈴鐸】レイタク　すず。宮殿樓閣などの簷角に懸ける、風來れば鳴る。嵇康文「ーー警レ耳、鐘鼓駭レ心」＝鐸鈴。
【鈴鈴】レイレイ　聲の震ふ貌。雷などの餘聲。漢書、天文志「丙戌地大動、ーー然」

六畫

【銚】㊀エウ　蕭　㊁テウ　嘯
㊀かま、なべ、小さき釜の柄と口とのあるもの、飲食物を溫めるに用ふ。㊁すき(臿)大いなる鋤〇かる(刈)〇けづる(削)國〇ー子は酒を盛りて杯に注ぐ器。轉じて酒瓶・德利の義とす。
【銚鎛】テウハク　すきと、くはと。馬祖常詩「ーー毎親荷」

【鉸】カウ　巧　效　肴
〇釘ーは刀の柄。又、鞍の首などのかなぐ。〇はさみ(翦刀)
【鉸剪】カウセン　はさみ。
【鉸刀】カウタウ　はさみ。李賀、五粒小松歌「細二束龍髥一ーー剪」＝翦刀。

【銜】カン　咸
〇くつわ、くつばみ、馬の口にふくませ、轡を著けて馬を制する具。〇ふくむ(含)物を口にくはへる「ー枚」「ー環」〇うけたまはる、奉ずる「ー命」〇うらむ(憾)漢書、外戚傳「栗姬怒不レ應、言不レ遜、景帝心ー之」〇くらゐ、官吏の位階「官ー」〇馬ーは海神の名(海賦)
同訓異義　ふくむ　銜・含・嗛の別は含(三一三頁一段)の條を見よ。
【銜冤】カンエン　寃罪をうけて伸理するを得ざる義。李商隱詩「誰瞑ーー目、寧吞欲レ絕聲」
【銜泣】カンキフ　哭泣して聲を出さざるをいふ。徐陵文「ーー吞レ聲」
【銜塊】カンクワイ　口につちくれを含む、古、罪を請ふ禮、後世の負荊の如し。唐書、玄宗紀「天寶末、安祿山反、帝欲レ禪二位太子一、楊貴妃ーレー請レ死、帝意沮乃止」
【銜華佩實】カンクワハイジツ　文と質との兼ね備はるをいふ。文心雕龍「聖文雅麗、固銜レ華而佩レ實者也」
【銜橛之變】カンケツノヘン　銜はくつわ、橛は車の心棒、馬車の馬が暴れてくつわを外し、又は車を覆へして心棒を折るなどの患。司馬相如、上諫レ獵書「淸レ道而後行、中道而馳、猶時有二ーーー一」
【銜恤】カンジュツ　〇憂を含む。詩經「出則ーレー、入則靡レ至」〇轉じて父母の憂に丁る即ち父母の喪にいふ。
【銜杯】カンハイ　酒をのむ。李適之詩「避レ賢初罷レ相、樂レ聖且ーレー」
【銜枚】カンバイ　口に枚をふくむ。枚は箸の如きもの、口にふくませ兩端に紐をつけて首の後に結びつける、進軍中談話を禁ずるため、又馬の鳴くを防ぐために用ふ。周禮、秋官「ーー氏掌二司囂一」
【銜尾相隨】カンビアヒシタガフ　銜は馬のくつわ、尾は馬尾、行路狹くして竝び驅ることを得ず、一騎づつ前後につづきて行く。漢書、匈奴傳「如遇二險阻一、ーーーー」
【銜璧輿櫬】カンヘキヨシン　降伏の禮、璧は贄なり、手を縛せらるるが故に口にふくむ、櫬は棺、輿は荷なり。左、僖六「許男面縛銜レ璧、大夫衰絰、士輿レ櫬從レ之」
【銜レ命】カンメイ　命を奉じて出て使する。漢書、孫寶傳「臣幸得二ーレー而使一、職在二刺擧一」
【銜勒】カンロク　くつわ。勒も銜と同じくくつわの義。家語「德法者御レ民之具、猶三御レ馬者之有二ーー一也」

【銀】ギン　眞
〇しろがね(白金)〇しろがねの如き白色「ー河」「ー世界」〇銀にて造りし貨幣「ー貨」〇ぜに「貨ー」「路ー」〇銀にて造りし器「ー黃」「ー靑」〇かぎり。荀、成相「守二其ー一」＝垠。
【銀鴨】ギンアフ　香爐をいふ。秦韜玉詩「ーー無レ香旋旋添」
【銀鞍】ギンアン　しろがねにて作れる美くしきくら。駱賓王詩「ーー俠客至」
【銀鷗】ギンオウ　しろきかもめ。李紳詩「雪驚ーー左右來」
【銀河】ギンガ　あまの川。江總詩「織女今夕渡二ーー一、當レ見新秋停二玉梭一」＝天河・天漢・銀漢。
【銀河落二九天一】ギンガキウテンニオツ　天上より落ち來る。瀑布の形容。李白詩「飛流直下三千尺、疑是ーーーーー」
【銀河沙漲三千界】ギンガスナミナギルサンゼンカイ　大雪の形容。白居易詩「連夜江雲黃慘澹、平明山雪白模糊、ーーーーーーー、梅嶺花排一

萬株」

【銀艾】銀印と綠綬と。艾はよもぎにて染むる故。後漢書、張奐傳「吾前後仕進、十要二一一一」

【銀海】○ぎん色のうみ。陸游詩「天如二玻璃鍾一、倒覆湛二一一一」○道家にて眼の稱。蘇軾詩「凍合二玉樓一寒起レ粟、光搖二一一一眩生レ花」（玉樓は肩）

【銀行】政府の管理の下に金融をとりあつかふ一種の法人。

【銀甲】○銀づくりのよろひ。唐書、禮樂志「披二一一一執レ戟而舞」○琵琶などを彈ずるとき爪にかぶせるもの。杜甫詩「一一彈箏用」

【銀漢】あまの川。白帖「天河謂二之一一一亦曰二銀河一」

【銀杏】○いてふの樹。宣和畫譜「一一白頭翁圖」＝公孫樹・鴨脚樹。○又、いてふの果實、ぎんなん。劉基詩「一一子成邊雁到」＝玉果。

【銀魚】○魚の名。身圓くして細く潔白にして鱗なし。＝麪條魚。○銀にて飾りし魚袋、唐代五品官以上の佩用とす。劉禹錫詩「初佩二一一一隨レ仗入」

【銀花】○燈火の形容。蘇味道詩「火樹一一合」（放燈の夜、燈火を樹に懸くるをいふ）○雪の形容。杜甫詩「入レ市一一亂、傾レ筐雪片虛」○忍冬花の色の白き者、藥用とす。

【銀貨】ぎんにて造りたる貨幣。漢書、食貨志「一一二品」

【銀塊】ぎんのかたまり。

【銀黃】○銀と黃金と。○韓非子「隋侯之珠、不三飾以二一一一」＝金銀。○白色と黃色と。○銀印と金印と。○皆高官の佩ぶるもの。漢書、楊僕傳「懷二一一一乘二三組一」

【銀潢】あまの川。夏竦賦「一一之影橫レ秋、帝臺之漿映レ日」＝銀河・銀漢。

【銀觥】ぎんのさかづき。白居易詩「殷勤二曹長、各捧二一一一」＝銀杯。

【銀礦】ぎんのあらがね。魏書、食貨志「長安驪山有二一一一、石得レ銀七兩」＝銀鑛。

【銀環】ぎんのわ、ゆびわ又腕わなど。詩、鄘風、靜女、傳「當レ御者以二一一一進レ之」

【銀釭】燈火をいふ。白居易詩「斜背二一一一半下レ帷」

【銀鉤】○銀のすだれかけ。唐太宗、簾詩「彩散一一上、文斜桂戶中」○銀のかぎ、巧なる草書の形容。書苑「晉索靖草書絕代、名二一一一蠆尾一」

【銀根】俗 金融の義。

【銀婚式】結婚後二十五年目に行ふ夫婦の祝賀式。

【銀沙】しろがねの如き白きすな。梁簡文帝文「畫堂玉砌、碧水一一」

【銀釵】ぎんのかんざし。瑯邪代醉編「一一猶在」

【銀裝刀】しろがねづくりのかたな。南史、席闡文傳「梁武帝將レ起レ兵、闡文勸仍遣レ客、私報レ帝、並獻二一一一一、帝報以二金如意一」

【銀山】○銀を產する鑛山。神異經「西南有二一一一」○高く白き波の形容。張繼詩「萬疊一一寒浪起」

【銀絲】ぎん色のいと。

【銀燭】あかるく光るともしび。韓愈詩「一一未レ消窗送レ曙」

【銀子】ぎんのおかね。子は助辭。＝銀貨。

【銀青】銀印青綬の略。金紫の對。秦・漢時代、光祿大夫の佩びしもの［老學庵筆記］

【銀鈔】ぎんのふだ。通鑑節要「元武宗頒二行至大一一一」

【銀世界】雪中のけしきの形容。陳泊詩「眼觀銀色三千界、身到瑤臺十二層」

【銀釧】しろがねのうでわ。劉禹錫詩「一一金釵來負レ水」

【銀錢】ぎんにて造りたる貨幣。後漢書、西域傳「一一十當二金錢一」

【銀箭】漏刻の目盛をつけたる銀の棒。宋之問詩「莫レ令二一一曉一爲盡合歡杯」

【銀髯】まっ白きほほひげ。＝雪髯。

【銀蟾】月の異名。蟾は蟾蜍、月中にゐるといふ。李中思詩「一一飛出海東頭」

【銀蛇】○ぎん色のへび。本草「一一亦名二錫蛇一」○月光の波にうつりし形容。

【銀臺】○官名。宋史、職官志「一一司掌レ收二天下奏狀案牘一」○仙人の居るところ。後漢書、張衡傳「貽二王母於一一一分」

【銀刀】○銀のかたな。張籍詩「斜帶二一一一入二黃道一」○白く長き魚を形容していふ。蘇軾詩「恣看修網出二一一一」

【銀條】ぎんのくみひも、銀モールの類。李德裕詩「鳴起颺二一一一」

【銀濤】白く光るなみ。楊萬里詩「萬頃一一半雲開」＝銀浪。

【銀竹】ゆふだちの雨の形容。李白詩「白雨映二寒山一森森似二一一一」

【銀兔】月の異名、月中に兎ありといふ故。隋煬帝詩「清露冷浸一一影」

【銀鐙】○しろがねのあぶみ。王志堅詩「只數二一一一跨二雙弓一」○白く光るともしび。＝銀燈。

【銀波】白く光るなみ。徐積詩「着天萬里生二一一一」＝銀浪。

【銀牌】○ぎんのふだ。宋史、輿服志「符券唐有二一一一、發レ驛遣レ使則門下省給レ之」○銀製のメタル。

【銀髮】まっしろなるかみ。＝白髮。

【銀盤】月の異名。盧仝詩「爛一一

從二海底一出、忽來照二我茅屋東一」＝銀蟾。

【銀瓶】○酒などを入れる銀製のかめ。杜甫詩「指二點一一一索レ酒嘗」○うつくしきしるべ。白居易詩「井底引二一一一、欲レ上絲繩絕」

【銀浪】白く光るなみ。梁武帝詩「一一翻二綠萍一」＝銀濤。

【銀鱗】白く見える魚。

【銀鈴】ぎんのすず。中阿含經「金鈴銀舌、一一金舌」

【銀露】月光のうつれるつゆ。呂令問、金莖賦「晴朝有レ日兮金鏡相射、淸夜無レ雲兮一一自圓」＝皓露。

【銀盞子】銀製の小さき箱。

【銀盌】銀にて造れる椀。吳志、甘寧傳「先以二一一一酌レ酒自飮」

【銀灣】あまの川。李賀詩「一一曉轉流二天東一」＝銀漢。

【銎】キョウ 图

○矛刃の下口。○一一は物を擊つ貌。

【鉶】ケイ 靑 又、刑・鉶に作る

鼎の一種、あつものを盛る兩耳三足の祭器。儀禮、公食大夫禮「宰夫設二一一」

【鉶羹】あつものの五味を和して鉶に盛りしもの。周禮、亨人「祭祀共二大羹一一一」注「大羹不レ致二五味一、一一加二鹽菜一矣」

【銒】㊀ケイ 靑 ㊁ケン 先

㊀鍾に似て頸のながきもの。一說に酒器。㊁人名。荀、非十二子「是墨翟宋一也」

【銗】コウ 尤

投書を受くる器、腹大に口小にして入るべく出すべからざるやうに造る。漢書、義縱傳「投二一購告言姦一」註「一所三以受二投書一也」＝缿。

【銖】シュ 虞

○量の名。一兩の二十四分の一。○轉じてわづかなるもの、輕小の義とす「錙一」「分一」○にぶし（鈍）「一鈍」淮南、本經「其兵戈一而無レ刃」國○德川時代の貨幣の名。一分の四分の一。○小數の名。一割の百分の一（分の十分の一）專ら利率に用ふ。又、朱に作る。

【銖稱差】少しづつはかり數ふれば、大なる量に至りて、差違を生ずるをいふ。枚乘文「銖銖而稱レ之、至レ石必差、寸寸而度レ之、至レ丈必過」

【銖積寸累】銖をつみ寸をかさねる。細微を積みて大に至る義。侯鯖錄「寒女之絲、一一一一」

【銖分】こまかに知りわける。遂史、楊績傳「陛下一二一邪正、升黜分明、天下幸甚」

【銖兩】甚だ少しのめかた。子華子「夫平猶二權衡一然、加二一一一則移矣」

【銖兩之姦】すこしの惡事。漢書、趙廣漢傳「一一一一、皆知レ之」

【銃】ジュウ 送

○斧のあな（斧穿）柄を受くる處。○借りて火器の名とす。○こづつ、鐵砲「小一」「拳一」「鳥一」

【銃架】小銃をよせかけるだい。

【銃眼】鐵砲を發射する爲めに城や壘の牆壁などに設けたるあな。

【銃刑】小銃にて擊ち殺す刑罰。

【銃擊】小銃にてうつ。

【銃劍】小銃の筒先につけたる劍。

【銃丸】てっぽうだま。＝銃彈・彈丸。

【銃口】小銃のつつぐち。

【銃創】てっぽうきず。

【銃殺】鐵砲にてうちころす。

【銃身】小銃の丸の通る金屬製の筒。

【銃牀】銃身を裝置する木の臺。

【銃彈】てっぽうだま。＝銃丸。

【銃砲】○てっぽう。○小銃と大砲と。

【銃獵】小銃にて鳥獸をかり取る。

【銑】セン 銑

○つやがね、金の最も光澤あるもの。○つや、金屬の光澤。○さむき貌。○みづそそぐ（灑）洒の轉音。晉語「一者寒甚矣」○金を以て弓をかざる。○一鋧は敵になげうつ小さき鑿（しゅりけん）（南史、蕭摩訶傳）○づく、俗にいふ、質堅く折れ易し、鍋・釜等の材料とす。

【銑錢】づく鐵にて鑄りしぜに。鍋錢。

【銑鐵】づく、字解を見よ。なべがね。＝生鐵・鑄鐵。

【銓】セン 先

○はかり（權衡）輕重をはかる器。漢書、王莽傳「攷量以一」○はかる（量・度）物の輕重をはかる、人物をしらべて官を授

ける。唐六典「吏部有ニ三ー法ニ」〇ついづ（次）〇木を平かにする器。

【銓引】人才をはかりてすすめあげる。陳書、世祖紀「隨ㇾ才ーー」

【銓考】才能をしらべかんがへる。宋史、蘇頌傳「今不ㇾ由ニーー、擢授ニ朝列、不ㇾ緣ニ御史、薦寘ニ憲臺ニ」

【銓校】はかりしらべる。魏書、叔孫建傳「羣官上ㇾ事、先由ニ俊ーー、然後奏聞」俊は叔孫俊。＝銓考。

【銓衡】〇はかり。銓は分銅、衡ははかりのさを。抱朴子「ーー不ㇾ平、則輕重錯繆」〇才能をはかりしらべる。又、其の職。晉書、吳隱之傳「汝若居ニーー、當ㇾ擧ニ如ㇾ此輩人ニ」

【銓簡】はかりえらぶ。宋史、眞宗紀「使ニ兩制ーーニ」＝銓選。

【銓括】はかりしらべてすべくくる。孫綽文「正身提衡、ーニー百揆ニ」＝銓總。

【銓管】はかりてすべつかさどる。晉書、阮放傳「遷ニ吏部郎、在ニーー之任、甚有ニ稱績ニ」

【銓次】才能をしらべて順序をついで定める。晉書、羊琇傳「選用多以ニ得意者ニ居ㇾ先、不ㇾ盡ニーー之理ニ」

【銓掌】はかりつかさどる。唐書、選擧志「初尙書ーニー七品以上選、侍郎ーニー八品以下選ニ」

【銓敍】才をはかりて、官位につてる。晉書、張駿傳「冒ㇾ險遠至、宜ㇾ蒙ニーーニ」（ーー局は中華民國の官署の名、文官の任免等を掌る）

【銓選】才能をはかりしらべて官職をさづける。古、吏部は文官、兵部は武官のーーを掌る。揭傒斯詩「君復贊ニ宣政、赤手提ニーーニ」

【銓綜】はかりすべる。晉書、良吏傳「涖ㇾ職者、爲ㇾ身擇ㇾ利、ーー者爲ㇾ人擇ㇾ官」

【銓總】前條に同じ。唐書、宋璟傳「ーー平允」

【銓汰】善惡をよなげわける。唐書、李迥秀傳「仍領ㇾ選ーー、文武稱ㇾ職」

【銓擇】はかりえらぶ。宋史、儒林傳「文海去取差謬、恐難ㇾ傳ㇾ後、盍ㇾ委ニ館職ーーー、以成ニ一代之書ニ」孝宗以命ニ呂祖謙ニ」＝選擇。

【銓擢】人才をしらべはかりてあげもちふる。北齊書、文襄帝紀「釐ニ改前式ニ、ーー惟在ㇾ得ㇾ人」

【銓判】よしあしをはかりわける。唐書、李義府傳「不ニ復ーー、人人咨訕」

【銓部】吏部省の異名。專ら人才を銓選することを掌る故。宋史「在ニ朝廷ニ則當ㇾ量ニ人才ニ、在ニーーニ則宜ㇾ守ニ成法ニ」

【銓別】えらびわかつ。文心雕龍「括ニ囊雜體、切在ニーーニ」

【銓補】とりしらべておぎなふ。北史、齊文宣帝紀「詔ニ郡國ニ修ニ立黌序、廣延ニ髦俊、敦述ニ儒風、其國子學生、亦依ㇾ舊ーーニ」

【銓量】はかる。爾雅、注「ーニー輕重ニ」

【銛】セン 鹽

〇するどし、とし（銳利）賈誼、過秦論「非ㇾ銛ニ于鉤戟長鎩ニ也」〇すき、鍤の屬。〇もり（矠）竹頭に鐵の距ありて魚に擲ちて捕ふる漁具。

【銛銳】するどし。杜甫、天狗賦「百獸蹴踏以皆從兮、四猛仡ーニー乎其閒ニ」

【銛鋼】よくきれるはがね。李覯文「寥廓之勁翮、ーー之利器」

【銛鍔】よくきれるやいば。金厚載文「制犀莫ㇾ比ニ其ーーニ」

【銛戈】銳利なるほこ。曹植、浮淮賦「浮ニ飛舟之萬艘ニ兮、建ニ干將之ーーニ」

【銛戟】するどきほこ。戰國策「强弩在ㇾ前、ーー在ㇾ後」

【銛鉤】するどきつりばり。李羣玉詩「須ㇾ知香餌下、觸ㇾ口是ーー」

【銛錐】するどききり。柳宗元詩「截玉ーー、作ニ妙形ニ」

【銛刀】よくきれるかたな。唐書、禮樂志「睿宗時、婆羅門國、獻ㇾ人倒行以ㇾ足舞、仰ニ植ーー、俯ㇾ身就ㇾ鋒云云」＝利刀。

【銛鈍】するどきと、にぶきと。顧況文「不ㇾ以ニ一割ニ均ニ其ーーニ」＝銳鈍。

【銛矛】するどきほこ。銛は銳利なり。唐書、高麗傳「城有ニ朱蒙祠、有ニ鎖甲ーーニ、妄言前燕世、天所ㇾ降」＝利矛。

【銛利】刀劍のきれあぢよし。淮南子「服ㇾ劍者、期ニ于ーーニ」＝銳利。

【銍】チツ 質

〇かま（鎌）禾を刈るに用ふる短き鎌。〇かる（穫）〇いなぼ（禾穗）（銍にて刈る故にいふ）書、禹貢「二百里納ㇾー」

【銕】鐵（金部十二畫）の古字。

【銅】トウ ドウ 東

〇あかがね（赤金）「紅ー」〇あかがねに似たる赤色。〇あかがねにて造れる貨幣「ー臭」「ー錢」〇銅製の器の簡稱。法言「半通之ー」銅印を指す。

【銅罌】あかがねにて造りたるもたひ。齊春秋「以ニーーニ盛ㇾ水」

【銅匜】あかがねの水さし、はんざふ。夢溪筆談「於ニ關中ニ得ニーー」

【銅印】あかがねの官印。漢書、百官公卿表「秩比ニ六百石ニ以上、皆ーー墨綬」

【銅角】樂器の一、銅にてつくる、上下二截とし形、竹筒の如く、本細く末大。＝俗號筒・吹金。

【銅器時代】人類が主として銅器を使用せし時代。石器時代と鐵器時代との中間。

【銅金】あかがね。管子「上有ニ磁石ニ者、其下有ニーーニ」

【銅觔鐵肋】あかがねのすぢとくろがねのあばらと。身體の强健なる形容。觔は筋（宋濂、桑士錄）

【銅瓦】あかがねにて造りたるかはら。天中記「西域泥婆羅宮中、有ニ七重樓、覆ニーーニ」

【銅鑛】あかがねのあらがね。＝銅礦。

【銅鐶】あかがねにて造りたるわ。酉陽雜俎「蹄下貫ニーーニ」

【銅壺】〇漏刻に同じ。戴叔倫詩「ーー滴ㇾ愁更漏長」〇圖湯のわくやうに他の火器に取りつけたる銅製の壺。

【銅鼓】あかがねにて造りたる陣太鼓（晉書、赫連勃勃載記）三才圖會「ーー鑄ㇾ銅爲ㇾ之、虛ニ其一面ニ、懸而擊ㇾ之、南蠻多精ニ此器ニ、其聲聞ニ數里ニ者、蠻人亦以爲ㇾ珍」

【銅虎符】あかがねにて虎の形に造りたるわりふ、右は京師に留め、左は郡守に與へ、兵を徵發するときの信とす。史、文帝紀「初與ニ郡國守相ニ爲ニーーー・竹使符ニ」

【銅像】あかがねにて造りたる像。宋書、戴顒傳「鑄ニ丈六ーー於瓦官寺ニ」

【銅山】あかがねを出す鑛山。漢代、銅官を置きーーを採掘する事を掌らしむ。史、吳王濞傳「吳有ニ豫章郡ーーニ」

【銅臭】金錢のにほひ、錢を納れて官を得たる人を嘲りていふ。後漢書、崔寔傳「崔烈入ニ錢五百萬ニ得ㇾ爲ニ司徒ニ、問ニ其子鈞ニ、曰、吾爲ニ三公ニ、於ニ議者ニ如何（中略）鈞曰、論者嫌ニ其ーーニ」

【銅匠】銅器を作る職工。＝銅工。

【銅鉦】〇どら。夢溪筆談「在ニ姑熟王敦城下ニ、土中得ニーーニ」＝銅鑼。〇日に喩ふ。蘇軾詩「樹頭初日挂ニーーニ」

【銅雀硯】銅雀臺の瓦にて造りし硯。學範「ーーー、銅雀臺瓦也、以ニ其入ㇾ水之久ニ、故滋潤發ㇾ墨」

【銅爵臺】魏の曹操の築きたる臺の名、屋上に銅製の鳳凰を棲ましむ、故に名づく。爵は雀。魏志、武帝紀「建安十五年冬、太祖乃于ㇾ鄴作ニーーーニ」＝銅雀臺。

【銅青】銅のさび、綠色の炭酸銅。法苑珠林「欲ㇾ用ニーーニ而又無ㇾ銅」＝銅綠・綠青。

【銅錢】あかがねのぜに。史、平準書贊「ーー識曰ニ半兩ニ」＝銅貨。

【銅駝街】〇洛陽の街の名。洛陽記「洛陽有ニーーー、漢鑄ニ銅駝三枚ニ、在ニ宮西四會道ニ相對」＝銅街。〇國西京二條通を銅駝坊といふ。

【銅池】あかがねのとひ。銅にて作りし屋の承霤。漢書、宣帝紀「金芝九莖、生ニ函德殿ーー之中ニ」

【銅柱】〇あかがねにて造りたるしるしのはしら。後漢書、馬援傳、注「援到ニ交阯ニ、立ニーーニ、爲ニ漢之極界ニ」＝銅標。〇あかがねのはしら。史、武帝紀「作ニ柏梁ーー承露仙人掌之屬ニ」

【銅頭鐵額】甚だ勇悍なるを言ふ。龍魚河圖「蚩尤氏兄弟七十二人、皆ーーーー」十洲記「聚窟洲有ニ鑿齒長牙ーーーー之獸ニ」

【銅牌】あかがねのふだ。宋史、輿服志「皆有ニーー、長七寸五分」

【銅鉢】響銅にて造りたる樂器。宋祁筆記「今浮屠持ニーーニ」

【銅鈸】どらの類。舊唐書、音樂志「ーー其圓數寸、隱起若ニ浮漚ニ、貫ㇾ之以ニ韋皮ニ、相擊以和ㇾ樂也」＝鐃鈸。

【銅版】銅にて作りし印刷版、硝酸にて銅板に書畫をやきつけて作る。

【銅盤】あかがねにて造りたるたらひ。史、平原君傳「毛遂奉ニーーニ、而跪進ㇾ之」＝銅槃。

【銅表】あかがねにて造りたる標。隋書、天文志「祖暅之造ニ八尺ーーニ」

【銅標】銅にて作りし柱、里程、又國境を明かにする爲めに建てるもの。＝銅柱。

【銅墨】銅印と墨綬と。陳子昂文「祖ニ襲公侯之瑞ニ、屈ニ居ーー之班ニ」

【銅鑼】どら、槃銅にて皿の如く造れる軍用の鳴り物。東京夢華錄「各設ニ旗鼓ーーニ」＝銅鉦。

【銅綠】銅青に同じ（宋史、輿服志）

【鉼】鉼（金部八畫）の俗字。

【鉾】ボウ ム 尤

〇ほこ、矛（一三三四頁四段）の古字。〇つるぎのきっさき（劍端）

【銘】メイ 靑

〇しるす（記）〇深く心におぼえしるす「感ー」「ー心」〇金石に刻せし文「刀ー」「鼎ー」「鏡ー」〇文の一體。文體明辯「鄭康成曰、ー者、名也、劉勰云、觀ㇾ器而正ㇾ名也、故曰、作ㇾ器能ー、可ニ以爲ニ大夫ニ矣、考ニ諸夏商鼎彝

尊卣盤匜之屬、莫不有一、而文多殘缺、獨湯盤見于大學、而大戴禮備載武王諸一、使後人有所取法」「碑一」「墓誌一」○いましめのことば「箴一」「座右一」○葬式に死者の官位姓名を旗にしるせるもの「一旌」＝明旌。○國物品の精製せしものの稱「一茶」「一酒」

解字 銘は名なり、其の功を金石に記名するなり。故に金に从ひ名に从ふ。

【銘意】ふかく心にしるす。李白詩「常恨迫世網、一一俱未伸」＝銘心。

【刻銘】銘文をきざみつける。又、刻める銘。宋史、宋白傳「泰山有唐明皇一一、白攀木以献」

【銘戒】心に深くしるしいましむ。溫庭筠詩「功庸留劍舄、一一在盤盂」

【銘肝】きもにほりつける。心に深くしるして忘れず。＝銘肌鏤骨。

【銘旗】葬送の時、死者の官位姓名等を記せしはた。＝明旌・銘旌。

【銘肌鏤骨】皮膚に銘し、骨髓にきざむ、深く心にしるして忘れず。顔氏家訓「追思平昔之指、一一一一」

【銘功】いさををを金石にほりつけしるす。左傳「作林鐘而銘魯功焉」

【銘刻】○金石に文字をほりつける。＝刻銘。○心に深く記憶する。

【銘誌】墓石にしるす文辭。宋史、盧士宏傳「戒諸子、勿爲一一」＝誌銘。

【銘心】ふかく心にしるす。三國志「一一立報」＝銘肝。

【銘心鏤骨】深く恩を感じて忘れざる義。成語考「一一一一、感德難忘」

【銘書】きざみしるす。王粲文「一一金鼎、祚及後聖」

【銘旌】銘旗に同じ。旌ははた。喪具の一。禮、檀弓「銘、明旌也、以死者爲不可別已、故以其旗識之」字解參看。＝明旌。

【銘仙】國よりをかけざる絲にて織りし粗き絹布、紬に似たるもの。＝銘撰。

【銘佩】感じたることを深く心にしるす。江淹文「垂光既深、一一更積」

【銘背】せにきざみつける。家語「緘其口、而銘其背」

【銘膚】はだへにきざむ。かたく覺えて忘れず。令狐楚文「一一鏤骨、不敢殞墜」

【銘誄】死者の功德を記述せしもの。後漢書、种岱傳「昔先賢既歿、有加贈之典、周禮盛德、有一一之文」

七畫

【鋭】㊀エイ ㊁タイ 霽 泰

㊀するどし（利）刃物がよくきれる「一利」鈍の對。○さとし、はやし（疾）「一敏」孟、盡心「其進一者其退速」○くはし（精）よく錬れてゐる「精一」左、桓十一「我以一師」○きっさき（劍芒）○するどき勢。○とがる（上小下大）○ほそくちひさし、こまかし（細小）左、昭十六「且吾以玉賈罪、不亦一乎」○はもの、きれもの、するどき武器「一兵」「被堅執一」○つよき兵士。○角度の直角より鋭く、九十度に及ばざるもの。㊁矛の屬。書、顧命「一人冕執一」

【鋭意】心をはげましてつとめる。後漢書、朱穆傳「及壯耽學、一一講誦」＝鋭志・鋭精。

【養鋭】元氣をやしなひて事機の來るをまつ。晉書、慕容德載記「閉關一一」＝蓄鋭。

【鋭喙】するどきくちばし。周禮「一一決吻」

【鋭角】直角即ち九十度より小さき角度。鈍角の對。

【鋭悍】するどくしてたけし（漢書、霍去病傳）＝勁悍・驍悍・彊悍。

【鋭氣】するどききしゃう。史、淮陰侯傳「一一挫於險塞、糧食竭於內府」

【鋭騎】するどき騎兵。

【鋭士】するどく强き兵士。吳志、甘寧傳「自擇選一一五千人」

【鋭志】志をはげましてつとめる。歐陽修文「陛下專一一、必不自怠」＝鋭意。

【鋭師】するどく强き軍隊。衆師の反對。史、蘇秦傳「秦攻楚、齊魏各出一一以佐之」

【鋭進】するどくすすむ。＝猛進・勇進。

【鋭上】額がせまくしてとがる。唐書、侯希逸傳「長七尺、豐下一一」

【鋭將】するどき大將。＝驍將。

【鋭精】精神をはげましてつとめる。＝鋭意。

【鋭卒】強くするどき兵卒。後漢書、吳漢傳「將數萬一一擊之」

【鋭敏】するどくさとし、かしこし。左、哀十一「子羽一一」

【鋭兵】○するどき武器。家語「一一重甲」○强くするどき軍隊。戰國策「輕卒一一、長驅至國」＝鋭卒・鋭師。

【鋭鋒】するどきほこさき。陳琳、武庫賦「清徑皓刃、苗山一一」

【鋭勇】するどくつよし。＝勁勇・

精勇。

【鋭利】するどくよくきれる。田錫、倚天劍賦「太一評一一之符」

【鋈】ヲク アク 沃 藥

めっき（鍍金）いかけ、白金にてめっきする。詩、秦風「陰靷一續」

【銶】キウ 尤

鑿の屬。詩、豳風「又缺我一」

【鋙】㊀ギョ ㊁ゴ 語 虞

㊀鉏一は相距ぐ貌。又、安からざる貌。鉏（金部五畫）の條を見よ。㊁鋘（次條）に通ず。鋙一は山の名。

【鋘】㊀クヮ ㊁ゴ 麻 虞

㊀もろはのすき（兩刃臿）㊁鋘一は夷國の山の名、金を出す、刀を作れば以て玉を切るべし。＝昆吾。

【鋏】ケフ 葉

○つるぎ（劍）戰國齊策「彈其鋏、歌曰、長一歸來乎」○つるぎのみ（刀身）○つか（劍把）莊、說劍「周宋爲鐔、韓魏爲一」○かなばし、鍛冶が熱したる金屬をはさむ具（鐵鉗）國○はさみ、鋏刀。○蟹のはさみ。＝螯。

【鋗】ケン 霰

○こばち（小盆）○あしなきかなへ、無足の鑪。○玉の鳴る聲。漢書、郊祀志「展詩應律、一玉鳴」○殿中の掃除人、とものみやつこ「一人」中涓の涓に通ず。

【鋗鋗】食物を煮るなべ。古器評「刁斗如一一、而無緣」

【鋧】ケン 銑

銑一はなげうちて人を殺傷する小さき鑿、しゅりけん。南史、蕭摩訶傳「遙擲銑一」

【鈔】サ 歌 麻

一鑼はどらの類。一說に酒器。

【銼】ザ 箇 歌

○かま（釜）釜に似て大口の者。杜甫詩「土一冷疎煙」○くじく。史、楚世家「兵一藍田」＝挫。

【鋜】サク ソク 覺

○あしかせ（足釘）○あしかせを施す。

【銹】シウ 宥 又、鏽に作る

○さび（鐵生衣）○さびる。鐵が酸化する。

【鋤】ショ 魚 通音 ジョ

○すき（鉏）田を耕し草を去る農具「一犁」「荷一」釋名「一、助也、去穢、助苗長也」○すく、たがやす。漢書、兒寬傳「帶經而一」○ねをたやす、除き滅ぼす「誅一」「芟一」

【鋤禾】いねを耕しすく。李紳詩「一一日當午、汗滴禾下土」

【鋤墾斬斷】ねだやしにする。根絕する。

【鋤除】○惡草をすき除く。○轉じて惡人をほろぼす。＝芟除・誅除。

【鋤拔】すきとる。王令詩「好木瑶存覓見實、惡草一一無容荄」

【鋤掊】すきにてかく。齊民要術「亦有一一而掩種者」

【鋤理】手を入れてすきをさめる。王建詩「良田少一一、蘭蕉香亦薄」

【鋤犂】すき。杜甫詩「歸來輒摐荷一一」

【銷】セウ 蕭

○とく、とらかす（鑠金）史、始皇紀「收天下兵、聚之咸陽、一以爲鍾鐻」とらける（鎔解）金屬がとける。○つく。つくす（盡）「一沈」○きゆ。けす（釋）消と通ず。○へる、衰へる。○ちる。ちらす（散）「一憂」○除き去る「注一」○貨物の售れる義「行一」○ちひさし（小）○けづる（削）○すき（鍤）○づく、生鐵。

【銷夏】銷暑に同じ。皮日休詩「別如二天地、號爲一一灣」

【銷耗】つかひへらす。＝消耗。

【銷毀】金屬にて造りたるものをとかしけす。舊唐書、宋璟傳「璟請禁斷惡錢、發使分道檢括一一之」遼史「不得一一金銀器」

【銷金】○とかしたるかね。淮南子「一一在鑪、盜者弗掬」○かねをとかす。＝鑠金。○黃金を碎き散らして物を飾る「一一紙」○金錢を湯水の如く浪費する「一一窩」

【銷金紙】金箔をちらしたる紙。花蕊夫人宮詞「擘開五色一一一、碧鎮窗前學草書」

【銷金帳】○金箔をちらしたる美しきとばり。通鑑長編「於中淺斟低唱」○俗に金錢を浪費する花柳の巷の義に用ふ。

【銷金窩】金錢を湯水の如く費消する所〔武林舊事〕窩一に鍋に作る。もと杭州西湖の絶景にして春游の人、盛んに金を費すをいふ。今は主に遊廓などの惡所にいふ。
【銷距】けづめをけす。兵を用ひざる義。史、律書「今未レ能レ─レ─、願且堅レ邊設レ候、結レ和通レ使、休二寧北陲一」
【銷禍】わざはひを除き去る。漢書、孔光傳「─レ─興レ福、較然甚明」
【銷刻】へらしけづる。＝銷磨。
【銷骨】堅きほねもきえてなくなる。讒言の害の甚だしきにいふ。鄒陽、獄中上書「衆口鑠レ金、積毀─レ─」李商隱詩「昔歎讒─レ─、今傷淚滿レ膺」
【銷魂】深く心に感動してたましひがきえいる（魂銷）天寶遺事「長安灞陵有レ橋、迎レ來送レ去、皆至二此橋一、爲二離別之地一、故時人呼爲二──橋一」
【銷恨桃】心を慰めうらみを消すといふ桃。明皇雜錄「禁中千葉桃花盛開、帝與二妃子一、日夕宴二花下一、曰、不三獨萱草忘二憂、此花亦能銷レ恨」
【銷失】きえうせる。白居易詩「千歲不二背散一、一沃亦──」
【銷弱】おとろへよわる。韓愈文「浮寄孤懸、形勢──」
【銷鑠】かねをとかしけす。宋之問詩「黃金忽──、素業坐淪毀」
【銷暑】あつさをけす。白居易詩「能就二江樓一─レ─否」＝銷夏。
【銷暑樓】樓の名。吳興掌故「湖州──、郡故子城之南樓、後改二今名一、顏眞卿題額」
【銷衰】へりおとろへる〔禮、樂記、註〕
【銷愞】元氣がおとろへてよわし。史記「精銳──」宋史「西漢之末、士夫阿諛──、遂底二于亡一」
【銷損】けしそこなふ。南史、齊武帝諸子傳「自──猶無レ益」
【銷沈】元氣がきえてなくなる。陸游詩「人事──渺莽中、此身原合レ付二天公一」
【銷磨】へらしてなくす。＝消磨・銷刻。
【銷鎔】金屬を火にてとかす。＝鎔解。
【銷落】きえおちる。曹植詩「初秋涼風發、庭樹微──」

【鋋】セン エン 〔先〕〔先〕
○こぼこ（小矛）鐵の柄のある短き矛「戈─」「矛─」○さす（刺）矛にてつきさす。

【鋟】セン シン 〔鹽〕〔寢〕〔沁〕
○ゑる（彫）きざむ（刻）公羊、定八「─二其板一」（板は食器の蓋板イフタ、爪を以て之を刻む、後世轉じて板木に刻む義とす）○きり（錐）○するどし（銳）
【鋟板】書物を板木に刻む。字解參看。＝刻書。

【鋌】テイ 〔迥〕
○あらがね、銅・鐵の鑛石。○いたがね（金錠）南史、梁廬陵王傳「嗣子應不慧、見二內庫金─一問二左右一、此可レ食否」○つく（空盡）○やのこみ、箭の足の藁中に入る部分。○疾く走る貌。左、文十七「─而走レ險、急何能擇」

【鋷】デフ 〔葉〕
○けぬき（拔髮）＝鑷（金部十八畫）○かなばさみ（鐵鉗）

【鋂】バイ 〔灰〕
一つの大いなる鐶が二小鐶を貫きたるくさり（子母鐶）詩、齊風「盧重─」

【鋩】バウ 〔陽〕 又、鋩に作る
きっさき（刃端）「鋒─」「劍─」

【鋩】鋩（前條）に同じ。

【鋪】ホ 〔虞〕〔遇〕 俗に、舖に作るは非
○しく（布）つらぬ。つらなる（陳）布きならべる。禮、樂記「─二筵席一」○門首の環の金具「金─」「銀─」○あまねし（徧）○やむ（病）詩、大雅「淮夷來─」古、痡に通ず。○黍稷を盛る器。○みせ、商品を陳ねて賣る所（賈肆）○遞─は驛站。
同訓異義 しく 鋪 布・敷・藉・席・播 の別は布（五六四頁二段）の條を見よ。
【鋪錦】にしきをつらねる。南史、顏延之傳「君詩若二──列繡一」
【鋪敍】しきのべる。蕭穎士文「──雕摛、震蕩闢輔」
【鋪首】門上に著けて環を銜むもの。傅毅賦「──炳以焜煌」
【鋪陳】しきつらねる。白居易詩「六義互──」＝布陳・敷陳。
【鋪張揚厲】しきひろげて、ほめたたへる。文心雕龍「頌須二──一、而以二典雅豐縟一爲レ貴」韓愈文「鋪二張對天之閎休一、揚二厲無前之偉績一」
【鋪遞】驛遞に同じ。金史、世宗紀「朕欲レ得二新荔枝一、兵部遂於二道路一特設二──一」
【鋪兵】巡査の類。東京夢華錄「─五人、夜間巡警」＝邏卒。

【鋪碧】みどりの色をしきのべる。白居易詩「拔レ靑松直上、─レ─水平流」

【鋒】ホウ 〔冬〕
○きっさき、ほこさき、兵器の先端の銳利なる處「銳─」「利─」○さきて、軍隊の前列「先─」○物事のするどききっさき「筆─」「論─」「藏─」
【爭レ鋒】鋭とほこさきを爭ふ。史、留侯世家「愼毋二與レ楚─レ─」
【銷レ鋒灌レ燧】兵器をとかし烽火に水かける。兵亂の靜まる義。
【鋒毫】ふでのさき。墨池瑣錄「太淡則傷二神彩一、太濃則滯二──一」＝筆鋒。
【鋒起】鋒刃の如くするどく盛んに起る。荀、王制「聽試之說、──」
【鋒旗】旗の名。庾信文「──朝上、刁斗夜聞」
【鋒戈】ほこ。慕容垂文「特出挑戰、──屢交」＝戈鋒・戈矛。
【鋒刃】ほこさき。＝芒刃。
【鋒出】鋒起に同じ。論衡、答佞「權變──」
【鋒銛】ほこさき。又、ほこさきがするどし。論衡「等之金也、或爲二劍戟一、或爲二──一」
【鋒端】ほこのさき。徐悱詩「要レ功非二汗馬一、報効乃──」
【鋒鏑】刀のほこさきと、やじりと。史、始皇紀「收二天下之兵一、聚二之咸陽一、銷二──一、鑄爲二金人十二一」漢書には鏑を鍉に作る。
【膏二鋒鏑一】ほこさきにあぶらす。殺さるる義。庾信賦「沾二漬鋒鏑一、脂二膏原野一」
【鋒芒】○鋒鋩に同じ。後漢書「──挫縮、厥圖不レ果」○わづか、微細の事に喩ふ。論衡「──毫釐之事、莫レ不二記載一」
【鋒鋩】○刀のきっさき。趙孟頫詩「牛刀愛惜──」○轉じてするどき氣象に喩ふ。孟郊詩「慷慨丈夫志、可三以耀二──一」＝鋒芒。
【鋒發韻流】行文の條暢をいふ。文心雕龍「安仁輕敏、故鋒發而韻流」安仁は潘岳。
【鋒利】するどし。宋史、兵志「京師所レ製軍器、多不二──一」＝銳利・銛利。

【鋣】ヤ 〔麻〕 釾・鋣・邪に通ず
鏌─は吳の名劍の名。＝莫邪。

【鋊】ヨク 〔沃〕
○ひかき（炭鉤）○あかがねのこな（銅屑）漢書、食貨志「姦或盜摩二錢質一以取レ─」

【鋃】ラウ 〔陽〕
○─鐺はくさり（鎖）古の刑具。＝琅當。轉じて重くしてあげがたし。六書故「俗以二困重不一レ擧爲二─鐺一」＝郎當。○鐘の聲。

【鋲】〔國字〕
びやう、釘の一種、頭大きく、物に打ちこみて之を固め、又かざりとするもの。

八畫

【鋺】エン 〔阮〕
○秤のさら、はかる物をのせる皿。○國かなまり、金屬の椀。

【鋼】カウ 〔陽〕〔漾〕
はがね（鍊鐵）きたひて質の强き鐵「─鐵」「精─」「鍊─」列、湯問「鍊─赤刃、用之切玉、如切泥焉」
【鋼玉】大理石・花崗石などの中に存する鑛石、硬度高くして金剛石に次ぎ、酸類に侵されず。＝剛玉。
【鋼線砲】大砲の一種、砲身の內筒外部に多くの鋼線をまきつけて砲彈の力を增加せしめたるもの。
【鋼鐵】はがね。
【鋼鐵艦】鋼鐵にて張りたる軍艦。
【鋼鐵索】鋼鐵にてつくれるなは。
【鋼筆版】印刷器の一、鋼筆を用ひて寫し、一版に一二百張を印すべきもの、一名謄寫版。

【錡】㊀キ 〔紙〕 ㊁キ 〔支〕
㊀かま、三本足の釜。詩、召南「維─及釜」（釜は足なきかま）○弩を架けて置くもの。張衡、西京賦「武庫禁兵設在二蘭─一」（蘭は他の兵器を架けるもの）㊁鑿の屬。詩、豳風「又缺二我─一」

【錤】キ 〔支〕
鎡─はすき（鉏）＝鎡基・茲基。

【錦】キン 〔寢〕
○にしき、五色を雜ぜ織りたるあやおり「美─」「文─」「紅─」「蜀江─」○あやおりにてしたてたる衣「衣─夜行」○にしきの如く美麗にして鮮明なるも

の「一楓」「一鱗」「一霞」「一雲」○廣くほめたたへる詞「一心」「一地」「一藻」

【錦襖】にしきのうはぎ。北史、尉遲迥傳「綠巾一一、號曰黃龍兵」

【錦襖子】かじか。又、蛙皮をいふ。尚書故實「越人以蝦蟇爲上品、疥者皮最佳、故越人云、不ㇾ可脫去此乃一一」

【錦衣】○にしきのころも。禮、玉藻「君衣狐白裘、一一以裼ㇾ之」○美くしき衣「一一玉食」○一一衞の略。次條參看。野獲編「景陵陸武惠炳領一一最久」

【錦衣衞】明代の軍隊の名、天子の宮城を護衞するもの。弇州史料「改設一一一」

【錦衣玉食】美くしき衣と、おごれる食物と。宋史、李瀚傳「瀚雖ㇾ在山林、其文有一一一一氣」

【錦茵】にしきのしとね。元稹詩「大道垂珠箔、當壚踏一一」

【錦筵】にしきにてかざれるむしろ。顧況詩「九重天樂降神仙、步舞分行踏一一」

【錦江】○四川省の境に在り、俗に府河と名づく。杜甫詩「一一春色來天地」○朝鮮の河の名。羣山港に注ぐ。

【錦葵】菝葵の異名。花大き徑寸、色は淡紫。＝荍。

【錦旗】○にしきのはた。李賀詩「搖搖一一夾ㇾ城暖」＝錦幡・錦旌・錦旆。○國にしきのみはた、天子の御はた。

【錦綺】にしきと、あやおりと〔書、禹貢〕

【錦歸】衣ㇾ錦歸故鄕の略語、榮達して故鄕に歸る義。書言故事「榮貴還ㇾ鄕曰一一晝繡」＝錦還。

【錦衾】にしきのふすま。詩、唐風「角枕粲兮、一一爛兮」

【錦還】錦を衣て鄕に還る義。李白詩「功成衣ㇾ一一」今、尺牘に人の歸鄕を稱するに用ふ。衣ㇾ錦還ㇾ鄕參看。

【錦官城】蜀の成都城の一名。錦をつかさどる官を置きし故。華陽國志「成都西城、故一一一也」杜甫詩「一一一外柏森森」＝錦城。

【錦雞】頭は雞冠に似、羽毛は雉に似たる美くしき鳥、にしきどり。桂海虞衡志「一一又名金雞、形如小雉、湖南北亦有ㇾ之」

【錦雞閒祗候】國華族及官吏の功勞ある者を優遇する爲め宮中錦雞の閒に祗候して陛下の御諮詢に奉答せしむる資格。

【錦纈】にしきと、しぼりてそめぬきたる絹と。元好問詩「東崖劫火餘、絢爛開一一」

【錦虹】にしきの如く、美くしきにじ。曹植詩「蚌蛤被濱涯、光彩如一一」

【錦字】にしきに織りこみし文字。侍兒小名錄「前秦安南將軍竇滔有寵姬趙陽臺、置之別所、妻蘇氏求而獲焉、苦加捶辱、滔深恨ㇾ之、滔鎭襄陽、與陽臺之ㇾ任、絕蘇氏音問、蘇悔恨自傷、因織ㇾ錦迴文題詩二百餘首、計八百餘字、縱橫反覆、皆爲文章、名璇璣圖、遣蒼頭齎至襄陽、滔覽一一、感其妙絕、因具車徒迎蘇氏」

【錦綉】にしきと、ぬひとりと。＝錦繡。

【錦繡】にしきと、ぬひとりと。戰國策「不ㇾ能ㇾ出其金玉一一、取卿相之尊者乎」

【錦繡腸】詩文を善くし容易に佳句を吐くにいふ。蘇軾詩「平生一一一、早歲藜莧腹」＝錦心。

【錦心繡口】詩文の才のうるはしき形容。柳宗元、乞巧文「駢四儷六、一一一一」

【錦城】蜀の成都の錦官城をいふ。杜甫、贈花卿詩「一一絲管日紛紛、半入江風半入ㇾ雲」錦官城參看。

【錦上添ㇾ花】うるはしき上にうるはしさを加ふ。王安石詩「麗唱仍添錦上花」

【錦帶】○にしきのおび。李白詩「珠袍曳一一」○次條の略語。杜甫詩「香聞一一羹」

【錦帶花】落葉灌木の一、山地に自生す、高さ七八尺、葉形は橢圓にして尖り、緣に鋸齒あり、夏の初、管狀の花開く繁麗にして錦帶を見く如し。山家清供「一一一、又名文官花、葉初生、柔脆可ㇾ羹」

【錦襠】にしきのはだばかま。甘澤謠「見婦人數人、一一負ㇾ罌而汲」

【錦地】他人の居住地を稱する敬語、貴地。

【錦帳】にしきのとばり。徐陵詩「流蘇一一挂香囊」＝錦幃・繡幃・綺帳。

【錦殿】にしきにてかざれるどてん。王勃詩「紫閣丹樓紛照耀、璧房一一相玲瓏」

【錦囊】詩を入れるにしきのふくろ。唐書、李賀傳「賀小奚奴背古一一、遇ㇾ所ㇾ得ㇾ詩、投囊中」＝奚囊。

【錦旆】にしきのはた。沈佺期詩「告ㇾ善旌旗建、收ㇾ冤一一張」

【錦袍】にしきのちんばおり。又、にしきのうはぎ。南史、魚弘傳「率部曲數百、悉衣一一、赫奕滿ㇾ道」

【錦帆】にしきのほ。大業拾遺記「一一綵纜窮極侈靡」書言故事「問人行、曰一一何日掛」

【錦幡】にしきのはた。幡一に旛に作る。黃庭內景經「執劍百丈舞一一」＝錦旗。

【錦被】にしきのよぎ。吳志、蔣欽傳「爲ㇾ母作一一」

【錦楓】にしきの如く美くしきかへで。馬汝驥詩「祠堂列一一」

【錦步障】にしきのとばり。世說「石崇作一一五十里」＝錦帳。

【錦輿】にしきにて飾れるこし。元稹詩「公子文衣護一一」

【錦纜】にしきのともづな。韻語陽秋「十三、揚州天下之樂國、隋煬帝不ㇾ顧天下之重、一一牙檣、來遊此郡」（牙檣は象牙にて飾れるほばしら）庾信詩「一一回砂磧、蘭橈避荻洲」

【錦里】地名、四川省成都縣の南。華陽國志「錦江織ㇾ錦濯其中、則鮮明、故命曰一一」後世は成都の泛稱とす。錦官城參看。

【錦鱗】美くしき魚。鮑照、芙蓉賦「戲一一而夕映、曜繡羽以晨過」＝金鱗。

【衣ㇾ錦還ㇾ鄕】富貴にして故鄕に還る。南史、劉之遴傳「令卿衣ㇾ錦還ㇾ鄕、盡中榮養之理上」同、柳慶遠傳「爲雍州刺史、帝餞于新亭、謂曰、卿一一一一、朕無西顧之憂矣」

【衣ㇾ錦褧衣】錦は文衣、褧は襌衣、錦を被て褧を加ふるは、文衣の甚だ著顯なるを惡みて之を蔽ふなり。詩、衞風「碩人其頎、一一一一」（褧は中庸に絅に作る）次條參看。

【衣ㇾ錦尙ㇾ褧】錦衣の上に褧即ちうすき單衣を加へる、君子は美德あれども、之を衒はざる譬。前條參看。中庸「詩曰、衣ㇾ錦尙ㇾ絅、惡其文之著也」絅は褧。

【衣ㇾ錦晝行】功遂げ名成り、富貴を耀かして故鄕にかへる。魏志、張既傳「既爲雍州刺史、太祖謂ㇾ既曰、還君本州、可ㇾ謂一一一一矣」

【衣ㇾ錦夜行】富貴にして故鄕にかへらざれば人に知られざるに喩ふ。前條の反對。漢書、項籍傳「富貴不ㇾ歸故鄕、如一一一一」史記には錦を繡に作る。

【衣ㇾ錦之榮】立身出世して故鄕に歸る名譽。歐陽修、相州晝錦堂記「昔人比之一一一一者也」

【鋸】キョ コ 御

○のこぎり。○のこぎりにて足をきる刑の名（刖刑）漢書、刑法志「中刑用刀一」韓愈、送李愿歸盤谷序「刀一不ㇾ加」○のこぎりにてひききる。鶴林玉露「繩一木斷、水滴石穿」

【鋸牙】のこぎりのは。李白、師猛贊「一一銜ㇾ霜、鉤爪抱ㇾ月」＝鋸齒。

【鋸鑿】のこぎりと、のみと。晉書、苻生載記「殺戮無道、常彎ㇾ弓露ㇾ刃以見朝臣、錘鉗一一、備置左右」

【鋸齒】のこぎりのは。論衡「魚之哆一一者、鱗族長ㇾ之」＝鋸牙。

【鋸屑】おがくづ、のこぎりのくづ。言語のよどみなく出づるに喩ふ。晉書、胡毋輔之傳「王澄與人書曰、彥國吐佳言如鋸木屑、霏霏不ㇾ絕、誠爲後進領袖也」蘇軾詩「高論無ㇾ窮如一一」

【錧】クワン 旱

○くさび（轄）車轂の端の鐵。＝輨。○國たたら、ふいがうの大いなるもの。

【錧鎋】くさび、車の運轉に缺くべからざるもの。よりて樞要、又、咽喉などの義とす。趙岐、孟子序「論語者五經之一一、六藝之喉衿也」＝輨轄・樞轄。

【鉶】

鉶（金部六畫）に同じ。

【錈】ケン クヮン 阮

金屬がまがる（屈金）呂覽「柔則一、堅則折」

【錮】コ 遇

○ふさぐ、銅鐵を鑄て隙を塞ぐ（鑄塞）漢書、劉向傳「雖ㇾ錮南山猶有ㇾ隙」○かたし（堅固）○禁一はつなぎとどむ、罪人を一室にとぢこめて自由をさせぬ。又、仕官の途をふさぎて世に出ること能はざらしむ。○ぢびゃう（持病）ながき病、痼に通ず。

【錮疾】久しくいえざるやまひ。漢書、賈誼傳「失ㇾ今不ㇾ治、必爲一一」註「堅久之疾」＝痼疾・沈痼。

【錕】コン 元

一鋙は西方の夷國の山の名、其の產する鐵にて劍を作る、其の利以て玉を切るべしといふ。列子、殷湯「一鋙之劍」＝昆吾之劍。

【錚】サウ 庚

○かね、どら（鉦）○一一は金の聲。又、琴の聲。

【錚錚】○金鐵の聲。後漢書、劉盆子傳「卿所ㇾ謂鐵中一一、傭中佼佼者也」○轉じてすぐれたる人物の義とす。晉洛中謠「洛中一一馮惠卿」○琴の聲。孟郊詩「前溪忽調ㇾ琴、隔ㇾ林寒一一」○投壺の矢のひびき。王禹偁、竹樓記「矢聲一一然」

【錚鏦】金の聲。潘岳、籍田賦「衝牙一一」＝錚錚。

【錚摐】前條に同じ。王禹偁詩「一一美金錯」摐一に摐に作る。皮日休詩「暑雨正錚摐」

【錯】㊀サク ㊁ソ 藥 遇

㊀黄金にてぬりてかざる、めっきする「金錯刀」漢書、食貨志「以黄金錯其文」○やすり（鑢）○といし、あらと（厲石）玉石を治むるに用ふ。詩、小雅「他山之石、可以爲錯」○みだる（亂）○まじる（雜）まじはる（交）「交錯」○ななめにゆく（邪行）○そむく、たがふ（乖・舛）○あはぬ、合せず。漢書、五行志「與仲舒錯」○あやまる（誤）「錯誤」「失錯」○かはるがはる、たがひに（迭）中庸「如四時之錯行」○錯然は敬愼の貌。○錯崔は高峻の貌。㊁おく（置）史、周紀「刑錯四十餘年不用」＝措。○安んずる。屈原、九章「各有所錯」○やめる、とどむ（停止）廢する。○ほろぶ（滅）○人名、鼂錯は漢の政治家。

同訓異義 アヤマル 錯・誤・謬・訛・愆・過・失の別は誤（一八〇九頁一段）の條を見よ。○マジハル 錯・交・接・雜・混・淆・參・間・廁・糅の別は交（九一頁三段）の條を見よ。

【錯行】サクカウ たがひにかはるがはるめぐる。中庸「辟如四時之錯行、如日月之代明」
【錯愕】サクガク あわておどろく。後漢書、寒朗傳「二人錯愕不能對」
【錯覺】サクカク 心理學にて外界の事物をまちがへて知覺する。
【錯簡】サクカン 書物の字句、又は紙數が入りちがふ。簡は竹のふだ、古、用ひて字を寫す。大學、章句「舊本頗有錯簡」
【錯擧】サクキョ まじへあげる。左傳、序「年有四時、故錯擧以爲所記之名」
【錯迕】サクゴ いりまじる（交雜）宋玉賦「迴穴錯迕」
【錯誤】サクゴ あやまる。あやまり。李白詩「流俗多錯誤、豈知玉與珉」＝舛誤・錯繆・錯過。
【錯過】サククワ 錯誤に同じ。
【錯崔】サクサイ たかくけはし（高峻）き貌。馬融、廣成頌「隆穹盤回、嵎峗錯崔」
【錯雜】サクザツ いりまじる。王褒、洞簫賦「絡繹錯雜」
【錯繍】サクシウ ○まじへてぬひとる。竇融文「其峻潔而可味者、往往錯繍其間」○兩國の地形の入り雜れる喩。史記「秦韓之地、形如錯繍」
【錯節】サクセツ いりまじりたる木のふし。後漢書、虞詡傳「不遇盤根錯節、何以別利器乎」
【錯舛】サクセン みだれそむく、たがひそむく。舊唐書、高祖紀「近代以來、多立寺舍、隱匿錯舛、誘納姦邪」
【錯然】サクゼン うやまひ愼む貌。易、離卦「履錯然」
【錯綜】サクソウ ○いりまじる。○いろいろに組み合せる。易、繫辭「參伍以變、錯綜其數」
【錯刀】サクタウ ○漢の王莽時代の貨幣の名、形刀に似、金泥にて飾る。漢書、食貨志「錯刀以黄金錯其文、一刀直五千」○鑢玉石を治むる具。＝錯。
【錯峙】サクジ いりみだれてそばだつ。呂温文「五色相宣、萬邦錯峙」
【錯陳】サクチン まじへつらねる。王粲歌「劍弩錯陳」＝錯列。
【錯認】サクニン あやまりみとめる。劉克莊詩「夢回殘月在、錯認是天明」＝誤認。
【錯繆】サクビウ あやまりたがふ。漢書、董仲舒傳「陰陽錯繆、氛氣充塞」＝錯謬・乖繆。
【錯謬】サクビウ あやまりたがふ。漢書、元帝紀「陰陽錯謬、風雨不時」唐書、百官志「校書郎、掌校讐典籍、刊正錯謬」＝錯繆・舛謬。
【錯落】サクラク 入りまじる。班固、西都賦「隋侯明月、錯落其間」
【錯亂】サクラン ○いりみだれる。孔安國、尚書序「錯亂磨滅、勿可復知」○ちがひくるふ「精神錯亂」
【錯鏤】サクル まじへてちりばむ。梁書、劉之遴傳「金銀錯鏤、古罇二枚」
【錯戾】サクレイ まじはりもとる。爾雅「赤棟」注「皮理錯戾、好叢生山中」
【錯列】サクレツ 入りまじりならぶ。魏都賦「均田畫疇、蕃廬錯列」＝錯陳。
【錯連】サクレン まじはりつづく。鹽鐵論「開道錯連、足以游觀」
【錯辭】サクジ ことばをおく。文詩の字句をえらぶ。左思賦「蓋比物以錯辭、述清都之閑麗」＝措辭。

【錙】シ 支

○六銖（一説に六兩、又、八兩の重さ）○極めて小量の義とす「錙銖」「錙介」
【錙銖】シシュ 極めて僅小をいふ。禮、儒行「儒有上不臣天子、下不事諸侯、愼靜而尚寛、強毅以與人、雖分國如錙銖」
【不失錙銖】シシュヲウシナハズ 少しの誤もなし。冊府元龜「唐陸贄貞元中、爲相、精於吏事、斟酌裁斷、不失錙銖」
【算錙銖】シシュヲカゾフ 少しの利益をかぞへる。白居易詩「時情變寒暑、世利算錙銖」＝計較錙銖。

【錆】シャウ 陽

○くはし（精）○國さび。金屬の腐蝕して生ずるもの。＝銹。

【錞】㊀ジュン 眞 トン 元 ㊁タイ 隊

㊀鼓に和して鳴らす一種の樂器。周禮、封人「以金錞和鼓」㊁いしづき（鐏）矛の柄の下端。

【錐】スキ 支

○きり、もんで小さき穴をあける大工道具。○はり（鍼）○きりの如く細小なるもの。○きりの如く細く尖れるもの、毛錐は筆の異名。蘆錐はあしの初生のもの。○とし（利）○金鏃箭羽の矢「錐矢」
【錐畫】スヰクワク きりにてほる〔書苑〕
【錐股】スヰコ 學を勉め睡氣を催ふせば、自ら錐にて股を刺したる故事。戰國策「蘇秦讀書欲睡、引錐自刺其股、血流至足」
【錐矢】スヰシ 金のやじりの矢。淮南、兵略「疾如錐矢」
【錐指】スヰシ きりにて大地をさす、見識のせまき喩。莊、秋水「是直用管窺天、用錐指地、不亦小乎」
【以錐刀墮泰山】スヰタウヲモツテタイザンヲオトス 微力を以て大敵に敵するも、破ること能はざるに喩ふ。荀、議兵「以詐遇齊、譬之猶以錐刀墮泰山也」
【錐刀之末】スヰタウノスヱ わづかなる利益。左、昭六「錐刀之末、將盡爭之」
【引錐自刺】キリヲヒキテミヅカラサス 錐股を見よ。
【錐處囊中】キリノナウチユウニヲルガゴトシ 才智ある者が其の伎倆をあらはすに足る地位に置かれる喩。史、平原君傳「夫賢士之處世也、譬若錐之處囊中、其末立見」

【錫】㊀セキ・シャク ㊁シ ㊂セキ・シャク 錫 寘 陌

㊀すず、鉛に似て稍堅く銀色を帶びたる金屬。○たまふ「優錫」「犒錫」詩、大雅「孝子不匱、永錫爾類」（孝行の至、能く延きて旁人に及ぶ義）たまもの（賜）○しゃくぢゃう、道士・僧侶などの用ふる杖「巡錫」「飛錫」「掛錫」○錫蘭は印度洋中の大島、印度半島の東南端に在り、氣候炎熱、佛教最も盛んなり、首都を科崙埠といふ。㊁あたふ（予）＝賜。㊂質のこまかなるぬの（細布）

同訓異義 タマフ 錫・賜・貺・賚・給の別は賜（一八七四頁二段）の條を見よ。

【錫響】シャクキャウ 錫杖のひびき。許渾詩「錫響空山虎豹驚」
【錫人】シャクジン すずを鑄て人の形をつくる、古、以て葬に殉ぜしめたるもの〔顏氏家訓〕
【錫錫】シャクシャク 錫杖のひびき、錫杖を見よ。
【錫錢】シャクセン すずにて造りたるぜに。唐書、食貨志「河東錫錢皆廢」
【錫杖】シャクヂャウ 道士・僧侶などの杖。翻譯名義集「由振時作錫錫聲也、亦名聲杖」＝禪杖。
【錫奴】シャクド 足をあたたむる器、ゆたんぽ。事物原始「錫奴温足拖也、俗名湯婆子」
【錫福】シャクフク さいはひをさづける。書、洪範「予攸好德、汝則錫之福」＝錫祉。
【錫命】シャクメイ 命をたまふ、天帝又、君主より命令を蒙る。左、莊元「來錫桓公命」
【錫類】シャクルヰ 字解を見よ。
【錫賚】シライ たまもの。舊唐書、眞臘國傳「貞觀二年、與林邑國俱來朝獻、太宗嘉其陸海疲勞、錫賚甚厚」＝賜賚。

【錢】㊀セン ㊁セン 先 銑

㊀ぜに、かね、通貨「金錢」「銅錢」「銀錢」「緡錢」古、泉と通用す。○姓。錢起は唐の詩人、大曆十才子の一人。錢大昕は清の嘉定の人、竹汀と號す、羣籍に通ず、著す所、潛研堂集といふ。○はかり（衡）の名、兩の十分の一、其の制、宋より始まる。○國貨幣の名。圓の百分の一。㊁すき（銚）地を剗りて草を除く具。詩、周頌「庤乃錢鎛」

解字 錢は人皆之を欲す、故に兩戈相爭ふに至る、會意文字。

【錢貨】センクワ ぜに、通貨。漢書、食貨志「錢貨六品」＝錢刀・錢幣・泉貨。
【錢貫】センクワン ぜにざし。漢書、食貨志、注「緡、謂錢貫也」
【錢穀】センコク ぜにと穀物と。轉じて賦税をいふ。史、陳丞相世家「問天下一歲錢穀出入幾何」
【錢財】センザイ ぜに、たから。莊、徐無鬼「錢財不積、則貪者憂」
【錢神】センシン 金錢の力を神に喩へていふ。晉書、魯褒傳「傷時之貪鄙、乃隱姓名、而著錢神論、以刺之」
【錢樹子】センジユシ かねのなる木、妓女をいふ。樂府雜錄「許子和吉州永新倡家女也、開元末、選入宮、卽以永新名之、既美且慧、善歌、能變新聲（中略）及卒謂其母曰、阿母錢樹子倒矣」
【錢刀】センタウ ぜに。刀も錢。卓文君、白頭吟「男兒重意氣、何用錢刀爲」＝錢貨・錢幣。
【錢湯】センタウ 國ふろや、錢を取りて入浴させる湯屋。
【錢塘】センタウ 縣の名、杭州府城の南に在り。もと秦の錢唐縣。唐は其の國

號に同じきを以て土を加へて塘と爲す。
【錢範】センハン ぜにの鑄形＝錢范。
【錢緡】センビン ぜにさし。韓琦詩「巧工近歲知二衆貴一、雜以二假僞一竄二一一一」
【錢文】センブン ぜにの面の文字。後漢書、光武紀「一一有二金刀一」
【錢幣】センヘイ ぜに。漢書、食貨志「更造二一一以贍レ用」＝錢貨。
【錢癖】センヘキ ぜにを愛するくせ。晉書、和嶠傳「和嶠家至富、性吝、雖二一錢一不二敢與レ人、時人曰二之一一一」
【錢舖】センポ 兩替店＝錢莊。
【錢龍】センリヨウ ○りょうの一種。南史「梁元帝幸二玄州苑一、見三大黑蛇盤二屈於前一、衆小龍遶レ之皆黑色、宮人曰、此非レ怪也、恐是一一、乃取二錢數千萬一鎭レ之」○錢にてつくりたる龍。粧樓記「長安妓、上巳結レ錢爲レ龍、作二一一會一」

【錟】
㊀タン　㊁セン　㊂エン　覃 鹽 琰 琰

㊀ながき矛。㊁とし、するどし（利）＝銛。㊂するどき刃、利刃「一戈」

【錟戈】エンクワ するどきほこ。史、蘇秦傳「一一在レ後」

【錘】
㊀ツヰ　㊁スヰ　支 寘　通音スヰ

㊀はかりのおもり、ふんどう（稱權）「稱一」○八銖の重さ。又十二兩の重さの稱。㊁金屬をきたへ成す器、鍛器。莊、大宗師「皆在二爐一之間一耳」

【錠】
テイ・チャウ　テン　徑 霰

○たかつき、熟物ニタルモノを神に薦むる足のある祭器。○通貨の銀片「銀一」國○ぢゃう、ぢゃうまへ（鎖）○平たくうすくのべたる藥「一劑ザイ」

【錣】
テツ　屑

○馬の策端ムチノサキにつけたる鐵の針。○國しころ（錏）

【鉼】
ヘイ　梗　鉼は俗字

○おほばん、古の通貨。○金銀を餅モチの形に平たくのべたる板（鈑）「一金」○かま（釜）

【錑】
ライ　隊

○かんな（鉋）○國もぢり。長き柄のさきに屈曲せる多くの針を植ゑたる武器。つくぼう、そでがらみ。

【錄】
㊀ロク　㊁ロク　㊂リヨ　沃 屋 御

㊀しるす（記）記載する「登一」「詳一」「著一」「漫一」「輯一」「公羊、隱十「春秋一」內而略レ外」○うつす、かきぬく（鈔寫）「抄一」○かきしるせしもの、文書。「記一」○歷史「實一」○品物又、書物の題目をしるせしもの「目一」○あらはす、明かにする、表明する。○とる（采取）○とりしまる、ただす（檢束）○とりまとめる、すべる（總領）○ついづ（次第）よはひす（齒序）○劍の名。＝綠。㊁一一は凡庸なる貌。又、衆に隨從する貌。＝碌碌。㊂ゆるしかへりみる（寬省）

【錄藏】ロクザウ かきしるしてたくはへる。漢書、律歷志「叔孫通所レ撰、與二律令一同一二一於理官一」
【錄事】ロクジ ○記錄文簿をつかさどり善惡を擧彈する官の名。晉の時一一參軍を置きしに始まる。職官要錄「總二錄衆事一」齊書、百官志「凡公督府置二佐職書一、有二一一記室一」○昔人、妓を以て觴政を司らしむるを名つけて酒糾といひ、又一一といふ〔老學庵筆記〕○國軍法會議、又、宮中御歌所の屬官。
【錄寫】ロクシャ 文書をうつししるす。＝寫錄。
【錄奏】ロクソウ 取調べて申し上げる。北齊書、孝昭帝紀「未レ蒙二追贈一者、亦皆一一」
【錄牒】ロクテフ 姓名を記したる帳簿。後漢書、李膺傳「景顧爲二膺門徒一、而未レ有二一一一、故不レ及二于譴一」
【錄問】ロクモン 罪狀を帳簿に記錄してたづねる。魏書、世宗紀「與二王公卿士一親臨一一」宋史、眞宗紀「一二一大辟罪人一」
【錄用】ロクヨウ 采トリ用ふる。後漢書、袁紹傳「廣羅二英雄一、棄レ瑕一一」＝采取。
【錄錄】ロクロク ○凡庸なる貌。漢書、蕭何・曹參傳贊「當時一一、未レ有二奇節一」○衆にしたがふ貌。史、平原君傳「公等一一、所レ謂因レ人成レ事者也」＝碌碌。

【鋞】
ヲ　麻　又、鐸に作る　通音ア

しころ（頸鎧）かぶとの後方にたれて首筋をおほふもの「一鍜」

【錺】
〔國字〕

かざり、金屬を用ひてかざる。又其の裝飾せし金物「一職」

【錵】
〔國字〕

にえ、刀の燒きに雲形のあやの現はるるもの。又其のあや。

九畫

【鍱】
エフ　セフ　葉 葉

いたがね。銅又鐵などを鎚鍊してうすき葉片とせしもの。

【鍜】
カ　麻　鍛とは別

しころ（錏）頸鎧。

【鍔】
ガク　藥

○は（刀刃）「劍一」○劍のきっさき（劍端）漢書、蕭望之傳「底二厲鋒一」○刃のわき（刃旁）○はし、きは、はて（端厓）堮に通ず。西京賦「前後無レ有二垠一」○一一は高き貌。○國つば。

【鑒】
鑑（金部十四畫）に同じ。

【鍋】
クワ　歌

なべ、釜カマの類「土一」「銀一」「茶一」

【鍋戶】クワコ 鹽を煎る民〔宋史、食貨志〕
【鍋爐】クワロ 汽機の一部、鍋中に水を盛り、爐中に煤を燃モやし以て水蒸氣を發生し汽機をして運動するを得しむるもの。

【鍠】
クヮウ　陽 庚

○一一、鍠一・鎗一は鐘鼓カネタイコの聲の形容。後漢書、馬融傳「一一鎗鎗」○樂器の名。文心雕龍「林籟結レ響、調如二竽瑟一、泉石激レ韻、和若二球一一」○まさかり（鉞）○一種の兵器。劍に似て三刃、柄と共に三尺五寸、虎豹の皮を以て袋とす。

【鍧】
クヮウ　庚

鍧一カウクワウは鐘鼓の相雜る聲。

【鍰】
クヮン　エン　删 霰 翰

○周代の貨幣のめかた、六兩の稱。○わ「銅一」＝環。

【鍥】
ケツ　ケイ　屑 霽

○きざむ（刻）荀、勸學「一而不レ舍、金石可レ鏤」○きる（斷）たつ（絕）○かま（鎌）形鉤の如く、穀を刈るに用ふ。○むごし（刻酷・慘酷）

【鍥薄】ケツハク ○錢をけづりて薄くする。後漢書、劉陶傳「願寬二一一之禁一」○むごくする。唐書、魏徵傳「道德之旨未レ弘、而一一之風先搖」＝刻薄・慘酷。

【鍵】
ケン　阮 銑

○かぎ（籥牡・鑰）開閉のしまりをする爲め、じゃうにさしこむ金物「扃一」「關一」「管一」禮、月令「修二一閉一」閉は鎖筒ジャウ○かなへのみみわ（鉉）鼎を擧ぐる所以の者。＝扃。○くさび（車轄）爾雅序「六藝之鈐一」

【鍵盤】ケンバン 風琴・洋琴ピヤノなどの前部に排列する黑白の小盤、高低の音を發するもの。色の白きを白鍵といひ、黑きを黑鍵といふ。

【鍸】
コ　虞

黍稷を盛る祭器。瑚に通ず。

【鍭】
コウ　尤 宥

○や（矢）金鏃翦羽の矢。○やじり（鏃）

【鍭矢】コウシ かねのやじりをつけたる矢〔周禮、矢人、注〕

【鍤】
サフ　洽　鍤は俗字

○すき（鍬）地につきさして土を起す農具「舂一」「利一」「荷一」史、河渠書「擧レ一如レ雲、決レ渠爲レ雨」又、臿・插に作る。○はり（鍼）

【鍿】
鍿（金部八畫）の本字。

【鍼】
シン　侵　又、鍼・針に作る

○はり、ぬひばり、衣を縫ふ針「縫一」「鐵一」左、成二「執一織紝」註「執一女工之縫綴者也」○病を治ナホすはり。又其の術「一術」○さす、はりさす（刺）○人名。詩、秦風「子車一虎」

【鍼艾】シンガイ やまひを治療するはりと、もぐさと。轉じて箴戒イマシメの義とす。宣淑文「以二往古一爲二鏡鑒一、以二未來一爲二一一一」
【鍼芥】シンカイ 磁石は能く鐵の鍼を引き、琥珀は能く芥ケシを拾ふ。よりて人の情性投合するを一一相投といふ。王或詩「一一人身豈易レ投」
【鍼灸】シンキウ 針灸（二〇三三頁四段）に同じ。
【鍼神】シンシン 裁縫にすぐれたる人の稱。拾遺記「魏文帝所レ愛美人薛靈芸、帶改レ名曰二夜來一、妙二於鍼工一、雖レ處二深帷之內一、不レ用二燈燭一、裁製立成、宮中稱爲二一一一」
【鍼工】シンコウ たちぬひ、裁縫、又其の人。拾遺記「妙二於一一一」
【鍼指】シンシ 女工をいふ。楊奐詩「十三巧一一、十四婉步趨」＝鍼黹。
【鍼術】シンジユツ 針術（二〇三三頁四段）に同じ。
【鍼錐】シンスヰ はりと、きりと。論衡「一一所レ穿、無レ不二暢達一」

【鍼線】シンセン ○はりと、いとと。刺繡に用ふる所の者。喬知之詩「曲房理ニーーー」杜甫詩「甃縫滅ニ盡ーー跡ー」＝針線。○事物の頭緒及び條理に喩ふ。本草綱目に萬方ーーあり、諸病を以て門を分ち、詳かに治する所の藥を列す、蓋し檢査便利にして、鍼に因りて線を引くが如く、百病千方手に應じて之を得るの意。
【鍼治】シンチ 鍼術にて病を療治する。
【鍼黹】シンチ 針黹（二〇三三頁四段）に同じ。
【鍼芒】シンバウ はりのさき。唐書、沙陀傳「馳射ニ百步外ー、ーー木葉無レ不レ中」
【鍼盤】シンバン 磁石盤。瑯琊代醉編「術家ーー、用レ水浮レ鍼、視ニ其所レ指、以定ニ南北ー」＝羅鍼盤。
【鍼腹】シンフク はらにはりをさす。自由を得しめざるに喩ふ。唐書、吳武陵傳「徐壓ニ其首、梁薄ニ其翼、魏斮ニ其脛、滑鍼ニ其腹ー」
【鍼砭】シンペン ○肌膚にさして痛を治するかねの針と、いしばりと。又其の術。漢書、藝文志「周度箴石」注「箴所ニ以刺レ病也、石謂ニ砭石、卽箴石也、古者攻レ病則有レ砭、今其術絕矣」○轉じて箴戒シイマの義に用ふ。范成大詩「時時苦語見ニーーー」＝針砭・箴砭。
【鍼鋒】シンホウ はりのさき。微細に喩ふ。涅槃經「尖頭ーー、受ニ無量衆ー」
【鍼末】シンマツ はりのさき。淮南子「離朱之明、察ニーー於百步之外ー」
【鍼縷】シンル はりと、いとすぢと。說苑「順ニーーー者成ニ帷幕ー」
【鍼路】シンロ 針路（二〇三三頁四段）に同じ。

【鍦】シャ シ 麻 支 こぼこ（短矛）

【鍾】ショウ 冬 ○あつむ「ー美」あつまる（聚）○壺の屬、酒を貯へる大器。孔叢子「堯舜千ー」○さかづき（酒器）○あたふ（予）天の賦予する所。杜甫、望嶽詩「造化ー神秀ー」○あたる（當）○かさぬ（重）○古の量マスの名。支那の六斛四斗、又、八斛、又、十斛。○つりがね。古、鐘に通ず。○龍ーは竹の一種。又、涙を垂れる貌。又、老いぼれる貌。＝蹤踵。

同訓異義 アツマル 鍾・聚・集・彙・輯・萃・輳・醵・攢・屯の別は聚（一五四九頁三段）の條を見よ。

【鍾愛】ショウアイ めでいつくしむ心を一人にあつめる、非常に愛する。南史、江總傳「特所ニーーー」
【鍾繇】ショウエウ 三國の魏の人、字は元常、胡昭と竝に劉德升を師とし草書を學ぶ、繇の書「飛鴻戲レ海、舞鶴游レ天」が若しと稱す、世に胡肥鍾瘦の目あり。
【鍾馗】ショウキ 疫病惡魔を驅る神。巨眼多髯にして、黑き衣冠を著け、拔劍して小鬼を捽する像に描く、唐の明皇（玄宗）が夢中に見る所、吳道子をして其の像を畫かしめしに始まるといふ。五代史「獻ニーー擊レ鬼圖ー」（一說にーーは考工記の終葵に同じく由來する所久しと）
【鍾山】ショウザン ○今の江蘇省江寧縣の東北に在り、俗に紫金山と稱す、諸葛亮のーー龍蟠と稱せしもの是れなり、吳の孫權、其の祖の諱を避けて蔣山と改む、宋代復タ、ーーと名づく。○崑崙の別名。淮南子「譬若ニーー之玉ー」
【鍾子期】ショウシキ 春秋時代の楚の人。伯牙の彈琴を聽きて其の妙趣を解し得たりといふ。列、湯問「伯牙鼓レ琴、志在ニ高山、子期曰、善哉峨峨兮如ニ泰山、志在ニ流水、子期曰、善哉洋洋兮若ニ江河、伯牙所レ念、子期必得レ之」
【鍾聚】ショウシュ あつむ。釋名「ー、ー也、上體之所ニーーー也」
【鍾張】ショウチャウ 鍾繇と張芝と、皆善書を以て名あり〔張懷瓘書估〕
【鍾乳石】ショウニュウセキ 方解石が石灰洞内にて冰柱の如く垂下せしもの、つららいし。＝鐘乳石・石鍾乳。
【鍾念】ショウネン あつくいつくしみおもふ。唐書、張薦傳「希烈之母、ーニー幼子、目不レ絕レ泣」
【鍾美】ショウビ うつくしきをあつむ。左、昭二八「子貉早死無レ後、而天ーニー于是ー」
【鍾庾】ショウユ 六斛四斗の量と六斗の量と、少しばかりの粟の義。任昉詩「ーーー之秩、散ニ之故舊ー」
【鍾憐】ショウレン 至りてあはれみいつくしむ。范鎭文「生而甚慧、肸所ニーーー」
【鍾王】ショウワウ 魏の鍾繇と、晉の王羲之と、共に名高き能書家。蘇軾題跋「晉論ニーーー之跡、蕭散簡遠、妙在ニ筆墨之外ー」

【鍬】セウ 蕭 又、銚に作る ○すき（銛）○國くは（鐏）土を掘り起す農具。
【鍬钁】セウクワク すきくは。揩月鈔「大衆各備ニーーー剗レ草」

【鍫】 鍬（前條）に同じ。

【鍐】ソウ 東 馬頭につくる冠。蔡邕獨斷「金ー者馬冠」

【鍛】タン 翰 鍜とは別 ○きたふ、金屬の質を精鍊する爲めにうちたたく「ー冶」「ー鍊」晉書、嵇康傳「康好レー、每

於ニ柳樹下ニーー」○ねる、物事に熟達せしむる。○あらふ（濯）○ほじし（脯）「ー脩」＝腶。○といし（厲石）
【鍛甲】タンカフ よろひをきたへつくる。史、主父偃傳「今天下ーレー砥レ劍、矯レ箭累レ弦、轉レ輸運レ糧、未レ見ニ休時ー」
【鍛金】タンキン 金鐵をきたへる。後漢書、烏桓傳「男子能作ニ弓矢鞍勒、ーーー鐵ー爲ニ兵器ー」
【鍛石】タンセキ ○といし（厲石）○石灰〔本草〕
【鍛鐵】タンテツ うちきたへし鐵。＝鍊鐵。
【鍛冶】タンヤ 金屬をきたへて器物を造る。又其の工人、かぬち、かぢ。
【鍛鍊】タンレン ○きたへねる。方干詩「文章ーー猶相似、年齒參差不レ較レ多」○轉じて酷吏が色色に構成して人を罪におとす。漢書、路溫舒傳「上奏畏レ卻、則ーー而周ニ內之ー」註「精熟周悉、致ニ之法中ー也」

【鍖】チン 侵 だい、まくらぎ、木を斫る質イダ

【鍉】㊀テイ 齊 ㊁シ 支 ㊂テキ 錫 ㊀きつさき、ほこさき（鋒）○誓をする時、血を歃スする器。㊁かぎ（鑰）「鑰ー」○さじ（飯匕）＝匙。㊂やじり（鏃）漢書、項籍傳「銷ニ鋒ーー」＝鏑。

【鍍】ト 遇 めっき（滅金）金銀などをとかして物の面にながし著ける。又、其のめっきせしもの。
【鍍金】トキン めっき。極めて薄き黃金を以て銀・銅などの諸器の上に加へかぶせる。李紳詩「假金方用眞金鍍、若是眞金不レーレー」
【鍍銀】トギン ぎんめっき。

【鍮】トウ 尤 通音チュウ ○ー石は自然銅の精しきもの、色黃金の如く、之を燒けば赤くして黑からず。○眞ーシンチュウは銅十に亞鉛タトタン三を合せたる金屬。＝黃銅。

【鍑】フウ フク 宥 屋 口のすぼめる大釜。漢書、匈奴傳、注「ー音富、釜之大者也」（一說に大口の釜）

【錨】ベウ 蕭 いかり。鐵にて造り水中に投じて船を止トドむる具「投ー」「拔ー」

【鍪】ボウ 尤 ○かぶと（兜・首鎧）かぶとの鉢「兜ー」○かんむりまき（冠卷）

【鎯】 鋃（金部七畫）に同じ。

【鍚】ヤウ 陽 ○馬の額の飾とする金具。詩、大雅「鉤膺鏤ー」○たてかざり、盾の背後の金の飾。禮、郊特牲「朱干設ー、諸侯之僭禮也」

【鍊】レン 霰 煉・練と混用す ○ねる（冶金）銅鐵を煎り冶カトして精熟せしむ「精ー」「鍛ー」皇極經世「金百ー然後精、人亦如レ此」○ねりあげたる金屬。○精金。○ねれる（精熟）すべて事物の精熟せるもの「ー句」「修ー」「ー丹」○轉じて酷吏が巧に構成して人を罪に入れるを鍛ーといふ。漢書、路溫舒傳「鍛ー而周ニ內之ー」
【鍊鋼】レンカウ ねりたるはがね。傅休奕、鬪雞賦「爪似ニーーー、目如ニ奔星ー」
【鍊氣】レンキ 道家にて氣をねる法。五代史、豆盧革傳「服ニ丹砂ーレーー以求ニ長生ー」
【鍊句】レンク 句をねりて其の工穩を求める。陸游詩「ーー未レ安姑棄置」
【鍊形】レンケイ 體を鍊りて健全ならしめる道家の術。神仙傳「仙家有ニ太陰ーー之法ー」
【鍊師】レンシ 道士の美稱。孔帖「道士修行、德高思精者、謂ニ之ーーー」
【鍊鑠】レンシャク ねりてとかす。七命「楚之陽劍、歐冶所レ營、乃鍊乃鑠」
【鍊石補天】レンセキホテン 古、天、西北に足らず、女媧氏五色の石を鍊りて以て之を補ふ〔列子・淮南子〕
【鍊丹】レンタン 道家にて丹藥卽ち長生不死のくすりをねる義。又其のねりし丹藥。晉書、葛洪傳「從祖玄、吳時學レ道得レ仙、號曰ニ葛仙公、以ニ其ーーー祕術ー授ニ弟子鄭隱ー」＝鍊藥・煉丹。
【鍊鐵】レンテツ ねりきたへしてつ。＝鍛鐵。
【鍊風】レンプウ 颶風の前に吹くかぜ。嶺南志「颶風將レ發、有ニ微風細雨、先緩後急、謂ニ之ーーー」
【鍊磨】レンマ ねりみがく、深く道藝をねり精熟する。＝練磨・研磨。
【鍊藥】レンヤク くすりをねり合はす。又、其の藥。李白詩「粲然啓ニ玉齒、授以ニーーー說ー」＝煉丹。

十畫

【鎰】イツ 質

金貨の目方の名、二十四兩、一說に三十兩、又、二十兩。萬一は極めて多額の黄金の義。晉語「黄金四十一」

【鎣】エイ ヤウ 徑

○金器を磨きて光澤を生ぜしむる器。○みがく（磨）かざる（飾）

【鎧】カイ 通音 ガイ 賄 泰

○よろひ。戰場に被る衣、皮製のを甲、金屬製のを一といふ。管子、地數「爲ニ劍一ニ」○よろふ、よろひを衣る。○佛忍辱一は袈裟の異名。

【鎧甲】ガイカフ よろひ。呉志、諸葛恪傳「解ニ澄一一不レ持ニ矛戟ニ」

【鎧鋋】ガイセン よろひと、ほこと。杜甫詩「蜀將分ニ旗鼓ニ羌兵助ニ一一ニ」

【鎧冑】ガイチウ よろひと、かぶとと。唐書、吐蕃傳「其一一精良」＝甲冑。

【鎧仗】ガイヂヤウ よろひと武器と。晉書、祖逖傳「不レ給ニ一一ニ使ニ自招募ニ」＝甲兵。

【鎧馬】ガイバ 武裝したる馬。晉書、王浚傳「一一二百五十四」＝鐵馬・帶甲馬。

【鎬】カウ 皓

○なべ、物を温める鍋。○周の武王の都の名。今の陝西省西安府の地。鄗に通ず。○一一は光りかがやく貌。何晏、景福殿賦「故其華表則一一鑠鑠」○國しのぎ。刀身の兩側に隆カクく通ずる筋「一を削る」（はげしく斬り合ふ義）

【鎋】カツ 黠

○くさび（車轄）車の輪を軸にとめる金物。＝轄。○一は能く車を制するによりて、轉じて物事のしめくくりの義「椏一」

【鍥】ケツ 屑

○きざむ（鐫刻）金銀珠玉を刻みて飾とする。淮南、本經「一ニ金玉ニ」○かま。＝鍥。

【鎖】サ 哿 又、鏁に作る、鎻は俗字

○くさり、金屬の鐶ワを多く連ねて索狀にせしもの「連一」○かけがね、ぢやう、開閉のしまりをする金物。說文「鐵一、門鍵也」○轉じて事物の要處の義とす「一鑰」○とづ、とざす、しめる（掩閉）「封一」「閉一」宋史「緘一甚謹」○くさりにてつなぎ、自由を得しめざるもの、罪人の頭にはめる鐵のなは「枷一」○チエーン英語（Chain）のあて字。一マイルの八十分の一、我が十一間三寸八分餘。

同訓異義 トヅ 鎖・閉・闔・杜・閟・關 の別は閉（二〇七七頁三段）の條を見よ。

【鎖鎧】サガイ くさりを連ねて作りたるよろひ、くさりかたびら。曹植文「一一一領」＝鎖甲。

【鎖港】サカウ 國みなとをとざして外國と通商貿易するを許さず。

【鎖鐶】サクワン くさり。洛陽伽藍記「以レ銀爲レ櫓、金爲ニ一一ニ」

【鎖國】サコク 國國をとざし外國と交際せず「一一攘夷」

【鎖骨】サコツ 肩を構成するほね。前は胸骨に接し後は肩胛骨に接す。＝琵琶骨。

【鎖窗】ササウ 連鎖クサリの文アヤを刻めるまど。杜牧詩「多下ニ珠簾一閉ニ一一ニ」＝瑣窗。

【鎖匙】サシ かぎ。通鑑、晉明帝紀、注「鑰、關牡也、今謂ニ之一一ニ」＝鎖鑰。

【鎖愁】サシウ うれへをとざす。陸游詩「千尋鐵鎖還堪レ恨、空鎖ニ長江ニ不レ一レ一」

【鎖攘】サジヤウ 國鎖國攘夷の略。國をとざして外國人を追ひ拂ふ。

【鎖鑰】サヤク ○ぢやうと、かぎと。門戸のしまり。韓愈詩「洞門無ニ一一ニ、俗客不ニ曾來ニ」○出入の要處の義。宋史、寇準傳「北門一一、非レ準不可」

【鎩】サイ セツ 卦 サツ 黠 屑

○つるぎ。鑃ハウのある鈹ツルギ○ほこ、長き矛ホコ。賈誼、過秦論「非レ銛ニ於句戟長一ニ也」○そこなふ（殘）顏延之詩「鸞翮有レ時一」

【鎗】サウ 庚 陽

○なべ（鐺）三足あるなべ。○鏘（金部十一畫）に同じ。鎗一サウは金石の聲。史、樂書「君子之聽レ音、非ニ聽ニ其鏗一ニ而已ニ」○長一は米の異名。李賀詩「長一江米熟」○俗に借りて刀槍の槍ヤリとす。○銃ツツ「火一」

【鎗鍠】サウクワウ 鐘鼓の聲。枚乘賦「一一嗽卿」

【鎗鎗】サウサウ 鐘の聲。後漢書、馬融傳「鍠鍠一一」＝鏘鏘。

【鎡】シ ジ 支

一基シはくは、田を鋤スく農具、耒耜の屬、基は錤の借字にて鋤。孟、公孫丑「雖レ有ニ一基ニ不レ如レ待レ時」＝茲基・鎡錤。

【雖レ有ニ鎡基ニ不レ如レ待レ時】鎡基は田器、時は耕種の時、如何なる利器を抱くも、時勢の來るを待たざれば、功を成すこと能はざる喩。雖レ有ニ智慧ニ（八七二頁四段）を見よ。

【鎭】㊀チン 震 ㊁チン 眞 ㊂テン 先

㊀しづむ、おす（壓）重きものにて上からおしつける。○おさふ（按）○やすんず（安）撫ナで安んずる。○とどむ（止）○しづまる、をさまる。○おさへ、おし、おもし（重）又、其のもの。○一地方のおさへとなりて守備安撫に任ずるもの「一臺」「藩一」「雄一」「重一」○一州のしづめとなる大山。周禮、夏官「其山一曰ニ會稽ニ」○市集の大いなるもの、人口五萬以上ある市「漢口一」「景德一」○とこしなへに（長）陳と音通にて久しき義、詩に多く用ふ。○常の字の義と略ぼ同じ、六朝の人の詩に每に用ふ、唐詩には尤も多し。褚亮詩「莫ニ言春稍晩ニ、自有ニ一花開ニ」㊁まもる（戍）○寶器「玉一」㊂ふさぐ。＝塡。ふさがる。＝塡。

【鎭遏】チンアツ しづめとどめる。北史、薛孝通傳「須下預計ニ一一ニ以爲中後計上」＝鎭止。

【鎭壓】チンアツ しづめおさへる。晉書、唐彬傳「諸軍已至足ニ以一ニ内外ニ、願無ニ以爲レ慮」

【鎭安】チンアン しづめやすんずる。宋史、呂公著傳「任ニ老成ニ、一ニ百姓ニ、周ニ知百度ニ、無下如ニ陳堯佐一者上」＝鎭定。

【鎭慰】チンヰ しづめなぐさむ。後漢書、光武紀「一ニ州郡ニ」

【鎭衞】チンヱイ しづめまもる。晉書、孝武紀「一ニ山陵ニ」唐書、劉蕡傳「勇不レ足ニ以一ニ社稷ニ、而暴足ニ以侵ニ害閭里ニ」＝鎭守。

【鎭厭】チンエフ しづめおさへる。後漢書、仲長統傳「當ニ君子困賤之時ニ、跼ニ高天ニ蹐ニ厚地ニ、猶恐レ有ニ一一之禍ニ也」

【鎭扞】チンカン しづめまもる。宋書、劉勔傳「持レ節領レ軍、置ニ佐史ニ、一ニ石頭ニ」

【鎭御】チンギヨ しづめをさむ。晉書「一一有レ方、得ニ將士死力ニ」

【鎭禦】チンギヨ しづめふせぐ。賈至文「或謀府沖深、才膺ニ一一ニ」＝綏禦。

【鎭據】チンキヨ しづめて、據りまもる。呉志、宗室傳「諸孫、或贊ニ興初業ニ、或一ニ邊陲ニ」

【鎭圭】チンケイ 帝王の執るたま、四鎭の山の象を以て緣飾とす、四方を安定する義に取る。周禮、玉人「一一尺有二寸、天子守レ之」

【鎭國】チンコク 國家をしづめ定める。亢倉子「賢可ニ以一レ國、亦可ニ以理レ國」

【鎭座】チンザ 國神靈が其の地に鎭まりまします。

【鎭子】チンシ けさん（徐氏筆精）＝卦算・文鎭。

【鎭止】チンシ しづめる。易經、疏「直置ニ一山ニ、已能一一」

【鎭紙】チンシ ぶんちん。文具の一、銅鐵玉石竹等にてつくる、或は禽獸鱗介の形に肖せ、以て紙をしづめて動かざらしむ。＝書鎭。

【鎭邇】チンジ ちかきをしづめる。陸機文「柔レ遠一レ一」

【鎭日】チンジツ ふだん、常日、書閒のながき日をいふ。朱熹詩「一一空掩レ門」＝常日。

【鎭心】チンシン 心をしづめて安寧ならしめる。南史、鄭灼傳「常疏食講授、多苦ニ心熱ニ、若ニ瓜時ニ、輒偃臥、以レ瓜一レ一、起便讀誦」

【鎭守】チンシユ ○しづめまもる。後漢書、伏湛傳「帝以ニ湛才任ニ宰相ニ、拜爲ニ司直ニ、行ニ大司徒事ニ、車駕每ニ出征伐ニ、常留一一、總ニ攝羣司ニ」國○チンジユ 土地の守護神、うぶすなの神。○寺院のまもり神。

【鎭守府】チンジユフ 國○古、奥羽地方をしづめ守るために設けし軍營。○各軍港に置きて其の海軍區を管轄せしむる府。

【鎭戍】チンジユ 國境をしづめまもる。呉志、陸凱傳「夏口要衝、宜下選ニ名將ニ以一中一之上」

【鎭綏】チンスヰ しづめやすんず。晉書、劉弘傳「恢宏奥略、一ニ南海ニ」＝鎭安・鎭撫。

【鎭西】チンゼイ ○新疆省内の縣名。○國九州の古名。元明天皇の和銅十四年、筑紫に一一府を置きしに由る（續日本紀）

【鎭靜】チンセイ しづまりてしづか。晉書、高崧傳「吾闇弱、德信不レ著、不レ能下一ニ羣庶ニ、保中固維城上」＝綏靜。

【鎭攝】チンセフ しづめをさむ。魏志、注「司馬懿所レ督、皆爲ニ儁風ニ、名位不レ殊、素無ニ定分ニ、卒有ニ變急ニ、不ニ相一一」

【鎭息】チンソク しづめやすんずる。宋書、臨川王道規傳「貞潔純素、潛居研志、耽ニ情墳籍ニ、亦足下一ニ頹競ニ、獎中勗浮動上」

【鎭臺】チンダイ 國一地方をしづめ守るために置く兵隊。又、其の陣營。今の師團の舊稱。

【鎭討】チンタウ 賊をおさへうつ。魏志、婁潛傳「太祖欲下授ニ潛精兵ニ、以一中一之上」

【鎭宅符】チンタクフ 家内安全の祈禱の札、鎭宅靈府は北方を守る神にて龜蛇の象を爲すもの。疊池瑣錄「張東海、名曰レ能ニ草書ニ、左右纏繞如ニ一一篆ニ」

【鎭定】チンテイ しづめさだめる。＝平定・

安定・綏定。

【鎭統】しづめすべる。魏志、徐宣傳「今當遠征而此方未定、宜得清公大德以鎭統之。乃以宣爲左護軍、留統諸軍」

【鎭撫】しづめ安んずる。左、文十二「一二其社稷」

【鎭邊】くにざかひをしづめる。舊唐書、盧祖尙傳「卿有安邊之略、爲我鎭一、勿以道遠爲辭」＝安邊・綏邊。

【鎮】 ㊀ツヰ ㊁タイ 支 灰

鎭(前條)の俗字。

【鎚】

㊀おもり(錘)權なり。○かなづち(金槌)抱朴子「以鐵鍛、其數千下」○かなづちにて撃つ。古琴疏「以鐵如意撃琴而破之」㊁きたふ(鍛)

【鎚擊】つちと、のみと。西軒客談「每成鼓鼙而起、乃急施一一、以混其聲」

【鎚殺】かなづちにてうちころす。金史、宗室亨傳「吾能以一一之」

【鎒】 ㊀ドウ ㊁カウ 宥 豪

㊀くさぎる、草を除く。＝耨。㊁くは、田草を除く農具「銚一」○くさぎる。

【鎒田】田草をくさぎりのぞく。淮南、說山「治國者若一一、去害苗者而已」

【鎛】 ハク 藥

○小さき鐘。○すき、くは(田器)鎒の類。○鐘を懸ける横木。又、其の横木の金華

【鎞】 ヘイ 齊

○くし(梳)杜甫詩「短髮不勝一」俗に篦に作る。○かねべら、箭鏃に似たる小刀。涅槃經「有盲人詣醫、醫卽以金一刮其眼膜、使復明」

【鎔】 ヨウ 冬

○いる(鑄)○いがた(鑄型)漢書、董仲舒傳「上之化下、下之從上、猶金之在一、惟冶者所爲」○とく、とける(銷)金屬が熱せられてとける。

【鎔解】金屬をとかす。又とける。

【鎔銀】とかしたるしろがね。劉禹錫詩「層波萬頃如一一」

【鎔鑠】とく。とかす。宋史、趙安易傳「募工鑄大錢百餘進之、極其精好、俄墜殿階、皆碎、盡一一盡其精液矣」

【鎔鑄】金屬をいりとかす。轉じて物事をつくり成す義とす。杜弼文「可以一一性靈、弘中風敎」

【鎔錢】ぜにをいつぶす。隋書、食貨志「私家多一一」

【鎔和】とかしまぜる。

【鎌】 レン 鹽 又、鐮に作る

かま(鍥)草を刈る彎狀の刃もの「利一」韓愈詩「晴雲如擘絮、新月似磨一」

【鎌刃】かまの刃先。春渚紀聞「鎌取馬草歸、一一透成金色、或以爲草然」

【鎌府】國鎌倉の雅名、源頼朝霸府を此地に創めし故。

【鎌利】かまの如くするどし。黃庭堅文「學此書、好作芒角一一」

【鎹】 〔國字〕

かすがひ(鎹)兩材を接合せしむる爲めに打ちつける二脚の釘。

十一畫

【鏖】 アウ オウ 豪

○みなごろし、盡く人を殺す、苦戰して多く殺す。○かまびすし(諠譁)黃庭堅詩「市聲一午枕」

【鏖糟】○俗語にて鏖殺の義。漢書、霍去病傳、註「世俗謂盡死殺人曰一一」○俗語にて不潔猥冗の義、齷齪の轉音か。書言故事「俗言齷齪一一鄙俚」東坡戲程頤曰、頤可謂一一鄙俚叔孫通、聞者笑之」一解に執拗にして氣を生ずるをいふ〔吳下方言考〕

【鏖殺】みなごろしにす。

【鏖戰】敵をみなごろしにするまで大いに戰ふ。唐書、王翃傳「引兵三千、與賊一一」

【鏗】 カウ 庚

○金石の鳴る聲。禮、樂記「鐘聲一」○琴の聲。○つく(撞擊)楚辭、招魂「一鐘搖簴」○彭一は古の仙人。彭祖、一は其の名、姓は籛。

【鏗鏗】○鏗戛に同じ。禮、樂記、疏「金鐘之聲、一一然」○言語の明確なる形容。後漢書、楊政傳「說經一一楊子行」

【鏗戛】金石又は琴などの聲、戛は鏘ス＝鏗鏘。

【鏗鏘】鏗戛に同じ。白居易詩「繁音急節十二遍、跳珠撼玉何一一」

【鏗鎗】鏗戛に同じ。漢書、刑法志「一一鼓舞」註「一一、金石之聲」

【鏗鏘】鏗戛に同じ。禮記「君子之聽音、非聽其一一而已也」＝鏗鎗。

【鏗爾】鏗戛に同じ。論、先進「鼓琴希、一一舍瑟而作」

【鏗鍧】つりがねをつく。楚辭「一一搖簴、楔梓瑟些」

【鏗然】鏗戛に同じ。鏗鏗を見よ。

【鏊】 ガウ・ゴウ ゲウ 號 豪 嘯

やきなべ、食物をいり燒にする器。

【鏡】 ケイ キヤウ 敬

○かがみ(鑑)銅、又玻璃にて作る、物の形をうつし見る具「明一」「銅一」「粧一」「磨一」漢書、韓安國傳「清水明一、不可以形逃」○てらす(照)○あきらかにす(明)○かんがみる(鑑)明かに察する。漢書、韓安國傳「明一聖法」○めがね。○てほん、模範。○破一は父を食ふといふ獸の名。＝破獍。

【鏡影】かがみにうつるかげ。開天遺事「宋璟未第時、於日中覽鏡、一一忽成相字」

【鏡戒】かんがみいましむ。明かなるいましめ。後漢書、寇恂傳「以前人爲一一」＝鑑戒・鏡鑒。

【鏡考】他の事を借りてかんがみる。漢書、谷永傳「願陛下追觀夏商周秦所以失之、以一一已行、有不合者、臣當伏妄言之失」

【鏡匣】かがみばこ。急就篇「一一盛鏡之器」＝鏡奩。

【鏡鑒】○かがみ。袁淑文「以往古爲一一、以未來爲鍼艾」○てほん。＝龜鑑。

【鏡岩】かがみいは、鑛物の一種、其の面光りて鑑すべきもの。

【鏡花】かがみにうつりたるはな。庾信詩「日光釵焰動、窗影一一搖」

【鏡花水月】かがみに映りたる花と、水に映りたる月と。目に見ゆるも捕捉し難し、よりて詩歌などの言語を超絕したる妙趣に喩ふ。詩家直說「詩有可解不可解不必解若一一一一、勿泥其迹可也」鏡裏參看。

【鏡彩】かがみの如きひかり。唐太宗詩「魄滿桂枝圓、輪虧一一缺」

【鏡淨】かがみの如く淸くすむ。水經、注「其水澄渟、一一而不流」＝鏡淸。

【鏡水】かがみの如くすみてしづかなる水。國史補「凡造物由水土、故江東宜紗綾紙者、一一之故也」

【鏡淸】鏡淨に同じ。蘇軾詩「道人胸中水一一、萬象起滅無逃形」

【鏡臺】かがみのだい、かがみたて。北史、齊幼主紀「一一直千金」

【鏡殿】かがみを以て殿壁とする。北史、齊幼主紀「其嬪嬙諸院中起一一・寶殿・玳瑁殿」

【鏡餅】○麥と米とをまぜて鏡形に作りしもち〔對類大全〕○國圓く中高にしたる餅。神にそなへ、又、正月の儀式の飾り物とする、おそなへ。

【鏡銘】かがみのめい。玉海「王仁裕進廻文金一一」

【鏡面】かがみのおもて。洞天淸錄「久用則鋒乏、光如一一、不堪用」

【鏡裏】かがみのうち、かがみに物の映ずる所。證道歌「一一看形見不難、水中捉月爭拈得」＝鏡中。

【鏡奩】かがみばこ。後漢書、陰皇后紀「視太后一一中物、感動悲涕」

【鏡匳】前條に同じ。急就篇「一一疏比、各異工」注「一一盛鏡之器、若今之鏡匣也」＝鏡匣。

【鏁】 サ 哿

くさり、ぢやう。＝鎖。

【鏙】 サイ 灰 賄

【鏨】 サン セン 感 勘 覃 咸 琰

○のみ(小鑿)たがね、金石に書畫をほりつける小さきのみ。○石にゑる(鐫)

○まじる(錯)○雜りて文采ある貌。郭璞、江賦「鱗甲一錯」

【鏘】 シヤウ サウ 陽 庚

○一一は高き貌。又、音樂の聲。玉の聲。○玉又は鈴などの鳴るこゑ「鏗一」

【鏘鏘】○金石の聲。又、音樂の聲。又、鈴の聲。詩、大雅「八鸞一一」＝鏘然。○高き貌。後漢書、張衡傳「躋高閣之一一」

【鏘然】金石の聲。＝鏘鏘。

【鏠】 サン 潸

○かんな(鉋)木を平かにけづる鐵器。○草を除く器。○けづる。木華、海賦「一臨崖之阜陸」＝剗。○そこなひけづる(捐削)○うむ。鮑照賦「一利銅山」＝產。○一幣は古の幣名。

【鏥】

銹(金部七畫)に同じ。

【鏦】ショウ　サウ・ソウ　多　江
○ほこ（矛）小さき矟。○つきさす、矛にてつきさす（撞刺）○━錚は金屬の鳴る聲。歐陽修、秋聲賦「鏦鏦錚錚、金鐵皆鳴」

【鏚】セキ　錫
をの（斧）まさかり「━柲」＝戚。

【鏇】㊀セン　㊁セン　先　霰
㊀くるくると軸を轉じて物を裁る器。㊁ろくろ（轆轤）旋盤。回轉軸に物を取りつけて圓形の器を造る機械。

【鏩】セン　琰
━━は鋭進する貌。太玄經「鋭━━」又、火炎のもえ上る貌。太玄經「捽厥━━」

【鏃】ソク　ゾク　ソウ　屋　沃　覺
やじり、矢の根。賈誼、過秦論「秦無亡矢遺━之費」＝箭頭・矢鏑。

【鏃礪括羽】學を修め、智を研きて有用の器となる喩。家語「子路曰、南山有竹不揉自直、斬而用之、達乎犀甲、如此言之、何學之有。孔子曰、括而羽之、鏃而礪之、其入之不亦深乎」

【鏜】タウ　陽
鐘鼓の聲。詩、邶風「擊鼓其━」傳「━然、擊鼓聲也」

【鏜然】鼓をうつ聲の形容。字解參看。

【鏜鏜】○鐘鼓の聲。庾世基、講武賦「曳虹旗之正正、擬鼉鼓之━━」＝鏜然。○泛く大聲の形容。五代史「磊磊其事、━━其聲」

【鏜鞳】○波濤・瀑布などすべて大いなる聲の形容。蘇軾、石鐘山記「窾坎━━者、魏獻子之歌鐘也」○鐘鼓の盛んなる聲。入蜀記「旗幟精明、金鼓━━」

【鏑】テキ　錫
○やじり（鏃・矢鋒）○かぶらや。矢の先に蕪の球根に似たる中空の球をつけ、其の先に雁股をつけたる矢。之を發すれば鳴る「鳴━」「飛━」「鋒━」匈奴傳「作爲鳴━」＝鳴箭。

【鏌】バク　藥
━鋣は古の吳國の人の名。又其の作りし名劍の名。說苑「干將━━、此至利也」＝莫邪・鏌邪・鏌鋣・鏌釾。

【鏢】ヘウ　蕭
○こじり、刀の鞘の下端に在るかざりの金物。○しゅりけん、遠方よりなげつけて人を殺傷するに用ふる兵器。＝鑣。

【鏰】鉼（金部五畫）に同じ。

【鏠】ホウ　多　又、鋒に作る
鈷━はひのし。＝鈷鉧。

【鏊】ガウ　号
○ほこさき、きっさき（兵耑）史、東方朔傳「變詐━出、莫能窮者」○旗の名。

【鏊】ボウ　尤
かぶと（首鎧）「兜━」鍪（金部九畫）の訛字。

【鏝】マン　寒　又、墁に作る、鏝は俗字
こて（鐵杇）壁をぬる具「操━」「泥━」＝杇。

【鏝胡】ほこの一種。揚子方言「戟而無刃、東齊秦晉之閒、謂其大者曰━━」

【鏞】ヨウ　多
おほがね（大鐘）書、益稷「笙━以閒」＝庸。

【鏐】リウ　キウ　尤　尤
黃金の美なる者、即ち紫磨金。

【鏈】レン　先
○くさり（鎖）○なまりのあらがね（鉛鑛）鉛の未だ精煉せざるもの、通じて連に作る。史、貨殖傳「江南出金錫連」註「鉛未煉者」

【鏈繫】くさりにてつなぐ。

【鏈鎖】くさり。＝連鎖。

【鏤】㊀ロウ・ル　㊁ル　宥　虞
㊀ちりばむ、ゑる、金屬又は木などに種種の模樣をほりつける「━刻」「彫━」禮記「管仲━簋朱紘」○ひらく、とほす（疏通）漢書、司馬相如傳「━靈山」○はがね（剛鐵）㊁屬━は劍の名。史、吳太伯世家「賜子胥屬━之劍」

【鏤牙合子】象牙をちりばめたるふたもの。

【鏤句】巧に構へたる文句。又、巧に句を構へる。元稹文「雕詞━━」

【鏤榥】ほりきざめる美くしきひさし。晉書「玄榥━━、若臨虹之揭眉」

【鏤月裁雲】極めて巧なる細工に喩ふ。李義府詩「鏤月爲歌扇、裁雲作舞衣」

【鏤刻】ゑりきざむ。爾雅「金謂之鏤、木謂之刻」

【鏤彩】ちりばめいろどる。庾信詩「交綵結龍鳳、━━織雲霞」

【鏤山】山を開きて道を通ずる。漢書、司馬相如傳「鏤靈山」

【鏤人】三月三日の雛人形〔文昌雜錄〕

【鏤身】はだにほりものする。左思賦「雕題之士、━━之卒」＝文身・鏤膚。

【鏤塵】ちりにきざむ。不可能の事、以て勞して功なきに喩ふ。關尹子「言之如吹影、思之如━━」

【鏤板】板木に文字などをほる。板は版に通ず。宋史、眞宗紀「召近臣於龍圖閣、觀御製文詞、宰臣請━━宣布」＝鏤版。

【鏤冰】こほりにちりばむ。勞して功なきに喩ふ。鹽鐵論「內無其實而外學其文、若畫脂━━、徒費日工耳」

【鏤膚】いれずみ、肌膚を刺して、丹青を涅するをいふ。左思、魏都賦「或魋結而左言、或━━而鑽髮」＝文身。

十二畫

【鏹】キャウ　養
○ぜにさし（錢貫）左思、蜀都賦「藏━巨萬」○俗白━は銀錢。

【鐍】ケツ　屑
○かけがね（紐）ぢゃう（鎖）莊、胠篋「固扃━」○轉じて樞要の義「━鑰」○舌ある環。＝觼。○日旁の氛氣。

【鏽】シウ　シュク　宥　屋
さび、鐵の上の衣。＝銹。

【鏽澀】さびてざらざらする。李綱詩「鐵花━━蒼蘚痕」

【鐔】シン・ジン　タン　侵　覃　感
○劍のつかがしら、つるぎのわがね（劍珥）つば（劍口）刀劍の身とつかとの界にはめて手を保護するわがね「劍━」○兵器の一、劍に似て小なるもの。漢書、韓延壽傳「鑄作刀劍鉤━」

【鐘】ショウ　冬　古、鍾と通用す
○かね、つりがね「━鼓」○時を報ずるかね「點━」「午━」「晨━」「晚━」○黃━は陰曆の十二月。夾━は二月。林━は六月。應━は十月の律の名。轉じて各其の月の異名とす。

【聞鐘爲日】敎の義理をとり違へて悟るに喩ふ。蘇軾、日喩「生而眇者不識日、問之有目者、或告之曰、日之狀如銅槃、扣槃而得其聲、他日聞鐘以爲日也」

【鐘磬】つりがねと磬と。史、平原君傳「民困兵盡、或剡木爲矛矢、而君器物━━自若」

【鐘鼓】かねと、つづみと。詩、周南「━━樂之」

【鐘鼓之樂】音樂のたのしみ。賈誼文「乏二━━、勿爲可也」

【鐘笙】かねの聲と笙のふえの聲と。周禮「凡祭祀鄉射共其━━」

【鐘聲】つりがねの聲。禮、樂記「君子聽━━、則思武臣」

【鐘鐸】つりがねと、おほすずと。拾遺記「䗛澤出精銅、可爲━━」

【鐘鼎】かねと、かなへと。魏志、鍾繇傳、注「以功德勒名━━」＝鼎鐘。

【鐘鳴漏盡】時を報ずるかねが鳴りて水時計の水が盡きる、殘年の幾何もなき喩。魏志、田豫傳「年過七十而以居位、譬猶━━而夜行不休、是罪人也」

【鐘鎛】大いなるつりがねと、小さきつりがねと。韓曜詩「━━陶匏聲殷地」

【鐘表】俗時計「━━匠」「━━舖」

【鐘銘】つりがねのめい。金石錄「天寶三載、明皐撰眞源觀━━」

【鐘鳴鼎食】鐘をならして家人をあつめ、鼎を竝べて食ふ。富貴の人の生活をいふ。王勃、滕王閣序「━━之家」＝擊鐘鼎食〔張衡賦〕

【鐘樓】かねつきだう、つりがねをかける樓。戴復古詩「老僧相對倚━━」

【鐎】セウ　蕭
○なべ。○銚に似て物を溫むる器、刁斗の類「━斗」

【鐏】ソン　サン　願　旱
いしづき。槍・矛等の柄の下端にはめたる圓錐形の金具（平かなるを鐓といふ）

【鐓】タイ　トン　隊　元　タン　翰

いしづき、矛などの下端にはめたる平底の金具。錞（前條）參看。

【鐃】 ㊀ダウ・ネウ ㊁ダウ 肴 效

㊀ぢんがね、どら（小鉦）陣中にて用ふる小さき銅鑼○奏樂に用ふるねうばち「―鈸」○さわがし。譊に通ず。㊁たわむ。莊、天道「萬物無ㇾ足ㇾ以ㇾ」心者」＝撓。

【鐃歌】ダウカ ○軍樂。漢鐃歌十八曲あり。○かねを鳴らしうたふ。李白詩「――列騎吹、颯沓引二公卿一」＝鐃吹。

【鐃管】ダウクワン ねうはちと、ふえと。梁元帝詩「山虛和二――一、水靜瀉二樓船一」

【鐃吹】ダウスヰ 軍樂。梁簡文詩「――雜二還風一」＝鐃歌・鼓吹曲。

【鐃鈸】ネウハチ 佛樂器の名。銅にて作り、形鉢の如く、兩手に一面づつ持ち、相觸れしめて鳴らす。倫史略「初集鳴二――一、唱佛歌讚」＝銅鈸。

【鐙】 ㊀トウ ㊁トウ 徑 蒸

㊀あぶみ。馬具の一、馬腹の兩側につるして乘者の足をかけるもの「鞍―」㊁ひともしざら。○轉じてともしび。白居易詩「蘆荻花中一點―」＝燈。○やきもののたかつき（瓦登）「瓦―」＝登。

【鐖】 ハツ 曷

○かま（鎌）兩刃にて木の柄をすげたる鎌、草を刈る具。○かる（刈）

【鐷】 ボク 沃

づく（生鐵）あらがね。

【鐐】 ㊀レウ ㊁ラウ レウ 蕭 號 嘯

㊀美くしき銀。㊁美くしき金。

【鐚】 ワ ア 麻

○しころ。＝錏。○國びた、質の惡しき錢。

十三畫

【鐻】 ㊀キョ ㊁キョ 語 御

㊀かねかけ、鐘鼓を懸ける柎（臺の足）史、始皇紀「收二天下兵一聚二之咸陽一銷以爲二鐘―一」＝簴。㊁夾鍾に似たる一種の樂器、木を削りて造る。

【鐶】 クワン 删

○ゆびわ「指―」○わ、かなわ、「金―」すべて圓き輪郭ありて中に孔ありて貫き繫ぐべきもの。

【鐫】 セン 先

○ほる（鑿）ゑる（雕刻）ほりつける「雕―」○きる、うがつ（鑽）○しりぞく（謫）官吏が罪過ありて官位を降しさげられる「―級」

【鐫級】センキフ 官位の等級を下げる。正字通「中外官降級曰二――一」

【鐫金】センキン かねにほりつける。拾遺記「斫ㇾ玉―ㇾ―、其刃不ㇾ卷」

【鐫切】センセツ みがきけづる。又、深く善を責める。王安石、進說「靡礱――、泥滓灌養」

【鐫說】センセツ 鐫喩に同じ。唐書、高沐傳「李師古叛、沐引二古今成敗一前後――不ㇾ能ㇾ入」

【鐫汰】センタイ 冗官むだやくをよりわけてしりぞけ去る。揮麈後錄「官曹混亂、宜ㇾ從二――一」

【鐫黜】センチュツ 官吏が罪ありて位をさげられる。宋史、選擧志「有ㇾ犯則――」

【鐫喩】センユ 深く勸め、切にさとす。唐書「令狐楚爲二河南尹一、解二去酷烈一、以二仁惠一――、人人悅喜」

【鐫鑱】センザン ゑる。張華賦「不ㇾ屑二朱碧之飾一、助不ㇾ煩二錐鋒之――一」

【鐺】 ㊀タウ ㊁サウ 陽 庚

㊀鋃―ラウタウはくさり（鎖）鋃と鐺と相貫きて連條をなしたるもの。○轉じて、重くして容易に擧げ難き貌。六書故「俗以二困重不ㇾ擧爲二鋃―一」○つづみの聲。＝鏜。㊁なべ、三足ある鍋「茶―」「破―」「藥―」「鐵―」宋史、太祖紀「鼎―猶有ㇾ耳」○國こじり（鐔）こて（鏝）

【鐺脚】サウキャク 脚のあるかなへ。唐書、武攸緒傳「所ㇾ賜金銀――野服」

【鐸】 タク 藥

○おほすず（大鈴）古、命令を發する時に鳴らして衆を警めしもの、銅にて作り、形は今のりんに似たるもの。文敎には金―木―（金口木舌）武事には金―（金口金舌）を振る。論、八佾「天將ㇾ以二夫子一爲二木―一」○簷につるすすず「簷―」＝占風鐸。

【鐸鈴】タクレイ すず。孟郊詩「冰齒相磨囓、風音酸二――一」＝鈴鐸。

【鐲】 タク ドク 覺

かね（鉦）の屬、軍中にて大鼓の聲を調節する爲めに鳴らす樂器。周禮「以二金―一節ㇾ鼓」

【鐵】 テツ テチ 屑 銕は古字 鉄は誤字

○くろがね（黑金）色黑く質堅く種種の刃物又器具に作る「精―」○かなもの。○―の如く黑き色「―驪」「―驌」○―の如く堅くして屈せざるものに喩ふ「―腸」「―漢」「―石心」○はもの、武器「寸―」「尺―」

【鐵鞋】テツアイ 鐵にて造れる草鞋。拍案驚奇「踏二破――一無二覓處一、得來全不ㇾ費二工夫一」

【鐵案】テツアン たしかにして動かざる意見。

【鐵衣】テツイ ○よろひ。木蘭歌「朔氣傳二金柝一、寒光照二――一」＝鐵甲。○てつのさび。本草「鐵鏽、釋名――」

【鐵鉞】テツエツ てつにて造りたるまさかり。新序「雖ㇾ有二――湯鑊之誅一、而不ㇾ懼也」

【鐵葉】テツエフ ○うすき鐵片「唐書、食貨志」○國ぶりき。錫を塗りたるうすき鐵板。

【點ㇾ鐵成ㇾ金】テツヲテンジテキントナス 鐵を點化して黃金と爲す、前人の語を活用して傑作となす喩。聞見後錄「黃魯直稱、杜老詩如二靈丹一粒點ㇾ鐵成ㇾ金」

【鐵鎧】テツガイ てつのよろひ。周書、武帝紀「白蘭遣ㇾ使貢二犀甲――一」＝鐵甲。

【鐵甲】テツカフ ○鐵製のよろひ。庾信、紇干弘神道碑「太祖以二自著――一賜ㇾ公」＝鐵衣。○臺灣語にて鯵アヂ

【鐵漢】テツカン 剛直にして撓まざる男、李遵勗が宋の太祖に褒められたる語〔駭聞錄〕

【鐵艦】テツカン 鐵をよそほひたるいくさぶね。＝甲鐵艦。

【鐵肝御史】テツカンギョシ 心の強くして屈せざる御史、宋の錢顗の稱。宋史、錢顗傳「家貧母老、至下丐二貸親舊一以給中朝晡上、而怡然無二謫官之色一、蘇軾遺以ㇾ詩、有二烏府先生鐵作ㇾ肝之句一、世因目爲二――一」

【鐵騎】テツキ ○馬に甲をよろひたる騎兵〔後漢書、公孫瓚傳〕○強悍なる軍馬。宋書、孔覬傳「――連羣、風驅電邁」

【鐵牛】テツギウ てつのうし。中華古今注「陝州有二――一廟、牛頭在二河南一、尾在二河北一、禹以鎭二河患一、賈至有二――頌一」蘇軾詩「誰能如二――一、橫ㇾ身負二黃河一」

【鐵器時代】テツキジダイ 人文進步上の一時期。最も多く鐵を利用せし時代。銅器時代の次。

【鐵鏡】テツキヤウ てつにて造れるかがみ。九國志「蜀王宗壽得二――一、晦不ㇾ可ㇾ覩」

【鐵鋸】テツキョ のこぎり。南越志「鋸魚左右如二――一」

【鐵火】テツクワ ○てつのあかく熱せしもの。○彈丸の火。

【鐵郭】テツクワク てがたき外城クヮイワウ。易林「金城――、上下同ㇾ力」

【鐵鑊】テツクワク 鐵の足なき大鼎。肉又は魚などを煮るに用ふ。古は罪人を煮殺するにも用ふ。南史、侯景傳「以二大――一、盛ㇾ油煎二殺之一」

【鐵管】テツクワン てつのくだ「水道――」

【鐵橋】テツケウ 雲南省中甸縣の地名。舊唐書、德宗紀「貞元十年三月、南詔異牟尋攻二吐蕃一――已東、城壘二十六、擒二其王五人一」

【鐵血】テツケツ 兵器と兵士のちしほと。

【鐵血政略】テツケツセイリヤク 黑鐵と赤血と。兵力によりて國威を張る政略。

【鐵券】テツケン てつにてつくりしふだ、古、天子が功臣に賜ひし割符の一。丹にて其の人の功績を記せしもの。史、高帝紀「與二功臣一剖ㇾ符作ㇾ誓、丹書――、金匱石室藏二之宗廟一」

【鐵拳】テツケン 固きにぎりこぶし、げんこつ。

【鐵堅】テツケン てつの如くかたし。杜本詩「爲ㇾ道有ㇾ心如ㇾ――」

【鐵硯】テツケン てつにて造りたるすずり。次條參看。

【鐵硯未ㇾ穿】テツケンイマダウガタズ 志を堅くして業を改めざるをいふ。書言故事「桑維翰、或令三其改二業、維翰鑄二鐵硯一、以示ㇾ人曰、硯穿則易二他業一、卒以二進士一及第」

【鐵劍】テツケン 鐵づくりの劍。史、范雎傳「楚之――利、而倡優拙」

【鐵鉤索】テツコウサク てつにて作りしかぎあるなは。

【鐵骨】テツコツ 建築物の主要部に鐵材を用ひしもの。

【鐵鎖】テツサ てつのくさり、鎖は鏁に同じ。晉書、王濬傳「以二――一橫截ㇾ之」

【鐵窗】テツサウ ○てつがうしのまど。○らうや、獄窗。鐵格子をはめたる故。

【鐵像】テツザウ てつにて造りたる像。舊唐書、武宗紀「其――委二本州一鑄爲二農器一」

【鐵鐺】テツサウ てつにて造れるなべ。談藪「出ㇾ酒以二――一溫ㇾ之」

【鐵柵】テツサク 鐵にてつくりたるしがらみ、てつやらい。

【鐵鑕】テツシツ ○てつのきりだい。後漢書、董卓傳「帶二――一詣ㇾ闕上書」○星の名。晉書、天文志「――星主二誅斬一」

【鐵十字】テツジフジ 船のいかり。圖青日札「――卽鐵錨、所二以矴一ㇾ船」

【鐵蒺藜】テツシツレイ ひし形の尖りたる鐵、地上に立てて、敵の侵入を防ぐ具、蒺藜はもと草の名。和名はまびし、

其の實莢に似たり、故に名づく。六韜「狹路微徑、張二ーーー一」

【鐵心石腸】志堅くして外物に動かされざるをいふ。蘇軾、與二李公擇一書「僕本以二ーーーー一待レ公」

【鐵鍼】てつのはり。漢書、廣川王越傳「昭平不レ服、以二ーー一鍼レ之」

【鐵城】てがたきしろ。世說「湯池ーー無三可二攻之勢一」

【鐵漿】○生鐵を水に浸し、久しきを經たるしる、黑色の染料とす〔本草〕○國おはぐろ、かね。

【鐵楯】てつにて造りたるたて。楯は盾。梁書、元帝紀「突騎短兵、犀函ーー、結隊千羣、持戟百萬」

【磨二鐵杵一】鐵のきねを砥石にて磨ぎて針と爲す、專心業を勤むる喩。唐書「李白、少年學業未レ成、棄歸、道逢三一嫗磨二鐵杵一、白問レ之、嫗曰、欲レ作レ鍼、白感二其言一、遂還卒レ業」

【鐵石】○てつと、いしと。○堅くして變らざる喩。晉書、忠義傳、序「守二ーー之深衷一、厲二松柏之雅操一」

【鐵扇】てつの骨のあふぎ。

【鐵船】てつにて造りたる重きふね。九國志「吏云、此猶下造二ーー一渡上レ海」

【鐵綫】鐵のはりがね。

【鐵錢】てつにて造りしぜに。陳書、沈炯傳「ーー十萬」＝鐵貨。

【鐵鏃】てつのやのね。魏志、倭人傳「竹箭或ーー或骨鏃」

【鐵撾】てつにて造れるむち。宋史、衞融傳「元福奮二ーー一擊二契丹一」

【鐵道】汽車・電車などを走らせる鐵の軌道、レール。＝鐵路。

【鐵刀木】たがやさん。熱帶地方に產する木、材質黑褐色にして甚だ堅く貴重の什器を造るに用ふ。天工開物「唯舵桿、必用二ーーー一」

【鐵搭】鐵のくまで。三才圖會「ーー或四齒或六齒」

【鐵碪】鍛冶が用ふるてつの臺、かなとこ。碪は砧に同じ。瑯瑘代醉編「ーー鍛二金鐵一千年不レ毀」

【鐵杖】鐵のつゑ。呂覽「操二ーー一以戰」

【鐵腸石心】鐵心石腸に同じ。皮日休、桃花賦序「余嘗慕宋廣平之爲レ相、貞姿勁質剛態毅狀、疑下其鐵腸與二石心一、不上レ解レ吐二婉媚辭一、然覩二其文一而有二梅花賦一、清便富豔得二南朝徐庾體一、殊不レ類二其爲一レ人也」

【鐵柱】てつのはしら。易林「金梁ーー、十年牢固」

【鐵中錚錚】錚錚は金聲、鐵の少しく剛利なるもの。庸常の人より少しく勝れたるに喩ふ。後漢書、劉盆子傳「光武帝謂二徐宣一曰、卿所謂、ーーーー、庸中佼佼者也」

【鐵筯】てつにて造りし火箸。通鑑、五代紀「以二ーー一畫レ灰爲レ字」＝鐵箸。

【鐵椎】てつにて造りたるつち。史、信陵君傳「朱亥袖二四十斤ーー一、椎二殺晉鄙一」＝鐵鎚。

【鐵蹄】○馬のかなぐつ。＝蹄鐵・馬蹄鐵。○軍馬の足。

【鐵條網】鐵の刺ある針金を網の如く張り渡し敵を防ぐもの。

【鐵兜牟】くろがねづくりの、かぶと。張蠢詩「行行ーーー、隊隊金騎駝」

【鐵如意】鐵にて作りし如意。釋氏要覽「石季倫・王敦皆執二ーーー一」

【鐵把】鐵製のくまで。＝鐵搭。

【鐵馬】○よろひたるうま。陸倕、石闕銘「ーー千羣、朱旗萬里」＝鎧馬。○風鈴の異名。孟昉、八月樂詞「風弄簷ーー」＝簷馬。

【鐵砲】武器の名、小銃。會典「虎尾ーー、石榴砲」

【鐵棒】鐵にて造れる棒。勇力者の揮ふもの。冥祥記「手把二ーー一」

【鐵幕】てつにて造りたるたてを幕の如く列ねたるもの。史、蘇秦傳「當レ敵則斬二堅甲ーー一」

【鐵鉢】てつにて造りたる僧の食器。戴叔倫詩「木杯能渡レ水、ーー肯降レ龍」

【鐵筆】○ほりもの用の小刀。＝刻刀。○ほりもの、彫刻・印刻。○國謄寫版用の筆「ーー版」

【鐵浮圖】金の太祖の次子兀朮の兵士の稱。重き鎧を被るが故。宋史、劉錡傳「兵皆重二鎧甲一、號二ーーー一」

【鐵瓶】○鐵製のかめ。貫休詩「深爐燒二ーー一」○てつにて造りし湯わかし。

【鐵壁】てつにて造りたるてがたきとりで。徐積詩「金城不レ可レ破、ーー不レ可レ奪」

【鐵面】○公直にして權勢をも畏れざる人を譽めていふ。宋史、趙抃傳「爲二殿中侍御史一、彈劾不レ避二權倖一、京師目爲二ーー御史一」○てつのめん。晉書、朱伺傳「夏口之戰、伺用二ーー一自衞」○あつかまし。鐵面皮の略。

【鐵面倘書】硯の異名。

【鐵面皮】あつかまし、厚顏にして恥を知らざるものをいふ。北夢瑣言「進士王光遠干二索權豪一、無レ厭、或遭二撻辱一、略無二改悔一、時人云、光遠顏厚如二十重鐵甲一」

【鐵門】くろがねのもん。蘇軾詩「蒸土爲レ城鐵作レ門」

【鐵驪】くろうま。禮、月令「仲冬之月、天子駕二ーー一」

【鐵路】鐵道に同じ。

【鎊】鎊（金部十一畫）の俗字。

【鐳】ライ 灰

○かめ（瓶）○つぼ（壺）○ー柚

ライイウは橘の大いなるもの。本草「最大者謂二之香欒一、廣雅謂二之ー柚一」

【鑘】鑄（本頁二段）に同じ。

【鐮】鎌（金部十畫）に同じ。

十四畫

【鑑】カン 陷 又、鑒に作る

○かがみ（鏡）物體の象をうつす鏡。左、莊二一「王以二后之鞶ー一予レ之」○みわける（觀察）○かんがへ、かんがへる（考察）○てらす（照）左、昭二八「光可二以ーー一」○みる（觀）うつして觀る。莊子「仲尼曰、人莫レー二于流水一而ー二于止水一」○いましめ（戒）古今の成敗を觀て法戒と爲すもの、かんがみ「明ー」「前ー」大學「殷ー不レ遠」監に通ず。○のり（法）てほん（模範）てほんとする「龜ー」

【鑑戒】かんがみて戒とする。後漢書、梁后紀「后常以二列女圖畫一、置二於左右一、以自ーー」＝鑒戒・監戒・鏡戒・法戒。

【鑑識】善惡のみわけする。又めきき。鑑一に鑒に作る。晉書、王充傳「王戎有二人倫鑒識一、常目二山濤一、如二璞玉渾金一、人皆欽二其寶一、莫レ知二其器一」＝鑑定。

【鑑定】善惡をめききして定める。＝鑑識。

【鑑定人】裁判所にて學識技藝ある者をして事物をめききせしむる人、醫師をして犯人に精神病の有無を檢せしむる類。

【鑑銘】かがみのめい。大戴禮「武王ーー、見二爾前一慮二爾後一」

【鑒】鑑（前條）に同じ。

【奪レ鑒】鑒は鏡、自ら照しみる鏡を奪はれる。人の本心を喪ふをいふ。左、僖二「是天奪二之鑒一而益二其疾一也」

【鑒機】機微をみわける。晉書、載記「苻堅曰、燕實可レ圖、ーレー識レ變、惟皐甫眞耳」＝鏡機。

【鑒悟】智明かにさとし。北史、陸通傳論「ーー明敏、飾レ之以二溫恭一」

【鑒止】かんがみる。宋史、樂志「何以致レ祥、上天ーー」

【鑒念】かんがみおもふ。後漢書、楊終傳「ーー二前世一、可レ爲二寒心一」

【鑊】クヮク 藥

おほがなへ。足なき大鼎、肉・魚などを煮る器。又、古かまいりの刑に用ふ「湯ー」「斧ー」文天祥、正氣歌「鼎ー甘如レ飴」

【鑊亨】かまに入れてにる刑。亨は烹。漢書、刑法志「有二鑿顚抽脅ーー之刑一」

【鑄】シュ シウ 遇 通音 チウ 宥

いる。金屬を鎔かして型に流し込みて器物をつくる「改ー」「陶ー」「鼓ー」「鎔ー」左、宣三「ー鼎象物」

【鑄金】かねをいる。吳越春秋「ーレー象二范蠡之形一」

【鑄型】いがた。＝鎔。

【鑄造】金屬をいて器をつくる。

【鑄山煮海】山の銅を採りて錢を鑄、海水を煮て鹽を造る、鑄レ山煮レ海（五四〇頁四段）を見よ。

【鑄鉏】鐵をいてすきをつくる。易林「銷レ鋒ーレー、縱レ牛放レ馬」

【鑄人】人才を養成する義。揚子法言「或問、世言レ鑄レ金、金可レ鑄與、曰、吾聞觀二君子者一、問レーー、不レ問レ鑄レ金、或曰、人可レ鑄歟、曰、孔子鑄二顏淵一矣」＝陶二鑄人才一。

【鑄錢】ぜにをいる。漢書、食貨志「卽二多銅山一而ーレー」

【鑄鍛】いると、きたへると。拾遺記「不レ雨而雷、言二其ーー之聲盛一也」

【鑄鐵】づく、づくてつ。＝生鐵・銑鐵。

【鑄銅】あかがねをいる。庾信賦「南柀則ーレー爲レ柱」

【鑄幣】金をいて貨幣をつくる。管子「湯以二莊山之金一ーレー」

【鑄鎔】いりとかす。范仲淹詩「六經方ーー」＝鎔鑄。

【鑯】鐵（金部十三畫）の古字。

【鑓】〔國字〕やり（槍）

十五畫

【鑛】クヮウ 梗 又、礦に作る

あらがね（金璞）山より掘り出したるままの金屬にて未だ鎔錬を經ざる者「ー石」「ー物」王褒、四子講德論「精鍊藏二於ー朴一」

【鑛區】政府より鑛物の採掘を許されたる區域。

【鑛泉】鑛物質を含有するいづみ。

【鑛毒】鑛山の採鑛又は製煉などによりて生ずる害毒。

【鑛夫】かねほり。採鑛夫・坑夫。

【鑛脈】鑛物の地中にあるすぢ道。

【鑽】鑽（金部十九畫）の俗字。

【鑕】シツ 質 古、質に作る
○かなとこ(鐵碪)かぢやが金屬をのせてきたへる臺「砧―」○をの(斧)臺にするつけて刃を上に向けたるもの。鈇即ち上の刃と合せはさみて人又は物を斬る。古、刑を行ふ具の一。公羊、襄二七「執二鈇―一」

【鑠】シャク 藥
○とかす(銷)けす、火にて金屬を銷す。史、張儀傳「衆口―レ金」○轉じてひろく消損の義。孟、告子「仁義禮智、非三由レ外―二我也一」○とく、とらける。○うつくし(美)「―金」○する(摩)○あきらか(昭)○かがやく(輝)○矍―は老いて強壯なる貌。
【鑠膠】にかはをとかす。淮南子「以レ冬―レ膠、以レ夏造レ冰」
【鑠金】○金をとらかす。周禮「―レ金以爲レ刃、凝レ土以爲レ器」○美くしき金。史、李斯傳「――百鎰」註「――、美也」
【鑠鑠】光明なる貌。何晏、景福殿賦「故其華表則鎬鎬――」
【鑠石流金】暑氣の甚だしきにいふ。淮南子「大熱――、火弗三爲益二其烈一」

【鑣】ヘウ 蕭
○くつわ(馬銜)馬の勒の兩端につける鐵のわ。○――は盛んなる貌。詩、衛風「朱幩――」

【鑞】ラフ ロフ 合
白―は鉛と錫とを合せたる金屬。

【鑢】リョ ロ 御
○やすり(錯刀)骨角・銅鐵を磋くに用ふる具。○みがく(磨)する。○みがきをさむ(磨治)

十六畫

【鑪】ロ 虞 又、爐に作る
○ひどこ(火牀)ひばち(火函・火爐)ゐろり。=爐。○さかみせ(酒肆)史、司馬相如傳「令下文君當上レ―」酒賣場、土を累ねてゐろりの如き形に構造するゆゑの稱。=盧・鑪。○かうろ(香器)
【鑪捶】鑄りて作り成す。陶鑄と同義。捶一に錘に作る。劉峻文「雕二刻百工一、―二萬物一」
【鑪橐】ふいがう。淮南子「――埵坊設非、巧冶不レ能二以治一レ金」

十七畫

【鑱】㊀サン 咸 ㊁サン 陷
㊀はり、療治に用ふる石の針。史、扁鵲傳「―石橋引」○さす(刺)○きざむ(刻)○すきのは(犂鐵)藥草の根を掘る用具。杜甫詩「長―長―白木柄」○くすりなべ「藥―」㊁土をほる具。

【鑲】ジャウ 陽
○いがたのなかみ。鑄型の空所をつくる爲めに嵌め込むもの。○はめこむ、嵌入する。
【鑲牙】いればの。=義齒・補牙。

【鑮】ハク 藥
○おほがね(大鐘)○すき(鋤)=鎛。

【鑰】ヤク 藥
○ぢやう。籥に通ず「管―」「關―」「鎖―」「禁―」抱朴子「堅二玉―於命門一」○とづ(閉)「緘―」○いる(入)淮南子「排二閶闔一―二天門一」○事の樞要に喩ふ。
【鑰匣】ちやうを入れる箱。宋史、河渠志「掌二――一」
【鑰匙】ちやうと鍵と。朝野僉載「牢掌二――一、賊來索、愼勿レ與」=鑰牡。
【鑰牡】前條に同じ。宋書、藝法興傳「臨レ死封二閉庫藏一使三家人謹錄二――一」=牡鑰。

十八畫

【鑵】クワン 翰 俗に罐と混用す
○つるべ(釣瓶)水を汲む器。國○藥―は銅又は眞鍮製の湯を沸す瓶、もと藥をにるに用ふ。○かま。蒸氣機關の釜「汽―」○ブリキの箱「―詰」

【鑷】デフ 葉 又、鉆に作る
○けぬき、はさみて毛髪を抜き取る器「―子」「銅―」雲仙雜記「王僧虔、晩年惡二白髮一、一日對レ客、左右進二銅―一、僧虔曰、却二老先生至矣一」○くぎぬき。○はさみとる、けぬきにて毛髪を抜き去る。李商隱詩「羞レ―鏡中

絲一」○かんざし(首飾)の類。
【鑷髮】けぬきにて髮をぬき去る。司空圖、寓筆詩「年年――到二花飄一、依レ舊花繁髮易レ彫」

十九畫

【鑿】㊀サク 藥 ㊁サウ 號
㊀のみ(鑿)木材に穴をあける具「斧―」「槌―」「鋸―」○あなほる、うがつ(穿)「刻―」「剳―」○いれずみ(黥刑)漢書、刑法志「其次用二鑽―一」註「―、黥刑也」○ひらく(開疏)「開―」「疏―」○つくる、もくろむ(造意)無理に理窟をつける。意を恣にして義理に合ふを求めず。漢書、禮樂志「以レ意穿―」○――は鮮明なる貌。詩、唐風「白石――」○しらげる、米を舂きて白くする。左、桓二「粢食不レ―」㊁あな(孔)
【鑿飲耕食】鑿井を見よ。
【鑿開】ほりひらく。羅鄴詩「古宮荒井曾平後、見說耕人又――」=開鑿。
【鑿漑】みぞをほりて田に水をそそぐ。魏志、陳登傳、注「乃巡二土地之宜一、盡二――之利一、秔稻豐積」
【鑿空】あなをうがつ。空は孔。新らしき道路を通ずる義。漢書、張騫傳「於レ是西北國始通二於漢一矣、然騫――」
【鑿掘】うがちほる。論衡「銅錫未レ採、在二衆石之間一、工師――」
【鑿窾】あなをうがつ。宋濂詩「―レ―塡レ金文絢爛」
【鑿竅】あなをほりうがつ。獨孤鉉賦「方―二―于夫子之墻一」
【鑿穴】あなをほる。後漢書、臺佟傳「佟隱二于武安山一、―レ―爲レ居、采レ藥自業」=穿穴。
【鑿鑿】鮮明なる貌。詩、唐風「揚之水、白石――」
【鑿牆】かきをうがつ。易林「穿レ窒―レ―、不レ直生レ訟」
【鑿井】ゐどをほる。帝王世紀「帝堯之世、天下太和、百姓無レ事、有二八九十老人一、擊レ壤而歌、歌曰、日出而作、日入而息、―レ―而飲、耕レ田而食、帝力于レ我何有哉」
【鑿枘】枘(九二二頁四段)の字解を見よ。
【鑿川】かはをほりわる。西京雜記「會稽人、顧翱事レ母至孝、母好レ食二雕胡飯一、導レ水―レ―、自種供養、家近二太湖一、湖中後生二雕胡一、無二復餘草一」
【鑿泉】いづみをほる。蘇軾詩「聚レ糞西垣下、―レ―東垣限」
【鑿船】ふねに穴をあける。周書、蕭詧傳「乃―レ―沈レ米、斬レ纜而歸」
【鑿窒】ふさがれるをうがち通ずる。王令詩「耕レ荒食二新收一、―レ―復二舊貫一」
【鑿竇】水のみちをうがつ。淮南子「猶二抱レ薪而救レ火、―レ―而出一レ水」
【鑿破】きりひらく。水經、注「始皇發レ民、――此岡一」
【鑿八】二割べり。事文類聚「――謂下礪二米一石一舂得中八斗上」
【鑿壁讀書】前漢の匡衡が家貧しく、鄰舍の壁を鑿ち燈光を引きて書を讀みたる故事。衡、字は稚圭、東海丞の人、元帝の時に丞相に至る。西京雜記「匡衡勤レ學、無レ燭、鄰舍有レ燭而不レ逮、衡乃穿レ壁引二其光一而讀レ之」
【鑿米】しらげたるこめ、白米。
【鑿落】酒器なり。盞の類、落一に絡に作る。韓愈詩「渾髮解二兜鍪一、酡顏傾二――一」

【鑽】㊀サン 寒 ㊁サン 翰 鑚は俗字
㊀きる(斬)○あしきる(臏刑)其の臏骨を―去する。○やじり(鏃)○ほこ(矛)○たがね・のみの類。○さす(刺)○きりもみする、錐にて穴をあける。○物事の義理を深く究める「研―」論、子罕「仰レ之彌高、―レ之彌堅」○金剛―は金剛石。又其の質の劣れるもの。㊁孔を穿つ器、きり(錐)みつめぎり。
同訓異義 鑽・斬・斫・翦・截・切・伐の別は斬(八三〇頁三段)の條を見よ。
【鑽仰】聖人の道德の高遠にして仰ぎたふとぶべき義。論、子罕「顏淵喟然歎曰、仰レ之彌高、鑽レ之彌堅」柳貫詩「――嗌二高堅一」
【鑽レ火得レ冰】因果の相反する喩、必ず無きをいふ。法苑珠林「未レ見二――、種レ豆得一レ麥」
【鑽刓】きりけづる。揭傒民詩「如何百年後、雕鑿加二――一」
【鑽研】きりみがく。後漢書、鄭康成傳「以レ書戒レ子曰、君子之道、――勿レ替、敬二愼威儀一、以近二有德一」江總詩「三寫徧――、六書多補益」=研鑽。
【鑽堅】かたきをきる。深く義理を研究する。鑽仰參看。
【鑽笮】臏刑と黥刑と。晉語「中刑用二刀鋸一、其次用二――一」
【鑽レ燧】木に穴をあけて、すりもみて火をとる。論、陽貨「――改レ火」
【鑽石】金剛石の劣れるもの、雕刻及玻璃を切るに用ふ。=金剛鑽。
【鑽木】古、木を穿ちすりもみて火を取る。關尹子「形之所二自生一者如二――得一レ火」
【鑽摩】きりみがく。宋濂文「辛勤――、不レ爲レ不レ久」

【鑽味】義理をきはめあぢはふ。梁元帝文「加以下ー二ー微言一研中精至道上」

【鑽離栄】倫家にて雞の異名〔東坡志林〕水稜花（一〇四二頁一段）參看。

【鑼】ラ　歌

どら（鉦）銅にて造りし銅盤、邊に二孔を穿ち、繩を結び、提げて之を撃ち鳴らす「銅ー」

【鑾】ラン　寒　通じて鸞に作る

天子の馬車の銜につける鈴、鸞鳥の和鳴に象る。轉じて天子の車駕をいふ「ー輿」「保ー」「陪ー」「駐ー」李賀詩「隨ーー鳴玉珂」

【鑾駕】鑾輿に同じ。齊書、王懿傳「ーー紆覽、四時臨閲」

【鑾和】天子の馬車につけたる鈴、鑾は衡、和は軾に在り。周禮、大馭「以ーーー爲節」＝鸞和。

【鑾旆】鑾鈴のつきたるはた。王儉文「澄金波而映ーー」＝鑾旗。

【鑾輿】天子の馬車。字解參看。班固、西都賦「乘ーー分備法駕」＝鑾輦・鑾輅・鑾駕。

【鑾鈴】天子の車のすず。崔豹、古今注「鸞口銜鈴、故謂之ーー、今或爲鑾、或爲鸞」

【鑾輅】前條に同じ。江總詩「翠渚還ーー」に鸞路に作る。禮、月令「孟春乘鸞路」

二十畫

【钁】クヮク　藥

おほぐは（大鉏）荒穢地を開くに用ふ。

【钁臿】大いなるすき。淮南、精神訓「負ーー」

廿一畫

【钃】ショク チョク　沃　もと斸に作る

○すき（鉏）○すきにて除き取る、草木の根を誅除する。

長部（镸）

【長】㊀チャウ　㊁チャウ　㊂チャウ　陽漾養

㊀ながし。短の對。孟、滕文公「絕ー補短」たけたかし。○おくふかし。○ひさし（久）時が久し。詩、秦風「道阻且ー」○つね（常）とこしなへ、いつまでも。陶潛、歸去來辭「門雖設而ー關」○おほいなり（大）南史、宗愨傳「願乘長風破萬里浪」○まさる、すぐれる、善し「ー所」晉書、欒廣傳「論人先稱其所ー」○ー庚は太白星。㊁ながさ、たけ。論、鄕黨「ー一身有半」○あまる（餘）あまり（剩）○むだ（冗）「ー物」「冗ー」㊂はじめ（孟）○そうりゃう（嫡首）○をさ、かしら（首領）「村ー」「社ー」「ー官」○としかさ（高齒）としうへ「年ー」「ー老」孟、萬章「不挾ー」○としより（老年）○年がたける。年をとる。孟、告子「鄕人ー於伯兄一歲」○すすむ（進）易、泰卦「君子道ー」○おひたつ、そだてる、やしなふ「ー養」○おとな（成人）○めうへ（尊上）○さかんなり（盛）○つむ（積）ます（益）

同訓異義　長・永・脩○長は短の反、義廣し、形又は時の長短などに皆用ふ。漢書「尺有所短、寸有所長」○永は形のながきには用ひず、時の長きなり、江流永といへば形の長きをいふにあらず、流れの永くいつまでも絕えざるをいふ、永久・永年・永夜・永訣と連用す。○脩は長也、すらりと、たけの長きなり、脩竹はながき竹、脩尾はながき尾なり、長くして末の細き意あり。

【長安】古の都城、漢のーー故城は惠帝の時築く、今の陝西省ーー縣の西北に在り〔寰宇記〕

【長安似奕棊】王者興亡の頻繁なるを奕棊の勝敗常なきに喩ふ。杜甫、秋興八首「聞道ーーーー」

【長安居大不易】都會は物價高くして暮し難し。全唐詩話「白居易未冠、以文謁顧況、況覩姓名熟視曰、長安米貴、居大不易」居易の名によりて戲語せしなり。

【長衣】うらなひする人のきる服。禮記「巫史練冠ーー以篋」

【長圍】○ながくつづきたるかこひ。南史、張邵傳「築ーー」○合圍して敵を苦める。南史、宋高祖紀「設ーーー以守之」

【長圍之策】敵を長くかこみて兵糧ぜめにするはかりごと。

【長育】そだてる。左傳「爲溫惠和以效天之生殖ーー」

【長揖】人に對する敬禮の一、手を胸の邊に當つるを揖といひ、上より下へ撫で極まるをーーといふ。漢書、酈生傳「ーー不拜」

【長印】くゎんばう（關防）

【長榮】いつまでもさかえる。史、滑稽傳「澤及後世、子孫ーー」

【長銳】ながくしてするどし。急

就篇、注「蓼有數種、葉ーー而薄、生于水中者、曰水蓼」

【長贏】夏の異稱。爾雅、釋天「春爲發生、夏爲ーー」贏一に嬴に作る。

【長幼之序】年長者と年少者との次序。五倫（八六頁四段）參看。

【長烟】ながくたなびくけむり。沈約詩「ーー引輕素」

【長遠】ながくとほし。蔡邕文「巴土ーー、江山修隔」

【長憶】ながくいつまでもおもふ。姚合詩「ーー青山下、深居遂性情」＝長想。

【不挾長】人に向ひて我が才智技藝を恃みて鼻に掛けず。孟、萬章「敢問友、孟子曰、ーーー、不挾兄弟而友」

【絕長補短】長き所を截ちて短き所を補ひ、幅員を正しくす。史、楚世家「西周之地、ーーーー、不過百里」禮、王制には絕を斷に作る。

【斷長補短】前條に同じ。禮、王制「四海之內、ーーーー、方三千里」孟子には斷を絕に作る。

【以長擊短】我が長所を以て、彼の短所をうつ。史、淮陰侯傳「善用兵者、不以短擊長、而以長擊短」

【以長補短】人の長所を見て、己の短所を補ふ。說苑「以人之長補其短、以人之厚補其薄」

【長夏】日の長きなつ。素問「岐伯曰、春勝ーー」杜甫、江村詩「清江一曲抱村流、ーー江村事事幽」

【長哦】聲をながくしてうたふ。宣和書譜「得酒輒醉酣ーー、揮洒以爲眞樂」＝長吟。

【長喙】ながきくちばし、無用の言をしゃべるにいふ。爾雅「ーー獫、短喙猲獢」

【長江】揚子江の異名。

【長江天塹】天然の要害をいふ。南史、孔範傳「ーーーー、古來限隔南北、虜軍豈能飛度」

【長庚】○よひの明星。詩、小雅「東有啓明、西有長庚」＝太白・金星。○彗星の一種、此の星見はるれば兵起るの兆とす〔史、天官書〕

【長庚星】よひの明星。唐書、白居易傳「白之生、母夢ーーー、因以命之」

【長毫】ながくして尖りたる細毛。岑參詩「兩耳生ーー」

【長號】ながくなきさけぶ。柳宗元文「每遇寒食、北向ーー、以首頓地」

【長柯斧】ながえのをの。宋書、垣護之傳「每至鐵鏁、以ーーー斷之」

【長閑】のどか。＝長閑。

【長技】すぐれたるわざ。漢書、鼂錯傳「匈奴之ーー三、中國之ーー五」

【長欷】ながくなげく。蘇軾詩「歲月一逝空ーー」

【長跪】體を伸ばしてひざまづく。古詩「ーー問故夫、新人復何如」

【長跂】あしだかぐも。長腳參看。

【長久】ながく久し。忠經「惠澤ーー、黎民咸懷」＝永久。

【長腳】あしだかぐも。詩經、疏「蠨蛸、長跂、一名ーー」＝蟢子。

【長距】ながきけづめ。西京雜記「ーー善鬬」

【曳長裾】長き裾を曳きて君門に出入する。漢書、鄒陽傳「飾固陋之心、則何王之門不可曳長裾乎」

【長吁】ふかくなげく。白居易詩「夜深吟罷一ーー」

【長驅】とほく敵をおひゆく。戰國策「輕兵銳卒、ーー至齊」

【長衢】ながきまち。白居易詩「早風吹土滿ーー」

【長裙】ながきもすそ。後漢書「獻帝時、女子婦好爲ーー而上甚短」舊唐書、輿服志「ーー廣袖、襜如翼如」

【長臥】死をいふ。論衡「夫死ーー不覺者也、安能知食」

【長官】かしらやく。唐書、蕭至忠傳「至忠曰、故事、臺無ーー、御史天子耳目也」

【長兄】○そうりゃうの兄。鶡冠子「扁鵲曰、ーー最善、中兄次之」＝伯兄。○年長者に對する敬語。

【長塹】ながきくさ。呂覽「得時之麥、ーー而短足」

【長頸】ながきくび。吳越春秋「越王爲人、ーー鳥喙、鷹視狼步、可以共患難、而不可共處樂」

【長頸鳥喙】長きくびと尖れる口と。越王句踐の人相。安樂を共にすべからざる相といふ。前條參看。

【長鯨】○おほくぢら。杜甫、飲中八仙歌「飮如ーー吸百川」＝巨鯨・修鯨。○貪りて飽くことなき惡人に喩ふ。韓世能文「ーー旣戮、封豕戢居」

【長慶子】雅樂の曲名、舞樂のをはりに奏する曲。

【長慶集】唐の白居易・元稹の二人詩を以て名を齊うし、又相友とし善し、長慶は其の詩文集俱に長慶と題す、長慶は其の編輯せし時の年號。白氏ーー七十一卷。元氏ーー六十六卷。元白二人の詩、體格相類す、世に長慶體と稱す。

【長鋏歸來乎】孟嘗君の食客、馮煖が孟嘗君の待遇に不滿をいだき、柱によりて「ーー食無魚」と歌ひたるを、孟嘗君聞きて、魚を食はしめしに、しばらくして又

「――出無車」と歌ふ、よりて車に乘らしむれば、又「――無以爲家」と歌ふ、よりて煖の老母に食用を給せしむ。此の故事に本づきて、食客などの不平を鳴らすにいふ。鋏は劍のつか（史、孟嘗君傳）
【長劍】ながきつるぎ。王維詩「慷慨倚――、高歌一送君」
【長虹】○ながきにじ。張纘賦「歕――於青霄」○長き橋に喩ふ。蘇軾詩「石橋先去踏――」
【長公主】天子の姉妹。獨斷「帝之姉妹――、儀比諸侯王」公主（一九六頁三段）參看。
【長恨歌】唐の白樂天が玄宗皇帝と楊貴妃との情事を詠じたる長篇の詩。古文眞寶に載す。
【長沙】地名、秦の郡、漢の國、今の湖南省の全部を包有す、明、府を置く、僅に湘江下流の地のみ。廣輿記「今湖廣――府、有――縣」
【長嗟】ながくためいきしてなげく。任昉詩「思君不得見、望望獨――」
【長鎖】ながきくさり。北史、張亮傳「放火船欲燒河橋、亮乃備小艇皆載――、鎖頭施釘、火船將至、卽馳小船、以釘釘之、引鎖向岸、火船不得及橋、橋全」
【長在】いつまでも存在する。王昌齡詩「年年喜見山――、日日悲看水獨流」白居易詩「萬里路――、六年今始歸」
【長齋】終年蔬食する義。南史「劉蚪精信釋氏、衣粗布、禮佛――」杜甫詩「蘇晉――繡佛前」
【長嫂】一番の兄の妻。漢書、楚元王傳「丘嫂」注「丘、大也、――稱也」
【長相思】久しく互に相思ふ。古詩「客從遠方來、遺我一書札、上言――、下言久離別」
【長策】○ながき馬のむち。賈誼、過秦論「振――而御宇內」＝長鞭。○すぐれてよきはかりごと。曹冏、六代論「覩五代之存亡、而不用其――」＝良計。
【長鑱】ながきすき。杜甫、洞谷縣歌「――白木柄、我生託子以爲命」
【長子】○そうりやうの男子。史、越世家「家有――、曰家督」○そうりやうの娘。大戴禮、本命「喪父――不取」
【長史】漢の相國丞相、又は三公の屬官。魏晉以後、王公府の屬官。後世は刺史の副官。
【長至】○冬至をいふ。御覽「冬至、日極南、影極長」○夏至をもいふ〔正字通〕
【長秋】○皇后の宮を掌る官名、中長秋ともいふ、秋は萬物成熟の初、故に名づく。古今原始「漢高祖置大長秋・中長秋・諸官官屬焉、――之名所由起也」○轉じて皇后宮の異名。＝秋宮。
【長袖】○たけながきそで。資本の多きに喩ふ。韓非、五蠹「鄙諺曰、――善舞、多錢善賈、此言多資之易爲工也」○ながそで。又、其の衣を著けたる公卿・舞妓など。梁元帝詩「――留賓待華燭」
【長史司馬】唐代の官名、州の刺史の下に一人づつ置く。
【長日】○晝の時間のながき日、夏の日。通鑑、唐宣宗紀「令狐綯擬李遠杭州刺史、上曰、吾聞遠詩云、――惟消一局棊、安能理人、綯曰、詩人託此爲高興耳、未必實然」○冬至の節。冬至以後は晝が日一日と長くなる故。禮記「郊之祭也、迎――之至也」
【長人】身のたけ高き人。史、孔子世家「孔子長九尺有六寸、皆謂之――」
【長信宮】漢の宮殿の名、太后の居る所。長樂宮中に在り。
【長者】○年より。孟、梁惠王「爲――折枝」○德の高き人。又おとなしき人。漢書、高帝紀「沛公素寬大――」○身分高き人。史、陳丞相世家「門外多有――之車轍」○かねもち。翻譯名義集「富商大賈、積財鉅萬、咸稱――」
【長者之言】溫厚篤實なる君子のことば。後漢書、朱浮傳論「朱浮譏諷背察、欲速之弊然矣、安得――哉」
【長者萬燈】長者卽ち富者が神佛に一萬の燈を獻ずるに反して、貧女はただ一燈を獻ず、されども其の志だにあらば、貧女の一燈は長者の萬燈に比するを得るなり。阿闍世王受決經「貧女一燈、――」
【長上】めうへ。又としうへ。禮、儒行「不慁君王、不累――、不閔有司、故曰儒」
【長城】○長く連れるしろ「萬里――」戰國の時、燕・趙・秦の三國、各北邊の山險に因りて――を築き以て胡戎に備ふ。秦の始皇、六國を滅し、乃ち之を首尾聯綴して、臨洮より起りて遼東に迄る。北魏・北齊より唐に及び屢修築するあり。○一國の重鎭たる人物に喩ふ。南史、檀道濟傳「濟見收、目光如炬、脫幘投地曰、乃壞汝萬里――」
【長殤】わかじに。禮、喪服傳「年十六至十九死、爲――」
【長壽】ながいき。後漢書、西南夷傳「願主――、子孫昌熾」傅休奕、菊賦「服之者――、食之者通神」＝長命・延壽。
【長鬚】○ながきひげ。○轉じてしもべの異稱。韓愈詩「一奴――不裹頭、一婢赤脚老無齒」
【長春花】薔薇の異名。

【長所】特に他人よりすぐれたる得意の點。短所の對。
【長庶】妾腹の長子。世說「桓石虔司空豁之――也」
【長松】たけたかきまつ。戰國策「荊有――文梓楩楠豫章」
【長醉】いつまでもえふ。戴叔倫詩「――非關酒、多愁不爲貧」
【長生】ながいき。老子「深根固柢、――久視之道」
【長生樹】冬青の異名。洛陽宮殿簿「明光殿前、――二株」
【長生殿】唐の華淸宮中の殿名。白居易 長恨歌「七月七日――、夜半無人私語時」
【長生藥】ながいきするくすり。白居易詩「中天或有――、下界應無不死人」
【長生不死】ながいきして死せず。前條參看。
【長征】遠方へ行く。又遠く征伐に赴く。王昌齡詩「萬里――人未還」
【長星】長き光芒ある星、彗星の類。兵亂の前兆として現るといふ。漢書、文帝紀「有――出于東方」
【長逝】○遠くゆく。曹植、七哀詩「浮沈各異勢、會合何時諧、願爲西南風、――入君懷」○死をいふ。李白文「屈宋――、無堪與言」＝殞逝。
【長嘯】聲をながくしてうそぶく。王維詩「獨坐幽篁裏、彈琴復――」
【長啜】ながくすする、おほくすする。唐書、五行志「民皇甫及年十四、暴長七尺餘、――大嚼、三倍如初、歲餘死」
【長舌】○婦人の多言するをいふ。詩、大雅「婦有――、維厲之階」○備廣――は辨舌のすぐれたる義、雄辯。
【長髯主簿】羊の異名。羊の髯は長く、毛は筆に製す、主簿は書記。故事成語考「羊曰柔毛、又曰――」
【長足】はやあし。進步の速なるにいふ「――の進步」
【長息】ながくなげく、ためいきをつく。東方朔文「喟然――、仰而應之」＝長太息。
【長存】生きながらふ。楚辭「隨眞人翺翔、食元氣兮――」＝長生。
【長蛇】○ながきへび。○殘忍にして慾深き人に喩ふ。左、定四「吳爲封豕――、以荐食上國」○へびの一種。山海經「大咸之山有蛇、名曰――、其毛如彘豪」
【長蛇陣】一列に長くならびし陣形。もと孫子九地篇に本づく。庾信賦「常山之陣、長蛇奔穴」
【長大】○たけたかくおほいなり。魏文帝文「年行已――、所懷萬端、時有所慮、至通夜不瞑」○才能すぐれてまさる。呂覽「孟夏之月、命太尉、贊傑儁、遂賢良、擧――」
【長太息】ためいきをつきてなげく。賈誼、治安策「臣竊惟、事勢可爲――者六」
【長刀】○ながきかたな。宋書、武帝紀「手奮――、所殺傷甚衆」○薙刀
【長短】○ながきと、みじかきと。孟、梁惠王「度然後知――」○まさり、おとり。＝優劣・賢愚。
【長短句】字數の多き句と少き句との雜りし詞曲。宋史、周邦彥傳「邦彥好音樂、能自度曲、製樂府――、詞韻清蔚、傳于世」
【長短說】事を長からしめんとすれば、長く之を說き、短からしめんとすれば、短く之を說く、戰國策士の說。史、田儋傳「蒯通者、善爲――」
【長歎】ふかくなげく。晉書、索襲傳「或獨語獨笑、或――涕泣」
【長枕大衾】ながき枕、大いなるふすまは、兄弟親愛の義とす。兄弟同臥に便なり、唐書、三宗諸子傳「玄宗爲太子、嘗製――、與諸王同寢」衾一に被に作る。蔡邕賦「長枕橫施、大被竟牀」
【長長】長者をうやまふ。大學「上――而民興弟」
【長女】そうりやうのむすめ。易經「巽一索而得女、故謂之――」
【長汀】ながくつづけるみぎは「――曲浦」謝靈運詩「千頃帶遠隄、萬里瀉――」
【長汀子】○布袋和尙の別名。祖庭事苑「布袋時號――、諡定應大師」○國七福人の一に加ふ。
【長亭】長き道のりの宿驛「――短驛」白帖「十里一――、五里一短亭」
【長程】ながきみちのり。＝長途。
【長笛】橫笛、尺八の類。通雅「馬融所賦――、空洞無底、剡其上孔五、孔一出其背、似今之尺八」
【長嫡】本妻の生みたる長男。南史、徐湛之傳「湛之母會稽公主、身居――、爲文帝所禮」
【長天】ながく遠きそら。王勃、滕王閣序「秋水與――一色」
【長途】久しき旅路。又、遠き道のり。司馬相如、上林賦「――中宿」
【長年】○としより。姚合詩「歸去知何日、相逢各――」○ながいき。管子「導血氣以求――」＝長命・長壽。○――三老はせんどう。入蜀記「――三老、梢工也」杜甫詩「――三老歌聲裏、白晝攤錢高浪中」
【長髮】髮を長く延ばす。唐書、玄宗紀「禁白衣――會」

【長眉】ながきまゆげ。古今注「魏宮人好畫ーー」

【長病】久しき病氣。迦葉經「身嬰ーー」

【長婦】○あによめ。爾雅「ーー謂稚婦爲娣婦、娣婦謂ーー爲姒婦」○丈高きよめ。後漢書、馮衍傳「自恥短陋、恐子孫似己、爲子娶ーー」

【長廡】ながきひさし。拾遺記「郭況、庭中起高閣ーー、置衡石于其上、以稱量珠玉也」＝修廡。

【長風】遠くから吹きくる大風。晉書、宗愨傳「願乘ーー破萬里浪」

【長物】無用の物。餘物。世說「王恭平生無ーー」＝冗物。

【長柄】ながきえ。世說「劉無他言、唯問東吳有ーー壺」

【長眄】遠くながめる。湛方生詩「落帆修江渚、悠悠極ーー」

【長篇】ながき詩文。文心雕龍「曹攄清靡于ーー」

【長鞭不及馬腹】鞭が長くとも馬の腹まではとどかず。力強大なるも猶ほ及ばざる所ある喩。左宣、十五「雖鞭之長不及馬腹」

【長木之斃無不摽】長木の地にたふるる時は、物を擇ばずして擊つ。以て强暴なる大國の亡びんとする時は、所を擇ばずして攻伐するに喩ふ。摽は擊。左、哀十二「――也、國狗之瘈、無不噬也」

【長蔓】ながきつる。戴昺詩「瓜緣茅屋抽ーー、藕過疏畦出矮荷」

【長眠】人の死をいふ。太平廣記「鄭友路逢一塚、有二竹、鄭爲詩曰、塚上兩竿竹、風吹常嫋嫋、塚中人寤日、下有百年人、ーー不知曉」

【長命】ながいき。白居易詩「已爲海內有名客、又占世間ーー人」＝長生。

【長命富貴】いのちながくしてとみ且つたふとし。唐書、姚崇傳「求長命得長命、求富貴得富貴」今人多く此を以て頌祝の語と爲す。

【長命縷】五色の絲にて造れる藥玉の類。風俗通「五月五日以五綵絲繫臂、辟兵、使人不病瘟、一名――、一名辟兵繒、一名五色縷、一名綵索、一曰續命縷」

【長明燈】常夜燈。隋唐嘉話「江寧縣寺、有晉――、歲久火色變、青而不熱、隋文帝平陳、已訝其古、至今猶存」

【長目飛耳】書籍をいふ、往古の事をも遠方の事をも見聞し得るは書籍によるが故。管子「一曰長目、二曰飛耳、三曰樹明、明知千里之外、隱微之中、曰動姦動則變更矣」

【長夜】○ながきよ。李羣玉詩「遠客坐ーー、雨聲孤寺秋」○埋葬をいふ。長夜はいつまでも明けず、人一たび死すれば復生ぜざるに喩ふ。左、襄十三「春秋窀穸之事」注「窀、厚也、穸、夜也、厚夜猶ーー、春秋謂祭祀、ーー謂葬埋」

【長夜之飲】夜既に明くるも、なほ窗戶を閉ぢ、燭を點じて酒宴するをいふ。韓非、說林「紂爲――」

【長夜室】墓をいふ。古詩「築此――」蘇軾詩「願築――」

【長老】○年老いたる者。又、學德ある人の尊稱。漢書、外戚傳「近世之事、語尙在ーー之耳」○〔佛〕禪宗にて年と德と共に高き者の稱。禪門規式「道高臘長、呼爲須菩提、亦曰ーー」

【長老會】基督新教の一、英國の監督教會と相反し、其の監督制度、及び儀文服式等を喜ばず、禮拜の儀も亦至りて簡單なり、監督を置かずして長老あり、故に名つく。

【長浪】おほなみ。鮑照詩「勞舟厭ーー、疲旆倦行風」＝長波。

【長廊】ながき廊下。西京賦「ーー廣廡、途閣雲蔓」＝修廊。

【長利】○長久の利益。史、張儀傳「齊王曰、齊僻陋隱居東海之上、未嘗聞社稷之ーー也」○利益を獲ることを多くする。漢書、景帝紀「詔云、令廉士久失職、貪夫ーー」

【長流】○ながくながれる。蘇軾詩「斷鴻逐空水ーー」○ながきながれ。陳琳詩「翺翔戲ーー」

【長霤】長きうけどひ。潘尼賦「瞻中塘之浩汗、灑ーー之潺湲」

【長陵】漢の縣名、今の陝西省咸陽縣の東に在り。

【長齡】ながいき。北史、呂羅漢傳「願壽無疆、以享ーー」＝長年・長壽。

【镸】長（前條）の古字。

門部

【門】モン 元

○かど、家の外圍に設ける出入口。一扇（扇はとびら）なるを戶、兩扇なるを門といふ。一說に堂室に在るを戶、垣牆に在るをーといふ「南ー」「北ー」「朱ー」「家ー」「里ー」「廟ー」○いりくち、でぐち。○すべて物事の必ず經由する關鍵の所。老子「衆妙之ー」○仕進の路。書、舜典「闢四ー」○いへ「家ー」「求忠臣必于孝子之ー」○いへがら「ー閥」「名ー」○みうち（家族）「一ー」○よつぎ（正嫡）○門戶を守る。公羊、宣六「則無人門焉者」○城門を攻める。左、僖十「諸侯之士門焉」○師のをしへをうけしなかまの人人「同ー」「ー人」○分類上の區別「部ー」○學術上の一分類「專ー」○宗教の稱「儒ー」「佛ー」○大砲を數へる數詞「砲十ー」○雁ーは郡名。○〔國〕もんがまへ、漢字の構造を示す語。

【門尹】門番の長。周語「ーー除門」

【門院】〔國〕天子の御生母の稱。

【門衞】もんばん。南史「軍盡潰、死者五千人、諸ーー皆走」＝監門衞。

【門閱】門閥に同じ、閱は閥閱。唐書、張九齡傳「卿固素有ーー哉」

【門葉】一門の分れ、門族。

【出門如見大賓】敬を以て身を持する喩。大賓は貴客。論、顏淵「仲弓問仁、子曰、――、使民如承大祭」

【同門而異戶】道は同一なれども、その見る所を少しく異にする義。揚子法言「吾於荀卿歟、見同門而異戶也」

【款門】款は叩く、門を叩きて通ずるを求むる。晏子春秋、雜「前驅款門」＝款闕。

【杜門】門を塞ぐ。漢書、王陵傳「謝病免、ーー」＝閉門。

【閉門】前條に同じ。中庸或問「古語所謂ーー造車、出門合轍、蓋言其法之同」

【門衰】家が衰微する。李密、陳情表「ーー祚薄、晚有兒息」

【開門而揖盜】門を開きて盜人を迎へ入る。自ら好みて災禍をまねくに喩ふ。吳志、吳主傳「張昭曰、――、未可以爲仁也」

【門下】○ゐさふらふ、食客。史、信陵君傳「誡ーー」○でし（弟子）。後漢書、承宮傳「過徐盛廬、聽經遂請留ーー」＝門人。

【門下省】晉代に始りし官署の名。唐書、百官志「――、侍中二人、正二品、掌出納帝命、相禮儀」

【門巷】門戶と、門に入るこみちと。雍陶詩「村園ーー多相似、處處春風枳殼花」

【門衡】もんのよこぎ。范成大詩「方纏緇史冊、圓魄綴ーー」

【門客】ゐさふらふ、門下の食客。釋常談「孟嘗君有ーー、詐作雞鳴」

【門閒】門の隙。史、晏嬰傳「晏子爲齊相、出、其御之妻、從ーー而窺其夫」

【門鑑】門の出入の許可の證たる札。

【門火】かどび、葬送の時、門前にて焚く火。顏氏家訓「喪出之日、門前燃火」

【門外多有長者車轍】貴人の多く訪ひ來るをいふ。史、陳丞相世家「家乃負郭窮巷、以弊席爲門、然――」王縉詩「門外時聞長者車」

【門外漢】門外に在る男、其の事に關知することなき者。五燈會元「回智舉東坡詩、溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身、曰、若不到此田地、如何有這箇消息、此菴曰、是――耳」＝牆外漢。

【門外可設雀羅】權勢を失ひて後は來り訪ふ者もなく、羣雀來りあつまる、故にあみを張りて之を捕ふべし。史、汲鄭傳「下邽翟公有言、始翟公爲廷尉、賓客闐門、及廢――」雀は一に爵に作る。

【門關】○門又は關を司る職。周禮、注「ーー、司門・司關也」○もんと、せきしょと。周禮「ーー之委積、以待老孤」

【門逕】門前のこみち。范成大詩「故人能少駐、ーー久蓬蒿」

【門闕】宮城の門觀。漢書、五行志「ーー、號令所由出也」

【門業】其の家代代の職業。南史、賀琛傳「琛殊有ーー」

【門限】○もんのしきみ。曲禮「不踐閾」注「閾、ーー也」○〔國〕門戶を閉づる刻限。

【門戶】○いりくち。易、繫辭、注「天地者、易之ーー」○いへ。古詩「健婦持ーー」（持ーーとは猶ほ治家といふが如し）○いへがら。晉書、王敦傳「我兄老婢耳、ーー衰矣」○ーーは人家の私有する所、故に朋黨を結ぶを立ーーといひ、一家言を立つるをーー之見といふ。唐書、韋雲起傳「自作ーー、附下罔上、爲朋黨」

【成門戶】自ら一家を成す。梁書、王茂傳「茂年數歲、爲大父深所異、常謂親識曰、此吾家之千里駒也、成――者、必此兒也」

【張門戶】住居を壯大にして見えをはる。又勢力を張る。

【傍門戶】他人に依賴して立身するに喩ふ。書言故事「唐元和中、士人下第多爲詩刺試官、獨章孝標作歸燕詩、上庾承宣侍郎曰、舊壘危巢泥已落、今年故向社前歸、連雲大廈無棲處、更傍誰家門戶飛」（社前は春の社日の前）

【門候】時刻をうかがひて門の開閉を掌る官。漢書、蕭望之傳「署小苑東ーー」

【門閫】もんのしきみ。梅堯臣詩「看爾十九年、ーー未嘗履」

【門子】○門番。日知錄「ーー者、守門之人」＝閽人。○古、卿大夫の嫡子（周禮、小宗伯）

【門資】(モンシ) いへがら。晉書、會稽王道子傳「承ニ籍ーー一素有ニ豪氣一」＝門地・門閥。
【門人】(モンジン) ○でし。史、孟軻傳「孟軻鄒人也、受ニ業子思之ーー一」＝門弟子。○もんばん。博物異志「ーー曰、汝已至レ此、何不レ求ニ游覽畢而返一」＝閽人。○ゐさふらふ。門下の客。戰國齊策「鄒之登徒、見ニ孟嘗君ーー一」
【門者】(モンシャ) もんばん。後漢書、孔融傳「融造ニ李膺門一、語ニーー一」＝閽者。
【門牆】(モンシャウ) ○もんと、かきと。家門をいふ。法言「在ニ夷貉一則引レ之、倚ニーー一則麾レ之」○師の門をいふ。論、子張「夫子之牆數仭、不下得ニ其門一而入上、不レ見ニ宗廟之美、百官之富一」
【門樞】(モンスウ) ○もんのとぼそ。○轉じて門戸の義。古樂府「送レ客亦不レ遠、足不レ過ニーー一」
【門生】(モンセイ) ○でし。後漢書、袁紹傳「袁氏樹レ恩四世、ーー故吏徧ニ於天下一」＝門人・弟子。○唐代、進士の試驗を司る官吏を先生といひ、及第者自らーーと稱す。
【門跡】(モンゼキ) 國○宇多天皇、剃髮して仁和寺に入らせ給ひ、之を御門の跡と稱す、よりて法親王の住し給ふ寺院の稱とす。○本願寺の俗稱とす。
【門扇】(モンセン) もんのとびら。漢書、霍光傳「黃門宦者、各持ニーー一、王入門閉」
【門前剝啄】(モンゼンノハクタク) 門の前のげたの音。宋、王子端、野堂「雲自知レ歸鳥自還、一堂足レ了一生閑、——定佳客、詹外孱顏皆好山」
【門祚】(モンソ) 家門のさいはい。又、家世の義。唐書、柳玼傳「喪亂以來、ーー衰落」＝家祿。
【門闥】(モンタツ) 宮中の大小のもん。漢書、金安上傳「霍氏反、安上傳ニ禁ーー一、無レ內ニ霍氏親屬一」
【門地】(モンチ) いへがら。晉書、王述傳「司徒王導以ニーー一辟レ述」＝門閥。
【門冑】(モンチウ) いへのちすぢ。唐書、柳冲傳「其後ーー、興替不レ常」
【門庭】(モンテイ) 門內の廣き處。孟浩然詩「ーー無ニ雜賓一、車轍多ニ長者一」
【門庭若レ市】(モンテイイチノゴトシ) 人の多く來りあつまる形容。戰國齊策「羣臣進レ諫、——」
【門弟子】(モンテイシ) 門人に同じ。論、泰伯「曾子有レ疾、召ニ——一曰、啓ニ予足一、啓ニ予手一」
【門帖】(モンテフ) もんにかける聯。灌纓亭筆記「北京宮闕成、太宗命ニ解縉一書ニーー一、以ニ古詩一書レ之、曰、日月光ニ天德一、山河壯ニ帝居一、上大喜、賚賜甚厚」
【門斗】(モントウ) くるる、戸を開閉する爲めに設けたる楔。訓蒙字會「樞、俗呼ニーー一」
【門徒】(モント) ○でし。後漢書、鄭玄傳「馬融ーー四百餘人」＝門人。○佛敎の信徒。册府元龜「唐開元二年、制、百姓家多以ニ僧尼道士一爲ニーー一、相與往還、妻子無レ所ニ避忌一、甚成ニ敝俗一」○もんばん。周禮、司門、注「監門、ーー」○國ーー宗は一向宗の俗稱。
【門泊東呉萬里船】(モンニハクストウゴバンリノフネ) 唐人の詩の句。杜甫、絕句「兩箇黃鸝啼ニ翠柳一、一行白鷺上ニ青天一、窗含西嶺千秋雪、——」
【門不レ停レ賓】(モンニヒントドメズ) 賓客を待たしめず、直に應接する。晉書、王渾傳「虛懷綏納、座無ニ空席一、——、故江東之士、莫レ不ニ悅服一」
【倚レ門望】(イモンノバウ) (一四四頁三段)を見よ。
【門牌】(モンパイ) 門のかけふだ、もんふだ。＝門榜。
【門如レ市心如レ水】(モンハイチノゴトクココロハミヅノゴトシ) 我が門前には媚を呈して來り求むる者は甚だ多けれども、我が心は淸くして公平なり。漢書、鄭崇傳「上責レ崇曰、君門如ニ市人一、何以欲レ禁ニ切主上一、崇對曰、臣門如レ市、臣心如レ水」
【門望】(モンバウ) いへがら高く人望多し。魏書、韓顯宗傳「朝廷但檢ニ其ーー一」
【門榜】(モンバウ) もんのかけふだ。段成式詩「壁詩傳ニ謝客一、ーー占ニ休公一」
【門閥】(モンバツ) いへがら。後漢書、宦者傳論「靡榮無レ暉ニ於ーー一」唐書、鄭仁表傳「常以ニーー文章一自高」
【門法】(モンパフ) 家門の法則。庾肩吾、書品論「子眞俊才、ーー不レ墜」＝家法・門風。
【門扉】(モンピ) 門のとびら。宋書、符瑞志「水涌出毀ニーー一」
【門楣】(モンビ) ○門の上の橫梁。轉じて家門の義とす。高啓詩「男兒弧矢壯ニーー一」○女子をいふ。長恨歌傳「男不レ封レ侯女作レ妃、君看女卻爲ニーー一」
【門廡】(モンブ) もんのひさし。劉克莊詩「ーー無レ人殿未レ開、白頭散吏久徘徊」
【門風】(モンフウ) 一家の風儀。顏氏家訓「篤學修行、不レ墜ニーー一」＝家風。
【門表】(モンペウ) いへのほまれ、家名。北史、柳遐傳「立レ身之道、進退有レ節、子莊、亮直之風、不レ殞ニーー一」
【門標】(モンペウ) かどふだ、姓名などをかきしるす札。門札・表札。
【門牡】(モンボ) もんの戸のとざし。漢書、天文志「長安章城門、ーー自亡」
【門僕】(モンボク) 家に仕ふるやっこ。張籍祭ニ退之一詩「ーー皆逆遣、獨我到ニ寢房一」＝家僕。
【門籥】(モンヤク) もんのしまり。北史、西秦乞伏氏傳「盜ニーー一」＝關籥。
【門鑰】(モンヤク) 前條に同じ。
【門不ニ夜關一】(モンヨルトザサズ) 世が太平にして盜賊の患なきをいふ。史記「子產爲レ相三年、——、道不レ拾レ遺」

【門裏】(モンリ) もんのうち。李商隱詩「風流大堤上、悵望白ーー」
【門柳】(モンリウ) かどぐちにうゑたるやなぎ。白居易詩「春色辭ニーー一、秋聲到ニ井梧一」
【門閭】(モンリヨ) むらざとの入口のもん。禮、月令「仲夏之月、ーー毋レ閉」
【旌ニ表門閭一】(モンリヨニセイヘウス) 孝子節婦等の善行を其の里の門に表旌する。書、畢命「旌ニ別淑慝一、表ニ厥宅里一」蔡傳「表ニ異善人之居里一、如下後世——之類上」
【門隷】(モンレイ) 門を衞る賤吏、もんばん。莊、秋水「不レ賤ニーー一、貨財弗レ爭」＝門卒。
【門聯】(モンレン) 門に題する對聯。駒陰冗記「鄭唐爲ニ州長一、書ニーー一云、架有ニ春風筆一、門無ニ暮夜金一」＝門帖。
【門樓】(モンロウ) もんのやぐら。後漢書、董卓傳「遂圍ニーー一」

一畫

【閂】 サン セン 刪
くゎんのき。門をとざす橫の棒、門の橫關。

二畫

【閃】 セン 琰 豔
○ひらめく、ちらつく、ちらとみえる(暫見)ひらめかす。李咸用詩「風ー雁行疎又密」○ぴかぴかする。○俗に電をいふ。○動く貌。○身を側ダツバてて避ける「躲ー」
解字 人が門中に在りてちらと人を窺ふに象る。
【閃紅】(センコウ) 赤き色をひらめかす。孟郊詩「ーー驚ニ蚴虬一」
【閃燦】(センサン) ひらめきてあきらかなる貌。劉秉忠詩「雲靄ーー動ニ霓旌一」
【閃鑠】(センシャク) ひらめきかがやく、光の定まらざる貌。王僧孺文「日流ーー、風度淸鏘」鑠、一に爍に作る。
【閃閃】(センセン) ○ちらちらとひかりかがやく貌。袁桷詩「繁星ーー漏沈沈」○動きひらめく貌。杜甫詩「ーー浪花翻」
【閃刀紙】(センタウシ) たちのこりの紙、一角疊みて紙中に在りて裁ち殘されたるもの〔文房四譜〕
【閃電】(センデン) ひらめくいなづま、極めて疾かなる喩。隋書、長孫晟傳「觀ニ其走馬一、稱爲ニーー一」

三畫

【閈】 カン 翰
○里のもん。左、襄三一「高ニ其ー閎一」＝閎。○轉じてさと(邑里)「里ー」「同ー」「邑ー」○かき(垣)○邑をかこむかき。○とづ(閉)

【閉】 ヘイ 霽
○とづ、とざす、しめる。開の對「ー門」「ー鎖」○ぢゃう。禮、月令「修ニ鍵ー一」(鍵は牡にてかぎ、ーは牝にて孔あるぢゃう)○かくる、をさまる(藏)○ゆだめ、ゆみだめ(弓檠)○おほふ、おほはる(掩)○ふさぐ。○ふさがる(塞)易、坤卦「天地ー」疏「謂ニ二氣不ニ相交通一、天地否ー」○立秋・立冬をいふ。左、桓五「分至啓ー、必書ニ雲物一」○幽ーは婦人の淫刑。○俗語にて停止の義「ー會」
同訓異義 閉・鎖・闔・杜・閟・關○閉は門をとざすなり。開・啓・闢の反なり。孟子「閉レ門而不レ內」○鎖は錠をおろすこと、とざすと訓む、門戸器物共に用ふ。○闔は兩びらきのとびらなり、轉じてそのとびらを、とざす義とす。○杜は塞也、とぢふさぐ義、杜レ門・杜レ諫・杜ニ絕言路一などと用ふ。○閟は閉に近し、大切にしめる義あり、廟を閟宮といふ。○關はくゎんの木を入れること。文選「門雖レ設常關」
【閉閤】(ヘイカフ) 家の小門をとぢる。漢書、韓延壽傳「入臥ニ傳舍一、ーレー思レ過」
【閉レ禍】(ヘイクワ) わざはひをとぢふさぐ。管子「ーレー在レ除レ怨」
【閉會】(ヘイクワイ) よりあひを終ふ。＝散會。
【閉關】(ヘイクワン) ○關所をとざす。易、復卦「先王以ニ至日一ーレー、商旅不レ行」○門をとぢて客を謝す、身を隱す。文中子「劉伶古之ーー人也」＝藏レ身・杜門。
【閉口】(ヘイコウ) ○口をとづ、ものいはず。史、張儀傳「願陳子ーレー、毋ニ復言一」○國答が出來ぬ、弱りきる。
【閉戸先生】(ヘイコセンセイ) 家にとぢこもりて、讀書にふける人。楚國先賢傳「孫敬常閉レ戸讀レ書、睡則以レ繩繫レ頸、懸ニ之梁上一、嘗入レ市、市人見レ之皆曰、——來也」
【閉鎖】(ヘイサ) とざす。杜牧詩「重門ーー青山晚、深院垂簾白日長」
【閉掃】(ヘイサウ) 戸をとぢて來客をはらふ。南史、王亮傳「屏居ーー、不レ通ニ賓客一」
【閉藏】(ヘイザウ) ○とぢかくれる。淮南、天文「萬物ーー」○とぢふさぐ、物をしまひこむ。禮、月令、注「築ニ囹圄一、此以助ニ天地之ーー一也」
【閉肆】(ヘイシ) みせをとざす。漢書、王吉傳序「嚴君平、卜ニ筮于成都市一、裁日閱ニ數人一、得ニ百錢一、足ニ自養一、則ーレー下レ簾而授ニ老子一」
【閉囚】(ヘイシウ) とぢこめとらはれる。沈佺期詩「ーー斷ニ外事一、昧坐半餘期」

【閉息】いきをとぢる、いきをころす。蘇軾詩「念レ應レ掃二長物一、――默自煖」
【閉塞】とぢふさがる。禮記「天地不レ通、――而成レ冬」
【閉塞船】敵艦の出入をふさぐために港口等に沈める船。＝杜塞船。
【閉蟄】冬期になりて蟲類の土中にこもる義。啓蟄の對。左、桓五「凡祀、啓蟄而郊、龍見而雩、始殺而嘗、――而烝」
【閉店】みせじまひ、商賣をやめる。
【閉凍】こほる。韓非子「冬日之――也不レ固、則春夏之長二草木一也不レ茂」
【閉目】めをふさぐ。白居易詩「靜念二道經一深――」
【閉門】○門をとぢる。漢書、王莽傳「――自守」＝杜門。○口をふさぐ。老子「塞二其兌一、閉二其門一」注「兌、目也、門、口也」○國德川時代の士人の刑、門をとざして、當人竝に外人の出入を禁ぜしもの。
【閉戹】ふさがりなやむ。後漢書、黨錮傳「其窮困――者、爲求二援救一、以濟二其患一」

【閊】〔國字〕
つかへ、つかふ、さしさはりがある。故障が生ずる。

四　畫

【閜】ガ　ゲ
○うつろ(空虛)○さく(開裂)司馬相如、上林賦「谽呀豁―」

【開】カイ
○ひらく(發)あける、閉ぢたるものをあける。閉の對。○花さく。梁簡文帝詩「桃花含レ雨―」○とく(解)○のべる(陳說)○さとる。さとらせる、啓發する。禮、學記「君子之教喩也、―而弗レ達」○はる(張)ひろげる。ひろがる。○はじむ、はじまる(始)「―祖」「―闢」「―會」○とほる(通)豁達。晉書、胡奮傳「性―朗」○おこす。おこる(興)○人文が進む、文明になる「―明」「―化」○新に田畑をつくる「―墾」「―拓」○うごかす、發動する「―車」「―船」○わかす(沸)―水は沸湯。○數、乘根を求める「―平」「―立」○國宴會をとぢる、婚姻の宴席にて閉といふ語を忌みていふ、おひらきにする。

同訓異義 ヒラク 開・闢・啓・發・闡・拓・披・排・拆○開は閉の反、開レ門・開レ口・花開の如し、又口あけの義、天地開闢の類にて、始の字に似たり。○闢は開に同じ、開闢と連用す、辟に作るも同じ、闢レ戸・辟二土地一の類。○啓はものの口をあけるなり、門戸をひらくなり、轉じて人の知らぬことを教へ導くに用ふ、啓發・啓迪の如し。○發は矢をはなつ義にて、次第に開くなり、花發は、口をきってぱっと發くなり、發は伏藏したるものを取り出す意あり、發レ蒙・發二倉廩一の類、アバクとも訓む、發二塚墓一の類。○闡は開也、明也、大也と註す、暗を開き、明かにするなり。闡レ幽と用ふ。○拓は開拓と連用す、地をひらくなり。○披は兩方へ分け開く意、披レ襟・披レ霧・披レ封の類。○排は手にて推し斥くるなり。史、樊噲傳「排レ闥直入」○拆はやぶりひらく、裂也、開也、解也と註す、拆に同じ。易經「雷雨作而百果草木皆甲拆」
【開誘】をしへみちびく。晉書、鄭袤傳「旌二表孝弟一、敬二禮賢能一、興二立庠序一、――二後進一」＝訓誘。
【開允】許す義、允は肯なり、許なり、從なり。唐書、于頔傳「帝晚務二姑息一、頔所二奏建一、無レ不二――一」
【開運】氣運をひらく。新らしき幸運に向ふ。南史、齊高帝紀論「秦始――、大拯二時艱一」
【開筵】座席をまうける。孟浩然詩「送別登二何處一、――舊峴山」
【開可】ゆるす、許可に同じ。後漢書、梁統傳「統陳二便宜一、以爲宜レ重二刑罰一議者以爲隆二刑峻法一、非二明主急務一、統今所レ定、不レ宜二――一」
【開河】俗結冰せる河水が春に至り融解する。
【開港】○みなとを開き始める。○港を開きて外國と貿易する。又其の港。＝俗通商口岸。
【開講】講義をはじめる。南史、藏盾傳「大通五年、帝幸二同泰寺一、――」
【開闔】あけると、とづると。老子「天門――」＝開閉・開鎖。
【開顏】顏をひらきて笑ふ。李白詩「――酌二美酒一、樂極忽成レ醉」
【開基】○もとゐをひらく。又、其の人。景福殿賦「雙二天地一以――」○後世は多く佛寺を創立するにいふ。＝開山。
【開襟】○えりをひらく。杜甫詩「――臨二癖癘一、明レ目掃二雲煙一」＝披襟。○轉じて心をうちあける。
【開掘】ひらきほる。宋史、食貨志「俟二農隙一――」
【開葷】精進をおとし。野客叢書「今人茹レ素、而親鄰設二酒殽一以相煖熱、名曰二――一、於レ理合レ曰二開

素一」白居易詩、月終齋滿誰開素」
【開化】○人智が開けすすむ。＝開明。○文化を啓發する。顧凱之、定命論「建レ極――、樹レ聲貽レ則、典防之興、由來尙矣」
【開曠】ひろやかにうちひらける。謝靈運詩「江山共――、雲日相照媚」
【開光】俗開眼に同じ。
【開豁】○心ひろくゆたか。晉書、劉遐傳「遐性果毅、便二弓馬一、――勇壯」＝豁達・開朗。○ひろやかにうちひらける。范成大詩「登レ嶺既――、入レ林更淸涼」
【開花砲】俗榴散彈。
【開卷】○ひらくと、まくと。鮑照、芙蓉賦「雜二衆姿于開卷一、閱二羣貌于昏明一」＝卷舒。○書物をひらきて讀む。韓愈詩「――讀且想、千載若二相期一」宋實錄「太宗曰、朕性喜レ讀レ書、頗得二其趣一、――有レ益」
【開曉】さとす。さとる。後漢書、种暠傳「宣二恩遠夷一、――二殊俗一、岷山雜落、皆懷二服漢德一」＝開諭。
【開缺】俗官吏が職を去る。
【開業】事業をはじめひらく。史、秦紀「爲二後世一――甚光美」
【開元】○もとゐをひらく。又、開國の義とす。班固、東都賦「夫大漢之――也、奮二布衣一以登二帝位一」＝肇基・開國。○唐の玄宗の年號。
【開眼】佛佛道の眞理を悟る。又、佛像落成の時に行ふ式「――供養」楞嚴經「――見レ明、名爲二見外一」＝開光。
【開悟】さとる。さとす。宋史、程迥傳「釋二訂經史一、――二後學一」
【開口】○くちをひらきて、ものいふ。陳與義詩「一笑聊――、千憂不レ上レ眉」○言ひだし、口をきる。○飲食する。管子、海王「萬乘之國、人數――千萬也」
【開國】○くにをはじめ立つ。吳都賦「有吳之――也、造レ自二太伯一、宣二於延陵一」＝肇國・建國。○始めて天下を有つ、淸に――方略(三十二卷)あり、太宗の舉兵より、世祖の入關に至る事を紀す。○外國との交際をはじめる。
【開墾】荒地をひらく。齊民要術「凡開二荒山澤田一者、皆七芟二艾之一、草乾卽放レ火、至レ春而――」
【開鎖】ひらくと、とぢると。＝開闔。
【開歲】としのはじめ。後漢書、馮衍傳「――發春兮、百卉含レ英」＝開年。
【開催】集會などを開きもよほす。
【開レ罪】我より罪を得たる義。戰國策「――二於先王一」
【開濟】物を開き務を濟す。晉書、楚隱王瑋傳「瑋性――、能得二衆心一」杜甫、蜀相詩「兩朝――老臣心」＝開物濟務。
【開山】○寺をはじめ立てる。又、一宗一派の祖師をいふ「――塔」「――忌」＝開基。○國轉じて或物事をはじめる。又、其の人。＝元祖。
【開鑿】道路又、川などをひらきうがつ。黃庭堅詩「壯產無二惰農一、荒榛盡――」
【開札】入札・投票の函をあけてしらべる。
【開士】佛ぼさつ。明かに眞理に開達する士夫。一說に法を以て衆生を開導する士なるが故。釋氏要覽「經中多呼二菩薩一爲二――一」
【開市】貿易を開始する。易林「――作レ喜、建二造利事一」
【開示】ひらきしめす。後漢書、馬援傳「聚レ米爲二山谷一、指二畫形勢一、――二衆軍所一レ從道徑上」
【開肆】みせをひらく。隋書、衛藝傳「伯醜亦――賣卜」伯醜は、楊伯醜。
【開舟】船出する。天工開物「風息――」＝開船。
【開秋】あきのはじめ。阮籍詩「――兆二涼氣一、蟋蟀鳴二牀帷一」＝孟秋。
【開謝】花の開くと、ちると。謝は謝し去る。馬臻詩「――幾年春」＝開落。
【開城】○朝鮮京畿道の一都市、京城の西北に在り、高麗王の舊都、多く人參を產す。＝松都。○國城をあけわたす、降伏する。
【開手】俗始める、著手する。
【開春】はるのはじめ。楚辭、九章「――發歲兮、白日出之悠悠」＝初春。
【開曙】夜あけ。拾遺記「雲光――月低レ河」
【開水】俗にえゆ、沸騰したるあつき湯(湯は吸物)
【開成】○開物成務の略。○唐の文宗の年號。
【開霽】雨がやみてはれわたる。曹伯啓詩「秋雨忽――、乾坤變二淸涼一」＝開晴。
【開析】ひらく。詩經、傳「維斧可二以――之一」
【開釋】ゆるす。書經「――無辜、亦克用勸」＝開放。
【開設】あらたにまうける。後漢書、西域傳「復令下――二屯田一、如中永元時事上」
【開說】まうしひらく。史、曹相國世家「醉而後去、終莫レ得二――一」＝啓白。
【開船】ふなです、出帆する。星槎勝覽「自二大倉劉家港一――」＝開舟。
【開戰】たたかひをはじめる。＝開仗。
【開闡】ひらきひろめる。梁簡文帝大法頌序「廣行二利益一、――二佛寺一」

【開泰】ひらけてゆたかにとほる。沈佺期詩「大業永ーー、臣道日光輝」
【開拓】土地をひらく。李嶠文「欲下ーー宅北一、更起中新第上」
【開坼】ひらく。韓愈詩「脱レ實自ーー」＝開拆。
【開端】事をはじめる。宋史、范純仁傳「不レ可レーレー」＝發端。
【開智】ちゑをひらく。淨住子「ーレ生レ福、不レ墮二惡趣一」
【開陳】ひらきのべる。陳述する。漢書、公孫弘傳「毎二朝會議一、ーー二其端一、使二人主自擇一、不三肯面折庭爭一」
【開張】○開きはる。杜甫詩「卓立天骨森ーー」○市を開きて貿易する。古杭夢遊錄「復起ーー」
【開帳】佛廚子を開きて中なる佛像を拜ます。舊雜譬喩經「夫人出レ手ーレー、令二人得一レ見」＝啓龕・開龕。
【開通】ひらき通ずる「鐵道ーー」
【開廷】裁判所にて裁判をはじめる。
【開展】○ひらきのびる。仲春龍詩「庭草有二餘姿一、園葵復ーー」＝開張。○ひろげのべる。＝展開。
【開年】としのはじめ、歲始。庾信、行雨山銘「ーー寒盡、正月遊春」＝開歲・開春。
【開方】算術の一科。周髀算經、注「勾股各自乘、并レ之爲レ弦、實ーー除レ之即弦也」
【開放】○ゆるしはなす。書經、傳「ーー二無罪之人一、必無二枉縱一、亦能用勸レ善」○あけはなす。ーー二門戶一は鎖國の對にて、各國と締交通商するに喩ふ。
【開發】○ひらく。封を切る。漢書「宦官左右ーー」○智識をひらきみちびく。北史、崔瞻傳「朝夕遊處、ーー二幼蒙一」＝啓發。○田畑をひらき耕す。開拓・開墾に同じ。
【開發主義】兒童を教育するに成るべく兒童をして自ら發明せしむる方法。注入主義の對。
【開帆】帆をかける、船出する、出帆する。
【開レ眉】まゆをひらく。愁をとく義。朱弁詩「善諱爲ーレー」
【開敏】心ひらけてさとし。漢書、文翁傳「ーー有レ才」梁書、周捨傳「學問堅明、志行ーー、劬二勞機要一、多歷二歲年一」＝通敏。
【開闢】ひらく。世界のひらけはじめ。揚雄、劇秦美新「配二五帝一、冠二三王一、ーー以來、未二之聞一也」
【開府】○漢の制、三公に役所を設けて屬官を置くことを許されたるをいふ。後世將軍も之に準じ、ーー儀同三司（儀制が三司即ち三公に同じとの義）といふ。○巡撫・總督などの尊稱。
【開封】手紙などの封をひらく。張籍詩「行人臨レ發又ーレー」
【開復】○恢復に同じ。晉書、庾亮傳「亮有下ーー二中原一之謀上」○休職の官吏が其の原の官に復せられしをいふ。
【開レ物成レ務】人の未だ知得せざる所を開發し、人の成さんと欲する所を成して之を全くす。易、繫辭「夫易ーーーー、冒二天下之道一、如レ斯而已者也」
【開閉】ひらくと、とづると。あけたて。易經、疏「ーー相循、陰陽遞至」＝開闔。
【開票】投票の數をしらべるために其の函をひらく。
【開目】まなこをひらく。賈島詩「莫レ居二暗室中一、ーー閉目同」
【開門】もんをあける、門戶を開く。吳志、吳主傳「ーレー而揖レ盜、未レ可二以爲一レ仁也」
【開洋】ふなでする、出帆する。圖書編「遂河口ーー」＝開船・開帆。
【開諭】ひらきさとす。元史、安南傳「天使之來、ーー二詔書一、使三予喜懼交二戰於胷中一」
【開朗】○うちひらけてほがらか。陶潛、桃花源記「豁然ーー」＝明朗。○心がうち開けて賢明なり。晉書、胡奮傳「奮性ーー」
【開落】開謝に同じ。
【開立】立方根を求むる算法。
【開路】○みちをひらく。韓偓詩「百辟斂レ容ーレー看」○ーー神は喪禮に用ふる所の偶人。

【閌】カウ
○盛んなる貌。○ー閬は高き門の貌。

【閒】㊀カン・ケン ㊁カン・ケン
㊀あひだ「中ー」○あひま「時ー」○すきま（隙）「空ー」○なか（中央）○うら（裏）○ところ、場所「田ー」「坊ー」「行ー」○いる（容）禮、文王世子「凡侍二坐於大司成一者、遠近ー二三席一」○分別ある貌。○車のくさびの聲。○ちかごろ（近）このごろ「ー者」○やすんず（安）○しづか（閑靜）「幽ー」○ゆるやか（寬）○やすむ（息）晉語「可二以少ー一」やすみ（休息）○てすき（無事）孝經、開宗明義「仲尼ー居」○あそび（無職）「ー民」㊁あひ、あひだ。○へだつ（隔）「ー歲」へだたり（距離）○ちがひ（差）○ひま、すきま。○なかたがひ（怨隙）○をり、しほ（機會）○かふ。かはる（代）○ひそか（私）後漢書、讖玄傳「ー竄歸レ家」○しのびのもの（俔）うかがふ。○そしる（訾）非難する。孟、離婁「政不レ足ー也」○まじる。まじゆ（混雜）「ー色」○たがひに（迭）○あづかる（與）左、莊十「肉食者謀レ之、又何ー焉」○とほざく（遠）○いゆ（瘳）病が少しくなほる。論、子罕「病ー日」○はなる（離）○しばらく、暫時「有レー」國○けん、六尺の稱。○へや（室）「明ー」

解字 隙なり、門に从ひ、月に从ふ。門は夜閉づ、閉ぢて而して月光を見るは、是れ閒隙有るなり。俗に、日に从ひて間に作るは非。

同訓異義 閒・閑・靜・寂・閴・恬・謐 ○閒は安なり、忙の反、閒暇・閒居・閒語と用ふ。○閑はひま、しづかと訓す。後世は閒に通用す。韓愈文「投レ閑置レ散」○靜は動または躁の反、さはがず、安息する義。大學「定而後靜、靜而後安」○寂はさびしき義、寂寥と熟す。易經「寂然不レ動」○閴は音ケキ人なくして、ひっそりと、しづかなる義。易經「閴二其戶一閴其无レ人」○恬は心安らかに靜かなるなり。莊子「以レ恬養レ志」○謐は世の中、をさまりて靜かなるなり。安謐・清謐と連用す。
○閒・竊・密・私・窃の別は竊（一四〇二頁二段）の條を見よ。

【閒負】定りたる任務なきあたまかず。舊唐書、李固言傳「德宗時、班行多二ーー一、豈時乏レ才邪」
【閒雲】しづかなるくも。杜牧詩「醉鄉無レ迹似二ーー一」
【閒園】しづかなるその。又、あきたるはたけ。劉基詩「地主多二ーー一」
【閒鷗】しづかなるかもめ。鄭元祐詩「詩盟從レ此負二ーー一」
【伺レ閒】すきをねらふ。
【承レ閒】ひまの時をみる。
【多レ閒】なかが惡し。閒は隙。史、魯世家「君臣ーレー」
【閒架】○閒は梁と梁との閒、架は桁と桁との閒。唐書、德宗紀「建中四年、稅二屋ーー一、上屋錢二千、中一千、下五百」○轉じて文章の結構宜しきを得たるを家屋の結構に比してーーといふ。
【閒雅】しづかにみやびやか。史、司馬相如傳「雍容ーー甚都」＝閑雅。
【閒暇】○ひま、いとま。後漢書、王符傳「其民ーー、而力有レ餘」○國が治まりてしづか。孟、公孫丑「今國家ーー、及二是時一明二其政刑一」○儀容がおちつきてしづか。賈誼、鵩鳥賦「止二于坐隅一、貌甚ーー」
【閒行】しのびあるき。閒隙に投じて微行する。漢書、高帝紀「布與二隨何一ーー歸レ漢」
【閒隔】へだつ。へだたり。陶潛、桃花源記「遂與二外人一ーー」
【閒閒】物を區別する。莊、齊物「大知閑閑、小知ーー」
【閒吟】しづかに詩をつくる。白居易詩「惟有二詩魔降未一レ得、每レ逢二月下一ーー」
【閒釁】すきまの乘ずべきをうかがふ。東京賦「巨猾ーレー、竊二弄神器一」
【閒居】○事なくしてしづかに居る。大學「小人ーー、爲二不善一」○しづかなるすまひ。＝幽棲・幽居。
【閒臥】しづかにいぬ。李白詩「澹然吟二高秋一、ーー瞻二太淸一」
【閒曠】しづかにしてゆるやか。北史、崔彥穆傳「風韻ーー、器度方雅」
【閒關】○路がけはしくして行きなやむ貌。漢書、王莽傳「士死傷略盡、馳入レ宮、ーー至二漸臺一」＝艱關・崎嶇展轉。○鳥の和ぎなく聲。白居易詩「ーー鶯語花底滑」○車のくさびの聲。詩、小雅「ーー車之舝兮」
【閒月】一年中にて農事のひまな月。忙月の對。後漢書、劉般傳「冬春ーー、不レ妨二農事一」
【閒歇泉】時を定めてわき出づる溫泉。
【閒歇熱】おこり、隔日又は時を定めて熱の起る病。
【閒健】身閑暇にしてすこやか。陸游詩「造物予レ閒兼レ健」
【閒語】しづかにかたる。史、信陵君傳「侯生乃屏レ人ーー」＝閒談。
【閒候】まはしものとなりてうかがふ。漢書、傅介子傳「常爲二匈奴ーー一遮二漢使者一」
【閒識】閒はへだてる。一年づつ閒をおく。漢書、食貨志「ーー萬餘人」＝隔識。
【閒作】國或作物の閒へ他の作物を植ゑ作る「ーー林」
【閒廁】いりまじる。元稹文「雜亂ーー、無レ可二奈何一」
【閒日】○中一日をへだてる。＝隔日。○ひまな日。＝暇日。
【閒執】ふさぎとめる。左、僖二八「願以ー二讒慝之口一」
【閒人】○まはしもの。後漢書「遣二ーー閒諜一也」○ひまな人。＝閑人。
【閒者】○まはしもの、しのびもの。○このごろ、單に閒とも書く。
【閒出】人目をしのびて外に出る。史、張耳傳「趙王ーー」
【閒冗】冗は散なり。閒散に同じ、職務なくしてひまである。蔡邕、巴郡太守謝版「一章自聞、乞在二ーー一」
【閒色】二種以上の色の配合によりて成る色。閒はまじはる。青・黃・赤・白・黑の五色の相まじはりて生

ずる色。禮記「衣正色、裳ーー」
【閒食】あひだくひ。
【閒靜】しづか。陶潛文「少學二琴書一、偶愛二ーー一」
【閒稅】閒接國稅に同じ。
【閒接】閒に或るものを隔てて其のものに對する。直接の對。
【閒接國稅】酒・煙草などの如く、其の品の消費者が閒接に負擔する稅。＝閒稅。
【閒然】閒はすきま、其のすきまを指してそしる。論、泰伯「禹、吾無二ーー一矣」無二ーー一は一點のすきまをさして非議すべき所なしとの義。
【閒不レ容レ息】氣息を容るる隙なし。事の甚だ急なるにいふ。淮南、原道「時之反側、——」
【閒道】ぬけみち、人の多く通行せざる道。史、淮陰侯傳「從二ーー一萆レ山而望二趙軍一」＝閒路。
【閒誕】しづかにしてきまま。元稹、上二令狐相公詩一啓「ーー無事、遂用二力于詩章一」＝閒放。
【閒澹】心しづかにして欲すくなし。魏志、阮瑀傳「ーー寡欲」
【閒斷】たえま、とぎれる。韓愈詩「魂翻眼倒忘二處所一、赤氣沖融無二ーー一」
【閒地】閑散なる地位。＝閑地。
【閒停】ひまにて手がすく。魏書、皮喜傳「無事ーー、豈是良將」
【閒適】しづかに心が安んずる。唐書、白居易傳「言關二美刺一者、謂二之諷諭一、詠二性情一者、謂二之ーー一」＝閒靜安適。
【閒諜】まはしもの、敵狀を探りて其の主に報ずるもの。史、李牧傳「謹二烽火一、多二ーー一」＝細作・諜者。
【閒田】所有主のなき土地。禮、王制「名山大澤不二以封一、其餘以爲二附庸ーー一」
【閒投詞】文法にて感嘆詞（六七九頁一段）に同じ。
【居レ閒】兩者の中閒に立ちて雙方の紛議を和解せしむ。史、灌夫傳「賓客ーレー、遂止俱解」＝居中調停。
【閒放】しづかにして氣まま。北史、蕭大圜傳「深信二因果一、心安二ーー一」張謂詩「策レ馬從レ此辭、雲山保二ーーー一」
【閒不レ容レ髮】一髮を容るるすきまもなし。事の甚だ急なるにいふ。枚乘、諫二吳王一書「其出不レ出、——」
【閒步】しづかにあゆむ。鄭谷詩「獨來新霽後、ーー澹烟中」
【閒民】職業なきたみ。周禮、地官「以二九職一任二萬民一、九曰二ーー一」＝遊民・逸民。
【閒麗】みやびやかにうるはし。宋玉賦「禮貌ーー、口多二微詞一」
【閒話】○むだばなし。＝閑話。○人の居らざる時に惡口をいふ。かげぐち、しりうごと。＝後言。
【閒話休題】むだのはなしはやめにして。それはさておき、發語の辭、さての義。水滸傳「且把二閒話一休題、只說二正話一」＝閑話休題。

【閇】閉（前條）の俗字。

【閑】カン 〔篆〕

○ふせぐ（防・禦）易、乾卦「ー邪存二其誠一」○とづ（閉）○おほいなり（大）○ならふ（習）なれる、習熟する。詩、秦風「四馬既ー」○のり（法）規則、法則。論、子張「大德不レ踰レーー」○をり、馬屋のしきり（馬闌）○こまよせ（梐枑）○しづか、ひま「ー暇」＝閒。○ーーは男女の別なく往來する貌。又、車の動搖する貌。又ひろく大いなる貌。
解字 闌なり、門中に木あるに从ふ。
同訓異義 閑・防・禦・扞等の別は防（阜部四畫）の條を見よ。○閑・閒・靜・寂等の別は閒（前頁一段）の條を見よ。
【閑安】しづかにしてやすし。李白詩「何時天狼滅、姉子得二ーー一」＝安閑。
【得レ閑】ひまを得る。蘇軾詩「因レ病ーレー殊不レ惡、安レ心是藥更無レ方」
【閑雅】○しづかにしとやか。史、司馬相如傳「從二車騎一、雍容ーー甚都」（閑一に閒に作る）＝嫺雅。○地がしづかにして雅趣あり。
【閑暇】ひま、いとま。＝閒暇。
【閑客】○ひまなる雅人。米芾詩「杜郎ーー今爲是、謝守風流古所レ傳」○白き雉子の異名。楊文公談苑「白鷴曰二ーー一」
【閑閑】○車の動搖する貌。一說強く盛んなる貌。詩、大雅「臨衝ーー、崇墉言言」○男女別なく相まじりて往來する貌。詩、魏風「桑者ーー兮」○廣博なる貌。莊、齊物「大知ーー、小知閒閒」
【閑卻】なほざりにうちすてておく。卻は助辭。＝閑却。
【閑居可三以養二志】世を避け閑居して其の志を養ふべし。後漢書、梁竦傳「大丈夫居レ世、生當二封侯一、死當二廟食一、如其不レ然、——、詩書足二以自娛一」
【閑緩】しづかにしてゆるやか。北史、李公緒傳「公緒ーー不レ任レ事、每被二譏訶一」
【閑古鳥】圖 一名、よぶこどり、つつどり、くわくこうどりの轉。＝布穀・鳲鳩。
【閑坐】しづかにすわる。史、日者傳「司馬季主ーー、弟子三四人侍」
【閑散】しづかにしてひまに遊び居る。韓愈詩「況是儒官飽二ーー一」

【閑肆】しづかにしてほしいまま。歐陽修文「詩尤清淡、ーー可レ喜」＝閑放。
【閑日月】ひまなる月日、物事にこせつかざる心。＝閑歲月。
【閑習】ならふ。能く熟練する。後漢書、鄭大傳「少爲二國將一、ーー二軍事一、數踐二戰場一、名振二當世一」
【閑人】ひまびと。無用の人。宋信編「如有二ーー混擾者一、立拿枷敞」＝閒人。
【閑レ邪】よこしまなる心をふせぐ。邪惡を防閑する。易、乾卦「ーレー存二其誠一」
【閑趣】しづかなるおもむき。沈炯文「矧濟庭之ーー、具二春物之芳華一」
【閑淑】しづかにしてよし。遼史、天祚后蕭氏傳「ーー有二儀則一」
【閑舒】しづかにしてのびのびする。唐書、呂元膺傳「坐二城門一、指縱部分、意氣ーー、人賴以安」＝寬舒。
【閑職】ひまな役。＝散官。
【閑清】しづかにしてきよし。王融文「遺場曠譙、禪逕ーー」
【閑整】しづかにととのふ。唐書、尙可孤傳「屯二扶風一、隊伍ーー」
【閑素】心靜かにして質素なり。宋書、文九王傳「少而ーー」
【閑達】ならひて通達する。後漢書、陽球傳「ーー二故事一」＝習熟・熟達。
【閑談】しづかにはなす。韋莊詩「絕倒ーー坐到レ明」
【閑地】○あき地。○轉じて、閑散なる位地の義とす。晉書、郗愔傳「乞二ーー一自養」
【閑暢】しづかにしてのびやか。陸龜蒙詩「苦爲二飢寒累一、未レ得レ恣二ーー一」
【閑眺】しづかにながめる。岑參詩「ーー北顧樓、醉眠湖上亭」
【閑獨】しづかにひとりをる。北史、邢邵傳「性好二談賞一、又不レ能二ーー一」
【投二閑置一レ散】身を閑散の位置に置く。韓愈、進學解「——、乃分之宜」
【閑放】のどかにして氣まま。高道素文「官吏譙休、士民ーー」
【閑暮】しづかなる晚年。沈約文「弋二釣泉皐一、以慰二ーー一」
【閑豫】しづかにたのしむ。晉起居注「從容ーー」
【閑和】しづかにしてやはらぐ。陶潛文「始妙密以ーー」
【閑話】むだばなし。衞準詩「莫レ言ーー是ーー、往往事從二ーー一來」＝閒話・閑言語。
【閑話休題】それはさておき、むだばなしはやめにして、發語の辭。

【閎】クワウ 〔篆〕

○巷の門、小路の入口「閈ー」○天上の門。九ーは九天の門。漢書、揚雄傳「騰二九ー一」○おほいなり（大）○むなし（虛）○ひろし（中寬）○ひろくす。韓愈、進學解「ー二其中一、肆二其外一」○門旁の長き杙にて扉を止むる者。○ーーは深く遠し。○ーーは敦美の貌。太玄經「大閎ーー」
【閎衍】文辭が富みて麗くし。漢書、藝文志「枚乘・司馬相如、下及二揚子雲一、競爲二侈麗ーー之詞一」（閎一に弘に作る）
【閎閎】○大聲の形容。石介、蝦蟇詩「鐘鼓欽欽、雷霆ーー」○敦く美くしき貌。字解參看。
【閎廓】遠くふかし。史、司馬穰苴傳「余讀二司馬兵法一、ーー深遠」＝恢廓。
【閎達】ひろくとほりて偏狹ならず。晉書、何曾傳「博物洽聞、明識ーー」＝豁達。
【閎誕】みだりに大言してとりとめなし。郭璞、山海經序「世之覽二山海經一者、皆以二其ーー迂誇多二奇怪一、俶儻之言一、莫レ不レ疑焉」（閎一に宏に作る）
【閎中肆外】文を作るに、蘊蓄に富みて用筆の豪放なる義。字解參看。
【閎覽】ひろく物事を覽て知る。史、吳太伯世家「ーー博物君子」（閎一に宏に作る）

【閏】ジュン 〔篆〕

○うるふ、曆の上にて平年より日月數の多き稱、太陽曆にては一日增して三百六十六日となり、太陰曆にては一ヶ月增して十三ヶ月となる。又、其の年月「ー年」「ー月」○轉じてあまり（餘分）又正統ならざる天位「正ー」
解字 告朔の禮、天子每月宗廟に居る、惟ー月は門中に居る、故に門に从ひ王に从ふ。
【閏位】正統に非ざる天子の位。漢書、王莽傳「紫色蠅聲、餘分ーー、聖王之驅除云爾」
【閏刑】古、士人又は爵位ある人、僧侶・婦女子・老幼・癈疾の人に本刑に代へて科せし刑罰。正刑にあらざる義。
【閏月】うるふづき。書、堯典「以二ーー一定二四時一、成レ歲」
【閏年】うるふどし。平年の對。蘇軾詩「園中草木春無數、只有二黃楊厄二ーー一」
【閏餘】うるふづき。褚翔詩「去歲無二霜雪一、今年有二ーー一」

【閔】ビン・ミン 眞 ㊀㊁

㊀あはれむ。＝惻憫。㊁疾病死喪などの憂(傷念)○○(病)む(勉)○多し＝傳」＝既喪なり。○明代、宰相相呼ぶ＝孟老老相＝川＝時代の爾者老

【閖】ヒツ・ミツ 質 ㊀㊁

㊀あはれむ。＝惻憫。㊁疾病死喪などの憂(傷念)○○(病)む(勉)○多し＝傳」＝既喪なり。○明代、宰相相呼ぶ＝孟老老相＝川＝時代の爾者老

【閘】カフ 合

○○(空虚)史「司馬相如傳」倉唫呼(豁)ろ○

【閘】カフ 洽

○○(空虚)史「司馬相如傳」倉唫呼(豁)ろ○

【閙】ダウ 效

○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)

【閣】カク 藥

○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)

【閥】バツ 月

○○いへがら。門地「門」「名」「功」「績」○○いさを(功績)動

【閨】ケイ 齊

○(小門)○宮中の小門

【閭】ロ 魚

○こもん(小門)○宮中の小門

【閔】ビン・ミン 眞 ㊀㊁

㊀あはれむ。＝惻憫。㊁疾病死喪などの憂(傷念)○○(病)む(勉)○多し＝傳」＝既喪なり。○明代、宰相相呼ぶ＝孟老老相＝川＝時代の爾者老

【閖】ヒツ・ミツ 質 ㊀㊁

㊀あはれむ。＝惻憫。㊁疾病死喪などの憂(傷念)○○(病)む(勉)○多し＝傳」＝既喪なり。○明代、宰相相呼ぶ＝孟老老相＝川＝時代の爾者老

【閘】カフ 洽

○○(空虚)史「司馬相如傳」倉唫呼(豁)ろ○

【閘】カフ 合

○○(空虚)史「司馬相如傳」倉唫呼(豁)ろ○

【閙】ダウ 效

○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)

【閣】カク 藥

○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)

【閥】バツ 月

○○いへがら。門地「門」「名」「功」「績」○○いさを(功績)動

【閨】ケイ 齊

○(小門)○宮中の小門

【閭】ロ 魚

○こもん(小門)○宮中の小門

【閔】ビン・ミン 眞 ㊀㊁

㊀あはれむ。＝惻憫。㊁疾病死喪などの憂(傷念)○○(病)む(勉)○多し＝傳」＝既喪なり。○明代、宰相相呼ぶ＝孟老老相＝川＝時代の爾者老

【閖】ヒツ・ミツ 質 ㊀㊁

㊀あはれむ。＝惻憫。㊁疾病死喪などの憂(傷念)○○(病)む(勉)○多し＝傳」＝既喪なり。○明代、宰相相呼ぶ＝孟老老相＝川＝時代の爾者老

【閘】カフ 洽

○○(空虚)史「司馬相如傳」倉唫呼(豁)ろ○

【閘】カフ 合

○○(空虚)史「司馬相如傳」倉唫呼(豁)ろ○

【閙】ダウ 效

○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)○○(鬧)

【閣】カク 藥

○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)○○(樓)

【閥】バツ 月

○○いへがら。門地「門」「名」「功」「績」○○いさを(功績)動

【閨】ケイ 齊

○(小門)○宮中の小門

【閭】ロ 魚

○こもん(小門)○宮中の小門

のやから。

【閩】ビン　圓
○支那の東南地方の種族の名、東越の別名。今の福建省地方。周禮、夏官「四夷・八蠻・七—九貉・五戎・六狄」○轉じて福建省の異稱。○國名、五代の十國の一、南唐の爲めに滅ぼさる。
【閩粵】ビンエツ　地名、今の福建省は周代の七閩の地、後、越人之に居る、故にいふ、粵は越。＝閩越。
【閩中】ビンチユウ　郡名、秦代に置く、今の福建省。

七畫

【閱】エツ　屑
○けみす（檢）「校—」○しらべる、あらためる「檢—」「—兵」○よむ「—書」○みる（觀・察）左、襄九「商人—二其禍敗之釁一」○かぞへる（數）○ふ（經歷）「—歷」「—月」漢書、文帝紀「—二天下之義理一多矣」○えらぶ（簡）「簡—」○いる（容）いれられる。詩、衞風「我躬不レ—」○うく（稟）老子「以—二衆甫一」○てがら。○いへがら（門地）「閥—」

閱（前頁）の字解參看。○兵士の訓練を行ふ「—兵」○車馬軍實をあらためる。○すべる（總）陸機賦「世—レ人以成レ世、人冉冉而行暮」（衆人を總べて世を成す義）○あたひ（價）折—は品物の價を損して賣る。荀、修身「良賈不下爲二折—一不上レ市」
【閱月】エツゲツ　つきをすごす。唐書、三宗諸子傳「—レ—拜二諫議大夫一」
【閱歲】エツサイ　一年を經る。唐書、薛元賞傳「—レ—進二工部尚書一」
【閱視】エツシ　しらべる。舊唐書、王起傳「令三宰臣—二可否一、然後下二當司一放榜」
【閱試】エツシ　しらべためす。後漢書、禰衡傳「曹操聞二衡善擊一レ鼓、乃召爲二鼓吏一、因大會二賓客一、—二音節一」
【閱實】エツジツ　犯罪を檢閱して實情を明かにする。書、呂刑「—二其罪一」
【閱書觀】エツシヨクワン　書を讀むもののみ。三國遺錄「魏文帝爲二——一、讀二書千卷一」
【閱世】エツセイ　時世を經歷する。蘇軾詩「—レ—如二郵傳一」
【閱武】エツブ　武事をしらべる。晉書、虞溥傳「專二心墳籍一、時疆場—レ—、人爭視レ之、溥未二嘗寓目一」＝講武。
【閱兵】エツペイ　兵を檢閱する。王惲詩「白羽風清坐—レ—」＝閱武。
【閱覽】エツラン　しらべみる。宋史、盧多遜傳「必通夕—レ—、是以答中皆中」
【閱歷】エツレキ　すぎ去りし事蹟、又經過する。又、履歷。舊唐書、吐蕃傳「赤發レ兵以助、——三旬一」＝經歷・更歷。

【閫】㊀コン　㊁コン　阮　願
㊀しきみ（門限）門のしきみ、戸の内外の限界「門—」○くひ（門中橛）○城郭の門。㊁婦女の居所へや
【閫寄】コンキ　閫外の寄託の義。將軍の任をいふ。李納、授二節度使一制「膺二鼓——一」次條參看。
【閫外之任】コングワイノニン　將軍の職。史、馮唐傳「上古王者之遣レ將也、跪而推レ轂曰、閫以內者、寡人制レ之、閫以外者、將軍制レ之」＝閫寄。
【閫席】コンセキ　しきみと、しとねと。轉じて、男女の分にいふ。梁書、高祖丁貴嬪傳「方論二婦教一、明章二——一」
【閫則】コンソク　をんなの守るべきのり。婦徳。宋史、樂志「內輔二先猷一、夙昭二——一」＝閫範・閫德・閨範。
【閫內】コンダイ　しきみのうち。轉じて、都城內の義とす。閫外之任を見よ。
【閫德】コントク　婦德をいふ。任昉文「——斯諒」
【閫範】コンハン　○婦德をいふ、女子のてほん。○書名。宋史、藝文志に、呂祖謙の——三卷を著錄す。

【閬】㊀ラウ　㊁ラウ　漾　陽
㊀むなし（空）うつろ（虛）○ひろし（曠）○—風は山名、崑崙山の上に在り。㊁高し、門高し。又、高き門。○大いなり。○あきらか、ほがらか。＝朗。
【閬苑】ラウエン　仙人の居所〔續仙傳〕宣和畫譜「阮郜作二仙女圖一、有二瑤池——風景一」
【閬風瑤池】ラウフウエウチ　仙人の居る處。書言故事「崑崙閬、閬風苑、有二玉樓十二、玄室九層一、左二瑤池一、右二翠水一、環以二弱水九重一、非二飆車羽輪一、蓋不レ可レ到」

【閭】リヨ　ロ　魚
○周の制、二十五家を里となし、其の門を—といふ「門—」「里—」○轉じて二十五家（里）の稱、むらざと（邑里）「鄉—」「邑—」「田—」
【閭閻】リヨエン　里中の門。轉じて、むらざとの賤人。史、李斯傳「斯以二——一、歷二諸侯一、入事レ秦」
【閭巷】リヨカウ　むらざと。史、伯夷傳「——之士、欲レ砥レ行立レ名者、非レ附二青雲之士一、安能施二于後世一哉」
【閭巷人】リヨカウノヒト　官に仕へずして野に在る人。史、游俠傳序「及レ若二季次原

憲一——也」
【閭閈】リヨカン　○さとのもん。＝里門・閭閻。○むらざと。王庭珪詩「徒乘二朱班輪一、呵殿嚇二——一」
【閭伍】リヨゴ　むらざとの賤民のなかま。史、司馬相如傳「臣素卑賤、君擢二之——之中一」
【閭左】リヨサ　秦代、賦役等を免じて里門の左側に置きし貧民の稱（富者を右に置く）漢書、食貨志「取二泰半之賦一、發二——之戍一」
【閭市】リヨシ　むらざとのまち。歐陽修詩「日落原野晦、天寒——閑」
【閭姝】リヨシユ　古代の美女の名〔荀、賦篇〕東方朔、七諫「謂二——一爲二醜惡一」＝閭娵。
【閭胥】リヨシヨ　周代の官名、村里の小役人。周禮「——各掌二其閭之徵令一」
【閭井】リヨセイ　まち、むらざと。元稹文「因二其阡陌一、制二之——一」
【倚レ閭】イリヨ　倚門之望（一四四頁三段）を見よ。
【閭門】リヨモン　むらざとの入口のもん。漢書、于定國傳「于公謂曰、少高二大門閭一、令レ容二駟馬高蓋車一」＝里門。
【閭里】リヨリ　むらざと。又、其の民。史、袁盎傳「盎病免居レ家、與二——一浮沈」＝閭巷・閭伍。

八畫

【閼】㊀アツ　㊁ヨ　㊂エン　曷　魚　先
㊀ふさぐ。ふさがる（壅・塞）「壅—」「擁—」「夭—」「抑—」○とどむ。とどまる（止）○—逢は十干の甲の異名。單—は十二支の卯の異名。爾雅「太歲在レ甲、曰二—逢一、太歲在レ卯、曰二單—一」㊁—與はゆるやか（容暇）なる貌〔漢書、揚雄傳〕㊂—氏は、匈奴單于の嫡妻の稱〔史、匈奴傳〕
【閼塞】アツソク　ふさがる。吳越春秋「帝堯之時、九州——、四瀆壅閉」＝壅塞。
【閼伽】アカ　○佛梵語。佛に奉る水。翻譯名義集「阿伽此云レ水」又、其の水を盛る器。慧林音義「——盛レ水器也、同盛二香水一器也」——灌頂アカクワンヂヤウは香水を佛道修行者の頂に灌ぎて其の修功を證明する作法。○船底にたまる水。＝淦。

【閹】エン　鹽　もと奄に作る
○こもの（豎）宦官、男子の去勢せられて後宮に仕ふる者、君主に近侍し、宮門の開閉其の他の雜役に從ふ。○もんばん。○—然はおほひかくす、己の意志を掩ひかくして世にへつらふ。○去勢せし家畜（臺灣語）○—茂は十二支の戌の異名。爾雅「太歲在レ戌曰二—茂一」＝淹茂・掩茂。
【閹尹】エンイン　尹は正、宦官のかしら。漢書、敍傳「——之咎」
【閹官】エンクワン　次條に同じ。後漢書、宦者傳「所二與居一者、惟——而已」
【閹人】エンジン　宮刑にかかりて精氣の閉藏する者。轉じて宦官をいふ。後漢書、宦者傳「中興之初、宦官悉用二——一」＝奄人・宦官・閹奴・寺人。
【閹然】エンゼン　己の意志をかくして世に媚びる、深く自ら閉藏する貌。孟、盡心「——媚二於世一也者、是鄉愿也」
【閹奴】エンド　閹人に同じ。唐書、顏眞卿傳「李希烈使三——等害二眞卿一」

【閻】エン　鹽
○ちまた（巷）の門、里中の門、小路の門。○ちまた（巷）里中。史、越世家「莊生雖レ居二窮—一、然以二廉直一聞二於國一」○佛—魔は地獄の大王の名、梵語の—魔羅闍の略。＝閻羅・閻摩羅。
【閻若璩】エンジヤクキヨ　清の山西の太原の人、字は百詩、博學洽聞一世に比なく、考證に長ず、世宗手書して之を招き、常に先生といひて名いはず。著はす所、古文尚書疏證・四書釋地・日知錄補正等あり。康熙四十三年卒す、年六十九。
【閻扶】エンブ　佛印度にある木の名、酉陽雜俎「釋氏書言、須彌山南面有二——樹一」
【閻浮】エンブ　佛○閻扶に同じ。阿含經「須彌山外、所迦羅山北、有二大樹一、曰二——一」○閻浮檀金の略。
【閻浮提】エンブダイ　佛須彌山の南海中に在る三角形の島洲の名、一に、南贍部洲ともいふ。＝南閻浮提。
【閻浮檀金】エンブダゴン　佛閻浮樹の下を流るる河中に生ずるすぐれて善き沙金。法華經「——爲レ臺、白銀爲レ葉」
【閻魔十王】エンマジフワウ　佛地獄の王。某書拾唾「釋氏所レ謂十王者、一曰秦廣、二曰初江、三曰宋帝、四曰五官、五曰閻羅、六曰變成、七曰泰山、八曰平等、九曰都市、十曰轉輪、是也」
【閻羅】エンラ　佛閻魔に同じ。隋書、韓擒虎傳「生爲二上國柱一、死作二——王一」＝閻摩羅・琰摩。
【閻羅廳】エンラチヤウ　佛閻魔大王の役所。七寶を以て莊嚴すといふ、えんまが惡人の罪科を審判する所、故に廳といふ。＝閻魔廳。
【閻羅人】エンラニン　佛地獄の卒。正法念經「——答二罪人一云、汝本作二惡業一、爲二欲樂所一レ誑、彼時何不レ悔、今悔何所レ求」

【闇】コン　元
○もんばん、特に、宮中の門を

守る賤者「―人」○門。又、天の門。楚辭「吾令帝―開關兮」(帝―は天門)○轉じて御所のもん(宮門)＝禁門・宮闕。

解字 昏時を以て門を閉づるの隷なり、故に門昏に从ふ。

【叩レ閽】宮闕に詣りて冤を訴へる義〔正字通〕

【閽寺】內廷に奉仕する宦官、もと宮刑に處せられし者を用ひて門番とせし故。寺は侍。禮、內則「深レ宮固レ門、――守レ之」＝閽侍・寺人・宦寺・閹寺。

【閽侍】前條に同じ。李商隱文「晉干ニ――ニ、獲レ拜ニ堂皇ニ」

【閽人】もんばん。周禮、天官「――掌ニ守王宮中門之禁ニ」

【閽者】もんばん。禮、祭義「――、守レ門之賤者也」＝閽人。

【閽吏】もんばん。羅隱文「中閒輒以ニ所レ著讒書ニ上ニ于――ニ」

【閶】シャウ 陽

○天上世界の門。

【閶闔】○天上界の最初の門。淮南、原道「排ニ――ニ、鑰ニ天門ニ」○轉じて宮門の稱。○西の風。又、秋風。史、律書「――風居ニ西方ニ」

【閾】ヨク・ヰキ キョク 職 職

○しきみ、門の界の横木(門限)「戶―」「門―」「城―」論、鄕黨「行不レ履レ―」○轉じて、內外の區限。又くぎりをつける。賈至文「喉ニ咽九州ニ閾ニ一中夏ニ」

九畫

【闇】㊀アン ㊁アン 勘 感 覃

㊀くらし(冥)光うすし「幽―」「昏―」暗と通ず。○とづ(閉門)○くらます、おほふ、くらくす。○くもる。くらむ。○おろか(蒙昧)「―愚」○くらがり。○ゆふぐれ(昏時)よる(夜)○日月の蝕。○隱晦の貌「―然」㊁喪に居るいほり「諒―」○國やみ、暗き夜。又、心がくらむ。

【闇虛】月蝕の時、地の影が蔽ふ所の暗き處〔後漢書、天文志、注〕

【不レ欺ニ闇室ニ】人の見ざる暗き室にても惡を爲さざるは愼みの至りなり。正字通「程子曰、學始ニ于不レ欺ニ闇室ニ」＝不レ愧ニ屋漏ニ

【不レ侮ニ闇室ニ】前條に同じ。世說、德行「長之一生、――」長之は阮長之。

【闇合】期せずして符合する。陸機、文賦「必所レ擬之不レ殊、乃――ニ乎曩篇ニ」＝暗合。

【闇僞】道理にくらくしていつはる。後漢書、劉梁傳「明智之所レ得、――之所レ失也」

【闇斫】やみうち。世說「王緋嘗在ニ別牀ニ眠、母自往――ニ之ニ」

【闇弱】おろかにしておくびやう。易、蒙卦、疏「蒙者微昧――之名」

【闇淺】くらくあさはか。張詠文「修辭――、未レ涉ニ作者之流ニ」＝淺闇。

【闇然】自ら隱晦してあらはさざる貌。中庸「君子之道、――而日章」

【闇惰】心くらくしておこたる。陶弘景文「伏願宥以ニ――ニ」

【闇同】期せずして自ら一致する。世說「老莊正與ニ人意ニ――」＝闇合。

【闇莫】くらき貌。枚乘、七發「榛林深澤、煙雲――」

【闇蔽】おろか。吳志、步騭傳「受性――、不レ達ニ道數ニ」

【闇昧】○事理にくらくおろか。易林「――不明、耳聾不聽」＝暗昧・闇愚・蒙昧。○くらくして明かならず。論衡「上古久遠、其事――、故經不レ載」

【闈】ヰ 微

○宮中の大門の傍の小門「禁―」「皇―」○轉じて宮中のおくむき、后妃の居所(後宮)「宮―」禮、雜記「夫人至、入レ自ニ―門ニ」○奧座敷、內室。束皙詩「眷ニ戀庭―ニ、心不ニ遑安ニ」○試院、卽ち官吏の登用試驗をする所の稱。會試を春―、鄕試を秋―といふ〔唐國史補〕

【闉】イン 眞

○ふさぐ(塞)○まがる(屈曲)○ついぢ(城門外の副城)○城內の二重門「城―」

【闊】クワツ 曷 濶は俗字

○とほし(遠)○とほざかる(隔)○ひろし(廣)狹の對。○心が大きく細事にかかはらず。○まばら(疏)あらし「疏―」○てがるし(簡)「簡―」○ゆるやか(寬)ゆるくする、輕くする。漢書、王莽傳「―ニ其租賦ニ」○そむく(乖)○つとめくるしむ(勤苦)詩、衞風「死生契―」○うとし(疏遠)○久しく相見ず「久―」詩、邶風「吁嗟―兮」○まはりどほし、世事に通ぜず「迂―」

同訓異義 ヒロ 闊・廣・博・弘・汎・寬の別

は廣(五九三頁三段)の條を見よ。

【闊葉樹】葉のひろき樹木、なら・くぬぎ・かしの類。

【闊屋】ひろきいへ。淮南子「廣廈――、連闥通房、人之所レ安也」

【闊臆】ひろきむね。孫楚文「其爲レ相也、疏尾――」

【闊狹】ひろきと、せまきと。史、天官書「大小有レ差、――有レ常、水火金木塡星、此五星者天之五佐、爲ニ經緯ニ、見伏有レ時」＝廣狹・寬狹。

【闊袖】ひろきそで。窄袖の對。宋史、韓侂胄傳「朱熹奏ニ其姦ニ、侂胄怒、使下優人峩冠――象ニ大儒ニ戲中於上前上、熹遂去」＝寬袖。

【闊然】廣き形容。除陵、與ニ宗室ニ書「三條不レ遠、五達非レ難、信乃――、遂不レ蒙レ問」＝豁然。

【闊疏】事情にうとくぬけめあり。論衡「周法――、不レ可レ因也」

【闊大】ひろく大いなり。

【闊達】心ひろくして小事にかかはらず。後漢書、馬武傳「爲レ人嗜レ酒、――敢言」＝豁達。

【闊別】久しく別れて面會せず。王羲之文「――稍久、眷與レ時長」

【闊步】おほまたにあるく。安心して自由に動作する。魏文帝、漢文論「得ニ――高談無ニ危懼之心ニ」

【闊漫】はてしもなく廣き貌。南徐州記「京江禹貢北江也、――三十里」

【闊落】細密ならず。蘇軾詩「體勢本――、結束入ニ細麼ニ」

【闊略】○おほまかにしてゆきとどかず。＝疏略。○罪をゆるして見のがす。後漢書、鍾離意傳「改化之本、由レ近及レ遠、今宜下先清ニ府內ニ、且――中遠縣細微之愆上」

【闃】ケキ 陌 通音ゲキ

ひっそりとしづか。靜かにして人なし「空―」「幽―」「寥―」易、豐卦「―其无レ人」疏「闃ニ視其室ニ、―寂无レ人也」

【闃寂】しんとして物さびしく靜か。韓偓詩「林塘――偏宜レ夜」字解參看。

【闃然】しづかなる貌。范成大詩「窮巷閉門本――」

【闋】㊀ケツ ㊁ケイ 屑 霽

㊀をはる(訖)音樂の一曲が終る「樂―」歌曲一首を一―といふ。漢書、張良傳「歌數―」○やむ(止)○やすむ、いこふ(息)休息する。詩、小雅「俾ニ民心―ニ」○つく(盡)漢書、王莽傳「日―亡レ儲」○むなし(空)莊、人間生「瞻ニ彼―者ニ、虛室生レ白」室は心に喩ふ、心空虛なれば則ち純白なる義。㊁やむ(止)

【闍】㊀ト ㊁ジャ 虞 麻

㊀うてな、城門の臺。詩、鄭風「出ニ其闉―ニ、有レ女如レ荼」○ものみ(城上の重門)○外城の市里。㊁梵語ジャ音の音譯に用ふ。

闍維 ―維は死せし僧侶を火葬する義。＝荼毘○闍阿―梨は僧の師たるべき者。又、僧の稱號。

【闍梨】僧の稱號。翻譯名義集「梵語阿遮梨耶、唐言ニ軌範ニ、今稱ニ―ニ―、隋言ニ正行ニ、能糾ニ正弟子行ニ故、亦作レ黎」＝阿闍梨。

【闟】ユ 虞

窺ひ望む。私に視る。左思、魏都賦「距ニ遠關ニ以―」

【闌】ラン 寒

○しきり、ませ、やらい、おばしま、てすり(欄)「―干」○さへぎる(遮)ふせぐ(閑)阻隔する。戰國策「晉國之去レ梁也、千里有餘、有ニ河山ニ以―レ之」○たけなは(酣)まっさかりの時「酒―」「宴―」○おそし(晚)時のおくれたる時、なかばすぎ、をはり(終)つく(盡)「夜―」「歲―」○まばら(稀)○みだりに(妄)○わりふなくして門などを出入する、無斷にてする「―出」「―入」○かたなかけ。やりかけ、車上の兵架。＝蘭。

同訓異義 タケナハ 闌・酣○闌は事の半を過ぎたる義、酒宴などに、人の半は去り、半は酣る頃をいふ。興闌はおもしろき興味の最中を過ぎたるをいふ。○酣は醉の十分なるさま、ひろく事の最中をいふ。興酣・戰酣と用ふ。

【闌駕上書】君上の駕を遮りて直訴する〔輟耕錄〕＝闌轎。

【闌干】○てすり。李白詩「沈香亭北倚ニ――ニ」＝欄干・欄杆。○淚の多く出づる貌。白居易、長恨歌「玉容寂寞淚――」○まぶた(眼眶)〔韻會〕○縱橫に散りみだれる貌。左思、吳都賦「金鎰磊砢、珠琲――」○星の光のあざやかにきらめく貌。古樂府「月沒參橫、北斗――」

【闌珊】衰へる貌。又、散り亂れる貌。李羣玉詩「絲管――歸客盡」＝衰落。

【闌出】制限以外にみだりに出す。史、汲黯傳「――財物于邊關ニ」

【闌楯】てすり。南史、梁蕭正義傳

「廣二其路一、旁施二——一」＝欄干。

【闌天】南天燭の一名。花曆百詠「——則天竹」＝南天竺・闌天竹。

【闌入】ゆるしを得ずして妄に入るべからざる所に入る。漢書、成帝紀「—二—尙方掖門一」注「無二符籍一妄入レ宮曰レ闌」

【闌斑】色のまだらにして純一ならざる貌。後漢書、南蠻傳「衣裳——、語言侏離」＝斕編。

十畫

【闓】㊀カイ　㊁カイ　賄　灰

㊀ひらく（開・闢）○とく（解）

㊁あきらか（明）○ゆがけ（決）弓を引くとき、右手の指に纏ふもの。

【闔】カフ　合

○門のとびら（門扉・門扇）○とづ。とざす（閉）しめる。○すべる（總合）すべて、皆擧りて「—家」「—郡」○とま（苫）○なんぞ、なんぞ何 何せざると反りて讀む。＝盍。○闔—は天上の門（淮南、原道）

同訓異義　闔・閉・鎖・杜・閟・關の別は閉（門部三畫）の條を見よ。

【闔家】一家のこらず。＝全家・渾家・擧家。

【闔郡】郡内のこらず。漢書、武帝紀「今或至二——而不一レ薦二一人一」

【闔戸】とをとざす。宋史、趙普傳「晚年手不レ釋レ卷、歸二私第一——レ—啓レ篋、取レ書讀レ之竟日」＝閉戸。

【闔國】國内のこらず。＝全國・擧國。

【闔闢】とづると、ひらくと。易經「一闔一闢謂二之變一」＝開閉。

【闔門】もんをとざす。後漢書、盧植傳「——レ—教授」＝闔戸。

【闔閭】居室をいふ、次條に同じ。

【闔廬】○いほり、居室。左、襄十七「吾儕小人、皆有二——一」晏子春秋には廬を閭に作る。○春秋時代の吳王の名。

【闕】ケツ　月

○宮城の門觀、禁門、二臺を門外に築き樓觀を其の上に設け、中央闕けて出入の道と爲すもの。○宮城、朝廷。○かく。かけ。はぶく。＝缺。○うしなふ（失）あやまつ（過）○きず（過疵）○むなし（虛）とぼし（乏）○すき（空隙）○そなへず（不供）○城の闕を合はさず、少しく缺く。○こぼつ（毀）○のぞく。○うがつ（穿）ほる（掘）左、隱元「—地及レ泉」○—翟は雉の羽のかざりある古の王后の六服の一。＝闕狄。○游—は游軍の闕けたる所を補ふもの。左、宣十二「游—四十乘」○鉅—は良劍の名（荀、性惡）

同訓異義　闕・缺・欠・虧・玷の別は缺（二五一〇頁三段）の條を見よ。

【闕遺】かけのこる。漢書、司馬相如傳「今封疆之內、冠帶之倫、咸獲二嘉祉一、靡レ有二——一矣」

【闕員】定員に不足あること。舊唐書、韋陟傳「——既少、取レ士良難」＝缺員。

【闕掖】宮中、掖は正門の左右の小門。論衡「發二于臺下一、讀二于——一」＝禁掖・宸掖。

【闕焉】闕然に同じ。焉は助辭。史、仲尼弟子傳贊「余以二弟子名姓文字一、悉取二論語弟子問一、竝次爲レ篇、疑者——」

【犯レ闕】宮城にをかし入る。五代史、周太祖德妃董氏傳「年十三、嫁二劉進超一、契丹—レ—、進超歿二于虜中一、妃蹩二居洛陽一」

【闕下】天子の宮闕の下。轉じて天子。又、朝廷の義とす、敢て斥言せざるなり。史、封禪書「上二書——一」

【闕閣】宮門のたかどの。洛陽伽藍記「見二其——華美一」

【闕疑】うたがはしきものは姑く取り除けておく。論、爲政「多聞—レ—、愼言二其餘一則寡レ尤」

【闕畫】天子又は貴人の名の字を書くとき敬意を表する爲めに其の字畫を省きて書く、淸の康熙帝の諱の玄の玄を省きて𤣥と書くの類。

【闕誤】かけてあやまりあり。吳志、周瑜傳「瑜少精二意于音樂一、雖二三爵之後一、其有二——一、必知レ之、知レ之必顧、時人謠曰、曲有二——一、周郎顧」

【闕字】○文章中にて敬意を表する爲め天皇又は貴人の名の上を一二字あけてかく。○文詩中の脫字。

【闕失】あやまち。五代史、[illegible]傳「喜二論議一、每レ陳二朝廷——一、多斥二權臣一」＝過失。

【闕如】はぶく、とり除きておく。論、子路「君子於二其所一レ不レ知、蓋——」如は助辭。

【闕所】國○古、莊園などの所有主が亡びて其のままになりてゐる所。○德川時代、追放以上の犯罪人に課せし附加刑にて領地財產等を沒收するもの。＝籍沒。

【闕政】おちどのあるまつりごと。阮籍文「朝無二——一、民無二謗言一」

【闕席】國出席せず。＝缺席。

【闕然】缺けて全からざる貌。史、封禪書「厥曠遠者、千有餘載、近者數百載、故其儀——堙滅」＝闕焉。

【闕翦】そぎ削る。左、成十三「欲下

—二—我宮室一、傾中覆我社稷上」＝摧毀。

【闕レ殆】心に安からず思ふものは、そのままにしてさしおく。論、爲政「多見—レ—、愼行二其餘一、則寡レ悔」

【闕腋】國古、武官が行幸・節會などの時に著たる制服。兩腋をぬひ合さず。

【詣レ闕】朝廷にいたる。漢書、朱買臣傳「重車至二長安一、—レ—上レ書、書久不レ報」

【闕忘】わすれる。宋史、宋太初傳「因筆而箚レ之、以備二——一耳」

【闕文】字句の脫落したる文章。陸機、文賦「收二百世之——一、採二千載之遺韻一」

【闕本】はほん、卷數の不足せる書物。＝缺本。

【闕里】今の山東省曲阜縣內の地。孔子の生地（曲阜志）

【闕略】かきてはぶく。唐書、太宗紀贊「詩書所レ載、時有二——一、然三代千有七百餘年、傳二七十餘君一、其卓然著二見於後世一者、六七君而已」

【闕漏】○かけもれる。ておち。諸葛亮、出師表「裨二補——一」○あき、罅隙。

【闑】ゲツ　ゲチ　屑

○門のしきみ（門梱・門限）門中に竪てて內外を礙ぎる木「門—」＝橛。○轉じて內外のしきり。漢書、馮唐傳「—以內寡人制レ之」

【闒】タフ　合

○さと、むら（里）○ものみやぐら（門樓）のやね。○—茸はいやし（下賤）又にぶし（駑頓）

【闒茸】○みだらにしていやし（猥賤）闒は下、茸は細かなる毛にて豪桀の反對。漢書、司馬遷傳「在二——之中一」○にぶし（駑頓）不肖。賈誼傳「——尊顯兮」

【闖】チン　沁　寢

○うかがふ（覘）○頭を出す貌。○俗不意に人の席に突入するを—席といふ「—門」○—王は明末の流賊、李自成の稱號。

解字　馬が門を出る貌。

【闖將】無賴の義。白頭閑話「都人或十五結レ黨、橫二行街市閒一、號爲二——一」

【闖然】頭を出す貌。公羊、哀六「開レ之則——公子陽生也」

【闖入】○うかがひ入る。○俗不意にあばれこむ、突き入る。

【闐】テン　先

○みつ（滿）「—門」○——は鼓の聲。又、群り行く聲。又、車馬の聲。又、さかんなり（盛）○于—は西域の國名。＝于寘。

【闐溢】滿ちあふれる。韓詩外傳「精氣——」＝充滿。

【闐噎】みつ。左思、吳都賦「冠蓋雲蔭、閭閻——」＝闐溢。

【闐闐】○鼓の聲。詩、小雅「振旅——」○群り行く聲（爾雅、釋天、注）○盛んなる貌。博雅「——、盛也」○車馬の聲。蜀都賦「車馬雷駭、轟轟——」○雷の聲。宋玉、九辯「屬二雷師之——一兮」

【闐レ門】もんに滿つる。史、汲鄭傳「始翟公爲二廷尉一、賓客—レ—」

十一畫

【闚】キ　支　窺に同じ

○うかがふ、ちらとのぞく、ひそかにさぐり見る。○いざなふ（誘）

【闚伺】ひそかにすきをうかがふ。劉琨、請二北伐一表「—二—閒隙一、寇抄相尋」

【闚以二重利一】多くの利益を以て誘ひみちびく。史、刺客傳「愚以爲、誠得二天下之勇士一、使二於秦一、——」

【闚望】うかがひのぞむ。書經、傳「兵法攻レ城築レ土爲レ山、以—二—城內一、謂二距堙一」

【闚覦】望むまじきものをこひねがひもとめる。後漢書、河閒孝王開傳「謀二圖不軌一、—二—神器一」＝覬覦。

【關】㊀クヮン・ケン　㊁ワン　刪　刪　俗に開・関に作るは非

○くゎんのき、門をとづる橫木（門）○せきしょ、せき。國境又は要害の地に設けて通行者の出入を簪める所「玉門—」「居庸—」孟、公孫丑「—市譏而不レ征」○港の入口「海—」「江—」○はかのもん（墓門）○しめくくり、物事のとりしまり（要會）○しきり（界限）○とほる（通）つらぬく（貫）つらなる（聯）「—聯」うがつ（穿）いる（入）○とづ、とざす（閉）門をしめる。陶潛、歸去來辭「門雖レ設而常—」ふさぐ（塞）ふせぐ「—防」○からくり（機械）「機—」○あづかる（與）かかはる「—與」「僕不—焉」○わたる（涉）かかる（係）○よる（由）漢書、董仲舒傳「太學者賢士之所—也」○もとむ（索）○まうす（白）○官文書。主として照會

文。○寸口と尺澤との間。○腹中に呼吸する氣のをさまるところ。○――は鳥のやはらぎ鳴く聲。○閒―はくるしむ貌。崎嶇展轉の貌。㊁弓をひく、ひきしぼる(彎)孟、告子「越人―弓而射之」國○せき、力士の首席。又强き力士の敬稱「大―」「―取」○へだて「人目の―」

同訓異義 アヅカル 關・預・與・干○關はたづさはると譯す、氣にかかる意あり。玉篠「事關二風敎一」○預は參預と連用し、その事に立ちまじはる義。左傳「毋レ使三婦人預二國事一」○與は預と音義共に同じ。論語「吾不レ與レ祭、如レ不レ祭也」○干はをかすと訓む字なれば、我よりさし出て、事にかかり合ふ義。干涉と用ふ。

【關奧】せきしょと、おくと。○主要なる場所の義。南史、劉悛詩「三吳國之――」

【關レ意】きにかかる。梁昭明太子文「鶴蓋龍旂、初不レ―レ―」＝關心。

【關右】關西。關東を關左といふの對。王粲、從軍詩「相公征二――一、赫怒震二天威一」

【關尹】せきもり、關門を守る役人のかしら。周語「敵國賓至、――以告」＝關令・關令尹。

【關羽】三國時代の蜀の猛將、字は雲長、張飛と共に劉備に事へ、前將軍に拜し、威華夏に振ふ、死して神と爲る、卽ち關帝廟。

【閉レ關卻掃】門を閉ぢて人と交際せず。江淹、恨賦「敬通見レ詆、罷二歸田里一、――、塞レ門不レ仕」

【關礙】ささへとどめる。舊唐書、顏眞卿傳「不レ許二――一、所三以防二壅蔽一也」＝阻礙。

【關閉】せきしょのもん。管子「――不レ開、善否無レ原」

【關譏】せきしょにてしらべあらためる。孟、梁惠王「關市譏而不レ征」

【關懷】こころにかける。南史、謝靈運傳「出爲二永嘉太守一、郡有二名山水一、靈運素所二愛好一、肆レ志遨遊、動經二旬日一、理レ人聽レ訟、不二復――一」＝關意。

【關關】鳥の和ぎて鳴く聲。詩、周南「――雎鳩、在二河之洲一」

【關荊】關仝と荊浩と、皆宋の名畫工。張羽、米南宮、雲山歌「洪谷之後有二――一營丘一」＝荊關。

【關係】○かかはる。かかりあひ。＝關繫。○國男女が私かに情を通ずる。

【關扃】とざす。戰國策「秦下レ兵攻二衞陽一、晉必――二天下之匈一」

【關繫】かかりあふ。＝關係。

【關徼】國境に在るせきしょのもん。後漢書、西域傳「至二于宣元之世一、遂稱二蕃臣一、――不レ閉、羽檄不レ行」

【關徼之徼】せきしょを設けて往來する人をあらためる警戒。後漢書、南匈奴傳論「罷二――一、息二兵民之勞一」徼は警。

【關鍵】○くゎんぬきと、かぎと。老子「善閉無二――一、而不レ可レ開」○轉じて物事のかなめ、樞要。嵇康、答難養生論「上以二周孔一爲二――一」

【關堠】せきしょに立てたる一里づか。何承天文「界上嚴立二――一、杜二廢閑蹊一」

【關左】關東に同じ。北史、孫紹傳論「孫紹――之士、又能指二論時務一」

【關鑽】門のぢゃうまへ。門戶のしまり。韓翃詩「披レ衣開二客至一、――於レ此開」＝關鑰。

【關塞】くにざかひに在る、せきしょと、とりでと。漢書、賈山傳「築二長城一、以爲二――一」

【關山】○關所と山と。木蘭詩「萬里赴二戎機一、――度若レ飛」○鄕里の境なる山。轉じてふるさと。徐陵詩「――三五月、客子憶二秦川一」

【關市】せきしょと、いちばと。孟、公孫丑「――譏而不レ征」

【關人】せきしょの役人。儀禮「及レ境謁二――一、――問二從者幾人一、遂以入レ境」

【關心】心にかかる、心配。王維詩「晚年唯好レ靜、萬事不レ―レ―」＝關意。

【關津】せきしょと、わたしばと。漢書、王莽傳「――苛留」

【關情】心にかかる。陸龜蒙詩「酒香偏入レ夢、花落又―レ―」＝關心。

【關雎之化】關雎は、詩經、周南の詩の篇名、周の文王の后妃の德を詠ぜしもの、よりて人君夫妻和合の德が天下の人民を化する義とす。張說文「內被二螽斯之德一、外偃二――一」

【關燧】關所に設けたるのろし。齊書、太祖紀「今――無レ虞、時和歲稔、遠邇同風、華夷慕レ義」

【關西】○函谷關以西の地。卽ち陝西・甘肅二省の地。後漢書、楊震傳「――孔子、楊伯起」＝關右。○國近江國逢坂山(一說函根の關)以西の地方。

【關西出レ將關東出レ相】漢代の諺「後漢書、虞詡傳」秦の白起・王翦・漢の李廣・趙充國などの名將は關西より出で、漢の蕭何・曹參・魏相・丙吉などの名相は皆關東より出づ。

【關西孔子】孔子は關東の人、それに對し、楊震は山西の人なるが故に孔子に比して關西といふ。後漢書、楊震傳「震字伯起、弘農華陰人、明經博覽、無レ不二窮究一、諸儒爲二之語一曰――、楊伯起」

【關征】せきしょにて取り立てる稅。宋史、米信傳「稱二官物一以免二――一」＝關稅。

【關稅】○古、關所にて物品に課する稅。＝關征。○輸出入の物品に課する稅。＝海關稅。

【關說】旅人が途中の關所を通ずる如く他人を中に立てて說く。史、梁孝王世家「大臣及袁盎等、有レ所レ――于景帝一」

【關節】○ふし。骨のつがひめ。素問「――中液出、不レ得二屈伸一」○要路に居る人に賄賂を贈りてたのみこむ。國史補「造二請權要一、謂二之――一」

【關涉】かかはりたづさはる。沈約文「精進勤劬、觸レ事――」＝干涉・關係。

【關綜】あづかりて總べをさむ。魏書、崔浩傳「百家之言、無レ不二――一」

【關內】せきしょのうち、函谷關より內をいふ。史、高祖紀「悉發二――兵一、收二三河士一」

【關內侯】○麾下の士。史、春申君傳「秦楚合而爲レ一以臨レ韓、韓必爲二關內之侯一」○六國時代より漢代にありし爵の名。領地を與へず、祿のみを給す。漢書、百官表「爵十九――」

【關柝】門戶の開閉に用ふるくゎんぬきと、非常を警戒するひゃうしぎと。易林「――開啓、衿帶解墮」

【關託】他より手をまはして人にたのみこむ。關說請託の義。唐書、李德裕傳「―二―大臣一」

【關張】關羽と張飛と、共に蜀漢の劉備の勇將。岑參詩「蜀相凌二――一」李商隱詩「――無レ命欲二何如一」

【關中】陝西省をいふ。東は函谷關、南は武關、西は散關、北は蕭關にかこまれたる故。史、項羽紀「――阻二山河一四塞、地肥饒可二都以霸一」

【關楮】政府にて發行せし受取證書。楮は紙(宋史)

【關帝】蜀の關羽を神としてまつりし尊稱「――廟」關羽參看。

【關仝】五代の時の長安の人、善く山水を畫く、好みて秋山寒林の圖を作る、荊浩を師として浩と名を齊しくす。

【關東】○函谷關以東の地、河南・山東地方。越絕書「句踐伐レ吳、霸二――一」＝關左。○山海關以東、奉天・吉林・黑龍江三省を――三省と稱す。○國もと近江國逢坂山以東。後世、相模國箱根山以東、所謂――八州の地。

【關東八州】國相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野の八國。＝關八州。

【關防】○せきしょ。韓愈詩「蜀險谿二――一、秦師縱橫滑」○關防印の略。

【關防印】○官府の公文書に奸僞をふせぐ爲めに押す印。明太祖實錄「朕初于二文籍一設二――一記一者、本以絕二欺蔽一防二奸僞一、特一時權宜爾、果正人君子、焉用レ是爲」○書畫幅の右肩に押す長方形の印(引首印)

【關白】○啓白して天下の政事をあづかり聽かしむ。又、其の職。漢書、霍光傳「諸事皆先―二―光一、然後奏二御天子一」○國官名、光孝天皇の時、藤原基經始めて――と爲る。

【關牡】とざし、ぢゃう。宋濂詩「尋レ鶴陟二蛤磴一、避レ人下二――一」

【關門】○關所の門。周禮、地官「國凶札、則無二――之征一、猶幾」○門をとざす。蘇軾詩「畏レ虎――早、無レ村得レ米遲」

【關鑰】くゎんぬきと、ぢゃうと。新論「口者言語之門戶、舌者門戶之――」＝關籥。

【關與】かかはりあづかる。晉書、羊祜傳「勢利之求、無レ所二――一」＝關係。

【關覽】其の事にわたりて目を通す。後漢書、文苑傳「少好レ學、多二――一、而任レ情不レ羈」＝瀏覽。

【關吏】せきしょの役人。漢書、終軍傳「――識レ之」

【關令】關尹に同じ。＝關令尹。

【關捩】機軸に同じ。捩一に棙に作る。黃庭堅文「四萬八千――子、與レ君一個鑰匙開」

【關聯】かかりあふ、關係してつらなる。＝聯關。

十二畫

【闓】㊀キ ㊁クヮイ 紙 佳

㊀ひらく(開)門を闓く。魯語「―門與之言、皆不レ踰レ闓」㊁門が斜に開く。司馬光詩「體羸畏二風冷一、室處門常―」

【闞】㊀カン ㊁カン 勘 豏

㊀みる(視)○のぞむ(臨)嵇康文「俯―二海湄一」○魯國の邑の名。㊁虎の怒りて吼える聲「哮―」○虎の怒る貌。詩、大雅「―如二虓虎一」

【闞闞】○勇敢なる貌。周禮、地官、保氏「敎レ之以二六儀一、五曰、軍旅之容」注「軍旅之容、――仰仰」○虎のほえる聲。獨孤及、招二北客一文「餓虎爭レ肉、吼怒――」

【闟】㊀キフ ㊁タフ 緝 合

㊀やすくおちつく(安定)○とづ(闔)○てほこ(鋋)史、商君傳「持レ矛而操二闟戟一者」○はこ(函)○たたずむ、佇立する貌。

㊁―茸は、いやし、おとる（猥賤）古、闒に通ず。

【闒然】キフゼン ○佇立タタズムする貌。管子、小問「――止、瞠然視」○安定オチツクなる貌。史、匈奴傳「――更始」

【闒茸】タフジョウ あしくおとる（猥賤）任昉文「闒闒――、名教所レ絕」

【闠】クワイ キ 隊 寘

○市の外門。○轉じて市の義とす「闤―」○みち（道）「闤―」

【闡】セン 銑 先

○あく、ひらく（開）○あきらか（明）開き明らかにする。○おほいなり（大）○ひろむ。○ひろまる（廣）「恢―」「開―」○あらはす。あらはる（顯）「昭―」

同訓異義 ヒラク 闡・開・闢・啓・發・披等の別は開（二〇七八頁三段）の條を見よ。

【闡幽】センイウ ふかくかくれたるものを開き明らかにす。易、繫辭「夫易彰レ往而察レ來、而微顯―レ―」

【闡繹】センエキ ひらきのべる。後漢書、班固傳「厥有二氏號一、紹レ天――者」

【闡校】センカウ あきらかにしただす。謝靈運文「制レ規作レ訓、――修レ經」

【闡究】センキウ あきらかにしきはめる。宋史、律曆志「蔡元定著二律呂新書一、朱熹稱三其超然遠覽、――精微二」

【闡弘】センコウ ひらきひろげる。晉畦、樂章「明明肅祖、――帝祚二」

【闡濟】センサイ ひらきみちびきて成しとぐ。晉書、文帝紀「惟公嚴虔三王度一、――大猷二」

【闡士】センシ 高僧の尊稱。＝開士。

【闡綜】センソウ ひらきあきらかにしてすべ治める。荀悦文「――大猷一、命立三國典二」

【闡提】センダイ 佛因果を信ぜずして佛法をそしる。闡底迦の略。＝信不具。

【闡發】センハツ ひらきあらはす。

【闡明】センメイ ひらき明らかにする。

【闡揚】センヤウ 明らかにあらはす。晉書、孫楚傳「制レ禮作レ樂、―二―道化二」＝闡明・宣揚。

十三畫

【闤】クワン 刪

○まち（市）○市の外門。又市の垣。○みち（道）

【闤闠】クワンクワイ ○市の門。轉じてまち（市肆）左思、魏都賦「設二――一以襟帶」○市の道路。博雅「――、道也」

【闥】タツ 曷

○宮中の小門「禁―」「宮―」「黃―」漢書、樊噲傳「排レ―直入」○轉じて、宮中。○小さき門。又、門の內。詩、齊風「彼姝者子、在二我―一兮」

【排レ闥】ハイタツ 勢よくとびらをおしひらく。漢書、樊噲傳「噲乃―レ―直入」

【闢】ヘキ ビャク 陌 又、辟に作る

○ひらく。ひらける（開・啓）「開―」○よける、さく（避）○しりぞける（屛除）荀、解蔽「是以―二耳目之欲一」

同訓異義 ヒラク 闢・開・啓・發等の別は開（二〇七八頁三段）の條を見よ。

【闢闔】ヘキカフ 開くと、とづると。林俊詩「楚蜀相犬牙、乾坤五――」＝開闔。

【闢墾】ヘキコン 田畑をひらきをさむ。柳宗元文「乃闢乃墾、乃宣乃理」＝開墾。

【闢邪】ヘキジャ 邪說をひらきしりぞける。徐陵文「―レ―以レ律」

【闢田】ヘキデン 田をひらく。舊唐書、王方翼傳「幼與二傭保一齊レ力勤作、苦心計功、數年―二―數十頃一」＝開田。

阜部（阝）

【阜】フウ ブ 有 通音フ

○くが（大陸）○つちやま（土山）說文「山無二石者一」○をか（岡）「岡―」「丘―」「高―」○高くあつし（高厚）○こゆ（肥）詩、秦風「駟驖孔―」○大いなり。書、周官「―二成兆民一」（―成は大成）○おほし（多）詩、小雅「爾殽既―」○さかん（盛）「殷―」「昌―」「―盛」盛んにする。ゆたかにする「―財」○長ずる。○曲―は孔子の生地。○香―は佛寺。○國こざと、こざとへん。漢字構造上、左にある阝字の稱、右にある阝即ちおほざと（邑）の對。

【阜財】フサイ たからを厚くゆたかにする。又、ゆたかなるたから。舜、南風歌「南風之時兮、可三以阜二吾民之財一兮」

【阜螽】フシュウ いなご。詩、召南「喓喓草蟲、趯趯――」＝蝗。

【阜成】フセイ 大いに性命を成し遂げしめる。書、周官「六卿分レ職、各率二其屬一以倡二九牧一、―二―兆民一」

【阜通】フツウ さかんにかよはす。周禮「商賈―二―貨賄一」注「阜、盛也」

【阜垤】フテツ こだかきをか。新論「登二峭坂一而不二跌墜一者、愼二於大一也、跨二――一而好顚蹶者、輕二於小一也」

【阜繁】フハン さかんにしておほし。孫楚文「族類――、數則千億」＝繁阜・阜蕃。

二畫

【阞】ロク 職

○はした（分數）のこり（餘數）はんぱの數。＝仂。○土地のすぢ、地の脈理。周禮、冬官、考工記「凡溝逆二地―一、謂二之不行一」

三畫

【阤】㊀シ・チ ㊁タ ㊂タ 紙 哿 歌 或は陁に作る

㊀やぶる（毀）○すこしくくづれる（小崩）後漢書、李膺傳「綱紀頹―」○おつ（落）○きし（崖）○さか（阪）㊁陀に同じ。陂―タハは土地の平かならざる貌。史、司馬相如傳「登二陂―之長阪一」＝陂陀。○―靡は山勢峻長の貌。

【阤崩】チホウ くづれる。周語「聚不レ―レ―、而物有レ所レ歸」註「大曰レ崩、小曰レ阤」

【阡】セン 先 霰

○田間の南北のあぜみち（一說に、東西のあぜみち）○草の密に茂れる貌。＝芊。○はかみち（墓道）歐陽修、瀧岡阡表「始克表二於其―一」○數字の千に通用す。又、仟に作る。

【阡阡】センセン 草木の密茂の貌。謝朓詩「遠樹曖――」＝芊芊・仟仟・阡眠。

【阡陌】センハク 田間の道。東西を陌といひ、南北を阡といふ。一說に東西を阡、南北を陌といふ。四書備考「秦孝公用二商鞅一、廢二井田一、開二――一」＝仟佰。

【阡眠】センミン 草木の茂りて密かなる貌。楚辭、九懷「遠望兮――」＝芊眠。

四畫

【阬】㊀カウ ㊁カウ 庚 陽

㊀あな（坑）大いなるあな。坑に通ず。○たに（壑）○からほり（塹）○あなにす、あなに陷れて殺す。史、始皇紀「有二仇怨一、皆―レ之」㊁をか（岡阜）漢書、揚雄傳「陳二衆車於東―一兮」

【阬儒】カウジュ 儒者をあなに陷れて殺す。史、始皇紀

【阬穽】カウセイ おとしあな。後漢書、袁紹傳「曹操身處二三公之官一、而行二桀虜之行一、罾繳充レ蹊、――塞レ路」＝陷穽。

【阮】㊀ゲン ㊁ゲン 元 阮

㊀周代の國名。今の甘肅省涇州の地。○姓「―籍」「―咸」は共に竹林七賢の一人。○俗に人の叔姪を大―・小―といふ。晉の―籍・―咸、叔姪にして共に盛名あり、故に借りて用ふ。紫薇詩話「大―平生予所レ愛、小―相逢亦傾蓋」㊁原の古字。

【阮咸】ゲンカン ○晉の竹林七賢の一人、字は仲容、籍の兄の子、仕へて散騎侍郞に至る、妙に音律を解し善く琵琶を彈じ樂器を創製す。○樂器の名、月琴の類、晉の阮咸の作、因りて名つく。其の形或は方或は圓なり。「唐書元行沖傳」略して單に阮ともいふ。宋史、樂志「窪―箏筑」

【阮元】ゲンゲン 淸の儒者、字は伯元、芸臺と號す、乾隆の進士、十三經注疏を校刊す。

【阮籍】ゲンセキ 晉の竹林七賢の一人、字は嗣宗、瑀の子、性不羈にして、喜怒形れず、尤も老莊を好み、酒を嗜み、能く嘯き、善く琴を彈ず、其の意を得るに當りては、形骸を忘るるに至る、好みて山水に遊び、途窮まるに至る每に輒ち慟哭して反る、官步兵校尉に至る、人阮步兵と稱す。

【阮步兵】ゲンホヘイ 晉の阮籍、步兵校尉となる、故にいふ。世說、任誕「步兵校尉缺、廚中有二貯酒數百斛一、阮籍乃求レ爲二步兵校尉一」

【阯】シ 紙 或は址に作る

○もとゐ（基）漢書、疏廣傳「願立二產業基―一」○なぎさ（小渚）沚と通ず。○交―カウチは安南地方の國名。漢書、武帝紀「合浦交―」―一に趾に作る。

【阱】セイ 梗 敬

おとしあな。中庸「罟擭陷―」＝穽。

【阱擭】セイクワク 獸を捕へる爲めのおとしあなと、わなと。周禮、秋官、雍氏「――溝瀆之利二於民一者」

【阩】陞（阜部七畫）に同じ。

【防】ハウ バウ 陽

○ふせぐ（障）水などをせきとめる。○ふせぎ「海―」「邊―」「國―」○つつみ（隄）土手「隄―」○かぎり（限禁）○ついたて（屛）○まもる。まもり（衞）○そなふ。そなへ（備）用心する「豫―」○さささ、ささへる、とどむ（禁）○あたる（當）詩、秦風「維此仲行、百夫之―」○へや。房に通ず。

同訓異義 フセグ 防・禦・扞・捍・拒・閑 ○防は預防と連用す、あらかじめ用心するなり。衍義「防二未萌之欲一」○禦はさし當りてふせぎ止むるな

り、禦レ敵・禦レ寇の類。○扞は外の害をふせぎて、己を守るなり。捍に同じ。荀子「如三手足之捍二頭目一」史記「舜乃以二兩笠一自扞而下去」○拒はこばみふせぐなり。距に同じ。孟子「能言距二楊墨一者、聖人之徒也」○閑は防に近し、防閑と連用す、定りたる限界を出でざるやうに防ぐ義。書經「雖レ收二放心一閑レ之惟艱」

【防遏】ふせぎとどめる、遏は止。後漢書、寇恂傳「一二一他兵一勿レ令二北度一而已」北史、淸河王懌傳「盡二其智力一一二一羣變一」＝防止。

【防レ意】私欲の生ずるを防ぎとめる。朱熹、敬齋箴「守レ口如レ瓶、一レ一如レ城」如レ城とは堅き城の敵を防ぐに喩ふ。

【防衞】敵をふせぎまもる。書經「五子咸怨」疏「思三善道一以自一二一之一」＝防守・扞衞。

【防扞】ふせぐ。魏書、蕭衍傳「抑令レ入レ城、而以充二一一一」＝禦扞。

【防姦】よこしまなるをふせぐ。禮記「政以一二其行一、刑以防二其姦一」

【防寒】さむさをふせぐ。庾信文「波瀾成レ雨、鱗甲一レ一」

【防寒具】寒氣をふせぐ用具。手袋・外套など。

【防葵】藥草の名〔本草〕

【防救】ふせぎすくふ。後漢書、張衡傳「臣官在二于考一レ變禳レ災、思レ任二一一一、未レ知レ所レ由、夙夜怔營」

【防拒】ふせぐ。又ふせぎ。魏書、彭城王勰傳「劉均等、扇二動三齊一、蕭衍遣レ將騷二擾邊陲一、劭頻有二一一之効一」

【防禦】○ふせぐ「一一力」○一一使は唐代の官名。位、團練使の下に在り。事物紀原「舊唐書志曰、至德後、中原大郡、要害之地、置二一一使一、以治二軍事一、不レ賜二旌節一也」

【防口】人のものいふことをとどむ。鄭語「子產曰、防二民之口一、甚二于防一レ川」

【防溝】敵をふせぐ爲めのみぞ。管子「閉二絕通道一、關二深一一一」

【防穀令】穀物を外國へ輸出し若しくは國內に輸入することを禁ずる法律。

【防材】鐵の鎖にて大いなる材木をつなぎ合せ、敵艦の進入をふせぐもの。

【防止】ふせぎとどむ。＝防遏。

【防秋】北方の夷狄は秋季になれば、勢、盛んにして中國に侵入す、故に夷狄を禦ぐ義とす。廣雅「匈奴以レ秋至、故曰二一一一」高適詩「青海只今將レ飮レ馬、黃河不レ用更一レ一」

【防臭劑】惡臭をふせぎとめる藥。にほひどめ。

【防身刀】身をふせぎ守る刀。通鑑、宋紀「取二帝一一一刎レ之」＝護身刀。

【防水】みづをふせぐ。史、周紀「防二民之口一、甚二于一レ一一」＝防川。

【防水布】水をはじくやうに塗料をひきたるぬの、雨具に用ふ。

【防泄】もるをふせぐ。韓愈詩「一レ一塹夜塞、懼レ衝城晝扃」

【防川】川をふせぐ。防口參看。

【防戰】ふせぎたたかふ。＝距戰・禦戰。

【防塞】ふさぐ。漢書、谷永傳「宣二布聖德一、閔二民所一レ苦、以慰二綏元元之心一、一二一大姦之隙一」

【防排】水をふせぐと、水はけをよくすると。水經、注「修二一一一、以正二水路一」

【防牌】たて。

【防波堤】なみよけのつつみ。

【防備】敵をふせぐそなへ。後漢書、和帝紀「復收二鹽鐵一、以一二一不虞一、寧二安邊境一」晉書、范粲傳「粲明設二一一一、敵不二敢犯一」

【防レ微】○微をふせぐ、わづかの事にも注意して之を未發にふせぎとどむ。春秋胡傳「春秋一レ一杜レ漸之意、其爲二萬世一慮、深遠矣」○徽行卽ち、天子がしのびあるきをせざるやうにいさめてとめる。

【防腐】腐敗をふせぎとどむ「一一劑」

【防風】○はますがな。海邊の砂地に生ずる草、若芽を食用とし、根を藥品とす。中風を防ぐ功ありといふ。○風をふせぐ「一一林」○周代の國名。今の浙江省武康縣の地。

【防風林】風よけに植ゑたるはやし。

【防人】國王朝時代の國境を防備せし兵。＝戍兵。

【阪】㊀ハン ㊁ハン 阮 潸　坂に同じ

㊀さか、山の傾斜せし所（山坡）○つつみ（坡）禮、月令「善相二丘陵一險原隰一」○（險）けはしくして石などの多き荒地。詩、小雅「瞻二彼一田一」箋「一田、崎嶇墝埆之處」㊁一泉は地名、黃帝が蚩尤を破りし所。

【阪上走レ丸】勢に乘じて、便易なる喩。漢書、蒯通傳「范陽令先下、而身富貴、必相率而降、猶若二阪上走一レ丸也」

【阪泉】地名、直隸省保安縣の東に在り、黃帝、炎帝と一一の野に戰ふ。括地志「一一今名二黃帝泉一、在二懷戎縣東一」懷戎縣は卽ち今の保安縣。

【阪田】けはしくして石などある磽确地。字解參看。

【阪東】國關東地方「一一太郎」

【阪路】さかみち。

【阸】㊀ヤク ㊁アイ 陌 卦

㊀ふさがる（塞）路がふさがる。○運が開けぬ、くるしむ、くるしみ。漢書、元帝紀「百姓仍遭二凶一一」＝阨。㊁せまし、道路が窄狹なり。左思、吳都賦「邦有二湫一一而踡跼一」＝隘。○けはしくせまきみち（隘道）史、始皇紀「閉二關據一一」

【阸窮】運わるくくるしむ。孟、公孫丑「一一而不レ憫」＝阨困・厄窮。

【阸困】くるしむ。くるしみ。史、游俠傳「其言必信、其行必果、已諾必誠、不レ愛二其軀一、赴二士之一一一」＝窮困。

【阸僻】せまく小さし（狹小）揚雄賦「狹二三王之一一一」

五畫

【阿】㊀ア ㊁ア 歌 箇 ㊂ヲク ㊃アツ 屋 曷　㊁通音ア 一音オ

㊀きし（水岸）穆天子傳「天子飮二于河水之一一」○をか、高き岡（大陵）○くま、まがりかど（曲隅）○よる、よりかかる、たよる（倚）○おもねる、へつらふ（諂諛）孟、公孫丑「汙不レ至レ一二其所一レ好」○むね（棟）のき（簷）はしら（柱）四一はあづまや。○太一は古の名劍の名。戰國策「龍淵太一」㊁やはらか（柔）き貌。＝猗。㊂人を呼ぶ時の冠詞、親しみの意を含む「一兄」「一妹」㊃佛弟子の名「一難」○梵語のア音にあてて用ふ「一彌陀」「一羅漢」

【阿姨】○をば、母の姉妹。王獻之文「不レ辭二一一所レ患得レ差否一」○妻の姉妹の稱〔楊妃外傳〕

【阿育】佛佛の滅後百年、摩竭陀國に君臨し、八萬四千の塔を建てし人。翻譯名義集「一一、或阿輸迦、或阿輸柯、此云二無憂王一」

【阿育王山】浙江省、寧波府に在る山の名、西晉の武帝の時、劉薩訶が、この山中にて古塔を發見し、阿育王所建の八萬四千塔の一と信じて崇拜せしによりて名つく。＝育王山。

【阿婉】うつくしき女。楊維楨詩「一一有レ才還有レ累、宮中鸚鵡啄二條桑一」

【阿翁】○祖父をいふ。世說「一一詎宜下以二子戲一レ父上」○婦が夫の父をいふ。＝阿家翁。

【阿伽】佛○佛に供へる淨水。翻譯名義集「一一、此云レ水」＝閼伽。○又、其の淨水を盛る器。

【阿孩兒】あかご。摭言「一雙前進士、兩箇一一一」

【阿縞】齊の東阿縣より產する精微なるねりぎぬ。史、李斯傳「一一之衣、錦繡之飾」

【阿衡】○殷の時の宰相の官名。阿は賴み倚る、衡は平の義、伊尹之に任ず、因りて又伊尹の號とす。書、太甲「惟嗣王不レ惠二于一一一」○宰相をいふ。史、魏世家「魏雖レ得二一一之佐一、曷益乎」

【阿香車】晉の時、阿香といふ女子が雷車を推したりといふ故事に因りて雷の異名とす〔法苑珠林〕半巖詩「阿香推レ車散二飛雹一」

【阿監】宮女を監督する女官。白居易、長恨歌「椒房一一青娥老」

【阿兄】あに。焦仲卿妻古詩「一一得レ聞レ之、悵然心中煩」

【阿嬌】○古の美女の名。轉じて、美人の稱とす。漢武故事「帝爲二膠東王一數歲、長公主抱問曰、兒欲レ得レ婦否、曰、欲レ得、指二女一一一好否、笑曰、若得二一一一當下作二金屋一貯上レ之」○むすめ。輟耕錄「閩中曰二見女一爲二一一一」

【阿含】佛梵語の音譯。釋迦の說きし敎法「一一經」＝無比法。

【阿二】二番目の子女。順次に阿三・阿四といふ。

【阿字觀】佛梵語にて一切の言語は皆アの音より出づ、故に阿字を觀ずれば一切諸法の根本義に達すとの敎義。

【阿奢】俗に乳母の夫の稱。通鑑、唐紀「豐懷貞再娶二韋后乳嫗一爲レ妻、奏請、輒自署二皇后一一一、不レ慙」＝阿爹。

【阿闍梨】佛和尙につぐ僧の稱。師範の義、阿闍梨耶の略。大藏法數「梵語一一一、華言二軌範一、謂三其能爲二人軌範一、故云二一一一一也」

【阿戎】○いとこ。通鑑、齊紀、注「晉安閒人、多謂二從弟一爲二一一一、至レ唐猶然」杜甫詩「守レ歲一一家」○他人の子を稱す。晉書「王戎、王渾子也、少二阮籍一二十歲、籍與爲レ友、籍每レ適レ渾去、輒過觀レ戎、良久、出謂レ渾曰、共レ卿言、不レ如下共二一一一一談上」とあるに本づく。

【阿修羅】佛梵語、略して修羅ともいふ、强力にして梵天帝釋と戰ふ惡魔の神。＝非天・非類。

【阿誰】たれ。蜀志、龐統傳「先主曰、向者之論、一一爲レ失」＝何誰。

【阿世】世におもねる。史、孟子傳「豈有レ意下一二一俗一苟合上而已哉」

【阿僧祇】佛數へきれざる程の非常の大數。＝無數。

【阿那】たをやか。美女のたをやかなる貌。陸機詩「俯仰紛一一、顧步咸可レ懽」＝阿娜・婀娜。

【阿娜】前條に同じ。洛神賦「華容一一、令二我忘一レ餐」

【阿黨】おもねる。禮記「是察二一一、則罪無レ有二掩蔽一」

【阿難】釋迦の弟子の名。釋迦と從兄弟たり、釋迦の歿後、弟子と諸

經を撰集して世に傳ふ。

【阿諂】へつらふ。抱朴子「非二母后之親一、則ーー之人也」＝諛諂。

【阿堵物】錢の異名。阿堵は晉宋間の方言にて、あれ・あのといふ意。晉書、王衍傳「衍口未三嘗言二錢字一、婦欲レ試レ之、令二婢以レ錢繞レ牀不一レ得レ行、衍呼レ婢曰、擧二卻ーーー一」

【阿耨多羅三藐三菩提】佛 諸佛所證の最上の妙道をいふ。＝無上正覺。

【阿婆】ばば、婦人年老いて尊き者の稱。朝野僉載「咸亨已後、人皆云、莫二浪語一、ーー嗔」

【阿呆】國おろか、ばか。

【阿保】まもりそだてる、又其の人。史、范雎傳「不レ離二ーー之手一」

【阿房宮】秦の始皇帝の築きし宮殿の名、山のくまに建てたる故の稱。一說、四阿だての宮殿の義［杜牧、阿房宮賦］

【阿媚】こびへつらふ。抱朴子「ーー曲從、以レ水濟レ水」＝阿諛。

【阿鼻】佛八大地獄の一。淨住子「八大地獄、最下ーー四萬由旬」＝無間地獄。

【阿父】○父を親しみ呼ぶ稱。○をぢ(伯叔父)を親しみ呼ぶ稱。又伯叔父自らいふ。通鑑、宋紀「ーー在、汝亦何憂」注「江南人士呼二叔父伯父一爲二ーー一、爲二伯父叔父一者以自呼」

【阿附】おもねりつく。後漢書、李膺傳「樊陵後以レーー二宦官一爲二節志者所一レ羞」＝迎合。

【阿芙蓉】鴉片の一名。次條參看。

【阿片】英語のあて字。罌粟の實の汁より製せし痲醉劑。＝鴉片・阿芙蓉。

【阿母】○乳母を親しみていふ。史、倉公傳「故濟北王ーー」○母を親しみていふ。通鑑、晉紀「潘岳謝レ母曰、負二ーー一」

【阿瞞】○魏の曹操の小字。李晏詩「鼎足分來漢祚移、ーー曾困二火船一歸」○唐の玄宗の幼名。

【阿彌陀】佛西方淨土の佛の名。名義集「ーーー、清淨平等覺經、譯二無量清淨佛一」

【阿蒙】こどもといふ義。三國志、江表傳「孫權謂二呂蒙及蔣欽一、宜二學問以自開益一、蒙始就レ學、篤志不レ倦、魯肅過レ蒙言議、常欲レ受レ屈、拊二蒙背一曰、吾謂、弟但有二武略一耳、今者學識英博、非二復吳下ーー一、蒙曰、士別三日、卽更刮レ目相待」

【阿耶】次條に同じ。

【阿爺】ちち(父)木蘭辭「ーー無二大兒一、木蘭無二長兄一」＝阿耶・阿爹。

【阿諛】おもねりへつらふ、おべっか。史、平準書「ーー取レ容」＝諂諛・阿諂。

【阿羅漢】佛煩惱を斷ち盡して世間の供養を受くるに堪ふる聖者。又、ほとけ、如來十號の一。大藏法數「梵語ーーー、華言二無學一、謂三其生死已盡無二法可一レ學」

【阿濫堆】唐の玄宗の作りたる笛曲の名。張祜詩「至レ今風俗驪山下、村笛猶吹ーーー」

【阿蘭若】佛寺又は僧庵の義。韻會「浮屠所レ居、西域謂二之蘭若一」遠離處・寂靜・無諍などと譯す。＝蘭若・阿練若。

【阿枉】おもねりまげる。後漢書、第五倫傳「平二銓衡一、正二斗斛一、市無二ーー一、百姓悅服」

【阽】エン テン 鹽 琰

○あやふし(危)○くだす。くだる(下)おとす。おつ(墮)危くする。屈原、離騷「ーー余身一兮而危死」

【阽危】岸に近づきて墜ちんとする、極めて危ふき義。漢書、食貨志「安有下爲二天下一ーー者若レ是而上不上レ驚者上」

【阹】キョ コ 魚

をり、山谷に依りて作りし牛馬の圈。

【阻】ショ ソ 語

○へだつ。へだたる(隔)詩、秦風「道ー且長」○はばむ、氣が弱る。子華子「氣ー而志奪」＝沮。○なやむ、くるしむ(艱)書、舜典「黎民ー饑」○とどむ、やむ(止)「ー止」○けはし(險)けはしき處「峻ー」周禮、夏官、司險「周二知其山林川澤之ー一」○たのむ(恃)ほこりたのむ。左、隱四「ー兵而安レ忍」○よる(依)うたがふ(疑)「疑ー」「猜ー」左、閔二「狂夫ー之」○うれふ(憂)○しきり、へだて、さまたげ。

同訓異義 ナヤム 阻・惱・懊・艱・難・屯等の別は惱(六八四頁一段)の條を見よ。○ヘダツ 阻・隔・障・閒の別は隔(三一一九頁三段)の條を見よ。

【阻阨】けはしくせまし。又、其の處。阨は隘に同じ。史、律書「南越朝鮮、擁二兵ーー一」

【阻害】さまたげ害する、じゃまをする。＝妨害。

【阻礙】へだてさへぎる。易經、疏「西南順位、平易之方、東北險位、ーー之所」

【阻格】さまたげとどめる、じゃまをする。＝阻止・沮格。

【阻隔】遠くへだたる。＝阻深。

【阻澗】深き谷川をへだてる。晉書、劉牢之傳「以二精卒五千一拒レ之、去レ賊十里、ーーレ列レ陣」

【阻艱】けはしくしてくるしむ。白居易詩「貧賤人窮獨、蓬壺路ーー」＝阻難。

【阻徑】けはしきこみち。水經、注「或傾岑ーー、或迴巖絕谷」

【阻睽】へだたりそむく。錢起詩「寸晷戀二言笑一、佳期欲二ーー一」

【阻限】へだてかぎる。王粲文「河山ーー、猨虎當レ路、雖レ遣二驛使一、或至或否」

【阻險】けはしきを恃む。賈誼、過秦論「秦人ーー不レ守」＝險阻。

【阻固】敵をふせぐかため。左傳「高二其壘一、以爲二軍之ーー一」

【阻止】さへぎりとめる、じゃまをする。＝阻格。

【阻脩】へだたりてとほし。白居易詩「雲雨多分散、關山苦二ーー一」

【阻深】山川が遠くへだたる。史、司馬相如傳「道里遼遠、山川ーー、不レ能二自致一」＝阻隔。

【阻峻】けはしく高し。沈約文「北京ーー、東川迥薄」

【阻折】けはしくしてまがる。李白、鳴皐歌「巾二征軒一兮歷二ーー一」

【阻難】けはしくしてなやむ。陸機詩「故鄉一何曠、山川阻且難」

【阻兵】兵の多きをたのむ。左、隱四「ーレー而安レ忍」註「阻、恃也」

【阻遼】へだたりてはるか。傅亮賦「怨二故鄉之ーー一」劉基、燕歌行「崑崙層城阻且遼」

【阼】ソ サク 遇 藥

○祭祀の時などに主人たる者の堂に升る東方の階。支那の堂は東西に階あり、主人は東階よりし、賓客は西階よりのぼる。○天子の卽位の祭を行ふ時に升る東方の階、天子は天下の主たり、故に主階より升る。轉じて帝位の義とす「踐ー」祚に通用す。○涖ーは帝位に臨みて政を聽く義。○ひもろぎ(祭肉)胙に通ず。

【阼階】主人の堂に升る東方のきざはし。論、鄕黨「鄕人儺、朝服而立二於ーー一」

【陀】㊀タ・ダ 歌 ㊁タ・ダ 哿 陁は俗字

㊀陂ーはけはし(險阻)又、地の平かならざる貌。○逶ーは斜めなる貌。梵語ダ音のあて字とす「佛ー」「頭ー」「阿彌ー」㊁やぶる。＝陁。

【陀羅尼】佛衆德を具備する稱。總持と譯す、一字の中に無量の教文を總攝し、一義中に一切義を攝し、一法の中に一切法を任持し、一聲中に無量の功德を藏するが故。佛頂心經「觀世音菩薩說二此ーーー一」○まじなひ。飜譯名義集「然則ーーー此梵語、呪字卽當二華言一」＝呪文。

【陁】

陀(前條)の俗字。

【阺】テイ 薺

○をか(陵)さか(阪)○山の傍の堆くなりて崩れんとする貌。揚雄、解嘲「響若二ー隤一」

【陂】㊀ヒ 支 ㊁ヒ 寘 ㊂ハ 歌

㊀ささへ、つつみ(障)どて(隄防)○さか(阪)○ためいけ(貯水池)㊁かたむく(傾)○よこしま(邪)ななめ(斜)正しからず。易、泰卦「无二平不一レー、无二往不一レ復」○旁の頗れる貌。㊂さか(阪)○ななめなる貌。○ー陀は地の平かならざる貌。

【陂曲】かたよりてよこしま。書經、疏「無二偏私一、無二ーー一」

【陂隤】くづれおつ。應貞賦「壁岸爲レ之ーー」

【陂池】つつみ。又ためいけ。禮、月令「毋レ竭二川澤一、毋レ漉二ーー一、毋レ焚二山林一」

【陂陀】地のななめにして平かならざる貌。司馬相如、子虛賦「登二ーー之長阪一兮」＝陂陁。

【附】㊀フ 遇 ㊁ホウ 有 付と通用す

㊀つく(著)「ー著」○よる(依・寄)○くはふ(加)「ー加」○ます(益)「ー益」○したがふ(從・隨)つき從ふ「ー屬」「降ー」「新ー」○したしむ(親)ちかづく(近)「依ー」「親ー」「畏ー」○ほどこす(施)○わたす「ー與」「交ー」杜甫詩「ー書與二六親一」○合せまつる、合祀する。祔に通ず。禮、雜記「大夫ー二於士一」㊁培・塿に同じ。ー婁は小さき土山。＝培塿。○胕に通ず。漢書、劉向傳「臣幸托二肺ー一」

同訓異義 ツク 附・付・著・就・卽・傳・粘○附は依也、近也、著也と註す、添へつくるなり、附屬・附託と用ふ。史記「附二驥尾一而行、名益ミ顯」○付は畀也、授也、つけわたすなり。魏書「得二財物一、平均分付」○著はひったりとつくなり。漢書「墨子之著レ面」執著と用ふ。○就は卽也、從也、從ひ近づくなり、就二有道一の如し。○卽は直ちにそれにつくなり。卽レ位・卽レ席の如し。○傳は附に同じ。左傳「皮之不レ存、毛將安傳」○粘は糊にてねばりつくなり。

【附蚓】みみず。本草「蚯蚓、一名ーー」

【阯】シ ガイ 灰
【阪】ハン さか 潸
【陵】リョウ みさゝぎ 蒸
【陸】リク ロク 屋

【阯】

㊀㊁ アゥタ 重阮 に或は作る阮

㊀ふさがる。(塞)路が(危)なやむ(艱)せまる。(険)せまき道。(阻)けはしい(険)せまし(狭)困難のことと。險艱・險狹。

【阪】

㊀㊁ ハン ファン 潸

㊀さか。坂に同じ。○山の傾斜した所。○土地の高くなつた所。○堤防。○ほとり。○ふさがる。(塞)○(険)○(阻)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【陵】

㊀㊁ リョウ 蒸

㊀みさゝぎ。墓。○おか。○大きな山。○高くなつた地。○ふさがる。(塞)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【陸】

㊀㊁ リク ロク 屋

㊀くがち。水に対して一地方税の一種。國家の本税に對しての租税もの。○高くなつた地。○ふさがる。(塞)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【阯】ガイ 灰
【阪】ハン 潸
【陵】リョウ 蒸
【陸】リク ロク 屋

【阯】

㊀㊁ アゥタ 重阮 に或は作る阮

㊀ふさがる。(塞)路がふさがる。(危)なやむ(艱)○せまる。(険)せまき道。(阻)けはしい(険)○困難のことと。險艱・險狹。

【阪】

㊀㊁ ハン ファン 潸

㊀さか。坂に同じ。○山の傾斜した所。○堤防。○ほとり。○ふさがる。(塞)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【陵】

㊀㊁ リョウ 蒸

㊀みさゝぎ。墓。○おか。○大きな山。○高くなつた地。○ふさがる。(塞)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【陸】

㊀㊁ リク ロク 屋

㊀くがち。水に対して一地方税の一種。國家の本税に對しての租税もの。○高くなつた地。○ふさがる。(塞)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【阯】ガイ 灰
【阪】ハン 潸
【陵】リョウ 蒸
【陸】リク ロク 屋

【阯】

㊀㊁ アゥタ 重阮 に或は作る阮

㊀ふさがる。(塞)路がふさがる。(危)なやむ(艱)○せまる。(険)せまき道。(阻)けはしい(険)○困難のことと。險艱・險狹。

【阪】

㊀㊁ ハン ファン 潸

㊀さか。坂に同じ。○山の傾斜した所。○堤防。○ほとり。○ふさがる。(塞)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【陵】

㊀㊁ リョウ 蒸

㊀みさゝぎ。墓。○おか。○大きな山。○高くなつた地。○ふさがる。(塞)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【陸】

㊀㊁ リク ロク 屋

㊀くがち。水に対して一地方税の一種。國家の本税に對しての租税もの。○高くなつた地。○ふさがる。(塞)○(険)○(険)○(険)○(険)○(険)

【陒】㊀キ ㊁キ 紙 支
㊀やぶれがき(毀垣)＝垝。㊁けはし(險)

【限】ゲン 潸
○かぎり、へだて(阻)さかひ(界)「－界」戰國策「南有巫山黔中之－」○ほど(度)きまり、さだめ程度「－度」「程－」「定－」○場所・時日などのとりきめし範圍「日－」「刻－」「期－」「－界」○しきみ(門閾)門下の横木「戸－」「門－」○はて。○かぎる、はかる、へだつ。

【限界】ゲンカイ さかひ、しきり。宋史、劉隨傳「令環植楊柳數十萬株、便相連屬、以為－－」＝界限 疆界。

【限礙】ゲンガイ かぎりへだてる。洛陽伽藍記「百姓出入、無復－－」

【限局】ゲンキョク かぎる。後漢書、仲長統傳「不－－以疑遠」

【限制】ゲンセイ かぎり。一定の界を設ける。宋史、李光傳「長江千里、不為－－、惴惴焉日為乘桴浮海之計」＝制限。

【限定】ゲンテイ かぎりさだめる「－－承認」

【限度】ゲンド ほど。かぎり。史記「室廬輿服、僭於上、無－－」釋名「鐸、度也、號令之所－－也」

【限列】ゲンレツ 條列して限禁を設ける。漢書、哀帝紀「諸侯王・列侯 公主・吏二千石及豪富民、多畜奴婢、田宅亡限、與民爭利、百姓失職、重困不足、其議－－」

【隙】タ 哿
あづち(射垜)＝垜・隙。

【陏】タ 哿
うり、蓏になる果物。蓏に通ず。史、貨殖傳「果－蠃蛤」

【陊】タ ダ 哿
○おつ(落)阪を下る貌。＝墮。○くづる、やぶる(壞)

【陌】ハク ビャク 陌
○あぜみち、田間の東西(一説に南北)に通ずる道、阡(阜部三畫)參看。○市中のみち(街路)「巷－」「街－」「綺－」まち。○はちまき「－頭」帞に通ず。○もも。百に通ず。

【陌上桑】ハクジャウサウ 樂府の曲名、楚王秦氏の女羅敷の美なるを悦び、之を奪はんとせしが、羅敷――の歌を作りて之を斥く。古今注「――者、秦氏女、邯鄲人也、名羅敷、採桑陌上、王登臺見而悅之、因飲酒欲奪、羅敷乃彈箏作――歌」

【陌阡】ハクセン 田間のたてよこのみち。吳均詩「君不見西陵田、縱橫十字成－－」＝阡陌。

【陌刀】ハクタウ 大刀をいふ。古の斬馬劍の類。通鑑、胡注「－－、大刀也、一舉可殺數人」

【陌頭】ハクトウ ○みちばた。郭振詩「－－楊柳枝、已被春風吹」○はちまき(絡頭)＝帞頭。

【陋】ロウ 宥
○せまし(狹小)場所がせまい「固－」「巷－」「狹－」心がせまい「固－」「淺－」「凡－」○いやし(賤)「賤－」「朴－」身分が卑し「寒－」容貌がみにくし(醜劣)「醜－」「寢－」唐書、盧杞傳「貌－心險」○あらくしてあし(疏惡)○見識が少くして卑し。荀、學記「獨學而無友、則孤－而寡聞」○みじかし(短)

同訓異義 シヤ 陋・賤・卑・俚・鄙・野・固の別は賤(一八七六頁二段)の條を見よ。○みにくし 陋・惡・醜の別は惡(六六五頁四段)の條を見よ。

【陋屋】ロウヲク ○いぶせきいへ。陸游詩「－－雨來初覺寒」○己が家の謙稱。＝茅舍。

【陋巷】ロウカウ いぶせくせまきちまた。うらだな。論、雍也「一簞食、一瓢飲、在－－」

【陋愚】ロウグ いやしくおろか。說苑「秦國處僻、民陋以愚」＝陋闇。

【陋館】ロウクワン せまきやかた。南史、徐勉傳「負杖躡履、逍遙－－、臨池觀魚、披林聽鳥」＝陋屋。

【陋見】ロウケン ○いやしきかんがへ、せまき意見。＝鄙見・卑見。○己の意見を謙していふ。＝愚見。

【陋識】ロウシキ いやしきちゑ。江淹文「仰震威容、俯慚－－」＝陋見・淺識。

【陋室】ロウシツ いぶせきへや。韓愈詩「－－有文史、高門有笙竽」唐の劉禹錫に－－銘あり。

【陋質】ロウシツ いやしき性質。曹植賦「以才薄之－－、奉君子之淸塵」

【陋習】ロウシフ いやしきならはし。＝陋俗。

【陋心】ロウシン せまきこころ。陸雲、登臺賦「在吾儕之－－兮、豈取樂于東表」

【陋儒】ロウジュ 見識のせまき學者。荀子「末世窮年、不免為－－而已」

【陋小】ロウセウ みにくくして、小さし。南史、徐摛傳「形質－－、若不勝衣」

【陋淺】ロウセン 心がいやしくしてあさし。

唐書、鄭覃傳「博士－－、不能正建言」

【陋賤】ロウセン いやし。晉書、卞壺傳「壺以－－、不能榮親」＝卑賤。

【陋俗】ロウゾク いやしきならはし。朱熹、跋三禮家範「以厚彝倫、而新－－、其意美也」＝陋風。

【陋族】ロウゾク いやしきやから。魏書、劉文曄傳「臣之－－、出自平原」

【陋態】ロウタイ みにくきざま。＝醜態。

【陋短】ロウタン 身のたけみじかし。唐書、吉頊傳「懿宗－－傴僂」

【陋薄】ロウハク いやしくしてうすし。潘尼詩「贈物雖－－、識意在忘言」唐書、韓滉傳「滉居處－－、取庇風雨」

【陋鄙】ロウヒ いやし。北史、高昂傳「性好為詩、言甚－－」＝鄙陋。

【陋風】ロウフウ 陋俗に同じ。

【陋圃】ロウホ せまき野菜ばたけ。何劭詩「周旋我－－、西瞻廣武廬」

【陋劣】ロウレツ いやしくおとる。蘇軾詩「眞源未純熟、習氣餘－－」

【陋廬】ロウロ いぶせきいほり。東皙賦「抗志雲表、戢形－－」

七畫

【院】エン ヰン 霰 院
○かき、かこひ(周垣)○宮室の垣牆ある者。○やくしょ(官省)「翰林－」「理藩－」○てら(浮居)「寺－」「僧－」「香火－」○道士の居所「道－」○學者の居所。又、學校「書－」○娼妓の居る所「妓－」

【院畫】ヰングワ 宋の宣和中、御前畫院を置きて畫かしめたる畫。格古要論「淸厲鶻有南宋－－錄八卷」

【院家】ヰンゲ 國○門跡の次に位する貴き寺院。○門主の隱居所。

【院公】ヰンコウ 小說にて僕の稱「輟耕錄」＝院子。

【院參】ヰンザン 國上皇の御所に參上する。

【院省府署】ヰンシャウフショ すべての官省。大審院・內務省・府廳・警察署などの類。

【院主】ヰンシュ ○寺の住職。○病院・孤兒院などの長。又は其の持主。

【院政】ヰンセイ 國上皇の行はせたまふ政。

【院宣】ヰンゼン 國上皇・法皇のみことのり。

【院中】ヰンチュウ ○やしきのかこひうち。海山記「－－楊梅」○國上皇の宮殿のうち。

【院內總理】ヰンナイソウリ 衆議院にて議會の開會中其の黨派の議員をとりしまる人。

【院本】ヰンポン 演劇のすぢがき、脚本、淨瑠璃本。輟耕錄「唐有傳奇、宋有戲曲唱諢詞說、金有－－雜劇諸宮調、－－雜劇、其實一也、國朝、－－雜劇、始釐而二之」

【院落】ヰンラク かきねにて圍みたるざしき。落は居。蘇軾詩「歌管樓臺聲寂寂、鞦韆－－夜沈沈」

【陜】カフ ケフ 洽 又、狹に作る、陝とは別
せまし(隘)廣の對。＝陿。

【陘】ケイ 青
○さか(阪)○かぎり(限)○、あな(坎)○連れる山脈の中斷せる處。○かまどのわきの鍋・釜などを載せる所。禮、月令「設主於竈－」

【陖】シュン 震
○たかし(高)○けはし(險)司馬相如、上林賦「徑－赴險」＝峻。

【陞】ショウ 蒸
のぼる。のぼす(上・登)＝升。

同訓異義 ノボル 陞・上・升・昇・登等の別は上(三六頁二段)の條を見よ。

【陞敍】ショウジョ 勳位をのぼせる。

【陞等】ショウトウ 官等をのぼせる。

【陞任】ショウニン 官職をのぼせる。

【陗】セウ 嘯 峭に同じ
○きびし(急)○けはし(險)「－陁」

【陗直】セウチョク 性急にして物を容るる能はず。漢書、鼂錯傳「為人－－刻深」＝峭直。

【陝】セン 琰 陜とは別
○地名、今の河南省內の地。公羊、隱五「自陝而東者周公主之、自陝而西者召公主之」○－西省の略稱。

【陣】チン ヂン 震
○ならぶ、つらぬ(列)軍隊を排列する。古、陳に作る。○そなへ、ぢんだて(軍隊の設備、軍營)「－營」「屯－」「背水－」○すべて隊形をなしてつらなる「雁－」「鵝－」○戰ふこと一次を一－といふ。轉じて事物の若干時を經るのみを一－といふ、ひとしきり。又、にはかに至るの義とす。韓偓詩「昨夜三更雨、今朝一－寒」

【陣雲】ヂンウン ○雲がかさなり起りて兵陣の如くなるもの。湘中記「衡山遙望如－－」＝陣雲。○戰場の空のあしき雲。

【陣營】ヂンエイ ちんや。英雄記「每所攻

擊、無二不レ破者一、名爲二陷――一」＝軍營。
【陣行】軍隊の排列。李嶠詩「望レ月驚二弦影一、排レ雲結二――一」
【陣首】軍陣のさきて。顏延之詩「接レ鏑赴二――一、卷レ甲起二行前一」＝軍前。
【陣哨】陣營のみはりするもの。宋史、宋琪傳「――不レ可二輕動一、盡防二橫騎奔衝一」
【陣代】國○古、大名の陣屋を守る重職。○地方の代官。
【陣纛】いくさに用ふるはた。陸龜蒙詩「螢光――懸」
【陣地】軍隊をしきつらねたる地。＝陣場・戰場。
【陣陣】連り續きて時時とぎれる。林逋詩「――寒香壓二麝臍一」
【陣中】陣列の中。周禮「傳二王命於――一」
【陣圖】軍陣を敷く圖。事物紀原「吳子序曰、諸葛孔明天地・風雲・龍虎・蛇鳥、本一陣也、出二黃帝兵井之法一、（中略）後人之爲二――一者從レ此。」
【陣痛】むしかぶり。出產の前に姙婦の腹のしくしくと痛むをいふ。
【陣頭】軍陣の先頭。先鋒。王建詩「――多是用二降兵一」＝陣前・軍前。
【陣亡】うちじに。「――兵」文獻通考、四裔考「閔忠寺、本唐太宗爲二征レ遼――士一所レ造」＝戰死・戰歿。
【陣法】軍陣の排列法。李靖文「卿所レ制九花――出二何術一」
【陣沒】うちじにする。宋史、理宗紀「――者趣上二姓名一」＝戰死・陣歿・陣亡。
【陣歿】前條に同じ。

【除】㊀ヂョ 魚 ㊁ヨ 魚 ㊂チョ 御

㊀のぞく、さる（去）「―去」「―草」左、隱元「蔓草猶不レ可レ―」○はらふ（掃）きよむ（淸）「掃―」○ころす（誅）○をさむ（治）○いゆ（愈）「病―」○ひらく（開）○きだはし（殿階）「庭―」班固賦「玉―彤庭」○には、門と屏との間「庭―」○まつりのには。○わる、割算乘の反。○新に官に拜する、故官を除き去りて新官に就く。＝敍。㊁四月の稱。㊂ひらく（開）詩、小雅「何福不レ―」○のぞく（去）
【除憂】うれへをのぞき去る。莊子「願去二君之累一、除二君之憂一」
【除苛】わづらはしき政をのぞき去る。張說詩「―レ―閭閻息」曾鞏文「其治大方務二―レ―去一レ煩」
【除毀】とりのぞきてこぼつ。隋書、蘇威傳「見二宮中以レ銀爲二幔鉤一、因盛陳二節儉之美一、上爲レ之改レ容、彫飾舊物、悉命――」
【除疑】うたがひをのぞく。蕭子良文「識以――」
【除虐】むごき政を除き去る。禮記「湯以レ寬治レ民、而除二其虐一」
【除去】のぞきさる。漢書、鼂錯傳「――二陰刑一」
【除凶】凶惡のものをのぞきさる。唐太宗詩「―レ―報二千古一」
【除禍】わざはひをのぞき去る。舒頔詩「朝廷本―レ―、仁道立二民極一」
【除外】一般の規定よりとりのけ。とりのけ「――例」
【除官】官に任ずる。夢溪筆談「除二拜官職一、謂レ除二其舊籍一、不レ然也、除猶レ易也、以レ新易レ舊曰レ除」
【除月】○陰曆十二月の異名。＝臘月。○四月の異名。
【除罪】つみをゆるす。史、平準書「入レ物者補レ官、出レ貨者―レ―」
【除喪】もふくをぬぐ。いみあけ。禮記「期而祭禮也、期而―レ―道也」＝除服。
【除殘】掃煤宴中耶、歲時紀異「吳中十二月二十七日掃二屋塵一曰二――一」
【除日】おほみそか（大晦日）
【除邪】よこしまなるものをのぞき去る。國語「湯以レ寬治レ民而除二其邪一」＝斥邪。
【除授】官位をさづける。宋史、欽宗紀「詔自レ今――黜陟、及恩數等事、必參二酌祖宗舊制一」＝除任・除拜。
【除召】官に任ずる爲めに召される。宋書、王敬弘傳「敬弘每レ被二――一、卽便祗奉」
【除夕】おほみそかのよ、歲の除き去る夕。風土記「至二――一、達レ旦不レ眠」＝除夜。
【除籍】○官吏の籍をのぞく。宋史、黃夷簡傳「被病告滿二百日一、御史臺言、當レ―レ―」○戶籍中より其の名を除く。
【除翦】きり去る。左傳「我諸戎、―二―我荊棘一」
【除族】國華族・士族の人が罪によりて其の族名を除きて平民とせらる。
【除賊】わるものをのぞきさる。王襃文「保レ民者除二其賊一」
【除隊】現役兵が服役を免除せらる。
【除蟲菊】多年生草もと歐洲に產す、葉は羽狀にして分裂す、淡綠色、春夏の交、白花を開く、花を曝乾し粉末として蚊・蚤等を除くの效あり、其の紅花の者は除蟲の效なし。
【除蠹】木くひむしをのぞく。周禮「掌レ―二―物一」
【除拜】官を授ける。除官參看。＝除授。
【除陌錢】唐代の稅法、公私の給與又は物品賣買の際、其の金額の幾割を上納せしめしもの「唐書、食貨志」

【除服】喪服を脫ぐ、いみあけ（忌明）「――出仕」
【除拂】のぞく。蘇軾詩「點二檢凡心一早――」
【除幕式】國銅像などの工事の出來あがりて始めて其の上の蓋をとりはらふ儀式。
【除名】なかまの中より其の名をのぞく。通鑑、梁武紀「魏高肇奏、除二李平名一」
【除滅】のぞきほろぼす。陳琳文「―二―忠正一、專爲二梟雄一」
【除免】官を免ぜられる。舊唐書、職官志「吏部凡敍階之法、有レ以二封爵一、有レ以二親戚一（中略）有レ以二勞考一、有レ以二――一」
【除目】○官に任じたる報告書。品字箋「拜レ官曰レ除、除書曰二――一」五雜俎「一日看二――一、三年損二道心一」○國古、大臣以外の臣の官位を進級せしむる公事。
【除門】もんを掃除す。國語「卿出郊勞、門尹―レ―」
【除夜】○おほみそかのよる。又、節分の夜。張說詩「――淸樽滿、寒庭燎火多」○冬至の前夜。老學庵筆記「太平廣記、有二盧賀傳一、云是夕冬至――、乃知二唐人冬至前一日、亦謂二之――一」

【陟】㊀チョク 職 ㊁トク 職

㊀のぼす、のぼる（陞・登）「升―」「―登」詩、周南「―二彼崔嵬一」○のぼる。すすむ（進）黜の對。○高き地位につく。書、舜典「汝―二帝位一」○たかし（高）㊁う（得）

同訓異義 ノボル 陟・上・升・昇・陞・登等の別は上（三六頁三段）の條を見よ。

【陟降】○のぼると、くだると。宋史、紹興郊祀樂章「風馬雲車、――在レ茲」＝上下・升降・登降。○或は天に上り或は人界に下る。詩、大雅「文王――、在二帝左右一」
【陟屺】陟岵を見よ。
【陟巘】峯にのぼる。詩經「陟則在レ巘、復降在レ原」袁桷詩「――沮洳深、漸覺所レ歷低」
【陟岵】詩經魏風の篇名、孝子が政府の役夫となりて遠方に行き、山に登りて故鄕の父母を慕ふ意を詠ず、岵は草木多き山。詩、魏風「陟二彼岵一兮、瞻二望父一兮」「陟二彼屺一兮、瞻二望母一兮」屺は禿山。
【陟升】たかきにのぼる。陸雲賦「―二―崇巖一、降二涉洪波一」
【陟方】天子の崩御。天に昇る義。書、舜典「五十載、――乃死」＝升遐・登遐。
【陟罰】官位をのぼせると、おとし罰すると。出師表「―二―臧否一、不レ宜二異同一」

【陡】トウ 有 又、斗・阧に作る

○にはか（頓）「―然」杜甫、義鶻行「―上捩二孤影一」○けはしくそばだつ（峻立）

【陛】㊀ヘイ ㊁ヒ 霽 賓

○きざはし、きだはし、天子の宮殿の階段。戰國策「秦舞陽奉二地圖匣一、以レ次進至レ―」○―下は天子を呼ぶ敬稱。○――は衆多層次の貌。韓愈、曹成王碑「――蹶蹶、實取實似」＝比比。
【陛衞】天子のきざはしのもとを護衞する兵士。後漢書、馬援傳「盛陳二――一、以延二援入一」
【陛下】○天子を稱する辭、直接に天子をさすを避けて、其の階下に在る護衞兵をさして告げ、卑より尊に達せしむる義。史、秦紀「海內賴二――神靈一」○國天皇・皇后・太皇・皇太后の敬稱。
【陛賀】きざはしの下にてよろこびを申し上げる。魏書、沮渠蒙遜傳「萬國來庭、百辟――」
【陛覲】きざはしの下にて天子に拜謁する。後漢書、禮儀志「朝賀畢、見二屬郡計吏一皆――」＝陛見。
【陛戟】きざはしの下にてほこをとりてまもる。漢書、霍光傳「期門武士、――陳二列殿下一」
【陛見】天子にまみゆる。後漢書、戴封傳「公車徵――、對策第一、擢拜二議郎一」
【陛坐】天子の御坐の側。傅亮、演愼論「周廟銘二――之側一、因レ斯以談、所三以保レ身全レ德、其莫レ尙二於愼一乎」
【陛辭】天子に御いとま申し上げて都門を出る。
【陛楯郎】天子のきざはしの下にたてを持ちて護衞する兵士「史、滑稽傳」
【陛對】天子に謁見する。宋史、徽宗紀「詔監司未レ經二――一、毋レ得二之任一」＝陛見。
【陛列】陛の下に並び列なる。宋書、禮志「其在二――一、及備二鹵簿一」

【陋】陋（阜部六畫）の本字。

八畫

【陰】㊀イン・オン 長 ㊁アン・オン 覃 ㊂イン・オン 沁

㊀易學上の語。靜・柔・止・閉・伏・藏・後・北・地・女・臣・月・夜などの如くすべて消極性の意を有するもの。陽の對。○おほひ（蔭）○日かげ、日光のあたらざる所。又、物におほはれ隱れる處

「樹ー」「花ー」○うつりゆく日かげ「光ー」「寸ー」「分ー」○くもる。くもり(曇)晴れず雨ふらず。詩、邶風「以ー以雨」晴の對。○くらし(闇・幽冥)○ひそか(私)祕密にして人に知らさぬ。戰國、齊策「齊秦之交ー合」○しめる。しめり(濕)○よる(夜)くれ(暮)やみ(闇)○うしろ(背後)「碑ー」○きた、山の北「山ー」○みなみ、水の南「淮ー」○あさぐろ(淺黑)○水の稱。○男女の生殖器。○電氣又磁氣の消極。○ー山は山西・直隸二省の長城以外に在る山脈の名。㊁天子が喪中にこもり居るいほり(喪廬)本、闇に作る。論、憲問「諒ー三年不言」=諒闇。㊂うづめかくす(瘞藏)○おほふ、おほはる(覆蔭)

解字 陰は闇なり、阜に从ふ侌の聲、侌・黔は古文の陰の字。隂は俗字。

【陰噎】胸が噎び塞がる。後漢書、竇憲傳「ーー不得對」

【陰惡】人の知らざる惡事。雲笈七籤「人爲ーー、鬼神治之」=陰慝。

【陰痿】男子の勢(生殖器)がなえて力なし、婦人を御すること能はざる病。じんきょ[史、五宗世家]=陽痿。

【陰蔚】うすぐらくしげりあふ。六一題跋「見林樹ーー、池水窈然」

【陰陰】○天氣のくもれる貌。蘇軾詩「ーー日光澹」○茂りてくらき貌。王維詩「ーー夏木囀黃鸝」

【陰隱】かくしてあらはさず。左傳「常行譏疾、ーー爲惡也」

【陰羽】鶴の異名。藝林伐山「易曰、鳴鶴在陰、傳曰、鴻鴈隨陽、故汲冢書、目鶴曰ーー、禹貢、名鴈曰陽鳥」

【陰雨】天くもりてあめふる。詩、小雅「芃芃黍苗、ーー膏之」

【陰鬱】○むしあつし。うつたうしい(鬱陶)元稹文「通州之地、叢穢卑褊、蒸瘴ーー」○心がふさがりて陰氣なり。

【陰雲】あまぐも。宋書、五行志「ーー不雨」

【陰曀】空くもりて風吹く。東陽夜怪錄「方關ーー、不知時之早晚」劉基詩「白日慘ーー」

【陰翳】○うすぐらくくもる。陳子昂詩「陽彩皆ーー、親友盡暌違」○木の茂りてうすぐらきかげ。朱德潤詩「雨餘鳴蜩歇、衆綠鬱ーー」

【陰煙】くもる。劉長卿詩「徘徊巳心暝色、決漭成ーー」

【陰岡】日のかげの岡。王粲、大暑賦「幸九峻之ーー」

【陰莖】男子の生殖器。=男根。

【陰黠】心がねぢけてわるがしこし。唐書、魚朝恩傳「ーー善宣納詔令」

【陰姦】かくれたる惡事。韓愈詩「森沈固含蓄、本以儲ーー」

【陰乾】かげぼしにする。抱朴子「ーー百日」

【陰寒】○陰氣と寒氣と。詩經、箋「鴻雁知避陰陽寒暑」○天がくもりてさむし。後漢書、登蒤傳「ーー不暖」

【陰覬】ひそかに得んことをこひねがふ。覬は希望。宋史、李清臣傳「怙才躁進、ーー柄用、首發紹述之說」

【陰訓】婦人のをしへ。晉書、列女傳「具宣閨範、有禪ーー」=陰教・女訓。

【陰火】○おにび。=陰燐・鬼火。○海水中の鹽氣が陰晦の時に光を放つもの。木華、海賦「ーー潛然」

【陰晦】くもりてくらし。後漢書、許楊傳「天大ーー」

【陰款】凹入の文字にて銘をきざみたるもの。輟耕錄「歲久金脫、則成ーー、以其刻畫者成凹也」

【陰刑】勢を割く刑、宮刑(四九六頁一段)に同じ。漢書、鼂錯傳「除去ーー」

【陰計】祕密のはかりごと。戰國策「爲公畫ーー」權書「能因敵國之使、而探其ーー」=陰謀。

【陰惠】人に知らさぬやうに、恩惠を施す。齊書、張敬兒傳「推此ーー、何愧懷抱」=陰德。

【陰霓】くもれるにじ。沈佺期詩「火雲蒸毒霧、陽雨濯ーー」

【陰教】女子の教育。晉書、后妃傳「ーー洽于宮闈、淑譽騰于區域」=女教。

【陰見】ひそかに面會する。戰國策「於是ーー韓魏之君」=私見。

【陰險】わるぎありておそろし。=姦險・詭險。

【陰溝】地の中を通ずる溝。=暗渠・闇渠・地下水道。

【陰黑】うすぐらし。張籍詩「雨中長不出、ーー盡連宵」

【陰朔】北方のえびすの地。王倂、感遇詩「蚩尤卓長空、漢兵出ーー」=幽朔。

【陰殺】ひそかにころす。漢書、高祖紀「使三人ーー義帝江南、罪九也」

【陰慘】陰氣にしてかなしみいたむ。宋史、樂志「配天作極、ーー陽舒」張衡、西京賦「夫人在陽時則舒、在陰時則慘、此牽乎天者也」

【陰祀】陰に屬する神。周禮「陽祀用騂牲毛之、ーー用黝牲毛之」

【陰事】○祕密のことがら。史、信陵君傳「有能探得趙王之ーー者」=祕事。○後宮の羣妃が天子に進御すること。周禮、天官「掌王

之ーー陰令」

【陰識】古器の文字に凹凸の別あり、凹をーーといひ、凸を陽識といふ。洞天清錄「三代用ーー、謂之偃囊字、其字凹入也、漢以來或用陽識、其字凸」一說に陰字凹入の者を款、陽字凸出の者を識といふ[游宦紀聞]

【陰柔】うはべは柔順にして人をそこなふ心ある奸人。唐書、李義甫傳「以ーー害物、謂之李猫」

【陰蝨】けじらみ。=毛蝨。

【陰濕】ひかげでしつける。

【陰騭】○騭は定、天が冥冥の中にありてひそかに人民を安定する。書、洪範「惟天ーー」○天がひそかに人類の行爲を見て禍福を下す[袁了凡、陰騭文]

【陰森】○うすぐらくくものさびしき貌。溫庭筠詩「畫壁ーー九子堂」○木が茂りてくらし。孟浩然詩「萬木何ーー」

【陰症】外にあらはれざる病氣。

【陰助】他人に知らさずしてひそかにたすける。唐書、楊綰傳「持異議、宰相常衰ーー之」

【陰政】後宮のまつりごと。南史、后妃傳論「輔興君德、燮理ーー」

【陰晴】くもると、はれると。徐積詩「但恐舟行隨早晚、此時秋色半ーー」

【陰犀】犀に陰陽あり、ーーは大呂・應鐘・南呂・函鐘・小呂・夾鐘を謂ふ[周禮]

【陰宗】月の異名。後漢書、蔡邕傳「日爲陽宗、月爲ーー」

【陰賊】そこいぢわるく人を害する。史、遊俠傳「少時ーー」

【陰地】日光のあたらざる地。王建詩「古苔ーー冷淒淒」

【陰中】○ひそかに人をおとしいれそこなふ。蘇轍文「臣豈敢恃二聖公道之知、而傲衆人ーー之禍」○秋。三統曆「秋爲ーー、萬物以成」

【陰蟲】○秋鳴くむし。皇甫冉詩「ーー切切不堪聞」○蝦蟆。孫綽、雲虬銘「靈虬吐注、ーー承流」

【陰重】○性重厚にして人の陰事をもらさず。史、周仁傳「爲人ーー不泄」○ひそかにおもんずる。

【陰德】○人に知られざる善き行。漢書、于定國傳「我治獄多ーー」○地の德。轉じて婦德・婦道の義とす。禮、昏義「天子理陽道、后治ーー」=坤德。

【有陰德者必有陽報】かげにて德行ある者は必ず陽に善報を得る義。陰德陽報參看。

【陰德其猶耳鳴】陰德は己一人のみ之を知りて他人の知らざるをいふ。北史、李士謙傳「士謙躬處節儉、每以賑施爲務、或謂士謙、子多陰德、答曰、夫言陰德、其猶耳鳴、已獨知之、人無知者、今吾所作、吾子皆知、何陰德之有」

【陰德陽報】ひそかに德を修むる者は、人は知らずとも、天が之に報いて幸福を授ける。淮南、人閒「有陰德者、必有陽報、有隱行者、必有昭名」

【陰慝】○陰惡に同じ。○物を害する天地の陰氣。齊民要術「陽氣始虧、ーー將萌」

【陰囊】きんたま、ふぐり。

【陰霾】くもりてつちふる。盧綸詩「苦霧沈山影、ーー發海光」

【陰房】○薄暗きへや。杜甫詩「ーー鬼火青」=陰室。○牢獄。文天祥、正氣歌「ーー闃鬼火」

【陰報】人に知らさぬやうに、むくいをする。史、平津侯傳「弘爲人意忌、外寬內深、諸嘗與弘有郤者、雖詳與善、ーー其禍、殺主父偃、徙董仲舒於膠西、皆弘之力也」

【陰庇】かばふ。于邵文「私陽以ーー之地、永爲子孫之恃」=庇陰・蔭庇。

【陰詖】心が陰險にしてねぢける。=險詖。

【陰符】兵書の名。天機が暗に時機と符合する義。戰國、秦策「得太公ーー之謀」=陰符經。

【陰風】○ふゆのかぜ。梁元帝纂要「冬風曰ーー・颱風・哀風」=朔風。○さびしくつめたき風。張九齡詩「此時颸切ーー生」

【陰伏】人のかくしおけることがら。漢書、楊惲傳「好發人ーー」=陰私。

【陰蔽】かくしおほふ。國語「後無ーー、先無陽蔡」=隱蔽。

【陰謀】ひそかに企つるはかりごと。史、陳丞相世家「陳平曰、我多ーー、是道家之所禁」

【陰木】秋冬に生ずる木。一說、山の北に生ずる木。周禮、山虞「仲夏斬ーー」

【陰密】心に深くかくしてあらはさず。唐書、李林甫傳「性ーー、誅殺不見喜怒」

【陰陽】易學上の語。天地の間の萬物を造り出す二つの氣。釋名「陰、蔭也、氣在內奧蔭也、陽、揚也、氣在外發揚也」

【燮理陰陽】天地の道を調和する、宰相が天下を治むるに譬ふ。書、周官「茲惟三公、論道經邦、燮理ーー」

【陰陽爲炭兮萬物爲銅】天地が萬物を造り出すを、冶工が銅を以て物品を作るに譬ふ。史、賈誼傳「天地爲爐兮造化爲工、ーー」

【陰陽家】天文・曆數・方位等に本づきて吉凶禍福を卜ふ學派、古の九家者流の一。漢書、藝文志「ーー

者流、蓋出二于羲和之官一」

【陰陽之交】陰陽二氣が互に交り合ふ。禮記「人者天地之德、――、鬼神之會、五行之秀氣也」春秋元命苞「陰陽交爲二虹霓一」

【陰約】ひそかに約束する。韓非子「知伯――二韓魏一、將三以伐二趙」」＝密約。

【陰諭】ひそかにさとす。漢書、李陵傳「握二其足一――レ之」

【陰霖】さびしくふるながあめ。魏書、崔楷傳「雲雨――、動彌二旬月一」＝陰霪。

【陰燐】おにび。李益文「君獨不レ怪二――熾一」＝鬼火・陰火。

【陰陵】山の名、安徽省和縣に在り、北は江浦縣の界に接す、即ち項羽の道に迷ひし處。

【陰沴】わざはひ。沴は妖氣。唐書、李石傳「帝曰、人心未レ舒何也、石曰、刑殺太甚、則致二――一」＝妖沴。

【陰禮】○婦人の禮。周禮、內宰「以二――一教二六宮一」○周代、男女婚嫁の禮。周禮、大司徒「以二――一教レ親、則民不レ怨」

【娶二陰麗華一】後漢の光武帝が、微賤なりし時に、南陽の人陰麗華といふ美人を娶りたしと思ひしに遂に其の望みを果せり、陰皇后是れなり。後漢書、光烈皇后紀「光武陰皇后南陽人、名麗華、初光武聞二后美一、心悅レ之、後至二長安一、見二執金吾車騎甚盛一、因歎曰、仕宦當レ作二執金吾一、娶レ妻當レ得二陰麗華一、即レ位立爲レ后」

【陰曆】太陰曆（四二三頁四段）の略語。＝舊曆。

【陷】カン　又、陥に作る

○おとしあな（穽）獸などを捕へる爲めに掘りし穴「―阱」○おちいる、おつ、おちこむ、しづむ（沒入）○おとしいる、おとす。孫子「投二之亡地一然後存、―二之死地一然後生」人を地に墜す。故らに人を罪におとす「構―」「讒―」「誣―」○人をあざむく、そこなふ（害）○あざむかれる。○あやまち（過失）○くづる（隤）○くづされる、やぶられる。○せめやぶる。破壞する「―城」「攻―」○かく（少・缺）不足する。

解字 陷は下なり、阜に从ひ臽に从ふ臽も亦聲、臽に从ひて陷に作り、又、刀に从ひて陷に作るは竝に非。

【陷銳】つよき敵をやぶる。韓非子「――之卒」

【陷告】わざはひにおちいる。忠經「小人不レ常、所三以自陷二其咎一」

【陷堅】かたき城をぬく。史、灌夫傳「戰常――」

【陷阱】次條に同じ。中庸「人皆曰二予知一、驅而納二諸於罟擭――之中一、而莫二之知一レ辟也」＝坑坎。

【陷穽】○おとしあな。詩經、疏「不レ入二――一、不レ羅二羅網一」○計を設けて人をおとし入れ害するに喩ふ。＝陷阱。

【陷墮】おちいる。易林「三蛆逐レ蠅、――二釜中一」

【陷陣】敵陣を攻めやぶる。陣は陣。史、樊噲傳「攻レ城先登――」

【陷敵】敵陣をおとしいる。宋史、張令鐸傳「性仁恕、嘗語レ人曰、我從軍三十年、大小四十餘戰、多二摧レ堅――、未三妄殺二一人一」

【陷溺】○水におぼれる。○酒色などにふけりて心がすさむ。孟子「非二天之降レ才爾殊一也、其所三以――二其心一者然也」＝沈溺・耽溺・荒酒。

【陷入】はまりこむ。左傳「無レ令三輿師――二君地一」

【陷沒】おちいる。晉書、山簡傳「及二洛陽――一、簡又爲二賊嚴疑所一レ逼」

【陷落】○城がおちいる。○土地が自然におちこむ。

【陭】

崎（五四七頁一段）に同じ。

【陲】スヰ　又、垂に作る

○ほとり（邊）○國ざかひ（邊疆）「邊―」○あやふし（危）

【陬】ソウ　シウ　通音スウ

○すみ（隅）「海―」「荒―」「邊―」○春秋時代の魯の地名、孔子の生地。史、孔子世家「孔子生二魯昌平鄉―邑一」＝鄹。○正月の異名。爾雅、釋天「正月爲レ―」

【陬遠】とほきゐなか。＝遐陬・窮陬。

【陬月】正月の異名。爾雅「正月爲レ―」、二月爲レ如」

【陶】㊀タウ　㊁エウ　㊂タウ

㊀すゑ、すゑもの、やきもの、せともの（瓦器）○せとものをつくる。○轉じて造る、化する、せとものを造りなす如く人を敎へみちびく「薰―」「―冶」○やしなふ（養）○ただす（正）○のぶ（暢）○をか、二重になれる丘。○頑固なる貌。○うれふ（憂）○よろこぶ（喜・悅）心の中に悅ぶ。禮、檀弓「人喜則斯―」○蒲―は果の名。＝葡萄。○たのしむ（樂）○鬱―は哀しみ思ふ貌。書、五子之歌「鬱―乎余心」㊁皐―は舜の臣。＝咎繇。○――は相隨ひ行く貌。又、和ぎ樂む貌。㊂――は驅逐する貌。詩、鄭風「驅介――」

【陶猗】陶朱公と、猗頓と。共に古の富者。抱朴子「夫結綠懸黎、非二――一不レ能レ市也」＝陶朱猗頓之富。

【陶鬱】心がむすぼれる。摯虞賦「戚二溽暑之――一兮、余安能乎留レ斯」＝鬱陶。

【陶淵明】名は潛、字は元亮、晉の潯陽の人、侃の曾孫、性高尚脩潔、博學にして詩文を善くす、嘗て五柳先生の傳を作り、自ら況ふ、性菊を愛し「採二菊東籬下一、悠然見二南山一」の句有り。宋、禪を受くるに及び、劉裕屢〻徵せども就かず、詩酒を樂みて自ら適す、元嘉四年卒す、年六十三、世に靖節先生と稱す、五斗米（八五頁三段）參看。

【陶家】○やきものし。書敘指南「燒窰家曰二――一」○陶淵明の家。又陶淵明。

【陶侃】字は士衡、晉の潯陽の人、元帝の時、廣州刺史となる、州に在りて朝に百甓を齋外に運び、暮に百甓を齋內に運ぶ、曰く吾方に力を中原に致さんとす、故に勞を習ふのみと、明帝の時、征西大將軍に拜し、蘇峻を平げて功あり、太尉に拜し、長沙公に封ぜらる。

【陶器】やきもの、せともの。

【陶均】やきものをつくるに用ふる具、ろくろ。晉樂章「至仁齊レ民育レ物、擬二――一」＝陶鈞。

【陶鈞】鈞は陶工の模型の下に備へて圓轉する旋盤ロクロ能く大小の器を製す、よりて人物を養成するに喩ふ。雅琥詩「三千碩士在二――一」又天下の民を治むるに喩ふ。漢書、鄒陽傳「聖王制レ世御レ俗、獨化二於――之上一」

【陶化】善にみちびき化する。皐甫規、女師箴「昔在軒轅、――正刑、刑二于壹閨一、以臨二百官一」唐高宗、祀二泰山一玉牒文「凝二薰萬姓一、――二八紘一」

【陶瓦】やきもののかはら。唐書、宗室傳「敎二民作二――一」

【陶硯】陶製のすずり。硯史「相州土人自製二――一」

【陶甄】陶器をやきつくる具。陶鈞に同じ。轉じて、民を治めて善に化せしむる義。晉書、樂志「弘二濟區夏一、――二萬方一」

【陶犬瓦雞】陶製の犬と、瓦製の雞と。無用の物に喩ふ。金樓子「陶犬無二守レ夜之警一、瓦雞無二司レ晨之益一」

【陶弘景】字は通明、南北朝の時の秣陵の人、六歲の時、荻を以て筆と爲し、灰中に畫して書を學ぶ、長ずるに及び、書を讀むこと萬卷、畫品超邁、筆法精眞、又琴棋を善くし、草隸に工、齊の高帝引きて諸王の侍讀となす、後ち句容、句曲山に隱れ、自ら華陽眞逸、又華陽眞人と號す、梁の武帝、位に卽きて之を徵すれども出でず、大事あれば咨詢せざるなし、時人之を山中の宰相といふ、大同丙辰年八十五、病なくして逝く、貞白先生と諡す。

【陶人】やきものし。荀、性惡「――埏レ埴而爲レ器」＝陶工。

【陶寫】樂みて憂をはらふ。世說「王右軍曰、年在二桑楡一、自然至レ此、正賴二絲竹――一」＝陶レ情寫レ憂。

【陶者用二缺盆一】陶工自身は御りて缺けたる鉢を用ふる、俚諺の紺屋の白袴に同じ。淮南、說林「――、匠人處二狹廬一」

【陶鑄】陶工がせとものを作り、鍛工が金屬を鑄りて器を作る。轉じて物を造りなす義。莊、逍遙遊「是其塵垢粃糠、將三猶―二堯舜一者也」

【陶朱猗頓之富】陶朱公と、猗頓との二人は、古の富豪、よりて金滿家の義とす。賈誼、過秦論「非レ有二仲尼墨翟之賢――一」

【陶朱公】越王句踐の臣范蠡ハンレイの變名。貨殖の才に長じ、三たび千金を致す、故に富を言ふ者皆――を稱す〔史、貨殖傳〕

【陶然】心地よく醉ふ貌。陶潛詩「揮二茲一觴一、――自樂」

【陶然亭】北京の城南に在り、淸の江藻之を建つ、一名江亭、士夫遊宴の所と爲す、白居易の「更待二菊黃家醞熟一、與レ君一醉一陶然」の句に取りて名づく。

【陶潛】陶淵明を見よ。

【陶陶】○かり逐ふ貌。詩、鄭風「淸人在レ軸、駟介――」○和ぎ樂しむ貌。詩、王風「君子――」○相隨ひ行く貌。禮、祭義「――遂遂、如レ將二復入一然」○陽氣の盛んにのびる貌。楚辭、懷沙「――孟夏兮、草木莽莽」

【陶唐氏】帝堯初め陶に居り、後ち唐に徙る、故に――と稱す。

【陶土】陶器をつくる原料のつち。

【陶冶】○やきものしと、かぢやと。孟、公孫丑「以レ粟易二械器一者、不レ爲レ厲二――一」○轉じて陶工の器を造り鍛工の金を鑄る如く、人才を育成する義。漢書、董仲舒傳「或夭或壽或仁或鄙、――而成レ之」＝陶成・陶鑄・薰陶。

【陶泓】陶製の硯。又、廣く硯の異名とす。韓愈、毛穎傳「與二弘農――一友善」

【陳】㊀チン・ヂン　㊁チン・ヂン

㈠つらぬ、ならぶ(列)○しく(布)○のぶ(述)「ー情」「ー述」○はる(張)○ふるし(故)「ー腐」ひさし(久)○おほし(衆)○みち(徑)○國の名、周初、舜の子孫を封ぜし地。今の河南省開封府以東より、南、安徽省亳州に至る地。○朝代の名、南北朝代にー霸先が建てし國、五世三十三年にして隋に亡ぼさる。○ならび、つら(列次)下ーは後列。史、李斯傳「所下以飾二後宮一充中下ー上」㈢ぢんだて。軍隊の行列「軍ー」論、衛靈公「問二ー於孔子一」＝陣。

同訓異義 ツラヌ 陳・連・聯・羅・列の別は連(一九五六頁四段)の條を見よ。○ノブ 陳・述・宣・展・舒・申・伸・信・延等の別は述(一九四二頁二段)の條を見よ。○フルシ 陳・古・故・舊○陳は久也、物のふるびて、ひねになるなり、陳艾・新陳代謝などと用ふ。○古は今に對す、古人・古聖・古賢は、皆昔人なり。○故は新に對し、舊の字に近し、故人は舊知の人なり、嚴子陵者、光武之故人也の如し、故大納言、故宰相などの故は、物故の意にて、死去の後にいふなり。○舊は新に對す、故舊と連用す、古詩・古歌は、古人の詩歌なり、舊詩・舊歌は、わが舊時に作りし詩歌なり。

【陳雲】かさなりてたなびけるくも。湘中記「衡山遙望如二ーー一」＝陣雲。

【陳葉】ふるくしてくされたる葉。劉孝綽詩「薗芽隱二ーー一、荻苗抽二故叢一」

【陳碁】ごいしをならべる、ごをうつ。蔡邕文「夫張レ局ーレー、取二法武備一」

【陳啓】まうし上げる。梁武帝文「宜レ有レ所レ論、可レ入二ーー一」

【陳玄】墨の異名。陳は古、玄は黑。韓愈、毛穎傳「毛穎與二絳人ーー一友善」唐代絳州より墨を貢す、故に絳人といふ。

【陳言】○陳腐なる言語。韓愈、答二李翊一書「惟ーー之務レ去、戞戞乎其難哉」○ことばをのべる。

【陳獻章】字は公甫、石齋と號す、廣東新會の人、明の正統十二年の擧人、薦を以て翰林檢討を授けんとす、仕へず、白沙に隱れ、性命の學を講ず、其の學、靜を以て主と爲し、學者を敎ふるに但端坐澄心せしむ、頗る禪に近し。門人白沙先生と稱す、章楓山嘗て天下の人物を謂ひて、白沙を以て第一となす、緒餘詩畫を善くす、弘治十三年卒す年七十三、著す所ろ白沙集十二卷あり。

【陳告】のべつげる。王令詩「幸此不二我陋一、敎誨日ーー」

【陳穀】ふるきこくもつ。呂覽「新穀熟而ーー虧」＝舊穀。

【陳蔡之厄】孔子が陳蔡の地にて厄難に逢はれしをいふ。史、孔子世家「孔子遷二于蔡一三歲、吳伐レ陳、楚救レ陳、軍二于城父一、聞三孔子在二陳蔡之閒一、楚使三人聘二孔子一、孔子將二往拜禮一、陳蔡大夫謀曰、孔子賢者（中略）今楚大國也、來聘二孔子一、孔子用二於楚一、則陳蔡用レ事大夫危矣、於レ是乃相與發二徒役一、圍二孔子於野一、不レ得レ行、絕レ糧、從者病、莫二能興一、孔子講誦弦歌不レ衰」

【陳詩】多くの詩を取りて觀る。禮記「命二太師一、ーレー以觀二民風一」

【陳舟】ふねをならべる。漢書、朱買臣傳「東越王居二大澤中一、今發レ兵浮レ海、直指二泉山一、ーレー列レ兵、疾卷南行、可二破滅一也」

【陳悉】のべつくす。吳志、孫權傳「各自以レ不レ掌二民事一、不二肯便有一レ所二ーー一」

【陳人】陳腐無用の人の義。又自ら謙遜していふ。莊、寓言「人而無二人道一、是之謂二ーー一」

【陳謝】○わけをいひてあやまる。南史、何承天傳「奉レ表ーー」○禮をのべる。

【陳狀】有樣をいひのべる。漢書、劉向傳「願賜二清燕之閒一、指レ圖ーレー」

【陳情】事情をいひのべる。楚辭「願ーレー以白レ行兮」

【陳情書】事情をのべ記したる文書。

【陳酒】さけをならべてもてなす。周禮「賓客之ーー、亦如レ之」

【陳壽】晉の安漢の人、三國志を著す、時人其の敍事を善くし、良史の才ありと稱す。

【陳述】のべる。五代史、韓建傳「獨建前自ーー」＝陳說。

【陳書】三十六卷、唐の姚思廉、勅を奉じて撰す、陳代の史事を記す。

【陳勝吳廣】秦の二世の時、楚人陳勝・吳廣の二人、首として秦に叛く、よりて事の端緒を發するを――を爲すといふ〔史、陳涉世家〕

【陳誠】まごころをのべあらはす。董仲舒文「故輒拔レ心ーレー」

【陳迹】古き事のあと。王羲之、蘭亭記「俛仰之閒、已爲二ーー一」＝陳跡・陳蹟。

【陳設】ならべまうける。後漢書、楊球傳「球爲二司隸校尉一、權門閉レ之、莫レ不二屏氣一、諸奢飾之物、各緘縢不二敢ーー一」＝陳列。

【陳說】のべとく。易經、疏「說レ卦者、ー二ー八卦之德業變化、及法象所レ爲也」＝陳述。

【陳訴】事情をのべてうつたへる。金史、哀宗紀「毋二鎖閉防護一、聽二有レ寃者ーー一」

【陳疏】いひわけする。いひわけ。＝辯疏・陳辯。

【陳套】ふるし、套は舊。＝陳腐。

【陳陳相因】ふるくくされたる米がつみかさなる、世治り年豐かなる狀にいふ。史、平準書「大倉之粟、――」

【陳白沙】陳獻章を見よ。

【陳蕃下レ榻】賓客を敬するにいふ、陳蕃が特に一榻を懸け置きて、徐穉(孺子)の來る時は之を下して優待せし故事に由る。後漢書、陳蕃傳「爲二豫章太守一、以レ禮待二徐穉一爲二功曹一、性方峻、不レ接二賓客一、惟穉來、特設二一榻一、去則懸レ之」

【陳皮】密柑の皮をほしたるもの、藥劑又藥味に用ふ。

【陳布】しきならべる。宋史、禮志「元正冬至、大朝會、ー二ー將士于街左右一」

【陳腐】ふるくなりてくさる。宋史、食貨志「無二ーー一」

【陳米】ふるきこめ。李覯詩「攜レ錢買二破屋一、乞レ火蒸二ーー一」

【陳平宰レ肉】漢の陳平が鄉里の宴會に料理人となりて、肉を平均に客に頒ち、我天下の宰相たらば、亦此肉の如く國家を公平に治めんといひし故事。史、陳丞相世家「里中社、陳平爲レ宰、分レ肉食、甚均、父老曰善、陳孺子之爲レ宰、平曰、嗟乎、使二平得レ宰二天下一、亦如二是肉一矣」

【陳編】ふるきしょもつ。韓愈、進學解「竊二ーー一以盜竊」＝古書。

【陳辯】理由を述べて言ひひらきする。＝陳疏。

【陳雷】陳重と雷義と。二人は後漢の人にて友誼極めて厚し。後漢書、獨行傳「鄉里爲二之語一曰、膠漆自謂レ堅、不レ如二雷與一レ陳」

【陳琳作レ檄】魏の陳琳は文章を善くし最も檄文を作るに長ず。蒙求「典略曰、琳作二諸書及檄一、草成呈二太祖一、太祖先苦二頭風一、是日疾發、臥讀二琳所一レ作、翕然而起曰、此愈二我病一、數加二厚賜一」(檄文は文選に載す)

【陳列】ならべつらぬ。杜甫文「播二其聲音一、以ーー、從二乎節奏一以進退」

【陳露】心の中をいひあらはす。吳志、周魴傳「拳拳輸レ情、ー二ー肝膈一」＝布露。

【陳論】のべあげつらふ。舊唐書、魏徵傳「臣以二事有一レ不レ可、所二以ーー一」

【陪】ハイ バイ 灰 通音

○かさなるつち(重土)○くはふ。くははる(加)○かさぬ。かさなる(重)ー臣は臣の臣。○ます(增・益)みつ(滿)○たすく(助・輔)○はべる、したがふ、ともなふ(伴)主たる者に隨伴する「奉ー」○たすけ、そへども。○またけらい(家臣)臣のまた臣「ー臣」「ー隸」○つぐなひかへす(償還)蘇軾詩「舊逋應許過時ー」今は賠に作る。

【陪遊】貴人に陪從してあそぶ。庾信詩「ーー愧レ無レ作、空見奉レ恩深」

【陪觀】貴人のおともをして見物する。李嶠詩「將軍曾裂レ曲、司馬屢ーー」

【陪侍】君主の側にはべる。魏書、楊昱傳「進無二二傅輔導之美一、退闕二羣寮ーー之式一」寮は僚。

【陪臣】○またげらい、臣の臣、天子の臣たる諸侯の臣。論、季氏「ー執二國命一、三世希レ不レ失矣」○諸侯の大夫が天子に對していふ自稱〔曲禮〕

【陪審】民閒より選出して訴訟の審判に參與せしむ。

【陪從】貴人にしたがひゆく。柳公綽詩「飛レ蓋亦ーー」

【陪承】はべる。梁簡文帝文「常願レーニー甲館一」

【陪乘】そひのり、貴人に陪從して其の車に同乘する。又其の人。戰國策「臣入則編レ席、出則ーー」＝驂乘。

【陪食】貴人にはんべりて食事する。おしゃうばん。＝伴食。

【陪席】目上の人と同席する。

【陪接】貴人にはべり近づく。宋史、高頔傳「遣二頔迎候一、日夕ーー、尤仲二款好一」

【陪都】國都外に別に設けたるみやこ。明の金陵、清の奉天の如き皆是れなり。李白詩「樓船跨レ海次二ーー一」＝陪京。

【陪敦】物を增してあつくする。左、定四「昭二周公之明德一、分二之土田ーー一」

【陪僕】しもべ。後漢書、陳元傳「至二迺ーー告二其君長一」＝隸僕。

【陪鑾】天子の御車につきしたがふ。韋嗣立詩「扈レ蹕ーレー渭渚傍」＝隨鑾。

【陪隸】しもべ。後漢書、袁紹傳「拔二於ーー之中一」＝陪臺。

【陪僚】しもべ。荀勗、四廂樂歌「胥子ーー、憲鼓度楷」

【陴】ヒ 支

ひめがき、ついぢ、城の上の女牆。左、成十五「閉レ門登レー」＝俾倪・埤堄・堞。

【陴隍】しろのひめがきと、ほり。唐書、李晟傳「繕二甲兵一、治二ーー一、以圖二收復一」

【陴堞】城上のひめがき。唐書、高駢傳「蜀之土惡、成都城歲壞、駢易以ニ塼甓ㇾ、ーー完新」

【陸】リク ロク 屋

○くが、をか、高く平かなる地「大ー」「ー地」海の對。○あつし（厚）たかし（高）○みち（道）舟によらずして步行又は車馬などにて行く道、旱路「ー路」○をどる（跳）「ー梁」○數字の六に借用す。○碌（一三五〇頁三段）に通ず「ーー」○雙ーは博戲の一種。○ー續はつづく貌。

【陸游】字は務觀、宋の越州山陰の人、范成大、蜀に帥たるや、游、參議官たり、文字を以て交り、禮法に拘せず、人其の頽放を譏る、因りて自ら放翁と號す、其の詩、淸新刻露にして出すに圓潤を以てし、自ら一宗を闢く、嘉定三年卒す、年八十五、劍南集・老學庵筆記・入蜀記の著あり。

【陸羽】唐の人、字は鴻漸、上元の初、苕溪に隱れ、自ら桑苧翁と號す、茶事に精しく茶經三卷を著す。

【陸海】○物產の豐富なる地をいふ。漢書、地理志「秦地號稱ニーーㇾ、爲ニ九州膏腴ニ」○くがと、うみと。＝海陸。

【陸海軍】陸軍と海軍と。

【陸行】くがぢを行く。史、夏紀「ー載ㇾ車、水行乘ㇾ舟」

【陸機】字は士衡、晉の吳郡の人、身の長七尺、その聲鐘の如し、少くして異才あり、文章世に冠たり、儒術を服膺し、禮にあらざれば動かず、後ち人の爲めに異志ありと譖せらる、歎じて曰く、華亭の鶴唳復た聞くべけんやと、遂に害せらる、時に太安二年、年四十三、著す所ろ陸士衡集十卷あり。

【陸九淵】陸象山を見よ。

【陸龜蒙】字は魯望、唐の長興の人、歌詩及び賦に工なり、松江の甫里に隱る、性茶を嗜む、或は時に舟に上り、圖書茶竈筆床釣具を齎して往來す、初め天隨子と稱し、後ち自ら江湖散人と號す、また甫里先生と號す、高士を以て召さるれども至らず、顏蕘・皮日休・羅隱・吳融と益友たり、吳興實錄四十卷・笠澤叢書三卷を著す。

【陸軍】陸上の防備又は攻戰にあたる軍隊。海軍の對。＝陸師。

【陸產】陸地に產する物。水產の對。禮記「加豆ーー也、其醢水物也」洛陽伽藍記「羊者是ーー之最、魚者是水族之長、所ㇾ好不ㇾ同、竝各稱ㇾ珍」

【陸贄】字は敬輿、唐の蘇州嘉興の人、年十八にして進士に第し、博學宏辭に中り、翰林學士となる、德宗の時、幸に奉天に從ふ、詔書を草し、又、每に論諫し、懇到深切、人或は其の太だ過ぎたるを規す、對へて曰はく、吾、上は天子に負かず、下は學ぶ所ろに負かず、他を恤ふるに遑あらんやと、同平章事に累遷す、永貞元年、裴延齡に譖せられ、遂に遠荒に放たれて卒す、年五十三、宣と諡す、著はす所ろ陸宣公奏議・翰苑集等あり。

【陸相】國陸軍大臣の異稱。

【陸象山】名は九淵、字は子靜、宋の金谿の人、朱熹と時を同うす。象山に居り、象山翁と號す、乾道八年進士、官、奉議郎、知荊門軍に至り、紹熙三年卒す、年五十四、其の詩文集を——全集といふ。

【陸輪】陸地の運送。歐陽修詩「水載每連ㇾ軸、ーー動盈ㇾ車」

【陸處】陸上に居る。南史、張融傳「臣ーー無ㇾ屋、舟居無ㇾ水」淮南子「ーー者農」

【陸棲】陸上にすむ「ーー動物」

【陸宣公】陸贄を見よ。

【陸續】つづきて絕えざる貌。陸游詩「截ㇾ竹作ㇾ馬走不ㇾ休、小車駕羊聲ーー」

【陸稻】をかぼ。禮記「淳熬煎醢、加ニ于ーー上ニ」

【陸地】をか、くがぢ。佛本行經「將ㇾ至ニ於ーーニ」

【陸沈】○水なくしてしづむ義。國の滅ぶるにいふ。又、賢人の俗間にひそみ隱れ居るにもいふ。莊、則陽「方且與ㇾ世違、而心不ㇾ屑ニ與ㇾ之俱ㇾ、是ーー者也」○くらくしづむ（昏沈）の貌。論衡「知ㇾ古不ㇾ知ㇾ今、謂ニ之ーーニ」

【陸田】はたけ。水田の對。晉書、食貨志「陂多則土薄水淺、潦不ニ下潤ㇾ、每ㇾ有ニ水雨ㇾ、輒復橫流、延及ニーーニ」

【陸放翁】陸游を見よ。

【陸博】すごろく、博奕の一種。事物紀原「烏曹始置ニーー之戲ニ」

【陸風】海岸の地方にて、夜、陸地より海に向ひて吹く風。

【陸兵】陸上にて戰ふ兵士。水兵の對。

【陸味】土地に生ずる食物。戴良詩「ーー萃ニ南品ニ」

【陸離】○光輝の散亂する貌。又、美好なる貌。上林賦「牢落ーー、爛漫遠遷」○いりまじりて衆く盛んなる貌。楚辭「長ニ余佩之ーーニ」＝參差。

【陸梁】○亂れ走る貌。揚雄、甘泉賦「飛蒙茸而走ーー」○ほしいままにおどる貌。西京賦「怪獸ーー」＝跳梁。

【陸隴其】字は稼書、平湖の人、康熙九年の進士、嘉定縣に知たり、落職せし時、民市を罷むること三日、

その學一に程朱を準とし、敬に居り理を窮むるを以て本となす、著すところ四書講義困勉錄・讀禮志疑・讀朱隨筆・松陽講義・三魚堂文稿等あり、康熙三十一年卒す、年六十三、淸獻と諡し、雍正二年孔子の廟廷に從祀せらる。

【陸王之學】宋の陸九淵（象山）と明の王守仁（陽明）との學說、陽明の良知の學は、九淵の頓悟を貴ぶ說に本づく、故に併稱す。

【陸陸】平凡なる貌。後漢書、馬援傳「今更共ーーㇾ」＝碌碌。

【陵】リョウ 蒸

○大いなるをか（大阜）○つか（冢）みささぎ、天子の御墓「山ー」○あなどる（侮）中庸「在ニ上位ㇾ不ㇾーㇾ下」かろんず（邈）しのぐ（淩）加へ侵す。左、隱三「少ー長」○こえる（躐）禮、學記「不ㇾー節而施之謂ㇾ孫」○をかす（犯）禮、聘義「則不ニ相侵ーニ」○ふ（歷）○にらぐ（淬）○けはし（峻）○のぼる（升）○次第に衰へる（弛替）「ー夷」「ー遲」○次第に土地が低くなる。

【陵夷】盛んなりしものが次第に衰へる、丘陵の漸くに平かなる如きに喩ふ。漢書、成帝紀「帝王之道、日以ーーㇾ」＝陵遲。

【陵域】みささぎの地內。魏書、汝陰王傳「賜ニ葬ーーニ」

【陵雨】暴雨。法言「震風ーー、然後知ニ廈屋之帡幪ニ」

【陵雲之志】○世外に超然たる志。漢書、揚雄傳「飄飄有ニ——ニ」○高き地位にのぼらんとする志。天寶遺事「張彖登ㇾ科、爲ニ華陰簿ㇾ、而爲ニ守令所ㇾ抑、歎曰、丈夫有ニ陵ㇾ雲蓋ㇾ世之志ㇾ、而拘ニ於下位ㇾ、若下立ニ身矮屋之下ニ使中人擡ㇾ頭不上ㇾ得、乃棄ㇾ官而去」

【陵越】しのぎこえる。禮、樂記疏「五聲不ㇾ和、則君臣上下、互相ーーㇾ」

【陵園】天子のみささぎ。晉書、瑯琊悼王煥傳「營ニ起ーーㇾ、功役甚衆」

【陵駕】他人をしのぎこえる。＝凌駕（宋書、恩倖傳）

【陵丘】をか、陵は大、丘は小。爾雅「如ㇾ陵如ㇾ丘」＝丘陵。

【陵窘】せまりくるしむ。枚乘、七發「汗流沫墜、寃伏ーー」

【陵虐】しのぎいぢめる。書經「無ㇾ虐ニ煢獨ニ而畏ニ高明ニ」疏「天子無ㇾーニー煢獨ㇾ、而畏ニ避高明貴寵者ニ」＝凌虐。

【陵虛】天空に升る。抱朴子「攬ニ六翮ーー之用ニ」

【陵京】高く大いなる丘。蘇軾詩「功成志自滿、積惡如ニーーニ」

【陵戶】みささぎの番人の家（魏書、任城王順傳）宋史、禮志「置ニ守陵五戶ニ」

【陵誇】しのぎをかしてほこる。元好問詩「得意未ㇾ用相ーーㇾ」

【陵谷】○をかと、たにと。駱賓王詩「坐立山川險、嗟吁ーー變」○ーー之變の略。晉書、杜預傳「焉知ニ此後不ㇾ爲ニーーニ乎」

【陵谷易處】高下其の位をかへ、尊卑其の順序を失ふ義。漢書、劉向傳「——、列星失ㇾ行」

【陵谷之變】高き岡が變じて深き谷となり、又谷が變じて岡となる。世事の變遷の甚だしき形容。詩、小雅「高岸爲ㇾ谷、深谷爲ㇾ陵」＝陵谷・桑滄之變。

【陵汨】をかしみだる。晉書、郗鑒傳「ーニー五常ㇾ、侮ニ弄神器ニ」

【陵忽】しのぎゆるかせにする、あなどる。顏氏家訓「ーニー長者ㇾ、輕ニ慢同列ニ」＝陵侮・輕蔑。

【陵寢】天子のみささぎ、寢は廟。宋史、禮志「置ニ園邑二百家於烏程ㇾ、立ニーーニ」＝陵廟・陵園。

【陵聚】をかの如く多くあつまる。揚雄、羽獵賦「丘累ーーㇾ」

【陵辱】しのぎはづかしむ。石崇詩「父子見ニーーㇾ、對ㇾ之慙且驚」＝凌辱。

【陵霄】のうぜんかづら。本草圖經「ーー花、多生ニ山中ニ」＝陵苕・凌霄花。

【陵斥】しのぎしりぞける。後漢書、西羌傳「未ㇾ有下ーニー上國ㇾ、如ㇾ斯之熾上也」

【陵替】下の者が上をしのぎて上の威權がおとろへる。左、昭十八「下陵上替、能無ㇾ亂乎」梁武帝詔「晉氏ーー、虛誕爲ㇾ風」

【陵遲】○丘陵の次第に低くなるもの。淮南子「河以逶迤故能遠、山以ーー故能高」○盛んなりしものが次第に衰へる。詩經、序「禮義ーー」＝陵夷。○人の肉をそぎ切る刑、金代に始まる慘酷なる刑罰。遼史、逆臣傳「ーー而死」＝柳葉咼。

【陵苕】凌霄花の別名。郭璞詩「ーー哀ニ素秋ニ」

【陵突】しのぎこえる。廣川書跋「此帖超軼ーー、似ㇾ欲ㇾ出ニ其家學ニ」

【如ㇾ陵】をかの如く物が多くある。詩經「如ㇾ山如ㇾ阜、如ㇾ岡如ㇾー」左傳「有ㇾ酒如ㇾ澠、有ㇾ肉ーㇾー」

【陵波】なみをしのぐ。南史、隱逸傳「落日遊ニ遨諸際ㇾ、見ニ一輕舟ーㇾー隱顯ㇾ、俄而漁父至、神韻蕭灑、垂ㇾ綸長嘯」

【陵罵】しのぎののしる。＝侮罵。

【陵冒】しのぎをかす。南史、齊東昏侯紀「不ㇾ避ニ寒暑ㇾ、ーニー雨雪ニ」

【陵暴】人をしのぎてあばれる。尹文子「刑者所ニ以威ニ不服ㇾ、亦所ニ

以生ニーー」

【陵犯】しのぎをかす。參同契「各自獨居不ニ相ーー一」

【陵侮】しのぎあなどる。晉書、齊王攸傳「强暴使レ酒、數ーニー弟同一」＝陵忽。

【陵廟】天子のおたまや。後漢書、陳忠傳「河閒託ニ叔父之屬一、清河有ニーー之尊一」

【陵蔑】しのぎあなどる。左傳「齊侯召ニ萊子一」疏「以ニ其比隣小國一意ーニー之一」＝陵侮。

【陵墓】天子のみささぎ。宋史、禮志「ーー雖レ存、不レ禁ニ樵采一」＝陵墳・山陵・陵園。

【陵邁】しのぎてこえすすむ。晉紀總論「世族貴戚之子弟、ーー超越、不レ拘ニ資次一」

【陵轢】○ふみにじる。史、孔子世家「楚靈王兵彊、ーニー中國一」＝蹈踐・侵陵。○すれあふ、軋轢する。

九畫

【陻】イン 眞 又、堙・湮に作る
ふさぐ。ふさがる(壅塞)書、洪範「鯀ー洪水一」

【陰】陰（阜部八畫）の俗字。

【隁】エン 阮
せき。又水をせく。水を障へ畜ふ。＝堰。

【階】カイ 佳
○きざはし。だんだん(陛)堂に登る道「ー級」「庭ー」「土ー」「石ー」書、大禹謨「舞ニ干羽于兩ー一」○はしご(梯)「ー梯」はしごをかける。論、子張「猶ニ天之不レ可ニー而升一也」○きだ(級)しな(官等)「位ー」「官ー」「文ー」「武ー」○物事の生ずるいとぐち。詩、大雅「誰生ニ厲ー一矣」○轉じて物事のてびき案内。○樓閣の層數を數ふる數詞「二ー」「五ー」＝層。○泰ーは三台星。

【釋レ階而登レ天】はしごを棄てて天に登らんとする。決して爲すことを得ざる喩。楚辭、九章「懲ニ於羹一者而吹レ韲兮、何不レ變ニ此之志一也、欲ニ釋レ階而登一レ天兮、猶有ニ曩之態一也」

【階閤】きざはしのあるどてんの小門。梁簡文帝、南郊頌「山池壯麗、ーー彤丹」

【階級】○あがりだん、階段。郄甑、明堂賦「ーー周廻」○轉じて物事の次第順序、又、官等の次序の義。宋書、周朗傳「既謂ニ之才一、則不レ宜下以ニーー一限上」

【階次】しな、等級の順序。孫楚、九品疏「收ニ人才一不レ問ニーー一」

【階狀斷層】土地の斷層の順次に階級狀をなすもの。＝階段層。

【階序】きざはし、だんだん。漢書、異姓諸侯王表「崩堂之上、不レ降ニーー一而運ニ天下一」王襃、四子講德論「蚊蝱終日經營不レ能レ越ニーー一、附ニ驥尾一則涉ニ千里一、攀ニ鴻翮一則翔ニ四海一」

【階承】順次によりて受けつぐ。吳志、孫皓傳「孤以ニ不德一、ーニー統緒一」

【階前盈尺之地】階段の一尺ばかり前の所。尊者の面前へ出づる義。李白、與ニ韓荊州一書「今君侯何惜ニーーー一、不レ使ニ白揚レ眉吐レ氣激ニ昂青雲一耶」

【階前萬里】萬里の遠きも近く階前に在る如く、地方の行政の得失は、皆天子の聞知せらるる所となりて、欺くを得ざるをいふ。唐書、宣帝紀「宣宗以ニ于延陵一爲ニ建州刺史一、入謝、上曰、去ニ京師一幾何、曰、八千里、上曰、卿到レ彼、善惡朕皆知レ之、勿レ謂ニ其遠一、此階前卽萬里也」

【階礎】あがり段のいしずゑ。水經、注「陛下ーー倘在」

【階闥】○はしごだんと、宮中の小門と。○轉じて宮中の義。漢書、霍光傳「霍光以ニ結髮一內侍、起ニ于ーー之閒一」

【階除】きざはし。楊炯、幽蘭賦「循ニーー一而下、望ニ見秋蘭之青青一」

【階梯】○はしごだん、きざはし。何遜、七召「九層鬱律以ーー」○てびき、いとぐち。易、繫辭「言語以爲レ階」疏「言語以爲ニ亂之ーー一也」

【階陛】宮殿のきざはし。史、刺客傳「門戶ーー左右皆王僚之親戚也」＝宮陛。

【隅】グ 虞 通音グウ
○すみ(角・陬)「海ー」「城ー」「坐ー」はて、かど、四角のでばな(端角)論、述而「擧ニ一ー一不下以ニ三ー一反上」○物の方形なる者皆四隅あり、よりて品行方正に喩ふ「廉ー」○、詩、大雅「抑抑威儀、維德之ー」○かたはら(旁)楚辭「我之ー」○きし(崖)

【隅奧】へやのすみ。顏延之、庭誥文「ーー有レ竈、齊侯蔑レ寒、犬馬有レ秩、管燕輕レ饑」

【隅坐】かたすみに坐す、成人と竝び坐せず。檀弓「童子ーー而執レ燭」

【隅中】將に正午にならんとする時。淮南子「臻ニ于衡陽一、是謂ニーー一」＝禺中。

【隅反】類推といふが如し。物に四隅あり、一隅を擧げて、其の三隅を

知るべき義。論、述而「擧ニ一隅一不下以ニ三ーー上則不レ復也」に本づく。

【隍】クヮウ 陽
○からほり、水の無き城池（水の有るは池）「池ー」「深ー」易、泰卦「城復ニ于ー一」城下の坑。○城ーは神の名、韓愈に、祭ニ城ー一文あり。

【隍塹】ほり。水經、注「城中水泛、則四ニ周ーー一」

【隉】ゲツ ゲチ 屑 又、臲に作る
○あやふし(危)安からず。書、泰誓「邦之杌ー」○あし(凶)○のり(法度)臬と通ず。

【陼】シヨ 語
なぎさ(小洲)渚と通ず。

【隊】㊀タイ ㊁ツキ 隊 眞
㊀くみ、くみあひ、わかち。○兵士のくみ「軍ー」「前ー」「後ー」「部ー」「騎ー」左傳、注「百人爲レー」○多くの人の整列するもの「ー商」㊁おとす。おつ(落)古、墜に通ず。

【隊伍】兵士のくみあひ。伍は五人組。何承天文「復ニーー一坐ニ食廩糧一」

【隊商】隊を組みて沙漠を行く商人。

【隊主】軍隊のかしら。晉書「自ニーー將帥一以下、謝安無レ不ニ慰勉一」＝隊長。

【隊長】○軍隊のかしら。史、孫子傳「以ニ王之寵姬二人一、各爲ニーー一、皆令レ持レ戟」＝隊主。○團隊のかしら。

【隊列】軍隊のつらなり、れつ。

【隋】㊀タ・ダ ㊁ズキ 哿 支
㊀おつ(落)古、墮に通ず。○肉を裂く。○祭の餘物をうづめる。○圓くして長き形(橢圓)古、橢に通ず。㊁朝代の名、始め楊堅(文帝)封を隨に受く、後、南北朝を混一して帝位に卽くに及び、隨の辵に从ひ、周齊奔走して寧からざりしを以て辵を去りて國號をーといふ、四帝二十九年を經て唐に禪る。

【隋苑】隋の煬帝の建てしその、江蘇省江都縣の西北七支那里に在り、卽ち上林苑、一名西苑。

【隋和之材】隋は隋侯の珠(次條參看)和は和氏の璧。以て材の美なるに喩ふ。司馬遷、報ニ任安一書「雖下材懷ニ隋和一、行若中由夷上、終不レ可ニ以爲一レ榮」隋もと隨に作る。

【隋侯之珠】隋侯が蛇を助けたる報に得たりしといふ寶珠。隋、もと隨に作る。淮南、覽冥、注「隋侯、漢東之國、姬姓諸侯也、隋侯見ニ大蛇傷斷一、以レ藥傅レ之、後蛇於ニ江中一、銜ニ大珠一以報レ之、因曰ニーーー一、蓋明月也」說苑「ーーー、國之寶也、然用レ之彈、曾不レ如ニ泥丸一」＝明月之珠・夜光之珠。

【以ニ隋珠一彈レ雀】隋珠は貴きたま。雀は小鳥なり、費多くして所得少きに喩ふ。莊、讓王「以ニ隋侯之珠一、彈ニ千仞之雀一、世必笑レ之、是何也、則其所レ用者重、而所レ要者輕也」

【隋書】八十五卷、二十四史の一、唐の魏徵等勅を奉じて撰す、隋代の史書。

【隋隄】隋の煬帝の築きたる運河のつつみ、多く柳をうう。吳融詩「ーー風物已凄涼」＝隋堤。

【隋煬帝】名は廣、文帝の第二子、文帝疾に寢ぬ、廣の行ふ所、無道なるを以て之を廢せんと欲す、廣遂に帝を弑し位に卽く、奢侈を窮極し、衆怨沸騰す、宇文化及の爲めに弑せらる、在位十二年。

【隄】テイ 齊
○つつみ、どて土を築きて水の溢出するを防ぐもの「ー防」＝堤。○きし(岸)

【隄扞】つつみ。艮嶽記「鑿レ池爲ニ溪澗一、疊レ石爲ニーー一」＝隄障。

【隄滸】つつみと、みぞと。管子「導ニ水潦一、利ニーー一」

【隄塘】つつみ。漢書、高祖紀「於ニ澤陂ーー之上一休息」＝堤塘。

【隄防】つつみ。禮、月令「季春之月、修ニ利ーー一」＝堤坊・隄塘。

【陽】ヤウ 陽
○易學上の語。動・生・開・上・前・南・天・男・君・日・晝などすべて積極性の意を有するもの。陰の對。○ひ(日)「太ー」「夕ー」「ー不レ晞」○ひなた(日向)日光のさす所。○山の南、南面「岳ー」「衡ー」○水の北（川は低き故に北岸が日なたになる）「淮ー」「渭ー」「漢ー」○きよし(淸)(溫)詩、幽風「春日載ー」○あたたか○あやある貌。○うはべ、あらは、いつはり(僞)「ー驚」＝佯。○おほやけ(公)○かみなづき、陰曆の十月の稱。詩、小雅「歲亦ー止」○あらは

る（顯）○揚に通ず。○男子の生殖器「一道」○一一は明かなる貌。又、文章ある貌。又、得意の貌。又、心を用ふる所なき貌。○靑一は春。○昭一は十干の癸の異名。爾雅「太歳在癸、曰昭一」○端一は五月五日。○重一は九月九日。○昌一は菖蒲の別名。○一關は今の甘肅省敦煌縣の西に在る關の名。

同訓異義 陽・僞・詐・譎・詭・佯等の別は僞（一六六頁四段）の條を見よ。

【陽烏】太陽。日中に三足の烏ありといふ傳說に由る。張協、七命「一一爲之頓羽、夸父爲之投策」

【陽曜】太陽。柳貫詩「暉暉一一燭天根、殷殷春雷行地脈」

【陽炎】次條に同じ。

【陽焰】かげろふ。庶物異名疏「龍樹大士曰、日光著微塵、風吹之野中轉、名之爲一一」＝陽炎・遊絲。

【陽夏】なつ。陽氣の盛んなるによりていふ。淮南子「和春一一、殺秋約冬」

【陽卉】春夏に生ひしげる草木。謝靈運詩「淒淒一一腓、皎皎寒潭潔」

【陽氣】○陽の氣。暖くして萬物の發生を助くる氣。陰氣の對。禮、月令「生氣方盛、一一發洩」○園賑か。又天候。

【陽氣所發金石亦透】朱子の語、下に「精神一到何事不成」とあり。

【陽九】わざはひ。陽厄五、陰厄四、合せて九となす。漢書、匈奴傳「今天下遭一一之厄」文天祥、正氣歌「嗟予遘一一」

【陽狂】きちがひのまねをする。後漢書、丁鴻傳「一一不識駿」駿は鮑駿。＝佯狂・詳狂。

【陽旭】あさひ。王融、淥水曲「濫露改寒司、交鶯變一一」

【陽煦山立】陽煦は日の物を暖むるが如く、山立は山の端然と立つが如く、人品の温和にして端正なる形容。書言故事「宋朝王沂公曾、姿質端厚、楊億目之曰、王君一一一一、宗廟器也」

【陽關曲】送別の詩をいふ。王維、送元二使安西詩「渭城朝雨浥輕塵、客舍靑靑柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人」この詩の後の三句を二度重ねて唱ふ。故に陽關三疊といふ。＝渭城曲。

【陽驚】いつはりておどろく。漢書、陳平傳「一一曰、以爲亞夫使、乃項王使也」

【陽月】陰曆十月の異名。陰極まりて陽生ずる義。爾雅「十月爲陽」

【陽言】うはべをいつはりていひふらす。戰國策「一一救韓」

【陽侯之波】晉の陽陵國侯、溺死して、海神となり、風波を起して舟を覆す。よりて海の大波の義とす。淮南、覽冥、注「武王伐紂渡于孟津、一一一一逆流而擊」

【陽死】いつはりて死す、しんだまねする。漢書、李廣傳「廣一一」＝佯死。

【陽祀】春と夏とのまつり。周禮「凡一一用騂牲」

【陽秋】皮裏陽秋（一三〇七頁二段）を見よ。

【陽日】太陽。晉書、李勢載記「澤及四海、恩過一一」

【陽春】○はる。李白、宴桃李園序「一一召我以煙景、大塊假我以文章」○恩澤仁政に喩ふ。晉書、荀勗傳「願之如一一、畏之如雷霆」○高尙なる音曲。岑參詩「一一一曲和皆難」次條參看。

【陽春白雪】楚國の歌曲にて、高尙の詞曲の稱。宋玉、對楚王問「客有歌於郢中者、其始曰下里巴人、國中屬而和者數千人、其爲陽阿薤露、國中屬而和者數百人、其爲一一一一、國中屬而和者數十人、引商刻羽、雜以流徵、國中屬而和者、不過數人而已、是其曲彌高、其和彌寡」

【陽舒】陽氣にして心がのびる。陰慘（二一〇六頁四段）參看。

【陽燧】日光より火をとるもの。晉書、天文志「火出於一一、一一員而火不員也」

【陽聲】○陽に屬するこゑ。周禮、大師「一一、黃鍾・大蔟・姑洗・蕤賓・夷則・無射」○雷の聲。唐書、五行志「雷者、一一」

【陽羨】漢の縣の名、名茶の產地。其の故城は今の江蘇省宜興縣の西南に在り。

【陽宗】日をいふ。禮、月令、疏「日爲一一、月爲陰宗」

【陽尊】○うはべだけたふとぶ。漢書、高帝紀「一一懷王爲義帝」○陽に屬するものはたふとし。說苑「陽貴而陰賤、一一而陰卑」

【陽道】○天の剛健のみち。君主又は男子の道。禮、昏義「天子理一一、后治陰德」○男子の生殖器、男子の勢。（禮、曾子問、注）舊唐書、朱敬則傳「一一壯偉」

【陽中】春の異稱。漢書、律曆志「春爲一一、萬物以生」

【陽鳥】陽に隨ふの鳥。卽ち鴻雁の類。書、禹貢「彭蠡既豬、一一攸居」

【陽天】東南の天。九天の一。呂覽「東南曰一一」

【陽怒】○おこりしまねをする。＝佯怒。○うはべにあらはれしいかり。大戴禮「怒氣內畜、雖欲隱之、一一必見」

【陽德】陽の德、萬物を生長せしむ

る德。易、乾卦、疏「九四一一漸盛」

【陽馬】やねの四隅に出でて短き椽を承くる者。何晏、景福殿賦「承以一一、接以圓方」

【陽報】あらはなるむくい。說苑、復恩「有陰德者必有一一」

【陽木】春夏の候に生茂する木。桐など。一說、山の南に生ずる木。周禮、山虞「仲冬斬一一」

【陽眠】たぬきねいり、ねたふりをする。南史、顏延之傳「何尙之望見便一一」＝佯眠・貉睡。

【陽明學】明の王陽明（名は守仁、浙江餘姚の人）の唱へし知行合一を主とする學說。＝王學・餘姚派・姚江學。

【陽明四句訣】王陽明が道を學ぶの門戶として、其の徒に授けし敎。傳習錄「無善無惡心之體、有善有惡意之動、知善知惡是良知、爲善去惡是格物」＝四言敎。

【陽陽】○文章ある貌。詩、周頌「龍旂一一」○得意の貌。又、心を用ふる所なき貌。詩、王風「君子一一、左執簧」○自若たる貌。韓愈、張中丞傳後序「一一如平生」

【陽六】十二律の中にて、陽の律六。一、黃鍾、二、大蔟、三、姑洗、四、蕤賓、五、夷則、六、無射。後漢書、律曆志「律十有二、一一爲律」

【陽林】日あたりよきもり。左思詩「白雪停陰岡、丹葩曜一一」雪一に雲に作る。

【陽禮】周代の禮の一、鄕射飲酒の禮。周禮、大司徒「二曰、以一一敎讓、則民不爭」

【陽曆】太陽曆（四二五頁四段）の略語。＝新曆。

【陽和】○のどやかなる春の時節。史、始皇紀「時在中春、一一方起」柳宗元詩「詔書許逐一一至、驛路開花處處新」＝春和。○仁政に喩ふ。蔡琰、胡笳十八拍「知是漢家天子兮布一一」

【隃】ユ 麌

○こゆ（越）漢書、匡衡傳「卑不踰尊」＝逾・踰。○はるか（遙）

【隃麋】漢の縣名、右扶風に屬す、墨の產地。轉じて墨の異名とす。漢官儀「尙書令僕丞、月賜一一大墨一枚・小墨一枚」

【隆】リュウ 東 隆は俗字

○たかし、なかだか、中央の高きにいふ。○高くする。戰國、齊策「一薛之城」○ゆたか（豐大）○さかんなり（盛大）○さかんにする。○おほし（多）○たふとし（尊）位又は身分が尊し。たふとぶ「一師」○あつし（厚）○窿に同じ「穹一」○一一は雷の聲。○豐一は雷師又、雲師（離騷、注）＝豐隆。

同訓異義 隆・高・崇・喬・邵の別は高（二二六〇頁二段）の條を見よ。

【隆愛】てあつきいつくしみ。陸雲詩「一一結在昔、信誓貫三靈」＝隆寵。

【隆渥】君主のあつきめぐみ。唐書、楊師道傳「參預朝政、親遇一一」＝隆恩。

【隆鬱】たかくして盛んにしげる。輟耕錄「松檜一一、秀若天成」

【隆運】盛んなるまはりあはせ。＝昌運・盛運・盛時。

【隆永】さかんにながし。薛道衡、隋高祖頌「鼎業靈長、洪基一一」

【隆窰】明の隆慶（穆宗の年號）中製する所の官窰にて製せし陶器。

【隆汙】世のさかんなると、おとろへると。＝隆汚・汙隆・盛衰・隆替。

【隆恩】盛んなるめぐみ。徐陵文「斯實不世之一一」＝洪恩・隆寵。

【隆赫】さかんにあらはれる。唐書、李抱玉傳「位望一一、在鎭十餘年」

【隆洽】さかんにあまねくゆきわたる。漢書、王莽傳「莽處譽一一」

【隆寒】さかんなるさむさ。魏志、王昶傳「朝華之草、夕而零落、松柏之茂、一一不衰」＝嚴寒。

【隆顏】天子のおかほ。王惲詩「曳裾挾策拜一一」＝天顏・龍顏。

【隆起】○さかんにおこる。○中がたかくたつ。後漢書、張衡傳「造候風地動儀、以精銅鑄成、圓徑八尺、合蓋一一、形似酒尊」尊は樽。

【隆貴】盛んに貴し。史、張湯傳「湯嘗病、天子至、自視病、其一一如此」＝尊貴。

【隆遇】待遇をさかんにする。後漢書、明德馬皇后紀「後宮有進見者、每加慰納、若數所寵引、輒增一一」＝優遇。

【隆刑】刑罰をたふとびて重くする。又其の刑法。晉書、刑法志「一一峻法、非明王之急務」＝嚴刑・峻刑。

【隆慶】盛んにめでたし。陸雲、晉夏府君誄「惟神一一、篤生府君」

【隆眷】さかんなるいつくしみ。江淹、知己賦「忘年齒而一一」＝隆恩・隆寵。

【隆顯】位高くして世にあらはれる。南史、歐陽頠傳「昆季一一、莫非國恩」

【隆古】盛んなりし古代。陸機、大田議「一一之主、不改法而下治」

【隆興】さかんにおこる。後漢書、來歙傳「陛下聖德一一」

【隆準】たかきひたひ。孔叢子「吾觀孔仲尼、有聖人之表、河目而一一、黃帝之形貌也」（河目は窪き目）

【隆師】師をたふとぶ。荀、脩身「君子一一而親友」＝嚴師。

【隆熾】さかんなり。潘岳詩「我來冰未ㇾ泮、時暑忽ーー」
【隆深】さかんにふかし。後漢書、宋意傳「陛下至孝烝烝、恩愛ーー」
【隆車】大いなる車、高き車。陳琳檄ニ豫州一文「欲下以ニ螳螂之斧一禦中ーー之隆上」
【隆昌】○隆盛に同じ。＝盛昌。○南北朝の時、齊の鬱林王の年號。任昉文「ーー季年、勤王始著」
【隆儒】儒者をたふとぶ。漢書、董仲舒傳「自下武帝初立ニ魏其侯・武安侯一爲ㇾ相、而ーㇾー矣上」
【隆崇】たかし。漢書、司馬相如傳「其山則盤紆岪鬱、ーー律崒」
【隆暑】さかりのあつさ。陸機、從軍行「ーー固已慘、涼風嚴且苛」＝隆熱・盛暑。
【隆盛】さかんなり、さかえる。漢書、楊惲傳「惲家方ーー」＝隆昌。
【隆準】たかき鼻ばしら。史、高祖紀「高祖爲ㇾ人ーー而龍顏」＝隆鼻。
【隆中】山名。今の湖北省襄陽縣の西、二十支那里に在り、漢末、諸葛亮、此に隱れ、山中に草廬を爲る、山中に抱膝石あり、隆起して墩の如く、十數人を坐せしむべし。
【隆寵】てあつきいつくしみ。晉書、傅咸傳「義無ㇾ覥然虛忝ニーー一」＝隆恩。
【隆替】さかんなると、おとろへると。晉書、王羲之傳「悠悠者以ニ足下出處一足ㇾ觀ニ政之ーー一」＝隆汙・盛衰。
【隆冬】嚴しき寒さの節。晉書、王羲之傳「觀ニ其字勢一疎瘦如ニーー枯樹一」＝嚴冬。
【隆德】德をたふとぶ。漢書、李尋傳「聞者、太白正晝經ㇾ天、宜ニーㇾー克ㇾ躬、以執ニ不軌一」
【隆熱】さかりのあつさ。韓愈文「六月ーー」＝酷熱。
【隆波】高くさかんなるなみ。劉向、九歎「乘ニーー一以南度兮」
【隆鼻】たかきはな。淮南子「其人兌形小頭、ーー大口」
【隆富】盛んに富む。左思、蜀都賦「侈侈ーー、卓鄭埒ㇾ名、公ニ擅山川一、貨ニ殖私庭一」
【隆豐】盛んに豐かなり。後漢書、仲長統傳「寵貴ーー者、恭后妃姬妾之家也」
【隆窳】盛んなると衰へると。蜀志、郤正傳「道有ニーー一、物有ニ興廢一」＝隆窊・隆替。
【隆隆】○雷の聲。漢書、五行志「ーー如ニ雷聲一」○勢の盛んなる貌。揚雄、解嘲「炎炎者滅、ーー者絕」
【隆禮】○禮儀を盛んにす。禮記「ーㇾー由ㇾ禮、謂ニ之有方之士一」○禮をたふとぶ。荀、勸學「凡學之經、莫ㇾ速ニ乎好ニ其人一、ーㇾー次ㇾ之」

【隈】ワイ 灰

○くま（隩）水の曲り入る處（水曲）「水ー」○山の曲りて入り込みし處「山ー」○弓の曲れる處（弓淵）○すみ（方隅）左思、魏都賦「考ニ之四ー一」○また（股間）
【隈澳】入り込みたるみぎは。孟浩然詩「石潭傍ニーー一、沙岸曉夤緣」
【隈曲】すみ、くま。司馬光詩「春塘含ニ薄冰一、浙瀝隱ニーー一」

【陿】

陜（二一〇三頁四段）と狹（一二二八頁四段）とに同じ。
【陿隘】せまし。史、李斯傳「逮ニ秦地之ーー一」沈炯、歸魂賦「何武關之ーー、而漢祖之英雄」＝狹隘・褊隘。

十畫

【隘】㊀アイ ㊁ヤク 卦 陌

㊀せまし（狹陋）土地せまし。○心せまし「狷ー」「褊ー」孟、公孫丑「伯夷ー」○いやし（陋）狹くしていやし「ー巷」○きびしち、けはし（險）せまきみ（急）○けはしき地（險阻）「險ー」「峻ー」㊁ふさがる（塞）「困ー」＝阨・阸。
同訓異義（セマシ）隘・狹・窄・褊の別は狹（一二二八頁四段）の條を見よ。
【隘害】要害よきところ。東京賦「守ㇾ位以ㇾ仁、不ㇾ恃ニーー一」＝險要。
【隘巷】せまくきたなきちまた。史、周紀「以爲ニ不祥一棄ニ之ーー一」＝狹巷・陋巷。
【隘衢】せまきちまた。＝隘巷。
【隘陿】せまし。史、司馬相如傳「迫ニ區中之ーー一兮、舒ㇾ節出ニ乎北垠一」
【隘險】せまくしてけはし。詩經、疏「地又ーー、而多ニ樹木一」
【隘湫】せまくしてしめる。韓駒詩「我恨緣ニ詩窮一、貫ㇾ屋隘而湫」
【隘鄽】○せまきみせ。○市店にふさがる。元稹詩「識稔民四至、隘ㇾ廛亦隘ㇾ衢」鄽・廛通ず。
【隘勇】臺灣にて土人より募りし護境兵「ーー線」

【隕】㊀キン ウン ㊁ウン ㊂エン 軫 問 先 通音キン

㊀おつ。おとす（墜）「ー石」高きより下す。左、莊七「星ー如ㇾ雨」○やぶる（壞）○たふる。うしなふ（失）命を失ふ。古、殞に通ず。㊁ひとし（均）○ひろさ、はば、まるみ。古、員に通ず。詩、商頌「幅ー既長」
同訓異義（オツル）隕・落・墜・零・墮の別は落（一六六一頁三段）の條を見よ。

【隕越】○下にころがりおちる。左、僖九「恐ーニー于下一、以遺ニ天子羞一」＝顚墜。○事をしくじる、失敗する。
【隕穫】困迫して志を失ふ貌。禮、儒行「儒有下不ㇾーニー於貧賤一、不ㇾ充ニ詘於富貴一」
【隕潰】やぶる。魏志、武帝紀「蘄陽之役、橋蕤授ㇾ首、稜威南邁、術以ーー」
【隕霜】しもふる。春秋「定公元年冬十月、ーㇾー殺ㇾ菽」
【隕泗】なみだをおとす。梁書、張纘傳「瞻ニ汨羅一以ーㇾー」＝隕涕・垂泗・流涕。
【隕星】地におつるほし。左、僖十六「隕ニ石于宋一五、ーー也」＝隕星石。
【隕石】空中よりおつる石。前條參看。
【隕蘀】草木が凋落する、隕は墜、蘀は落。詩、豳風「十月ーー、一之日于貉」
【隕墜】おちる。荀子「列星ーー、旦暮晦盲」
【隕涕】なみだをおとす。晉書、庾峻傳「去ㇾ勢如ニ脫屣一、路人爲ㇾ之ーー」舊唐書、李晟傳「晟破ㇾ賊、露布至ニ梁州一、上覽ㇾ之感泣、羣臣無ㇾ不ㇾーㇾー」＝隕淚。
【隕蔕】へたをおとす。牛弘文「嚴風鼓ㇾ甍、繁霜ーㇾー」
【隕鐵】隕石より得たる鐵。
【隕顚】おちたふる。舊唐書、吐蕃傳「兢業齊栗、懼ニ其ーー一」
【隕淚】なみだをおとす。禰衡文「聞ㇾ之者悲傷、見ㇾ之者ーー」

【隖】ヲ ウ 麌

○とりで、村中に立てし壁壘「村ー」後漢書、董卓傳「築ニー於郿一、高厚七尺、號曰ニ萬歲ー一」○こじろ（庳城）○つつみ（小隄）「烟ー」「花ー」「村ー」＝塢。

【隔】カク 陌 又、鬲・隔に作る

○へだつ、さへぎる（障）物を中間に置きてさへぎる「ーㇾ水」史、始皇紀「防ニー内外一」○ふさぐ（塞）せく。○とほざく（遠）とほざかる、うとんずる「疏ー」○へだて、しきり。○へだたり（距離）○へだたる、ふさがる。
同訓異義（ヘダツ）隔・障・阻・間○隔は中にしきりを入れるなり。史記「防ニ隔内外一」○障は隔也、界也、ささへ、へだつる義。禮、月令「毋ㇾ有ニ障塞一」○阻は山川道路のへだたるに用ふ。詩、秦風「道阻且長」又、へだて止むる義にも用ふ、阻ㇾ諫の如し。○間はすきまをこしらへる義。左傳「遠間ㇾ親、新間ㇾ舊」また間をへだておく義にも用ふ。間歲は一年、間をおくをいふ。
【隔異】へだてわかつ。史、南越尉陀傳「前日高后、ーニー南越一、竊疑長沙王讒ㇾ臣」
【隔意】心にへだてがありてうちとけぬ。＝隔心。
【隔越】遠くへだたる。蔡琰、胡笳十八拍「子母分離兮意難ㇾ任、同天ーー兮如ニ商參一」＝隔絕。
【隔遠】へだたりてとほし。唐書、高祖紀「出ㇾ兵必待ㇾ報、今江郡ーー、後期奈何」
【隔靴搔痒】○靴をへだててかゆき所をかく、未だ物たらぬ所ある喩。續傳燈錄「上堂更或拈ㇾ帚敲ㇾ牀、大似ニ隔ㇾ靴抓ㇾ痒」○事の適切ならざる喩。詩話總龜「詩不ㇾ著ㇾ題、如ニ隔ㇾ靴搔ㇾ痒」
【隔月】中一月をへだてる、一月おき。事文類聚「ーー爲ニ皇太子一、講ニ周易一」
【隔日】中一日をへだてる、一日おき。＝間日。
【隔心】隔意に同じ。
【隔水】みづをへだてる。姚鵠詩「月影緣ㇾ山盡、鐘聲ーㇾー微」
【隔世】へだたれる代「ーー遺傳」
【隔截】へだててたちきる。陸雲賦「斷ニ過海浦一、ーニー曲隈一」＝隔絕。
【隔絕】遠くへだてたつ。易經「水洊至」注「不ㇾ以ㇾ坎爲ニーー一」＝懸絕。
【隔塞】へだたりふさがる。漢書、五行志「下情ーー」後漢書、竇融傳「道路ーー、邑邑何已」＝障塞。
【隔斷】へだつ。へだたりたゆ。司空圖詩「愁腸ーー殊蘼外」
【隔轍雨】陰曆五月に降る雨、馬の脊を分つといふ夏の雨。月令廣義「五月雨爲ニーーー一、即分龍雨」
【隔年】中一年をへだてる、一年おき。
【隔壁】僅に壁を隔てる、甚だ近き義。酉陽雜俎「近如ニーー一」
【隔離】○へだてはなす。○傳染病患者を別所にはなし居らしむ「ーー室」

【隗】㊀グヮイ ㊁グヮイ 賄 灰 通音クヮイ

㊀たかし、けはし。㊁郭ーは人名。熟語參看。
【從ㇾ隗始】賢者を招くには、先づ劣者を用ひよとの義。戰國、燕策「郭隗曰、今王誠欲ㇾ致ㇾ士、先ーー、隗且見ㇾ事、況賢ニ於隗一者乎」

【隙】ケキ 陌 通音ゲキ 又、郤に作る

○あな、壁際の孔「孔ー」○すき、すきま（閒孔）「穴ー」○てすき（閒暇）左、隱五「皆於ニ農

一以講事也」○なかたがひ(怨仇)不和「仇一」「怨一」「忿一」史、項羽紀「今將軍與臣有一」○あらそひ(爭)「爭一」○つづく(際)境地が相接する。漢書、地理志「北二烏丸夫餘一」

解字 隙は壁際の孔なり、阜に从ひ㣈に从ふ、㣈は赤㡿、㣈は二小に从ひ中は日景に从ふ、壁の小孔より日のさしこむ會意文字、俗に隟に作るは非。

【隙罅】すきま。蘇軾詩「至レ今餘二一一、流出千斛乳一」=罅隙。

【隙駒】ひかげ。月日の過ぎ去ることの早きこと、奔馬をすきまからちらと見る如しとの義。莊、知北遊「人生二天地之間一、若二白駒之過一レ隙」朱熹詩「務レ學修レ身要レ及レ時、競レ長須レ念一一馳」

【隙壞】裂けくづれる。左、昭元「牆之一一、誰之咎也」

【隙穴之臣】内に居てひそかに敵に通ずるもの。韓非子「以二一一一一而事二獨立之主一、此之謂二危殆一」

【隙孔】すきあな。詩經、疏「使下室無二一一一、寒氣不上レ入」=孔隙・隙穴。

【隙地】あきち、空地。左傳「宋鄭之閒、有二一一一焉」

【隒】ゲン 篆 ○がけ(崖)○きし(岸)山の形、兩甗を累ねたる如きもの。

十一畫

【隟】隙(前頁四段)の古字。

【隚】隙(前頁四段)の俗字。

【際】サイ 篆 ○あひだ、あはひ。易、泰卦「天地一也」○あふ(合・會)であふ「一會」○あひめ(合會)「春夏之一」○つづく(接)○まじはる。まじはり「交一」○かた(方)○ほとり(邊)きは(畔)「水一」「海一」「端一」○なり、しほ、であひ(機會)○はて、かぎり(限)「天一」「一涯」「邊一」「無一」○いたる(至)淮南、原道「高不可レ一」

【際涯】かぎり。范仲淹、岳陽樓記「浩浩湯湯、横無二一一一」

【際可之仕】先方が適當なる禮を以て交際するによりて仕へる。孟、萬章「有二一一一、有二公養之仕一」

【際遇】たまたまであふ。君臣が遭遇する。宋史、何執中傳「以二潛學一一一、用二太傅一致仕」=際會・遭遇。

【際會】たまたま其の時に出あふ。杜甫詩「君臣已與レ時一一」=遇合。

【際限】はて、かぎり。=際涯。

【際畔】かぎり。列子「北海之北、其國名曰二終北一、不レ知二一一之所一レ齊限一」

【障】シヤウ サウ 篆 隷 又、鄣に作る ○つつみ(隄・防)「隄一」以て水を瀦へて汎濫せざらしむるもの。○あぜみち(畛)○ついたて(屛風)「屛一」「錦一」しゃうじ。○とりで(堡)「亭一」「邊一」「堡一」まもり(衛)「保一」○かき、ついぢ。○ささふ、さへぎる、ふせぐ(防)ふせぎ。○おほふ(蔽)○かかふ(擁)○へだつ(隔)界する、ふさぐ(塞)呂覽「一二其源一」○ふさがる、おほはる。○おほひ、さはり、じゃま「故一」「一礙」「罪一」○さかひ、かぎり。

同訓異義 へだつ 障・隔・阻・閒の別は隔(阜部十畫)の條を見よ。

【障圍】へだてかこむ。又、かこひ。爾雅「在レ旁曰レ帷、帷、圍也、以自一一也」

【障翳】○おほひかざす。○日光を蔽ふためにかざすもの、扇の類[留青日札]=障扇・掌扇。○くもり、かげ。

【障害】さはり、さまたげ、邪魔。又其の物。

【障礙】ささへふせぐ、さまたげ。白居易詩「但覺虚空無二一一一、不レ知高下幾由旬」

【障扞】ささへふせぐ。扞は捍。晉書、謝豹傳「使君且當下攝レ職爲二百姓一一一、賊退謝上レ罪不レ晩也」=蔽扞。

【障拒】ふせぐ。說苑「外一二一諸侯賓客一、以蔽二其明一」

【障子】○室と室との隔に立てる建具、からかみ・ふすま。○國 明障子の略。

【障扇】日光を蔽ふに用ふる長き柄の扇[崔豹、古今注]

【障塞】○ささへふさぐ。又さはりふさがる。禮、月令「開二通道路一、毋レ有二一一一」○とりで。=障壁・壘障。

【障泥】あふり、馬具の一。革にて製し、鐙と馬の脇腹との間に垂れて泥のはねるを防ぐもの。世說「此必是惜二一一一」=鄣泥・蔽泥。

【障惱】さはり。なやみ。梁簡文帝、謝二舍利禮拜一啓「臣比身心、得レ無二一一一」

【障蔽】おほひ。おほふ。陸游詩「箇中無二一一一、何處欠二光明一」=蔽障。

【障壁】とりで。=堡障。

十二畫

【隤】タイ 篆 ○くづる(壞)くづす(墜下)上林賦「一牆塡レ塹」=頹。○くだす(降)揚雄、河東賦「發レ祥一祉」○一然はおとなし、柔順なる貌。○虺一はつかる(疲勞)やむ(病)詩、周南「我馬虺一」=穨。

【隤雲】くづれかかれるくも。=頹雲。

【隤陷】穴などにおちいる。淮南子「先者一一、則後者以謀」

【隤舍】くづれや。=頹舍・頹屋。

【隤牆】○かきをくづす。上林賦「一レ一塡レ塹」○くづれたるかき。

【隤然】柔順なる貌。易、繫辭「夫坤一一、示二人簡一矣」

【隤陵】くづれたるをか。=頹陵。

【隥】トウ 篆 ○けはしきさか(險阪)穆天子傳「天子南還、升二於長松之一一」=磴。○きだ(梯階)

【隣】鄰(二〇〇三頁二段)の俗字。

十三畫

【隩】㊀アウ ㊁イク 篆 屋 ㊀くま(隈)水の匿「隈一」=澳。○かくる(隱)○をさむ(藏)かくす。㊁あたたか(煖)燠に通ず。一說に住居する。又其の室。書、堯典「厥民一」○四方の居るべき土地。書、禹貢「四一既宅」○くま。=澳。

【險】ケン 篆 ○けはし「一阻」「絕一」「峻一」○けはしくして要害よし。史、吳起傳「在レ德不レ在レ一」嶮に通ず。○たかし(高)○あやふし(危)傾危の道。中庸「小人行レ一以徼レ幸」○やぶる(傷)なやむ(艱)○心に惡しきたくらみあり「陰一」○惡し、よこしま(邪)「一詖」「姦一」

【險阸】路がけはしくせまし。馮衍賦「悲二時俗之一一一兮、哀二好惡之無一レ常」=險隘。

【險隘】前條に同じ。屈平、離騷「山林一一、虎豹蛇只」

【險惡】○道がけはしくわるし。○物事のやうすが甚だ惡し「天候一一」

【險夷】次條に同じ、夷は平。

【險易】○けはしきと、やすく平かなると。鬼谷子「辨二地形之一一一」○逆境と順境と。=險夷。

【險韻】詩を作るに用ふべき文字の少き韻。又、生僻なる韻字。蘇軾詩「一一清詩苦關レ新」

【險要】けはしくして要害の地。地險阻にして要衝に當る。魏志、劉馥傳「開二拓邊守一、屯二據一一一」=要險。

【險遠】けはしくとほし。北史、魏宗室傳「負レ海一一、宜下分二置一州一、鎭中過海曲上」宋史、周子傳「行レ部不レ憚二勞苦一、雖二瘴癘一一一、亦緩視徐按」

【歷レ險乘レ危則騏驥不レ如二狐狸一】けはしき所を經、危き所に乘るは、千里の名馬も狐狸に如かず[戰國策]

【視レ險若レ夷】艱難の地に處ること、平地に居る如く畏れて心を動かすことなし、夷は平。傳亮、劉穆之傳「躬レ旅陳レ衆、一一一一」

【險害】心惡くして人をそこなふ。後漢書、賈逵傳「性一一、邑里患レ之、改レ過自厲、終成二善士一」=險賊。

【險岸】けはしきがけ。劉逖詩「駐レ車遡二一一一、飛レ蓋歷二平湖一」

【險艱】けはしくなやむ。杜甫詩「九日應二愁思一、經レ時冒二一一一」=險難。

【險戲】あやふくけはしき貌。處世の艱難に喩ふ。戲一に巇に作る。東方朔、七諫「何周道之平易兮、然蕪穢而一一」=傾危。

【險巇】前條に同じ。馬融賦「夫固危殆一一之所レ迫也」

【險釁】運わるし、不幸。釁は罪。李密、陳情表「臣以二一一一、夙遭二閔凶一」

【險棘】けはしくきびし。蔡邕文「進路孔夷、人情一一」

【險句】難字をならべたる句。王建詩「鞭驅二一一一最先投」

【險滑】けはしくしてすべる。韓愈詩「石級皆一一、顚躋莫二牽攀一」

【險猾】わるがしこし。五代史、雜傳「孔循、爲レ人柔佞而一一、安重誨尤親二信之一、凡循所レ言、無レ不二聽用一」

【險徑】けはしきこみち。晉書、李充傳「達二彼夷途一、而遂二此一一一」=峭逕。

【險譎】いつはりて心正しからず。唐書、李逢吉傳「性忌刻、一一多端」

【險固】けはしく要害よし。左傳「楚國方城以爲レ城、漢水以爲レ池」疏「冒二其一一一、以當二城池一」後漢書、第五倫傳「乃依二一一一、築二營壁一」

【險語破二鬼膽一】むづかしき語を用ひて、鬼神を驚かし怖れしむ。韓愈詩「一一一一、高詞媲二皇墳一」皇墳は三皇の書、三墳。

【險塞】要害よきとりで、塞は壘。

漢書、蒯通傳「銳軍挫於ーー」
【險躁】こころけはしくしてさわがし。諸葛亮、誡子書「ーー則不能理性」
【險窄】けはしくしてせまし。梅堯臣詩「綴韻孤淸仍ーー」
【險峻】けはし。高唐賦「磐石ーー、傾崎崔隤」＝峻險。
【險折】けはしくしてをれ曲がる。水經、注「黃金戍傍山依峭、ーー七里」
【險阻】けはしくしてへだたる。左、僖二八「ーー艱難」
【險賊】心ねぢけて人をそこなふ。荀子「ーー而不弟」
【險道】けはしきみち。李德裕文「ーー傾仄、且馳且射」＝險路。
【險屯】なやみくるしむ。高允詩「時値ーー、横離塵網」＝險難。
【險程】平かならざるみちのり。元稹詩「來隨夢ーー」
【險難】けはしくしてなやむ。陸機、君子行「天道夷且簡、人道險而難」謝靈運、山居賦「分ー往之仁心、拔萬族之ーー」＝阻難。
【險魄】あしきたましひ。柳宗元、招海賈文「死爲ーー兮、生爲貪夫」
【險陂】さがしくよこしま。陂は傾。漢書、劉向傳「放遠佞邪之黨、壞散ーー之聚」＝險詖。
【險詖】心ねぢけてよこしま。晉書、桓伊傳「狎昵諂邪而好利ーー之徒」
【險膚】いつはりて淺はか。書、盤庚「今汝聒聒、起信ーー」
【險路】けはしきみち。後漢書、蔡邕傳「翠車方奔乎ーー、安能與之齊軌」＝險道。

【隧】㊀スヰ ㊁ツヰ 寘 寘

㊀はかみち(墓道)あなみち、棺を埋むる爲めに地上より斜めに墓穴に通ずる道。左、隱元「闕地及泉、ー而相見」○みち、こみち(徑)○とんねる、地下道「ー道」○めぐる(回・轉)莊、天下「若磨石之ー」㊁おとす。おつ(落)＝墜。
【隧渠】ふせどひ。＝暗渠。
【隧道】○はかみち。字解參看。南史、齊豫章王嶷傳「宋長寧陵ーー、出第前路」＝墓道。○轉じて地中を通ずる道。トンネル。

【隨】㊀ズヰ ㊁タ 支 哿

㊀したがふ(從)つく(附)附き從ふ「ー從」「ー行」「ー伴」「追ー」「肩ー」○よりそふ(循)書、禹貢「ー山刊木」○まかせる、まにまになる、順ふ「ー時」「ー風」○其の後からひきつづく。史、淮陰侯傳「公亦ー手亡矣」○したがって、よって。韓愈、與孟尙書書「ー亂ー失」○易の卦名、震下兌上。○春秋時代の國名。左、桓六「楚武王侵ー」隋に通ず。㊁橢圓の橢に通ず。

同訓異義 隨・順・從・循・率・遵・徇・殉の別は順(二一八五頁三段)の條を見よ。

【隨意】心のまま、かって氣ままにする。
【隨一】國多くのものの中にて第一。又、さきがけ(魁)
【隨園】清の袁枚の別墅の名。江蘇省江寧府小倉山に在り、枚、著す所「ーー三十六種」あり。
【隨緣】佛其の機緣に隨ひて勉强することを加へず。齊書、陸法和傳「文宣賜法和奴婢二百人、法和盡免之、曰、各ーー去」
【隨緣眞如】佛もろもろの因緣にしたがひて、眞如卽ち萬有の本體がそれぞれに差別の相を示す。
【隨駕隱士】車駕にしたがふ隱士、身は山中に在れども、志は仕官せんとするに在るを嘲りていふ。世說、輕詆「盧藏用初隱終南少室二山、時有意當世、人目爲ーーーー」
【隨行】目上の人にしたがひゆく。禮、王制「父之齒ーー」＝隨從。
【隨喜】佛他人の爲す善根功德に隨ひ喜びて滿足する「ーー功德品」は法華經の第十八品にしてーーの功德を說けり。法華經「世尊說此法、我等ーー」
【隨和】○隨侯の珠と、卞和の璧と。共に至寶とす。李斯、逐客上書「陛下致崑山之玉、有ーー之寶」注「隨珠和璧也」隨一に隋に作る。○隋和之材(二一二五頁二段)を見よ。○和は去聲。劉克莊、題跋「態度高雅、理有未然、雖浮名虛譽一世所宗、不肯ーー」
【隨侯之珠】前條竝に隋侯之珠(二一二五頁三段)を見よ。
【隨坐】まきぞへ。史、廉頗傳「妾得無ーー乎」＝連坐。
【隨侍】貴人につきしたがふ。君父の側に追隨して其の使役に備はる。魏書、侯剛傳「朕陽當監國、弗獲ーー、而左右服事、唯藉忠勤」
【隨時】○時の宜しきにしたがふ。易、隨卦「ーー之義大矣哉」○をりをり。いつでも。「ーー入院を許す」
【隨身】○大臣の護衞兵。漢書、貨殖傳「ーー數十百」○國古、攝政・關白などの護衞として朝廷より給せられたる供人。
【隨手】○手あたりしだい。杜甫詩

「曉粧ーー抹」○直ちに、引きつづきて。字解參看。
【隨珠】隋侯之珠(二一二五頁三段)を見よ。
【隨從】つきしたがふ。晉書、王裒傳「門徒ーー者、千餘人」＝隨行・扈從。
【隨處】どこでも。到る處。杜甫詩「早花ーー發」孟浩然詩「客行ーー樂」
【隨俗】世のならはしにしたがふ。史、扁鵲傳「聞秦人愛小兒、卽爲小兒醫、ーー爲變」
【隨逐】つきしたがふ。南史、梁武帝紀「知齊高有大志、常相ーー」
【隨程】みちにしたがふ。金史、百官志「ーー幹辦、人各二百文」
【隨德寺】國にげる、逃亡する。遂電。
【隨伴】一しょにともなふ、同伴する。
【隨筆】筆にまかせて書きしもの。そぞろかき「容齋ーー」＝漫筆・漫錄。
【隨分】○分限につれあふ。身分相應。白居易詩「ーー笙歌聊自樂」○國すこぶる、よほど。
【隨鑾】鑾輿に從ふ、天子のみくるまのおともをする。李賀詩「汗血到王家、ーー擺玉珂」＝隨駕。
【隨陸無武】前漢の隨何と陸賈とは文學あれども武功なし。晉書、劉元海載記「吾每觀書傳、常鄙ーー、絳灌無文」(絳灌は周勃と灌嬰と)

十四畫

【隱】㊀イン・オン ㊁イン 吻 震 隱は俗字

㊀かくる。顯の反對。○かくす(匿)見えざるやうにする。○かくして人に知らさぬ。孟、公孫丑「進不ー賢」○のがる(逃)さる(去)世をすてる「ー居」「ー士」「ー遁」○ひそむ(潛)藏○おほふ(蔽)かばふ。○いむ(諱)論、子路「父爲子ー、子爲父ー」○ふす(伏)「ー伏」○なぞ、かくしことば(謎語)「ー語」史、滑稽傳「齊威王之時好ー」○うらなふ(占)はかる(度)○かすか(微・幽)明かに見えず。顯の對。○しづか、おだやか。○いたむ(痛)うれふ(憂)「ー憂」あはれむ、殷と音通。孟、梁惠王「王若ー其無罪而就死地」○くるしむ、窮困。○かき、短き牆。左、襄二三「踰ー而待之」○よる(倚)よりかかる「ー几」○きづく(築)○琴の上のかざり。○かげ、しのび。○かくれたることわけ。○威重ある貌。○盛んなる貌、殷と通ず。○ーーは盛んなる貌。又、憂ひいたむ貌。又、水流の怒りてやかましき聲。㊁よる(據)檀弓「其高可ー也」

同訓異義 隱・悼・傷・痛・悽・愴・慘・戚等の別は悼(六七一頁三段)の條を見よ。

○隱・潛・匿・藏・祕○隱はかくれて見えず、月の雲に隱るる如し。○潛は水底にひそみ隱れる義、潛龍と用ふ。轉じて深く隱れひそむに用ふ。柳文「王莽旣死、黃氏逃來、擇其深峭者潛焉」○匿はにげ隱れる義、名姓を避けて、あらはさぬを、匿名といふ。史記「張良更名姓、亡匿下邳」○藏は物を收めて蓄ふる義、寶藏・府藏と用ふ。史記「高鳥盡、良弓藏」また論語に「用則行之、舍則藏之」とあるは、人が我を用ふれば、わが道を取り出して行ひ、人が我を捨つれば、我が道をきめて行はずとの義。○祕はひめかくす、祕文・祕書と用ふ、秘は俗字なり。

【隱藹】樹の盛んに茂れる貌。郭璞賦「繁蔚芳蘺ーー水松」＝蔭藹。
【隱憂】いたみうれふ。詩、邶風「耿耿不寐、如有ーー」
【隱逸】世の中をのがれる。又、其の者。後漢書、岑彭傳「招聘ーー、與參政事、無爲而化」
【隱逸花】菊の異名。周敦頤、愛蓮說「菊、花之隱逸者也」
【隱隱】○憂ひ戚む貌。楚辭、怨思「志ーー而鬱佛」○大いなる聲。晉書、惠帝紀「赤氣竟天、ーー有聲」○微かにして明かならざる貌。王昌齡詩「青山ーー孤舟微」○盛んなる貌。潘岳、閑居賦「煌煌乎ーー乎」
【隱耀】ひかりをかくしてあらはさず。己の才德をかくしてあらはさざるにいふ。後漢書、鄭康成傳「漢商山四皓、有園公・夏黃公、潛光ーー、世嘉其高、皆悉稱公」＝匿耀。
【隱掩】かくしおほふ。禮記、疏「著見於外、無ーー」
【隱遁】かくれてとほし。後漢書、方術傳敍「斯道ーー、玄奧難言」
【隱害】ひそかに人をそこなふ。後漢書、廣陵思王荊傳「性刻急ーー」
【隱客】しゃうぶの異名。三柳軒雜識「菖蒲花爲ーー」
【隱几】○よりかかるつくゑ、脇息の類。獨異志「葛玄所隱處、有ーー化爲鹿」○つくゑによりかかる。＝凭几。
【隱諱】かくしいむ。晉書、石勒載記「言隱有ーー、使知區區之心」
【隱宮】宮刑(四九六頁一段)に同じ、

宮刑に處せし後、百日間陰室に隱しおく故にいふ。史、始皇紀「——徒刑者七十餘萬人」

【隱居】○世をのがれて居る、仕官せずして家に居る。論、微子「——放言、身中レ清、廢中レ權」○國家を相續人に讓りて退き居る。

【隱君子】世の中を避けて隱れ居る人。蘇軾、留侯論「秦之世有二——者一、出而試レ之」

【隱晦】かくれ晦ます。又、姿を隱す。錢起、巨魚縱二大壑一詩「傾危嗟二幕燕一、——諭二泥龜一」

【隱花植物】雌雄兩蘂を有する花なく、唯胞子によりて蕃殖する植物、菌類・藻類など。顯花植物の對。

【隱形】魔術にて形をかくす、忍術の類。晉書、夏統傳「迎二女巫章丹・陳珠二人一、竝有二國色一、莊服甚麗、善二歌儛一、又能——レ匿レ影」

【隱見】かくれると、あらはれると。後耳目志「海山微茫而——」＝隱顯・隱現。

【隱顯】かくれると、あらはれると。北史、儒林傳「——二人閒一、浮二沈世俗一」＝顯晦。

【隱現砲】彈丸をこめたる時は砲身が牆壁中にかくれ、發射する時は其の上にあらはれるやうに作りたる大砲。

【隱語】なぞ、意を隱して人をして之を探り求めしむる辭。單に隱ともいふ。漢書、東方朔傳「問二朔——一」＝謎語。

【隱虹】大いなるにじ。楚辭「帶二——之透迤一」

【隱藏】かくれひそむ。晉書、天文志「——休息之所」東方朔賦「懷二計謀一而不レ見レ用兮、巖穴處而——」＝潛藏。

【隱士】世の中を避けてかくれ居る士。南史、何點傳「世論以レ點爲二孝——一」

【隱疵】かくれたるきず、人に知られざる惡事。宋史、哲宗紀「詔曰、正二風俗一、修二紀綱一、勿レ理二——細故一」

【隱疾】衣におほはれて人に見えざる病。黑瘤・黑肱の類。曲禮「名レ子不レ以二——一」

【隱賑】富みてにぎはし、隱は殷に通ず。爾雅「賑、富也」注「謂二——富有一」蜀都賦「邑居——、夾レ江傍レ山」＝殷賑。

【隱身術】忍術。瑯嬛記「一夕有二神人一、自レ天而降、授二主父一以二隱身之術、九煉變骨之丹一」

【隱者】世をいとひて避けかくれたる人。論、微子「子曰、——也」＝隱士。

【隱恤】いたみあはれむ。魏志、王修傳「親——之、病愈乃去」

【隱處】世の中を避けかくれて居る。東方朔、七諫「賢士窮而——兮、廉方正而不レ容」＝隱居。

【隱栖】かくれすむ。

【隱棲】前條に同じ。張芸詩「一簇林塘隱者棲」＝隱遯棲。

【隱然】おもみのある貌。唐書、温造傳「威重——」＝隱隱。

【隱鼠】鼹鼠の別名。常に土中にひそみ居る故。

【隱退】かくれしりぞく。易、遯卦、疏「遯者、——逃避之名」＝退隱。

【隱宅】隱居せし人の住宅。

【隱地】○官府の帳簿につけおちの田地。宋史「括二——一二萬三千頃一」＝隱田。○隱居するに宜しき地。倪瓚詩「將下尋二——一看中長松上」

【隱帙】ふかくひめたる書籍。唐書、李邕傳「李嶠試問二奥篇——一、了辯如レ響」

【隱田】人民が隱蔽して、年貢を納めざる田地。宋史、食貨志「丁謂計錄云、總得二一百八十六萬餘頃一、以二是歲七百二十二萬餘戶一計レ之、是四戶耕二田一頃一、由レ是而知二天下——多一矣」

【隱德】人に知られざる德行。晉書、王湛傳「湛初有二——一、人莫二能知一、其父獨異焉」

【隱匿】○かくる、又、かくれ居る者。史、五帝紀「堯曰、悉擧二貴戚及疏遠——者一」○かくす。

【隱慝】かくれたる惡事。慝は惡。左傳「展氏有二——一焉」

【隱若二一敵國一】威重の盛んなること一の敵國の如し。後漢書、吳漢傳「漢在レ軍、或戰不レ利、意氣自若、上歎曰、吳公差强二人意一、——矣」敵國とは我と匹敵する國の義。

【隱遁】世をのがれる、遁一に遯に作る。齊書、孔稚珪傳「有二——之懷一」＝遯世。

【隱囊】車中にて身體を凭らせ掛ける大なるふくろ。王維詩「——紗帽坐禪碁」＝靠褥。

【隱忍】心にたへしのびて外にあらはさず。史、伍子胥傳「——就二功名一」

【隱祕】かくしひめる。釋氏通鑑「部國師初參二道禪師一、窮二極——一」

【隱微】かすかにして見がたし。中庸「莫レ見二乎隱一、莫レ顯二乎微一」

【隱閟】かくしとづ。韋承慶賦「皆二萬仞一兮沈以精、潛二九重一兮隱而閟」

【隱避】かくれさける。後漢書、卓茂傳「劉宣變二名姓一、抱二經書一、——二林藪一」＝匿避・潛避。

【隱憫】いたみあはれむ。顏延之文「——就レ辱、激昂自堅」

【隱伏】かくれふす。易、坎卦「坎爲レ水、爲二溝瀆一、爲二——一」＝隱匿・竄伏。

【隱蔽】かくしおほふ。＝陰蔽・掩蔽。

【隱沒】なくなる。唐書、百官志「戶口流散、籍帳——、賦役不レ均」＝泯沒。

【隱密】○かくし祕める。○國めあかし、探偵。

【隱約】○はっきりとわからぬ、不分明。何遜詩「帝城猶——、家園無二處所一」○くるしみ、難儀する。後漢書、矯愼傳「——二山谷一、勤處二——一」○ことばは簡約にして意味は深微。史、自序「詩書——者、欲レ遂二其志之思一也」

【隱淪】隱れておちぶれ居る。杜甫詩「此意竟蕭條、行歌非二——一」

【隱良】善良なる人をおほひかくす。荀子「蔽二公者謂二之昧一、——者謂二之妒一」

【隰】シフ 籀

○さは、ひくくしてしめりけある地(下濕)詩、邶風「山有レ榛、隰有レ苓」○ほとり、水邊「汾——」○新に發きたる田。

【隮】セイ サイ

○のぼる。のぼす(登)＝躋。○のぼるき(升氣)詩、鄘風「朝——二于西一、崇朝其雨」○にじ(虹)○おとす(墜)「顚——」

【隮墜】おちる。書、微子、傳「顚隕——、如レ之何、其救レ之」

十五畫

【隳】キ

やぶる(壞)呂覽、順說「——人之城郭一」くづれる、毁と通ず。

同訓異義 隳・破・敗・壞・傷・毀等の別は破(一三四五頁一段)の條を見よ。

【隳敗】こはれやぶれる。

【隤】トク

みぞ(溝)＝瀆。

十六畫

【隴】リョウ 通音 ロウ

○をか(丘)○うね、はたけ(畝)「——畝」古、壟・壠に通ず。○地名。今の甘肅省鞏昌府。○——山の西は甘肅省の異名。——山の西に在るが故。

【隴右】隴山の右の地、唐の十道の一。今の甘肅隴坻以西、新疆迪化以東の地。

【隴客】鸚鵡の異名。隴山に多く產するが故。梅堯臣詩「雪衣應レ不レ妬、——幸相饒」

【得レ隴復望レ蜀】貪りて、足ることを知らざる義。後漢書、獻帝紀「司馬懿言二於曹操一曰、今克二漢中一、益州震動、進レ兵臨レ之、勢必瓦解、操曰、人苦レ無レ足、既——」同書、岑彭傳には得を平に作る。李白詩「物苦レ不レ知レ足、得レ隴又望レ蜀」

【隴山】陝西省隴縣に在る山の名。秦州記「——東西百八十里、登二山嶺一東望、秦川四五百里、極目泯然・山東人行役升レ此而顧瞻者、莫レ不二悲思一、山下有二隴關一、即大震關、爲二秦雍喉嗌一」＝隴坻・隴坂・隴首。

【隴山鸚鵡能言語】唐人の句。岑參、度レ隴思レ家詩「——、爲報家人數寄レ書」

【隴樹】○小高きをかの上の木。孔稚珪詩「——枯無レ色、沙草不二常青一」○墓地の樹。劉長卿詩「——隨レ人古、山門對レ日曛一」

【隴種】遺失の貌。はたけに種を下すに似たるが故。一說に攝け敗れる貌「荀、議兵、註」新序には隴鍾に作る。

【隴坻】隴山の別名。漢書、地理志、注「——謂二隴坂一、即今之隴山也」

【隴畝】○はたけ。蜀志、諸葛亮傳「亮躬耕二——一、好爲二梁父吟一」○轉じて民間の義。史、項羽紀「羽非レ有二尺寸一、乘レ勢起二——之中一」

【隴廉】古の醜婦の名。楚辭、哀時命「——與二孟娵一同レ宮」

隶部

【隶】タイ

およぶ(及)後よりおひつく。＝逮。

八畫

【隷】隸(次條)に同じ。

九畫

【隸】レイ ライ 又、隷に作る

○つく、したがふ「——屬」つかふ(役)○けみす(閱)しらべる。史、酷吏傳「關東吏——郡國出二入關一者上」○つき從ふ者、こもの、しもべ(僕)いやしきもの(賤者)けらい。左、隱五、注「士臣皁、皁臣輿、輿臣——」○つみびと(罪人)今の懲役人。○てした、とも。○書體の名「——書」○直——は省の名、禹貢の冀・兗二州の域、京師に直屬するが故。

【隸圉】しもべと、うまかひと。潛夫論「論レ士苟定二於志行一、處二——一不レ足二以爲一レ恥」

【隷事】故事を以て相隷屬せしむ。南史、王摛傳「尙書令王儉嘗集二才學之士一、總二校虛實一、類レ物隷レ之、謂二之一一一」＝數典。

【隷人】○罪人。儀禮「一一涅レ廁」註「一一、罪人也」○轉じて賤役に從ふ者、しもべ。＝奴隷。

【隷書】今の楷書をいふ。秦の始皇の時、程邈が小篆を更に省略して作りし書體。唐より以前皆楷字を謂ひて一一となす、歐陽修の集古錄に誤りて八分を以て一一となすと玉海に見ゆ。漢書、藝文志「秦時、始造二一一一、起二官獄多事、苟趨二省易一、施二之於徒隷一也」＝眞書。

【隷屬】つきしたがふ。又、けらい。潘岳、上二關中詩一表「齊萬年、編戶一一爲レ日久矣」

【隷篆】隷書卽ち楷書と、篆書と。薛存誠賦「得二先銜于一一一」＝篆隷。

【隷僕】○周代の官名、宮中の掃除を掌るもの。周禮、夏官「一一掌二五寢之掃除、糞洒之事一」○しもべ＝僕隷。

【隷也不レ力】奴隷の者卽ち臣が力を君の爲めに盡さざる義。文天祥、正氣歌「隷也實不レ力」林西仲の古文析義、註に「――四字、乃楚公子徵服出亡、其僕罵レ之之詞、借以罵下所レ轄將士、不三肯力戰一致上レ己被レ執」（淵鑑類函、奴婢門、參看）

隹部

【隹】㊀スヰ ㊁スヰ 紙 サイ 支 賄

㊀とり、短き尾の鳥の總名。○國字書上の語。㊁崔と通ず。○畏一は山の貌。莊、齊物「山林之畏一」

二畫

【隺】㊀コク ㊁カク 沃 覺 俗に鶴字に借用するは非

㊀高く至る。㊁一然は心志高し。

【隼】シュン ジュン 軫

はやぶさ、鷹の一種。鶚の類、鷹類中にて、形小さく、毛色斑紋は鷹に似て、唯胸腹は灰白にして稍赤色を帶ぶ、性甚だ猛く飛ぶこと急疾なり、他の鳥を捕へ食ふ「鷹一」「蒼一」詩、小雅「鴥彼飛一、其飛戾レ天」

【隻】セキ 陌

○ひとつ（單）物の單なる者。韓愈、祭二十二郎一文「形單影一」○かたわれ（奇）かたかた。雙の半。○船・車など廣く物を數へる數詞。姚合詩「風灣一一船」後漢書、方術傳「得二一一鳥一」

解字 又卽ち手にて一隹を持する意。二隹を持するは雙。

【隻影】ひとつのかげ。鮑照、野鵝賦「立二孤潘之寒渚一、託二一一一而爲レ雙」＝片影。

【隻眼】かため。轉じて衆人と異る見識の義とす。楊萬里詩「近來別具二一一一、欲レ踏唐人最上關」

【隻騎】一騎。徐陵文「孤旌不レ反、一一無レ還」＝單騎。

【隻雞】一羽のにはとり。北史、齊陽州公永樂傳「斗酒一一不二敢入一」

【隻雞絮酒】後漢の徐穉が、知己の恩ある黃瓊の死せし時、雞一隻を炙り、綿絮を以て酒に漬し、乾かして雞を裹み、冢外に至り、水を以て綿を漬し、酒氣あらしめ、白茅を藉きて雞を前に置き、祭り畢りて去り、喪主を見ざりし故事〔後漢書、本傳、注〕後人弔祭文に多く引用す。

【隻言】ちょっとしたることば。＝片言・隻語・一言半句。

【隻劍】一口のつるぎ。汪華賦「臣爲二布衣一、一一孤琴、出二游四方一、歸憩二家林一」＝孤劍。

【隻堠】一里塚。康熙字典「封レ土爲レ壇以記レ里也、五里一一、十里雙堠」

【隻字】一字に同じ。陸機、謝表「片言一一、文不レ關二其閒一」

【隻紙斷絹】文字をかきたるわづかの紙、又は絹地。＝斷簡零墨。

【隻日】奇數の日。雙日の對。唐書、穆宗紀「唐制天子以二一一一視レ朝、乃命二輟朝放朝一、皆用二雙日一」＝奇日。

【隻身】ひとり身。眞山民詩「一一千里客」＝孤身・單身。

【隻手】かたて、片手。吳萊詩「一心不レ顧レ死、一一捩二長煙一」

【隻步】かたあし。＝半步。

【隻履西歸】達磨が一隻の革履を持ちて西方の國に去りし故事。書言故事「後漢二十八祖達磨、端居而逝、後三歲魏宋雲使二西域一、遇二師于葱嶺一、手持二隻履一、翩翩獨逝、問レ師何往、曰西天去、明帝起レ壙、惟一革履存焉」

【隻輪】車の片輪。公羊、僖三「西馬一一無二反者一」

三畫

【雀】シャク 藥 通音ジャク古、爵に作る

○すずめ、人家の附近に棲む小鳥、羽毛は暗褐色にして性能く飛躍す「鳥一」「燕一」「孫一」○すずめいろ「一弁」○こをどりする「一躍」

【雀角鼠牙之爭】人と訴訟を構ふるをいふ。詩、召南「誰謂雀無レ角、何以穿二我屋一、誰謂女無レ家、何以速二我獄一、雖レ速二我獄一、室家不レ足、誰謂鼠無レ牙、何以穿二我墉一、誰謂女無レ家、何以速二我訟一、雖レ速二我訟一、亦不二女從一」とあるに本づく。

【雀釵】婦女の首飾、雀の形をちりばめしかんざし。何遜詩「一一橫二曉鬢一」

【雀舌】茶の異名、其の芽の至りて嫩かなるが故。劉禹錫詩「添レ爐烹二一一一」

【雀梅】にはうめの異名。爾雅、疏「一一、似レ梅而小」

【雀麥】燕麥の異名。爾雅、注「一一卽燕麥」

【雀斑】そばかす、面皮に生ずる褐色の斑點。

【雀盲】とりめ、鳥雀は日暮れては物を見ること能はざるが故〔病源論〕

【雀躍】こをどりしてよろこぶ。莊、在宥「鴻蒙拊レ髀、一一不レ輟」

【雀鷹】はやぶさの一種。陸璣、詩疏「隼、鷂屬也、齊人謂二之擊征一、或謂二之題肩一、或謂二之一一一、春化爲二布穀一者是也」

【雀羅】すずめをとるあみ。史、汲鄭傳「下邽翟公有レ言、始翟公爲二廷尉一、賓客闐レ門、及レ廢門外可レ設二一一」

【雀李】香草の一。本草「鬱、一名一一」

【雀立】雀躍に同じ。戰國策「滿二秦王之朝一、一一不レ轉」

四畫

【雄】イウ 東 通音ユウ

○をす、をん、を、鳥の父、主に鳥類にいふ（鳥に雌一といひ、獸に牝牡といふ）雌の對。○轉じて獸の牡「一狐」○たけし（武）つよし、いさまし（勇壯）勢盛んなり。又、其の者「豪一」「梟一」左、襄二一「齊莊公朝指二殖綽郭最一曰、是寡人之一也」○かしら、をさ（首長）○すぐる（優）傑出する。又其の者「文一」「英一」○勝つ。史、項羽紀「決二雌一一」

【雄偉】すぐれて大いなり。北史、楊素傳「容貌一一」＝魁梧。

【雄雄】勢威の盛んなる貌。楚辭「一一赫赫」張九齡詩「蜩螗氣一一」

【知レ雄守レ雌】つよけれども、柔弱の道を知り、勝を求めざる義。老子「知二其雄一、守二其雌一、爲二天下谿一」

【雄豪】雄傑に同じ。范仲淹、鬪茶歌「北苑將レ期獻二天子一、林下一一先鬪レ美」

【雄毅】すぐれてつよし。晉書、陶侃傳「侃、在レ軍四十一載、一一有二權略一」

【雄氣堂堂貫二斗牛一】すぐれたる氣象の甚だ盛んなる義。岳飛、題二青泥市寺壁一詩「一一、誓將二眞節一報二君讎一、斬二除頑惡一還二車駕一、不レ問登壇萬戶侯」

【雄强】○勢をしくつよし。唐書、回紇傳「突厥亡、惟回鶻與二薛延陀一爲二最一一一」○筆力のつよきにもいふ。梁武帝文「王右軍字勢一一、如下龍跳二天門一虎臥中鳳闕上、故歷代寶レ之」＝雄勁。

【雄黃】鑛物の名、天然に產する砒素の硫化物。黃色の顏料とす。山海經「皋人之山、其上多二金玉一、其下多二靑一一一」

【雄完】盛んにしてまったし。唐書、李固言傳「銳士三千、武備一一」

【雄勁】をしくつよし。圖畫見聞誌「吳道子所レ書、牆壁卷軸、落筆一一」

【雄雞自斷二其尾一】をすの雞が犧牲とならんことを畏れて、自ら其の尾をたちきる。賢哲の士が自ら汚穢の地に居りて禍を避くるに喩ふ。左、昭二二「賓孟適レ郊、見二雄雞自斷二其尾一、問二之侍者一、曰、自憚二其犧一也」

【雄桀】すぐれたる人物。桀は傑。漢書、刑法志「一一之士、因レ勢輔レ時」＝雄豪・英傑。

【雄傑】前條に同じ。魏志、張邈傳「今一一並起、天下分崩」

【雄健】○すぐれてつよく力ある義。隋書、列女傳「膂力一一」○詩文書畫などの筆力のすぐれて強きにもいふ「筆力一一」朱熹文「觀二其長篇大句一、固自一一豪逸、磊落驚レ人」＝遒勁・雄勁・道健。

【雄劍】○をすのつるぎ。吳地記「干將鑄二成二劍一、進二一一於吳王一」○すぐれたる劍。杜甫詩「一一四五動、彼軍爲レ我奔」

【雄固】すぐれてかたし。宋史、徐徽言傳「晉寧號二天下險一（中略）譙堞一一、備械甚整」

【雄紅】牡丹の異名。花譜「牡丹、一名一一」

【雄渾】詩文などの力強くして圓熟する義。戴復古詩「詩家氣象貴二一一一」

【雄材大略】すぐれたるちゑとはかりごと。漢書、武帝紀贊「如二武帝之一一一一、不レ改二文景之恭儉一、以濟二斯民一」

【雄壯】をしくさかんなり。蜀志、張飛傳「飛一一威猛、亞二于關羽一」＝健壯・勇壯。

【雄爽】すぐれて、けだかし。晉書、

王敦傳「音節諧韻、神氣自得、旁若レ無レ人、擧坐歎二其一一一」

【雄志】をしきこころざし。陶潛賦「風二一一於咸暨一」

【雄兒】すぐれたる男。魏志、鄧艾傳「姜維自一時一一也」＝好男子。

【雄姿】いさましきすがた。三國志「一一傑出、有二霸王之略一」杜甫詩「一一未レ受伏櫪恩、猛氣猶思戰場利」

【雄視】威勢を張りて他を見くだす。宋史、蘇軾傳「軾與二弟轍一、師二父洵一、爲レ之其體渾涵光芒、一二一百代一」

【雄心】をしき心。阮瑀、與二孫權一書「大丈夫一一、能無二憤發一」＝壯志。

【雄深】文章の組立が雄大にして意味ふかし。冷齋夜話「一一雅健者、其氣長故也」

【雄將】すぐれて強き大將。後漢書、馮異傳「異與レ賊相拒且二數十日一、雖二屢獲一一一、餘衆尙多」＝勇將・猛將。

【雄俊】すぐれたるオカ。又、其の者。史、范雎・蔡澤傳「蔡澤天下一一、弘辯智士也」＝豪俊・英俊。

【雄勝】地勢のすぐれて險要なる處。蘇舜欽詩「盤桓擇二一一一、至レ此快二心膂一」

【雄蘂】をしべ、花粉を散らして雌蘂に受精せしむる植物の生殖器官の一。

【雄贍】をしくしてゆたか。庾肩吾、書品「魏帝筆墨一一」＝雄健富贍。

【雄大】さかんに大いなり。王惲詩「中條鬱蒼蒼、首尾固一一」

【雄斷】思ひきりよくきめる。後漢書、光武紀「明明廟謨、赳赳一一」＝勇斷・英斷。

【雄雉】をすのきじ。詩、邶風「一一于飛、泄二泄其羽一」

【雄鎭】雄大にして險要なるかため。獨孤及、江州刺史廳壁記「世稱二一一、且曰二天府一」＝雄藩。

【雄長】○すぐれてつよし。○一方に據りて勢をふるふ。陳書、虞寄傳「一二一偏隅一」＝雄張。

【雄張】勢さかんにして威力をふるふ。後漢書、班超傳「于窴王、一二一南道一」

【雄圖】すぐれて大いなるはかりごと。晉書、武帝紀贊「決二神算於深衷一、斷二一一於議表一」＝壯圖。

【雄哉】勢威の壯んなるをいふ。陳子昂詩「胡秦何密邇、河朔氣一一」

【雄霸】すぐれたるはたがしら。晉書、涼武昭王傳「大兄英姿挺傑、有二一一之風一」

【雄藩】○雄大なるかため。唐書、嚴綬傳「前後統二臨三鎭一、皆號二一一」＝雄鎭。○勢力ある大諸侯。

【雄飛】をとりのををしく飛ぶ如く、大勢力を以て事を行ふ義。後漢書、趙典傳「丈夫當二一一一、安能雌伏」

【雄風】○すずしく心地よき風。宋玉、風賦「清清泠泠、發二明耳目一、此大王之一一也」○盛んなるいきほひ。柳宗元詩「一一吞二七澤一」＝威風。

【雄富】すぐれてとむ。鮑照賦「オカ一一、士馬精研」

【雄文】氣力のすぐれたる文章。蘇軾、王元之畫像記「王公元之以二一直道一獨二立當世一」

【雄憤】をしき、いきどほり。盧昶、新修伍相神廟記「一一無レ所レ泄」

【雄篇】組立の大きくすぐれたる詩文。蘇軾詩「一一鬪二新語一」

【雄辯】辯舌がすぐれて善し。杜甫、飮中八仙歌「高談一一驚二四筵一」

【雄辯強據】辯說すぐれて議論に確かなるよりどころあり。王令文「閑得二子厚文一皆一一一一、源淵衍長」

【雄謨】すぐれたるはかりごと。蘇頲文「移レ孝爲レ忠、一一電發」

【雄謀】すぐれたるはかりごと。陶翰詩「儒服揖二諸將一、一一吞二八荒一」＝雄略。

【雄麻】をあさ。儀禮、注「枲、是一一」

【雄邁】氣象のすぐれてつよき義。周權詩「浩歌發二一一一」＝豪邁。

【雄民】をしき人。婁子野、碑文「義士一一、星羅霧集」

【雄勇】すぐれてつよし。南史、杜幼安傳「至孝寬厚、一一過レ人」

【雄略】すぐれたるはかりごと。史、留侯世家述贊「嗟彼一一、曾非二魁岸一」＝雄圖。

【雄力】すぐれたるちから。江淹詩「驕才一一君何怨」

【雄麗】力がすぐれてうるはし。＝偉麗・遒麗。

【雄劣】すぐれてつよきと、おとりてよわきと。晉書、劉聰載記「一一不レ同、必致レ死距レ我、將軍宜二整レ陣按レ兵以擊一レ之、弗レ可レ輕也」＝強劣。

【雄烈】ををしくはげし。魏書、長孫肥傳「一一知レ名、軍鋒所レ指、罔レ不二奔散一」

【雅】 ㊀ガ ㊁ア 馬 麻

㊀ただし（正）正しき道。正しき義。正しき歌、正しき言。○正しき樂、正しき聲。○詩の六義の一、正樂の歌「大一」「小一」論、子罕「一頌各得二其所一」○みやびやか。俗の反對。○儀りあり、おくゆかし「嫺一」○轉じて人の文詩。又、言行などに對する敬語「一囑」「一鑑」○つね（常）つねに。論、述而「子所二一言一」○もと、もとより（素）○一一は行列の整ふ貌。○爾一は書名、字義を解せし書の最も古きもの。省稱して單に一ともいふ、後世の字書多く爾一の體に倣ひて爲り、又多く一といふ、廣一・埤一の類。㊁みやまがらす。＝鴉。

同訓異義 もと 雅・本・原・舊・故・元・素・固の別は本（九〇七頁四段）の條を見よ。

【雅愛】つねにめで愛する。顏氏家訓「吾一一二其手迹一」

【雅意】つねのこころざし。漢書、蕭望之傳「望之一一、在二本朝一、遠爲二郡守一、內不二自得一」

【雅友】○茉莉の異名〔三餘贅筆〕○風流なる友。

【雅遊】○風流のあそび。詩文書畫音樂などのみやびなるあそび。＝清遊・勝遊。○つねに人と交際するを好む、遊一に游に作る。史、張耳傳「張耳雅游、人多爲レ之言」注「雅游、言レ慣二游從一、故多爲二人所一レ稱譽一」

【雅韻】○風流なるおもむき。宋書、謝方明傳「無二他伎能一、自然有二一一一」＝雅致。○氣高き音樂のしらべ。李商隱、高松詩「有レ風傳二一一一」

【雅歌】正しきうたをうたふ。後漢書、祭遵傳「對レ酒設レ樂、必一一投壺」

【雅號】文人墨客が文藝上に用ふる名。俗名に對していふ。

【雅誥】ただしきいましめ。晉書、儒林傳贊「一一弗レ論、徽言復顯」

【雅客】○風流なる人。＝雅人・雅士。○水仙の異名〔三柳軒雜識〕

【雅樂】○ただしきおんがく。論、陽貨「惡二鄭聲之亂一二一一也」○國 雅樂寮・雅樂頭の略語。

【雅鑒】御覽に入れる、お目にかけるといふ敬語。己の書畫などを人に贈る時に用ふ。＝清鑒・雅鑑。

【雅曲】ただしき音樂。吳志、周瑜傳、注「吾雖レ不レ及二夔曠一、聞レ絃賞レ音、足レ知二一一一也」

【雅會】風流なるよりあひ。劉子翬詩「一一欣聞珠履集、新詞好付二雪兒一歌」＝雅集。

【雅誨】ただしきをしへ。後漢書、朱穆傳「希二李老之一一一、思二馬援之所一レ尙」＝清誨。

【雅懷】風流なるおもひ。李白、桃李園序「不レ有二佳作一、何申二一一一」

【雅兄】友を稱する敬語。＝仁兄・學兄。

【雅潔】ただしくいさぎよし。元史、戴表元傳「其文清深一一、化二陳腐一爲二神奇一」

【雅言】○つねにいふことば。論、述而「子所二一一一、詩書執禮、皆一一也」○ただしきことば。諸葛亮、出師表「咨二諏善道一、察二納一一一」○國 みやびなることば。俚言・俗語の對。

【雅健】詩文がみやびやかにして力つよし。唐書、柳宗元傳「雄深一一、似二司馬子長一」

【雅故】○ただしき意義、故は訓詁の詁に同じ。漢書、敍傳「函二一一一、通二古今一」○ふるなじみ。輪苑新書「幸逢二一一一」＝舊友。○つねづね、平素。史、荊燕世家「今呂氏一一、本推二轂高帝一就二天下一功至大」

【雅語】正しくしてみやびなることば。俗語の對。＝雅言。

【雅士】正しくして上品なるさむらひ。魏志、邢顒傳「少秉二高節一、玄靜澹泊、言少理多、眞一一也」

【雅旨】ただしきむね。舊唐書、儒學傳贊「儒道玄機、聖人一一」＝雅意。

【雅志】○平生のかんがへ。晉書、謝安傳「一一未レ就、遂遇二疾篤一」○みやびなる心。陶潛、閑情賦「負二一一於高雲一」

【雅思】みやびなるかんがへ。歐陽修詩「善政已成多二一一一」

【雅秀】みやびやかにひいでる。宋史、李建中傳「風神一一、恬二於榮利一」

【雅集】雅會に同じ。

【雅人深致】高尙なる志ある人の深遠なるおもむき。晉書、王凝之妻謝氏傳「謝氏字道韞、聰識有二才辯一、叔父安嘗問二毛詩何句最佳一、道韞稱下吉甫作レ頌穆如二清風一、仲山甫永懷、以慰中其心上、安謂レ有二一一一一」安は謝安。

【雅章】正しきおんがくの篇章。儲光羲詩「是日歸來暮、勞レ君奏二一一一」

【雅儒】正しき道を行ふ學者。俗儒の對。荀子「故有二俗人者一、有二俗儒者一、有二一一者一、有二大儒者一」

【雅趣】雅致に同じ〔江淹、修心賦〕

【雅馴】文辭がただしくしてよく熟す、馴は順。史、五帝紀贊「其文不二一一一、薦紳先生難レ言レ之」

【雅頌】詩經中の雅と頌との詩、雅は正樂の歌、頌は祖先の功德を贊歎する歌。詩經序「詩有二六義一、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」論、子罕「子曰、吾自レ衞反レ魯、然後樂正、一一各得二其所一」

【雅正】みやびやかにただし。後漢書、輿服志「參二稽六經一、近二于一一一」

【雅節】ただしきみさを。駱賓王詩「霜松貞一一、月桂朗冲襟」

【雅奏】ただしき音樂のしらべ。奏は節奏。宋史、樂志「嘉薦斯備、一一具揚」

【雅俗】みやびやかなると、さとびたると。高尙なると下品なると。後漢書、郭泰傳贊「一一無レ所レ失」

【雅體】ただしき文體。北史、文苑傳「竝存二一一、歸二于典制一」
【雅道】ただしきみち。盧照鄰詩「高情邈不レ嗣、一一今復存」
【雅淡】心がおくゆかしくさっぱりとする。唐書、杜黄裳傳「黄裳達二權變一、有二王佐大略一、性一一未三始忤レ物」＝雅澹。
【雅談】風雅なるはなし。晉書、慕容皝載記「安枕逍遙、一一卒歲」
【雅澹】雅淡に同じ。張養浩詩「嵩岑呈二一一、樹影碎二空明一」
【雅致】みやびやかなるおもむき。世說「善談二名理一、混混有二一一」三國名臣贊「名節殊レ塗、一一同レ趣」
【雅重】ただしくおもおもし。晉諸公贊「和嶠字長輿、適之子也、少知レ名、以二一一一稱」
【雅鄭】雅樂と鄭聲と。曹植詩「一一異二音聲一」
【雅望】きよらかなる人望。晉書、陸曄傳「少有二一一」＝清望。
【雅美】みやびやかにしてうるはし。舊唐書、徐彥伯傳「彥伯、文辭一一」
【雅裕】みやびやかにしてゆるやか。唐書、竇羣傳「一一有レ名二于時一」
【雅量】ただしくゆったりとせるはらまへ。晉書、謝安傳「衆咸服二其一一一」
【雅麗】みやびやかにしてうるはし。南史、陸慧曉傳「三子依二次第一各作二一讓表一、辭竝一一」
【雅烏】みやまがらす。小爾雅「小而腹下白、不二反哺一者、謂二之一一一」＝鴉烏。

【雁】ガン 〔譌〕鴈に同じ
○かり、水禽の一、列を成して飛ぶ、秋來りて春去る。說文、注「一知二時鳥一、大夫以爲レ摯、昏禮用レ之、故从レ人」＝隨陽鳥。○一門は山名、關あり、一門關と名づく。今の山西省、代縣の西北三十支那里に在り、古より戍守の重地と爲す。＝雁山。
【雁影】かりのとぶかげ。駱賓王詩「露下蟬聲斷、寒來一一迹」
【雁行】○かりのならび飛ぶ如く相次して少しく斜におくれ行く。禮、王制「父之齒隨行、兄之齒一一」○一番先に立ちて行く。戰國、韓策「韓之于レ秦也、居爲二隱蔽一、出爲二一一」
【雁塞】地名。梁州記「梁州縣界、有二一一山一、山有二大池水一、羣雁棲集、故名二一一一」
【雁山雲】雁門山の雲。江淹、別賦「或乃邊郡未レ和、負レ羽從レ軍、遼水無レ極、雁山參レ雲」
【雁字】かりのならび飛ぶを文字にたとへていふ語。蘇軾詩「蜃樓百尺橫二滄海一、一一一行書二絳霄一」
【雁字驚梭】雁の翔けるを字に喩へ、驚の飛ぶを機の梭との往來に比していふ。
【雁齒】橋の上に橫にとりつけたる棧。遊仙窟、注「列レ木亦刻レ石爲レ之、其形一前一卻、如二一一行列一」白居易詩「一一小紅橋」
【雁信】てがみ、信は音信。溫庭筠詩「若向二三湘一逢二一一、莫レ辭千里寄二漁翁一」雁書を見よ。
【雁序】○飛雁の次第あるをいふ。杜甫詩「九秋驚二一一」○轉じて兄弟に喩ふ。杜陽雜編「王沐者、王涯之再從弟也、至二京師一、經二三十餘月一、始得二一見一、涯無二一一之情一」
【雁書】てがみ、漢の蘇武の故事に本づく。漢書、蘇武傳「昭帝卽位數年、匈奴與レ漢和親、漢求二武等一、匈奴詭言、武死（中略）常惠敎二漢使者一、謂二單于一言、天子射二上林中一、得レ雁、足有レ係二帛書一、言武等在二某澤中一、使者大喜、如二惠語一以讓二單于一、單于視二左右一而驚謝二漢使一曰、武等實在」＝雁帛。
【雁聲】かりの聲。許渾詩「久客怨二長夜一、西風吹二一一」
【雁素】てがみ、素は白き絹。＝雁帛・雁書。
【雁堂】佛堂。釋氏要覽「毗舍離爲レ佛作レ堂、形如二雁字一、因名」儲光羲詩「徘徊雁字堂」
【雁蕩】山名、浙江省樂淸縣の東九十支那里に在り、盤曲數百里、其の峯百有二、谷十、洞八、巖三十、奇を爭ひ勝を競ふ、絕頂に湖あり、水常に涸れず、雁の春に歸る者、留り宿す、故に名つく、沈括曰ふ、天下の奇秀は此山に逾ゆる者なしと。
【雁塔】そとば。西域地方にて雁を埋めて塔を建てし故事に本づく。西域記「昔有二比丘一、見二雙雁飛翔一、思曰、若得二此雁一可レ充二飲食一、忽有二一雁一投下自隕、衆曰、此雁垂レ戒、宜レ旌二彼德一、於レ是瘞レ雁建レ塔」
【雁塔題名】唐代、進士に及第せし者、洛陽の慈恩寺の塔に其の名を題するを例とするをいふ「唐摭言」楊載詩「姓名題二雁塔一」
【雁陣】雁が列を成して飛ぶを行陣に喩ふ。易林「九雁列レ陣」王勃、滕王閣序「一一驚レ寒」
【雁柱】ことぢ、琴柱の斜めに列する、雁の飛ぶに似たる故。張子野詩「一一十三絃、一一春鶯語」
【雁鼎】雁は贗、僞物の鼎。韓非、說林「齊伐レ魯索二讒鼎一、魯以二其雁一往、齊人曰、雁也、魯人曰、眞也」＝贗鼎。
【雁奠】婚姻の約を結びし時の贈物。禮、昏義「父親醮レ子而命レ之迎、壻執レ雁入、揖讓升レ堂、再拜奠レ雁」＝雁幣。
【雁奴】雁の夜、沙渚中に宿するには千百羣を成す、大なる者中に居り、小なる者外に圍み、以て動靜を察し、狐・人などの來り捕ふるに備ふ、故に名つく。元好問詩「一一辛苦候二寒更一」

【雁帛】てがみ。雁書參看。莫士安詩「書封二一一一感二蘇卿一、膾斫二鱸絲一羨二張翰一」柳貫詩「江驛北來無二一一一」
【雁皮】落葉灌木の一、高さ三四尺、淡黃色の花開く、樹皮の纖維にて紙を製す。
【雁幣】婚禮に雁を贄とするをいふ。儀禮、士昏禮「昏禮。下達、納采用レ雁」白虎通「納采・問名・納吉・請期・親迎、贄用レ雁者、取二其隨レ時南北不一レ失二其節一、明レ不レ奪二女子之時一也」
【雁來紅】○はげいとう。花譜「秋色葉如レ花者、名二一一一」又「葉全紅者、一名一一一、紅綠相間者、名二十樣錦一」＝老少年。○ひしの異名。吳郡志「一一一、菱名」

【雇】㊀コ ㊁コ 〔廣〕〔通〕
㊀九一は鳩の一種。＝鳲・九扈。㊁やとふ（傭）賃を與へて人を使ふ。やとひ、やとはれ人。○國に官廳・會社等にて定員外に使用するもの「一員」通じて僱に作る。
【雇員】官廳などにて定員外の使用人。
【雇直】人夫などをやとふ賃錢。＝庸錢・傭錢。

【集】シフ 〔緝〕
○あつまる「會一」「雲一」「四一」「羣一」あつめる（聚・會）鳥が木にあつまる。詩、周南「一于灌木一」○すべあつめる（總彙）孟、萬章「孔子之謂二一大成一」○まじふ（雜）○なる。なす（成・就）成就する。書、武成「大統未レ一」○もろもろ（衆）○やすんず（安）やはらぐ（和）史、曹參世家「安二一百姓一」＝緝。○ひとし（齊）○とどまる（止）○とりで、邊境に在る壘壁。左、昭二三「險其走一」○いち（市場）商人が日を定めて一處に集りて交易する所。＝墟。○詩文などをあつめたるものの稱「詩一」「文一」○詩文などをあつめる「撰一」＝輯。
〔解字〕本、雧に作る、羣鳥の木上に在るに象る。
〔同訓異義〕アツマル 集・聚・湊・輯・萃・蝟等の別は聚（一五四九頁三段）の條を見よ。
【集英】○すぐれたるものをあつめる。○宮殿の名。宋史、哲宗紀「御二一一殿一、策二進士一」
【集腋】衆力を集めて一事を成す喩。愼子「狐白之裘、非二一腋之皮一也」
【集合】あつまりあふ。あつめあはす。爾雅、註「匹、配合也、會、一一也」
【集義】道義を積みあつめる。孟、公孫丑「是一一所レ生者、非二義襲而取レ之也」
【集議】あつまりて相談する。史、晁錯傳「上令二公卿列侯宗室一一一、莫二敢難一、獨竇嬰爭レ之」＝會議。
【集句】古人の成句をあつめて一篇の新詩とする。又、其の詩。文體明辯「一一詩者雜二集古句一、以成レ詩也、自レ晉以來有レ之、至二宋王安石一尤長二於此一」
【集會】多人數がよりあつまる。
【集權】政權を一所にあつめる。分權の對「中央一一」
【集古】ふるき物をあつめる。歐陽修に「一一錄十卷」の著あり。
【集散】あつめると、ちらすと「物產の一一地」
【集事】事をなしとげる。左傳「可二以一レ一一」注「集、成也」
【集輯】詩文、又、種種の材料をあつめる。＝蒐集。
【集聚】あつまる。あつめる。左傳、疏「治レ民倘二其一一一、恐二其流散一」易林「仁聖相遇、伊呂一一」＝聚集。
【集成】集大成を見よ。
【集抄】よせあつめてしるす。南史、王僧孺傳「僧孺集二十八州譜七百一十卷・百家譜一一十五卷・東南譜一一十卷一」
【集大成】成は音樂の一終、金・石・絲・竹・匏・土・革・木の八音には、各始終あり、之を合奏するとき、金を鳴らして始め、石を擊ちて終ふ、これ八音の小成を集めて一大成となすなり、よりて孔子が羣聖人の道を集め、統一して儒敎を完成せしに喩ふ。孟、萬章「孔子之謂二一一一、一一一也者、金聲而玉振レ之也」
【集中】○ひとところにあつめる。○詩文集のうち。
【集注】○一所にあつめる。○書物の解釋をあつめる。＝集註。
【集註】諸家の註釋をあつめる。又、其の書「論語、朱熹、一一」＝集注。
【集綴】事實をあつめて文につづる。唐書、鄭虔傳「一二一當世事一」
【集配】國あつめると、くばると「郵便一一人」
【集部】詩文の書の總稱。四庫（三六一頁二段）參看。＝丁部。
【集服】あつまりてやはらぎしたがふ。史、衞將軍傳「十萬之衆、咸懷二一一一」

【集往】あつまりゆく。呉都賦「鱗甲之所ニ｜｜一」

五 畫

【雄】 雄（隹部四畫）に同じ。

【雊】 コウ ク 宥 遇
なく（鳴）雄雉が鳴く「｜雉」

【雌】 ㊀シ ㊁セイ・サイ 支 齊
○めす、めん、め、主に鳥類のめすにいふ。雄の對。○獸の牝をもいふ。古詩「｜兔眼迷離」○勢よわし、めめし、にぶし。○又、其の者「｜伏」○まける、おとる（劣）史、項羽紀「決ニ｜雄一」○負けると勝つと。次條參看。＝勝敗。

【決ニ雌雄一】勝敗をさだめる。史、項羽紀「願與ニ漢王一挑レ戰———」

【雌蕊】めしべ、花の生殖器官の一。雄蕊の對。花の中央にありて後に實となるもの。

【雌節】柔順なる節義。淮南子「聖人守ニ清道一而抱ニ｜｜一」

【雌懦】めめしくよわし。柔弱にして振はず。懦は慄に同じ。北齊書、永安簡平王浚傳「文宣、性｜｜」＝柔懦・怯懦。

【雌雉】めすのきじ。論、鄉黨「山梁｜｜、時哉時哉」

【雌竹】めだけ。釋惠洪詩「過レ牆｜｜已數子、出レ屋毫蕉終九齡」

【雌風】しめりて心もち惡しき風。雄風の對。宋玉、風賦「憞慖鬱邑、毆レ溫致レ濕、此所謂庶人之｜｜也」

【雌伏】○人の下につきしたがふ。後漢書、趙典傳「大丈夫當ニ雄飛一、安能｜｜」雄飛の反對。○しりぞきてかくれる（退藏）溫庭筠詩「｜｜竟非レ夫」

【雌黃】○硫黃と砒素との混合して成る黃土、藥用、又、顏料とす。水經、注「銅鐵及｜｜」○古、黃紙に字を寫す、誤あれば｜｜を以て塗る、故に轉じて詩文を改竄するを「加ニ｜｜一」といふ。口中｜｜（二九七頁一段）參看。

【雎】 シヨ 魚 雎と睢は別
○｜鳩はみさご、鷹に似て大いなる鳥、水邊に棲み魚を捕へ食ふ、雌雄の別正し、故に詩人夫婦間の和ぎて別あるに喩ふ。詩、周南「關關｜鳩、在ニ河之洲一、窈窕淑女、君子好逑」＝王雎。○趑｜は行き難き貌。＝趑雎。

【雋】 ㊀セン ㊁シュン 銑 震
㊀こえたるしし（肥肉）鳥肥える、美き肉。○轉じて味ある言「｜永」○姓。｜不疑は前漢の人、春秋を治め、進退必ず禮を以てす。㊁すぐれる。才が衆にぬき出る。漢書、禮樂志「進ニ用英｜一」＝俊。儁。

【雋器】すぐれて才ある人。人物志「人材不レ同、成有ニ早晚一、遂爲ニ｜者一」

【雋贍】才學が十分にすぐれて足る。魏書、宋弁傳「才學｜｜、少有ニ美名一」

【雋哲】すぐれてさとし。又、其の人。李嶠賦「休矣時英、茂哉｜｜」

【雋髦】すぐれたる人。白居易詩「將校森ニ貔虎一、賓僚儼ニ｜｜一」＝俊髦。

【雋拔】ずぐれてぬきでる。東萊子「神峯｜｜、殊璧相照」＝俊拔。

【雋敏】すぐれてさとし。六一詩話「文詞｜｜、尤好ニ嘲詠一」

【雋武】すぐれてたけし。儁は儁・俊に通ず。陸雲、吳故丞相陸公誄「方隅肅清、烈文｜｜」

【雋輔】すぐれたる輔相。王獻之、明ニ謝安忠勳一疏「實大晉之｜｜、義篤ニ於囊臣一」

【雋茂】才學がすぐれる。又、其の人。潘岳文「淸才｜｜、德盛日新」＝俊茂。

【雋譽】すぐれたるほまれ。宋史、盧秉傳「弱冠有ニ｜｜一」

【雋永】肥えてうまき肉の如く義理深長にして味あり。漢書、蒯通傳「通論ニ戰國時說士權變一、亦自序ニ其說一、凡八十一首、號曰ニ｜｜一」

【雉】 チ 紙
○きじ、きぎす、野禽の一、形雞に似、雄は羽毛甚だ美し、目赤く尾長し、漢の呂后の名｜なるが故に諱みて野雞といふ。○城のかき。○城牆の尺度、一丈四方を堵といひ、三堵を｜といふ。即ち長さ三丈、高さ一丈。左、隱元「都城過ニ百｜一」○｜門は公宮の南門〔左、定二、註〕＝應門。○牛の鼻づらの繩。○古、博戲、五木を以て子と爲す、梟形を刻り、勝負の采と爲す、梟・盧・｜・犢・塞あり、梟を最勝と爲し、盧之に次ぎ、｜・犢又之に次ぎ塞を最下と爲す〔山堂肆考〕

【雉經】くびれしぬ。雉は繩、經は道、呼吸の道を繩にてしめる。晉語「申生乃｜ニ｜於新城之廟一」＝縊死。

【雉兔者】きじと、うさぎとを捕ふる者。孟、梁惠王「芻蕘者往焉、

——往焉」

【雉堞】城上のひめがき。鮑照賦「板築｜｜之殷」王禹偁、竹樓記「子城西北隅、｜｜圮毀」＝女牆・埤堄。

【雉頭裘】雉の頭の美毛にて飾りつけたる珍らしきかはごろも。晉書、武帝紀「獻ニ———一、帝以ニ奇技異服、曲禮所レ禁、焚ニ之於殿前一」

【雉媒】獵師が雉の子を養ひ狎らして他の野雉を招引せしめて之を獵取するをとりとする者、故に媒といふ。司空圖詩「｜｜譁晚草芳時」

【雍】 ㊀ヨウ ㊁ヨウ ㊂ヨウ 冬 腫 宋 ㊀は古、邕・雝に作る
㊀やはらぐ（和）むつまし。書、堯典「黎民於變時｜」（於はあゝ、時はこれ）○歡ぶ聲の形容。家語、正論「言乃｜」○辟｜は天子の學校。＝辟雝。○著｜は十干の戊の異名。爾雅「太歲在ニ戊曰ニ著｜一」㊁たすく（祐）○あつむ（聚）○ふさぐ（塞）＝壅。㊂古の九州の一。書、禹貢「黑水西河惟｜州」今の陝西・甘肅二省、及青海地方。＝雝州。

【雍閼】ふさぎとどむ。雍は壅。閼は止。漢書、中山王傳「今臣｜｜不レ得レ聞」

【雍熙】○やはらぎてたのしむ。雍は和、熙は嬉。張衡、東京賦「上下共ニ其｜｜一」＝和樂。○宋太宗の年號。

【雍齒封レ侯】漢の高祖が張良の計を用ひて、先づ其の惡む所の雍齒を封じて以て他の疑懼して叛を謀らんとせし諸將を鎭撫せしをいふ。史、留侯世家「於レ是上乃置酒、封ニ雍齒一爲ニ什方侯一、而急趣ニ丞相御史一定レ功行レ封、羣臣罷レ酒、皆喜曰、雍齒尙爲レ侯、我屬無レ患矣」

【雍樹】小兒をいだくをいふ。雍は擁に通ず。史、夏侯嬰傳「｜｜而馳」注「南陽人謂レ抱ニ小兒一爲ニ｜｜一」

【雍徹】雍は詩經周頌の篇名、徹は撤、周の世、天子、宗廟の祭に供へたる物を撤去する時、雍の詩を歌はしむ、而るに臣下にして之を行ふは僭越なり。論、八佾「三家者以レ｜｜」＝雝徹。

【雍防】ふさぐ、とどむ、雍は壅。漢書「｜ニ｜百川一」

【雍睦】やはらぎしたしむ。徐陵、碑文「家門｜｜、孝友爲レ風」

【雍穆】やはらぐ。南史「家門｜｜、爲ニ州郡所レ重」

【雍門鼓レ琴】雍門周が琴を以て齊の孟嘗君を感動悲傷せしめたる故事。說苑「雍門周以レ琴見ニ孟嘗君一、孟嘗曰、先生鼓レ琴、能令ニ文悲一乎、雍曰、千秋萬歲後、臺榭已壞、墳墓已下、嬰兒豎子樵採者躑ニ躅其足一而歌ニ其上一曰、夫以ニ孟嘗尊貴一、乃若レ是乎、於レ是孟嘗泫焉承レ睫曰、先生令ニ文若ニ破レ國亡レ邑之人一」

【雍容】やはらげる貌。漢書、司馬相如傳「從ニ車騎一、｜｜嫺雅」

【雍雍】音のやはらげる形容。張衡賦「延ニ鸞輅之｜｜一兮」

【雍和】やはらぐ。後漢書、魏霸傳「霸兄弟同レ居、州里慕ニ｜｜一」

【雍和宮】北京安定門內、舊の國子監の東に在り、淸の世宗の潛邸なり、世宗卽位の後、改めて喇嘛寺と爲す。

六 畫

【雒】 雒（隹部十畫）の俗字。

【雒】 ラク 藥
○かはらけ、體黑くして鬣白き馬。詩、魯頌「有レ駰有レ｜」○おもがい、絡に通ず。莊、馬蹄「刻レ之｜レ之」○水名、洛に通ず。漢は火德を以て王たり、故に光武帝以後、水に從ふ洛字を忌みて此字を代へ用ふ「｜陽」○額に通ず「龍｜侯」

【雒陽】古の帝都の名。史、蘇秦傳「使ニ我有ニ｜｜負廓田二頃一、吾豈能佩ニ六國相印一乎」今の河南省洛陽縣。＝洛陽。

八 畫

【巂】 巂（隹部十畫）に同じ。

【雛】 雛（次頁三段）に同じ。

【雕】 テウ 蕭
○わし、鷲の大なる者。埤雅「｜似レ鷹而大、黑色俗呼ニ皁｜一」＝鵰。○｜｜は章明なる貌。＝昭昭。○ゑる、ちりばむ。玉を刻む「｜刻」彫に通ず。孟、梁惠王「必使ニ玉人｜ニ琢之一」○しぼむ、しをれる、かれる、傷む、凋に通ず。

【雕楹】ほりものしたる大いなるはしら。崔駰文「丹柱｜｜、飛閣層樓」

【雕巧】たくみにほりかざる。蘇舜欽詩「扶疎珊瑚枝、本不ニ自｜｜一」

【雕悍】わしの如くあらあらしく、つよし。左思賦「料ニ其虓勇一、則｜｜狼戾」

【雕朽】くちたる木にほる、物事の用を爲さざるに喩ふ。北史、儒林傳序「鏤冰｜｜、迄用無レ成」駱賓王詩「有レ志慙ニ｜｜一、無レ庸類ニ散樗一」

【雕金】金にちりばむ。南史、后妃傳「一レ一鏤レ寶、照二燭房帷一」
【雕琴】刻みて飾れる琴。鮑照詩「奉レ君金巵之美酒、瑇瑁玉匣之一一」
【雕戈】ゑり飾りたるほこ。國語「穆公衡二一一一、出見二使者一」
【雕繢】ほりものし、ゑがく、詩文などを美くしく飾る義。世說、文學「君詩若二鋪レ錦列レ繡、亦一一滿レ眼」＝雕繪。
【雕軒】ほりものしたるのき。又、美くしき宮殿。黃滔詩「九穗嘉禾垂二綺陌一、四時甘雨帶二一一一」
【雕刻】金石竹木などにほりきざむ。輟耕錄「僭成者、宋高宗朝匠人、一一精妙無レ比」＝雕刻。
【雕胡米】まこもの實、食ふべし。＝菰米。
【雕削】きざみけづる。文心雕龍「一一取レ巧、雖レ美非レ秀」
【雕鑽】ゑりうがつ。蘇軾詩「緬懷臥龍公、挾レ策事二一一一」
【雕漆】つゐしゅ(堆朱)遵生八牋「宋人雕紅漆器」
【雕人】骨角をみがき治むる工人［考工記］尸子「一一裁レ骨、則知二牛長少一」
【雕章】ゑりかざりたる文章。晉書、樂志「塀歌雖レ有二損益一、愛翫在二乎一一一」
【雕飾】ほりものしてかざる。晉書「昔日貴二一一一、今尙二儉與レ素」＝刻飾・鏤飾。
【雕鐫】ほりきざむ。庾信賦「一一始就、剞劂仍加」＝雕鏤。
【雕題】○額にほりものす。禮、王制「南方曰レ蠻、一レ一交趾、有下不二火食一者上矣」○轉じて書物の頭註「論語一一」
【雕琢】○玉をきざみみがく。孟、梁惠王「必使三玉人一二一之一」○詩文などを巧に工夫して作る。司馬遷、報二任安一書「欲下自一二一曼辭一以自飾上」
【雕柱】ほりものしたるはしら。梁元帝賦「玉階紫闥、一一錦牆」
【雕蟲小技】次條に同じ。北史、崔渾傳「嘗謂二魏收一曰、一一、我不レ如レ卿、國典朝章、卿不レ如レ我」
【雕蟲篆刻】文章を作るに、字句をうるはしくかざるをいふ。法言、吾子「或問、吾子少而好レ賦、曰、然、童子一一、俄而曰、壯夫不レ爲也」＝雕蟲小技。
【雕雕】著明なる貌。荀子「一一焉、懸二貴爵重賞於其前一」
【雕板】文字をはんぎにゑる。又其のはんぎ。隋末唐初より行はる。
【雕鶚】くまたか。揚子「一一高翔、在二腐糧一也」
【雕梁】ほりものしたるはり。江總詩「芙蓉作レ帳照二一一一」
【雕龍】龍をきざむ如く文章を巧にかざる。史、孟荀傳「談天衍、一一奭」注「若レ雕二鏤龍文一」一說無用の辯をほしいままにする喩。
【雕輦】ほりものしたるてぐるま。晉書、佛圖澄傳「季龍僭位、傾レ心事レ澄、衣以二綾錦一、乘以二一一一」
【雕輅】皇后のくるま。隋書、禮儀志「皇后之車十二等、五曰二一一一、以錦翟」
【雕鏤】ほりきざみて飾る。國語「不レ聞下其以二土木之崇高一一一一爲上レ美」

【雖】 九畫 スヰ 支

○蜥蜴に似て大いなる蟲。○いへども、たとへば。○たとひ、(假令)父一」沒は、父がたとひ、死なれてもの義。○おしはかることば。論、述而「一レ違レ衆、吾從レ下」○文勢を轉ずるところに用ふる語「一」然」又詩にては下の語にかかる。岑參詩「明主一二然棄一丹心猶未レ休」

【雞】 十畫 ケイ 俗 又、鷄に作る

にはとり、くだかけ、家禽の一、雌雄皆肉冠あり、肉及卵は滋養の效あり。＝司晨鳥・啓關。
【割レ雞焉用二牛刀一】小事を處するには大人物を要せずとの喩。論、陽貨「子之二武城一、聞二弦歌之聲一、夫子莞爾而笑曰、一一一」
【雞姦】男色。臨闕隨筆「楊氏正韻雞律有二要姦之條一、要音雞、將レ男作レ女也、今男淫爲二一一一誤矣」＝龍陽。
【雞距】にはとりのけづめ。白居易、一一筆賦「不レ得二兎毫一、無三以成二起草之用一、不レ名二一一一、無三以表二入木之功一」＝雞跖。
【雞羣一鶴】衆くのつまらぬ者の中にて獨り秀でたるに喩ふ。晉書、嵇紹傳「或謂二王戎一曰、昨於二稠人中一、始見二嵇紹一、昂昂然若三野鶴之在二雞羣一」
【雞冠】○にはとりのとさか。○雞頭に同じ。本草「一一花、以二花狀一命レ名」
【雞冠石】硫素の硫化石、紅色、又、橙黃色をなす。顏料又花火に用ふ。
【雞鴞】ふくろふ。本草「鴞亦名二一一」
【雞犬相聞】雞の聲と犬の聲とがあちこちに聞える、人家のうちつづける形容。老子「鄰國相望、雞犬之聲相聞」
【雞口】小さき者の頭となる義。次條參看。

【爲二雞口一無レ爲二牛後一】小なりとも人の上に立つべし、大なりとも人の尻につくべからずといふ喩。史、蘇秦傳「鄙諺曰、寧爲二雞口一、勿レ爲二牛後一、今西面交レ臂而臣二事秦一、何異二於牛後一乎」
【雞狗馬之血】古、誓をなす時、其の身分に應じて天子は牛馬、諸侯は犬豭、大夫以下は雞の血をすする。史、平原君傳「執二一一一一來」
【雞子】○たまご、雞卵。孔叢子「賦二於民一而食二人二一一一一」○にはとりの子、ひな［說文］＝鶵雞。
【雞塒】雞のねぐら。詩、王風「雞棲二于塒一、日之夕矣」王安石詩「豚柵一一晻靄閒」＝雞栖。
【雞兒腸】よめな(嫁菜)野菊に似たる野草、嫩芽を食用とす。
【雞人】宮中を護衞し、祭祀の夜、曉を報ずる者。周禮、春官「一一掌下共二雞牲一、辨二其物一、大祭祀夜嘑レ旦、以叫二百官上」王維詩「絳幘一一報二曉籌一」
【雞黍】にはとりを殺してあつものとし、きび飯を炊ぐ。人を饗應するを一一之款といふ。論、微子「殺レ雞爲レ黍而食レ之」漢の張劭、一一を具して范式を待ちしこと後漢書に見ゆ、よりて客を餉するに多く此語を用ふ。
【雞棲】にはとりのねぐら。棲は栖に同じ。後漢書、陳蕃傳「車如二一一、馬如レ狗」＝雞栖。
【雞聲】にはとりのこゑ。溫庭筠、商山早行詩「一一茅店月、人跡板橋霜」
【雞栖鳳凰食】雞の栖むねぐらに、鳳凰が共に居て食ふ。君子が小人と共に居るに喩ふ。文天祥、正氣歌「牛驥同二一皁一、一一一一一」
【雞舌香】香の名。漢官儀「尙書郎、含二一一一一奏レ事」(口氣を治むるが故)＝丁子香・丁香。
【雞窗】讀書の室をいふ。幽冥錄「晉兗州刺史宋處宗嘗買得二一長鳴雞一、愛養甚至、恒籠二著窗閒一、雞遂作二人語一、與二處宗一談論、極有二玄致一、終日不レ輟」范成大詩「一一夜可レ讀」
【雞蛋】たまご。＝雞卵・雞子。
【雞壇】友の相會する場所。北戸錄「越人每二相交一作レ壇、祭以二白犬丹雞一」
【雞腸草】○雞草の一。かはらけな、たびらこ、ほとけのざ。○はこべ。＝蘩縷［爾雅］
【雞潮】にはとりの異名。沈約文「每二潮至一則鳴、故呼爲二一一一一」
【雞鳴二天上一】淮南王劉安が仙人となりて去る時、藥器を殘し置きたるに雞犬之を甜めて皆天に升るを得たりといふ故事。神仙傳「淮南王安、臨レ去時、餘二藥器一、置レ在二中庭一、雞犬舐二啄之一、盡得レ升レ天、故一一、犬吠二雲中一也」
【雞頭】草花の一、莖は赤靑色、雞のとさかに似たる花をつく。＝雞冠。
【雞頭肉】美人の乳を稱す。楊妃外傳「楊妃出レ浴(中略)露二一乳一、明皇捫弄曰、軟溫新剝一一一」
【雞毒】うづ、毒藥の名。淮南子「天下之物、莫レ凶二于一一一」＝烏頭。
【雞豚】にはとりと、ぶたと。孟、梁惠王「一一狗彘之畜、無レ失二其時一」
【雞五德】にはとりの五つの德。韓詩外傳「田饒謂二魯哀公一曰、君不レ見二夫雞一乎、頭戴レ冠者文也、足傳レ距者武也、敵在レ前敢鬪者勇也、見レ食相呼仁也、守レ夜不レ失レ時者信也、夫是謂二之五德一」
【雞坊】鬪雞を畜ふ所。東城老父傳「明皇在二藩邸一時、樂二民閒清明節鬪雞戲一、及レ卽レ位、治二一一于兩宮閒一、索二長安雄雞千數一、養二于一一一、選二六軍小兒五百人一、使二馴擾敎二飼之一」
【雞皮鶴髮】老人の肌は雞の皮の如く衰へ、頭髮は鶴の羽の如く白し、老人の形容。唐玄宗、傀儡吟「刻レ木牽レ絲作二老翁一、一一一一與レ眞同」
【雞卜】にはとりを殺して、其の脛骨を取りて吉凶を卜ふ法。史、封禪書「祠二天神上帝百鬼一、而以二一一」
【雞鶩】にはとりと、あひると。鶩鳧・鴻鵠などに對して、平凡なる人に喩ふ。屈平、卜居「寧與二黃鵠一比レ翼乎、將與二一一一爭レ食乎」
【雞盲】とりめ。留靑日札「人目至レ晩不レ見者、曰二一一一」＝雀盲・夜盲。
【雞鳴狗盜】孟嘗君が狗のまねをする者をして物を盜ましめ、又、雞の鳴くまねをする者を使ひて函谷關より逃れ歸りし故事。史、孟嘗君傳「最下坐有下能爲二狗盜一者上」又「客有下能爲二雞鳴一者上」轉じて賤劣なる人に喩ふ。
【雞鳴狗吠】雞犬の聲が相聞える、人家の接續せるにいふ。孟、公孫丑「一一一一相聞、達二於四境一」
【雞鳴酒】一夜づくりのさけ。食經「今日作、明日雞鳴時熟、謂二之一一一一」
【雞鳴之助】國君が賢婦の內助あるをいふ。詩、齊風、雞鳴篇、序「雞鳴、思二賢妃一也、哀公荒淫怠慢、故陳二賢妃貞女、夙夜警戒相成之道一焉」
【雞雍】おにばすの實。本草「芡實、一名一一」
【雞卵】にはとりのたまご。禮、月令「渾天形、如二彈丸一、地在二其中一、天包二其外一、猶如二一一白之繞レ黃」＝雞子。
【雞林】もと新羅國の異稱、後世は朝鮮全體の稱とす。東國通鑑「新羅

王夜聞ニ金城西始林間有ニ雞聲一、遣ニ瓠公一視レ之、有ニ金色小櫝一、掛ニ樹梢一、白雞鳴ニ於下一。瓠公還告、王使ニ人取レ櫝開ニ之、有ニ小男兒在ニ其中一、姿貌奇偉、王喜謂ニ左右一曰、此豈非ニ天祚レ我以ニ胤乎一、名ニ閼智一、閼智鄕言小兒之稱、以ニ其出ニ金櫝一、姓ニ金氏一、有ニ雞怪一、改ニ始林一名ニ雞林一、因以爲ニ國號一」

【雞籠】雞を入れる籠。列仙傳「雞ニ一ー鼠數枚于宅之東南一」

【雞肋】〇にはとりのあばらぼね。食ふ程の肉なけれども、少しく肉あるを以て棄つるには惜しといふ意。後漢書、楊修傳「夫ーー、食レ之則無レ所レ得、棄レ之則如レ可レ惜」〇雞肋の如く體の小弱なるに喩ふ。晉書、劉伶傳「劉伶嘗醉、與ニ俗人一相忤、其人攘レ袂奮レ拳往、伶徐曰、ーー安足ニ以安ニ尊拳一其人笑而止」

【雟】㊀ケイ ㊁スヰ 齊 紙

㊀くるまの輪のひとめぐり、一周は一丈九尺八寸。〇輪轉の度（規）〇ー周は子規ほととぎすの異名。省稱してーともいふ。㊁越ーは漢の郡名、今の四川省寧遠府。

【雙】サウ ソウ 江 双は略字

〇ふたつ、そろひ（兩）〇ならぶ、たぐひ（偶）〇一對の物を數ふるにいふ數詞「屛風一ー」〇ー儀禮、聘禮「凡獻、執ニ一ー」〇ー陸は博戲の一種。唐書、狄仁傑傳「ー陸不勝」〇國すごろく。＝雙六。

解字 雙は隹二枚なり、雔又に从ふ、鳥二羽、卽ち二隹を又（手）にて持つ形。

【雙靨】兩方のゑくぼ。溫庭筠、牡丹詩「欲レ綻似レ含ーー笑」

【雙眼】兩方のまなこ。戎昱詩「暫收ニーー淚一」＝雙眸。

【雙眼鏡】とほめがね（望遠鏡）

【雙柑斗酒】二つの密柑と一斗の酒と、之を攜へて鶯の聲を聞きに行く故事。續世說「戴顒、春日攜ニーー一、往聽ニ黃鸝一曰、此俗耳鍼砭、詩腸鼓吹」

【雙魚】書信てがみをいふ、雙鯉に同じ。黃庭堅詩「會思臨レ水寄ニーー一」

【雙關法】文章構造法の一、相對する文句を相竝べて一篇一段をなすもの、韓愈の原毀の文の如きは此法を用ふ。＝雙扇法。

【雙肩】〇左右兩方のかた。〇二四の獸、獸の三歲なるを肩といふ。張華、遊獵篇「機發應レ弦倒、一縱連ニーーー」

【雙句】かご字。＝雙鉤。

【雙鉤】〇かご字。文字の點畫の外邊に沿ひ、細線をひきてかきうつす。〇運筆法の一、筆を把るに大指に對して食指と中指とを筆管にかける。大指と食指とのみをかけるを單鉤（單句）といふの對［段玉裁、述筆法］＝雙句。

【雙雙】ふたつづつ。一對づつ。陸龜蒙詩「寒鴉驚起一ーー」

【雙翅】兩翼といふに同じ、翅はつばさ。許渾詩「ーー欲レ開ニ千萬里一」

【雙翅類】昆蟲類の一、中胸に膜質の翅が一對あるもの。蠅・蚊・虻など。

【雙子葉】始めて芽を出だすとき、二枚の子葉を生ずる植物。

【雙日】偶數の日。隻日の對。宋史、仁宗紀「ーー御ニ經筵一」＝偶日。

【雙親】ふたおや、父と母と。韓翃詩「不レ見ーー辦ニ豐膳一」＝兩親。

【雙手】もろて、左右の手。王建詩「ーー向レ空如ニ鳥翼一」＝兩手。

【雙珠】〇ふたつの眞珠。李白詩「ーー出ニ海底一、俱是連城珍」〇すぐれたる兄弟。又はすぐれたる兩友に喩ふ。三輔決錄「孔融見ニ韋元將・仲將一、與ニ其父書一曰、不レ意ーー生ニ於老蚌一」

【雙生】ふたごをうむ。又、ふたご。空同子「ーー以レ後爲レ兄者味ニ化理一者也」＝雙生兒・孿子。

【雙栖】〇ならびすむ。曹植詩「仰見ーー禽」〇夫婦が共にすむ。劉庭芝詩「與レ君相對轉相親、與レ君ーー共ニ一身一」

【雙棲】前條に同じ。沈佺期詩「海燕ーー玳瑁梁」

【雙聲】二字の熟語の上下の文字の發聲が子音を同じくするもの、「股肱」「凜烈」の類［南史、謝莊傳］

【雙全】ふたつながらともにまったし。杜甫詩「名器重ニーー一」＝兩全。

【雙朶】ふたつのえだ。雍陶詩「露濕紅芳ーー重」＝兩枝。

【雙蝶】ふたつのてふ。陸游詩「風定草頭ーー飛」

【雙方】相對する兩方。訴訟の原告と被告との如し。

【雙飛】〇鳥が雌雄ならび飛ぶ。九國志「烏鵲ーー、不レ樂ニ鳳凰一」〇轉じて夫婦の相離れざるに喩ふ。晉書「惟帝與レ后、契闊在昔、比ニ翼白屋一、ーーニ紫閣一」

【雙美】二つながら美くし。又、一對の美くしきもの。晉書、桓彝等傳「虔謐重レ世、沖秀ーー」

【雙斃】〇兩方ともたふれる。晉書、桑虞傳「諺語ニ所親一曰、才不レ副レ意、力不レ稱レ心、財殫力竭、智勇俱屈、此韓盧・東郭所ニ以ーー一」〇しんぢゅう（心中）情死。楊升庵外集「雲中之俗、女子與レ男昵レ睥睨愛、

雉經ーー」

【雙廟】功績同じき兩人をあはせ祭るおたまや。睢陽城の張巡・許遠の廟。蔡州の狄仁傑・李愬の廟の類。

【雙璧】〇一對のたま。〇兩方相竝びて美くしきものに喩ふ。北史、陸凱傳「見ニ其兄弟一歎曰、僕以ニ年老一、更覩ニーー一」＝雙珠。

【雙眸】兩方のひとみ。世說「ーー閃閃、若ニ巖下電一」＝雙眼。

【雙翼】ふたつのつばさ。劉楨詩「鳴鸞弄ニーー一、飄飄薄ニ靑雲一」＝雙翅。

【雙鯉】てがみをいふ。古樂府「客從ニ遠方一來、遺ニ我ーー魚一、呼レ童烹ニ鯉魚一、中有ニ尺素書一」より出づ。＝雙魚・尺牘。

【雙麗】ふたつ竝びてかかる。左思、魏都賦「日不ニーー一、世不ニ兩帝一」

【雙六】雙陸に同じ、すごろく。

【雙淚】兩眼より出るなみだ。許渾詩「二毛梳上雪、ーー枕前冰」＝雙涕。

【雜】サフ ゾウ 合 通音ザツ 本、襍に作る

〇まじる、まじはる（糅）「糅ー」純の對。〇いりみだれる（紛亂）「紛ー」「亂ー」「錯ー」後漢書「上下僭ー」〇五色が相合ふ。易、坤卦「夫玄黃者、天地之ー也」〇まだら（斑）淮南子「貂裘而ー」〇あつめる（聚）〇はさまる（廁）混入する「混ー」〇こまかし（細碎）易、繫辭「其稱レ名也、ー而不レ越」〇くだくだし（煩數）「煩ー」〇あらし（麤）「蕪ー」「粗ー」

【雜巾】國板の間などをふく布。

【雜仕】國雜多の用をつとめる召使人。

【雜兵】身分賤しき兵卒。＝雜卒。

【雜英】いろいろの花。謝朓詩「喧鳥覆ニ春洲一、ーー滿ニ芳甸一」＝雜芳。

【雜詠】いろいろの事物を詠じたる詩歌。＝雜吟。

【雜徭】いろいろの賦役。舊唐書、楊炎傳「其租庸ーー悉省」元史、世祖紀「詔免ニ儒戶ーー一」

【雜役】こまごましきしごと。

【雜家】種種の學說を取捨折衷して一家の言を立てたる學派。漢書、藝文志「ーー者流、蓋出ニ議官一、兼ニ儒墨一、合ニ名法一」

【雜考】種種の事柄を考究する。又、其の書。

【雜感】さまざまと心に感ずる。

【雜伎】いろいろの遊戲のわざ。芝居・相撲・手品など。＝雜技。

【雜記】〇いろいろの逸事などを記錄せしもの。〇いろいろとりまぜて記せしもの。＝雜錄。

【雜學】種種の說を混じたる雜駁なる學問。尉繚子「野物不レ爲ニ犧牲一、ーー不レ爲ニ通儒一」

【雜僞】正しからぬものをまじふ。唐書、禮樂志「漢興六經在者皆錯亂、散亡ーー、而諸儒方共補緝以レ意、解詁未レ得ニ其眞一」

【雜戲】いろいろのあそび。陳子昂詩「雲鳳休徵滿、魚龍ーー來」

【雜畜】いろいろの家畜。唐書、百官志「駕部員外郞、掌ニ廏牧馬牛ーー之籍一」

【雜居】いりまじりてをる。魏書、顯宗傳「分ニ別士庶一、不レ令ニーー一」

【雜魚】種種まじりたる小魚。

【雜貨】種種の貨物。又特に小間物・荒物類をいふ「ーー商」

【雜課】いろいろのかかりもの。

【雜玩】種種のもてあそびもの。南史、陳文帝紀「金銀珠玉、衣服ーー、悉皆禁斷」

【雜劇】しばゐの類。古今詩話「山谷云、作レ詩如レ作ニーー一」＝演劇。

【雜業】一定せざるつまらぬしごと。史、貨殖傳「佗ーー不レ中ニ什二一、則非ニ吾財一也」

【雜言】〇いろいろのつまらぬはなし。陶潛詩「相見無ニーー一、但道桑麻長」＝雜談。〇國いろいろとののしる「惡口ーー」

【雜貢】色色のみつぎもの。陳陶、擊壤歌「ーー來山峙、羣夷入雁行」

【雜坐】入りまじりてすわる。史、淳于髡傳「州閭之會、男女ーー」

【雜碎】わづらはしくこまかし。後漢書、仲長統傳「百家ーー、請用從レ火」

【雜綵】〇くさぐさのあやぎぬ。晉書、石勒載紀「穀一石、ーー四十匹」〇五色の色どり。晏子「身服不レーー」

【雜草】いろいろのつまらぬ草。江淹、松木頌「翠木斂レ翠、ーー不レ窺」

【雜錯】いりみだれる。南都賦「巾帽鮮明、被服ーー」＝錯雜・雜糅。

【雜纂】いろいろのものをかきあつめる。又、そのあつめたる書。西淸詩話「李義山ーー、品目數十」

【雜史】一事の始末。又、一時の見聞を記錄せしもの。又、私人の手に成りし史傳類。

【雜施】ごたごたと敎へ授ける。禮、學記「ーー而不レ孫、則壞亂而不レ修」

【雜誌】〇いろいろの事をかきのせたる書物。＝雜志。〇定期に發行する小冊子。

【雜廁】いりこみてまじる。論衡「善惡ーー、何世無レ有」

【雜襲】ごたごたと多くかさなる。漢書、蒯通傳「雲合霧集、魚鱗ーー」

【雜掌】國〇古、宮中の雜事を取

扱ひし小役人。○傳奏家の家長。
【雜聚】いろいろまじりあつまる。戴表元詩「叢市一一本無レ算」
【雜種】○いりまじれる種類、あいの子。後漢書、度尙傳「尙躬率二部曲一、與同二勞逸一、廣募二一一諸蠻夷一、明設二購賞一進擊」○異れる種族を罵りていふ。陔餘叢考「俗罵レ人曰二一一一、曰二畜生一」
【雜種稅】商工業の外の營業に課する地方稅、舟・車・劇場稅など。
【雜樹】種種まじりたる樹木。ざふき。方千詩「澄潭徹底齊二心鏡一、一一含レ芳讓二錦茵一」＝雜木。
【雜書】○いろいろとりまぜて書き載せたる書物。○所說雜駁にして分類し難き書物。
【雜處】いりまじりてをる。漢書、高帝紀「粵人之俗、好相攻擊、前時秦徙二中縣之民南方三郡一、使下與二百粵一一一上」＝雜居。
【雜色】○種種いりまじれる色。梁簡文詩「一一崑崙水」○奴隸。北史、齊文宣紀「一一徒隸之徒」○國古、藏人所に屬して雜役に服する者。又走り使に供する中間足輕の類。
【雜稅】いろいろのとりたてもの。南史、宋武帝紀「東境去歲不レ稔(中略)遠近販二鬻米粟一者、可レ停二道中一一一」
【雜擾】秩序なくみだれる。書經、疏「三苗亂レ德、民神一一」
【雜說】雜多の事を說き明かしたる論說。又、其の文章。漢書、藝文志「漢興魯申公爲二詩訓故一、而齊轅固・燕韓生皆爲二之傳一、或取二春秋一、采二一一一、咸非二其本義一」
【雜然賦二流形一】天地間の萬物がいりまじりて各其の形態性狀を天より受けてゐる。文天祥、正氣歌「天地有二正氣一、一一一一一」
【雜組】組は東海に產するものにて、組卽ち五色のくみひもに似たり。因りて諸種のことを書きあつむる義「酉陽一一」
【雜卒】身分いやしき兵。＝雜兵。
【雜多】いろいろさまざま。
【雜體】いろいろまじりたるかたち。法書要錄「右軍草行一一如二淸風出レ袖、明月入一レ懷」
【雜鬧】こみ合ひてさわがし。
【雜沓】人がこみあふ。左思、蜀都賦「輿輦一一、冠帶混幷」
【雜遝】ごたごたと、まじはりかさなる。漢書、劉向傳「周文開レ基、西郊一一」潘岳賦「長幼一一以交集」
【雜談】よもやまのはなし。＝雜言。
【雜糅】いりまじる、糅も雜。國語「民神一一、不レ可二方物一」
【雜著】文體の名。文體明辯「按、一一者、詞人所レ著之雜文也、以二其隨レ事命一レ名不レ落二體格一、故謂二之一一一、然稱レ名雖レ雜、而其本二乎義理一、發二于性情一、則自有レ致二一之道一焉」
【雜調】いろいろのみつぎもの。北史、魏文成帝紀「比年以來、一一減省、而所在州郡咸有二逋懸一」
【雜念】いろいろ雜多なるかんがへ。＝雜慮・雜感。
【雜報】世間のさまざまの出來事のしらせ。
【雜駁】ごたごたといりまじる。
【雜木】いろいろまじれる立木、ざふ木。宋史、李昭遘傳「桂林之下無二一一、非二虛言一也」＝雜樹。
【雜務】雜多なるこまかきつとめ。
【雜用】○いろいろのごたごたしたる用事。○いろいろのこまかき費用。＝雜費。
【雜亂】いりまじりみだれる。＝雜糅・亂雜。
【雜流】○九品官に入らざる等外の役人。＝未入流。○工商の類。唐書、曹確傳「工商一一」
【雜慮】雜念に同じ。
【雜料】いろいろのあてがひ。唐書、楊綰傳「故事舍人年久者、爲二閣老一、其公廨一一、獨取二五之四一、至レ綰悉均給レ之」
【雜話】いろいろのはなし「駿臺一一」＝雜談。

【雛】ス　虞　通音 スウ
○ひな、ひよこ、雞の子。又、廣く鳥の子「鳳一」○轉じて廣く幼少にして未だ一人前にならざる者の稱「一僧」「一妓」○小兒。杜甫詩「桑一爛漫睡」○國ひな、ひひな、人形。
【雛妓】國おしゃく、半玉。
【雛禽】ひなどり。晉梁文「一一乳鹿、往往哼二荒顚一」
【雛形】○ひながた、物の原形に依り、縮小して模型とせし者。建築の繪圖、人體の塑像など。○書式。
【雛鷇】ひなどり。管子「不レ瘋二一一」
【雛僧】こぞう。
【雛孫】をさなきまご。李商隱文「稚子一一、滿二吾懷抱一」
【雛鳳】佳き子弟に喩ふ。李商隱詩「桐花萬里丹山路、一一淸二於老鳳聲一」＝鳳雛。

【雝】㊀ヨウ　㊁ヨウ　腫　多　宋
㊀やはらぐ(和)「肅一」＝雍。○一一は雁の和げる聲。㊁おほふ(蔽)詩、小雅「無レ將二大車一、維塵雝兮」○ふさぐ。＝壅。
【雝渠】鶺鴒の異名〔爾雅〕
【雝雝】○やはらぎ樂む貌。詩、周頌「有レ來一一」＝雍雍。○雁の和げる聲。詩、邶風「一一鳴雁」

【雘】㊀ワク　㊁コ　藥　遇
㊀あかつち(丹土)しんしゃ(辰砂)水銀と硫黃との化合物。顏料又屋壁の塗料とす(善丹)「丹一」㊁あかし(丹)赤色。

十一畫

【難】㊀ダン・ナン　㊁ダン・ナン　㊂ダ・ナ　寒　翰　歌
㊀かたし、むづかし。易の對。○かたしとす、かたんず。書、皐陶謨「惟帝其難レ之」○かたきこと、むづかしきこと。孟、離婁「責二一於君一」㊁うれひ、心配(患)「患一」「憂一」○くるしみ(苦)「災一」「困一」「多一」「危一」「厄一」○おそれはばかる(畏憚)史、貨殖傳「一二動搖一」○かたし。○あた(仇讎)互に相敵する。○なじる(詰)せむ(責)孟、離婁「於二禽獸一又何一焉」○ふせぐ、こばむ(拒)書、舜典「一二任人一」はばむ。○みだれ(兵亂)「國一」「殉一」㊂盛んなる貌。詩、小雅「其葉有レ一」○おにやらひ。禮、月令「季冬命二有司一大一」＝儺。
同訓異義　難・惱・悔・艱・阻・屯等の別は惱(六八四頁一段)の條を見よ。
【難易】かたきと、やすきと。老子「有無相生、一一相成」
【排レ難解レ紛】人の爲めに困難と紛議とを除く。史、魯仲連傳「爲レ人一一一、而無レ取也」
【難解】わかりにくし、さとり難し。法華經「其智慧門、一レ一難レ入」
【難解難入】佛法華の法理の幽玄にして悟入し難きをいふ。前條參看。
【難航】舟をやりがたし。梁元帝、離合詩「䆮定方無レ遠、合浦不レ一レ一」
【難艱】なんぎ、むづかし。＝苦勞・艱難。
【難疑】不可なる點を非難し、又疑はしきことをたづね問ふ。
【難儀】國○むづかし。○まづしくくるしむ。＝貧乏・困窮。
【難詰】むづかしくなじり問ふ。後漢書、戴憑傳「更求二一一、義有レ不レ通、輒奪二其席一」
【難行】佛身心を苦めて行ふ。佛道修行の容易ならざるをいふ。法華經「一一苦行、積功累德、求二菩薩道一」
【難行道】佛自己の力によりて佛果を得る道、自力本願。他力による念佛往生の行ひ易き淨土門を易行道といふの對〔毘婆娑論〕
【難局】きりぬけ難き出來事。又、其の場合。局は事局。
【難句】むづかしき文字をならべたる句。蘇軾詩「淵源皆有レ考、奇險或一一」
【難訓】漢字の訓のよみ難きもの。
【難關】○通るにむづかしき門。又せきしょ。○きりぬけ難き境遇に喩ふ。
【難經】二卷、周の秦越人撰す、內經の旨を發明して詞義古奧、其の一一といふは難問を設けて說明するを以てなり。
【難月】らみづき。儒門事親「臨二一一病レ喘」＝臨月。
【難險】○けはしく行きがたし。＝險難・難阻。○はなはだむづかし。＝困難。
【難攻不落】國攻め難くして陷れ難き要害の地。
【難困】くるしみ。班固賦「御レ雄乘レ險、一一不レ違」＝困難。
【難產】國むづかしく、苦しきおさん。
【難字】むづかしく讀みにくき文字。春渚紀聞「其人頗識二一一一」
【難澀】國○行きしぶる。○すらすらと進まず。○まづし。＝貧困。
【難處】難險にして行き難き處。史、河渠書「時有二一一一」
【難色】かたしとするかほいろ。むづかしく引受け難しとするやうす。魏志、杜夔傳「有二一一一」
【難船】國船が暴風雨に遇ひ、又暗礁等にのりあげて、破れ又、覆る。又其の船。＝難破船・翻船。
【難阻】けはしく行き難し。＝難險。
【難素】難經と素問と。二書は古の醫書。金史、方伎傳「張從正精二於難素之學一」
【難陀】佛○八大龍王の一。＝難陀跋難。○釋迦の異母弟、歡喜と譯す、釋迦に隨ひて得道す。＝難陀尊者。
【難レ耐】たへ忍びがたし。五代史、史弘肇傳「弘肇不レ喜二賓客一、嘗言文人一レ一、呼レ我爲レ卒」
【難題】○むづかしき問題。後村題跋「取二古人一一一軼事一」○國人の出來難きことを强ふる。
【難治】○民がをさめにくし。○病がなほりにくし。
【難中之難】多くのむづかしき事の中にて最もむづかし。无量壽經「若聞二斯經一、信樂受持、一一一一、无二過レ此難一」
【臨レ難】臨難又は兵亂などにあふ。曲禮「一レ一母二苟免一」晏子春秋「猶二一レ一而遽鑄レ兵」兵は武器。
【難破】國難船して船がやぶれる。
【難駁】非難して反對する。晉書、和嶠傳「論議一一」
【難風】船の進むをさまたげる風。
【難問】○疑ひて問ふ。後漢書、和

兼鄧后紀「諸兄毎ㇾ讀ニ經傳ー、輒下ㇾ意ーー」＝疑問。○むづかしきとひ。

【離】㊀リ 支 ㊁チ 支 ㊂リ 紙 ㊃リ 寘
㊀はなる。はなす、ばらばらになる。○とほざく。とほざかる（遠）○わかつ。わかれる（分・別）「分ー」「ー別」近きをー、遠きを別といふ。○分ける、絶つ。禮、學記「ー經」（經書の句讀をきる）○ひらく（開）思玄賦「ー」朱脣ニ而微笑兮」さく（割）○つく。麗と音通。○あきらか（明）○あふ（遭）かかる（羅）遭遇する「ー騷」張衡、思玄賦「循ニ法度ニ而ー」殃」○ふ（歷）○ふたつ、ならぶ（兩）禮、曲禮「ー坐ー立」○すぐ（過）○さる（去）○つらぬ（陳）左、昭元「設ㇾ服ー衛」（盛んなる服飾をなし護衛兵をつらねる）つら（列）○ちる。ちらす（散）○たがふ（違）そむく（畔）○みなみ（南）○かき、かこひ（藩蔽）＝籬。○ーーは親しまざる貌、遠ざかる貌。又、實の垂れる貌。雲の長く續く貌。○陸ーはいりまじりて衆き貌。又、美好の貌。又、分散する貌。○流ーはさすらひて其の所を得ざる貌。又、琉璃リルと通ず。○かほよぐさ（芍藥）○せんきうのなへ（蘼蕪）「江ー」○おほごと（大琴）○易の卦の名。○ー黄はうぐひす。＝鸝・倉庚。㊁みづち。螭に通ず。㊂ー䍦は相連りて絶えざる貌。㊃さる（去）中庸「道也者、不ㇾ可ニ須臾ーㇾ也」はなる。○ー支は果の名、即ち荔支。

【離殃】リアウ わざはひにかかる。思玄賦「循ニ法度ニ而ーㇾー」

【離憂】リイウ うれへにかかる。史、屈原傳「離騷猶ニーー也」

【離宴】リエン わかれのさかもり。＝離筵・離酌・別筵。

【離筵】リエン わかれのさかもり。宋之問詩「羽客笙歌此地違、ーー數處白雲飛」＝離宴。

【離縁】リエン 夫婦のえんを切る。＝離婚。

【離歌】リカ わかれを送るうた。＝離曲・驪歌。

【離隔】リカク はなれへだてる。曹植賦「感ニーー兮會无ㇾ期」

【離合】リガフ はなれると、あふと。杜甫詩「人生有ニーー」＝合離・聚散。

【離閒】リカン なかたがひをさす。顏氏家訓「惨ニ虐孤遺ー、ーニー骨肉ー」＝讒閒。

【離奇】リキ ○まがりねぢれてゐる、委曲盤戾の貌。鄒陽、獄中上書「蟠木根柢、輪囷ーー」○轉じて事の常軌にしたがはざる義とす。

【離棄】リキ みはなしすてる。南史、張邵傳「親故皆ーニ之ー」

【離襟】リキン 人にわかれるおもひ。韋莊詩「半年江上愴ニーー、把ニ得新詩ー喜又吟」

【離宮】リキウ 天子のおしもやしき。漢書、賈山傳「起ニ咸陽ー而西至ㇾ雍、ー三百」＝行宮。

【離曲】リキョク 離歌に同じ。

【離羣索居】リグンサクキョ 朋友の羣をはなれて獨り居る、索は散。禮、檀弓「吾離羣而索居亦已久矣」

【離會】リクワイ わかれると逢ふと。鮑照詩「哀樂生有ㇾ端、ーー豈無ㇾ因」

【離經】リケイ ○經書の句讀を斷絶して其の意を解釋する。禮、學記「一年視ニーーㇾー辨ㇾ志」○俗に經書を説きて正義に背く者をーー叛道といふ。

【離恨】リコン 人とわかれるうらみ。李白詩「明晨掛ニ帆席ー、ーー滿ニ蒼波ー」＝別恨・離愁。

【離魂】リコン 旅人の夢中のたましひ。韋莊詩「旅夢亂隨ニ蝴蝶ー散、ーー漸逐ニ杜鵑ー飛」

【離魂病】リコンビヤウ 睡眠中、起き出でて或動作をなし目さめし後、其の事を知らざる一種の精神病。＝夢遊病。

【離婚】リコン 夫婦のえんをきる。晉書、羊祜傳「不ㇾ能ニーーー」＝離縁。

【離坐】リザ 兩人相並びてすわる。曲禮「ーー離立、毋ニ往參ー焉」

【離騷】リサウ ○うれひにあふ、騷は憂。○同上の意味にて楚の屈原が作りし韻文の名。楚辭の起源を開きしもの。

【離散】リサン はなればなれになる。孟、梁惠王「父母凍餓、兄弟妻子ーー」

【離思】リシ 人とわかれ居る悲しきおもひ。潘岳詩「何以敍ニーーー」

【離貳】リジ 異心をいだきてはなれそむく。後漢書、列女傳「命之所ㇾ遭、義無ニーーー」北史、周太祖紀「左右不ニ自安ー、衆遂ーー」＝離叛。

【離愁】リシウ 人とわかれるかなしみ。眞山民詩「櫓聲搖ニ客夢ー、帆影掛ニーーー」＝離恨。

【離心】リシン 心をはなしそむく。魏志、荀彧傳「今紹敗、其衆ーㇾー、宜下乘ニ其困ー遂定上ㇾ之」＝叛心・異心。

【離酌】リシャク わかれのさかもり。白居易詩「樓中別曲催ニーーー」

【離酒】リシュ わかれの酒もり。方干詩「交情如ㇾ水淡、ーー泛ㇾ盃寛」

【離聚】リシュ はなれると、あつまると。劉孝威詩「浮芥離還聚、浴漚滅復張」

【離朱之明】リシュノメイ 離朱は古の明目者、日のよく見ゆるにいふ。離朱は即ち離婁。愼子「ーー、察ニ毫末於百歩之外ー、下ㇾ水尺不ㇾ能ㇾ見ニ淺深ー、非ニ目不ㇾ明、其勢難ㇾ覩也」

【離礁】リセウ 暗礁にのりあげし船がはなれて浮き上る。

【離析】リセキ はなれわかれる。論、季氏「邦分崩ーー、而不ㇾ能ㇾ守也」＝分裂。

【離籍】リセキ 戸籍面より名籍を除き去る。

【離石卿侯】リセキケイコウ 硯リスズの異名。

【離俗】リゾク 世の俗事をはなれる。淮南子「單豹倍ㇾ世ーㇾー、巖居谷飮」

【離亭】リテイ 旅だつ人を送るざしき、離別の席。陳子昂詩「片雲生ニ極浦ー、秋月隱ニーーー」＝離筵。

【離逖】リテキ ○とほざかる。書、多方「我則致ニ天之罰ー、ーニー爾土ー」○はなしとほざける、逖ははるか。晉書、長沙王乂傳「遂ニ其讒慝ー、ーニー骨肉ー」

【離杯】リハイ わかれのさかづき。＝別杯。

【離背】リハイ 心をはなしそむく。詩經、疏「以ニ申伯忠臣ー、不ㇾ欲ㇾーニー王室ー」＝離叛。

【離判】リハン はなれわかる。國語「七德ーー、民乃攜貳」

【離叛】リハン 心をはなしそむく。淮南子「ーー者寡而聽從者衆」＝離背・離貳。

【離畔】リハン はなれそむく。＝離叛。

【離披】リヒ 枝葉又花がばらばらにはなれ開く。又花が十分に開く。李商隱詩「人世本來多ニ聚散ー、紅蕖何事亦ーー」

【離靡】リビ つらなりて絶えざる貌。司馬相如、上林賦「ーー廣衍」

【離別】リベツ ○人とわかれる（近きを離といひ、遠きを別といふ）陸龜蒙詩「丈夫非ㇾ無ㇾ涙、不ㇾ灑ーー閒」○圖離婚。

【離落】リラク そむきさる。吳語「甲兵鈍弊、民人ーー」

【離離】リリ ○心がはなれて親まざる貌。荀、非相「ーー然」○裂けみだれる貌。楚辭「心ーー兮」○禾穗の秀でて垂れる貌。詩、王風「其實ーー」○ばらばらにみだれて繁る貌。詩、王風「彼黍ーー」○雲の長く續く貌。張衡、思玄賦「曳ニ雲旗之ーーー」

【離淚】リルイ 人とわかれる時のなみだ。樂府、華山畿曲「ーー溢ニ河漢ー」＝別淚。

【離婁之明】リロウノメイ 離朱之明に同じ。孟、離婁「ーー、公輸子之巧」

雨部

【雨】㊀ウ 麌 ㊁ウ 遇
㊀あめ「急ー」「驟ー」「猛ー」「時ー」「淫ー」易、乾卦「雲行ー施、品物流ㇾ形」○ー水・穀ーは並に二十四氣の一。㊁あめふる、雨を下す、ふる。孟、滕文公「詩云、ー我公田ー」○ふらす、すべて天空より降る「ー雪」「ー灰」

【雨蛙】ウア あまがへる。＝雨兒・青蛙。

【雨衣】ウイ かっぱ・みのなどのあまぐ。許渾詩「自覇ニ青莎ー織ニーーー」

【雨意】ウイ あまもやう。晁補之詩「巢居識ニ風雨ー、穴藏知ニーーー」

【雨下】ウカ ○あめがふる。後漢書、光武紀「ーー如ㇾ注」＝降雨。○雨注に同じ。

【雨季】ウキ 一年中、最も多く雨のふる時節。＝雨期。

【雨祇】ウキ あめのかみ。謝莊文「驚ニ福兵ー而開ㇾ雲、先ニーー而洒ㇾ路」＝雨師。

【雨氣】ウキ あまけ。素問「谷氣通ニ於脾ー、ーー通ニ於腎ー」＝雨意。

【雨期】ウキ 雨季に同じ。

【雨久花】ウキウクワ みづあふひ。水澤に生ずる一年生草。

【雨奇晴好】ウキセイカウ 晴雨ともに景色佳し。蘇軾詩「水光瀲灩晴方好、山色空濛雨亦奇」＝晴好雨奇。

【雨泣】ウキフ なみだの雨の如く下る義。曹植文「延ㇾ首歎息、ーー交ㇾ頸」＝雨淚。

【雨脚】ウキャク あめのあし。杜甫詩「出ㇾ門復入ㇾ門、ーー但如ㇾ舊」＝雨足。

【雨虐風饕】ウギャクフウタウ 雨はしへたげ、風はむさぼる。饕は貪、風雨に苦しめられる形容。

【雨具】ウグ あまぐ、みの・かさの類。史、仲尼弟子傳「昔夫子當ㇾ行、使ニ弟子持ニーーー、已而果雨」

【雨過天青】ウクワテンセイ 雨の新に霽れたる空の色〔謝在杭、文海披沙記〕

【雨後】ウゴ あまあがり。李俊民詩「ーー鱗鱗漲ニ鴨頭ー」＝雨餘。

【雨穀】ウコク 穀物をふらす。後漢書、光武紀「陳留ーㇾー、如ニ稗實ー」

【雨矢】ウシ あめの如く矢を降らす。唐書、柴紹傳「紹軍ーー、士失ㇾ色」

【雨兒】ウジ あまがへる、形小さく、色青く、降雨の前に鳴く蛙。＝雨蛙。

【雨施】ウシ あめふりて物をうるほす。易、乾卦、上彖「雲行ーー、品物流ㇾ形」

【雨師】ウシ あめのかみ。畢星をいふ。韓非子「風伯進掃、ーー灑ㇾ道」

【雨集】ウシフ ○雨の水があつまる。孟、離婁「七八月之閒、ーー、溝澮皆盈」○雨の如くに多くあつまる。後漢書、彭修傳「競交射ㇾ之、飛矢ーーー」

【雨濕】ウシフ あめ降りてしめる。王維詩「草色全經ニ細雨ー濕」

【雨潤】ウジユン 雨にてうるほす。易、說卦「雨以潤ㇾ之、日以晅ㇾ之」＝雨沾。

【雨水】ウスヰ ○あまみづ。○二十四氣の一、立春の次、陽曆二月十八日に當る。禮、月令「仲春之月、始ーー、桃始華、倉庚鳴」倉庚は鶯。

【雨聲】ウセイ あめのふるおと。杜甫詩

「一一殿閣催二早寒一」

【雨雪】○雪をふらす。ふるゆき。詩、小雅「相二彼一一、先集維霰」（雪のふる前には先づあられがふる。何事も突然に來るものにあらざる喩）○あめとゆきと。高適詩「近レ隔多二一一、出レ塞有二風塵一」

【雨前】○穀雨（二十四氣の一）の前。○又其の時に采りし茶の名。學林新編「茶之佳者、造在二社前、其次火前、其次一一」社は春の社日、火は寒食。

【雨足】あまあし。孟浩然詩「夕陽連二一一、空翠落二庭陰一」＝雨脚。

【雨レ粟】もみをふらす。淮南子「昔蒼頡作レ書而天一レ一、鬼夜哭」注「書契成、詐僞萌生、天知二其將レ餓、故爲一レ一」

【雨澤】あめそそぐ。李華詩「一一二萬木一鮮、霞照二千山一濃」

【雨中】あめの降るなか。王維詩「雲裏帝城雙鳳闕、一一春樹萬人家」＝雨裏。

【雨注】矢石などが雨の如くそそぐ。呉志、朱然傳「弓矢一一、將士皆失レ色」＝雨下。

【雨滴】あまだれ。禮、月令、疏「日照二一一則虹生」＝雨點・點滴。

【雨天】あまぞら、あめのふるそら。杜荀鶴詩「忽地晴天作二一一、全無二暑氣一似二秋聞一」＝階下雨的天。

【雨點】あまだれ。李益詩「長樂花枝一一銷」＝雨滴。

【雨雹】ひょう（冰雨）をふらす。左、昭四「大一レ一」

【雨霧】あめと、きりと。西京雜記「噓吸爲二寒暑、噴嗽爲二一一」

【雨沐】○雨にうたれてぬれる。劉因文「雲開山色、一一秋容」○あめにて髮をあらふ、雨を冒して勤苦するにいふ。劉宰、石翁姥詩「人歸人去我何心、一一風餐人自老」＝沐雨。

【雨暘】雨は雨天、暘は晴天。書、洪範「曰雨、曰暘、曰燠、曰寒」

【雨餘】あまあがり。梁簡文帝詩「一一雲稍薄」＝雨後。

【雨潦】あまみづ。唐書、韋見素傳「天寶十三載、玄宗苦二一一」

【雨裏】あめのふるなか。盧綸詩「一一花枝朝暮開」＝雨中。

【雨笠煙蓑】煙雨を帶びたる笠と、みのと。漁父などの形容。陳泰、漁父詞「君不レ見長安康莊九復九、一一雖レ入レ手」＝煙蓑雨笠。

【雨淋鈴】樂曲の名。唐の玄宗が安祿山の亂を避けて蜀に幸せらるる途中、寵姫楊貴妃を誅し、後、蜀の棧道に入り、鈴聲と雨聲と相應ずるを聞きて貴妃を追念して作られし普曲（明皇別錄）＝雨霖鈴曲。

【雨量】雨の地面に降りし分量。

【雨龍】あまりょう、龍の類にて角なく、とかげに似たり。＝螭龍。

【雨涙】なみだくだりて雨の如し。洛陽伽藍記「發レ言一一、哀不二自勝一」

【雨露】○あめと、つゆと。禮、祭義「春一一既濡」○大いなる恩澤。雨露の萬物をうるほすに喩ふ。高適詩「聖代卽今多二一一」謝枋得、卻聘書「某與二太平草木、同沾二聖朝之一一」

【雨一犂】犂はすき、一と犂耕すに都合よきほどのあめ。馮辰詩「東風花外鵓鳩啼、喚起西山一一一」

【冒レ雨翦レ韭】雨をも畏れず、にらを翦りて、來客を款待する、友情の厚きにいふ、韭は韮。郭林宗別傳「林宗有二友人、夜冒レ雨至、翦レ韭作二炊餅一食レ之」

【雨收】雨がやむ。柳宗元、馬退山茅亭記「每二風止一一、煙霞澄鮮」＝雨歇。

【雨昏】雨天にてくらし。鄭谷、鷓鴣詩「一一青草湖邊過、花落黃陵廟裏啼」

【雨催レ詩】雨が詩を作らんとする心を催し起す。杜甫詩「片雲頭上黑、應二是雨催レ詩」

【雨如二車軸一】大雨の形容、軸は車の心木、長阿含經「澍降二大雨、滴如二車軸一」

【雨不レ破レ塊】あめがゆるやかに降る、太平の象とす。鹽鐵論「太平之時、一一一一、而一雨必以レ夜」

【沐レ雨櫛レ風】風雨にさらされて勤苦する。莊、天下「昔者禹之湮二洪水、決二江河、而通二四夷九州一也、腓無レ胈、脛無レ毛、沐二甚雨、櫛二疾風、置二萬國一」

【雨傾レ盆】雨の盛んに降る形容。蘇軾詩「雨巳傾レ盆落、詩仍翻レ水成」＝雨翻レ盆。

【雨歇】次條に同じ。常建詩「一一楊林東渡頭、永和三日盪二輕舟一」＝雨止・雨收。

【雨罷】雨がやむ。梁元帝詩「波橫山影渡、一一葉生レ光」＝雨歇・雨收。

四畫

【雩】ウ　虞

○あまごひ（請雨祭）左、桓五「龍見而一」龍は蒼龍星。○舞一は雨乞の祭をする場所。論、先進「風乎舞一、詠而歸」

【雩祭】あまごひのまつり。春秋繁露「大旱、一一而請レ雨」

【雪】セツ　屑

○ゆき（凝雨）空中の水氣のこほりて降るもの「白一」「積一」「殘一」「深一」「曉一」「密一」埤雅「一六出而成レ華」＝六花。○すすぐ（刷の轉音）あらふ（洗）洗ひ清める「洗一」○はらふ（除）○ぬぐふ（拭）○白色の義に借用す「一肌」○梨一はなしの花の形容。○香一は白くして芳香ある花の形容。○大一・小一は並に季節の名。

【雪案】ゆきのつくゑ、晉の孫康の雪の光にて讀書せし故事により、て、苦學する義。劉克莊詩「雨簷兀坐忘二春去、一一清談至二夜分一」袁凱詩「暝歸一一同溫習、映レ雪讀レ書」を見よ。

【雪意】ゆきもやう、ゆきぞら。朱德潤詩「一一屏山欲レ放レ梅」

【雪衣兒】鷺の異名。湧幢小品「陸龜蒙、鷺號二絲禽、東坡號二一一一」

【雪衣娘】白き鸚鵡の異名。明皇雜錄「開元中、嶺南獻二白鸚鵡、養二之宮中、頗聰慧洞二曉人言、上及貴妃皆呼二一一一」

【雪隱】かはや、便所。雪峯禪師常に此に在りて掃除のことを執りしによりていふ。烏瑟沙摩經註「福州雪峯義存禪師、常住掃除、於レ是大悟、故名矣」一說、雪竇禪師が靈隱寺の淨頭卽ち便所の掃除を掌る役なりし故にいふ。

【雪冤】無實の罪をそそぎ清める。青天白日の身となる。白居易詩「一一多定國、犯諫甚辛毗」

【雪香冰魂】梅の異名。

【雪客】鷺の異名。楊文公談苑「鷺曰二一一一」

【雪蕊霜葩】梅の異名。

【雪肌】しろく清きはだへ。蘇軾詩「洗二盡鉛華一見二一一」＝雪膚。

【雪仇】かたきをうち恥をすすぐ。魏志、蔣濟傳「昭王恤レ病以一レ一」

【雪虐】雪にしひたげられる。陸游、梅花詩「幽香淡淡影疏疏、一一風饕亦自如」

【雪宮】戰國の時、齊國の離宮の名、齊の宣王、孟子を一一に見る。其の故址、山東省臨淄縣の東北に在り。

【雪魚】鱸に似て稍扁平、色白くして雪の如し、冬月方に出で味腴美、福建に產す（閩雜記）

【雪君】梅の異名。

【雪花】○ゆきを花に喩へていふ。陳叔達詩「一一聯二玉樹一」＝雪華。○雪の如く白き花。溫庭筠詩「紅花初綻一一繁」

【雪花菜】豆腐のから、きらず、うのはな。

【雪月花】ゆきと、つきと、はなと。白居易詩「琴詩酒伴皆拋レ我、一一時最憶レ君」

【雪姑】せきれい。物類相感志「俗呼二鶺鴒一爲二一一、鳴則天當二大雪、又性好食レ雪、故名二一一一」

【雪後】ゆきのふりたるあと。岑參詩「長安一一似二春歸一」林逋、梅花詩「吟懷長恨負二芳時、爲レ見二梅花一輒入レ詩、一一園林纔半樹、水邊籬落忽橫斜」＝雪餘。

【雪骨】梅の異名。

【雪爪】しろきつめ。南唐近事「一一星眸衆鳥歸」

【雪山】西域の山の名、四時雪を戴けるによりて名づく。後漢書、班超傳、注「西域有二白山、通歲有レ雪、亦名二一一一」

【雪見】うたひめ。世說「一一者、唐李密之愛姫、能二歌舞、每レ見二賓朋有二文章奇麗、入レ意者、卽付二一一、叶二音律一以歌レ之、故號二一一歌一」

【雪肢】白き手足。楊維楨詩「一一欲レ透紅薔薇」

【雪鑒】しろき色のけごろも。劉禹錫詩「仙人掖二一一、素女不二紅妝一」

【雪上加レ霜】雪の上に霜を加へる。禍患の重り至る形容。傳燈錄「雪上更加レ霜」

【雪蘂】しろき花のしべ。白居易詩「一一瓊葩滿院春」

【雪然】雪の降るが如く、白鷺の飛び下る形容。陸龜蒙、白鷺詩「一一飛下立二蒼苔、應下伴二江鷗一拒レ我來上」

【雪線】地文學にて一年中常に雪のたゆることなき高所の限界線。

【雪髯】しろきひげ。白居易、閑容詩「冷落若爲留レ客住、冰池霜竹一一翁」

【雪駄】圓せきだ、草履の下に牛の皮を張りしはきもの。千利休が雪中に用ひしに始まる。＝雪蹈。

【雪堂】蘇東坡の築ける堂、大雪中に成り、雪を四壁に畫くが故。故址、湖北黃岡縣に在り。蘇長公年譜「公年四十七在二黃州、寓二居臨皐亭、就二東坡一築二一一、自號二東坡一」

【雪恥】はぢをすすぐ。史、越世家「今既以一レ一」＝洗辱・雪辱。

【雪中高士】梅の異名。高啓、梅花詩「雪滿山中高士臥、月明林下美人來」＝雪中君子。

【雪中君子】梅の異名。＝雪中高士。

【雪中四友】玉梅・臘梅・水仙・山茶の稱（月令廣義）

【雪中松柏】松柏は雪中にても其の色を變ぜず。人の節操に喩ふ。謝枋得詩「一一一一愈青青」

【雪中騎レ驢孟浩然】唐の詩人孟浩然が雪中に驢馬に乘りて詩を賦せし故事。蘇軾詩「又不レ見一一、皺レ眉吟レ詩肩聳レ山」

【雪涕】なみだを拭ふ。晉書、劉隗傳「入レ宮告レ辭、帝一レ一與レ之別」

【雪泥鴻爪】人生のはかなくして痕跡ののこらざるに喩ふ。蘇軾、和二子由一詩「人生到處知何似、應是飛鴻踏二雪泥、泥上偶然留二指爪、鴻飛那復計二東西一」

【雪滌】すすぎあらふ。宋書、何尙之傳「一二——素懷一」

【雪天】ゆきぞら。高適詩「——晝不レ開」＝釀レ雪天・欲レ雪天。

【雪洞】○風爐のおほひ〔茶經別錄〕○圀ぼんぼり。紙ばりの手燭。

【雪白】○雪の如くまっしろ。○性行の潔白に喩ふ。後漢書、宋宏傳「淸修——」

【雪魄】梅の異名。

【雪魄冰姿】花の潔白なるに喩ふ。無名氏、詠二茉莉一詩「冰姿素淡廣寒女、雪魄輕盈姑射仙」

【雪片】ゆき。杜甫詩「梅花萬里外、——一冬深」

【雪毛】しろきけ。元稹詩「——皓白紅贅殷」

【雪面】雪の如き白きかほ。楊炎詩「——淡眉天上女」

【雪裏淸香】梅の異名。

【雪嶺】○雪のつもれるみね。○四川省と西藏との境にある山脈。釋慧淨、雜言「沙河——迷二朝徑一」

【雪鷺】しらさぎ。元稹詩「——遠近飛、渚牙深淺出」

【含レ雪】窗より山に積れる雪を眺める形容。杜甫詩「窗含二西嶺千秋雪一、門泊二東吳萬里船一」

【雪消】ゆきがとける。許渾詩「湘潭雲盡暮山出、巴蜀——春水來」

【雪千堊】しらがの多き形容。白居易詩「孤舟萍一葉、雙鬢——」

【映レ雪讀レ書】雪の光にて讀書する。孫氏世錄「孫康家貧、常——、淸介交遊不レ雜」

【臥レ雪】雪中に臥する。後漢書、袁安傳、注「時大雪、積レ地丈餘、洛陽令自出按行、至二安門一、無レ有二行路一、謂安已死、令二人除レ雪、見二安僵臥一、問何以不レ出、曰大雪人皆餓、不レ宜レ干レ人」

【立レ雪】游酢・楊時の二子、雪夜に、程伊川の傍に侍立せし故事、弟子の師を重んずるの厚きをいふ。名臣言行錄「游酢・楊時來見二伊川一、一日先生坐而瞑目、二子立侍不二敢去一、久之、先生乃顧曰、二子猶在レ此乎、日暮矣、姑就レ舍、二子者退、則門外雪深尺餘矣、其嚴厲如レ此」＝程門立雪。

【雪郤輸二梅一段香一】宋人の句。盧梅坡、梅雪詩「梅雪爭レ春未レ可レ降、騷人擱レ筆費二平章一、梅須レ遜二雪三分白一、——」

【雪似二鵝毛一】雪の降る形容。白居易詩「——飛散亂、人被二鶴氅一立徘徊」

【雪豐年之兆】冬雪は來年豐作の前兆。詩、小雅、信南山「上天同雲、雨雪雰雰」毛傳「豐年之冬、必有二積雪一」謝惠連、雪賦「盈レ尺則呈二瑞於豐年一」

【雪擁二藍關一馬不レ前】雲橫二秦嶺一家何在を見よ。

【雫】ダ

しづく（點滴）

四畫

【雲】ウン

○くも、山川の氣の昇りて高處に至り凝りて霧狀を成してただよへるもの「白—」「靑—」「浮—」「陰—」「凍—」「夏—」易、乾卦「—行雨施」○雲の如く高き形容。又、高き所の義に用ふ「—車」○雲の如くに見えるもの「稻—」○—南は省名。

【雲遊】○雲中に遊ぶ。李益詩「夙駕昇レ天行、——恣二霞宿一」○雲の如く自由に遊ぶ。杜荀鶴詩「絣坐——出二世塵一」○雲があそぶ。宣和畫譜「豐筋多力、有二——雨驟之勢一」

【雲雨】○くもと、あめと。後漢書、鄧騭傳「託二日月之末光一、被二——之渥澤一」○男女のちぎりにいふ。宋玉、高唐賦「楚襄王夢二一婦一、曰、妾巫山女、朝爲二行雲一、暮爲二行雨一、朝朝暮暮、陽臺之下」に本づく。

【雲英】○きららの異名。本草「雲母、一名——、色多靑」○古の名妓の名。唐詩紀事「——、鍾陵妓」

【雲影】くものかげ。盧綸詩「——斷來峯影出、林花落盡草花生」

【雲翳】くものかげ。陸游詩「大空——終當レ散、吾道常如二日正中一」

【雲液】酒。白居易詩「——灑二六腑一」

【雲煙】○くもと、けむりと。劉孝孫詩「飛軒俯二松柏一、抗殿接二——一」○筆跡のみごとなる形容。杜甫詩「揮レ毫落レ紙如二——一」

【雲煙過眼】雲煙の忽ち目を過ぎ去る如く、一時の快を取りて長く心に留めざる意。蘇軾、寶繪堂記「譬二之煙雲之過レ眼、百鳥之感レ耳、豈不二欣然接レ之、去而不二復念一也」

【雲架】たかきやね。王鋋詩「——重樓出二郡城一」

【雲娥】天女。張華詩「——薦二瓊石一、神妃侍二衣裳一」

【雲霞】○くもと、かすみと。新序「——充咽、則奪二日月之明一」○圀多人數の形容「——の如く集る」

【雲罅】雲のきれめ、くもま。陸游、傳烽詩「初疑——星、又似山際電」＝雲閒。

【雲海】○くもの遙に橫はれるうなばら。沈佺期詩「何堪萬里外、——已冥茫」○雲におほはれたる山が其の頂上ばかり島の如く見える形容。宋之問詩「登レ高望不レ極、——四茫茫」

【雲行】○くもが空を行く。易、繫辭「——雨施、品物流レ形」○圀事のなりゆき、趨勢。

【雲客】○雲中の人、仙人など。水經注「是以林徒棲託、——宅レ心」○圀雲のうへびと、殿上人「月卿——」

【雲壑】雲のかかれる深き谷。孔稚圭、北山移文「誘二我松桂一、欺二我——一」

【雲合霧集】多くあつまる形容。史、淮陰侯傳「天下之士、——」

【雲漢】あまの川。詩、大雅「倬彼——、爲二章于天一」＝天河・天漢・銀漢。

【雲翰】他人の手紙の敬稱。朶雲（九一二頁四段）を見よ。＝雲箋。

【雲氣】雲の如くに空中にあらはれる氣。漢書、高祖紀「季所レ居上常有二——一」季は高祖の字。

【雲錦裳】美くしき錦の衣裳、雲錦は朝霞。太上飛行羽經「七色夜光——」蘇軾、潮州韓文公廟碑「天孫爲織——」

【雲脚】くもあし。杜荀鶴詩「半巖——風牽斷」

【雲衢】くものかよひぢ。王勃詩「蒼虬不レ可レ得、空望白——」＝雲路。

【雲臥】雲とねる。雲のかかる高山などに臥する。杜甫詩「天闕象緯逼、——衣裳冷」＝臥雲。

【雲外】くものうへ。元稹詩「遐想——寺、峯巒渺相望」＝雲表。

【雲鬟】○美人の髮を綠の雲に喩へていふ。阿房宮賦「綠雲之擾擾、梳二曉鬟一也」○うつくしきまげ。韋應物詩「高髻——宮樣粧」

【雲髻】女の髮の高く結べるをいふ。妝臺記「周文王於二髻上一加二珠翠翹花一、傅二之鉛粉一、其髻高、名曰二鳳髻一、又曰二——一、步步而搖、故曰二步搖一」

【雲霓】くもと、にじと。孟、梁惠王「若三大旱之望二——一也」＝雲蜺。

【雲卷】くもの如くにまく。晉書、王羲之傳「霞舒——、無レ所二閒然一」

【雲巘】くもを帶びたる高きみね。蘇軾詩「海門浸二坤軸一、湖尾抱二——一」

【雲根】石の異名。雲は石に觸れて生ずる故。賈島詩「過レ橋分二野色一、移レ石動二——一」

【雲彩】圀くも。＝雲。

【雲際】くものきは。岑參詩「昨夜——宿、旦從二西峯一回」＝雲邊。

【雲齋】圀綿布の地の厚き織物、足袋底などに用ふ。——は人名。

【雲山】くものかかれる遠く高き山。宋史、樂志「——浩浩歸二何處一、但聞空際綵鸞聲」

【雲棧】高く雲に入るかけはし。李賀、艮嶽賦「升二——一而心驚」

【雲散鳥沒】雲の如く散り鳥の如く沒する。＝雲消霧散。

【雲脂】ふけ、頭髮の根に生ずるあか〔五行記〕＝頭垢。

【雲輜】おほくの兵車。後漢書、竇憲傳「——蔽レ路、萬有三千餘乘」注「輜、車也、稱レ雲言二其多一也」

【雲岫】くものかかれる山のほら。歸去來辭「雲無レ心以出レ岫」蘇軾詩「——不レ知レ遠」

【雲集】くもの如く多くあつまる。後漢書、光武紀「四夷——」＝雲聚・雲屯。

【雲集霧散】忽ちあつまり忽ち散ずる形容。班固、西都賦「朝發二河海一、夕宿二江漢一、沈浮往來、——」

【雲心月性】無欲にして世の名譽利益を求むる心なきにいふ。孟浩然詩「野客雲爲レ心、高僧月爲レ性」

【雲車】○やぐらのつきたる高き車。後漢書、光武紀「——十餘丈、瞰二臨城中一」○くものくるま。杜甫詩「蓬萊織女廻二——一」

【雲榭】たかきうてな。陸龜蒙詩「幾多——倚二靑冥一」

【雲上】○くもの上。○圀宮中、禁裡。

【雲上人】圀くものうへびと。＝雲客・殿上人。

【雲翔】○分れ散る。戰國策「楚燕之兵——而不二敢校一」○そらをかける。曹植詩「九州不レ足レ步、願得二凌レ——一」○雲のかけまはる如くあちらにもこちらにも起る。後漢書、馮衍傳「兵革——、百姓震駭」○雲の如く早く走る。晉書、陳頵傳「於レ時大邦之衆、——電發」

【雲壤】雲と、つちと。韓偓詩「阡陌懸二——一、闌畦隔二艾芝一」＝天地・霄壤。

【雲驤】くものたかくあがる如く豪傑などの勢の強きをいふ。梁書、武帝紀贊「——雷駭、翦レ暴夷レ凶」

【雲雀】ひばり、雀より稍大いなる鳥、高く空中にのぼりつつ鳴く。＝告天子・天鷚。

【雲聚】雲の如く多くあつまる。王融、上二北伐圖一疏「瓊弁星離、玉鼎——」＝雲集。

【雲樹】くものかかる程たかき木。王維詩「塞迥山河靜、天長——微」

【雲仍】遠き子孫、仍はつぎ重なる。爾雅「昆孫之子爲二仍孫一、仍孫之子爲二雲孫一」

【雲蒸龍變】英雄の時運に會ひて起る形容。史、彭越傳「得二尺寸之柄一、——」

【雲水】○くもと、みづと。溫庭筠詩「飄然隨二釣艇一、——是天涯」○行脚僧、行雲流水の如くめぐり行くが故。豐干禪師詩「一身如二——一、悠悠任二去來一」＝雲水僧。

【雲水僧】あんぎゃそう。元好問詩「一瓶一鉢百無レ累、惜我不レ如二——一」＝雲僧。

【雲棲】世俗を脫して、雲深き處に住む。陸游、醉題詩「——酣飲未レ爲レ高、起舞行歌亦足レ豪」

【雲精】きらゝの異名。異物志「雲母、一名——、入地萬歲不朽」
【雲霄】○あをぞら。晉書、陶侃傳「志凌——」○高位に喩ふ。朱慶餘詩「——未得路、江海作閒人」
【雲擾】雲のみだれる如く大いにみだれる。漢書、敍傳「天下——」
【雲消霧散】雲の如くきえ霧の如く散り失せる。あとかたもなき形容。
【雲箋】うつくしきてがみ。陳逵詩「因風蠟寄白——」＝雲翰・染雲。
【雲孫】己より八代の後の孫（己・子・孫・曾孫・玄孫・來孫・昆孫・仍孫・雲孫）爾雅「仍孫之子、爲——」釋名「——言去己遠如浮雲也」
【雲樽】雲雷の模樣を刻みたる酒だる。論衡「易曰、雲從龍、非龍從雲也、——刻雷雲之象、龍安肯來」＝雲罍。
【雲臺像】後漢の明帝の時、功臣二十八將の肖像を南宮の雲臺に畫かしめたる故事。後漢書、朱祐等傳論「永平中、顯宗、追感前世功臣、乃圖畫二十八將於南宮雲臺」二十八將（七六頁四段）參看。
【雲堂】佛僧堂に同じ、禪家の用語、坐禪工夫のために雲水僧の四方より參堂するが故。
【雲濤】遠くくものこめたるなみ。孟浩然詩「日夕望三山、——空浩浩」＝雲浪。
【雲丹】うに。＝海膽。
【雲中白鶴】高尚なる人品に喩ふ。世說、賞譽「劉孝標曰劉歆、矯矯出塵如——」
【雲汀】くものかかれるみぎは。李羣玉詩「夕霏生水寺、初月淨——」
【雲泥】くもと、どろと。甚だしく隔る喩。李紳詩「明日獨歸花路遠、可憐人世隔——」＝天地・霄壤。
【雲梯】くもに達する程たかきはしご、古の攻城具。戰國策「墨子曰、聞公爲——、將以攻宋」公は公輸般。
【雲天】雲のたなびけるそら。莊子「黃帝得之、以登——」
【雲棟】たかくそびえたるむね。張正見詩「——疑飛雨、風窗似望仙」
【雲竇】雲の湧き出る穴。沈佺期詩「陰壑已永閟、——絕探討」
【雲屯】兵卒などが雲の如くあつまる。後漢書、南匈奴傳「覘望風塵、——鳥散」＝雲聚。
【雲衲】雲水僧に同じ。衲はけさ（袈裟）
【雲房】雲のこめたる高きいへ、道士又は僧などの居室。仙傳拾遺「木公居——、以紫雲爲蓋、青雲爲城」馬戴詩「——出定後、岳月在池西」
【雲甍】たかくそびゆるいらか。宋之問詩「——出萬家、臥覽皆已徧」
【雲幕】くもの如くにつらなれるまく。西京雜記「成帝設雲帳雲幄——于甘泉紫殿」
【雲帆】とほく雲間に見ゆる舟。李白詩「直挂——濟滄海」
【雲版】寺にて用ふる樂器の名、青銅の版に雲形を鑄付ける。＝俗點。
【雲楣】高きのき。又、雲のかかれるうつばり。庾信詩「——承武帳」
【雲鬢】美人のうつくしきくろ髮、鬢はびん。張正見詩「王孫春好遊、——不勝愁」＝雲鬟。
【雲物】そらの氣色や天變地異。左、僖五「凡分至啓閉、必書——、爲備故也」
【雲陛】高ききざはし、宮中のきざはしにいふ。謝朓詩「惟昔逢休明、十載朝——」
【雲表】くものうへ。水經、注「有石人、竚於山上、狀有懷於——」＝雲外。
【雲母】きらゝ。漢書、王莽傳「常翳——屏面、非親近莫得見也」＝雲精。
【雲母車】きらゝにて飾りし車〔晉書、輿服志〕
【雲封】雲にとざされる。趙冬曦、飲酎用禮樂賦「銅駝月冷、金門——」＝雲鎖。
【雲崩】くもがくづれる。水勢の激しきに喩ふ。皮日休詩「嚴陵灘勢似——、釣具歸來放石層」
【雲夢】楚の七澤の一、方九百里ある大いなる澤。史、司馬相如傳「旁皇乎海外、呑若——者八九、其於胸中、曾不蔕芥」
【雲霧】くもと、きりと。晉書、樂廣傳「若披——而覩青天也」
【雲門宗】佛禪宗の一派、其の開祖、後漢の文偃禪師が廣東省雲門山に住せし故。
【雲腴】茶の異名。黃庭堅詩「我家江南摘——」
【雲亂】○くもがみだれる。枚乘、七發「紛紛翼翼、波涌——」○國の亂れる形容。＝雲擾。
【雲林】雲のかかれる林。白居易詩「亂藤遮石壁、絕澗護——」
【雲路】雲の往來するかよひぢ。北史、文苑傳序「俱騁龍光、並驅——」
【雲樓】たかきたかどの。杜甫詩「夜宿敞——」＝雲閣・危樓。
【雲和】○琴材を出す山の名。○轉じて、琴の稱。周禮、春官「孤竹之管、——之琴瑟」王昌齡詩「斜抱——深見月」＝雲餅。
【雲淡】くもがうすし。元稹詩「雨香——覺微和、風送春聲入棹歌」程顥詩「——風輕近午天」
【雲井】くものうへ。＝雲上。

【雲斂】くもが散りてなくなる。謝莊、月賦「氣霽地表、——天末」歐陽修、秋聲賦「其色慘淡、烟霏——」＝雲收。
【過雲遶梁】歌聲の妙を形容す、聲は行雲をとどめ、餘音は梁をめぐる。事物紀原「昔秦青撫節悲歌、聲振林木、響遏行雲、韓娥東之齊、匱糧過雍門、鬻歌假食而去、而餘音遶梁、三日不絕」
【雲耶山耶】天外を望みて雲か山かと疑ふ。蘇軾、書王定國所藏烟江疊嶂圖詩「江上愁心千疊山、浮空積翠如雲煙、山耶雲耶遠莫知、煙空雲散山依然」
【雲無心而出岫】岫は山の穴、雲は何の心もなく、唯だ山の穴を出る。人の出處の自然なるに喩ふ。陶潛、歸去來辭「——、鳥倦飛而知還」
【雲慘】雲がいたみかなしむ。劉威詩「——烟愁苑路斜」
【雲橫秦嶺家何在】韓愈「諫迎佛骨表」を上りし爲め、潮州に左遷せられし途中、甥の韓湘に示したる詩の句「——、雪擁藍關馬不前」
【雲從龍】聖主の賢臣を得る如く同氣相求むる喩。易、文言「——、風從虎」
【雲開見日】長くふさがれるものの漸く通ずる意。後漢書、袁紹傳「趙大僕銜命來征、若雲開見日、何喜如之」
【雲破】雲が開く。白居易詩「——山呈色、冰融水放光」
【雲破月來】雲開きて月光が漏れ出る。入蜀記「坐花月亭、有小碑、乃張先子野——花弄影、樂章云、得句於此亭也」
【雲行雨施】雲がそらに行き、散じて雨となりて恩澤を萬物にほどこす。易、繫辭「——、品物流形」

【雱】ハウ　陽

雪のさかんに降る貌。詩、邶風「雨雪其—」

【雰】フン　文

○きり（霧氣）○しも（霜）釋名「潤氣著草木、遇寒凍、色白曰—」○——は雪のふる貌。
【雰圍氣】地球をとり圍める氣體。＝大氣・空氣。
【雰虹】にじ。虞騫詩「——照漣漪」
【雰雰】雪のふる貌。詩、小雅「上天同雲、雨雪——」

【雯】ブン　文

雲のうつくしきあや、雲が章を成す（雲文）

五畫

【電】テン　デン　霰

○いなづま、いなびかり「閃—」「耀—」空中の陰陽二氣の相激する際に發する光。春秋、隱九「大雨震—」○いなびかりの如く明かに照す、他人に對する敬語に用ふ「—覽」○いなびかりの如くすばやし「—馳」○物理學にて宇宙に存在する陰陽二種の勢力「—氣」
解字 陰陽激燿するなり、雨に从ひ、申に从ふ。
【電解】電力にて物を分解する。
【電赫】いなづまの如く盛んにかがやく。幸蜀記「皇威——、聖略風馳」
【電氣】宇宙に存在する陰陽二種の勢力。
【電訓】電報にて訓示する。又、其の訓示。
【電光石火】事の迅速なるに喩ふ。淮南子「人生天地之間、如鑿石見火、電火過隙」
【電光朝露】極めて短き時間。金剛經「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」＝露電。
【電頃】いなづまのひらめく程の極めて少しの間。馬明生詩「千齡猶一刻、萬紀如——」
【電戟】いなづまの如き光あるほこ。王勃、乾元殿頌「——揮霜、雲旗拒暑」
【電激】いなづまの如くはげしくおこる。漢書、敍傳「游說之徒、風颺——」
【電擊】いなづまの如く急にはげしくうつ。晉書、溫嶠傳「催進諸軍、一時——」＝霆擊。
【電信】電報に同じ。
【電車】○電力を用ひて走らす車。○長くつづく車。晉書、張華傳「雲梯——」
【電燭】いなづまの如くにひかりかがやく。漢書、揚雄傳「流星旄以——兮」注「如星之流、如電之照也」
【電矚】電覽に同じ。書言故事「投獻望垂采覽云云、幸賜——」巖電、晉王戎視日不眩」
【電繞樞】電光が北斗の樞星を繞る、吉瑞とす。宋書、符瑞志「黃帝母曰附寶、見大電光、繞北斗樞星、照郊野、感而孕、二十五月、生黃帝於壽邱」
【電掣】○いなづまの如くすみやかにひきつける。李白、大獵賦「紅旗——、卷長空之飛雪」○いなづまがひらめく。陸游詩「——半空雲黯黯」

【電閃】いなづまの如くひらめく。蘇軾詩「柳佽運筆如一一」
【電扇】でんきうちは、電氣力にて風を生ずる器。
【電線】電氣を通ぜしむるはりがね。
【電奏】電報にて天子に申し上げる。
【電池】化學作用にて電氣を起させる裝置のもの。
【電馳】いなづまの如く、非常に早くかける。＝電驅・電騁。
【電柱】電線をかけ通ずる爲めのはしら。
【電燈】電氣の發熱によりて光を發せしむるあかり。＝電氣燈。
【電波】電氣の波動。
【電報】電氣の作用にて卽時遠方へ通信する。又其の通信。＝電信。
【電抹】いなづまのはらふ如く忽ちに消える。蘇軾詩「佳人猶唱醉翁詞、四十三年如一一」
【電赴】極めてとくはせむかふ。晉書、譙王承傳「足下若能卷甲一一、」
【電鶩】いなづまの如く極めてとくはせる。鶩は奔馳なり。後漢書、班固傳「輕車霆發、驍騎一一」＝電馳。
【電文】電報の文言。
【電鞭】いなづま。電をむちに喩へていふ。劉孝威、正旦春雞贊「一一失鞚、雷車折輪」＝電策。
【電母】いなづまの神。三餘贊筆「俗呼雷電爲雷公一一、亦有所本也」宋史、儀衞志「雷公一一旗」
【電命】電報にて命令を下す。又、其の命令。
【電滅】いなづまの如くに忽ちほろびる。傅元詩「存若流光忽一一、何爲多念獨鬱結」
【電覽】他人に見せることの敬稱。＝電矚・呈電。
【電流】導體を通じて傳はる電氣の流動。
【電鈴】電氣仕掛けのよびりん、べル。
【電力】電氣の力。
【電路】電流の通ずる路。
【電話】電氣仕掛けにて隔り居る人と通話する。又其の裝置。

【雹】 ハク ホク 覺 沃

ひょう、ひさめ（雨冰）雷雨の時などに雨にまじりて降るもの、小なる者は豆の如く、大なる者は拳の如し、能く禾稼を傷く「飛一」「降一」禮、月令「仲夏行冬令、則一凍傷穀」
【雹霰】あられ。王逸賦「雷霆兮硠礚、一一兮霏霏」＝霰雹。

【雷】 ㊀ライ ㊁ライ 灰 隊 本、靁に作る

㊀かみなり、いかづち。陰陽の二氣が空中にて相觸れて電を生じ大音響を發する現象「迅一」「驚一」「輕一」○大いなる聲に喩ふ「蚊一」「鼾一」○いかづちの如くはげしく發するものに喩ふ「地一」「水一」「魚一」○澤の名。○一同は他に附きて聲を出す、附和する。㊁ころばす、石を推して高處よりころばす。＝礧。○うつ、鼓をうつ、俗に擂に作る。古樂府「官家出遊一大鼓」
【雷雨】かみなりが鳴りあめふる。易、坤卦「一一之動、滿盈」
【雷收】雷の聲がやむ。禮、月令「仲秋之月、日夜分、雷始收聲」
【雷響】雷の鳴るひびき。虞世南、獅子賦「瞋目電曜、發聲一一」
【雷雊電激】雷電の鳴りはためくをいふ。郭璞、江賦「溢流雷雊而電激」雊一に呴に作る。
【雷火】落雷によりて起る火事。張衡、蟠松引「一一不敢燒其瘤」
【雷管】發射の際、銃砲にこめし彈藥を炸發せしむるための發火物。
【雷煥】晉人、天文に精し、武帝の時、斗牛の間に紫氣あり、煥、豐城に寶劍あるを知り、獄を掘りて龍泉・太阿の二劍を得たり〔晉書、張華傳〕
【雷擊牆壓】雷のうつ如く、牆垣の壓する如し。威勢のはげしき喩。韓詩外傳「雍其刑罰而信其誅殺、如雷擊之、如牆壓之」
【雷鼓】○雷のとどろく聲。朱慶餘、觀濤詩「鮮飈出海魚龍氣、晴雪噴山一一聲」○八面のたいこ。周禮、大司樂、注「一一八面鼓也、祀天神則鼓之」○鼓を擊つ。＝擂鼓。
【雷公】かみなり。杜甫詩「安得鞭一一、滂沱洗吳越」＝雷神。
【雷吼】雷鳴、吼はほえる。劉峻、東陽金華山棲志「躍流灇瀉、洊涌決咽、電擊一一、駭目驚魂」
【雷芝】蓮の異名。古今註「芙蕖、一名一一」
【雷師】かみなりを司る神〔宋史、禮志〕＝雷神。
【雷獸】○深山にすみて形は貂に似て大きく、胸腹共に黃色なる獸、雷鳴の時、村里に出るといふ。＝木貂。○雷の如き聲を發する怪獸。山海經「東海中有流波山、其上有獸、聲如雷、其名曰夔、黃帝得之、以其皮爲鼓、打以一一之骨、聲聞五百里」
【雷神】かみなり。宋史、禮志「州縣祭社稷、祀風伯雨師一一爲小祀一」＝雷公。

【雷震】いかづちがひびきふるふ。漢書、敍傳「長驅大擧、電擊一一」
【雷車】かみなりのとどろく形容。陸游詩「一一隆隆南山陽、電光煜煜北斗傍」
【雷掣】雷の如くに烈しく引く。元稹、馬射賦「揮弓一一、激矢風追」
【雷尊】雷の模樣を刻みたる酒樽、尊は樽。論衡、語增「一一、刻畫雲雷之形」
【雷澤】山東省濮縣の東南に在る澤の名。史、五帝紀「舜耕歷山、歷山之人、皆讓畔、漁一一、一一之人、皆讓居」
【雷陳膠漆】友誼の極めて厚きにいふ。後漢書、雷義傳「膠漆自爲堅、不如雷與陳」陳は陳重。
【雷霆】はげしきかみなり。易、繫辭「鼓之以一一、潤之以風雨」
【雷鳥】高山に棲む一種の鳥。＝松雞。
【雷電】かみなりと、いなづまと。易、頤卦「一一合而章」
【雷同】みだりに他の說に附和する。雷の聲を發して萬物同じく之に應ずるに喩ふ。曲禮「毋勦說、毋一一」後漢書、桓譚傳、注「雷之發聲、衆物同應、俗人無是非之心、出言同者、謂之一一」
【雷動】はげしく、ふるひ動く。漢書、息夫躬傳「邊竟一一、四野風起」子虛賦「一一猋至、星流電擊」＝震動。
【雷砲】かみなりの響。元稹詩「聲若一一目流電」
【雷斧】○石にて作りたるをの。石器時代の遺物。＝雷斧石。○雷が斧にてつんざく。怪しき石などの形容。宋濂詩「鬼工一一琢削古」＝鬼斧。
【雷風】雷と風と。易、說卦「一一相薄、水火不相射」
【雷奮】かみなりの如くにふるひうごかす。李嶠詩「一一六合開、天行萬乘出」
【雷鞭】いなびかり。故事成語考「閃電號曰一一」＝電鞭。
【雷封】縣令の異名。六帖「雷震百里、故縣令稱一一」（百里は縣のひろさ）
【雷奔】雷のはしる如くはげしくはしる。班固、西都賦「一一電激」
【雷名】他人の姓名又、名聲の敬稱「久仰一一」
【雷鳴】○かみなりがなる。○かみなりの如き大いなる聲。楚辭、卜居「黃鐘毀棄、瓦釜一一」＝雷吼。
【雷文】いなびかりの如き屈折せる線を以てつくる一種のもやう。稻妻形。＝雷紋。
【雷門鼓】雷門は會稽城門の名、大鼓あり、聲百里に聞ゆ。漢書、王尊傳「毋持布鼓過雷門」（布鼓は聲なし、無學者に喩ふ）
【雷落】雷が落ちる。沈佺期詩「馳波如電騰、激石似一一」＝落雷。

【零】 ㊀レイ ㊁レン 青 徑 先

㊀のこりあめ（餘雨）○しづかにふる雨。○おつ（落・墮）苓の假字、草の枯れおちるを苓、木のおちるを落といふ。○ふる（雨）雨が降る。詩、鄘風「靈雨既一」○はした、あまり（餘數）「奇一」「一碎」○から、皆無。○しぼむ（凋病）「凋一」㊁先一は西羌の地名。
同訓異義 おつ 零・落・墮・隊・隕の別は落（一六六一頁三段）の條を見よ。
【零雨】こさめ、おつる雨。詩、豳風「一一其濛」＝微雨・徐雨。
【零歇】おとろふ。鮑照賦「雖凌霜以擅奇、終從識而一一」
【零碎】○おちくだける。白居易詩「雪花一一逐年減、煙葉稀疏隨分新」○些細にしてくだくだし。水滸傳「把些一一銀兩一貫了」＝零零碎碎。
【零細】甚だこまか。＝微細。
【零散】おちぶれてちりぢりになる。白居易詩「歌伴酒徒一一盡、唯殘頭白老蕭翁」
【零殘】おちそこなふ。夏侯湛賦「木蕭蕭以一一」
【零時】十二時と一時との間。
【零星】○すこし、整數に滿たざる數。＝零碎。○おちぶれる。＝凋零。
【零丁】志を失ふ貌、孤單にしておちぶれる。李密、陳情表「一一孤苦、至於成立」＝伶仃。
【零丁洋】廣東省珠江の口に在り。文天祥詩「惶恐灘頭說惶恐、零丁洋裏歎零丁」（惶恐灘は江西省贛江中に在り）＝伶仃洋。
【零凋】花がおちしぼむ。歐陽修詩「姚黃魏紫開次第、不覺成恨俱一一」＝凋零。
【零糴】米の小うり。閩書「凡遇凶年、減價一一」
【零點】○試驗などの點數の皆無なるにいふ。○攝氏・列氏の寒暖計にて冰點。
【零買】少しづつ買ふ、こがひ〔古今祕苑〕
【零寶】こうり。晁氏客語「荊公托人寶金、一一了、銖兩不足」
【零餘】すこしののこり、はした。字彙「凡數之一一也」＝奇零。
【零餘子】むかご、山藥の蔓に生ずる子。
【零落】○草木かれしぼむ。草の枯れるを零といひ、木の枯れるを落といふ。楚辭「惟草木之一一兮」○

おちぶれてさびし。白居易、琵琶行「門前ーー鞍馬稀」＝落魄。
【零涙】なみだをおとす。沈約詩「ーー向ㇾ誰通、雞鳴徒歎息」
【零零碎碎】些細にしてくだくだし。朱子語錄「洪範是治道最緊切處、這箇若理會不ㇾ通、又去理ニ會甚麼零零細細ー」＝零碎。
【零露】おつろつゆ。詩、鄭風「ーー溥兮」

六畫

【需】㊀シュ・ジュ 虞 ㊁ダン・ナン 翰
㊀まつ（待）○ためらふ（遲疑）進まず、疑ひてためらふ、猶豫する。左、哀六「ー事之賊也」○もとむ（索）要求する「應ー」＝須。○もちふ（用）いりよう（入用）又、其の品物「軍ー」「百ー」「必ー」○易の卦の名、乾下坎上。○韋の柔滑なる貌「ー弱」㊁よわし（弱）＝懦。
同訓異義 もとむ 需・求・索・干・須・要・徼・邀・覓 の別は求（一〇四五頁四段）の條を見よ。
【需要】いりよう。＝需用。
【需事之賊】需は遲疑、疑ひてためらふは事を害ふ。左、哀六「子行抽ㇾ劍曰、――也」

【需用】いりよう。又、其の品物「ー品」＝需要。
【需用供給】入用なると、其れに應じてあてがひ給すると。＝需給。

【霅】雷（雨部五畫）の古字。

七畫

【震】㊀シン 震 ㊁シン 眞
㊀ふるふ。○ぢしん、なる、地がゆれ動く「ー災」「地ー」公羊傳「ー者何、動ㇾ地也」○いかづち（疾雷）雷がひびきゆれる、雷が落ちて物を撃つ。春秋、僖十五「ー夷伯之廟ー」○をののく（戰）うごく。うごかす（動）○おそる（懼）ふるへをそれる。○をどす（威）○おこす（起）振ひおこす。○いかる（怒）○いきほひ、威光。左、成二「畏ニ君之ー」○たかぶる（矜）○はらむ。古、娠に通ず。左、哀元「后緡方ー」○易の卦名。ー下ー上。位に於て東と爲す。又、長男の義とす（易、說卦）○澤の名、吳の大湖の異名。○ー旦は印度より支那を稱する語。一說、秦の轉聲。㊁はらむ（懷娠）＝娠。

同訓異義 ふる 震・奮・振・揮・戰 類の別は奮（[illegible]）の條を見よ。
【震畏】ふるひおそれる。唐書、韋見素傳「所ㇾ至ーー」
【震恚】はなはだしくいかる。文同賦「皇怒竊而ーー兮」
【震域】地震を感ずる區域。
【震搖】ふるひうごく。唐書、魏知古傳「羣心ーー、衆口籍籍」＝震動・震撼・動搖。
【震曜】ふるひかがやく。左傳、注「雷電ーー、天之威也、聖人作ニ刑戮ー以象ニ類之ー」
【震耀】ふるひかがやく。漢書、敍傳「雷電皆至、天威ーー」
【震害】地震の被害。
【震駭】ふるひおどろく。晉書、孫楚傳「士卒奔邁、其會如ㇾ林、煙塵俱起、震ㇾ天駭ㇾ地」唐書、盛彥師傳「殺ニ平生所ㇾ惡數十家ー州人ーー、皆重ㇾ足立」
【震赫】勢がふるひかがやく。唐書、竇建德傳「伐ㇾ恩恃ㇾ權、ーニ中外ー」
【震汗】ふるひおそれて、あせかく。唐書、宋之問傳「得ㇾ詔ーー、東西步不ㇾ能ニ引決ー」＝戰汗。
【震撼】ふるひうごかす。宋史、洪杏夔傳「ーニー海宇ー、天下始知ㇾ有ニ吾君ー」
【震悸】ふるひおそれる。李嶠文「寵命载臨、ーー交集」＝震懼。
【震響】ふるひ、ひびく。南史、齊高帝紀「所ㇾ樹華表柱、忽龍鳴、ーニー山谷」
【震宮】皇太子の御殿。易の震卦は東方の卦にて、長男の象とするが故。庾信詩「木德[illegible]ニーー」盧僎、上幸ニ太子宮ー應制詩「佳氣曉葱葱、乾行入ニーーー」＝東宮・春宮。
【震恐】ふるひおそれる。＝震惶・震懼。
【震懼】ふるひおそる。後漢書、齊王縯傳「王莽素聞ニ其名ー大ーー、購ニ伯升邑五萬戶黃金十萬斤位上公ー」＝震悚。
【震惶】ふるひおそれる。晉書、宗室休之傳「謝疏云、憂懼ーー、惋愧交集」＝戰惶。
【震驚】ふるひおどろく。書、堯典「ーニー朕師ー」
【震源】地震の起點たる地。＝震源地。
【震眩】おどろきて目がくらむ。李華、弔ニ古戰場ー文「主客相搏、山川ーー」
【震災】地震のわざはひ。
【震騷】ふるひさわぐ。唐書、韓滉傳「帝在ニ奉天ー淮汴ーー、滉調ニ士卒ー分ㇾ兵戍ニ河南ー」＝驚騷。
【震慙】心ふるひて甚だしくはにる。王僧孺文「奉ㇾ命ーー、有ㇾ灼ニ丹すー」
【震死】落雷の爲めに死する。
【震震】○雷の頻りにふるふ貌。漢鐃歌「冬雷ー夏雨雪」○光明の貌。西都賦「ーー爚爚、雷奔電激」○殷盛なる貌。潘岳、藉田賦「ーー塡塡」
【震主】威光ありて主君を怖れさす。漢書、霍光傳「威ーㇾー者」
【震肅】ふるひつつしむ。後漢書、張禹傳「有ニ小讃ー禹正ニ其法ー自ニ長史ー以下、莫ㇾ不ニーーー」＝振肅。
【震悚】ふるへおそれる。晉書、齊王冏傳「百官ーー、無ㇾ不ㇾ失ㇾ色」
【震慴】ふるひおそれる。漢書、東方朔傳「聖帝流ㇾ德、天下ーー」
【震懾】○おどす。宋史、趙普傳「轢ニ蹀宇宙ー、ーニー華夷ー」＝震悸。○ふるひおそれて氣を失ふ。後漢書、何皇后紀「后性彊忌、後宮無ㇾ不ニーーー」
【震懾】震懾に同じ。漢書、張湯傳「天下事皆決ㇾ湯、羣臣ーー」
【震川文集】三十卷、明の歸有光撰す。震川は其の號、文を作るに經術に本づく、唐荊川・王愼中と嘉靖の三大家と稱す。
【震悼】天子が臣下の死をなげきいたませられる。王儉、褚淵碑文「聖朝ーニー于上ー羣臣慟ニ于下ー」
【震蕩】ふるひうごく。左傳「楚師輕䠥、易ニーーー也」杜甫詩「朝野歡娛後、乾坤ーー中」
【震澤】○今の太湖。書、禹貢「ーー底定」○江蘇省蘇州府の縣名。

【震怛】ふるひおどろかす。蘇洵文「ーニー下士ー、莫ニ敢有ㇾ驕ー」
【震旦】印度にて支那を呼ぶ稱。梵語の音譯、震は卽ち秦、且は斯坦にて地の義、秦地といふが如し。翻譯名義集「東方屬ㇾ震、是日出之方、故云ニーーー」とあるは附會の說なり。
【震霆】いなびかり。長楊賦「疾如ニ奔星ー擊如ニーーー」
【震疊】ふるひおそれる。詩、周頌「薄言震ㇾ之、莫ㇾ不ニーーー」
【震天】天をうごかす。勢の盛んなるにいふ。晉書、孫楚傳「士卒奔邁、其會如ㇾ林、煙塵俱起、ーㇾー駭ㇾ地」
【震天駭地】天地をふるはせ驚かす、勢力又、音響の盛んなる形容。前條參看。＝震天動地。
【震天動地】前條に同じ。
【震怒】天子のおいかり。詩、大雅「王赫ニ其武ー如ㇾ震如ㇾ怒」＝軫怒。
【震動】○ふるひ動く。書經「天休ーー」○ふるひ動きておどろく。李白詩「報ㇾ漢雖ㇾ不ㇾ成、天地皆ーー」○ふるひうごかす。書、盤庚「ーニー萬民ー」＝震撼・震蕩。
【震服】ふるひしたがふ。遼史、耶律仁先傳「宋聞ㇾ風ーー」
【震憤】身をふるはしていきどほる。後漢書、張奐傳「海內默默、人懷ニーーー」
【震揚】ふるひあぐ。後漢書、臧宮傳「ーニー威靈ー風行電照」＝振揚・奮揚。
【震雷無ㇾ暇ㇾ掩ㇾ聽】さらに艱澁の文字を用ふるをいふ。宋景文公、唐史を修し好みて艱深の辭を以て、淺易の說を文る、歐公以て之を諷すること有らんと思ひ、一日其の壁に大書して曰く、宵寐匪ㇾ貞、札闥洪休と、宋之を見て曰く、夜夢不祥、題門大吉にあらずや、何ぞ必ずしも異を求むる此の如くなると、歐公曰く、李靖の傳に曰ふ、――と、亦是の類なりと、宋公慙ぢて退く、今所謂震霆不ㇾ及ㇾ掩ㇾ耳とあるは、再改に係る（事類全書）
【震慄】ふるひ恐れる。吳志、呂蒙傳「軍中ーー、道不ㇾ拾ㇾ遺」＝振慄。
【震裂】地がふるひさける。後漢書、光武紀「二十二年九月、地ーー、詔曰、夫地者、任ㇾ物至重、靜而不ㇾ動者也、而今ーー、咎甚懼焉」

【霄】セウ 蕭
○そら（天上）天空の境「雲ー」「九ー」「碧ー」○日の旁の氣「淸ー」○きゆ。＝消。○陵ーは花の名、のうぜんかづら。
【霄漢】おほぞら、天際をいふ。後漢書、仲長統傳「逍ニ遙一世之上ー睥ニ睨天地之間ー不ㇾ受ニ當時之責ー永保ニ性命之期ー如ㇾ是則可下以陵ニ霄漢ー出中宇宙之外上矣」
【霄月】空に在る月。潘岳、哀詞「皎皎ーー、載盈載微」
【霄元】おほぞら。雲笈七籤「馮感嶽生、氣貫ニーーー」
【霄壤】○天地といふに同じ。張說、詩「緬思ーー間、實與ニ逆旅ー均」○天と地との隔る如く大差あるに喩ふ「ーーー之別」＝雲泥。
【霄雪】みぞれ。霄は消。爾雅、注「水雪雜下者、謂ニ之ーー」續會「ーー、今人所ㇾ謂濕雪也、著ㇾ物則消」
【霄㠑】高く峻しき貌。淮南、原道「上遊ニ於ーー之野ー」
【霄峙】たかく天空にそばだつ。晉書、赫連勃勃載記「崇臺ーー、秀闕雲亭」
【霄半】天半に同じ。李德裕詩「潭淼入ニ海底ー岑崟從ニーーー」
【霄嶺】おほぞらにそびえたるみね。陳子昂文「不ㇾ能下投ニ身ーーー、滅中景雲林上」

【雪】㊀タフ 洽 ㊁セフ 葉
㊀あめふる（雨）○ーーは衆言の貌、かまびすし。又、震電の貌。○颯ーは走ることの捷き貌。○ー曄は急疾の貌。潘岳賦「ー曄岌岌」○ー溪は川の名、浙江吳興縣の南に在り。㊁煜ーは光明の貌。班固、答賓戲

「其餘猋飛景附、熛一其間者、蓋不可勝載」＝炳熛。

【霆】㊀テイ ㊁テイ 靑 迥

㊀いなびかり(電)○いかづち、はげしく疾きいかづち(疾雷)○雷の長く引く餘聲。㊁いかづち(迅雷)

【霆激】いなづまの如くはげしくおこる。張懷瓘文「飄風驟雨、雷怒——」

【霆擊】いなづまの如くはげしく一氣にうつ。漢書、匈奴傳「嚴尤曰、宜縱先至者令臣等深入——上」＝電擊。

【霈】ハイ 泰

○おほあめ(大雨)○水の流れる貌。＝沛。○霶—ハウハイは雨の多くふる貌。○雨をいふ。沈璜賦「喜甘—之流治」轉じて恩澤に喩ふ。

【霈霈】水の盛んに流れる聲の形容。宋玉、高唐賦「奔揚踊而相擊兮、雲興聲之——」＝沛沛。

【霂】ボク モク 屋

霢—ミャクモクはこさめ(小雨)詩、小雅「益之以霢—」＝霢霂。

八畫

【霍】クヮク 藥

○揮—はにはか(猝遽)なる貌。又、疾き貌。俗に輕く財物を散ずるにいふ。○すみやかに散る貌。○さかんなる貌。○——は刀光のひらめく貌。○習—は開合の貌。一說、疾き貌。○大山の小山を圍み繞れる稱。○衡山の別名。○國名、周の武王の弟—叔の領地。今の山西省—縣。○姓。—叔の子孫、國を以て氏と爲す。—光は漢の昭帝・宣帝に仕へたる名臣。○まめの葉。藿に通ず。

【霍奕】はやく馳する貌。馬融、廣成頌「徽嫿——、別鶩分奔」

【霍光】字は子孟、去病の異母弟なり、漢の武帝の朝奉車都尉となり、禁闥に出入すること二十餘年、小心謹愼にして、未だ嘗て過あらず、人と爲り、沈靜詳審、出入して殿門を下るごとに、進止常處あり、郎僕射竊に識して之を視るに、尺寸をも失はざりきといふ、遺詔を受けて昭帝を輔く、百姓充實四夷賓服す、昭帝崩じ、昌邑王を迎へ立つ、淫行多し、之を廢して宣帝を立つ、甘露中に、功臣の形を麒麟閣に圖するや、光其の第一に居り、大將軍博陸侯霍氏といひて名いはず。

【霍霍】刀光のひらめく貌。木蘭詩「磨刀——向豬羊」元稹詩「——刀刃光」＝爗爗。

【霍閃】いなびかり(電)顧雲詩「金蛇飛狀——過、白日倒挂金繩長」

【霍然】にはかに消え失せる貌。司馬相如、大人賦「——雲消」

【霍亂】暑氣に中てられて起る、これらに似たる吐瀉病(傷寒論注)揮霍撩亂の義。漢書、嚴助傳「夏月暑時、歐泄——之疾」

【霓】ゲイ 齊

にじ。埤雅「雄曰虹、雌曰—」孟、梁惠王「若大旱之望雲—」＝蜺。

【霓裳羽衣曲】月宮の音樂にまねて作りし樂曲の名。龍神錄「八月望日、唐明皇與中天師遊月宮、寒氣逼人、霜露霑衣(中略)見一大府、榜曰廣寒清虛之府、少前見素娥十餘人、皓衣乘白鸞、笑舞於廣庭大桂樹下、樂音清麗、上皇歸製——」

【霎】サフ・セフ セフ 洽 葉

○こさめ(小雨)○——は雨の聲。○極めて短き時間「瞬—」「——」「—時」楊萬里詩「萬頃銀濤半—間」

【霎時】すこしの間、しばし。

【霎霎】雨の聲。韓偓詩「——高林簇雨聲」

【霑】テン 鹽 通じて、沾に作る

○うるほふ。うるほす「均—」「普—」「潤—」ぬれる。ぬらす(濡)詩、小雅「既—既足」しめる。しめす(漬)○轉じて仁惠・恩澤の義とす。恩惠にあづかる。揚雄、長楊賦「仁—而恩洽」

【霑渥】めぐみにうるほふ。北史、魏太武帝紀「詔曰、去春小旱、東作不茂、夏勤尅己、祈請靈祇、登賜精誠有感、何報應之速、雲雨震灑、流澤——」

【霑汗】あせがにじむ。漢書、揚雄傳「縱鑒生蟣蝨、介冑被——」

【霑肌】はだへをうるほす。揚雄、逐貧賦「或耘或耔、霑體——」

【霑灑】うるほしそそぐ。北史、寶泰傳「電光奪目、駛雨——」

【霑漬】ぬれる。漢書、嚴助傳「使陛下甲卒死亡、暴露中原、霑—山谷」唐書、谷那律傳「太宗出獵、遇雨——」

【霑潤】うるほふ。陸機文「——既已遍」＝潤霑。

【霑醉】甚だしくゑふ。漢書、游俠傳「候遵——時」遵は陳遵。

【霑被】○うるほふ。うるほす。韓愈、上宰相書「動植之物、風雨霜露之所——」○轉じて仁惠を施す。又仁惠を被る。

【霏】ヒ 微

○きり(霧)もや(雰)「林—」「烟—」謝靈運詩「雲霞收夕—」○煙のたなびく貌。○氛氣の立ちのぼる貌。○——は雪の甚だしくふる貌。○—は雪の甚だしくふる貌。又、雲の飛ぶ貌。又、霜のおく貌。又、草の茂る貌。又、談話の細かに續く貌。

【霏霰】ふるあられ。蔡襄詩「樓外陰雲迎曉合、陌頭——與風俱」

【霏微】雨雪などのこまやかに降る貌。徐鉉詩「江澄霽色霧——」

【霏霏】○雪の甚だしく降る貌。詩、小雅「雨雪——」○雲の飛ぶ貌。漢書、揚雄傳「雲——而來迎」○談話の永く細かに續く貌。晉書、胡母輔之傳「吐佳言如鋸木屑、——不絕」○霜の繁くおく貌。魏武帝、碣石銘「繁霜——」○草の盛んに茂る貌。杜甫詩「宮草——承委珮」○電光のひらめく貌。陸龜蒙詩「笑電——作天喜」

【霖】リン 侵

ながあめ(久雨)三日以上ふり續く雨「梅—」「秋—」「—雨」左、隱九「雨自三日以往爲—」

【霖霪】ながあめ。鮑照詩「奔泉冬激射、霧雨夏——」＝霪霖。

【霖雨】○ながあめ。左、隱九「凡雨自三日以往爲霖」＝淫雨。○旱を救ふ三日以上の雨。恩澤又、民の苦を救ふ人に喩ふ。書、說命「若歲大旱、用汝作——」

【霖澍】ながあめがふりそそぐ。舊唐書、五行志「大曆四年、秋大雨、是歲自四月——至九月、京師米斗八百文」

【霖濘】ながあめふりてぬかる。唐書、崔鄲傳「鄲不藏貲、有輒周給親舊、宅處庳漏、無步廡、至——則客蓋而屐、以就外位」

【霖潦】ながあめにて濁流が漲る。晉書、宣帝紀「會——大水、平地數尺、三軍恐欲移營」范成大詩「歷屋雨雲晝晴、環城——夏寒」＝淫潦。

【霖霖】雨の止まざる貌。繆襲、喜雨賦「雷隱隱而震其響兮、雨——而又隤」

【霖漉】ながあめがふる。張協詩「——過二旬、散漫亞九齡」

九畫

【霒】イン 侵

くもる。くもり。雲が日を蔽ふ。

【霒曀】風ふきてくもる。宋玉、九辯「忠昭昭而願見兮、然——而莫達」

【霙】エイ ヤウ 庚

○みぞれ、雨が少しく凍りて未だ雪とならざるもの。埤雅「雪寒甚則爲粒、淺則成華、華謂之—」○あられ(霰)蘇軾詩「晚雨纖纖變玉—」

【霞】カ ゲ 麻

○あさやけ、ゆふやけ、赤き雲氣、太陽の出沒する時、低空の雲氣に日光がさして赤くてるもの「朝—」「彩—」「晚—」「暮—」○はるか。遐に通ず「登—」○流—は美酒の名。國○かすみ、春日山野にただよへるもや。＝靄。○鳥の通路に張りて之を捕へる網「—網」

【霞擧】赤き雲氣がたちのぼる。世說、容止「諸公每朝、朝堂猶暗、惟會稽王來、軒軒如朝——」

【霞光】雲氣のひかり、朝やけ夕やけの類。白居易詩「——照後殿於火、水色晴來嫩似煙」

【霞徑】雲氣のこめたるこみち。陶翰詩「敢投歸山吟、——一相訪」

【霞彩】雲氣朝やけ夕やけの美くしきいろどり。薛道衡詩「朝朝散——、暮暮澄秋色」

【霞觴】仙人などの用ふる酒杯。曹唐文「——共飲」＝霞杯・九霞觴。

【霞宿】雲氣の赤くこめたる所にやどる。李益詩「雲遊恣——」

【霞洞】○仙人の居る所。錄異記「長山楊謨洞在峭壁之中、有神仙、或三人或五人、服色黃、往往出見、詔改楊謨洞爲紫——、霞紫霞觀」○國上皇の御所。＝仙洞。

【霞帔】○舞衣の明かに麗はしき形容。帔はもすそ。白居易詩「虹裳—一步搖冠」○道士の服。劉禹錫詩「——仙官到赤城」○婦人の禮服。明史、輿服志「——褙子」

【霞氣】東方の赤き雲氣。沈石來、鶴詩「惆悵世間留不住、御驂鸞鶴出——」

【霜】サウ 陽

○しも、露の凝りしもの「嚴—」「風—」「隕—」「繁—」詩、秦風「白露爲—」○霜は一年に一度降

る、故に歷年の義とす「星ー」李白詩「陛下之壽三千ー」○毛髮などの白きに喩ふ。李白詩「不レ知明鏡裏、何處得ニ秋ー一」○藥の白き粉末。淸異錄「却老ー、九錬松枝爲レ之」○霜の草木を枯らす如く、嚴しきことの喩「秋ー烈日」○ー降は二十四氣の一。

【霜威】○しものきびしき義。高適詩「城上ーー淩ニ草木一」○嚴しき威光をいふ。秋霜の萬物を枯らすに喩ふ。晉書「孤恐ニーー一振、玉石俱焚一」

【霜烏】しものふる寒き冬のからす。白居易詩「煙雁翻ニ寒渚一、ーー聚ニ古城一」

【霜葉】しもにて赤くなりたる葉。白居易詩「醉貌如ニーー一、雖レ紅不ニ是春一」杜牧之詩「停レ車坐愛楓林晚、ーー紅ニ於二月花一」

【霜柯】秋の霜にあへる木の枝。梁元帝、纂要「秋木曰ニーー一」昝翠、橙子詩「鮮明百數見ニ秋實一、錯綴衆葉傾ニーー一」＝霜枝・霜條。

【霜蟹】しもの降る時節のかに、最も美味とす。梅堯臣詩「ーー肥可レ釣、水鱗活堪レ斫」＝霜螯。

【霜降】二十四氣の一、甘露の次に來る氣節、十月二十三日頃。

【霜毫】しもの如くしろきけ。元稹詩「ーー引ニ細輝一」

【霜下傑】菊の異名。陶潛詩「懷ニ此貞秀姿一、卓爲ニーーー一」

【霜氣横レ秋】霜の氣の嚴肅なるにいふ。孔稚圭、北山移文「風情張レ日、ーーーー」

【霜菊】しもを帶びたる菊。水經注「雜以ニーー一金橙白沙細石一」

【霜戈】白く光りてするどきほこ。漢書、武帝紀「ーー一揮、巨猾奔迸」舊唐書、鄭畋傳「ーー萬隊、鐵馬千羣」＝霜戟。

【霜瓦】霜の置ける屋根のかはら。白居易詩「曖消ニーー一津初合、寒減ニ冰渠一凍不レ成」

【霜花】霜を花に比していふ。唐太宗詩「朝光浮ニ燒野一、ーー淨ニ碧空一」＝霜華。

【霜菅】しものかかれるかや。白髮に喩ふ。蘇軾詩「欒天雙鬢如ニーー一」

【霜畦】しものおりたるはたけ。岑參詩「ーー吐ニ寒菜一」

【霜蹊】しものおけるこみち。上官昭容詩「策杖臨ニ霞岫一、危步下ニーー一」

【霜月】○しも夜の寒き月。李商隱詩「九秋ーー五更風」○陰曆七月の異稱。＝相月。○國陰曆十一月の異名。

【霜草】しもを經て白くなりしくさ。李白詩「自笑鏡中人、白髮如ニーー一」

【霜操】しもの如く烈しきみさを。南齊書、沈驎士傳「年踰ニ七十一、業行無レ改、元嘉以來、聘召仍疊、玉質逾潔、ーー日嚴」

【霜柹】しものかかりたるかき。楓窗小牘「不レ減ニ樹頭ーー一」

【霜髭】しもの如くしろき口ひげ。方干詩「不レ信風光疾ニ於箭一、年來年去變ニーー一」＝霜鬚。

【霜洲】しものおきたるす。喩坦之詩「宿船横ニ月浦一、驚鳥遶ニーー一」

【霜信】雁の異名。古今詩話「北方白鴈、似レ鴈而小、至則霜降、謂ニ之ーー一」

【霜刃】白く光りてするどきやいば。賈島詩「十年磨ニ一劍一、ーー未ニ曾試一」

【霜晨】しものあした。范成大詩「嫣嫣芙蓉花、秀出清ニーー一」＝霜旦・霜曙・霜曉。

【霜鬚】白き口ひげ。劉禹錫詩「玉人紫綬相輝映、卻要ーー一兩莖」＝霜髭。

【霜署】御史臺をいふ。蘇味道詩「薄遊忝ニーー一、直指戒ニ冰心一」＝霜臺。

【霜鐘】しも夜のかねの聲。李白詩「客心洗ニ流水一、餘響入ニーー一」

【霜毳】しもの如く白きはらげ。孟簡、白烏呈レ瑞賦「明明麗質、ーー潔朗」

【霜雪】○しもと、ゆきと。史、貨殖傳「犯ニ晨夜一、冒ニーー一」○心の潔白にして嚴しきに喩ふ。後漢書、禰衡傳「忠果正直、志懷ニーー一」

【霜霰】しもと、あられと。隋煬帝賦「ーー落兮山谷寒、木葉下兮丘壟殘」

【霜髯】白きほほひげ。蘇軾詩「白魚紫筍不レ論レ錢、ーー三老如ニ松檜一」

【霜臺】○御史臺の異稱。御史臺は法律を掌る故に秋官に配してーーといふ。殷堯藩詩「赤墀奉レ命使ニ殊方一、官重ーー紫綬光」＝霜署。○國轉じて彈正臺の異稱。

【霜刀】霜の如く光りて鋭き刀。杜甫、觀ニ打魚一歌「饔子左右揮ニーー一、鱠飛ニ金盤一白雪高」韓愈、芍藥歌「ーー剪レ汝天女勞、何事低頭學ニ桃李一」

【霜橙】霜を經てよく熟せし九年母。杜甫詩「勸レ客駝蹄羹、ーー壓ニ香橘一」

【霜砧】霜の降る夜のきぬた。馬臻詩「燕山越水曾爲レ客、慣レ聽ーー搗ニ月明一」

【霜蹄】○駿馬のひづめ。○駿馬をいふ。趙嘏詩「ーー曉駐秦雲斷」

【霜天】しものそら。王昌齡詩「ーー紀長望、殘月生ニ海門一」

【霜雹】しもと、ひょうと。漢書、李尋傳「有ニーー之災一」

【霜髮】白きかみの毛。李咸用詩

「年華逐レ浪催ニーー一、旅恨如レ雲拂ニ桂衣一」＝白髮・皓髮・雪髮・鶴髮。

【霜眉】白きまゆ。蘇軾詩「何處ーー碧眼客、結爲ニ三友一另相看」

【霜鬢】しらがのびんのかみ。裴度詩「灰心緣レ忍レ事、ーー爲レ論レ兵」

【霜楓】しもに染みて赤くなりたるかへで。杜甫詩「青女ーー重、黄牛峽水喧」

【霜雰】しもにて寒きもや。梁元帝詩「松風侵レ曉哀、ーー當レ夜來」＝霜霧。

【霜矛】するどきほこ。文同詩「ーー雪甲寒如レ水」

【霜鋒】するどきほこさき。裴夷詩「蓮花生ニ寶鍔一、秋日厲ニーー一」

【霜蓬】しもにしぼめるよもぎ。白髮に喩ふ。李白詩「沈憂能傷レ人、綠鬢成ニーー一」

【霜毛】しもの如くしろきけ。鮑照、舞鶴賦「疊ニーー一而弄レ影、振ニ玉羽一而臨レ霞」＝雪毛。

【霜蔓】しものかかりたるつる。柳宗元詩「風枝散ニ陳葉一、ーー疑ニ寒瓜一」

【霜野】しものふりたるのはら。李商隱詩「夕陽歸路後、ーー物聲乾」

【霜羅】しもの如くしろきうすぎぬ。范成大詩「ーー薄袖綠裙單」

【霜烈】しもの如くはげし。後漢書、酷吏傳「風行ーー、威譽諠赫」＝霜嚴。

【霜露】しもと、つゆと。禮、祭義「ーー既降、君子履レ之、必有ニ悽愴之心一」

【履レ霜堅冰至】九月の履霜の節を經て十一月の堅冰の時が來る。災害の微よりして漸く大に至る喩〔易、乾卦〕

【傲レ霜】寒き霜にも屈せず。蘇軾詩「菊殘猶有ニ傲レ霜枝一」

【霝】レイ リャウ 靑

○おつ(落)あめふる(零)詩、豳風「ー雨其濛」(今は零に作る)○靈に通ず。

【霛】靈(雨部十六畫)の古字。

十畫

【霣】ヰン 軫

○かみなり(雷)○あめふる。○雲おこる。○おつ。おとす。公羊、莊七「星ー如レ雨」＝隕。

【霡】バク ミャク 陌

○ー霂はこさめ(小雨)詩、小雅「益レ之以ニー霂一」○こさめの降る貌。

【霢】霡(前條)の本字。

【霤】リウ 宥 一に霤に作る

○あまだれ、屋上より垂れる雨水。○あまだれうけ(承霤)○のき(屋簷)○へや(室房)○中ーは中央の室。禮、月令「其祀中ー」＝中室。○したたり。溜に通ず。漢書、枚乘傳「泰山之ー穿レ石」

【霤槽】あまだれうけのをけ。老學庵筆記「匿ニ于人家ー中一」

【霤水足三以溢ニ壺榼一】雨滴の微かなるも、集めれば、つぼや、たるに滿たすに足る。淮南、氾論「ーー、而江河不レ能レ實ニ漏巵一」(漏巵は底のなきさかづき)

十一畫

【霪】イン 侵

ながあめ(久雨)十日以上つづく雨。淫に通ず。

【霪雨】ながあめ。淮南、修務「禹沐ニ浴ーー一」＝淫雨。

【霪霖】ながあめ。林寬詩「ーー蔽ニ日月一、窮巷變ニ溝坑一」＝霪雨・霖霪。

【霩】クヮク 藥

○雨止みて雲の消える貌。○ほがらか、開朗の貌、廓に通ず「廓ー」

【霧】ブ・ム ボウ・ム 遇 東

○きり、地面に近き水蒸氣の冷え凝りて微細なる水滴となりてただよへるもの。雲と其の理を同うす、遠地は雲となり、近地はーとなる。後漢書、張楷傳「好ニ道術一、能作ニ五里ー一」○地上にただよへる氣。瓦斯「瘴ー」「毒ー」「黄ー」○黒き髮に喩ふ。○輕く細かなる帛に喩ふ「ー縠」

【霧杳】はるかにきりがこめて見分けがたし。郭璞賦「氣滃浡而ーー」

【霧壑】霧のこめたる谷。李乂詩「秦甸重沓雲巖近、河渭縈紆ーー深」

【霧合】きりの如くに多くあつまる。周書「電繞蛇擊、ーー星羅」張衡、羽獵賦「輕車飈厲、羽騎電騖、ーー雲集、波流雨注」＝霧集 雲合。

【霧氣】きり。後漢書、皇甫規傳「地震之後、ーー白濁、日月不レ光」

【霧會】きりの如くに多くあつまる。梁簡文帝、曲水詩序「郡人野老、雲集ーー」＝霧集。

【霧鬟】髮の黑く美くしき形容。何景明詩「霓裳羽衣世莫レ聞、一一雲貌人難レ見」
【霧曉】霧のこめたるあさ。宣和畫譜「黃齊作二風烟欲レ雨圖一、非レ陰非レ霽、如二梅天一一霏微晻靄之狀一」＝霧朝・霧旦。
【霧縠】うすぎぬ。宋玉、神女賦「動二一一一以齊步兮」
【霧散】きりの如くちる。西都賦「朝發二河海一、夕宿二江漢一、沈浮往來、雲集一一」＝霧消。
【霧市】後漢の張楷、道術を好み、能く五里霧を作す、弘農山中に隱居す、學者之に隨ひ、居る所、市を成す、因りて之を一一と謂ふ。舊唐書、黃巢傳「妖興二一一一、盜嘯二叢林一」
【霧袖】うす絹の袖。梁簡文帝文「疾趨巧步、一一芬披、舒二娥眉之窈窕一」
【霧集】きりの如くに多くあつまる。史、淮陰侯傳「天下之士、雲合一一」＝霧聚。
【霧瘴】きりの毒氣。廣東新語「嶺南多二一一一、瀼黔多二風瘴一、皆氣候之最惡者」
【霧聚】霧集に同じ。舊唐書、魏徵傳「雲合一一」
【霧凇】こほりたるきり。凇は冰。字林「寒夜結水如レ珠、見レ晛乃消、齊魯謂二之一一一」＝霧淞。

【霧萃】きりの如くに多くあつまる。潘尼賦「玄煙四合、雲蒸一一」
【霧綃】うすぎぬ。曹植、洛神賦「踐二遠游之文履一、曳二一一之輕裾一」
【霧塞】きりがこめふさぎてくらし。薛道衡賦「五岳塵飛、三象一一」
【霧島】霧のかかれるしま。白居易詩「一一沈二黃氣一、風帆攀二白波一」
【霧朝】きりのこめたる、あした。劉禹錫詩「桂水步二秋浪一、火山淩二一一一」＝霧曉。
【霧鬢】髮の美くしき形容。蘇軾詩「一一風鬟水葉衣」
【霧雰】きりと、もやと。尹樞文「如レ排二一一一、似レ拂二昏曀一」
【霧裏】霧のなか。杜甫詩「一一江船度、風前徑竹斜」＝霧中。
【泄レ霧】きりをもらし出す。韓愈、衡岳廟詩「噴レ雲一レ一藏二半腹一、雖レ有二絕頂一誰能窮」
【霧亂】霧が亂れる。伍輯之、柳花賦「或風迴而遊薄、或一一而飈零」
【霧湧】霧が湧き起る。劉峻、絕交論「故絪縕相感、一一雲蒸、嚶鳴相召、星流電激」

十二畫

【霰】セン　霰　通音サン
○あられ(稷雪)雨が粒狀に凍りて降るもの「急一」「雪一」詩、小雅「如二彼雨雪一、先集維一」○國白く粒狀をなせる者にいふ「一石」
【霰雹】あられと、ひょうと。李咸用詩「丈室掩二孤燈一、更深一一増」

【霮】タン　感
一䨴は雲の繁き貌。又、露の垂れる貌。左思賦「宵露一䨴」

【霳】リュウ　東
豐一はくものかみ(雲師)又、かみなりの神(雷師)＝豐隆。

【露】ロ　遇
○つゆ、空中の水氣の冷えて細滴となり草葉などに附くもの「草一」「霜一」「玉一」○あらはる。あらはす(見・彰)「一見」「一顯」○むきだしにする、さらす(暴)「一營」○やせつかれる。つからす(羸)瘦せて骨をあらはす。左、昭元「以一二其體一」○うるほす、つゆにぬらす。詩、小雅「一二彼菅茅一」うるほふ(潤)○めぐみ(恩澤)めぐむ。恩を被らす。漢書、鼂錯傳「覆二萬民一」○つゆの如くはかなきものに喩ふ「一命」○白一・寒一は並に氣節の名。○國名。露西亞の略稱「一國」＝俄。○國つゆ、少しの意。
同訓異義　露・見・現・顯・著・形・暴・表・彰・旌の別は見(一七七一頁四段)の條を見よ。
【露營】野原に陣どる、軍隊の露宿するもの。晉書、顧榮傳「一一野次」
【露葉】つゆをおびたる草木のは。崔善爲詩「一一疑二涵玉一、風花似二散金一」
【露芽】茶の異名。國史補「茶之名品、有二方山之一一一」蘇軾詩「試觀二一一一二迸二白雪一」
【露眼】高く出でたるまなこ。詩疏廣要「一一黑睛則遠視」
【露骭】はぎをあらはす。唐書、南詔傳「衣二青布一、短袴一レ一」
【露氣】つゆけ。杜甫詩「夜深一一清、江月滿二江城一」
【露葵】○蓴菜の異名。顏氏家訓「蔡朗父諱純、遂呼二蓴菜一爲二一一一」○つゆを帶びたる滑菜。王維詩「松下清齋折二一一一」
【露禽】鶴の異名。禽經、注「一一、鶴也、露下則鳴、鶴二子家一者、飲レ露則飛去」
【露花】つゆにうるほへるはな。張說詩「一一香欲レ醉、時鳥轉二餘音一」
【露臥】のじゅく。後漢書、祭祀志、

注「百官以下、一一水飲」＝露宿。
【露華】光れるつゆ。李白詩「雲想二衣裳一花想レ容、春風拂レ檻一一濃」
【露光】露の光。劉禹錫詩「風韻漸高梧葉動、一一初重槿花稀」
【露檄】封をせざるまはしぶみ。晉書、華譚傳「一二一遠近一、極二言其非一、由レ此爲レ棠所レ怨」棠は顧榮。
【露結】つゆむすぼる。左傳、疏「八月一一、九月乃成レ霜」
【露見】あらはれる。あらはす。漢書、王嘉傳「不二敢一一一」
【露泫】露の草をうるほすをいふ、泫は滴の流るる義。謝靈運詩「巖下雲方合、花上露猶泫」李咸用、巫山高樂府「一一烟愁巖上花、至レ今猶滴相思淚」
【露顯】露見に同じ。
【露骨】○むきだしにする。邵雍詩「水寒潭見レ心、木落山一レ一」○ほねをさらす。晉書、成都王穎傳「黃橋戰亡者、有二八千餘人一、既經二夏暑一、一二一中野一、可レ爲二傷惻一」＝暴骨。
【露坐】屋なきところにすわる。後漢書、周燮傳「天子親自一二一德陽殿東廂一、請レ雨」
【露草】○つゆをふくみたるくさ。杜甫詩「萋萋一一碧」○國一名螢草。漢名鴨跖草。
【露次】のじゅく、次はやどる。後漢書、獻帝紀「幸二華陰一、一二一道南一」＝露宿・露營。
【露積】屋根なき處に物を積み置く。漢書、孝景紀「太倉之粟、陳陳相因、充溢一二一於外一、紅腐不レ可二勝食一」
【露刃】ぬきみ。宋元通鑑綱目「燕帖木兒率二其黨十七人一、兵皆一一」
【露寢】のじゅく。高士傳「焦先、野火燒二其廬一、因一一遭レ冬、雪大至、先袒臥不レ移、人以爲レ死、就視如レ故」＝露宿。
【露車】おほひの無きくるま。魏志、董卓傳「行數里得二民家一、以二一一一載送」
【露珠】つゆをたまに比していふ。王涯詩「一夜清風蘋末起、一一翻盡滿池荷」
【露宿】のじゅく。後漢書、王渙傳「境內清夷、商人一二一於道一」
【露出】○あらはれでる、むきだし。○あらはしだす。
【露井】屋根のなき井戸。古樂府「桃生二一一上一、李樹生二桃旁一」
【露臺】○屋根の無きうてな。漢書、文帝紀贊「帝嘗欲レ作二一一一、召レ匠計レ之、直百金、上曰、百金、中人十家之產也、吾奉二先帝宮室一、常恐レ羞レ之、何以レ臺爲」○屋上に設けし運動場。英語、バルコニー。
【露竹】露を帶びたる竹。薛逢詩「風茅向レ暖抽二書帶一、一一迎レ風舞二釣絲一」
【露地坐】佛十二頭陀中の一、月光の偏く照す露地(屋外)に端坐して心徑を明朗ならしめる修行。
【露呈】あらはす。又あらはれる。＝呈露。
【露店】ほしみせ、大道店。
【露點】大氣中の水蒸氣が液化せんとする時の溫度。
【露電】人世のはかなきに喩ふ。金剛經偈「一切有爲法、如二夢幻泡影一、如レ露亦如レ電、應レ作二如是觀一」
【露頭】鑛脈或は鑛層の地面にあらはれ出たるもの。
【露兜樹】たこのき、熱地に生ずる常綠亞喬木の一、枝より蛸の形に似たる氣根を出す。＝榮蘭。
【露版】○かちいくさの報告書。通鑑齊紀「上レ馬能擊レ賊、下レ馬作二一一一」○むきだしにして封ぜざる書面。晉書、齊王冏傳「一一極諫」＝露板・露書・露布。
【露盤】○承露盤の略。王逢詩「一一迎レ月早、宮漏出レ花遲」○佛塔の九輪の最下部に在る方形の盤。
【露布】文體の名、軍中捷を奏する辭、辭を帛に書し、封ぜずして之を漆竿の上に建つ。續博物志「一一捷書之別名、以二帛書一揭二之竿一」＝露版。
【露佛】ぬれぼとけ(濡佛)露天にさらされたる佛像。
【露表】むきだしにあらはす。晉書、劉聰載記「爲二殿下一、一二一其罪一」
【露眠】屋なきところにねむる。冷齋夜話「一一不レ管牛羊踐」＝露臥。
【露命】つゆの如きはかなきいのち。
【露里】露西亞の里程、其の一里は我が九町四十六間四尺餘。
【露拂】○露が拂ひ消ゆ。曹唐詩「一一金壺階欲レ分」○國古、諸侯の行列の先導をなすもの、露を拂ひ道を開く義。轉じて演藝・演說等の時、最初に出勤する者。

十三畫

【霸】ハ　禡　霸は俗字　古、伯に通ず
○はたがしら、諸侯の首長、我が國の德川氏の如きもの。王道に對し武力を以て天下を治むるを一道といふ。孟、公孫丑「以レ力假レ仁者一」○轉じて廣くかしら(首長)の義とす。文心雕龍「文采必一」○渭水の一支流、字或は灞に作る。
解字　霸は把なり、王者の政教を把持する義。
【霸氣】○霸者とならんとする意氣。陳旅詩「山河一一已銷歇、颯颯老柳吹二斜陽一」王士禎詩「一一江東久寂寞、永安宮殿草蕭蕭」○進取し

て人に勝たんとする客氣。
【霸橋】ハケウ 陝西省長安縣なる霸水に架する橋の名、唐人送別する者、多く此橋に至りて手を分つ、因りて亦銷魂橋といふ。＝灞橋。
【霸業】ハゲフ 諸侯のはたがしらとなる事業。袁宏、諸葛孔明贊「三略已陳、ーー已基」
【霸權】ハケン はたがしらの有する權力。
【霸功】ハコウ はたがしらとなりしいさを。淮南子「使管仲出死捐軀不顧後圖、豈有此ーー哉」
【霸國之餘業】ハコクノヨゲフ 霸者たりし國の殘れる功業。〔樂毅、報燕惠王書〕
【霸者】ハシャ 諸侯のはたがしらとなりて天子の政令を執るもの。孟、盡心「ーー之民、驩虞如」
【霸上】ハジヤウ 地名、陝西省長安縣の東、霸水の上に在り。史、項羽紀「沛公軍ーー」＝灞上。
【霸水】ハスヰ 灞水に同じ。霸橋參看。
【霸政】ハセイ 霸者の行ふまつりごと。
【霸迹】ハセキ 霸者の功業のあと。王褒、聖主得賢臣頌「索人求士者、必樹ーー」
【霸道】ハダウ 武力を以て天下を治むる道。王道の對。漢書「齊桓公專會諸侯、而行ーー」
【霸朝】ハテウ 霸者の朝廷。顏延之、家傳銘「或登宰士、列美ーー」
【霸圖】ハト 霸者のはかりごと。陳子昂詩「ーー悵已矣、驅馬復歸來」＝霸略。
【霸夫】ハフ すぐれて强き男子。陳琳文「ーー烈士、奮命之良時也」
【霸府】ハフ 霸者の政を執る所。北史、崔季舒傳「雖迹在魏朝、而歸心ーー」＝幕府。
【霸略】ハリヤク はたがしらとなるはかりごと。駱賓王詩「ーー今何在、王宮尙鬱然」
【霸陵】ハリヨウ 漢の文帝の陵、陝西省長安縣の東に在り。
【霸陵舊將軍】ハリヨウノキウシヤウグン ○前漢の李廣、將軍の職を免ぜられし後、霸陵の醉將に故將軍なりとて輕侮せられたる故事。史、李將軍傳「嘗夜從一騎出、從人田閒飮、還至霸陵亭、霸陵尉醉呵止廣、廣騎曰、故李將軍、尉曰、今將軍尙不得夜行、何乃故也、止廣宿亭下」○轉じてちび筆に喩ふ。林逋、禿筆詩「神鋒雖缺力能存、架琢珊瑚欠策勳、日暮閑窗何所似、霸陵憔悴舊將軍」
【霸王】ハワウ ○霸者と王者と。戰國策「是ーー之資也」○諸侯のはたがしら、大王といふが如し。史、越世家「諸侯畢賀、號稱ーー」
【霸王樹】ハワウジユ さぼてん、熱地に產する草の一。綠色多肉の莖を有し、葉無くして刺を叢生す。＝仙人掌。

【霹】ヘキ

ー靂ヘキレキは急に擊つかみなり、はたたく雷。爾雅、注「雷之急擊、爲ーー」＝疾雷・辟歷。
【霹靂】ヘキレキ 雷が急激にはげしく鳴る。韓愈、送高閑上人序「雷霆ーー、歌舞戰鬪」＝辟歷。
【霹靂車】ヘキレキシヤ 軍中にて機を以て石を發する車。後漢書、袁紹傳「曹操發石車擊紹、軍中呼曰ーーー」注「卽今拋車也」
【霹靂手】ヘキレキシユ 人の敏才あるをいふ。唐書「裴琰爲同州司戶參軍、凡舊事未決、命書吏數人、連紙數幅、須臾剖斷竝畢、時人謂ーーー」樓鑰詩「奸胥及强使、時用ーーー」

【霶】 滂（一二三四頁四段）に同じ。
ー霈は大雨。劉禹錫詩「山頂自晶明、人間已ー霈」

十四畫

【霼】キ
靉ーアイキは審かならざる貌。又、雲の貌。

【霽】セイ
○はる（晴）雨が止む、雲霧が散ずる「新ー」「秋ー」「曉ー」○はれる。はらす。心がさっぱりする、怒がとける。唐書、魏徵傳「上爲之ー威」
【霽威】セイヰ 怒がとける。さっぱりときげんをなほす。漢書、魏相傳「心善其言、爲ーー嚴」
【霽月】セイゲツ 雨あがりのはれわたりたるつき。宋史、周惇頤傳「胸懷洒落、如光風ーー」
【霽後】セイゴ あめあがりののち。儲光羲詩「涼氣生ーー」
【霽紅】セイコウ 陶器の色、明の宣德間、製する所、最も佳なり、寶石を雜ゆるが故に光澤甚だ美なりといふ。＝祭紅・際紅。
【霽朝】セイテウ 雨のはれたるあした。孫逖詩「樓觀倚長霄、登攀及ーー」
【霽氛】セイフン はれわたりたる氣。遜逖詩「水木涵澄景、簾櫳引ーー」

【䨲】ドウ
兔ウサギの子。韓愈、毛穎傳「明眎八世孫ー」

【霾】バイ
つちふる、つちぐもり。大風が土砂を空にまきあげてふらす「陰ー」詩、邶風「終風且ー」
【霾曀】バイエイ 土をふらしてくもる。[illegible]詩「雲梢見衆葉、孤城隱ーー」
【霾晦】バイクワイ 風が土をふらしてくらし。儲光羲詩「鄗鎬頃ーー」

【霾風】バイフウ 土をふらすかぜ。爾雅「風而雨土、曰霾」

十五畫

【靁】ライ 雷の古字
○いかづち。漢書、中山靖王傳「聚蚊成ー」○ー鼓はつゞみの一種、六面あり。

十六畫

【靄】アイ アツ
○たなびきあつまるもや（氛）「煙ー」「暮ー」○雲の盛んなる貌。
【靄靄】アイアイ 雲の盛んに集る貌。陶潛詩「停雲ーー、時雨濛濛」
【靄然】アイゼン 雲のたなびく貌。

【靃】スヰ
ー靡スヰビは草の弱き貌。又、草の風に隨ふ貌。

【靆】タイ
靉ーアイタイは、雲の狀、雲の盛んなる貌。明かならざる貌。雲の日をおほふ貌。又、老人のめがね（老眼鏡）洞天淸錄「靉ー老人不辨細書、以此掩目則明」

【靈】レイ リヤウ 霛は古字
○たま、たましひ、死者の魂魄「亡ー」○かみ（鬼神）鬼神のみたま「神ー」「山ー」大戴禮「陽之精氣曰神、陰之精氣曰ー」○よし（善）古、令に通ず。詩、鄘風「ー雨既零」○さいはひ（福）いつくしみ（寵）「寵ー」○まごころ（精誠）○いのち（命數）○かんなぎ、みこ（巫覡）○くしびなるもの（神妙）不可思議にして測り知り難きもの「ー妙」「ー藥」書、泰誓「惟人萬物之ー」○すぐれてよきもの。○すべて物の敏活なる者「ー巧」「ー動」○日月星の稱。○あきらか（昭明）○いきほひ（稜威）○かうがうしくたふとし。左、隱三「若以大夫之ー」○天地人の稱。○俗に死者をいふ「ー柩」「ー位」○芻ースウレイは茅を束ねて人の形とせしもの。○四ーは麟・鳳・龜・龍。○曜ーは太陽。
【靈位】レイヰ みたまの位、卽ち位牌＝靈座・木主。
【靈威】レイヰ くしびなる威勢。班固、碑銘「ーー神祐、鴻濛是乘」
【靈異】レイイ すぐれてふしぎ。晉書、干寶傳「撰集古今神祇ーー、人物變化、名爲搜神記、凡二十卷」＝神異・靈妙。
【靈囿】レイイウ 民が文王の靈德を樂みて其の臺を靈臺といひ、臺下の囿をーーといふ。詩、大雅「經始靈臺、經之營之、庶民攻之、不日成之、經始勿亟、庶民子來、王在ーー、麀鹿攸伏」
【靈域】レイヰキ 神佛を祭りしくしびなる地。陸雲、陸常侍誄「龜策協貞、ーー斯判」＝靈區・靈地・神域。
【靈隱】レイイン 山の名、浙江省杭縣の西に在り、本名は武林山、亦靈苑と名づけ、又仙居と名づく、許由・葛洪皆此山に隱るといふ、ーー寺あり、淸時改めて雲林寺と名づく。
【靈雨】レイウ よきあめ。靈は善。詩、鄘風「ーー既零、命彼倌人」
【靈運子孫俱得風】レイウンシソントモニホウヲウ 晉の謝靈運の子孫は皆賢きをいふ。蘇軾、答馬忠玉詩「ーーーーーー、慈明兄弟孰非龍」慈明は後漢の荀淑の子、爽の字。八龍（一五九頁二段）參看。
【靈曜】レイエウ 太陽の異名。陸機、演連珠「ーー朝覩、稱物納照」
【靈耀】レイエウ くしびなるひかり。又、太陽。中論「夫曆數者、聖人之所以測ーー之賾」＝靈曜。
【靈液】レイエキ 露ツユの異名。張彥勝賦「露者、天地之ーー也」嵇康、琴賦「蒸ーー以播雲、據神淵而吐溜」
【靈淵】レイエン ○くしびなるふち「元史、世祖紀」○心に喩ふ。太玄經「去此ーー、舍彼枯園」
【靈應】レイオウ 靈妙なるこたへのしるし。後漢書、光武紀「地祇ーー、而朱草萌生」＝瑞應。
【靈屋】レイヲク おたまや。＝靈廟・靈殿。
【靈感】レイカン 神佛の不思議なる感應。張說詩「詔書明日下、ーー應時通」
【靈鑑】レイカン ○すぐれたる鑑識。李德裕文「不能媢忌、是負ーー」○天鑑に同じ。曹植詩「ーー無私」
【靈祇】レイキ くしびなる地の神。東征賦「庶ーー之鑒照兮」
【靈氣】レイキ ○くしびなる氣。管子「ーー在心、一來一逝」○國ゲリヤウもののけ（物怪）
【靈龜】レイキ くしびなるかめ。萬年の壽を保てる龜。爾雅「一曰神龜、二曰ーー」
【靈虯】レイキウ くしびなるみづち。曹植、蟬志詩「ーー避難、不恥汚泥」＝神虯。
【靈柩】レイキウ 死骸を納めたる棺。王羲之、帖「兄ーー垂至」
【靈菊】レイキク くしびなるきく。袁崧詩「ーー植幽崖、擢穎陵寒風」
【靈均】レイキン 楚の屈原の字。離騷「皇覽揆余于初度兮、肇錫余以嘉名、